福岡市
今宿五郎江遺跡

Imajuku Gorôe Site

II

福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集

1 9 9 1

福 岡 市 教 育 委 員 会

（表紙題字：結城シズ氏）

福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集　1991年

今宿五郎江遺跡　II　正誤表

頁	行	誤	正
II	1	昭和59年度に	昭和59年度から61年度
II	26	調査期間1985年(昭和60年)	調査期間1984年から1985年
IV	27	SD遺構実測図(1／400、1／800)	SD50，100遺構実測図(1／400、1／800)
V	5	第36図SD遺構実測図(1／100)	第36図SD遺構実測図(約1／130)
1	11	昭和60年11月から	昭和59年11月から
7	3	台地上に位地し	台地上に位置し
7	9	痕跡が数多くあり、	痕跡が数多くある。
11	7	これが約100mほど	これが約60mほど
11	7	互層が約10mほど	互層が50mほど
11	17	北側から約75m程度	北側から約10m程度
15		15行から32行　P17の最後に入る。	
15	18	10区分できる。E−26°−N	10区分できる。1．E−26°−N
15	18	中期は、	中期では、
15	26	18，36，50，で後期に	18,36,50後期に
16	11	−−−46，69の6棟	−−−46，69の5棟
16	27	−−−15，59の8棟である。	−−−15，59の7棟である。
17	18	−−−65，117の10棟である。	−−−65，117の9棟である。
39	10	弥生時代中期初頭	弥生時代中期中葉
39	15	この北大地も	この北台地も
39	29	SD−036から	SD−36から
40		SE−01のスケール	0　　3m
41	15	不整形な堀込み	不整形な掘込み
41	23	遺構都考えられる。	遺構と考えられる。
43	11	中期の遺構が	中期の遺物が
43	15	紐は北東に	鈕は北東に
47	6	後期末土器IV層から	後期末土器はIV層から
47	7	Tab.−22，23に	Tab.22，23に
47	8	生活用品で第108−35，36	生活用品で第108図35，36
56		第36図SD遺構実測図(1／100)	第36図SD遺構実測図(約1／130)
63		第38図　1008	第38図　1083
64	4	大形の石斧	大型の石斧
64	16	剥片鏃の範中に入る	剥片鏃の範疇に入る
69	20	Ib基部上がりふくらみ	Ib基部よりふくらみ
92	17	外反気味に立ち上がる。(72.82−−	外反気味に立ち上がる(72.82−−
99	23	赤色含量が	赤色顔料が
150		遺物登録番号71　PL.46	PL.46をトル
152		遺物登録番号171　PL.	PL.46をイレ
152		遺物登録番号172　PL.	PL.46をイレ
152		遺物登録番号176　PL.46	PL.46をトル
154		遺物登録番号264　PL.	PL.49をイレ
160		遺物登録番号564　PL.49	PL.49をトル
161	24	推定最大幅約16cm，で	推定最大幅約16cm，
168	29	脱稿語、	脱稿後、
203	16	1間×1間が36棟	1間×1間が20棟
203	16	1間×2間が26棟	1間×2間が22棟
203	17	1間×3間が5棟	1間×3間が6棟
203	17	2間×2間が4棟	2間×2間が1棟
203	30	1間×1間が12棟	1間×1間が9棟
203	30	1間×2間が16棟	1間×2間が13棟
203	30	2間×2間が9棟	2間×2間が11棟
PL,	46	0016	0010
PL,	46	0071	0071

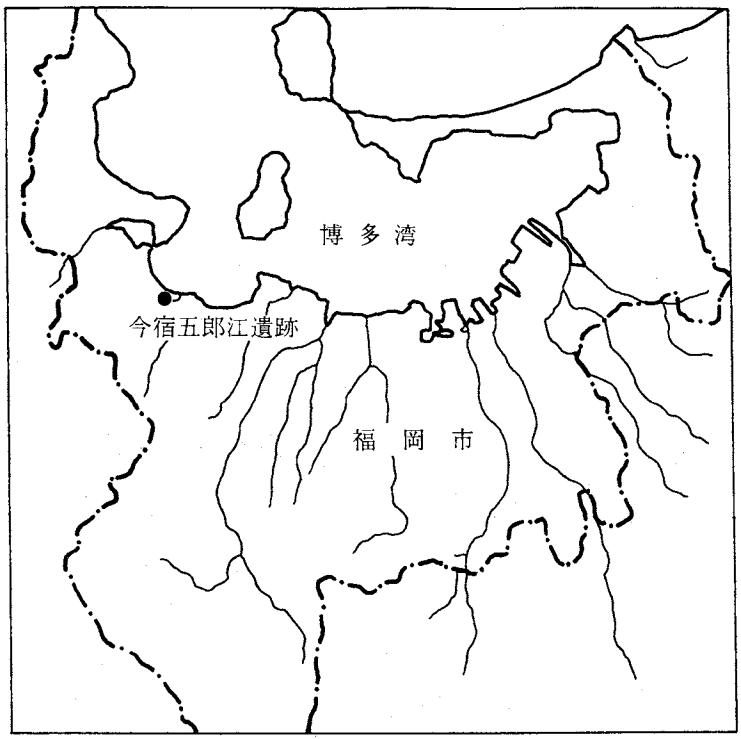
福岡市

今宿五郎江遺跡

Imajuku Gorôe Site

II

福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集



遺跡略号 IJG 2次
遺跡調査番号 8407

1 9 9 1

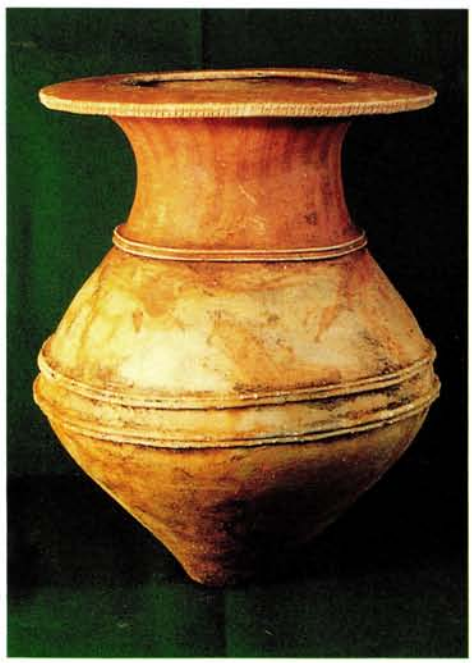
福岡市教育委員会

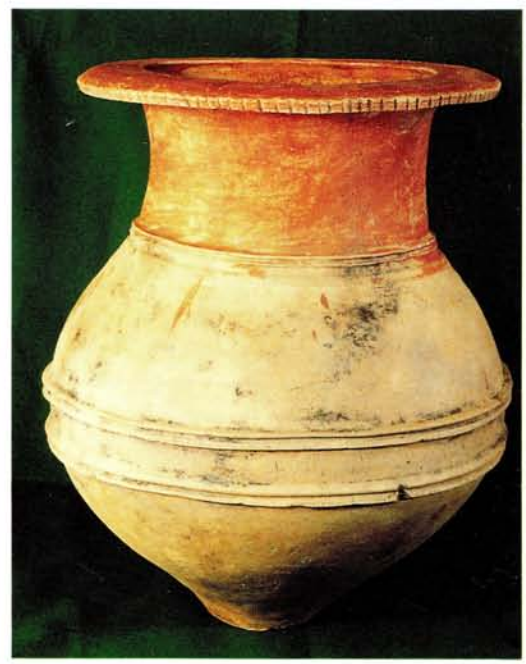
今宿五郎江遺跡SD—100，SD—50全景

今宿五郎江遺跡全景

1．水銀朱塗棒状木器

2．銅鐸型銅製品





3．4．SE—01出土遺物

序

近年、福岡市では都市圏拡大に伴い道路網の整備が急速に行われています。その反面、埋蔵文化財の保存も重要な課題となっています。

今津湾に臨む今宿地区は、福岡市内でも貴重な文化財と自然に恵まれた地域です。弥生時代の石斧製作所跡として全国的に著名な今山遺跡をはじめとして国指定史跡の元寇防塁・丸隈山古墳・大塚古墳や天然記念物の含紅雲母ベクマタイト等、数多くの文化財があります。

今回報告します今宿五郎江遺跡は、国道202号線とバイパスを接続する新設道路(福岡志摩前原線)建設に伴い土木局と事前協議を重ね、やむを得ず現状保存出来ない所について事前に発掘調査を実施しました。

調査の結果、祭祀用と考えられる小銅鐸や農耕具・漁撈具等、古代人の生活をしのばせる道具類が数多く出土しました。

本書が地域の皆様ならびに市民の各位の文化財保護のご理解を深められる上で広く活用されるとともに、学術研究の文野においても貢献出来れば幸いです。

発掘調査から資料整理に至るまでの多くの方々のご協力に対し、心から謝意を表するものです。

平成3年1月10日

福岡市教育委員会

教育長　井　口　雄　哉

例　言

1．本書は福岡市西区今宿に所在する道路新設工事に伴い、福岡市教育委員会が昭和59年度に実施した埋蔵文化財の調査記録である。

2．本書に収録した遺跡は周知の遺跡である今宿五郎江遺跡【福岡市埋蔵文化財分布地図(西部II)今宿、112】〔分布地図の地名ではA－5今宿五郎口遺跡となっているが、字名は五郎江のため遺跡名を今宿五郎江遺跡とした〕の近接地で、昭和61年福岡市教育委員会発行「今宿五郎江遺跡Ⅰ」の西側近接地に位置する。

3．遺構・遺物の実測は二宮忠司、佐藤一郎、大庭友子、久保寿一郎(現福岡県大牟田南高等学校嘱託)が行ない、製図は濱石正子、入江のり子、撫養久美子、二宮、大庭、久保、斎藤美紀枝、真名子順子、渡辺ちず子が行なった。

4．写真撮影は現場写真を二宮、佐藤、大庭が行ない、遺物写真は濱石哲也、大庭が行い写真現像、焼付けは青柳恵子、日名子節子が大庭の指導のもと、これに当たった。

5．銅鐸型銅製品の鉛同位体比分析を東京国立文化財研究所の馬淵久夫先生、平尾良光先生にお願いし玉稿をいただいた。『考古学雑誌』第75巻第4号(1990.3)に「福岡県出土青銅器の鉛同立体比」にも今宿五郎江鐸の分析結果が掲載されている。ご一読していただきたい。また、本田光子氏には赤色顔料の原稿を掲載していただいた。

6．本書の執筆は木製品の項を久保が、遺構・石器は大庭が、他を二宮が行なった。

7．本書の編集は二宮が行なった。

8．本報告書に関する記録・遺物類は整理後、福市教埋文センターに収蔵・管理される。

9．土器の挿図内番号は登録番号で1は00001を示す。また石器も同様で1は10001を示す。鉄器も1が20001を示し、木器も1が30001からの登録番号である。

10．調査・整理に当たって多くの先生方のご指導を受けた。特に九州産業大学の森貞次郎先生、名古屋大学の渡辺誠教授、愛媛大学の下條信行教授、九州大学の故岡崎敬先生、西谷正教授、田崎博之、柳田純孝、松村道博、小林義彦、小畑弘己氏には指導・助言を受けた。また、土木局の方々には色々な便宜を図っていただいた。記して感謝したい。調査に当たって作業員の方々、整理業務の方々の努力によって本書を完成することができた。記して感謝したい。

遺跡調査番号　8407　　遺跡略号　IJG2次　　調査期間　1985年(昭和60年)

調査地地籍　　西区今宿字五郎江他　　分布地図番号　112－A－5

開発面積　　21,200m²　　調査対象面積　7,000m²　　調査面積　6,000m²

本文目次

第Ⅰ章　はじめに……1

1．発掘調査に至る経過……1

2．発掘調査の組織と構成……1

3．試掘調査報告……3

第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境……7

第Ⅲ章　調査の記録……11

1．調査の概要……11

2．土　層……13

3．検出遺構……14

1）掘立柱建物……14

（1）鎌倉・室町時代の掘立柱建物群……14

（2）弥生時代の掘立柱建物群……16

2）井戸・土壙・Pit……39

3）溝……43

（1）SD－100……43

（2）SD－50……45

（3）その他の溝……47

4．出土遺物……62

1）石器……62

2）土器……91

（1）SD－100出土の土器……91

（2）SD－50出土の土器……98

（3）井戸・土壙・Pitの出土遺物……98

3）木器……161

4）今宿五郎江遺跡・2次調査出土の赤色顔料について……167

第Ⅳ章　SD－100出土の銅鐸型銅製品について……197

今宿五郎江遺跡出土小銅鐸の鉛同位体比について……199

第Ⅴ章　まとめ……203

1．遺構について……203

2．銅鐸型銅製品について……204

3．遺物からみた生活様式について……205

挿図目次

第 1図　試掘調査位置図(縮尺1/1,000)……2
第 2図　試掘調査検出遺構・土層図－1(縮尺1/50)……4
第 3図　試掘調査検出遺構・土層図－2(縮尺1/50)……5
第 4図　周辺の遺跡(縮尺1/25,000)……8
第 5図　今宿五郎江遺跡調査地点(縮尺1/8,000)……10
第 6図　遺跡周辺の地形図(縮尺1/31,250)……12
第 7図　掘立柱建物遺構配置図(縮尺1/400)……18
第 8図　掘立柱建物実測図－1(縮尺1/100)……19
第 9図　掘立柱建物実測図－2(縮尺1/100)……20
第 10図　掘立柱建物実測図－3(縮尺1/100)……21
第 11図　掘立柱建物実測図－4(縮尺1/100)……22
第 12図　掘立柱建物実測図－5(縮尺1/100)……23
第 13図　掘立柱建物実測図－6(縮尺1/100)……24
第 14図　掘立柱建物実測図－7(縮尺1/100)……25
第 15図　掘立柱建物実測図－8(縮尺1/100)……26
第 16図　掘立柱建物実測図－9(縮尺1/100)……27
第 17図　掘立柱建物実測図－10(縮尺1/100)……28
第 18図　掘立柱建物実測図－11(縮尺1/100)……29
第 19図　掘立柱建物実測図－12(縮尺1/100)……30
第 20図　掘立柱建物実測図－13(縮尺1/100)……31
第 21図　掘立柱建物実測図－14(縮尺1/100)……32
第 22図　掘立柱建物実測図－15(縮尺1/100)……33
第 23図　掘立柱建物実測図－16(縮尺1/100)……34
第 24図　掘立柱建物実測図－17(縮尺1/100)……35
第 25図　SK遺構実測図(縮尺1/40)……38
第 26図　SE－01・SK遺構実測図(縮尺1/30、1/40)……40
第 27図　SD遺構実測図(縮尺1/400、1/800)……42
第 28図　SD－100遺物出土状態(縮尺1/80)……44
第 29図　SD－50遺物出土状態(縮尺1/120)……46
第 30図　SD遺構全体図(縮尺1/400)……50
第 31図　SD遺構図(縮尺1/100)……51

第 32図　SD遺構図(縮尺1/100) ……52
第 33図　SD遺構図(縮尺1/125) ……53
第 34図　SD遺構図(縮尺1/100) ……54
第 35図　SD遺構図(縮尺1/100) ……55
第 36図　SD遺構図(縮尺1/100) ……56
第 37図　SD遺構図(縮尺1/100) ……57
第 38図　SD－100・SE－01出土石器実測図(縮尺1/2、1/3) ……63
第 39図　SD－100出土石器実測図－ 1 (縮尺1/4) ……65
第 40図　SD－100出土石器実測図－ 2 (縮尺1/4) ……66
第 41図　SD－100出土石器実測図－ 3 (縮尺1/3) ……67
第 42図　SD－100出土石器実測図－ 4 (縮尺1/3) ……71
第 43図　SD－100出土石器実測図－ 5 (縮尺1/3) ……72
第 44図　SD－100出土石器実測図－ 6 (縮尺1/2) ……77
第 45図　SD－100出土石器実測図－ 7 (縮尺1/2) ……78
第 46図　SD－100出土石器実測図－ 8 (縮尺1/2) ……79
第 47図　SD－100出土石器実測図－ 9 (縮尺1/2) ……80
第 48図　SD－100出土石器実測図－10(縮尺1/4) ……81
第 49図　SD－100出土石器実測図－11(縮尺1/4) ……82
第 50図　SD－100出土石器実測図－12(縮尺1/6) ……83
第 51図　SD－20・SD－100出土石器実測図(縮尺1/4) ……84
第 52図　SE－01・SD－100出土石器実測図(縮尺1/4) ……85
第 53図　SD－110出土石器実測図(縮尺1/4) ……86
第 54図　今宿五郎江遺跡出土土器形式分類(縮尺不統一) ……93
第 55図　SD－100出土土器実測図－ 1 (縮尺1/4) ……101
第 56図　SD－100出土土器実測図－ 2 (縮尺1/4) ……102
第 57図　SD－100出土土器実測図－ 3 (縮尺1/4) ……103
第 58図　SD－100出土土器実測図－ 4 (縮尺1/4) ……104
第 59図　SD－100出土土器実測図－ 5 (縮尺1/4) ……105
第 60図　SD－100出土土器実測図－ 6 (縮尺1/6) ……106
第 61図　SD－100出土土器実測図－ 7 (縮尺1/4) ……107
第 62図　SD－100出土土器実測図－ 8 (縮尺1/4) ……108
第 63図　SD－100出土土器実測図－ 9 (縮尺1/6) ……109

第 64図　SD－100出土土器実測図－10(縮尺1/6) ……110
第 65図　SD－100出土土器実測図－11(縮尺1/6) ……111
第 66図　SD－100出土土器実測図－12(縮尺1/4) ……112
第 67図　SD－100出土土器実測図－13(縮尺1/4) ……113
第 68図　SD－100出土土器実測図－14(縮尺1/4) ……114
第 69図　SD－100出土土器実測図－15(縮尺1/4) ……115
第 70図　SD－100出土土器実測図－16(縮尺1/4) ……116
第 71図　SD－100出土土器実測図－17(縮尺1/4、1/6) ……117
第 72図　SD－100出土土器実測図－18(縮尺1/4) ……118
第 73図　SD－100出土土器実測図－19(縮尺1/4) ……119
第 74図　SD－100出土土器実測図－20(縮尺1/4) ……120
第 75図　SD－100出土土器実測図－21(縮尺1/4) ……121
第 76図　SD－100出土土器実測図－22(縮尺1/4) ……122
第 77図　SD－100出土土器実測図－23(縮尺1/4) ……123
第 78図　SD－100出土土器実測図－24(縮尺1/4) ……124
第 79図　SD－100出土土器実測図－25(縮尺1/4) ……125
第 80図　SD－100出土土器実測図－26(縮尺1/4) ……126
第 81図　SD－100出土土器実測図－27(縮尺1/4) ……127
第 82図　SD－100出土土器実測図－28(縮尺1/4) ……128
第 83図　SD－100出土土器実測図－29(縮尺1/4) ……129
第 84図　SD－100出土土器実測図－30(縮尺1/4) ……130
第 85図　SD－100出土土器実測図－31(縮尺1/4) ……131
第 86図　SD－100出土土器実測図－32(縮尺1/4) ……132
第 87図　SD－100出土土器実測図－33(縮尺1/3) ……133
第 88図　SD－100出土土器実測図－34(縮尺1/3) ……134
第 89図　SD－100出土土器実測図－35(縮尺1/2) ……135
第 90図　SD－100出土土器実測図－36(縮尺1/2) ……136
第 91図　SD－100出土土器実測図－37(縮尺1/2、1/3) ……137
第 92図　SD－100出土土器実測図－38(縮尺1/4) ……138
第 93図　SD－100出土土器実測図－39(縮尺1/4) ……139
第 94図　SD－100出土土器実測図－40(縮尺1/4) ……140
第 95図　SD－100、200Pit出土土器・鉄鐸・玉実測図(縮尺1/1、1/2) ……141

第 96図　SD－50出土土器実測図－ 1（縮尺1/4）……142
第 97図　SD－50出土土器実測図－ 2（縮尺1/4）……143
第 98図　SE－01出土土器実測図－ 1（縮尺1/4）……144
第 99図　SE－01出土土器実測図－ 2（縮尺1/3、1/4）……145
第100図　Pit内出土土器実測図－ 1（縮尺1/4）……146
第101図　Pit内出土土器実測図－ 2（縮尺1/2、1/3、1/4、1/6）……147
第102図　各SD出土土器実測図（縮尺1/3、1/4）……148
第103図　出土木器実測図－ 1（縮尺1/6）……174
第104図　出土木器実測図－ 2（縮尺1/6）……175
第105図　出土木器実測図－ 3（縮尺1/6）……176
第106図　出土木器実測図－ 4（縮尺1/6）……177
第107図　出土木器実測図－ 5（縮尺1/4、1/6）……178
第108図　出土木器実測図－ 6（縮尺1/6）……179
第109図　出土木器実測図－ 7（縮尺1/6）……180
第110図　出土木器実測図－ 8（縮尺1/4）……181
第111図　出土木器実測図－ 9（縮尺1/6）……182
第112図　出土木器実測図－10（縮尺1/4、1/6）……183
第113図　出土木器実測図－11（縮尺1/4）……184
第114図　出土木器実測図－12（縮尺1/4）……185
第115図　出土木器実測図－13（縮尺1/4）……186
第116図　出土木器実測図－14（縮尺1/6）……187
第117図　出土木器実測図－15（縮尺1/6）……188
第118図　出土木器実測図－16（縮尺1/6）……189
第119図　出土木器実測図－17（縮尺1/6）……190
第120図　出土木器実測図－18（縮尺1/6）……191
第121図　出土木器実測図－19（縮尺1/6）……192
第122図　出土木器実測図－20（縮尺1/10）……193
第123図　出土木器実測図－21（縮尺1/10）……194
第124図　出土木器実測図－22（縮尺1/10）……195
第125図　出土竹籠実測図（縮尺1/2）……196
第126図　銅鐸型銅製品実測図（縮尺1/2）……198
第127図　鉛同位体比分布の概念図……201
第128図　銅鐸型銅製品の鉛同位体比……202

図版目次

PL. 1 1 遺跡全景(北から)
2 遺跡全景(南から)
PL. 2 1 南台地全景(南から)
2 SD－100南台地全景(北から)
PL. 3 1 SD－50・100全景(北から)
2 SD－100・南台地遠景（北から）
PL. 4 1 SD－200全景(西から)
2 中央台地遺構検出状態(北から)
PL. 5 1 南台地SB・SD検出状態(南から)
2 SB・SD・SK検出状態(北から)
PL. 6 1 SB・SD・SK検出状態(南から)
2 SB検出状態(東から)
PL. 7 1 SB・SD検出状態(東から)
2 SB・SD検出状態(東から)
PL. 8 1 SB・SD検出状態(東から)
2 SB検出状態(東から)
PL. 9 1 SB検出状態(東から)
2 SB検出状態(東から)
PL. 10 1 SE－01・SD－100検出状態
2 SE－01検出状態から(南から)
PL. 11 1 SE－01遺物出土状態近景
2 SE－01遺物出土状態近景
PL. 12 1 SE－01完掘状態(南から)
2 南台地2区遺構検出状態(南から)
PL. 13 1 2区SD－100検出状態(北から)
2 2区遺構検出状態(北から)
PL. 14 1 2区SB・SD検出状態(北から)
2 2区SB・SD検出状態(北から)
PL. 15 1 SD－50・100検出状態(北から)
2 SD－50・100近景(南から)
PL. 16 1 SD－100銅鐸出土状態遠景(南から)
2 銅鐸出土状態近景(南から)
PL. 17 1 銅鐸出土状態近景
2 SD－100遺物出土状態(南から)
PL. 18 1 SD－100遺物出土状態(東から)
2 SD－100竹籠出土状態
PL. 19 1 SD－100遺物出土状態
2 SD－100遺物出土状態
PL. 20 1 SD－100遺物出土状態
2 SD－100遺物出土状態
PL. 21 1 SD－100遺物出土状態
2 SD－100遺物出土状態
PL. 22 1 SD－100遺物出土状態
2 SD－100遺物出土状態
PL. 23 1 SD－100遺物出土状態
2 SD－100遺物出土状態
PL. 24 1 SD－50全景(東から)
2 SD－50遺物出土状態
PL. 25 1 SD－50遺物出土状態近景
2 SD－50遺物出土状態近景
PL. 26 1 SD－50遺物出土状態近景
2 SD－50遺物出土状態近景
PL. 27 1 SD－50舟出土状態
2 SD－50木器出土状態
PL. 28 1 SD－50木器出土状態
2 SD－50木器出土状態
PL. 29 1 SD－50木器出土状態
2 SD－50木器出土状態
PL. 30 1 SD－50木器出土状態
2 SD－50木器出土状態

PL. 31　1　SD－100土層断面
　　2　SD－50土層断面
PL. 32　1　SD－100土層断面
　　2　中央台地土層断面
PL. 33　1　中央台地土層断面
　　2　中央台地土層断面
PL. 34　1　北台地遺構検出状態
　　2　北台地遺構検出状態
PL. 35　北台地柱穴礎盤検出状態
PL. 36　石器－1 ……（縮尺不統一）
PL. 37　石器－2 ……（縮尺不統一）
PL. 38　石器－3 ……（縮尺不統一）
PL. 39　石器－4 ……（縮尺不統一）
PL. 40　石器－5 ……（縮尺不統一）
PL. 41　石器－6 ……（縮尺不統一）
PL. 42　土器－1 ……（縮尺不統一）
PL. 43　土器－2 ……（縮尺不統一）
PL. 44　土器－3 ……（縮尺不統一）
PL. 45　土器－4 ……（縮尺不統一）
PL. 46　土器－5 ……（縮尺不統一）
PL. 47　土器－6 ……（縮尺不統一）
PL. 48　土器－7 ……（縮尺不統一）
PL. 49　土器－8 ……（縮尺不統一）
PL. 50　土器－9 ……（縮尺不統一）
PL. 51　銅鐸型銅製品 ……（縮尺不統一）
PL. 52　木器－1 ……（縮尺不統一）
PL. 53　木器－2 ……（縮尺不統一）
PL. 54　木器－3 ……（縮尺不統一）
PL. 55　木器－4 ……（縮尺不統一）
PL. 56　木器－5 ……（縮尺不統一）
PL. 57　木器－6 ……（縮尺不統一）
PL. 58　竹籠 ……（縮尺不統一）

表　目　次

Tab. 1　掘立柱建物計測表－1 ……36
Tab. 2　掘立柱建物計測表－2 ……37

Tab. 3　Pit一覧表－1 ……58
Tab. 4　Pit一覧表－2 ……59
Tab. 5　Pit一覧表－3 ……60
Tab. 6　Pit一覧表－4 ……61
Tab. 7　出土石器一覧表－1 ……87
Tab. 8　出土石器一覧表－2 ……88
Tab. 9　出土石器一覧表－3 ……89
Tab. 10　出土石器一覧表－4 ……90
Tab. 11　出土土器一覧表－1 ……149
Tab. 12　出土土器一覧表－2 ……150
Tab. 13　出土土器一覧表－3 ……151
Tab. 14　出土土器一覧表－4 ……152
Tab. 15　出土土器一覧表－5 ……153
Tab. 16　出土土器一覧表－6 ……154
Tab. 17　出土土器一覧表－7 ……155
Tab. 18　出土土器一覧表－8 ……156
Tab. 19　出土土器一覧表－9 ……157
Tab. 20　出土土器一覧表－10 ……158
Tab. 21　出土土器一覧表－11 ……159
Tab. 22　出土土器一覧表－12 ……160
Tab. 23　出土木器一覧表－1 ……169
Tab. 24　出土木器一覧表－2 ……170
Tab. 25　出土木器一覧表－3 ……171
Tab. 26　出土木器一覧表－4 ……172
Tab. 27　出土木器一覧表－5 ……173
Tab. 28　小銅鐸の鉛同位体比測定結果 ……200

付　　図

付図－1　今宿五郎江遺跡第2次調査遺構配置図(縮尺1/200)
付図－2　今宿五郎江遺跡第2次調査土層図(縮尺1/60)

第Ⅰ章　はじめに

1．発掘調査に至る経過

福岡市西南部では、近年、人口の増大に伴って交通の整備が急務となり、国道202号バイパスの建設が急速に押し進められている。それに伴って国道202号線とバイパスとの接続をはかる新設道路計画、福岡志摩前原線(幅20m、延長距離1km)の計画が、昭和58年に埋蔵文化財課に提出された。この地区は『福岡市埋蔵文化財分布地図(西部II、今宿112)』に「A－5、今宿五郎口遺跡」(分布地図の地名はA－5、今宿五郎口遺跡となっているが、字名は五郎江のため遺跡名を今宿五郎江遺跡として再登録する。)として登録されている周知の遺跡の周辺部にあたり、遺跡の広がりが予想されたため、事前審査班が昭和59年4月から5月に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、南側50mは削平が著しく遺構の遺存状態が悪く、調査対象外とした。また、北側は泥炭層と砂の互層が約200m程続き、その後は砂丘となっている。この結果、発掘調査対象面積は20m×350mの7,000m²であった。

埋蔵文化財課はその結果をもとに土木局道路建設課と協議を行ない、昭和60年11月から発掘調査を実施することにしたが、東側に用水路があるため、水田耕作の必要上から調査区を二つに分け第一区を11月から、第二区を昭和61年1月から開始し昭和61年3月をもって終了した。

2．発掘調査の組織と構成

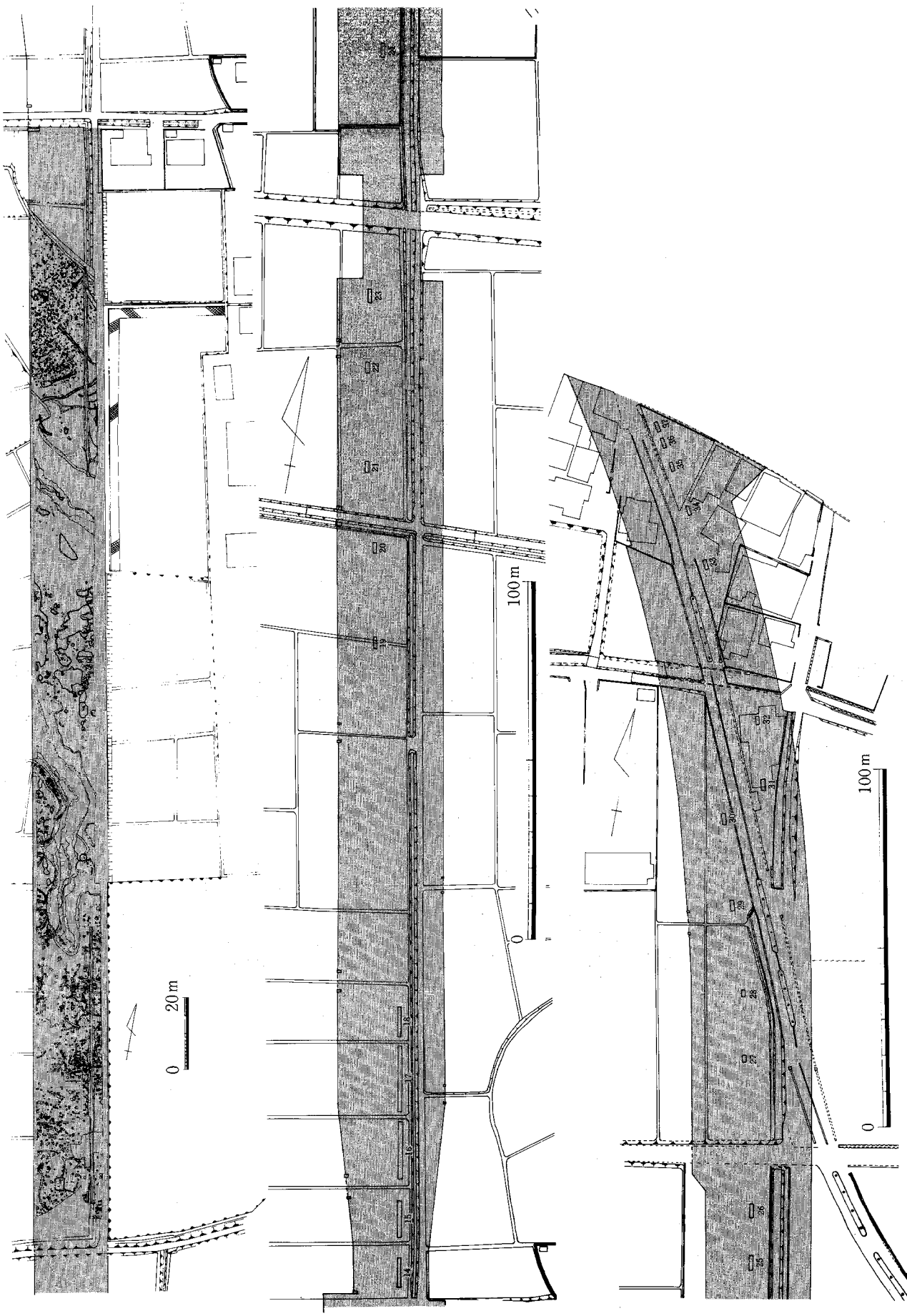
調査委託　福岡市土木局道路計画課

調査主体　福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第1係

教育長	佐藤善郎(前任)	井口雄哉
教育次長	尾花　剛(前任)	河野清一
部長	河野清一(前任)	川崎賢治
課長	生田征生(前任)	柳田純孝
係長	折尾　学(前任)	飛高憲雄
事務	岸田　隆(前任)	中山昭則　松延好文
試掘調査	山崎純男(主事)	山崎龍男　田中寿夫(技術担当)
発掘調査	二宮忠司(主事)	佐藤一郎

調査・整理補助　大庭友子　久保寿一郎　高橋賢治　村上かをり　藤村佳公恵

発掘・整理作業　榊光雄　牛尾豊　尾崎達也　太田孝房　鬼丸邦宏　広田義美



第１図　試掘調査位置図（縮尺1/1,000）

真名子時雄　三苫宗澄　結城弥澄

有吉貞江　池　弘子　伊藤みどり　上原チヨ子　牛尾秋子　牛尾シキヨ

尾崎八重　大内文恵　金子ヨシ子　菊地栄子　倉光ナツ子　白坂フサヲ

正崎由須子　柴田シズノ　柴田タエ子　清水文代　末松信子　杉村文子

惣慶とみ子　多田映子　田中タヅ子　津田和子　典略　初　富永純子

西嶋和子　西嶋タミエ　西嶋初子　西納テル子　西納トシエ　能美八重子

野坂三重子　原　早苗　平田政子　平野ミサヲ　藤野ふじ子　古井モモコ

藤　タケ　細川ミサヲ　真鍋チエ子　松本愛子　松本マサ子　松本フジ子

松本トシエ　真名子ゆきえ　山西人美　山本チエ子　山下サノエ　結城シズ

結城信子　結城千賀子　吉岡員代　吉岡タヤ子　吉岡蓮枝　吉岡竹子

吉竹早苗　吉積ミエ子　脇山美代子　脇坂ミサヲ

整理作業　青柳恵子　飯田千恵子　太田頼子　尾崎京子　亀井律子　北島藤子

斎藤美紀枝　清水優子　平田ミサ子　日名子節子　内山孝子　藤崎洋子

真名子順子　渡辺ちず子　京塚ハツミ

3．試掘調査報告

試掘調査担当；山崎純男主事、山崎龍男、田中寿夫担当

当該地は西側に大塚古墳を含む大塚遺跡群、東側に今宿五郎口遺跡(五郎江遺跡)群に挟まれた南北に長い範囲で、高祖山山麓から派生する低丘陵の末端に立地する。このことから遺跡の存在が十分に予測された。

試掘調査は路線に沿って各水田ごとに試掘トレンチを設定し、南から北へトレンチ番号を付した。各トレンチ検出遺構、土層についてその報告に基いて記す。

トレンチー1、遺構面までの深さは30～45㎝、全体に土壙やpitを検出した。遺構覆土は黒褐色粘質土で、遺構がのる地山面は黄灰色粘土(砂質)である。時期は弥生時代。

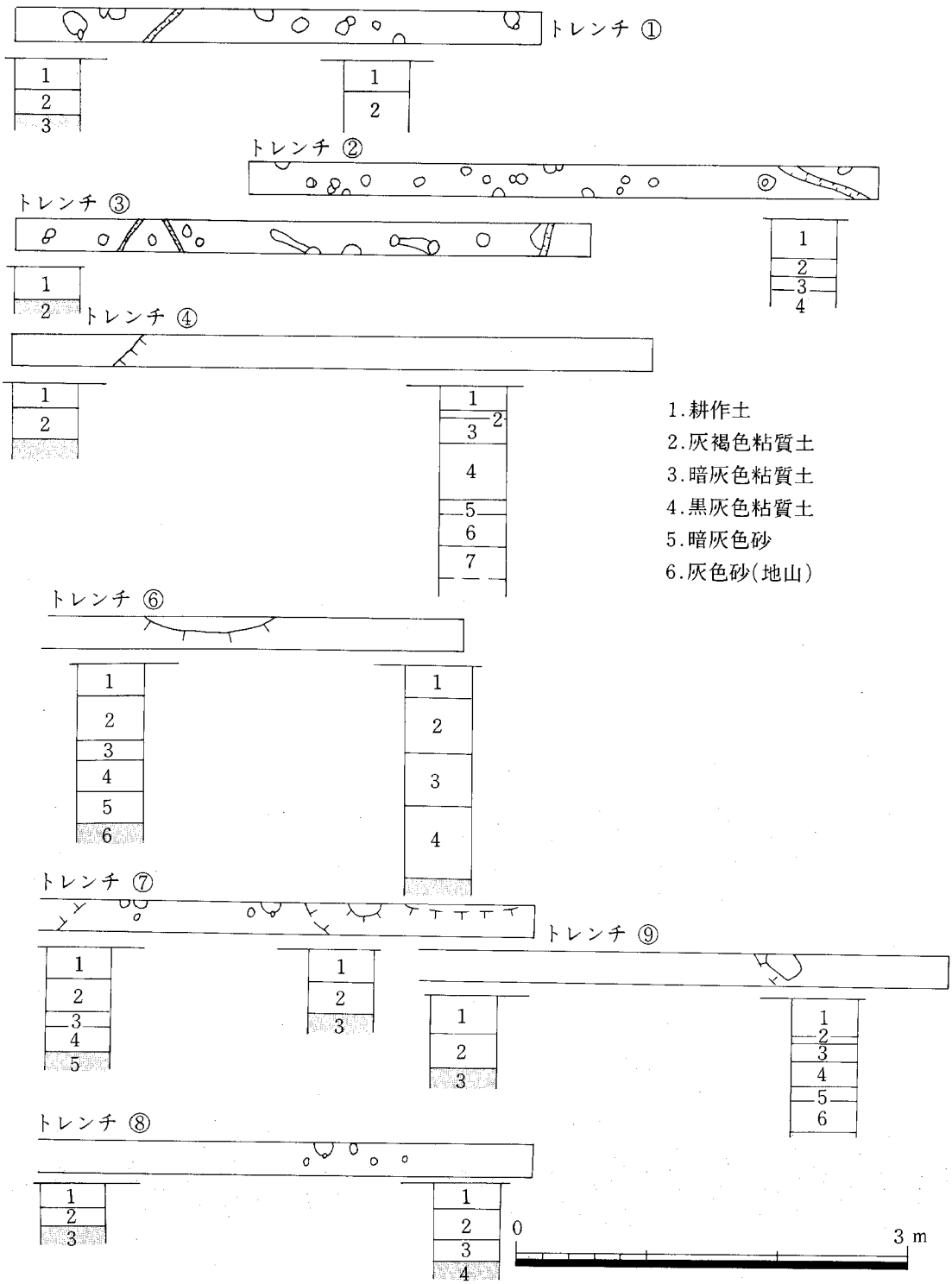
トレンチー2、pitや土壙、溝を全面に検出した。Pitの大きさは20～60㎝である。

トレンチー3、遺構面の深さは25～55㎝である。全面に遺構を検出した。

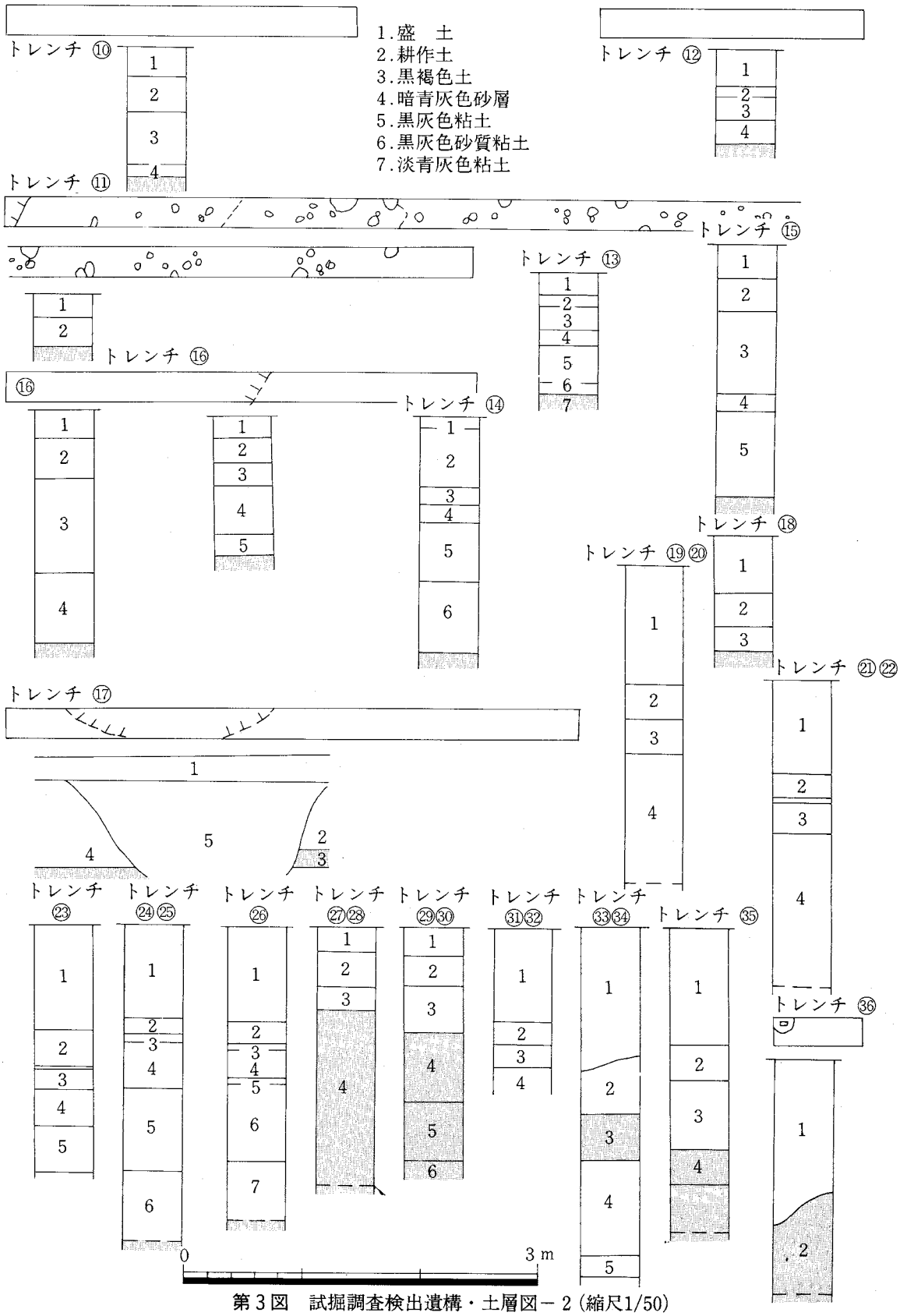
トレンチー4、台地部から谷部になる。谷部の深さは1.5m以上。谷部には弥生時代後期迄の土器が上層を中心に多量にふくまれていた。

トレンチー5、谷部である。下層からは木器も出土した。

トレンチー6、谷部である。北側に砂の堆積が認められ、溝状遺構らしきものを検出した。地山は灰色砂で深さは1.25mである。谷部は1.65mで青灰色シルト、谷部上層には多量の土器が、下層には木器の存在の可能性がある。



第２図　試掘調査検出遺構・土層図－１（縮尺1/50）



第３図　試掘調査検出遺構・土層図－２（縮尺1/50）

トレンチー7、谷部から台地部になる遺構面の深さは0.5～0.8mである。

トレンチー8、台地部であるが、削平がひどい。Pitがまばらに認められた。地山は淡灰褐色粘質シルト～明黄褐色粘質シルトである。

トレンチー9、台地部から谷部になる。地山面までの深さは0.55～1.15mである。地山は明褐色粘土から青灰色砂質粘土であり、土層観察で現代から4面の水田が確認出来た。

トレンチー10、谷部である。地山面までの深さは1.1～1.25mで、地山は淡青灰色粘質シルトである。地山直上に砂がかぶり水田の可能性がある。

トレンチー11、台地部である。全体にPitが密集して検出された。焼土が一面に広がる所があり、住居址の存在する可能性がある。地山面迄は浅く0.4～0.45mで地山は淡明褐色粘質土である。

トレンチー12、台地から谷部に移る地点で、深さは0.4～0.8mとなる。地山は明褐色～明灰褐色粘土(砂混じり)である。

トレンチー13、地山面までの深さは0.8～1.15mと北側が深くなる。地山は淡青灰色粘土である。堆積土は耕作土の下に黒色粘土、黒灰色粘質土である。遺構・遺物は検出されなかった。

トレンチー14、15、地山面迄の深さは2.0～2.2mである。地山は灰色シルト(砂質)、堆積土は黒灰色、黒青灰色粘土である。遺物・遺構は検出されなかった。

トレンチー16、地山面迄の深さは1.2～2.0mで北側が高くなる。地山は灰色粘土である。堆積土は暗茶褐色粘質砂、暗灰色粘質砂である。遺構・遺物は検出されなかった。

トレンチー17、地山面迄の深さは0.95～1.05mである。地山は淡灰褐色粘質シルト。堆積土は暗青灰色砂混り粘土である。南側で耕作土下に溜池上の落ち込みが認められた。遺構・遺物は検出されなかった。

トレンチー18、地山面迄の深さは0.8～1.05mで北側が高くなる。土層状況はトレンチ17とほぼ同じ。遺構・遺物は検出されなかった。

トレンチー19、20、1.0m程盛土されている。深さは2.7m程掘り下げた。遺構・遺物はなし。

トレンチー21～26、盛土は0.8～0.9m、2.1～2.7m迄掘り下げたが遺構・遺物はなし。

トレンチー27～30、2.2m迄掘り下げたが湧水が酷く、砂質で壁の崩壊が著しく掘り下げることが出来なかった。

トレンチー31～36、2.7m迄掘り下げたが、遺構・遺物は検出出来なかった。

第II章　遺跡の位置と歴史的環境

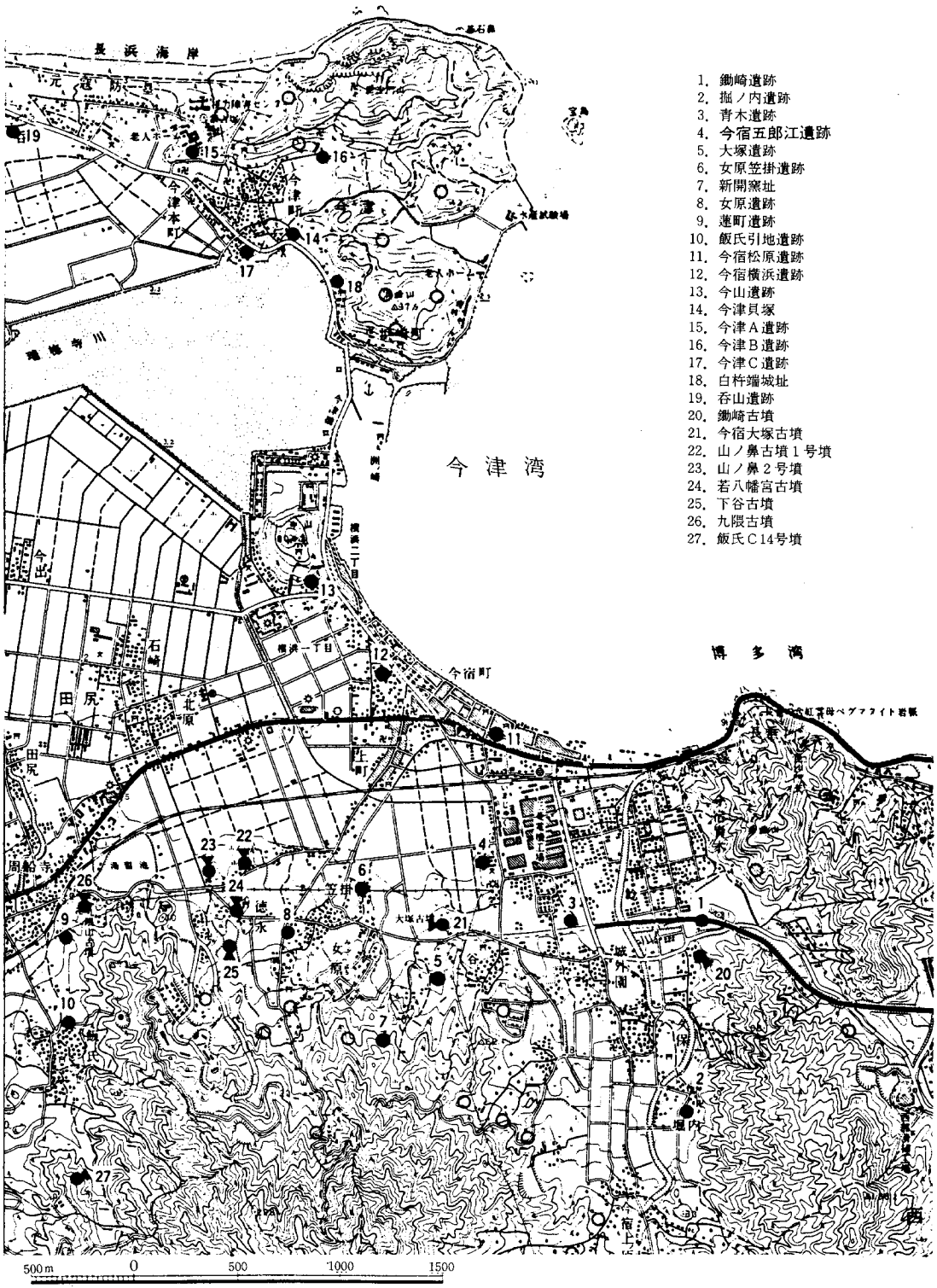
糸島平野と早良平野を二分する大起丘陵地である叶岳・長垂山・高祖山塊に挟まれた東西約6km、南北約2kmの小平野が今宿平野である。遺跡は高祖山から派生した北麓の低丘陵先端部にヤツデ状に広がった台地上に位地し、国土地理院発行『福岡』1/50,000(NI－52－10－11、福岡11号)の左上端より下に21.3cm、右に4.4cmで、ほぼ東経130°16′24″、北緯30°34′24″に位置する。本遺跡の周辺には、数多くの遺跡が分布する。西には伊都国に比定されている三雲・平原遺跡に代表される前原平野があり、縄文時代から歴史時代にわたる数多くの遺跡が周知され、また、新しく発見されている。

北には、弥生時代前期の石斧製作所跡として知られる呑山遺跡を始めとして、長浜貝塚・今津貝塚があり、鎌倉時代・室町時代には、日宋貿易の港として繁栄した痕跡が数多くあり、特に勝福寺[註1]西側では、約200体の人骨(頭部と体部が別々に埋葬され体部だけが火葬されている)と共に多くの陶磁器が出土した。また、国史跡・元寇防塁が長浜海岸に保存されている。

今津湾を挟んで南には、弥生時代前期に生産が開始され、中期には大分県・熊本県まで供給された玄武岩製太型蛤刃石斧の原産地であり、かつ生産地の今山遺跡[註2]がある。この今山から国の天然記念物に指定されている(含紅雲母ペグマタイト岩脈)のある長垂山までは砂丘地帯である。この砂丘地帯には、今宿松原遺跡、今宿横浜遺跡[註3]があり、弥生時代前期から中期にかけての遺構(土壙墓、甕棺墓等)が検出されている。また今山遺跡の初源は、弥生時代前期前半[註4]であるところから、この砂丘地帯は、弥生時代前期以前から形成されていたと考えられる。

東には、古代の官道である広石峠があり、早良平野へとつづくがこの官道沿いには、多くの古墳群が群集している。その中で、峠の西側台地に竪穴系横口式石室で知られる鋤先前方後円墳[註5]を初めとして数多くの古墳群や弥生時代の遺跡がある。

西には縄文時代晩期の遺構を検出した新開遺跡や、古墳時代の須恵器窯跡の新開古窯址等が山麓斜面にある。弥生時代の遺跡も最近発見されつつあるが、古墳時代前期から中期には、この地域に前方後円墳12基(東から鋤先古墳、本村古墳、イヤゾノ古墳、大塚古墳、小松原1号墳、2号墳、下谷1号墳、2号墳、八幡神社古墳、山の鼻1号墳、2号墳、丸隅山古墳)が築造されている。古墳時代後期にも山麓低位から中位にかけて数多くの群集墳が形成され、墓域的要素を強く持つ地域である。また、古代から中世の遺跡も最近発見されている。国道202号線バイパス建設に伴う発掘調査で女原遺跡[註6]から古墳時代の竪穴式住居址、掘立柱建物、中世水田等が検出されている。また、徳永地区の調査では、谷部から奈良時代～平安時代にかけての青磁(越州青磁)が多量に出土している。



第4図　周辺の遺跡（縮尺1/25,000）

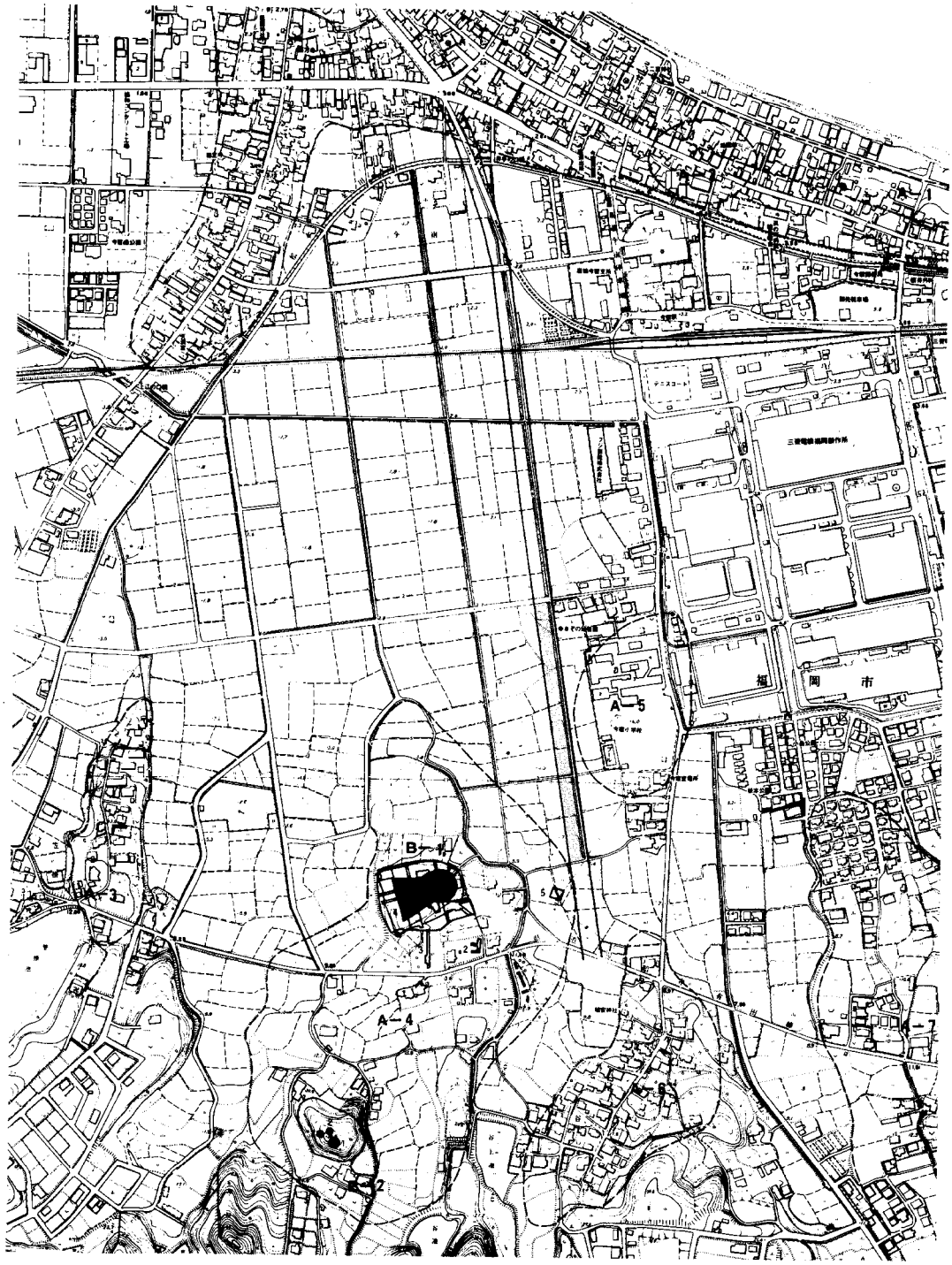
今宿五郎江遺跡周辺では、古くから弥生時代の遺跡として三菱電気工場内遺跡があるが、その内容については不明である。この遺跡から南に約500mの所に青木遺跡[註7]がある。弥生時代後期から中世までの遺物が出土している。遺構は、弥生時代後期の掘立柱建物、甕棺墓等と中世の掘立柱建物、溝等である。この遺跡で注目すべき遺物は石斧の量の多さである。石材は玄武岩製であることから今山遺跡の石斧との関連をかんがえるが、報告者は今山の石斧製作地からのものではないと考えている[註8]。

このほか今宿五郎江遺跡の南側に高田遺跡がある。弥生時代後期から古墳時代にかけての竪穴式住居址群が検出されている。また、今宿五郎江遺跡の東側に今宿小学校がある。昭和59年に校舎の改築工事に伴う調査で弥生時代後期の溝、井戸状遺構が検出されている。この遺跡を今宿五郎江遺跡第1次調査[註9]として行っている。

昭和63年に今宿五郎江遺跡第2次調査地点の東側を調査した。これが第3次調査で、SD－100のつづく部分とその北側部分の調査である。検出遺構はSD－100北側の溝につづくもので、下層から弥生時代中期の土器と共に木器が出土し、上層から後期の土器が層をなして出土した。

今宿五郎江遺跡第2次調査に先立って行った試掘調査と工事立会の調査を行った結果、今宿小学校北側部分から急激に台地が落ち、泥炭層と砂の互層で、これがトレンチ17付近までつづく。その長さ約200m程度である。トレンチ18と19の中間あたりから古砂丘が認められ、ほぼトレンチ23付近までつづく。トレンチ24から26にかけて泥炭質の粘土が認められ、砂丘が切れていることが判明した。トレンチ27からは今山から長垂山につづく古砂丘の南側に位置するものである。これらのことから今津湾の内湾としてこの部分まで広がっていたことが判明した。中央部に約60mの幅で砂丘が広がり、湿地帯が2ケ所にあることが判明した。弥生時代中期の段階では、今宿周辺部は、海水面低下に伴う砂丘の発達、ラグーンの形成があったことが判明した。弥生期における海水面は約－2m程度低下していたことが証明されている[註10]。今回の調査で弥生期には今津湾の内湾として大きな湿地帯が前面に広がっていたことが明らかとなった。

註1　亀井明徳「博多の中国陶磁地図」　初出1975～1976　『日本貿易陶磁史の研究』
註2　福岡市教育委員会『今山遺跡(1)』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第22集　1968
註3　福岡市歴史資料館『福岡平野の歴史－緊急発掘された遺跡と遺物』　1977
註4　福岡市教育委員会『今山・今宿遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集　1981
註5　福岡市教育委員会『鋤先古墳』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集　1984
註6　福岡市教育委員会『大塚遺跡・女原遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第224集　1989
註7　福岡市教育委員会『青木遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第169集　1986
註8　福岡市教育委員会『青木遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第169集　1986　P.37
註9　福岡市教育委員会『今宿五郎江遺跡Ⅰ』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第132集　1986
註10　井関弘太郎『沖積平野』東京大学出版会　1983



第５図　今宿五郎江遺跡調査地点（縮尺1/8,000）

第Ⅲ章　調査の記録

1．調査の概要

遺跡の発掘調査は国道202号線とバイパスとの接続をはかる幅20m、長さ1㎞の道路新設工事に伴うものである。試掘調査の結果、南50mは削平が著しく遺構の遺存状態が悪く調査対象外とした。また、北側部分については湿地部分と砂丘部分との調査の有無について検討したが、砂丘地帯の確認については工事の立会調査とし、台地部分の全面調査とした。

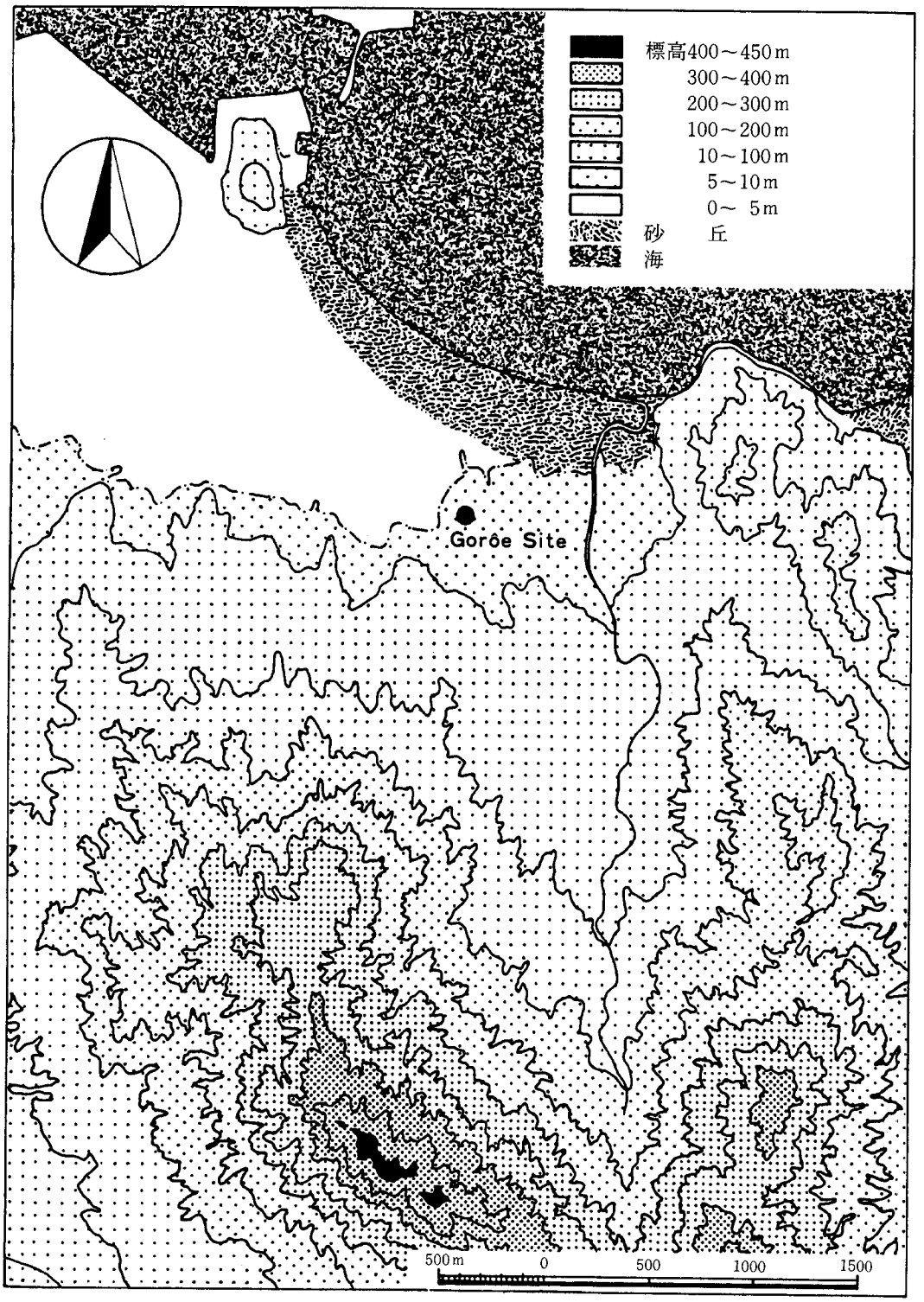
北側砂丘地帯については、深さ約5mまで確認したが、試掘結果とほぼ同様の結論が得られた。台地落ちから約30mまでは泥炭層と砂との互層である。そのあと上部は砂が堆積し、下層に砂と泥炭層の互層となる。これが約100mほどつづき再度、砂と泥炭層との互層が約10mほど続く。その後、砂丘部分に続く砂層が厚く堆積していた。

この結果、台地から古砂丘までの間にもう一つの砂丘があり、両側に湿地帯が存在していた事が明らかとなった。第6図に示す遺跡周辺地形図からみると台地部分は3～5mの標高を持ち一段高いが、台地落ち部分は0～3mでかなりの比高差をもつ。今山から長垂山にかけての古砂丘地帯は発掘調査の結果[註1]から弥生時代前期(板付Ⅰ式段階)以前から形成されていたと考えられる。これらのことから今山と対岸の浜崎山(毘沙門山)との狭い入江から考えて、広い内湾状を呈し、多くの河川が流れ込む状況であり、そこにラグーン状の地形が形成されたものと考えられる。

台地部分の発掘調査は南北に幅広いトレンチ状のものとなったが、遺構の広がりを把握するには非常に重要な調査であった。発掘調査対象面積は20m×350mの7,000㎡であるが、実際の発掘調査面積は6,000㎡強であった。北側から約75m程度で段落ちが認められた。

北側台地は鎌倉時代から室町時代にかけての溝、土壙、掘立柱建物(2間×2間、2間×3間が主体)46棟を検出した。中央部、南側台地の内SD－200、SB－28が鎌倉時代から室町時代にかけての遺構で、他は弥生時代の遺構のみの検出である。遺構は南側に溝、土壙、掘立柱建物(2間×3間が主)72棟、井戸等が検出され、中央部ではSD－50と大溝のSD－100がある。

南側台地は、掘立柱建物とした72棟の内、28棟ほどは竪穴式住居址の可能性が高い。遺跡の時期は、殆どの柱穴(堀方内、柱痕内)より弥生時代中期から後期にかけての遺物が出土していることからこれらの時期と考えて良い。SD－50はSD－100を切る形で検出された。形状は楕円形を呈し、30m×50m程度と考えられる。SD－100は南東から北西に向かって流れるが、一部南側に張り出す形状を呈する。すぐ東に近接する調査地点でも同様に南東方向へ続く様相を示していた。西側は調査例がないため遺構の様相は明らかに出来ないが、おそらく北西側に続き内湾に流れ込むものと考えられる。



第6図　遺跡周辺の地形図（縮尺1/31,250）

2．土層(付図－2)

南側台地は、水田工作土、床土(黄褐色土)の下層は、暗褐色土の包含層である。しかしこの包含層は、南側に部分的にしかない。その下層は、暗黄褐色粘土で遺構面である。

北側台地も南側台地と同様で耕作土、床土の下層に遺構面である赤褐色粘土となる。北側台地は、調査区北側より10mで段落する。その土層は、暗灰褐色土、砂層、泥炭層、砂層、泥炭層とつづき、北側に傾斜しながら砂と泥炭層の互層がしだいに厚くなる。

付図－2で示した土層図は、南台地と北台地を結ぶ土層図で、SD－100の土層図が①～③、中央台地部分の土層図が④･⑤である。

①はSD－50と100の横断面土層である。Ⅰ層は耕作土、Ⅱ層は床土、Ⅲ層は灰褐色土層で鎌倉～室町時代にかけての遺物が出土している。Ⅳ層は暗褐色土層で古墳時代初期の土器(小型丸底壺等)が出土している。この面までは、ほぼ自然堆積である。Ⅴ層は黄褐色粘質土層でSD－50上面で凹状の削り出しを呈する。Ⅵ層は、黒色土層である。SD－50は暗黄褐色粘土からの切り込みで、このⅥ層は最上面の土層である。この層より多量の弥生時代後期の土器、石器が出土している。Ⅶ層は暗黒褐色砂層であるが、SD－50と100とでは、色彩が多少異なる。SD－50は、黒色が強く、黒色砂層であるのに対して、SD－100は暗黒褐色砂層である。SD－100から出土した銅鐸型銅製品は、この層と上層との境に出土したが、銅鐸型銅製品内につまった土はⅦ層の砂層で、上層の黒色土は混入していない。この層からは中期末の土器が出土している。SD－100のⅧ層は荒砂が多量に入り流れが急であったことが伺える。SD－50のⅧ層は、黒褐色粘質土で、多量の木器、土器の出土が区層の砂層までつづく。SD－100の区層は砂と泥炭層の互層で、この層からは中期中葉から前葉の土器を中心に出土している。SD－100は①～②にみられるように途中で一度立上がり、再度溝状を呈する。南側の溝状の土層は基本的には、同様である。

③～④の基本層序は、盛土、耕作土、床土(黄褐色土)、Ⅲ層、明褐色土、Ⅳ層、鉄分を多量に含む明灰褐色土である。これは、SD－100のⅣ層と同一層序で、ほぼこの層序までは、均一である。また鉄分を多く含むことから水田面の可能性が高いが、畦畔状の検出は認められなかった。Ⅴ層は、灰褐色土である。Ⅵ層は黒褐色土であるが、SD－50はこの層位から切り込まれている。Ⅶ層とした層位が、これに当たる。荒砂である。

SD－50の底面土層は、青灰色粘土層で、これはSD－100につづくが、SD－50と100の境をなす土層は、青灰色シルト層である。SD－50の形成は、Ⅵ層の暗黒褐色砂層で区別でき、この面からの掘削と考えてよい。下層に黒色土と砂層の互層内に多量の木器と土器を出土するが、時期は土器から弥生時代後期の環濠と考えられる。

3．検出遺構

調査対象面積7000m²ではあるが、台地の傾斜にそって幅20m、長さ350mの南北に長いトレンチである。銅鐸型製品を出土したSD－100がほぼ中央部を流れ、北側台地、南側台地に分けられる。南側台地には、弥生時代の柱穴、溝、井戸、掘立柱建物、環濠が検出された。中央台地では、SD－100のほか、土壙、溝が検出できた。この中央台地は、南北台地より約１mから1.5mの比高差が認められる。SD－100は、南北台地を二分しながら北西方向へ流れている。北台地の段落から考えて、ヤツデ状に広がる台地の谷部であり、ラグーン状に広がる湿地帯に流れ込むものと考えられる。

北側台地には、土壙、溝、柱穴、掘立柱建物を検出した。掘立柱建物は、弥生時代のものはなく、鎌倉から室町時代にかけての建物群である。

掘立柱建物、井戸、土壙、pit、溝について記載しておく。

１)掘立柱建物

南側、北側台地から約118棟の掘立柱建物が検出できたが、柱穴の数からまだ数十棟建物が建つと考えられるが、図面上の操作となるので図示していない。南側台地から弥生時代の建物が72棟、北側台地から鎌倉～室町時代の掘立柱建物が46棟検出した。

(1) 鎌倉・室町時代の掘立柱建物群

鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物は、北側台地に集中している。南側台地にはSB－48の１棟(１間×１間)が検出されたにとどまった。ただ柱穴内からの出土遺物を手懸りとしたため、南台地には１棟のみの検出となったが、柱穴の個数から考えて、この台地にも同時期の建物が建つ可能性は大いにある。

１間×１間の建物　(第８図、13図、Tab.１、２)

１間×１間の建物としてSB－48、74、86、89、97、102、104、113、116、の９棟がある。桁行が3.0mから3.8m、梁行が、2.5mから3.4mである。柱穴の大きさは、さほど大きくなく、50cm前後のものである。柱穴底面に礎盤(石)を入れているものがある。この時代の建物として１間×１間の建物は狭すぎると思われる。一つには調査区の関係でその延長を調査できなかったことが要因である。

１間×２間の建物(第９図、10図、Tab.１、２)

１間×２間の建物としてSB－71、72、75、79、87、90、92、101、103、106、114、115、117の13棟がありこの建物の最大数をはかる。桁行、梁行とも寸法が定まっていない。桁行の最大は2.9mで最小が1.7mである。梁行は、最大が3.4m, 最小が2.0mである。柱穴自体も１間×１間と同じく小さな柱穴が多い。桁行の中間柱穴は、上下どちらかにずれがある。

2間×2間の建物(第11図、12図、Tab.1、2)

2間×2間の建物は、SB－73、76～78、88、95、96、99、108、110、118の11棟である。桁行、梁行とも柱間が異なることと、中間の柱が、どちらかにずれているのは1間と2間の建物と同じである。SB－77は、西側と南側に廂を持つ。柱穴には、柱根が残るものと礎盤が残っているものがある。礎盤は、77のほかに76、78、88、96があり、柱根は、73、77にある。

2間×3間の建物(第12図～14図、Tab.2)

2間×3間の建物は、SB－81、82、91、94、100の5棟検出した。SB－81は桁行が1.3mから2.1mと不揃いであるのに対して梁行は、ほぼ揃っている。これに対してSB－91は桁行が2.1m、梁行が2.6mで揃っている。このことは、この遺跡では非常に珍らしい。

SB－94は、一応2間×3間としたが、梁行が不揃いで、西側に廂までつく様相を示している。桁行は、ほぼ等間隔を持つ。SB－82は、柱穴が小さく、並びも不揃いであるが、柱間が通ることから建物とした。SB－100は、桁行、梁行とも揃っているが、梁行中央部の柱穴だけが浅い。他の柱穴は深く、全体をこの深い柱穴でささえると考えれば、建物は建つと考え掘立柱建物とした。

以上が各建物の詳細である。鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物は47棟であるが、建物配置について考えると(狭い範囲であり、東西にかなりの建物が建っていたと考えられるが、調査区内だけで、その方向性、同時性を考察する)次のようになる。

弥生時代の掘立柱建物で同じ方向性を持つものは10区分できる。E－26°－Nの方向をとる。中期は01、05、12、42、後期が23、39、54がある。2、E－12°－Nの方向をとる建物、中期では02、04、08、後期は43、60、61がある。3、E－80°－N方向をとる建物として中期では、03、06、12、16、24、25、35で後期は19、35、41、49がある。4、E－15°－N方向をとる建物は中期では、07、10がある。5、E－13°－N中期では、09、30、33、34で後期45がある。6、E－37°－N方向をとるもので中期の建物は11、59で後期には20、57、63がある。7、E－19°－Nの方向をとる建物で中期は、13、後期に22、56がある。8、E－36°－Nの方向をとる建物で中期には、15、28、32、35、51、52で後期はない。9、E－50°－Nの方向をとる建物で、中期～後期に29、後期に63、68がある。10、90°の方向を持つ建物では中期から後期に18、36、50、で後期に37、62がある。鎌倉から室町時代にかけての建物では9つに区分できる。1、E－67°－N方向をとる建物として71、99、2、E－53°－Nの方向をとる建物として72、77、100、108がある。3、E－40°－Nの方向をとる建物として73、118がある。4、E－74°－N方向をとる建物は、74、78、81、115がある。5、E－6°－N方向をとる建物は、75、87、96の3棟である。6、E－58°－N方向をとる建物では、76、82、101、104、110の5棟ある。7、W－34°－N方向をとる建物は88、113である。8、W－55°－N方向をとる建物は、91、106である。9、E－2°－N方向は90、117の2棟である。

(2) 弥生時代の掘立柱建物群(第15図～24図、Tab. 1、2)

南台地には、数多くの柱穴を検出した。掘立柱建物の確認は、現場で行なったものが殆どである。図面での確認も行なったが、柱穴掘方内出土の遺物、柱痕内出土の遺物を重視した。南台地からは72棟の掘立柱建物を検出した。このほか図面上で確認したものもあるが、確証がもてないため、記載からはずす。

掘立柱建物で出土遺物の確認、柱穴掘方、柱痕の大きさ等からその時期を決定し、柱根跡内出土遺物からは、その時期およびそれ以前(柱穴掘方内遺物を検討)とした。柱穴掘方内遺物からは、その時期以降として取扱った。時期別に図示し、説明する。

弥生時代中期の掘立柱建物(第15図～17図、Tab. 1、2)

1間×1間の掘立柱建物(第15図、Tab. 1、2)

1間×1間の建物は、SB－02、24、25、46、69の6棟である。掘り方内より中期中葉の土器が出土。台地全体が削平を受けているため、この1間×1間は、竪穴住居址の柱穴とも考えられる。SB－02、26を除く他の4棟の柱穴は大きく掘立柱建物の可能性が高く、SB－69には柱痕も残る。

1間×2間の掘立柱建物

1間×2間の建物は、SB－04、09、27、42の4棟である。桁行は2.0m～2.3m、梁行は3m～3.7mである。柱根内出土遺物から中期中葉の建物である。

1間×3間、2間×2間の掘立柱建物(第16図、Tab. 1)

1間×3間の建物は、SB－21である。桁行1.7m、2.1m、梁行は2.5mである。南側桁行の柱穴が削平されている。柱根内出土遺物は中期中葉である。2間×2間の建物は、SB－31である。柱穴の状況からもう1間延びることも考えられる。柱痕跡内の遺物から中期中葉を示す。

弥生時代中期末から後期初頭にかけての掘立柱建物(第17図～19図、Tab. 1)

上記の中期掘立柱建物は、ほぼ中期の中におさまるものであるが、ここに記載する建物は、弥生中期末から後期にかけての時期である。ただ中期末としたものも後期の可能性が強いため広く後期初頭を中心とした掘立柱建物として一応記載する。

1間×1間の掘立柱建物(第17図、Tab. 1、2)

1間×1間の建物は、SB－01、03、06、12、13、15、59の8棟である。柱穴掘り方の大きさも揃っている。桁行は、2.2m～3.0m、梁行も2.4m～3.5mと区々である。柱穴掘り方内より弥生中期末の土器が出土している。

1間×2間の掘立柱建物(第18図、19図、Tab. 1、2)

1間×2間の建物は、SB－17、18、29、30、32、34、36、64、118の9棟である。この内118は調査区外に延びる可能性もあるが、現段階ではこの範疇としておく。桁行の柱間隔は、1.8m～3.5m、

梁行は2.5m～3.4mを計る。SB－30は、桁行の柱間隔が3.0m～3.5mと広く、1間×3間の長さとほぼ等しい。またSB－34も柱筋が合ない。

1間×3間の掘立柱建物(第19図、Tab. 1)

1間×3間の建物はSB－08、10、35の3棟である。柱穴の形状、大きさはその建物で揃っている。桁行の柱間隔は、2.0m～2.8m、梁行は2.0m、2.5m、3.3mを計る。

弥生時代後期後半の掘立柱建物(第21図～24図)

弥生時代後期後半とした掘立柱建物として27棟検出できた。柱穴掘り方内、柱痕跡掘り方より出土する土器を手がかりとした。厳密には後期中葉の土器(形式分類Ⅳ式からⅤ式の遺物)が出土している。

1間×1間の掘立柱建物(第21図、Tab. 1)

1間×1間の建物は、SB－07、11、22、23、56、57、62、63の8棟である。この建物も上記で記した様に竪穴式住居の柱穴としての可能性を持つ。形状は、ほぼ正方形の22、23、57、62、と長方形の07、11、56、63がある。また07と56は1間×2間、2間×2間の可能性もある。間隔はほぼ3.5m前後と広い。長方形の梁行は1.8m～2.6m程度でおさまる。SB－22、23を除いて、ほかの柱穴の掘り方は大きく、柱痕跡も大きく約0.3m～0.5mである。柱穴内掘り方から後期の遺物が出土している。

1間×2間の掘立柱建物(第22図、23図、Tab. 1、2)

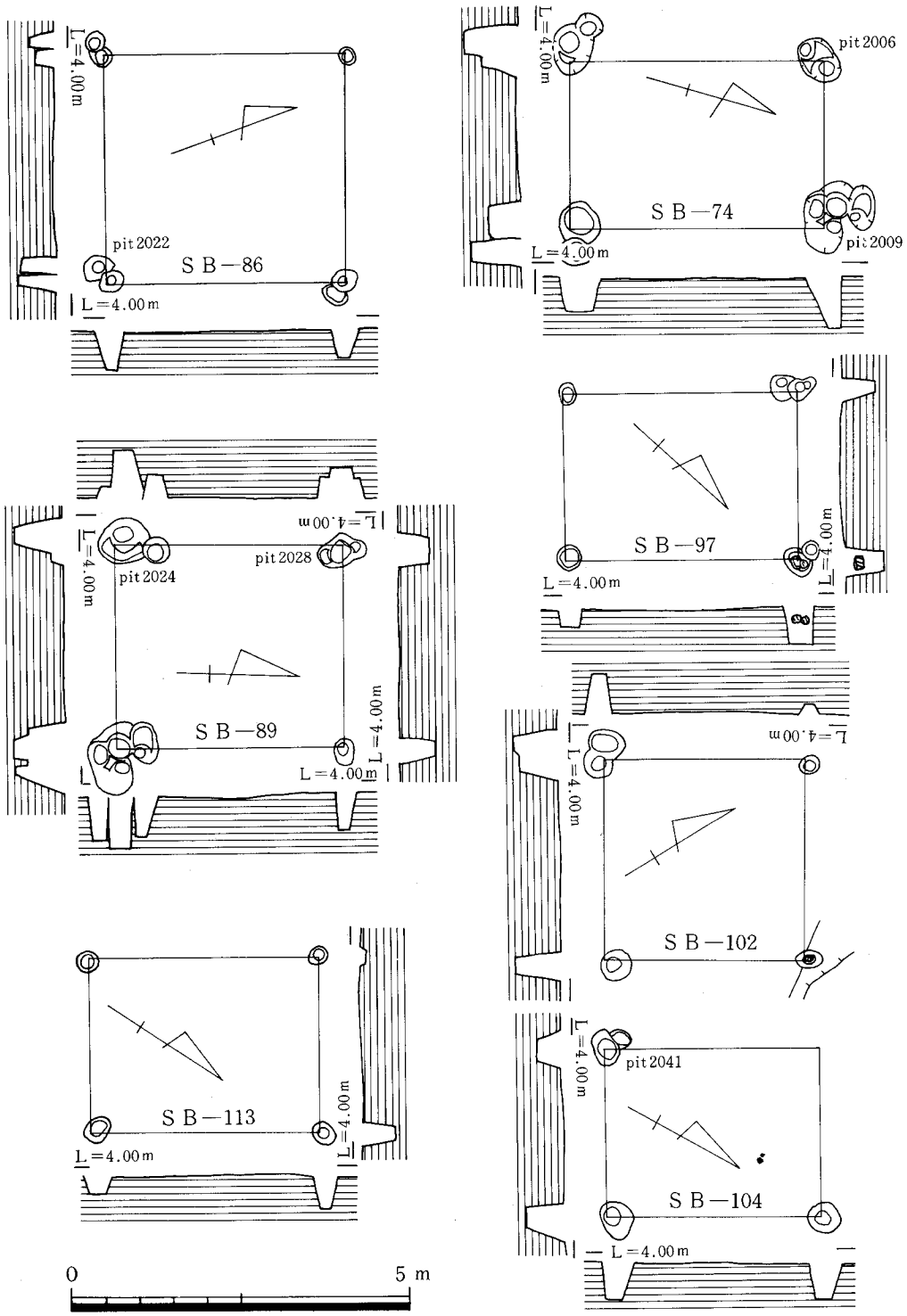
1間×2間の建物は、SB－19、20、39、40、41、50、55、65、117の10棟である。1間×1間として考えた方がよい。39は2間×2間以上と考えた方がよい。14を除くと、弥生時代後期における掘立柱建物として主体をなすものである。

桁行は、1.8m～2.9m、であるが2.2mがその主流を占める。梁行は2.2mから3.5mとさまざまである。梁行の柱穴は他の柱穴より深い。柱穴掘り方自体もその大きさ、深さおよび柱痕跡の大きさ等も揃っている。SB－50は代表的な建物であるが、桁行が3.0m×3.0m、梁行が2.8m、柱穴掘り方、大きさが平均0.9m×1mで底面に石の礎盤を敷いているのが3ケ所ある。この柱痕跡からみると柱自体の大きさは約0.5mである。

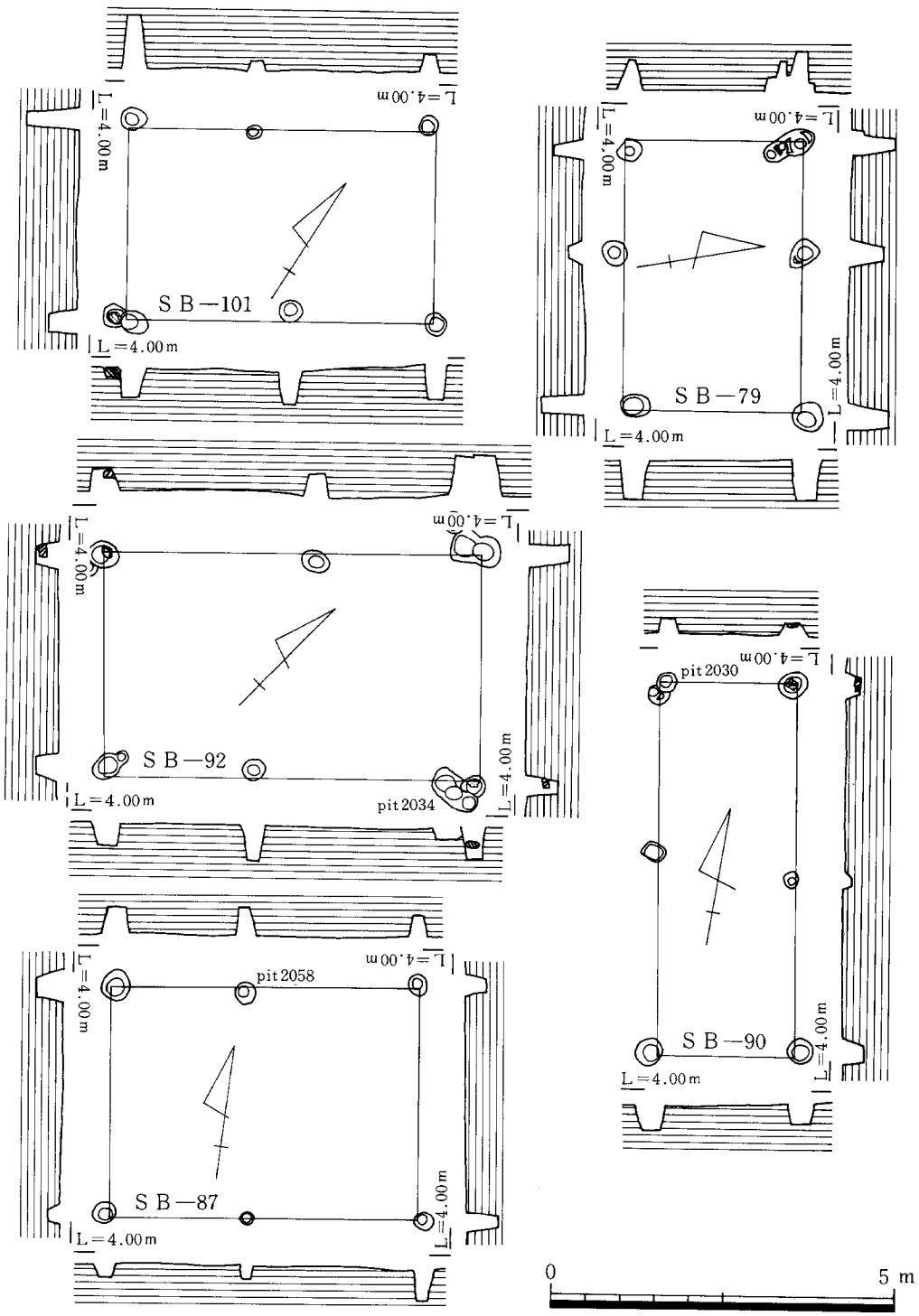
1間×3間、1間×4間、2間×3間の掘立柱建物(第24図、Tab. 1)

1間×3間の建物は、SB－43、54で建て方によっては2間×3間となる可能性を持つ。桁行が2.0m～2.3m、梁行が2.0mである。1間×4間の建物は、SB－37で、1.2m～2.1mの桁行を持ち、梁行は2.8mを計る。2間×3間の建物は、調査区外にも延びているため桁行の間数は不明である。桁行の間隔は1.7m～2.2m、梁行は1.8m～1.9mを計る。

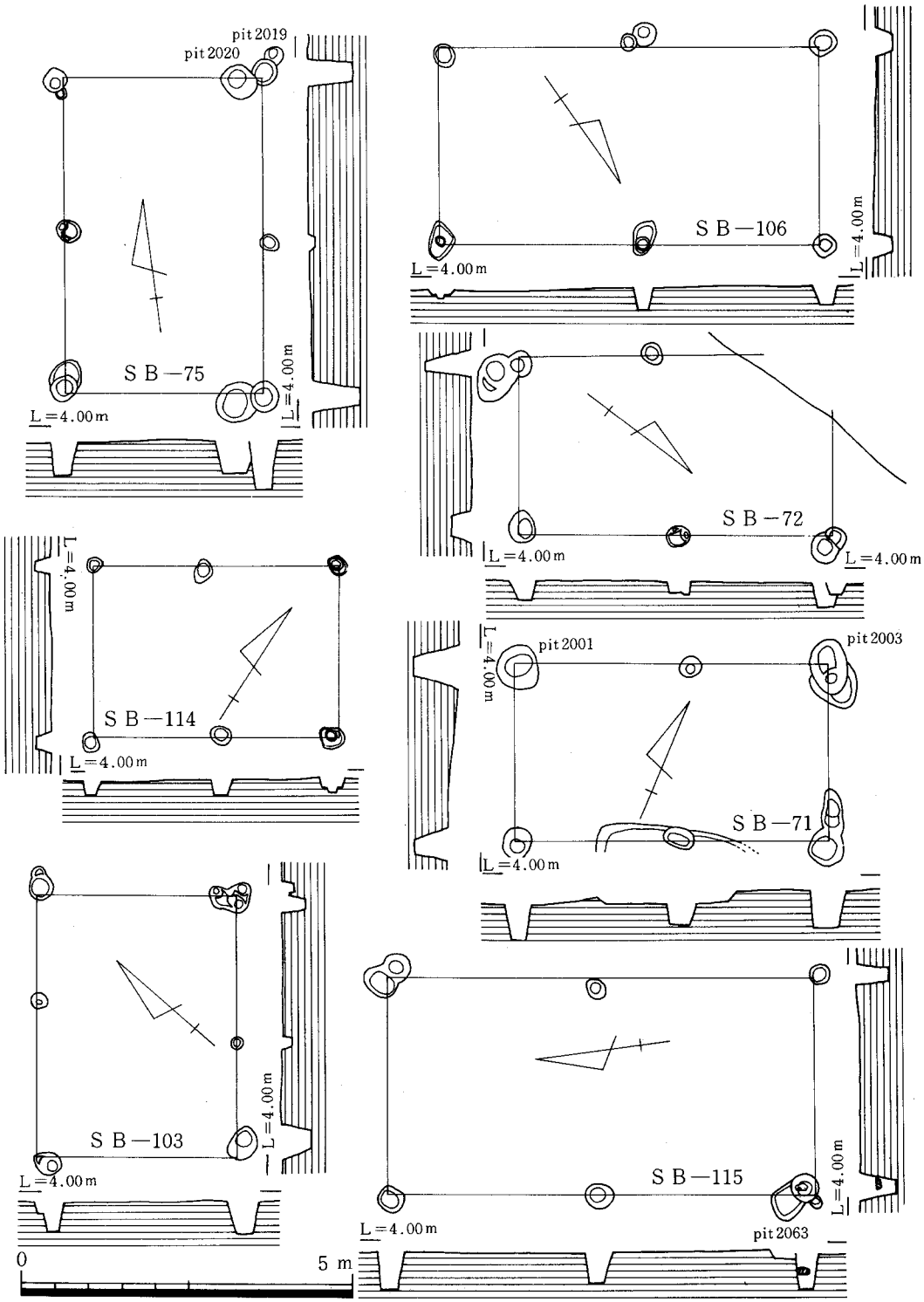
第７図　掘立柱建物遺構配置図（縮尺1/400）



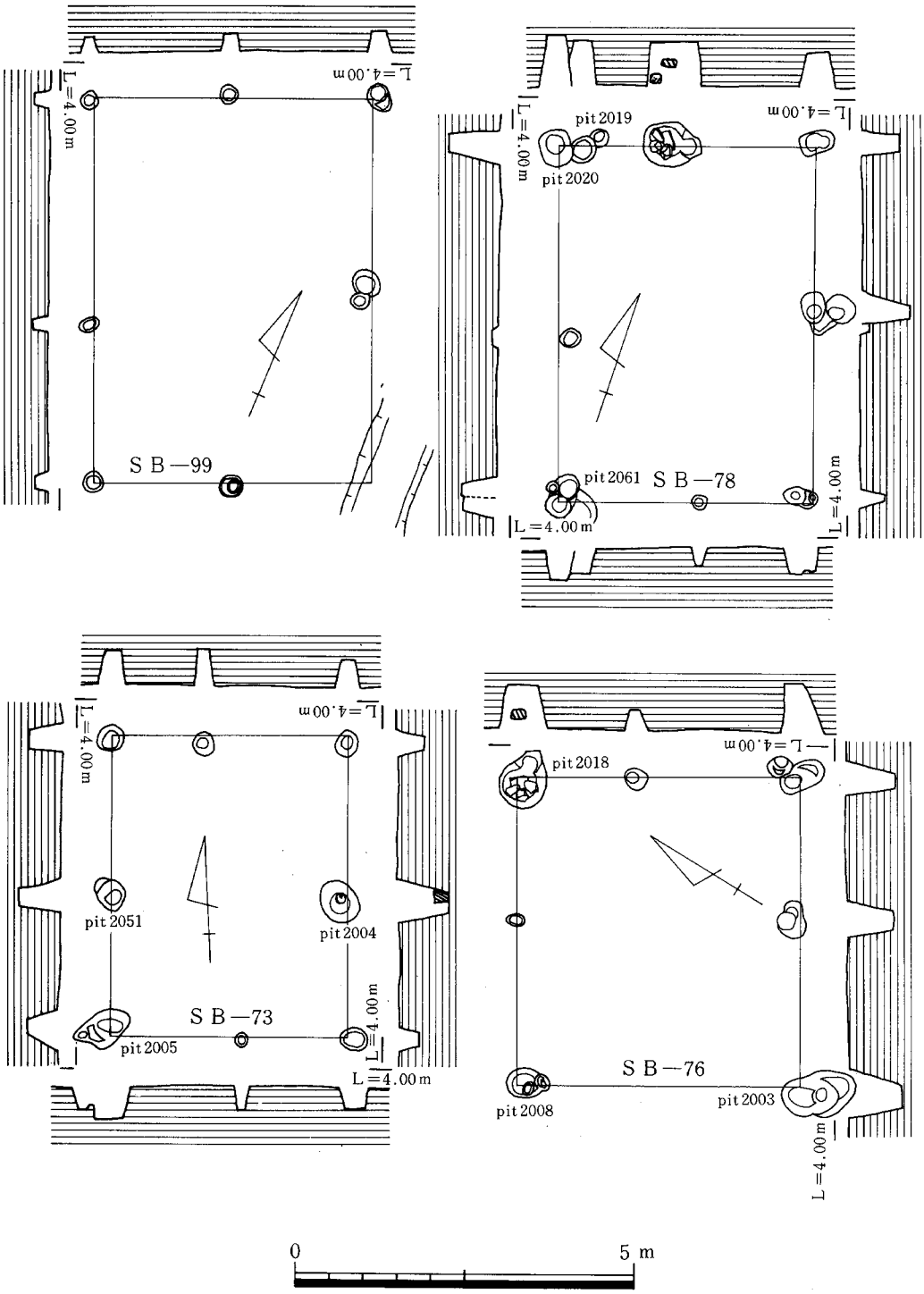
第８図　掘立柱建物実測図－１（縮尺1/100）



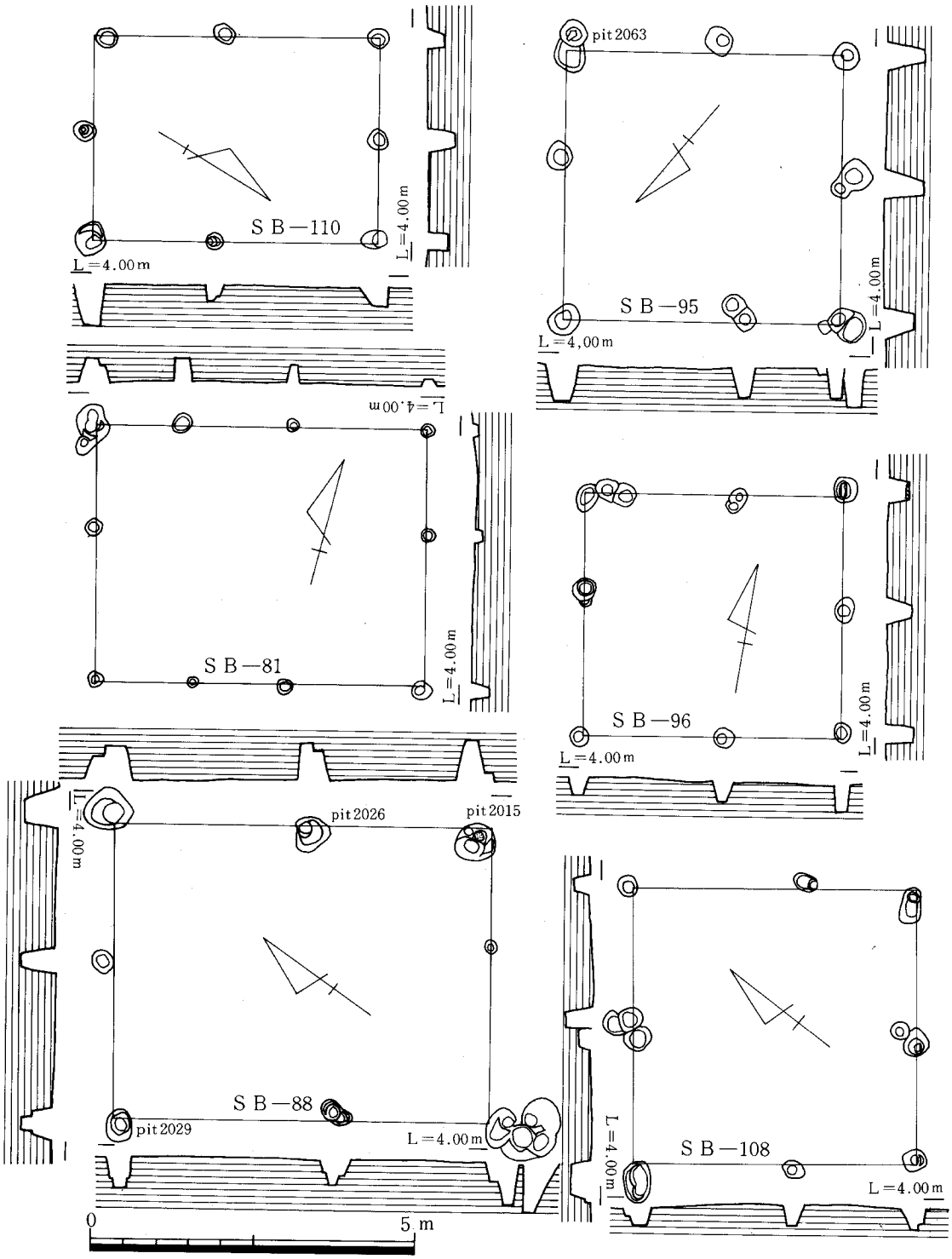
第９図　掘立柱建物実測図－２（縮尺1/100）



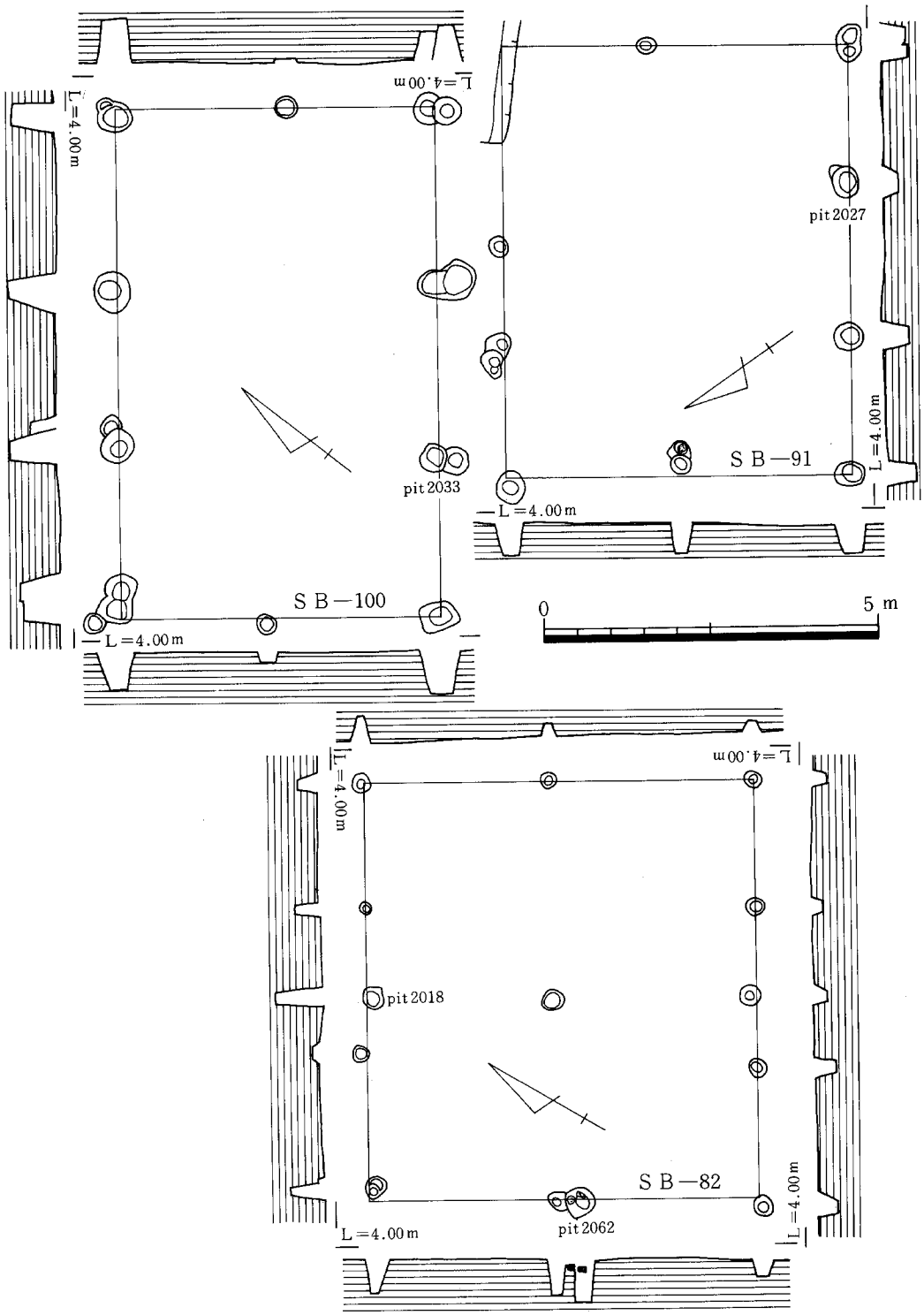
第10図　掘立柱建物実測図－3（縮尺1/100）



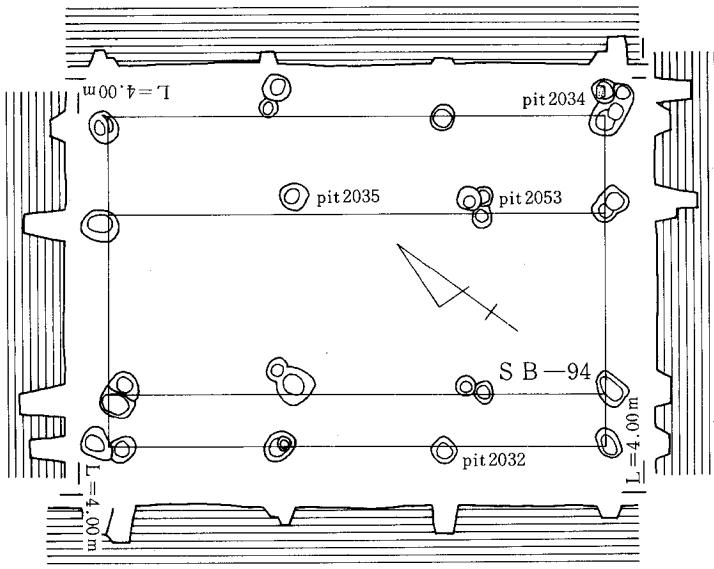
第11図　掘立柱建物実測図－４（縮尺1/100）

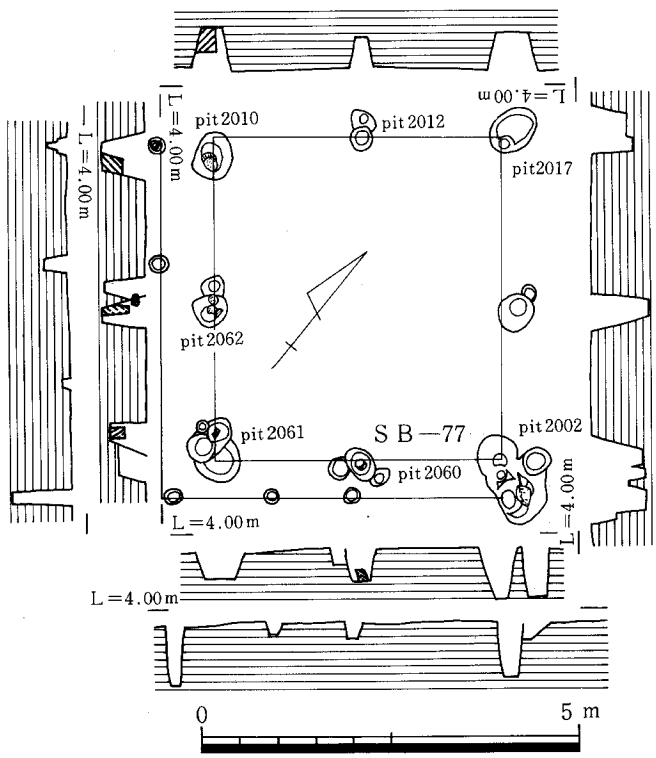


第12図　掘立柱建物実測図－５（縮尺1/100）

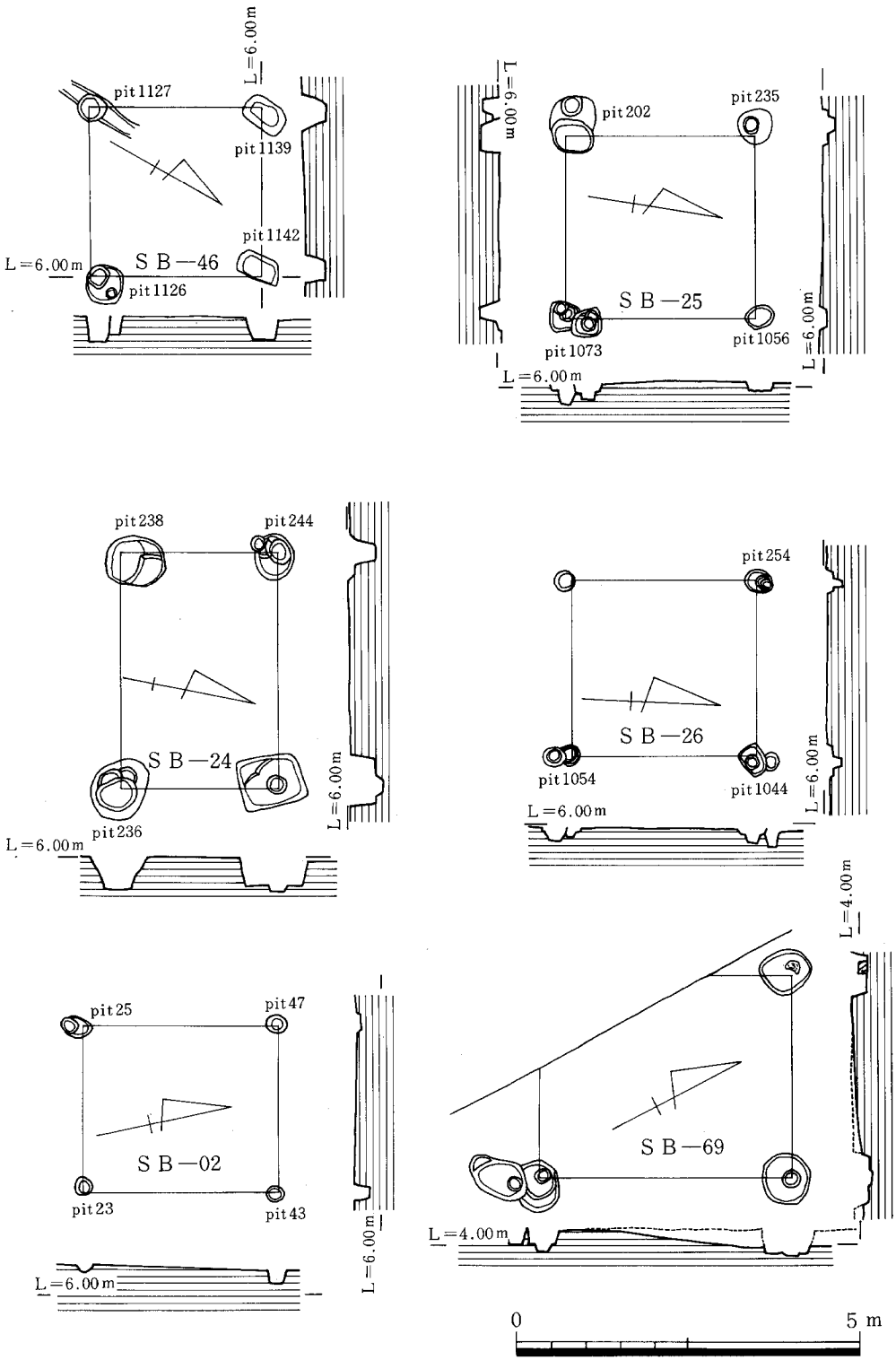


第13図　掘立柱建物実測図－6（縮尺1/100）

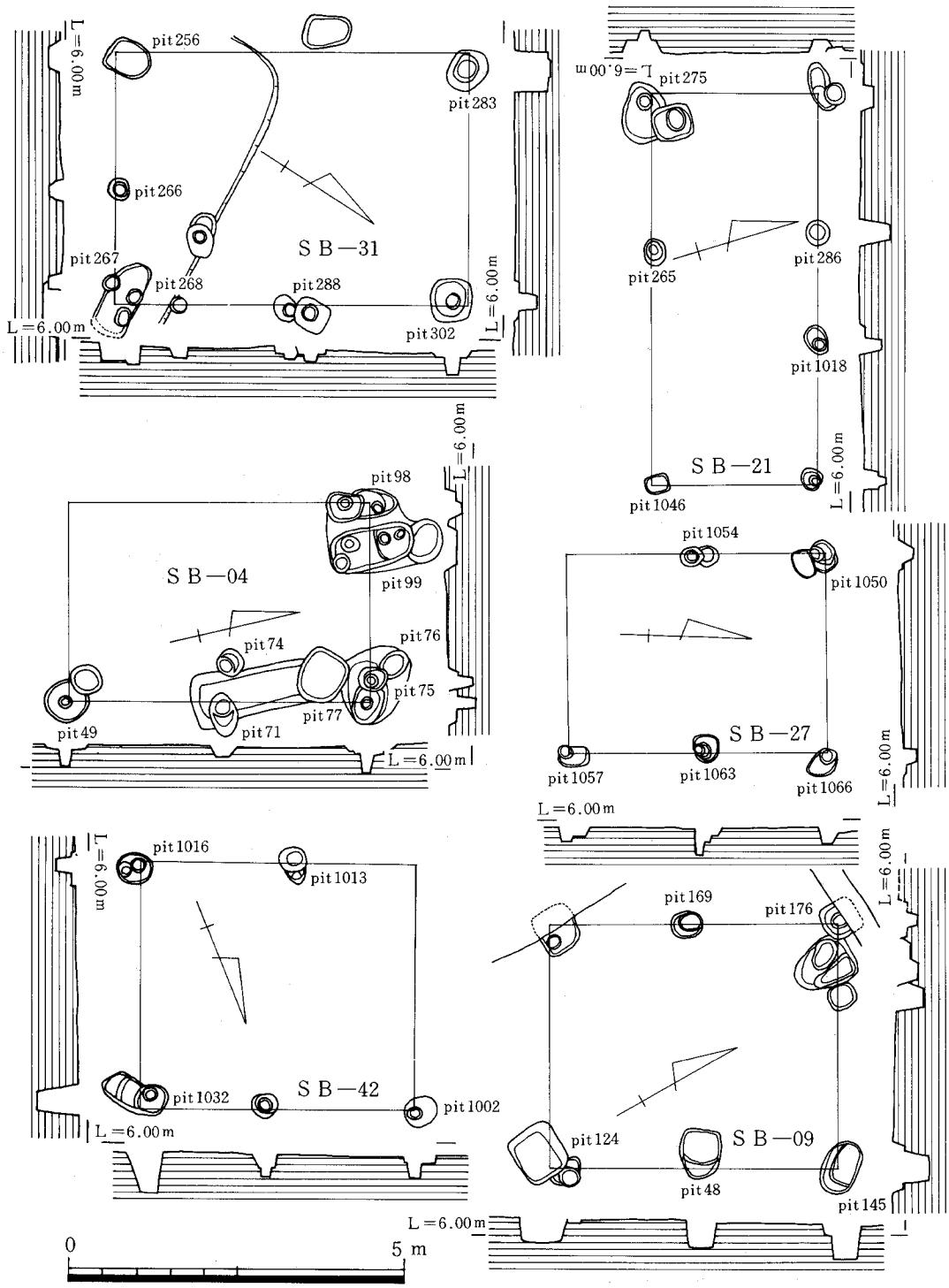




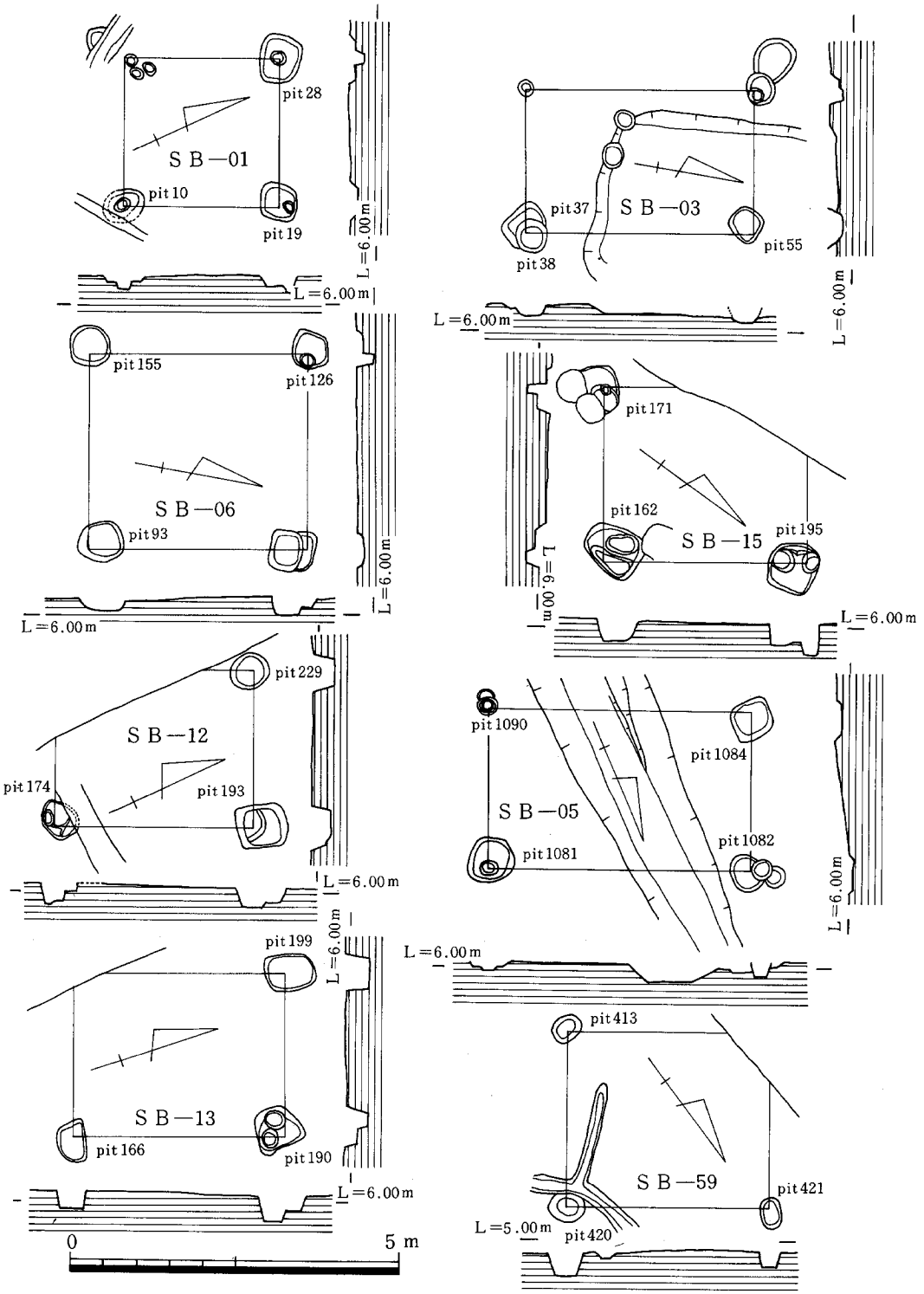
第14図　掘立柱建物実測図－７（縮尺1/100）



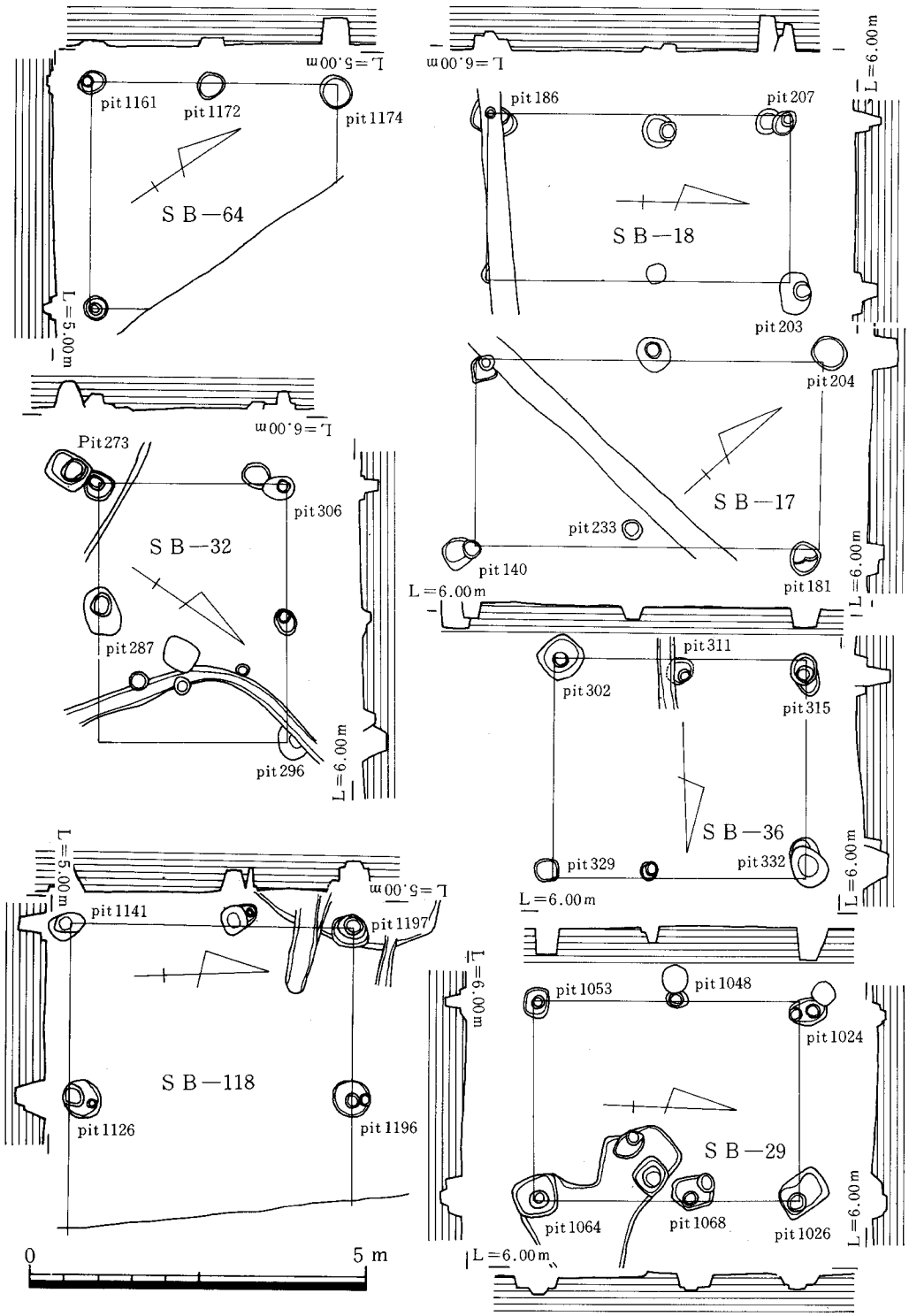
第15図　掘立柱建物実測図－８（縮尺1/100）



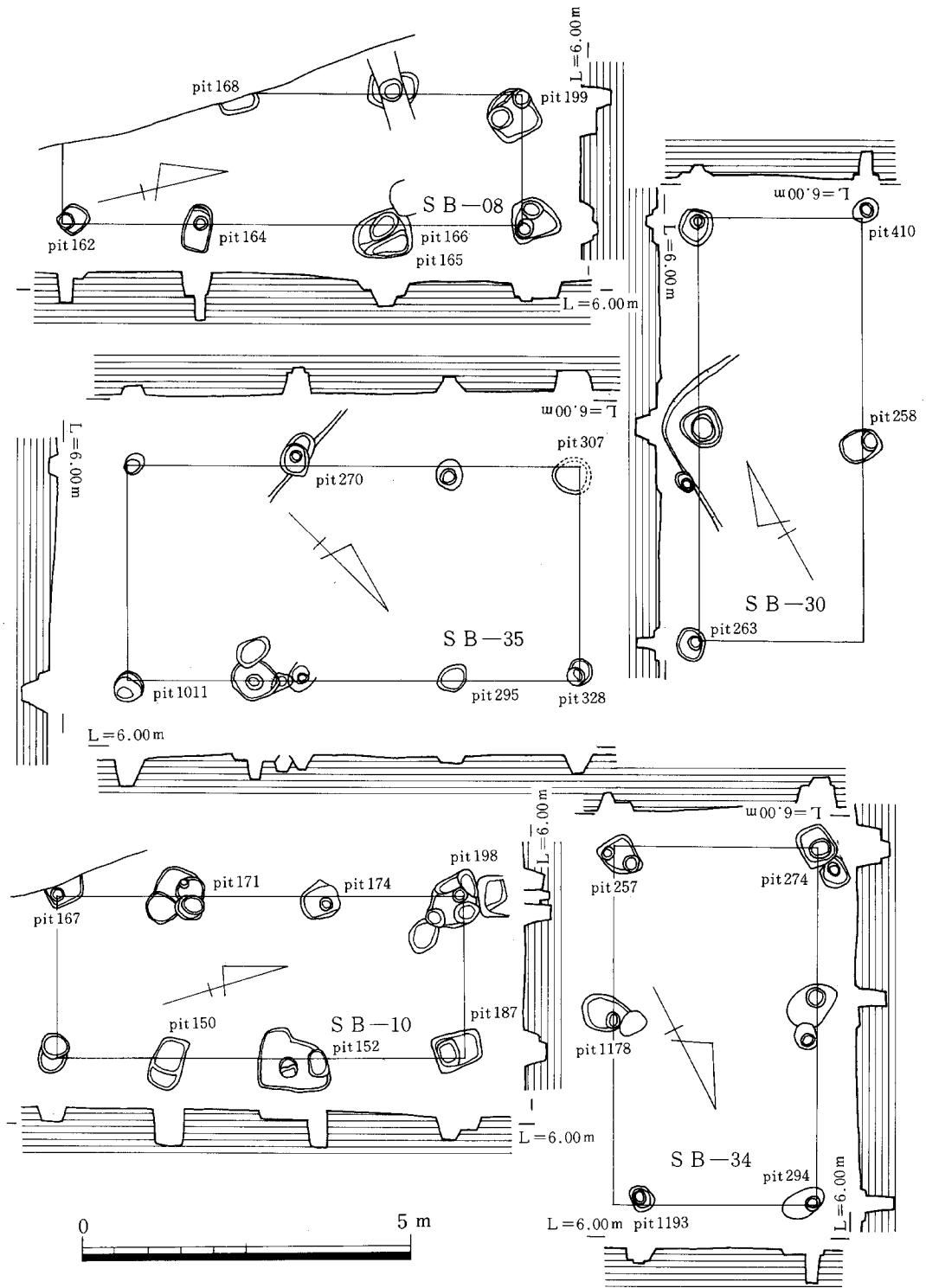
第16図　掘立柱建物実測図－９（縮尺1/100）



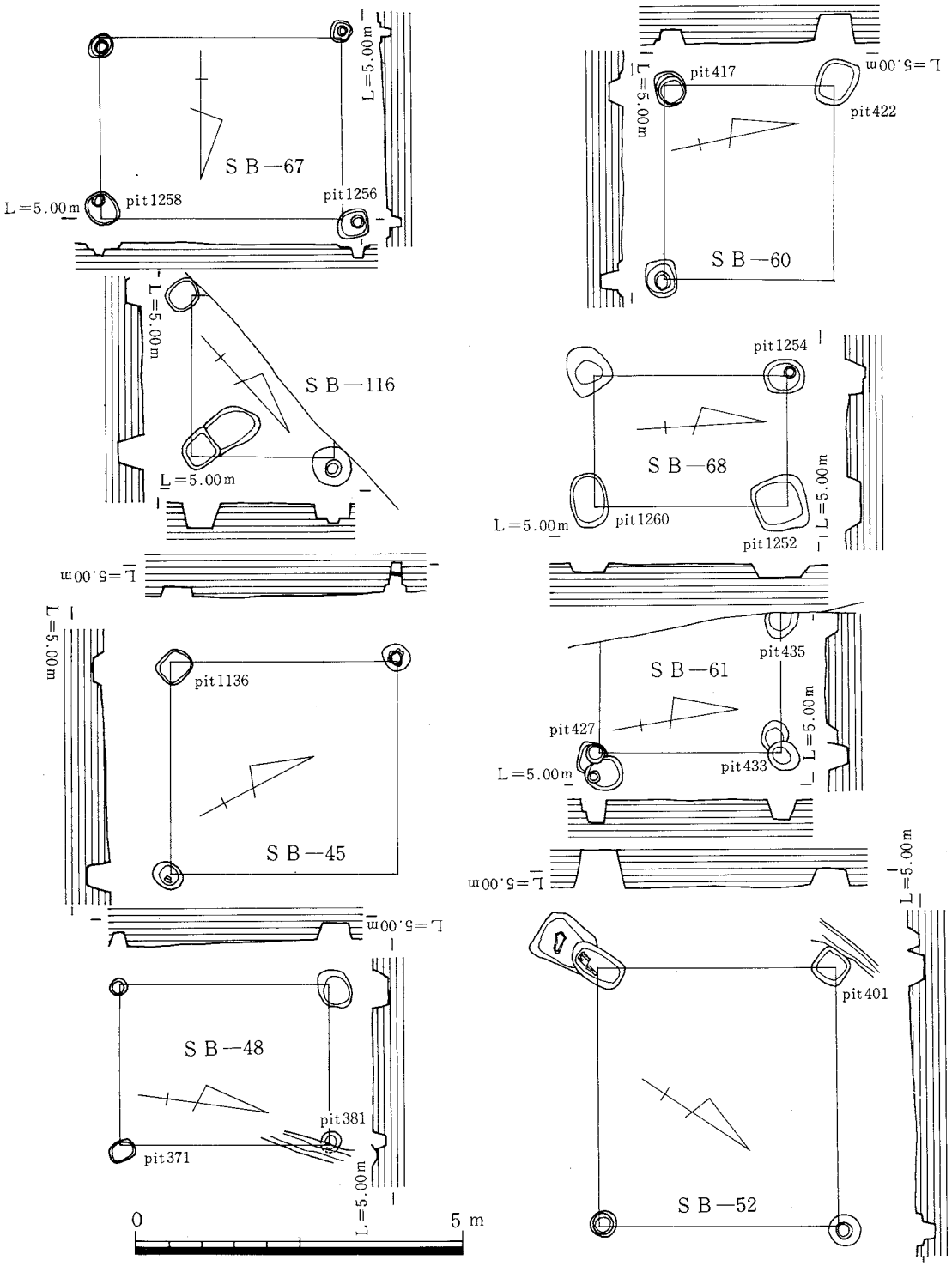
第17図　掘立柱建物実測図－10（縮尺1/100）



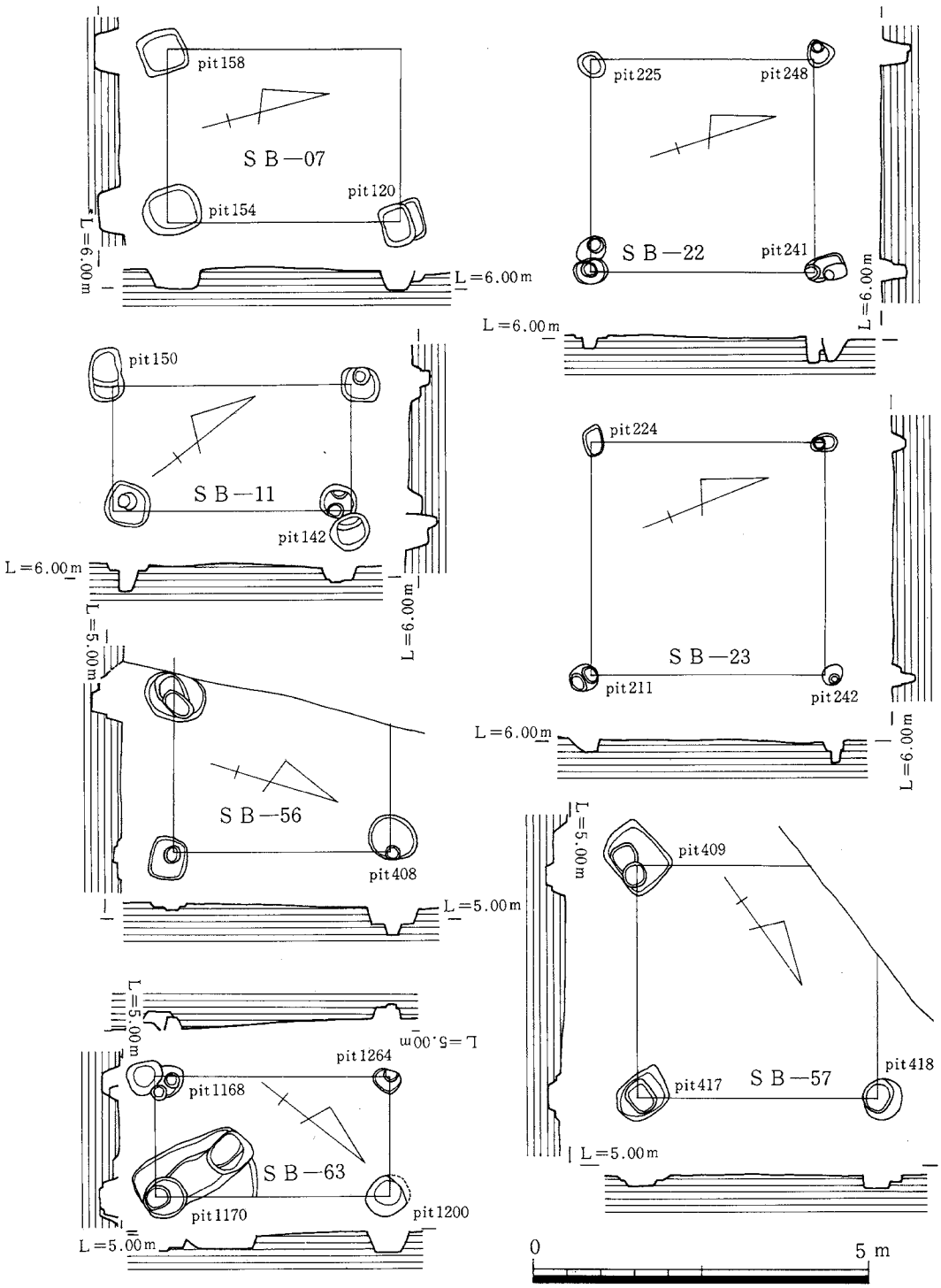
第18図　掘立柱建物実測図－11（縮尺1/100）



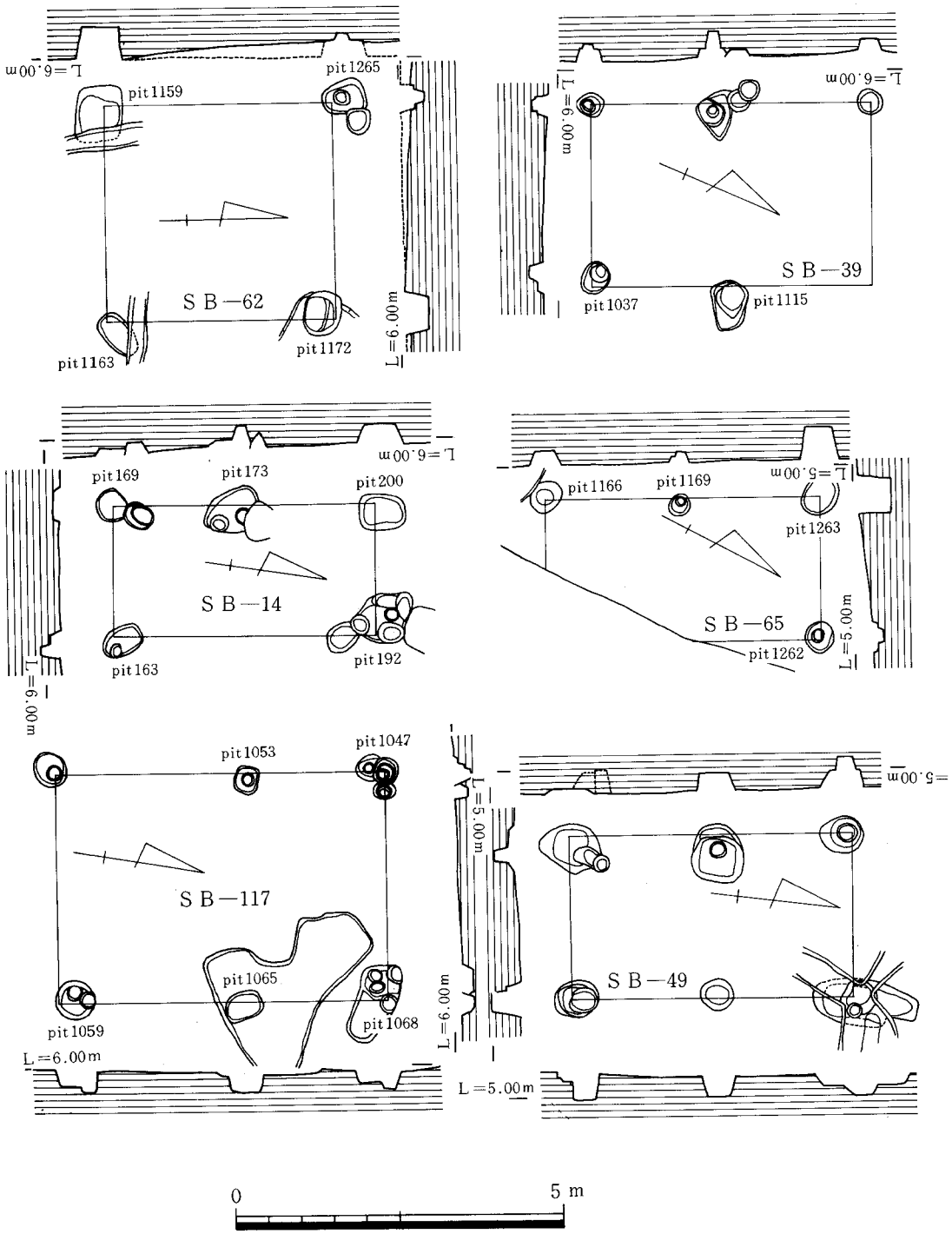
第19図　掘立柱建物実測図－12（縮尺1/100）



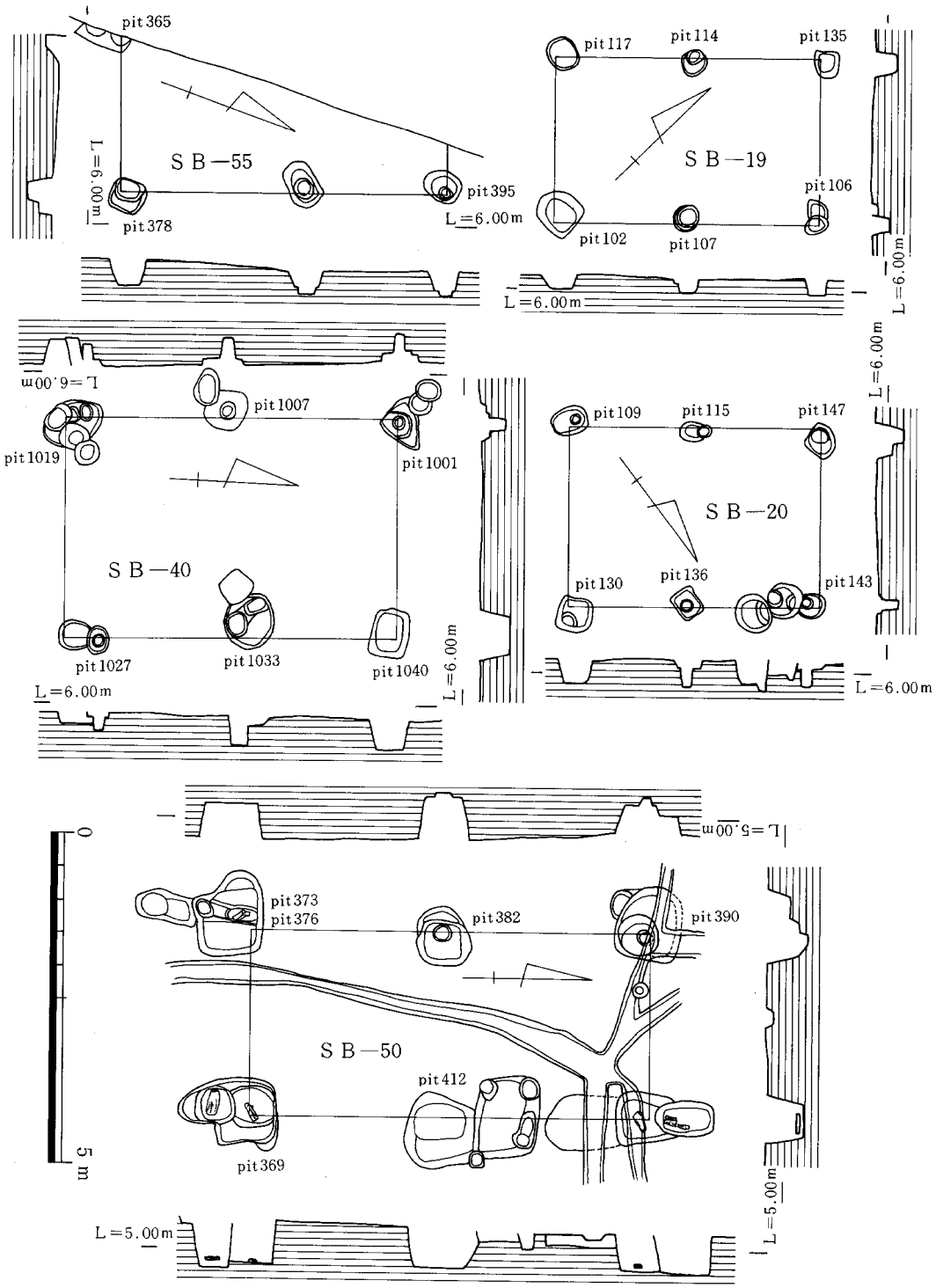
第20図　掘立柱建物実測図－13（縮尺1/100）



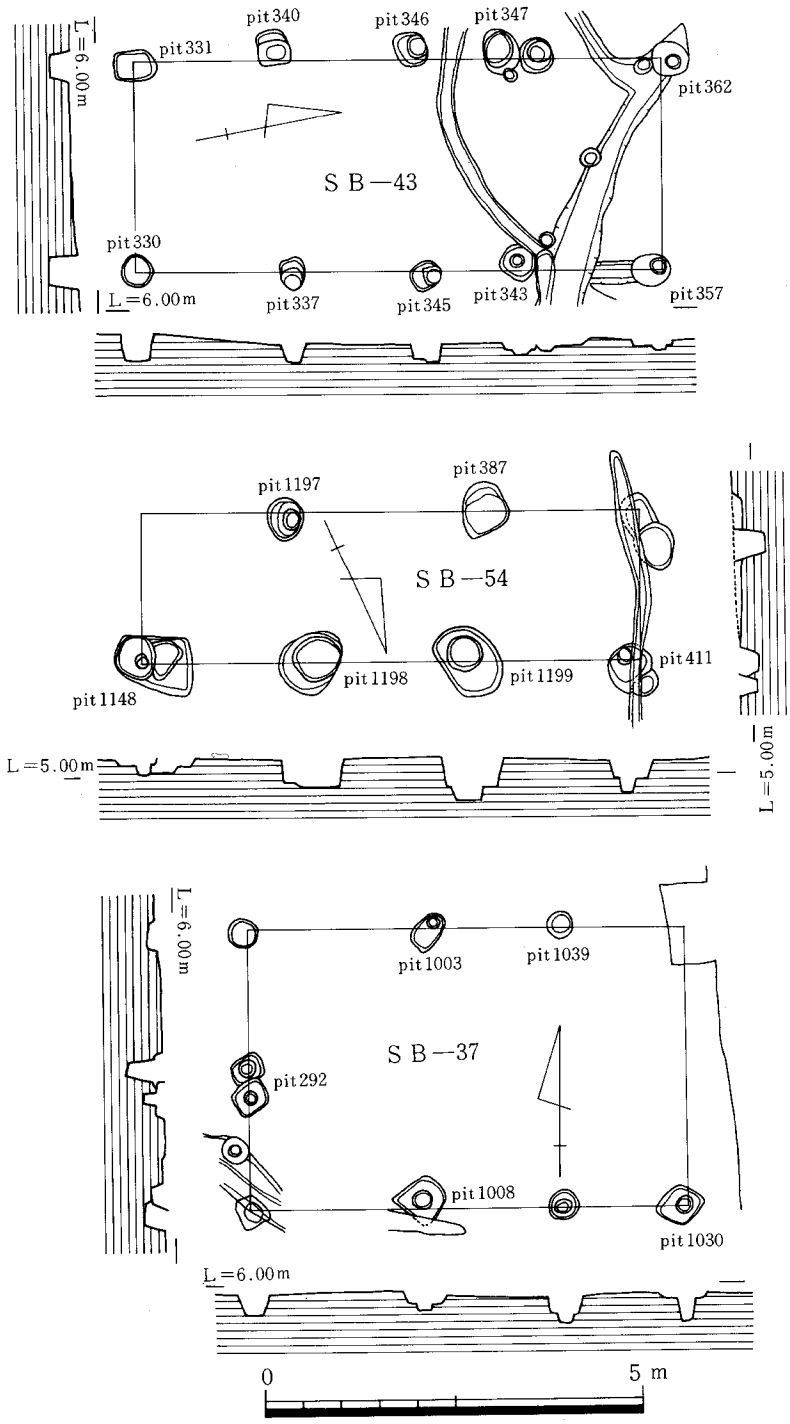
第21図　掘立柱建物実測図－14（縮尺1/100）



第22図　掘立柱建物実測図－15（縮尺1/100）



第23図　掘立柱建物実測図－16（縮尺1/100）



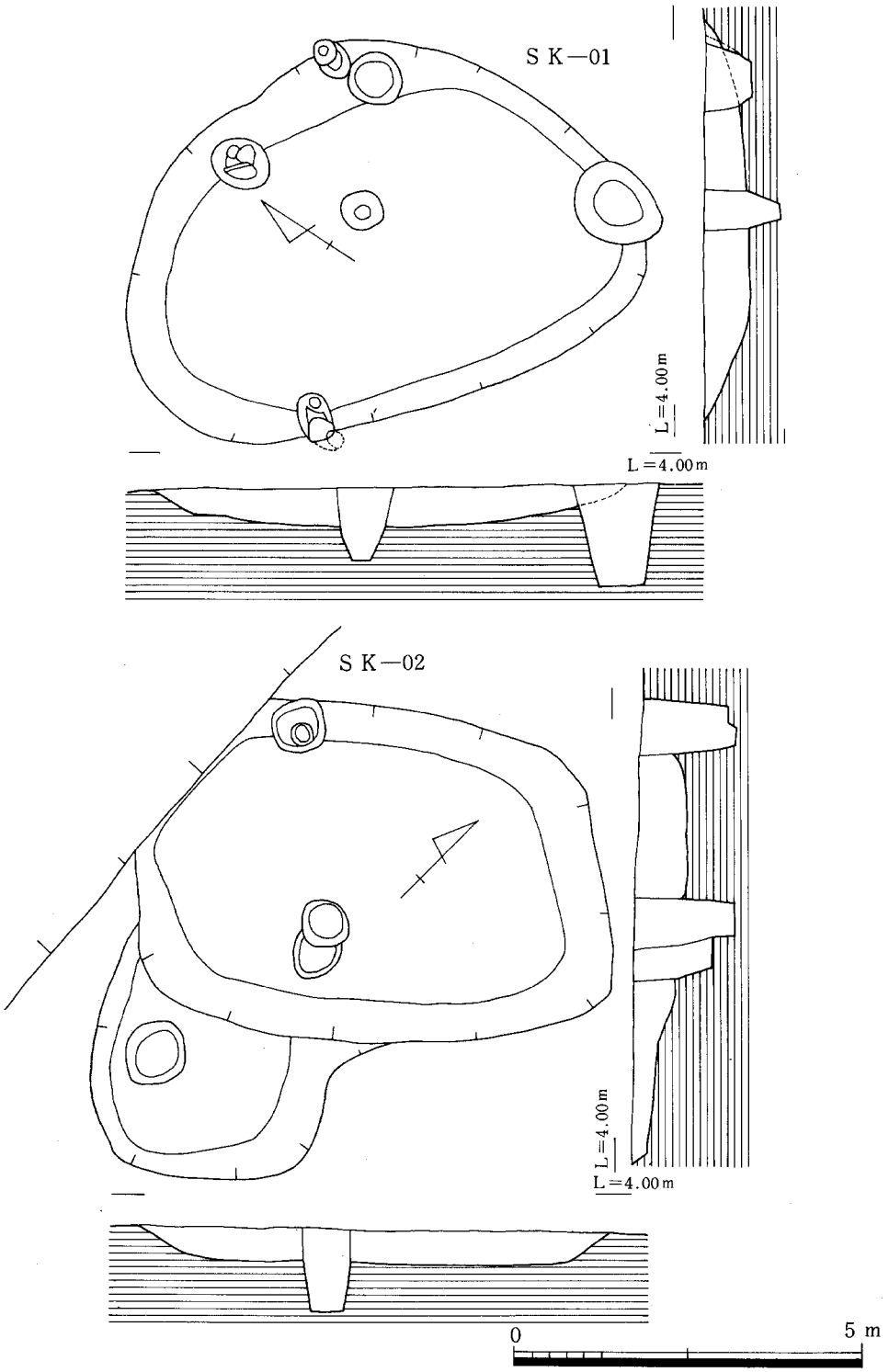
第24図　掘立柱建物実測図－17（縮尺1/100）

挿図	SB	時　期	間×間	桁行(m)	梁行(m)	方　向	Pit番号	備　考	PL
17	01	弥生中期末	1×1	2.4	2.3	E−25°30′−N	5, 10, 11, 19, 28	5より砥石 (10089)	5−1
15	02	〃	1×1	2.85	2.45	E−12°−N	23, 25, 43, 47		5−1
17	03	〃	1×1	3.5	2.2	W−10°−N	37, 38, 52, 53, 55		5−1
16	04	〃	2×1	2.3×2.2	3.0	E−12°5′−N	49, 71, 74, 75, 76, 77, 98, 99	75よりミニチュア埦(00227)	5−1
17	05	弥生中〜後	1×1	4.0	2.45	W−67°−N	1081, 1082, 1084, 1090	1084より高坏	12−2
17	06	弥生中期末	1×1	3.3	3.0	W−10°−N	93, 126, 155	93より石錘 (00042)	6−2
21	07	弥生中期	1×1	3.5	2.6	E−15°−N	120, 154, 158		6−2
19	08	弥生中〜後	3×1	2.1×2.8×3.1	2.0	E−13°30′−N	162, 164, 165, 166, 168, 199		6−2
16	09	弥生中期末	2×1	2.25×2.1	3.6	E−30°−N	124, 145, 148, 169, 176		6−2
19	10	〃	3×1	1.7×2.2×2.3	2.5	E−17°−N	150, 152, 167, 171, 174, 187, 198		6−2
21	11	弥生中期	1×1	3.5	1.85	E−37°−N	118, 142, 150, 223		6−2
17	12	弥生中〜後	1×1	3.0	2.4	E−24°−N	174, 193, 229		6−2
17	13	〃	1×1	3.2	2.5	E−19°−N	166, 190, 199		6−2
22	14	弥生後期	1×1	4.0	2.0	W−9°−N	163, 169, 173, 192, 200		6−2
17	15	弥生中期末	1×1	3.7	3.1	W−35°30′−N	162, 171, 195		6−2
	16	弥生中期	2×1	2.4×1.5	3.3	W−14°−N	185, 188, 185, 206, 218		9−2
18	17	弥生中〜後	2×1	2.6×2.6	2.8	E−42°−N	140, 181, 204, 233		9−2
18	18	〃	2×1	2.5×2.0	2.5	90°	186, 203, 207		9−2
23	19	弥生後期	2×1	2.0×2.0	2.5	E−45°−N	102, 106, 107, 112, 114, 117, 135		6−2
23	20	〃	2×1	2.0×1.8	2.7	W−53°−N	109, 115, 130, 136, 143, 147		6−2
16	21	弥生中期	3×1	2.1×1.7×2.1	2.5	W−73°−N	265, 275, 298, 1018, 1046		6−1
21	22	弥生後期	1×1	3.9	3.2	W−71°−N	225, 241, 248		8−2
21	23	〃	1×1	3.5	3.5	W−68°−N	211, 224, 242		8−2
15	24	弥生中期	1×1	3.5	2.3	E−79°−N	236, 238, 244		8−2
15	25	〃	1×1	2.8	2.7	E−81°−N	202, 235, 1056, 1073		9−2
15	26	〃	1×1	2.7	2.6	W−4°−N	254, 1044, 1054		9−1
16	27	〃	2×1	2.0×1.9	3.0	W−4°−N	1050, 1054, 1057, 1063, 1066		13−2
	28	〃	2×1	2.9×2.6	2.1	W−17°−N	1016, 1021, 1060, 1067		14−2
18	29	弥生中〜後	2×1	2.3×1.7	3.0	E−5°−N	1024, 1026, 1048, 1053, 1064, 1068-2		14−2
19	30	〃	2×1	3.0×3.5	2.5	E−29°−N	258, 263, 276, 297, 410		5−2
16	31	弥生中期	2×2	3.0×2.3	1.8×2.0	W−32°30′−N	256, 266, 267, 268, 283, 288, 302	256よりミニチュア器台	5−2
18	32	弥生中〜後	2×1	2.0×1.9	2.8	E−55°−N	273, 287, 296, 306		5−2
	33	〃	3×2	2.0×2.2×2.2	1.5×1.8	E−25°−N	255, 291, 1006		5−2
19	34	〃	2×1	2.7×2.7	3.1	E−27°−N	257, 274, 294, 1178, 1193		6−1
19	35	〃	3×1	2.5×2.4×2.0	3.3	W−44°−N	270, 295, 300, 307, 328, 1006, 1007, 1011, 1085		6−1
18	36	〃	2×1	1.9×1.9	3.3	90°	302, 311, 315, 329, 332		6−1
24	37	弥生後期	3×2	2.2×1.9×1.7	1.9×1.8	90°	292, 1003, 1008, 1030, 1039		14−2
	38	〃	2×1	2.1×1.7	1.8	W−74°−N	291, 1034, 1037, 1193		14−2
22	39	〃	2×1	2.2×2.1	2.8	W−23°−N	1037, 1115		14−2
23	40	〃	2×1	2.4×2.6	3.3	W−3°−N	1001, 1007, 1019, 1027, 1033, 1040		14−2
	41	〃	2×1	2.1×2.2	3.5	W−10°−N	1027		14−2
16	42	弥生中期	2×1	1.9×2.2	3.7	W−68°−N	1002, 1013, 1016, 1032		14−2
24	43	弥生後期	4×1	2.1×1.8 ×1.2×1.9	2.8	E−11°−N	330, 331, 337, 340, 343, 345, 346, 347, 357, 362		7−2
	44	弥生中〜後	1×1	3.6	2.7	E−15°−N	341, 348, 361		7−2
20	45	弥生後期	1×1	3.5	3.3	W−62°−N	1136		13−2
15	46	〃	1×1	2.5	2.5	E−59°−N	1126, 1127, 1139, 1142		13−2
	47	弥生中〜後	1×1	3.3	4	E−25°−N	367		8−1
20	48	鎌倉〜室町	1×1	3.2	2.5	W−7°−N	371, 381	371, 381より弥生土器, 高台付埦	8−1
22	49	弥生後期	2×1	2.2×2.1	2.5	W−8°−N	370, 377, 382, 389, 391		8−1
23	50	弥生中期	2×1	3.0×3.0	2.8	90°	369, 373, 376, 382, 390, 412		8−1
	51	弥生中期	1×1	2.5	2.2	E−5°−N	403		7−1
20	52	弥生中期	1×1	4.0	3.7	E−56°−N	401	弥生土器	7−1
	53	〃	1×1	4.4	2.3	E−10°−N	1158	出土品なし	7−1
24	54	弥生後期	3×1	2.3×2.0×2.3	2.0	W−66°−N	387, 411, 1148, 1183, 1197, 1198, 1199		7−1
23	55	〃	2×1	2.7×2.2	2.2	W−22°−N	365, 378, 395		7−1
21	56	〃	1×1	3.3	2.7	W−17°−N	408		7−1
21	57	〃	1×1	3.6	3.5	W−54°−N	409, 417, 418		
	58	〃	1×1	3.4	2.7	W−40°−N	418		
17	59	弥生中〜後	1×1	3.1	2.7	W−54°−N	413, 420, 421		
20	60	弥生後期	1×1	3.0	2.6	W−78°−N	417, 422		
20	61	〃	1×1	2.8	2.0	E−10°−N	433, 427		

Tab. 1　掘立柱建物計測表－1

挿図	SB	時　期	間×間	桁行(m)	梁行(m)	方　向	Pit番号	備　考	PL
22	62	弥生後期	1×1	3.5	3.3	90°	1159, 1163, 1172, 1265		14−1
21	63	〃	1×1	3.5	1.8	W−38°−N	1168, 1170, 1200, 1264	1200出土品なし	14−1
18	64	弥生中～後	1×1	1.8×1.9	3.4	E−35°−N	1161, 1172, 1174		14−1
22	65	弥生後期	2×1	2.0×2.2	2.2	W−28°−N	1166, 1169, 1262, 1263	1166, 1169, 1262より弥生土器 1263よりメンコ	14−1
	66	弥生	1×1	3.5	3.0	90°	1266, 1267		
20	67	弥生後期	1×1	3.7	2.8	90°	1256, 1258		
20	68	〃	1×1	3.0	2.0	E−4°−N	1252, 1254, 1260		
15	69	弥生中期	1×1	3.7	3.0	E−28°−N	447, 454		
	70	鎌倉	2×1	2.0×1.2	2.2	E−40°−N			7−2
10	71	〃	2×1	2.5×2.3	2.7	E−67°−N	2001, 2003	2001より土師器，青磁 2003より土師器，青磁，糸切り	34−1
10	72	〃	2×1	2.5×2.3	2.7	W−37°30′−N			34−1
11	73	鎌倉～室町	2×2	2.0×2.5	1.9×1.6	E−4°−N	2004, 2005, 2050, 2051	2004, 2005, 2051より糸切り 2005より小皿，糸切り (00221)	34−1
8	74	〃	1×1	3.8	2.5	W−16°−N	2006, 2009	2006より糸切り 2009より小皿，糸切り (00222)	34−1
10	75	〃	2×1	2.3×2.5	3.0	E−6°5′−N	2019, 2020	弥生土器	34−1
11	76	〃	2×2	2.5×2.1	2.5×2.1	E−58°30′−N	2003, 2008, 2018	2003より土師器，青磁，糸切り 2008より盤(口縁) (00059)，小皿の糸切り，2018より糸切り	34−1
14	77	〃	2×2	2.0×2.3	1.9×1.9	W−39°−N	2002, 2010, 2012, 2017, 2060, 2061, 2062	2002より鉢(口縁) (00219) 2012, 2017より弥生土器，土錘，青磁，土師器　2010, 2060, 2061, 2062出土品なし	34−1
11	78	〃	2×2	2.8×2.5	1.9×1.9	W−18°−N	2019, 2020, 2061	2019, 2020より弥生土器 2061出土品なし	34−1
9	79	〃	2×1	2.3×1.7	2.6	W−80°30′−N			34−1
	80	弥生後期	2×2	2.1×2.2	2.5×1.8	W−35°−N	2061	出土品なし	34−1
12	81	鎌倉～室町	3×2	2.2×1.4×1.5	2.4×1.6	E−76°−N			34−1
13	82	〃	3×2	1.9×2.2×2.2	2.8×3.0	E−59°−N	2062	出土品なし	34−1
	83	〃	1×1	2.6	2.0	E−25°−N			34−1
	84	〃	2×1	2.0×1.3	3.1	E−20°−N	2025	土師器	34−1
	85	〃	3×2	1.2×1.8×1.8	2.6×0.9	E−75°−N			34−1
8	86	〃	1×1	3.6	3.4	E−20°−N	2022	土師器	34−1
9	87	室町	2×1	2.0×2.5	3.4	E−82°30′−N	2058	脚付皿 (00226)	34−1
12	88	〃	2×2	2.8×3.0	2.4×2.2	W−34°30′−N	2015, 2026, 2029	須恵器，土師器	34−1
8	89	〃	1×1	3.4	3.0	W−3°−N	2024, 2028	土師器，糸切り	34−1
9	90	〃	2×1	2.6×2.9	2.0	W−95°−N	2030	土師器，糸切り	34−1
13	91	〃	3×2	2.1×2.3×2.1	2.6×2.6	W−55°−N	2027	土師器，糸切り	34−1
9	92	〃	2×1	3.1×2.4	3.3	E−46°−N	2034	土師器	34−1
	93	〃	3×1	1.8×1.4×2.7	3.2	E−35°−N			34−1
14	94	〃	3×2	2.3×2.2×2.1	4.4	W−35°30′−N	2032, 2034, 2035, 2053	土師器	34−1
12	95	鎌倉～室町	2×2	2.8×1.5	1.7×2.5	E−50°−N	2063	出土品なし	34−1
12	96	〃	2×2	2.2×1.8	2.0×1.8	E−81°−N			34−1
8	97	〃	1×1	3.5	2.5	W−42°−N			34−1
	98	〃	2×1	1.9×1.6	3	E−10°−N			34−1
11	99	〃	2×2	2.4×3.3	2.0×2.1	W−22°30′−N			34−1
13	100	室町	3×2	2.6×2.4×2.7	2.6×2.2	E−51°30′−N	2033, 1086	弥生土器，土師器，糸切り	34−1
9	101	鎌倉～室町	2×1	2.4×2.1	2.8	E−58°−N			34−1
8	102	〃	1×1	3.0	3.0	W−58°−N			34−2
10	103	〃	2×1	1.8×2.2	3.0	E−49°−N			34−2
8	104	〃	1×1	3.2	2.5	W−29°−N	2041	青磁	34−2
	105	室町	1×1	3.1	2.8	E−88°−N	2043, 2044	土師器	34−2
10	106	鎌倉～室町	2×1	2.8×3.0	3.0	W−55°−N			34−2
	107	〃	1×1	2.6	2.4	E−75°−N			34−2
12	108	〃	2×2	1.7×2.7	2.4×1.9	W−38°−N			34−2
	109	〃	2×1	1.5×1.5	3.0	W−45°−N			34−2
12	110	〃	2×2	1.9×2.4	1.6×1.5	W−31°−N			34−2
	111	〃	2×1	2.5×2.5	3.5	W−68°−N			34−2
	112	〃	1×1	2.7	2.3	E−75°−N			34−2
8	113	〃	1×1	3.4	2.6	W−34°−N			34−2
10	114	〃	2×1	1.9×1.8	2.6	E−55°30′−N			34−2
10	115	〃	2×1	3.3×3.2	3.3	E−7°30′−N	2041, 2063	2041より青磁 2063より出土品なし	34−1
20	116	鎌倉～室町	1×1	2.5	2.3	E−43°−N			
22	117	〃	2×1	2.8×2.2	3.5	W−10°−N	1047, 1048, 1049, 1053, 1059-1-2, 1086, 1065, 1068-1-2-3	1086より弥生土器，土師器，糸切り	14−2
18	118	〃	2×1	2.6×1.9	2.5×1.7	W−88°−N	1126, 1141, 1196, 1197		13−2

Tab. 2　掘立柱建物計測表－2



第25図　SK遺構実測図（縮尺1/40）

2)井戸・土壙【SK】・不整形土壙【SX】・Pit

井戸【SE－01】(第26図、38図、98図、PL.43、10、11)

南台地の北側、SD－100に近接する位置から検出された。調査開始時には形状が一部、袋状を呈することから貯蔵穴と考え掘り始めたが、湧水点が高く水量が豊富であること等から、井戸とした。平面上の形態は二段形成で、隅丸長方形を呈する。上面は長軸2.0m、短軸1.5mで深さ0.2mの浅い掘り込みを呈する。下面は長軸1.5m、短軸1.0m、深さ1.0mの二段掘りの構造を呈する。深さは1.2mしかないが、これは遺構面自体が0.5m～0.7m程削平を受けていることから本来は約2m程と考えられる。

出土遺物は丹塗りの大型壺形土器の完形品(第98図350、351)鉢形土器、甕形土器、器台、石剣(第38図68)等である。井戸の使用時期として出土遺物から弥生時代中期初頭の甕形土器がある。新しい時期を示す土器として弥生時代後期初頭の遺物があり、この時期までの使用期間と考えられる。

土壙【SK－01～09】(第25、26図)

SK－01～07は北台地から、08、09は南台地から検出した。図示したのは01～06である。01は掘立柱建物の柱穴により切られているが、現状では浅い皿状を呈する。この北大地も削平が著しく0.5～0.7m程度は削平されている。平面の形状は楕円形を呈し、長軸3.0m、短軸2.1mを測る。出土遺物から鎌倉時代と考えられる。

02は掘立柱建物に切られ、別な柱穴を切る。平面形状は、隅丸長方形を呈し、長軸2.7m、短軸2.0mを測る。西側は削平を受けている。この削平は北側に段落ちする部分にあたり、この遺構を切ることにより02より新しい段落ちであることが判明した。02の断面は01と同じ皿状を呈し、深さ0.2mを測る。出土遺物から室町時代と考えられる。

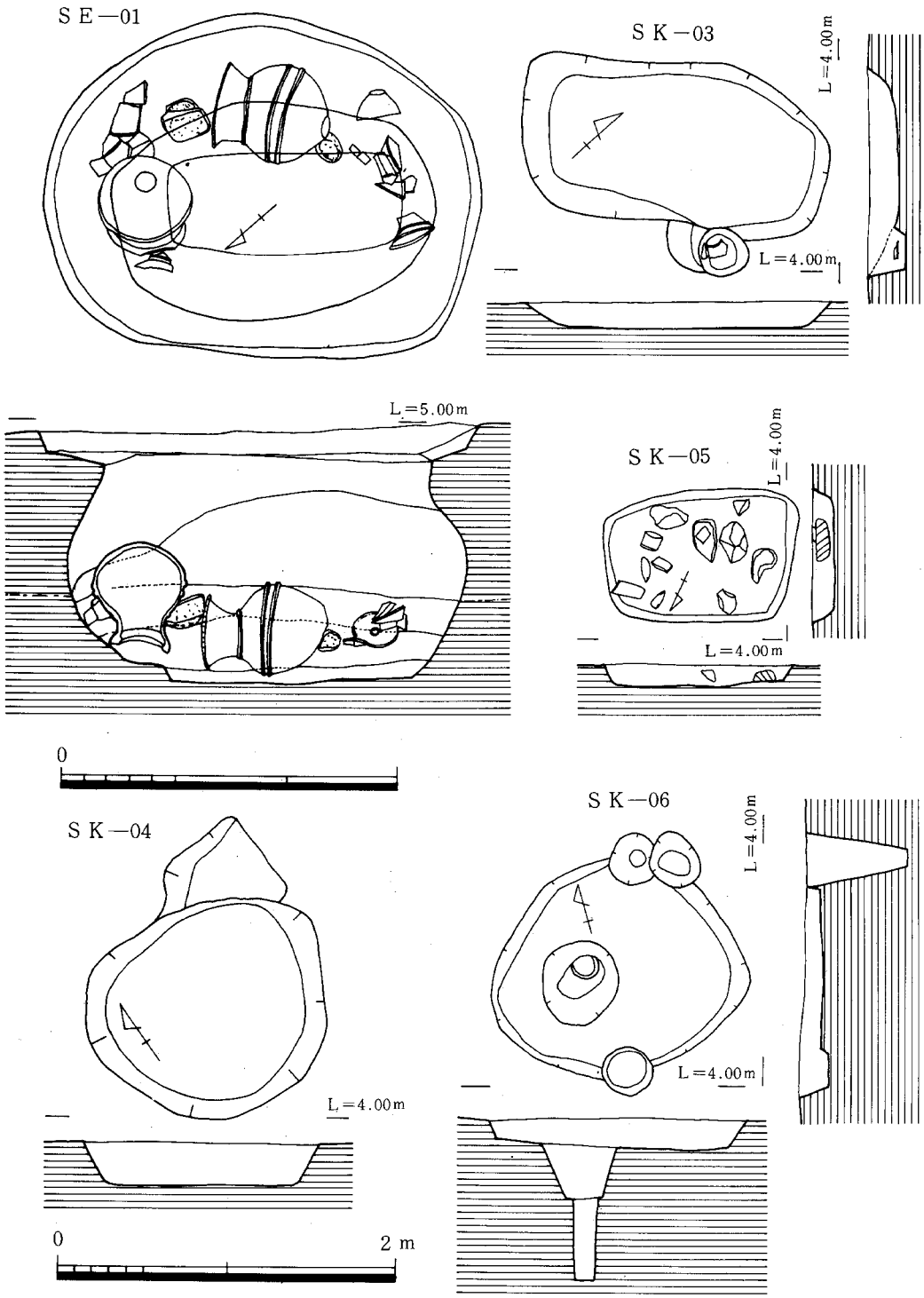
03は平面形隅丸長方形を呈し、長軸1.85m、短軸0.95m、深さ0.15mと浅い皿状を呈する。土壙墓とも考えられる形状を呈する。出土遺物は砥石と細片の白磁から室町時代の遺構である。

04は平面形状が1.4mの円形を呈し、深さ0.25mと浅い。

05は平面形状が長方形を呈し、長軸1.1m、短軸0.8m、深さ0.15mである。0.35m程の焼けた石が11個ほど配置されている。出土遺物は殆ど出土せずその時期、性格は不明。

06は平面形状が1.5mの円形を呈し、掘立柱建物の柱穴により切られている。調査時には、柱穴の堀方とも考えられたが、覆土が異なることから土壙とした。出土遺物から鎌倉時代～室町時代の土壙である。

07は図示しなかったが、SD－036から切られ平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸は2.8m、短軸は1.2m、深さ0.3mの皿状を呈する。出土遺物から鎌倉時代～室町時代にかけての土壙である。



第26図　SE－01・SK遺構実測図(縮尺1/30、1/40)

08と09は図示しなかったが南台地にある。08は南側は調査区外で、その全容を知ることは出来なかった。平面形状は長方形を呈し、長軸1.8m＋£、短軸1.2m、深さ0.3mでSD－01に切られている。出土遺物は弥生時代中期末の遺物しか出土していないことからこの時期の土壙と考えられる。

09は南台地中央部より南に下ったところに位置する。平面形状は長方形を呈し、長軸5.2m、短軸3.3m、深さ0.25mを測り、床面は平坦である。調査時には竪穴住居址として登録したが、調査を進める中で柱穴がまったく検出できず、周辺の柱穴も捉えることが出来なかったため一応土壙として記載した。しかし、近年、古墳時代の住居址からもこの手の遺構が検出され土器を多量に出土している例(野方中原遺跡、野方柳原台遺跡、飯盛遺跡等があり住居址として考えている)が増加している。出土遺物は中期末から後期にかけてのもので時期もこの時期としてよい。竪穴住居址として考えても良いのかも知れない。

不整形土壙(SX)

不整形土壙とした遺構は、形状が不整形であることと、大型の柱穴とも考えられないものを登録した。図示は紙面の都合上省略した。

南台地にSX－01から09がある。中央台地にSX－10から21までがある。この他にも不整形な堀込みはあるが、出土遺物がないことから時期の確定が出来ないため登録番号は付していない。

01は二次調査時に検出した。東側が未調査のため詳細な形状は不明であるが、おおよそ不整形な楕円形を呈する。SD－33や柱穴によって切られている。長軸2.0m＋£、短軸1.5m、深さ0.3mを測る。出土遺物から弥生時代後期の遺構と考えられる。

02はSD－13の東側に位置する。調査時は掘立柱建物の柱穴と考えていたが、形状から不整形土壙とした。長軸1.2m、短軸0.9m、深さ0.5mを測る。出土遺物から弥生時代中期の遺構である。

03はSD－21の西側に位置し、調査区外に一部入る。形状は不明。出土遺物から弥生時代中期の遺構都考えられる。

04から06はSD－28、50、100に囲まれた部分に位置する。形状は不整形の長方形で、浅い皿状を呈する。

07から09はSD－50の中に位置する。07、09はSD－50によって切られている。形状は不整形の長方形を呈する。出土遺物から弥生時代中期の遺構と考えられる。

10から21は中央台地に位置する。その殆どが意味不明の遺構であるが、遺物が出土しているところから登録している。時期は弥生時代中期から後期初頭の土器が出土している。

Pit.

遺物が出土したPit.を登録した。掘立柱建物、竪穴住居址の柱穴と考えられるが明確には出来なかった。Tab.3、4に一覧表を付した。

第27図　SD遺構実測図（縮尺1/400，1/800）

3)溝

溝状遺構は大小含めて47条検出した。その内訳は南台地から36条、中央台地から1条、北台地から10条である。時期は弥生時代中期から室町時代と幅がある。各溝について詳細に述べる。

(1) SD－100

台地の中央を切る形で検出した。幅20mの調査区であるため、その方向がどのように流れていくのか不明である。調査開始時は幅広い旧河川ないしは台地落ちと考えていた。試掘調査の結果からも同様の報告を受けていたが、調査を継続していくうちに土層断面や土器の包含層、木器の出土等から溝である確証を得たため溝の登録を行った。

包含層中には弥生時代後期の土器、青磁、白磁等の土器が出土した。土層(付図－2)のⅣ層がこれに当たる。Ⅴ層は間層で暗褐色砂質土である。Ⅵ層は黒色土(黒褐色粘質土)で遺物は弥生時代後期の物だけしか出土していない。Ⅶ層は暗黒褐色砂層で一部弥生時代中期の土器を包含する。Ⅷ層は荒い砂(茶褐色砂)で、中期の遺構が包含されている。この荒砂から考えて水の流れが急激であったことが考えられる。Ⅸ層は(砂茶褐色砂)と泥炭層(黒褐色粘質土)との互層で、ここから中期の遺物とともに多量の木器が出土した。

出土遺物の中で銅鐸型銅製品がこの溝から出土した。出土地点は第27図に図示している。出土状態は横に倒れた状況で、紐は北東に向いて出土した(PL.16－1、2、17－1参照)。土層はⅥ層とⅦ層の間に出土したが、銅鐸の中に入り込んだ土はⅦ層の砂である。このことから銅鐸は破棄された時点の現位置を保っているとは考えられず上流から流れて来た可能性が高い。それは銅鐸の中に入っていた土が砂であり、Ⅵ層の黒褐色粘質土はまったく混入していないことでⅥ層が堆積する前にすでに銅鐸は破棄されていたと考えられる。

SD－100の上流は東南方向である。しかし、この方面には河川はない。ヤツデ状に広がる台地であることから東側にある湿地帯を結ぶ流路の可能性が高い。しかしこれは今後の調査例をまって判断すべきものである。このことは西側の流れる方向も同様である。しかし台地を分断して流れるこのSD－100、中央部の台地はどの様になるのか非常に重要なことである。推定を許されれば恐らくこの部分がヤツデ状に窪む湿地帯で、南台地と北台地とは連続しないものではないかと考えている。すぐ東に近接する調査地点でも東南方向へ続く様相を示しており、これは東に近接する今宿小学校内遺跡(今宿五郎江遺跡Ⅰ)の所在する台地と南台地を二分する様相を示すものである。

SD－100は台地の縁辺を沿いながら北西から上流に向かう。台地の南側では入り江状に入り込む。そこからさらに東南の台地沿いに沿っていると思われる。南台地との比高差は1.5mあり、これがSD－50付近では0.9mである。中央台地との比高差はあまりなく0.55mである。確認できる範囲で、長さ59m、最大幅13m、最小幅6mで、入り江状部分の長さ19m、幅9mを測る。

第28図　SD－100遺物出土状態（縮尺1/80）

SD－100はSD－50によってきられる。中央部が深く二段になるが深い部分が南台地の入り江部分まで入り込んでいる。一段目は東に伸びる様相を示す。北西側は一段目が曲線を描きながら下流へ伸びるが、二段目は、深さを増しながら北西方向に進む様相を呈する。中央台地は上面に僅かながら砂を含む。水量の多い時には中央台地まで砂を運んだものと思われる。東側中央部には、一段高い部分があり、一段目の段落ちがここで二分される。この形状から考えて中央部の高い部分が東に延び溝を二分すると考えても差し支えない。昭和62年に近接する東側を発掘調査が行われた。調査者によると『調査の結果、二分する北側の溝が幅３m～４m、深さ0.7mで東に続き、今宿小学校内まで続く様相を示している。この溝は二層に分けられ、上層から弥生時代後期初頭の土器が全面に包含されている。下層からは中期の土器と共に木器が出土した。また、この周辺一体は湧水点が高く、水の量が多く木器や自然遺物がよく残っていた。』これはSD－100と同じ様相を示している。

第28図は遺物出土である。土器、石器、木器が多量に出土しているがこの図はIX層上面のもので下層からは多量の遺物が出土した。特に土器は祭祀用土器と考えられている丹塗り土器が主体で、壺形土器（第65図252、352、362等）特に袋状口縁土器（第73図111、230等）や甕形土器（第55図60、67、386等）、高坏（第82図166、178、181等）、蓋付壺形土器（第85図）等で時期は、弥生時代中期中頃のものであった。最下層には中期前半の土器も含まれている。

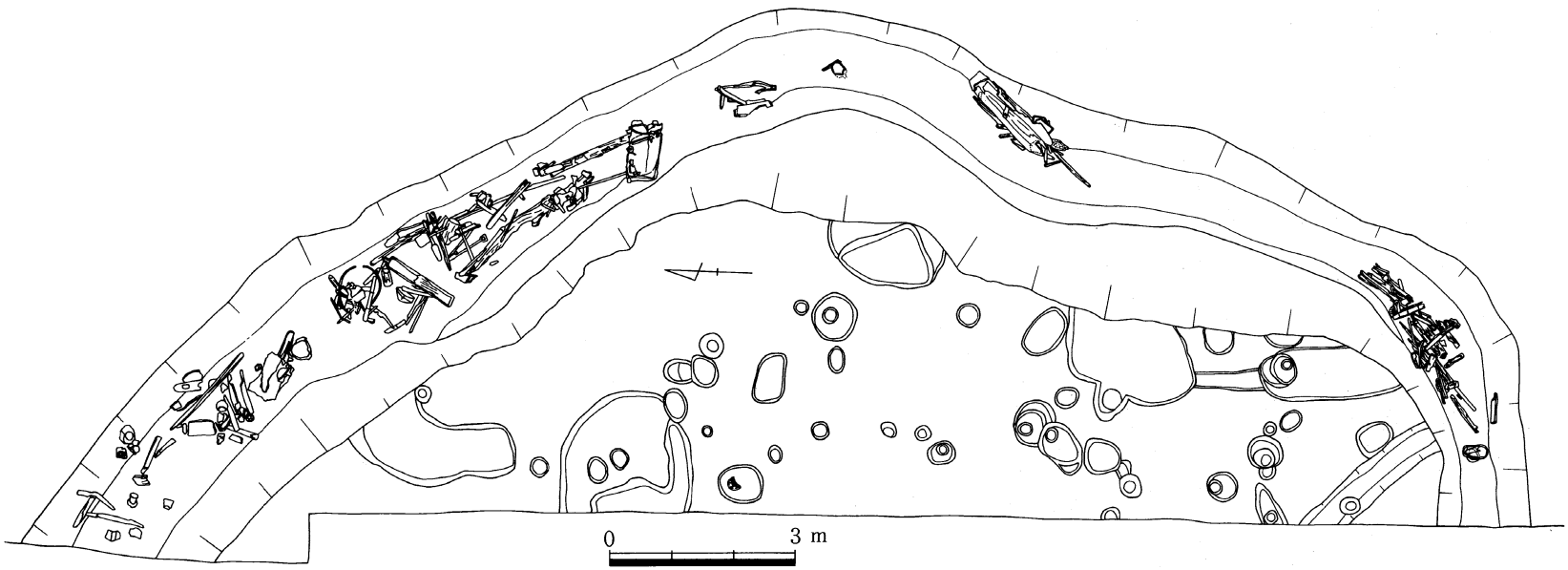
石器も多量に出土している。その多くは石錘（第43図から47図45、48、56等）、紡錘車（第48図）、太型蛤刃石斧（第40図、41図）、砥石、磨石（第49図から54図）等である。特殊遺物として石剣、石戈等も出土した。

木器も多量に出土した。その殆どがIX層からの出土である。鋤類、鍬類、フォーク状木器類等の農耕具（第104図から107図）、石斧柄、たも網、竹籠等の狩猟具、漁撈具（第110から111図、125図）と生活工具、きぬた、織物の部品、木椀、しゃもじ等（第108図、109図、113図、115図）や建築材等が出土している。特記すべきものとして模型の舟（第111図）が出土している。

竹籠は南の入り江状の溜り部分から舟の部材か建築部材と考えられる（第123図224）の上面から出土した。現存する部分では、その用途は明確に判断出来ないが、恐らく三角形を呈する籠状のものと考えられる。

(2)　SD－50

SD－50はSD－100の中央部東側に位置し、SD－100を切る形で検出した。約1/5程度しか検出できなかった。SD－50とSD－100との切り合い関係はSD－100が土層図（第29図、付図－2）の第VI層にみられる如く後期初頭には、殆ど埋まった状態で、そこにSD－50の溝が形成されている。形の上ではSD－100を切った形となる。基盤層第IX層は同じであるが、上層出土遺物は溝上端部がVI層と同一になることから東側面は一段低い形状を呈する。西側は調査対象外のため詳



第29図　SD－50遺物出土状態（縮尺1/120）

細は不明であるが、北側はSD－100に沿って廻るものと考えられる。恐らく環濠と思われ、楕円形を呈し、その規模は35m×50m程度であろう。溝の幅は2.5m、深さは1.5mで溝の底面直上に多量の土器、木器が出土した。

土器は第96図、97図に図示したもの以外にもコンテナ50箱程出土した。図示したものは弥生時代中期から後期末までの土器であるが、主体をなす第Ⅶ層出土の土器は後期初頭の土器で、この溝の時期を決定できる資料である。中期土器、後期末土器Ⅳ層からの出土である。

木器は図示した約1/4がSD－50からの出土である。Tab.－22、23に一覧表を掲載した。

生活用具で第108－35、36の竪杵、きぬたとして45、49がある。また椀も5点(113図76～80)程出土し、杓子もある。織物具の部材として112図－236、116図－220もある。

農耕具として103図－2、3、7の平鍬、二又鍬として9、15、四又鍬が10、平鋤の28、着柄式の二又鋤81、209があり、杷31も出土している。

狩猟具として手網(たも)が図示(111図－60～62)した以外にも多量に出土している。舟材として226、235や浮子状木製品54、56もある。

建築部材は角材・板材等多量に出土している。118図－228の梯子も出土した。

(3) その他の溝

SD－200は中央台地の北側、北台地の段落ち部分に形成された溝である。東南から北西に流れ、幅3.5m、深さ0.7mで二段形成となる。この溝からは瓦、土師器、須恵器、青磁、白磁が出土している。ここで注目すべき遺物は瓦である。格子目文の平瓦、丸瓦で、鎌倉時代から室町時代にかけてこの付近に瓦を葺いた建物が存在していたことを物語る遺物である。

SD－01からSD－45

SD－01からSD－45は調査開始時は使用目的が明らかにできず溝自体つながるものと終了するものとがある。遺跡全体が約0.5m～0.7m程削平を受けているところから溝自体は連続していた可能性が高い。区別上名称を付したが連続する可能性のものは後で記載する。

SD－01　南側端に検出された。SX－08を切る状態で、S字状を呈し、南側・西側の調査区に延びる。現存する長さ12m、幅0.3m、深さ0.3mを測る。出土遺物は弥生時代後期の遺物が出土している。

SD－02、03、04　02と04は途中で切れるが一本の溝と考えられる。02は中間部を新しい方形の竪穴によって切られているが、さらに南につづく様相を示す。SD－03は02から枝分かれをし、東に延びるが、現代の攪乱によって破壊されている。SD－04は02の延長上にあり、西に大きくカーブする02と接続する形をとる。04はさらに西に延びる様相を示す。02、04の形状はS字状を呈するところは01の形状と類似している。長さは02、04の計が19m、幅は両方とも0.3m、深さは0.3mを測る。出土遺物は弥生時代中期から後期にかけての遺物が出土し、覆土は弥生時代

後期と同じ暗茶褐色粘質土である。

SD－05　SD－05は東西に走る溝であるが、覆土から新しい時期の遺構で、溝底面には竹・小枝等による暗渠施設が配されていた。現代まで続く水路からの吸水・排水用暗渠である。ただし明らかに現代の水田区画の溝とは異なりを示すものである。古代の条里制に伴う溝とも考えたが、水路はその可能性を残すとしてもSD－05は現代よりそう遠くない時代の産物であろう。覆土は灰褐色粘土で、現存する長さは15m、幅0.3m、深さ0.5mを測る。出土遺物はない。

SD－06　SD－09の西側に位置し、弧状を呈する。両側は削平され消滅しているが、恐らく延びていたものと考えられる。北側はSD－19に接続されるものと考えられる。現存する長さは、8.5m、幅0.3m、深さ3mを測る。覆土は暗褐色粘質土で、出土遺物は中期末から後期の土器が出土した。

SD－07　SD－06の西側5.5mに位置し、06と同じ弧状を呈する。西側は調査区外に延びるが、北側は消滅している。SD－20に接続するものかもしれない。覆土、出土遺物とも06と同じ様相を示しており、同時期と考えられる。

SD－08　SD－06の東側に位置し、東側調査区外にも延びる。南東側から西に延びる溝は、水路によって切られているが水路西側から延び始め、SK－09の北側から北方向へ向い約５mで切れる。北東側に再度出現し、北東に向かって延びる。東側は調査区対象外のため明確に出来ないがほぼ一周するものと考えられる。現存する長さは20m、幅0.3m～0.4m、深さ0.3mを測る。現存する溝で囲まれた面積は65㎡である。覆土、出土遺物は06と同様である。

SD－12　SD－10、11、13の主流をなす溝で08に接続する可能性もある。10、13、19、20が流れ込む。溝自体はSD－08、13、15、20と同一のもので一区画をなすもので、東側が明確にできないが、現存する溝の長さ(12、13、15)は22.5m、幅0.3m～0.6m、深さ0.3m～0.5mである。溝に囲まれた面積は99㎡である。覆土は暗茶褐色粘質土で、出土遺物は弥生中期末から後期の遺物が出土した。

SD－10　SD－15、19、24と同一溝で、ほぼ一周する。形状は隅丸方形を呈し、12、32に切られる。溝に囲まれた面積は121㎡を測る。溝の長さ38m、幅0.3m～0.4m、深さ0.3mを測る。覆土は暗褐色粘質土で、出土遺物は中期末が主体を占める。

SD－11　SD－10の西側に位置し、SD－12によって切られる。またSB－19の柱穴によっても切られている。北側は消滅し、その方向は不明である。覆土は暗黒褐色粘質土で、出土遺物は中期の遺物が出土している。現存する長さは2.7m、幅0.3m、深さ0.2mである。

SD－14　SD－10、13に直行する方向で10、13とは接続していないが、SD－12、13、15と10、19、24との関連からその可能性はある。SB－48の柱穴に切られている。覆土から中期の遺物が出土した。

SD－15　SD－12、13と一連の溝である。東側は水路によって切られ、調査区外に延び、24と

の接続で13、16と合流する。覆土は暗褐色粘質土で、中期末から後期にかけての遺物が出土している。溝の長さ8.5m、幅0.3m、深さ0.3mを測る。

SD－24　SD－15とほぼ並行し、13、16との合流地点まで並行する。SD－15との間を考えると幅1.2mで広い土手を彷彿させる。長さ8m、幅0.3～04m、深さ0.3mで、覆土、出土遺物は15と同じである。

SD－16　SD－15から西に延びた24と合流する地点から北側にずれ約6m延びる。24からも途中から北側に延びる溝があり、16に合流する。16には中間から南に約2.4m延びる小溝が付属する。覆土、出土遺物は15、24と同じ様相を示し、幅0.3m、深さ0.3mを測る。

SD－18　SD－13の北側延長上に位置する。溝は連続せず、各溝の合流地点より北約1mから始まり約5.5m続き消滅している。しかし両側とも延びるものと考えられる。幅0.3m、深さ0.3mで覆土、出土遺物は13と同じである。

SD－19　SD－10、24と同じ溝内である。覆土、出土遺物は10、24と同じ様相を示している。19の西側に合流する22がある。22は19と合流し、24との接合部分で北に弧を描きながら西側へ続き、約4mのところで消滅する。長さは12m、幅0.3m、深さ0.3mを測る。出土遺物、覆土は19と同じ様相を示す。

SD－20　SD－09、13の合流地点から南西に延び、19と合流しさらに南西へ続き約1.5mで直角に北に曲がり、19と合流し、さらに直角に西の方へ続く。13、19と同一溝である。

SD－21　西から延び、20と並行し、19と合流して弧を描きながら北に向かって消滅する。

SD－33　東側に位置するが24と並行に西側に延び、水路を挟んで北に進み34と合流する。34は33と9m離れた北側から直線的に西に延びる。この33と34で一区画形成されるが、東側が調査区外のため、その規模は不明である。覆土は両方とも暗黒褐色粘質土で、出土遺物は弥生時代中期の範疇に始まる。

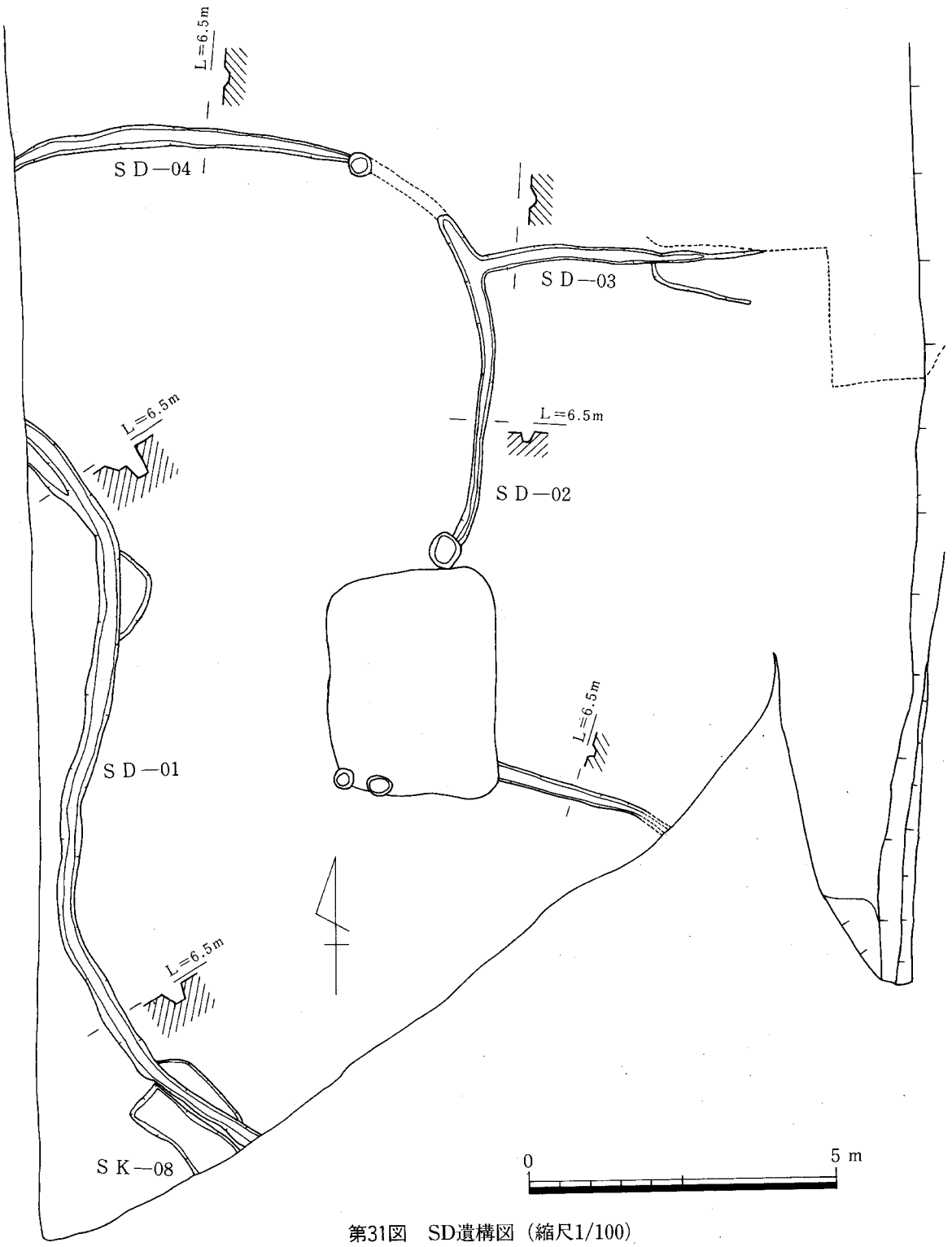
SD－28　SD－100によって切られる形状を呈するが、調査時の掘り過ぎの可能性もある。形状は楕円形を呈する。27が合流し、29は28から分かれ北側に流れる。覆土は暗黒褐色粘質土で、覆土中より中期末から後期にかけての遺物が出土している。

SD－35から45は北台地に検出された。すべての溝より弥生時代中期から後期にかけての遺物が出土している。覆土は暗茶褐色粘質土である。

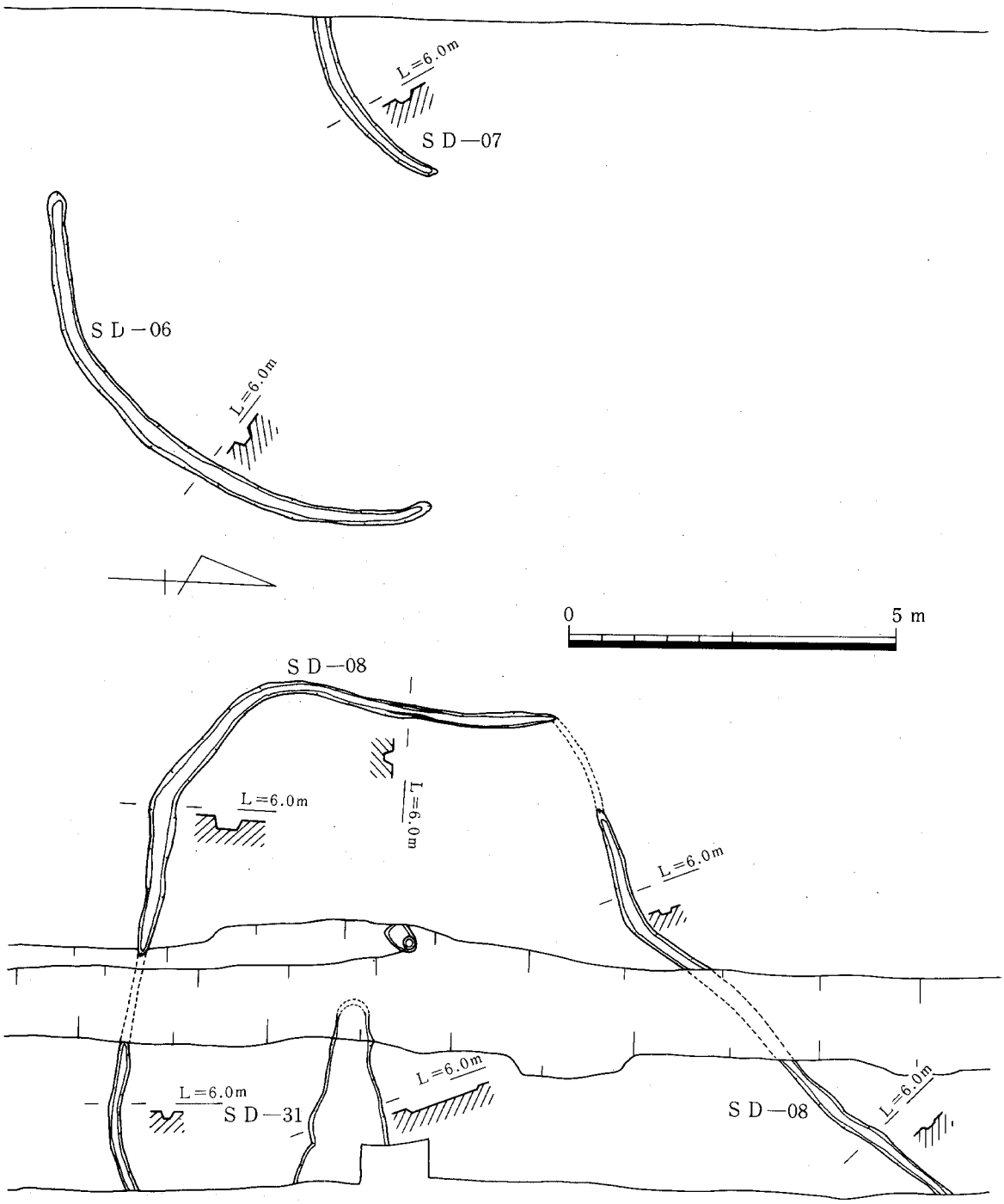
35は北台地の南側は東西に流れ、西側は段落ちする。36は35の５m北に位置する。35と並行に走るが約７mで消滅し、西側はSK－07で切れる。両方とも幅0.7m、深さ0.4mを測る。

37は35より北５mから北西に向かって約15m延びた所で消滅している。幅、深さ、覆土、出土遺物とも35と同じである。38は北台地の北側に位置し、水路によって消滅している。39も38と同様に南西から北東に続く。40から45は幅0.3m、深さ0.3mで覆土、出土遺物は35と同じである。

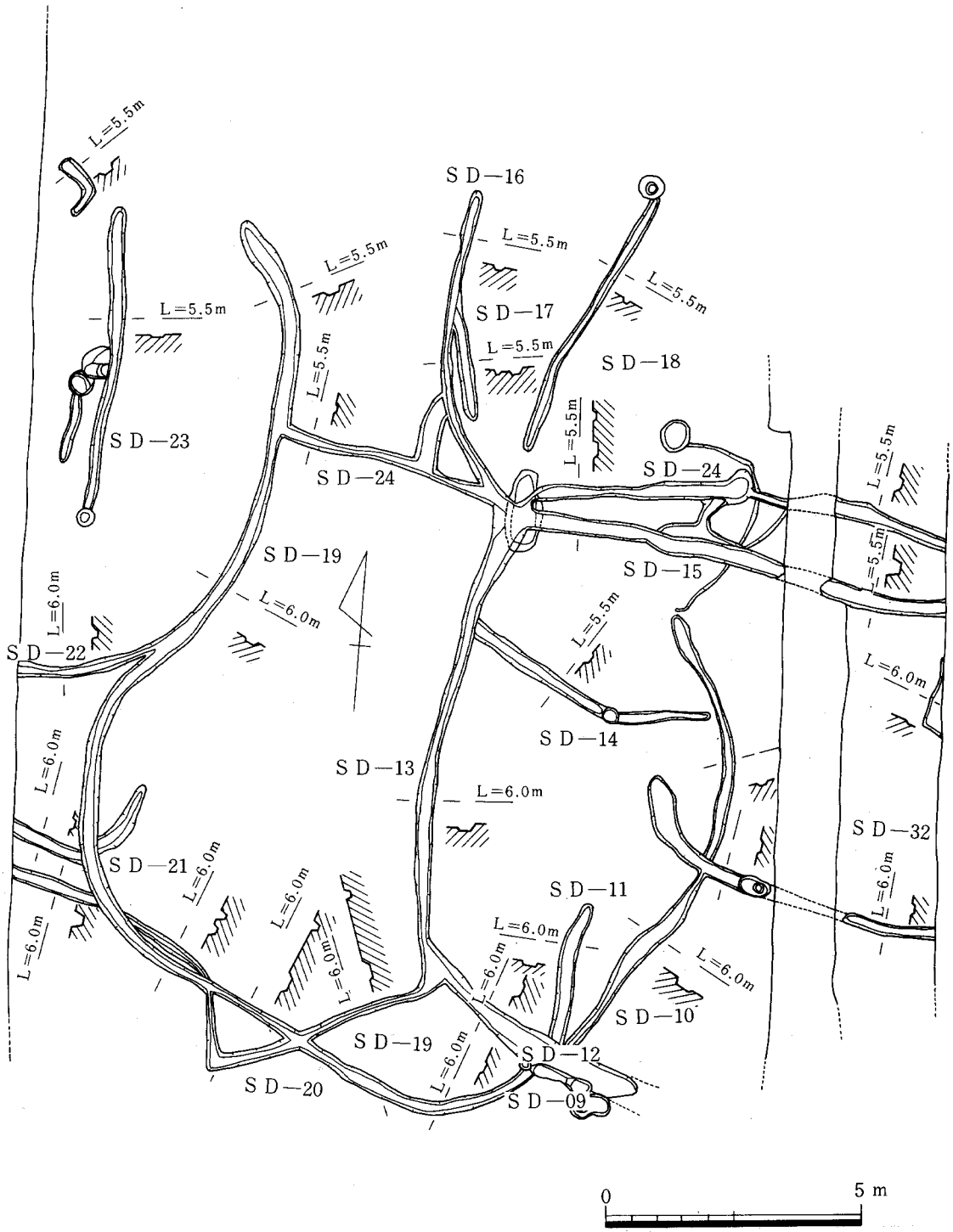
第30図　SD遺構全体図（縮尺1/400）



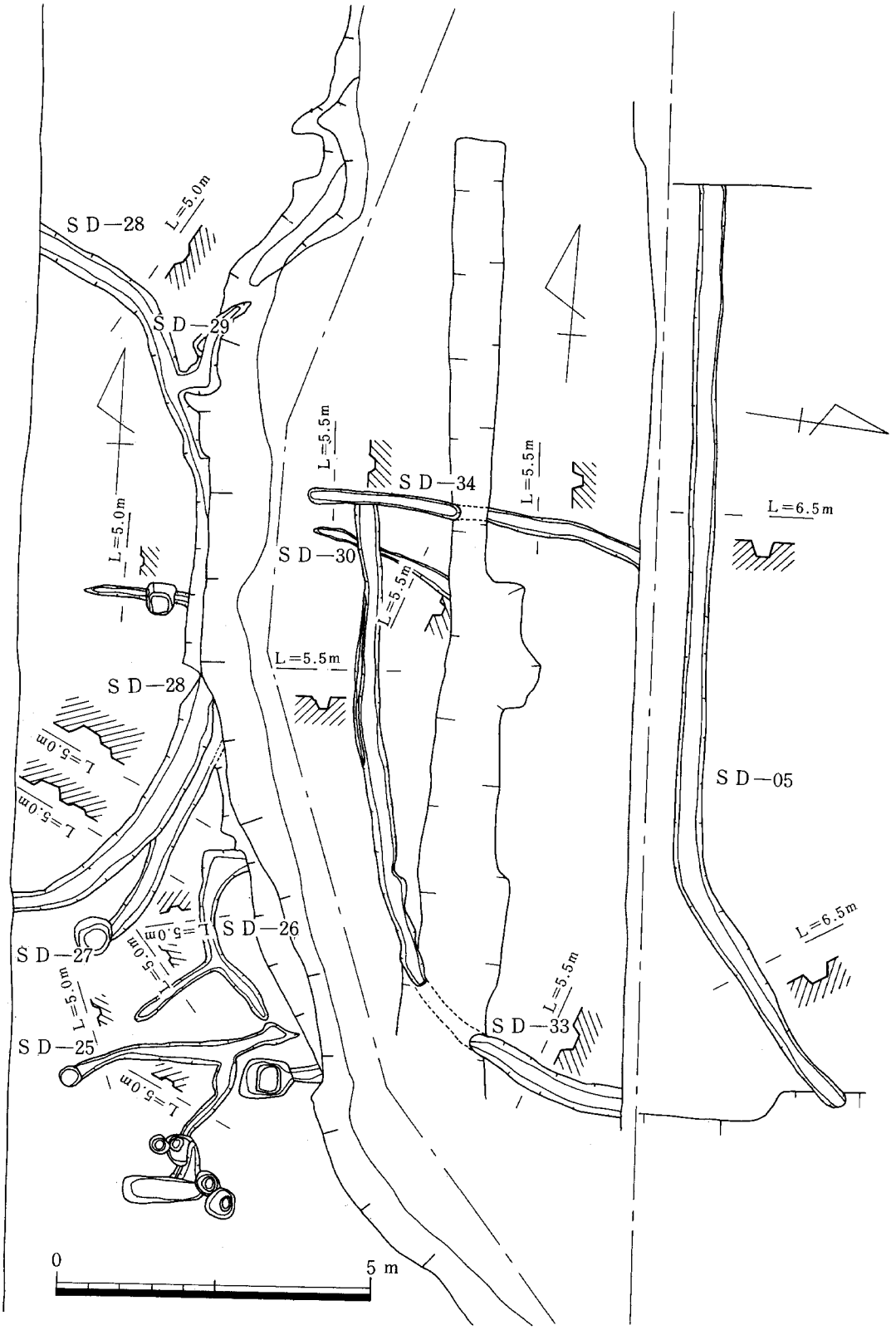
第31図　SD遺構図（縮尺1/100）



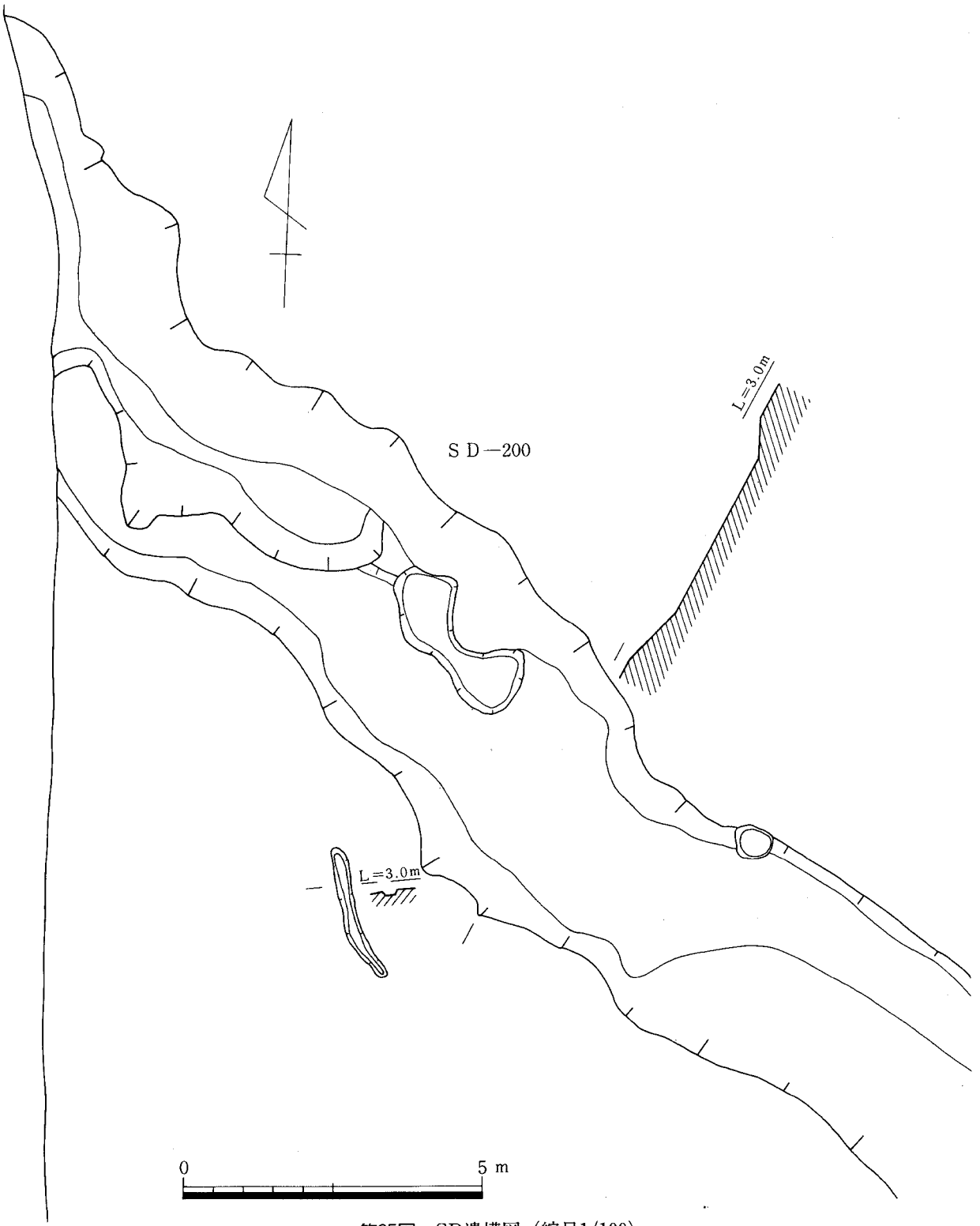
第32図　SD遺構図（縮尺1/100）



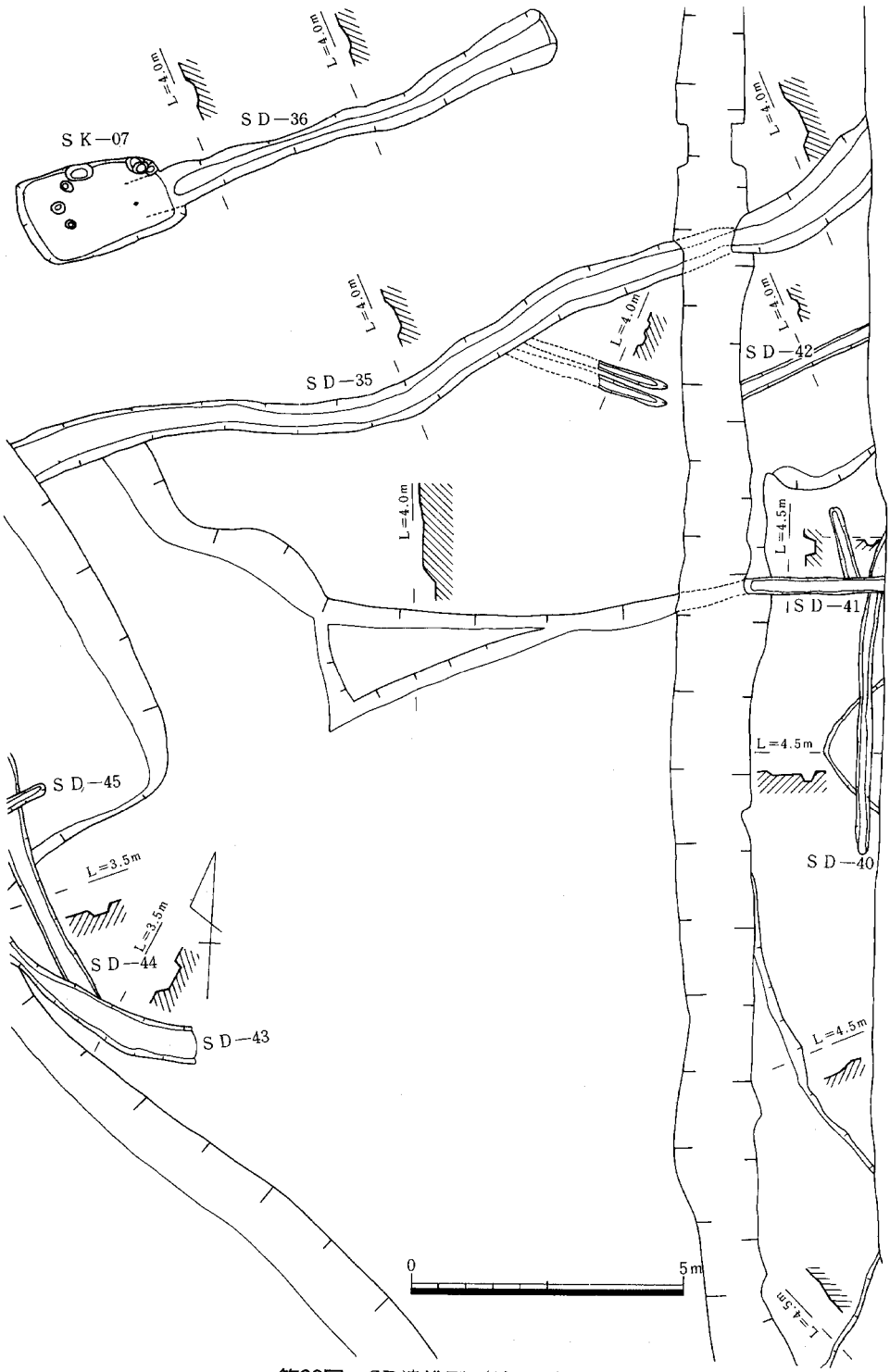
第33図　SD遺構図（縮尺1/125）



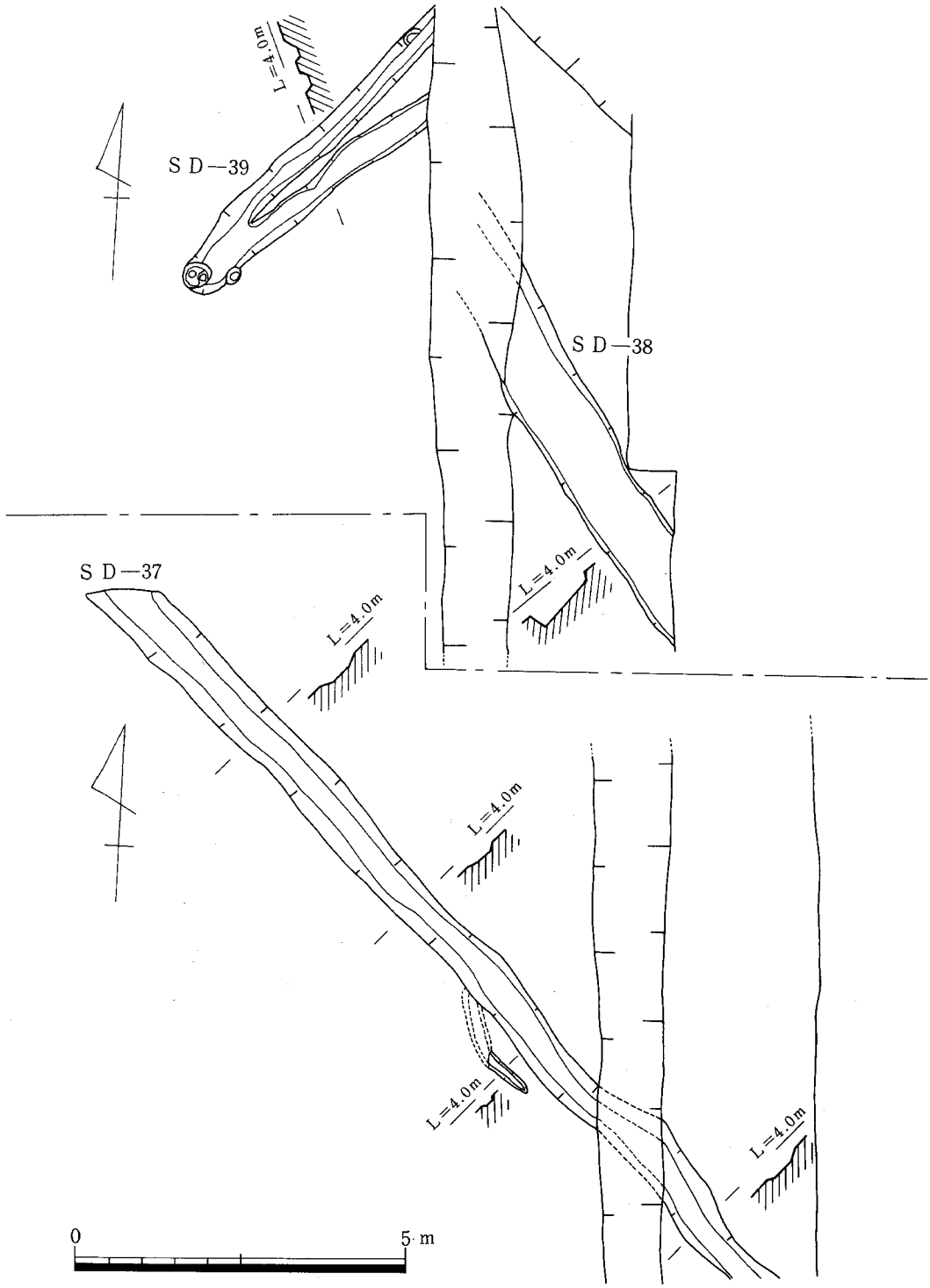
第34図　SD遺構図（縮尺1/100）



第35図　SD遺構図（縮尺1/100）



第36図　SD遺構図（縮尺1/100）



第37図　SD遺構図（縮尺1/100）

pit番号	個	SB	時代	pit番号	個	SB	時代	pit番号	個	SB	時代	pit番号	個	SB	時代
1	21		弥生中期	64	4		弥生中期～後期	127	13			190	23	13	弥生中期～後期
2	7		〃	65	2		〃 〃	128	2			191	15		弥生
3	11		弥生中期～後期	66	55		〃	129	20			192	61石1	14	弥生後期
4	11		〃 〃	67	13		弥生中期～後期	130	42石3	20	弥生後期	193	25	12	弥生中期～後期
5	6	01	(840710089)砥石 弥生中期末	68	1		〃 〃	131	3			194	4		弥生
6	3		弥生中期～後期	69	3		〃 〃	132	4			195	26	15	弥生中期末
7	2		〃 〃	70	5		〃 〃	133	3			196	23		弥生
8	3		〃 〃	71	37		〃 末	134	14			197	22		弥生中期
9	4		〃	72	1		弥生中期～後期	135	45	19	弥生後期	198	4	10	弥生中期末
10	8	01	弥生中期末	73	7			136	9	20	〃	199	27	08 13	弥生中期末～後期
11	7	01	弥生中期末	74	11	04	弥生中期末	137	2			200	37	14	弥生後期
12	3		弥生中期	75	23石番1	〃	〃 840700227 (ミニチュア鍋)	138	1			201	11		弥生
13	2		〃	76	30	〃	〃	139	3		弥生	202	4	25	弥生中期
14	3		〃	77	13	〃	〃	140	22	17	弥生中期～後期	203	4	18	弥生中期～後期
15	3		〃 〃～後期	78	3		弥生中期～後期	141	5		弥生後期	204	1	17	〃 〃
16	1			79	4		〃 〃	142	18	11	弥生中期	205	5		弥生
17	11		弥生中期～後期	80	7		〃 〃	143	17	20	(土師2点) 弥生後期	206	13	16	弥生中期
18	2		弥生中期	81	5		〃 〃	144	24		弥生後期	207	19石1	18	弥生中期～後期
19	49	01	弥生中期末	82	2		〃 〃	145	6	09	弥生中期末	208	3		弥生
20	1		○メンコ 弥生中期～後期	83	5		〃 〃	146	4		弥生	209	17		弥生中期
21	2		〃 〃	84	24		〃	147	20	20	弥生後期	210	12石1		〃
22	7		〃 〃	85	10		〃	148	32	09	弥生中期末	211	26	23	弥生後期
23	24	02	弥生中期末	86	8		弥生中期～後期	149	21		弥生	212	9		弥生
24	13		弥生中期～後期	87	3		〃 〃	150	49石1	10 11	弥生中期末 弥生中期	213	13		弥生後期
25	13	02	〃 末	88	30		〃 〃	151	3		弥生後期	214	11		〃
26	35		(840710041)石錘 弥生中期～後期	89	26		〃	152	4	10	弥生中期末	215	2		弥生
27	1		弥生中期	90	12		弥生後期	153	39		弥生中期～後期	216	33		〃
28	59	01	弥生中期末	91	13		弥生中期～後期	154	61	07	弥生中期	217	19		〃
29	45		弥生中期～後期	92	8		〃 〃	155	31	06	弥生中期末	218	19	16	弥生中期
30	5		〃 〃	93	39石錘1	06	弥生中期末 00042 実測	156	1		弥生	219	3		弥生
31	3		〃 〃	94	10		弥生中期～後期	157	1		〃	220	23		弥生後期
32	1		〃 〃	95	1		〃 〃	158	39	07	弥生中期	221	6		弥生
33	4		〃 〃	96	4		〃 〃	159	4		弥生	222	7		弥生後期
34	1		〃 〃	97	10		〃 〃	160	3		〃	223	11	11	弥生中期
35	6		〃 〃	98	5	04	弥生中期末	161	33		弥生後期	224	8	23	〃
36	2		〃	99	39	04	〃	162	25	08 15	弥生中期～後期	225	23	22	弥生後期
37	48	03	弥生中期末	100	8		弥生中期～後期	163	7	14	弥生後期	226	13		弥生中期
38	5	03	〃	101	12		弥生中期	164	17石1	08	弥生中期末～後期	227	134		840700224支脚 弥生後期
39	6		弥生中期～後期	102	35	19	弥生後期	165	4	08	〃 〃	228	10		弥生
40	1		〃 〃	103	5		弥生中期～後期	166	13	08 13	〃 〃	229	10石1	12	弥生中期～後期
41	4		〃 〃	104	4		〃 〃	167	40	10	弥生中期～後期	230	8		弥生
42	34		〃 〃	105	6		〃 〃	168	2	08	〃 〃	231	1		〃
43	5	02	〃 末	106	18	19	弥生後期	169	4	09 10	〃 末	232	1		〃
44	3		弥生中期～後期	107	6	19	弥生後期	170	24		弥生後期	233	10	17	弥生中期～後期
45	6石番1		〃 〃	108	3		弥生	171	13	10 15	〃 中期末 〃	234	3		弥生
46	6石番1		〃 〃	109	8	20	弥生後期	172	18石4		弥生	235	1	25	弥生中期
47	6石番1	02	〃 末	110	6		弥生中期	173	12	14	弥生後期	236	15	24	〃
48	14		弥生中期	111	5		弥生	174	8	10 12	弥生中期末 弥生中期末～後期	237	1		弥生
49	10	04	弥生中期末	112	27	19	弥生後期	175	5		弥生後期	238	25	24	弥生中期
50	3		弥生中期～後期	113	25		弥生中期	176	3	09	弥生中期末	239	34		弥生
51	1		〃 〃	114	2	19	弥生後期	177	65		弥生後期	240	10		弥生後期
52	18	03	弥生中期末	115	2	20	〃	178	3		弥生	241	2	22	〃
53	51	03	〃	116	11		弥生	179	2		〃	242	1	23	〃
54	7		弥生中期～後期	117	28	19	弥生後期	180	1		〃	243	26		弥生中期
55	1	03	弥生中期末	118	3	11	弥生中期	181	24	17	弥生中期～後期	244	12	24	〃
56	9		弥生中期～後期	119	12		弥生	182	2		弥生	245	39		弥生後期
57	3		〃 〃	120	56	07	弥生中期	183	5		弥生後期	246	12		〃
58	3		弥生	121	6		弥生	184	6		弥生	247	5		弥生
59	9石番1		弥生中期	122	15		弥生中期	185	13	16	弥生中期	248	41	22	弥生後期
60	12		〃 ～後期	123	12		〃	186	12	18	弥生中期～後期	249	2		弥生
61	1石番1		〃 〃	124	30	09	弥生中期末	187	42	10	弥生中期末	250	53石1		〃
62	27		〃 〃	125	40		弥生	188	8	16	弥生中期	251	5		〃
63	3		〃 〃	126	24	06	〃 中期末	189	19	16	〃	252	7石錘1		〃 (840710043)石錘

Tab. 3 Pit一覧表－1

pit番号	個	SB	時代	pit番号	個	SB	時代	pit番号	個	SB	時代	pit番号	個	SB	時代
253	17 石器 2		(840710166)石鏃 弥生中期(840710058)	316	6		弥生	379	2		弥生	442	10		弥生
254	29	26	〃	317	3		〃	380	1		〃	443	38		弥生後期
255	2	33	弥生中期～後期	318	2		〃	381	1	48	弥生土器 鐘倉（高台付碗）	444	13		弥生
256	3	31	弥生中期(840700220) ミニチュア器台	319	2		〃	382	34	49 50	弥生後期 弥生中期	445	12		〃
257	14	34	弥生中期～後期	320	3		〃	383	10		弥生	446	0		
258	1	30	〃 〃	321	1		〃	384	9		縄文後，弥生後	447	15	69	弥生中期
259	13 石器 1		弥生	322	3		〃	385	3		弥生	448	10		弥生
260	6		弥生中期	323	1		〃	386	8 石 1		〃	449	5		〃
261	6		〃 ～後期	324	7 石 1		弥生中期	387	7	54	弥生後期	450	7		〃
262	9		弥生	325	17		弥生(840700218) 鉢	388	2		弥生中期	451	0		
263	2	30	弥生中期～後期	326	3		〃	389	1	49	弥生後期	452	0		
264	1		弥生	327	1		〃	390	17	50	弥生中期	453	2		弥生
265	26	21	弥生中期	328	6	35	弥生中期～後期	391	8	49	弥生後期	454	18	69	弥生中期
266	7	31	〃	329	10	36	〃 〃	392	6		弥生後期	455	5		弥生
267	18 石 1	31	〃	330	7	43	弥生後期	393	2		〃	456	9		〃
268	2	31	〃	331	22	43	〃	394	4		〃	457	151		840700228カメ 弥生後期
269	34		弥生	332	50	36	弥生中期～後期	395	3	55	〃	458	1		〃
270	51	35	弥生中期～後期	333	17		弥生	396	石 1		(840710086)敲石 弥生中期～後期	459	7		〃
271	1		弥生	334	1		弥生中期	397	2		〃 〃	460	9		〃
272	1		〃	335	8		〃	398	33		〃 〃				
273	8	32	弥生中期～後期	336	4		弥生	399	14		弥生	592	1		弥生
274	2	34	〃 〃	337	8	43	弥生後期	400	64		〃				
275	1	21	弥生中期	338	5		弥生	401	1	52	弥生中期(弥生土器)	1000	2		弥生
276	5	30	弥生中期～後期	339	2		〃	402	8		弥生				
277	9		弥生	340	69	43	弥生後期	403	1	51	弥生中期				
278	11		弥生中期	341	9	44	弥生中期～後期	404	4		弥生				
279	4		弥生	342	2		弥生	405	4		弥生中期				
280	2		〃	343	14	43	弥生後期	406	2		弥生				
281	5		〃	344	1		弥生	407	5		〃				
282	1		〃	345	5	43	弥生後期	408	9	56	弥生後期				
283	5	31	弥生中期	346	23	43	〃	409	29	57	〃				
284	3		弥生	347	13	43	〃	410	8	30	弥生中期～後期				
285	1		〃	348	11	44	弥生中期～後期	411	4	54	弥生後期				
286	82		弥生中期	349	2		弥生	412	14	50	弥生中期				
287	33	32	弥生中期～後期	350	0			413	18	59	〃～後期				
288	2	31	弥生中期	351	24			414	15		弥生後期				
289	15		弥生	352	3		弥生	415	5		〃				
290	2		〃	353	0			416	0						
291	16	33 38	弥生中期～後期 弥生後期	354	9 石 1		弥生	417	20	57 60	弥生後期				
292	2	37	弥生後期	355	6		弥生後期	418	9	57 58	〃				
293	1		弥生	356	2		弥生	419	2		弥生				
294	8	34	弥生中期～後期	357	5	43	弥生後期	420	6 石 2	59	弥生中期～後期				
295	4	35	〃 〃	358	6		弥生	421	34	59	〃 〃				
296	4	32	弥生中期～後期	359	7		〃	422	41	60	弥生後期				
297	3	30	〃 〃	360	7		〃	423	26		弥生				
298	13	21	弥生中期	361	17	44	弥生中期～後期	424	0						
299	5		弥生後期	362	13	43	弥生後期	425	7 石 1		弥生				
300	11	35	弥生中期～後期	363	8		弥生	426	0						
301	8		弥生中期	364	2 石 1		〃	427	—	61	弥生後期				
302	21	31 36	〃 ～後期	365	1	55	弥生後期	428	16		(840700217)器台 弥生後期				
303	5		弥生	366	5		弥生	429	18		〃				
304	5		〃	367	4	47	弥生中期～後期	430	31		〃				
305	2		〃	368	1		弥生	431	49 石 1		弥生中期～後期				
306	4	32	弥生中期～後期	369	99 石 1	50	弥生中期	432	0						
307	11	35	〃 〃	370	7	49	弥生後期	433	—	61	弥生後期				
308	6		弥生	371	1	48	弥生土器 鐘倉（高台付碗）	434	15		弥生				
309	4		弥生後期	372	4		弥生	435	19						
310	30		弥生	373	4	50	弥生中期	436	0						
311	18	36	弥生中期～後期	374	106 石 1		弥生後期	437	8						
312	13		弥生	375	32 石 1		〃	438	0						
313	57		弥生中期	376	29	50	弥生中期	439	2		弥生後期				
314	2		弥生	377	23	49	弥生後期	440	4		弥生				
315	29	36	弥生中期～後期	378	1	55	〃	441	2 石 1		弥生後期				

Tab. 4 Pit一覧表－2

pit番号	個	SB	時代	pit番号	個	SB	時代	pit番号	個	SB	時代	pit番号	個	SB	時代
1001	17	40	弥生後期	1064	7	29	弥生中期～後期	1127	15	46	弥生中期	1190	1 石3		室町 黒曜石1コ
1002	8	42	弥生中期	1065	3	A区	弥生中期	1128	12		弥生	1191	6		弥生
1003	10	37	弥生後期	1066	7	27	〃	1129	2		〃	1192	6		〃
1004	2		弥生	1067	2	28	〃	1130	13		〃	1193	1	34 38	弥生中期～後期 弥生後期
1005	18		〃	1068-1-2-3	10 4	A区 29	弥生中期～後期	1131	8		〃	1194	2		弥生
1006	12	33 35	弥生中期～後期	1069	10		弥生後期	1132	4		弥生中期	1195	1		〃
1007	50	35 40	〃 〃 弥生後期	1070	12		弥生中期	1133	5		弥生	1196	3		鎌倉～室町
1008	15	37	弥生後期	1071	12		弥生	1134	7		〃	1197	2	54	〃
1009	14		弥生	1072	10		弥生後期	1135	1		不明？軽石	1198	2	54	〃
1010	3		〃	1073	11	25	弥生中期	1136	1	45	弥生後期, 弥生土器	1199	30	54	〃
1011	4	35	弥生中期～後期	1074	24		弥生	1137	8		弥生後期	1200	－	63	弥生後期
1012	8		弥生	1075	7		〃	1138	19		弥生	1201	50		弥生後期
1013	36	42	弥生中期	1076	35		弥生後期	1139	110	46	弥生中期	1202	9		
1014	5		弥生	1077	2		弥生	1140	61		弥生後期	1203	7		弥生後期
1015	2		弥生後期	1078	5		〃	1141	15		鎌倉～室町	1204	1		
1016	34	28 42	弥生中期	1079	5		〃	1142	6	46	弥生中期	1205	5		弥生
1017	10		弥生	1080	1		〃	1143	1		弥生	1206	14		
1018	26	21	弥生中期	1081	2	05	弥生中期～後期	1144	4		〃	1207	6 石1		弥生
1019	42	40	弥生後期	1082	2	05	〃 〃	1145	2		弥生中期	1208	5		弥生後期
1020	16	28	弥生中期	1083	1		弥生	1146	10		弥生	1209			
1021	4		弥生	1084	7	05	弥生中期～後期・高杯	1147	6		〃	1210	1		弥生
1022	13		〃	1085	43	35	〃 〃	1148	3	54	弥生後期	1211	5		
1023	17		弥生後期	1086	23	A区 100	弥生土器・土師・糸切り 室町・弥生後期	1149	3		弥生	1212	1		弥生
1024	10	29	弥生中期～後期	1087	14		弥生	1150	1		〃	1213	2 石1		〃
1025	4		弥生	1088	10		〃	1151	14		〃	1214	2		
1026	30	29	弥生中期～後期	1089	1		〃	1152	3		〃	1215	5 石1		弥生, 須恵器
1027	6	40 41	弥生後期	1090	1	05	弥生中期～後期	1153	2		〃	1216	－		
1028	3		弥生	1091	3		弥生中期	1154	6		〃	1217	1 石1		弥生・石斧
1029	7		〃	1092	1		弥生	1155	10		〃	1218	3 石2		〃・室町
1030	15	37	弥生後期	1093	7		〃	1156	11		弥生後期	1219	6		
1031	4		〃	1094	12		弥生後期	1157	12			1220	2		弥生
1032	46	42	弥生中期	1095	23		〃 中期	1158	－	53	弥生中期				
1033	8	40	弥生後期	1096	25		〃 後期	1159	37	62	弥生後期	1251	4		弥生中期
1034	13	38	〃	1097	1		弥生	1160	1		弥生	1252	12	68	弥生後期
1035	3		〃	1098	9		〃	1161	2	64	弥生中期～後期	1254	9	68	弥生後期
1036	5		弥生	1099	－			1162	2		弥生	1255	11		〃
1037	6	38 39	弥生後期	1100	3		弥生	1163	1	62	弥生後期	1256	4	67	弥生後期
1038	2		〃	1101	5		〃	1164	1		弥生中期	1257	2		弥生
1039	3	37	〃	1102	3		〃	1165	2		〃	1258	20	67	弥生後期
1040	20	40	〃	1103	2		〃	1166	4	65	弥生中期・弥生土器	1259	1		弥生
1041	2		弥生	1104	6		〃	1167	2		〃	1260	1	68	弥生後期
1042	19		弥生後期	1105	3		〃	1168	7	63	弥生後期	1261	9		弥生
1043	2		弥生	1106	52		弥生後期	1169	3	65	弥生中期・弥生土器	1262	3	65	弥生中期・弥生土器
1044	6	26	弥生中期	1107	6		弥生中期	1170	15	63	弥生後期	1263	9	65	〃 メンコ
1045	1		弥生	1108	2		〃	1171	3		弥生	1264	24	63	弥生後期
1046	7	21	弥生中期	1109	7		〃	1172	7	62 64	後期 弥生中期～後期	1265	2	62	〃
1047-1	9	A区	弥生	1110	3		弥生中期	1173	41		弥生後期	1266	1	66	〃（図なし）
1048	2	A区 29	弥生中期～後期	1111	11		〃	1174	41	64	弥生中期～後期	1267	1	66	〃（図なし）
1049	2	A区	弥生中期	1112	6		〃	1175	15		弥生後期				
1050	1	27	〃	1113	47		弥生中期～後期	1176	3		〃				
1051	11		弥生	1114	6		〃 〃	1177	4		〃				
1052	3		〃	1115	6	39	弥生後期	1178	6	34	弥生中期～後期				
1053	21	A区 29	弥生中期～後期	1116	7		弥生	1179	4		弥生後期				
1054	4	26 27	〃 弥生中期	1117	3		〃	1180	4 石1		〃 黒曜石				
1055-1	10		弥生	1118	10		〃	1181	2		弥生後期				
1056	5	25	弥生中期	1119	7		〃	1182	1 石2		弥生				
1057	1	27	〃	1120	2		〃	1183	7	54	弥生後期				
1058	12		弥生後期	1121	2		弥生中期～後期	1184	1		室町・糸切り皿				
1059-1-2	13	A区	〃	1122	4		弥生	1185	2		〃				
1060	2	28	弥生中期	1123	2		〃	1186	1		〃				
1061	6		弥生	1124	8		〃	1187	5		弥生・室町				
1062	2		〃	1125	9		〃	1188	1		〃・須恵器				
1063	1		弥生中期	1126	27	46	鎌倉～室町	1189	1		〃 〃				

Tab. 5 Pit一覧表－3

pit番号	個	SB	時代	SD番号	個	時代	SK	個	時代
2001	2	71	鎌倉・土師器，青磁	1	881	弥生後期	01	231	(163個) 鎌倉，室町切合い関係有，中期末
2002	1	77	(840700219)鉢(口縁) 鎌倉～室町	3	54	弥生	02	2	不明
2003	$11^{石}_{1}$	71 76	鎌倉・土師器，青磁 〃～室町・糸切り	4	92	〃	04	2	室町
2004	3	73	鎌倉～室町糸切り	5	23	〃	10	30	弥生後期
2005	1	73	鎌倉～室町 840700221 小皿糸切り	6	197	弥生後期	11	48	弥生中期
2006	$3^{石}_{1}$	74	〃 〃 糸切り	8	73	〃 中期	12	8	弥生，室町
2007	1		室町瓦質土器 840700059壺(口縁)	9	55	〃 後期	14	6	室町
2008	19	76	840700223鎌倉～室町小皿，糸切り	10	14	〃 中期	15	10	鎌倉
2009	$1^{石}_{1}$	74	〃〃840700222小皿，糸切り	11	16	〃	16	1	弥生
2010		77	〃 〃 弥生土器 土錘 青磁・土師器	13	77	〃 後期			
2011	1		弥生	15	67	〃 中期 1点白磁混り	SE		
2012	3	77	鎌倉～室町 弥生土器土錘 青磁・土師器	16	6	〃 後期	01	10	弥生中期
2013	1		室町，糸切り皿	17	2	〃			
2014	1		室町，板目皿	18	11	〃	SX		
2015	2	88	室町 須恵，土師	19	242	〃 中期	01	103	弥生中期～後期(瓦質室町1点)
2016	2		〃 糸切り	20	105	〃 後期	07	15	〃 〃
2017	6	77	鎌倉～室町 弥生土器土錘 青磁・土師器	21	2	弥生	08	32	弥生後期
2018	$17^{石}_{2}$	76	鎌倉～室町 糸切り	22	6	〃	09	3	弥生
2019	2	75 78	弥生土器 後期	24	47	〃 後期			
2020	2	75 78	〃 〃	25	14	〃	SC		
2021	1		室町，瓦質土器	26	18	〃	01	390	弥生中期
2022	$6^{石}_{1}$	86	鎌倉～室町 土師	27	77	〃 中期			
2023	2		室町，土師器	30	135	〃 後期			
2024	1	89	室町 土師，糸切り	50	135	〃 中期～後期	遺構上面括	74	
2025	5	84	鎌倉～室町，土師器	101	5	〃 後期			
2026	1	88	室町 須恵，土師	102	14	弥生	W-2	2	
2027	2	91	〃 土師，糸切り	103	120	〃 後期，鎌倉 糸切り皿			
2028	19	89	室町 土師，糸切り	104	15	弥生	P-13	1	
2029	1	88	〃 須恵，土師	105	9	〃	P-21	2	
2030	8	90	〃 土師，糸切り	106	11	〃 後期	P-24	29	
2031	1		弥生	107	41	弥生	P-18	1	840700237 壷（小）
2032	1	94	室町 土師	108	25	〃	P-17	1	840700241 鉢
2033	4	100	〃 弥生土器 土師，糸切り	110	1	〃 後期	P-22 1包		840700344
2034	-	92 94	〃 土師	111	8	〃	P-23		840700042
2035	1	94	〃 土師	112	5	〃			840700053
2036	1		〃 須恵	113-1	268	弥生後期(鎌倉2点)	P-24		840700076
2037	4		〃 土師	114	119	〃(鎌倉1点)			
2038	1		室町，糸切り皿	115-1	96	〃 中期～後期			
2039	1		〃 青磁	116	5	弥生			
2040	3		〃 土師	117	1	鎌倉 瓦質土器			
2041	$1^{石}_{1}$	104	鎌倉～室町 青磁	118-1	2	〃 白磁			
2042	1	115	〃 〃 〃	119	6	〃 瓦，白磁			
2043	1	105	室町，土師	200-13	40	〃			
2044	1	105	〃 〃						
2045	-		〃						
2046	1		〃 須恵器蓋						
2047	3		〃 白磁，糸切り						
2048	$7^{石}_{1}$		〃 青磁，糸切り皿						
2049	2		〃 〃						
2050	1	73	鎌倉～室町 糸切り						
2051	1	73	〃 〃 〃						
2052	8		室町 840700225皿，糸切り 板目 土師皿						
2053	1	94	〃 土師						
2054	3		〃 皿，土師皿						
2055	-								
2056	$2^{石}_{2}$		不明						
2057	1		室町 白磁						
2058	0	87	〃 840700226 脚付皿						
2059	-								
2060	-	77							
2061	-	77 78，80	弥生後期						
2062	-	77 82	鎌倉～室町						
2063	-	95 115	〃 〃						

Tab. 6 Pit一覧表－4

4、出土遺物

各遺構から数多くの遺物が出土した。大きく分けて、弥生時代の中期から後期にかけての遺構より出土した遺物と鎌倉時代から室町時代の遺構より出土した遺物に分けられる。特に弥生時代中期末から後期にかけての遺物を出土したSE－01からは完形の壺形土器、石剣等を始めとして多種多様の遺物が出土している。最も遺物が多量に出土した遺構は、SD－100である。土器、石器は言うに及ばず多量の木器が出土した。木器には農耕具、狩猟具、漁撈具、機織具と思われる部材等が出土し、生活に必要な用具が殆ど揃った感がある。また、SD－100から銅鐸型銅製品が出土したことは銅鐸研究の上からも非常に重要なことであり、新聞紙上に大きく取り上げられ注目を集めた。

SD－50は、環濠であるが一部分しか調査が出来なかったので、その規模等は推測の粋をでないが、溝からの出土遺物は生活用具が多量に出土している。特に舟の部材、槽、たも網、砧、石斧柄等が出土している。また、SD－100からも模型の舟が出土している。SD－50、100から出土した石器のうち最も興味深いものは、大小多種多様な石錘である。使用用途の違いにより色々な形態を持つことである。

弥生式土器は丹塗りの土器が大半を占め、祭祀用に用いられたと考えられる。

鎌倉時代から室町時代にかけての遺構は北台地を中心に分布するが、遺物も青磁、白磁、土師器等が出土している。ただ溝内から格子目紋の瓦が出土していることは大きな意味を持つ。

出土遺物について概略を述べてきたが、石器、土器、木器の順でその詳細を記載していく。

1)石器

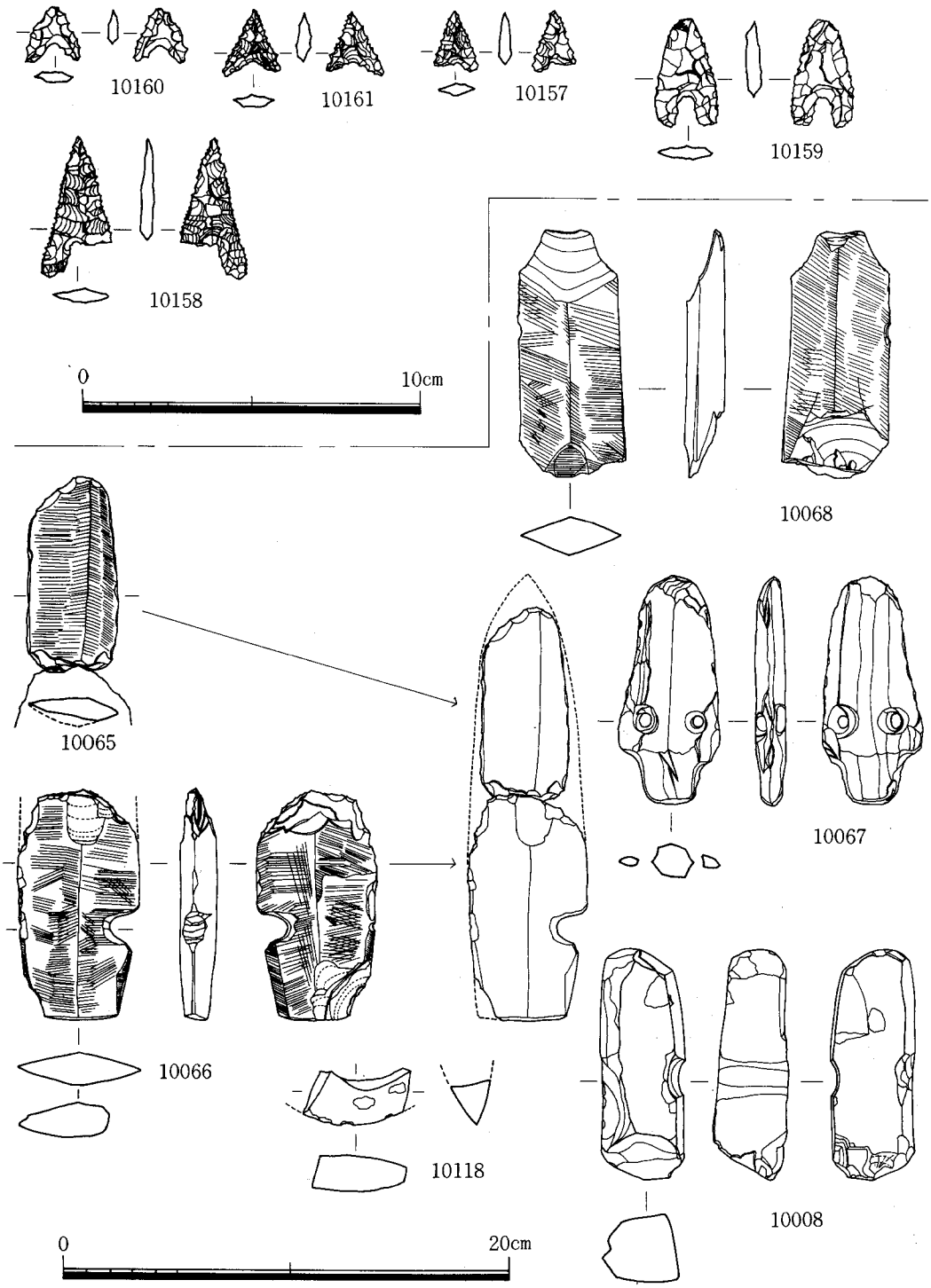
石器はSD－50、100を中心に数多く出土している。石鏃、石剣、石戈、太型蛤刃石斧、石庖丁、石錘、防錘車、砥石、磨石、叩き石等が主な出土遺物である。特に、太型蛤刃石斧、石錘、防錘車、砥石、磨石の出土点数は多く、形態的にも多種多様である。これは用途による相違と考えられる。各石器について詳細を述べる。

石剣(第38図　PL.36、37)

SE－01から出土した68と、Pit253、SD－100から出土し接合した65と66がある。68は先端部及び基部を欠損しているが、基部の部位に近い。図面下端の中央部分に稜が二条となる部位がある。これから上端に向かって一条の稜によって断面菱形の形状を呈する。両側辺中央部付近から鋭利な研ぎだしを行っている。中央部下端の両側面は僅かながら稜を持ち断面六角形を呈する。

研磨は丁寧で磨きの掛かった状況である。石材は頁岩である。

65と66は接合するもので65がSD－100からの出土、66がPit253(SD－100より約60m離れている)である。基部は平坦に研磨されている。基部中央から研ぎだしによる稜が形成されている。右側側面に抉入部分があり、これを境として側辺の形状が異なる。下端は稜を持ち、上端は三



第38図　SD－100、SE－01出土石器実測図（縮尺1/2, 1/3）

角形に研ぎ出されている。これが中子の役目をもつと考えられる。石材は結晶片岩である。

67は変成岩の石材で造られた石戈である。SD－100からの出土であるが、かなりのローリングを受けている。先端部を欠損している。

118は蛇紋岩製の磨製石斧でPit59より出土した。刃部のみであるが大形の石斧と考えられる。

83は柱状抉入片刃石斧で、SD－100より出土した。刃部を欠損している。一部敲打が残るが完成品として考えて良い。おそらく使用時に破損したものであろう。

石鏃(第38図　PL.36)

石鏃は5点で全てSD－100からの出土である。

157は二等辺三角形を呈する黒耀石製の石鏃で抉入は浅く脚部が不揃いである。全面に二次加工を施す。158は大形で二等辺三角形を呈する黒耀石製の石鏃で、片脚を欠損する。抉入が深く、細かな全面への二次加工により丁寧に仕上げられている。両側辺は細かな押圧剥離により、のこぎり状を呈する。159はサヌカイト製の石鏃で先端の一部を欠損する。脚は広がりを見せず、中央よりまっすぐに下がる形態で、抉入部は深く逆U字形を呈する。大剥離面及び主要剥離面の一部を残し二次加工の剥離も大まかである。160は二等辺三角形を呈する、サヌカイト製の石鏃で完形である。二次加工は大まかで、大剥離面及び主要剥離面の一部を残す。主要剥離面の抉入部への二次加工は施されていない。いわゆる剥片鏃の範中に入る。161は二等辺三角形の黒耀石製石鏃で完形である。主要剥離面の二次加工は大まかであるが、大剥離面の剥離は全体に、丁寧な押圧剥離によって仕上げられている。抉入はやや浅い。

石斧(第39、40図、PL.39、40、41)

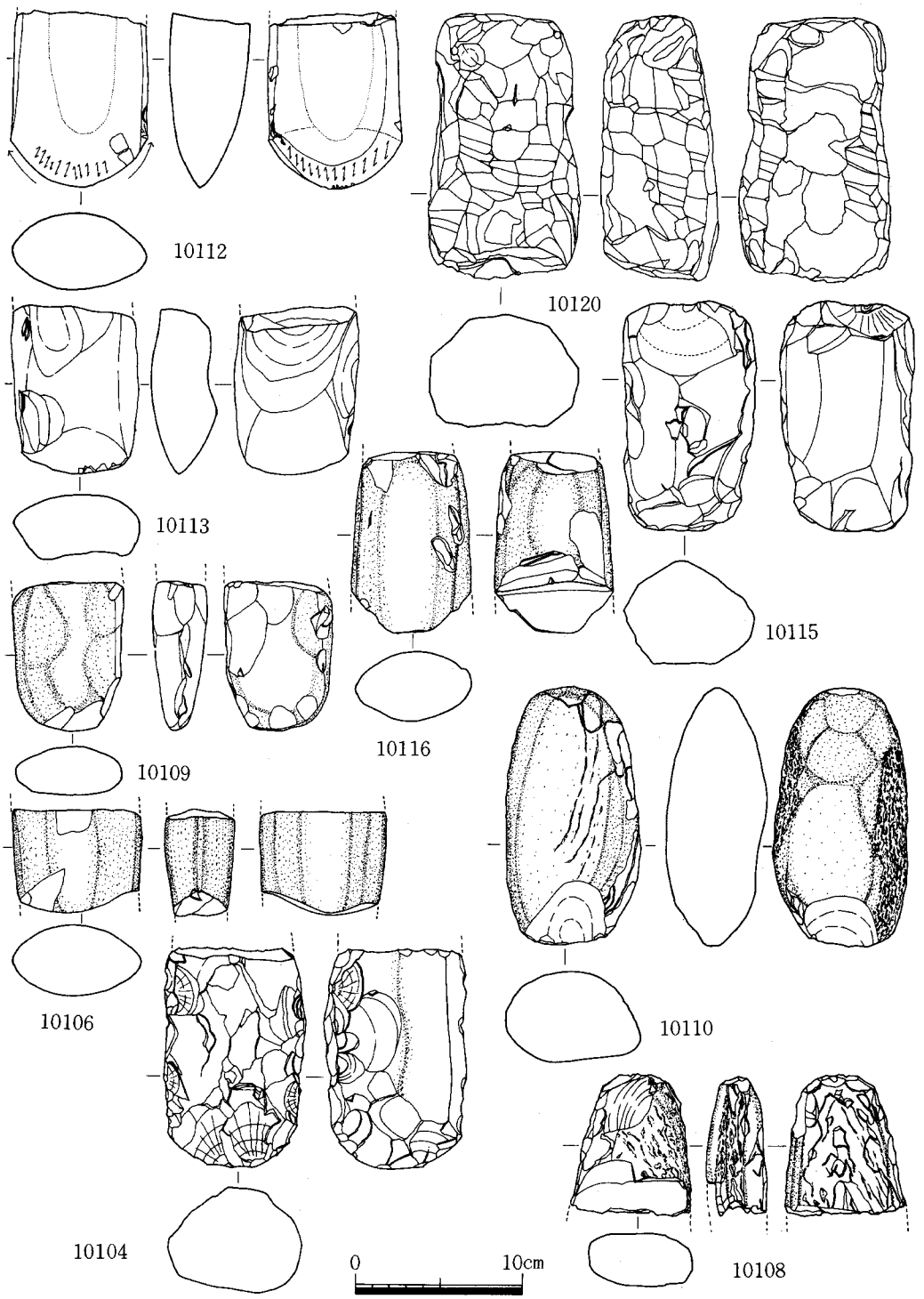
石斧は多数出土し、内16点を図示した。形態により区分を行った。

磨製石斧(101、102、104～110、112、113、116)

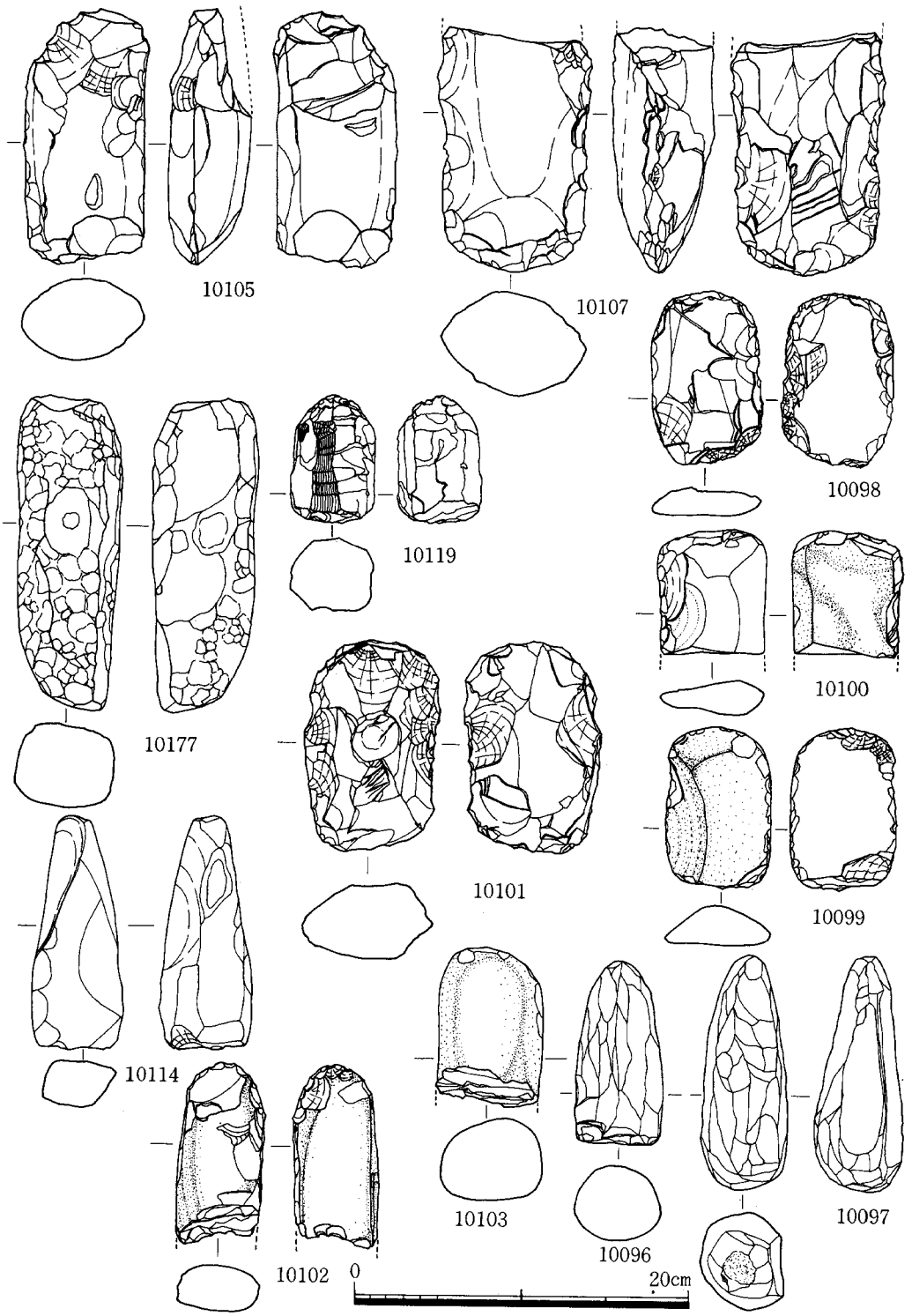
112は太型蛤刃石斧で、石材は堅くて緻密な玄武岩を使用している。全体に研磨を施す。特に刃部は丁寧な研磨が加えられ、刃部角度61°のシャープな刃部に仕上げられている。横断面は楕円形を呈し、石斧として完成はしているものの、使用時により基部を欠く欠損品である。SD－100からの出土である。

102、106、109、113、116は研磨段階まで進んだ石斧である。106は、基部及び先端を欠損、109、113は基部、116は先端を欠損する。102は粘板岩製の磨製石斧である。体面に研磨を施す。断面は楕円形を呈し基部の一部を欠損する。106はSD－200、他4点は、SD－100からの出土である。

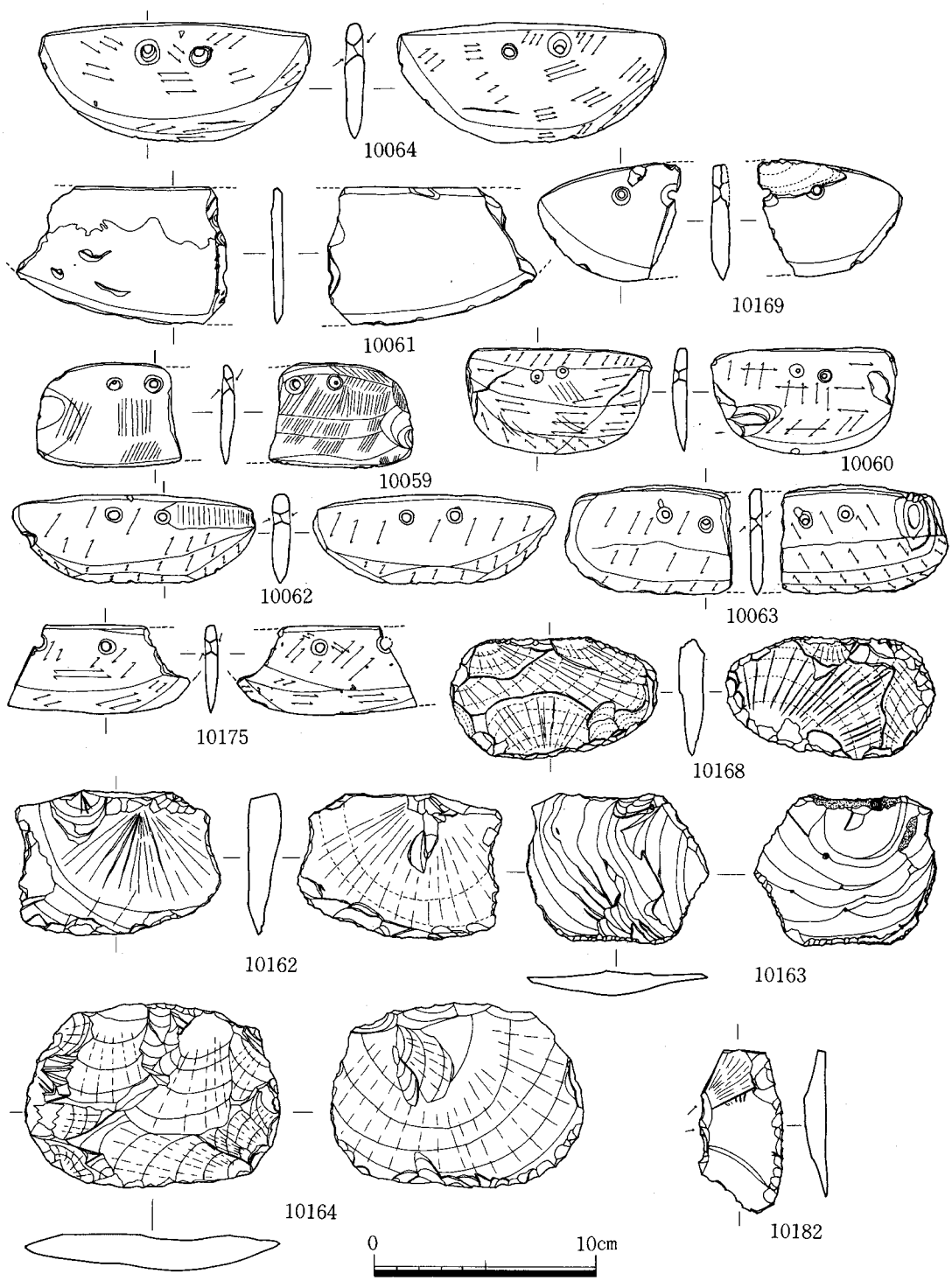
101、104、105、107、108、110、は敲打段階の石斧である。101、104、107は太型蛤刃石斧の未製品で、剥離面を多く残す。101、104は敲打面が一部しかなくこの工程に入った直後の物である。107は片面が打裂の状態で片面だけ敲打を加える。2点とも身が厚く石材は良質の玄武岩を使用



第39図　SD－100出土石器実測図－１（縮尺1/4）



第40図　SD－100出土石器実測図－２（縮尺1/4）



第41図　SD－100出土石器実測図－３（縮尺1/3）

している。105は太型蛤刃石斧の未製品で、敲打はかなり進んでいる。基部の一部を欠損するが、打裂時のものであろう。横断面は楕円形を呈する。　108は小形の石斧未製品で、全体に敲打を与える。基部を欠損。先端の剥離は敲打時のものと思われる。横断面は楕円形を呈する。110は太型蛤刃石斧の未製品で、敲打段階は終了し、片側は研磨段階に入っている。形状は完形で、完成間際の石斧である。敲打段階の石斧は全て玄武岩製で、SD－100からの出土である。

115は打裂段階で身が厚い太型蛤刃石斧の未製品で、Pit－1217からの出土である。

柱状石斧(117)

117は柱状石斧の未製品で基部の一部を欠損する。全体に敲打時の凹みが観察できる。中央よりやや基部寄りと、先端の一部に新しい使用痕が認められる。横断面は、隅丸方形を呈する。

打製石斧(98～100、114)

98～100、114は打裂時に出来る剥片を利用した扁平打製石斧である。98は横剥ぎの剥片で、側辺に二次加工を施す。断面は扁平を呈する。99、100は剥離面を多く残し、側辺に二次加工を加える。断面は扁平を呈する。114は縦長の剥片を利用した石斧で、断面は方形を呈し、両端部は薄くなる。4点とも玄武岩製で、SD－100からの出土である。

石庖丁(第41図、PL.38)

未製品を含む9点の出土で、形態的にII類に分類できる。I類　形状が半月形を呈するもので、61、62、64、69、175がこれにあたる。II類　形状が方形を呈するもので、59、60、63がこれにあたる。I類　61は穿孔をもたない大形の石庖丁である。形状は半月形を呈し、約1/2を欠損する。表面の剥落が著しい為、研磨方向は不明。凝灰岩製でSD－100からの出土である。62、64、169、175は、2個の穿孔を有し、孔は両面から穿たれている。全面に丁寧な研磨を施す。62、175は他2点に比べ、幅が狭く横に細長い形状を呈する。62の両肩はやや下がり気味である。64はSD－50、他はSD－100からの出土である。61は凝灰岩製、64は輝緑凝灰岩製、62、169、175は安山岩製である。II類　59、60、63は2個の穿孔を有する方形の石庖丁である。孔は両面から穿たれ、全面に研磨を施す。59の左側孔は右側の孔よりも小さい。60は刃部角度32°の片刃の石庖丁である。右側孔は左側孔の斜め上方に位置し、バランスがとれていない。59、60は安山岩製、63は凝灰岩製で、共にSD－100からの出土である。168は剥離工程の段階である未製品。輝緑凝灰岩製で、SD－100からの出土である。

スクレーパー(第41図、PL.38)

162は、平坦打面からの横長剥片を利用したもので、両面とも一回の剥離により剥取している。断面三角形を呈し、両側辺部と下部に両面から二次加工を施し、刃部となす。

163は、自然面を打面とするが、表面は2つの方向からの剥取が認められ、計3方向の剥離方向を持つ。端部に細かなリタッチが認められるが、使用時に刃こぼれしたものであろう。

164は、幅広い横長剥片を利用したものである。打面は大まかな調整面を持つ打面である。表面の剥離方向は上からの１方向だけである。周辺部に両面から二次加工を施し、スクレーパーとしている。

182はスクレーパーとするより使用痕のある剥片と考えられるもので、調整打面からの剥離で厚みの薄い剥片を剥取している。刃部には細かな剥離痕が認められる。使用時による刃こぼれと考えられる。

162、164は玄武岩、163、182はサヌカイト製で182はPit－263、他はSD－100からの出土である。

石錘（第42～46図　PL.36、37、39）

未製品、欠損品、又紙面の都合上図示出来なかった物を含む46点が出土した。その形態から、５形式に分類をおこなった。

Ⅰ類　大型でドーナツ状を呈し、中央に円孔を有するもの。

Ⅱ類　中型で上部が尖がり気味にせばまり、下部が幅広になる分銅型。

Ⅲ類　最大径が中央にあり、上部、下部共せばまり、端部は丸味をもつ上下左右対称型。

Ⅳ類　円形で側辺に抉入をもつ断面扁平形。

Ⅴ類　特殊な形態を呈するもの。

Ⅰ類　断面の形態の相違により、さらに細分を行なった。

１ａ　大型で丸味をもった円筒状を呈し、幅と高の対比が約１対１である。45、48、57がこれにあたる。45、57は中央の円孔の他に、側面下部から底部に貫く副孔を有する。45は全面に加工痕を残す。今回出土した石錘の中で一番大きく、2.320gを計る。48は1/2を欠損する。

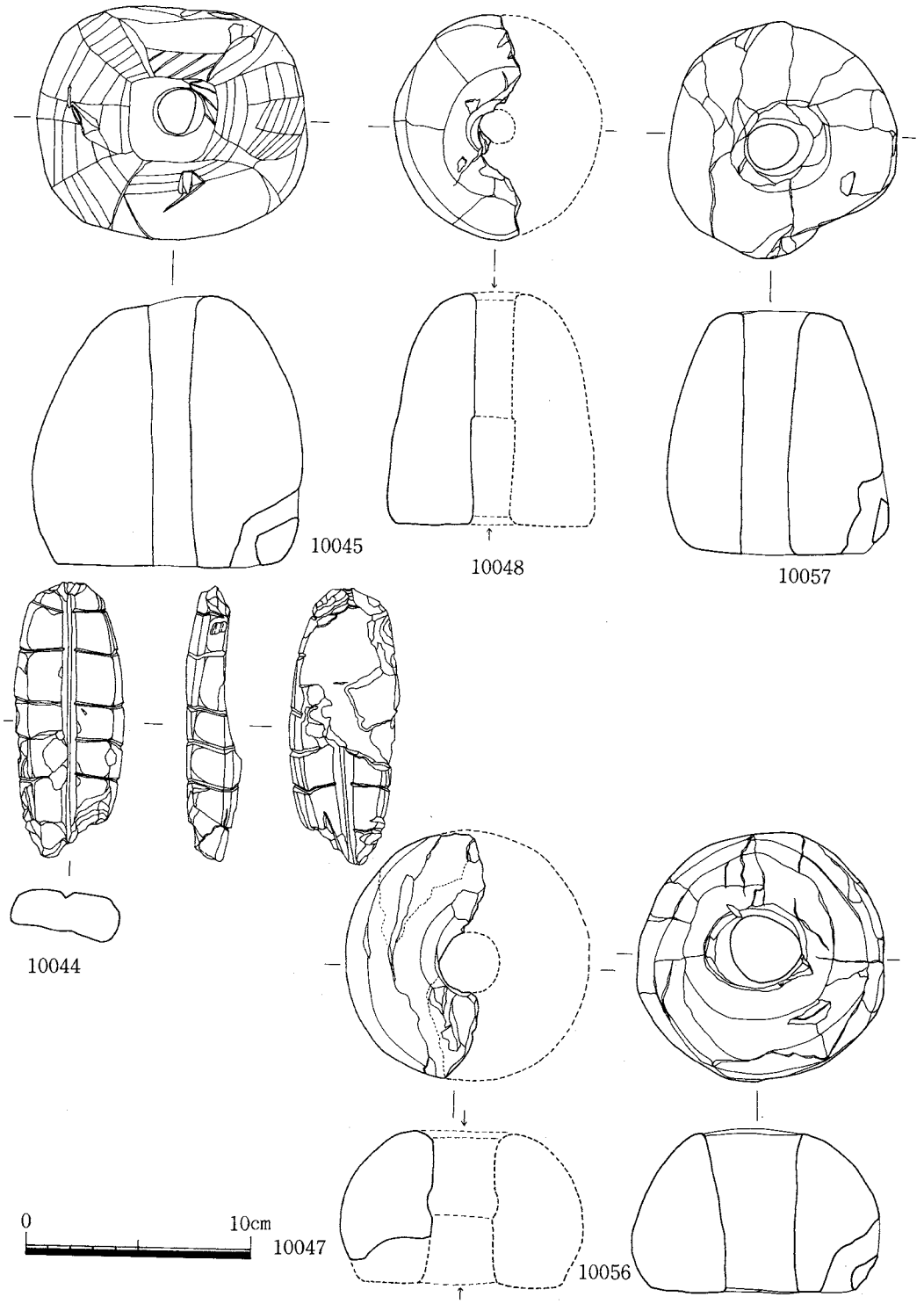
Ｉｂ　基部上りふくらみをもち乍ら立ち上がり頭部で丸く修め、高より幅が大きい。47、56がこれにあたる。47は約1/2を欠損する。一部に火を受けた痕跡を残す。56は中央の円孔の他に、側面下部から底部に貫く副孔を有する。

Ｉｃ　断面が扁平を呈するタイプ、46、51～54がこれにあたる。51は中央の円孔の他に、上面左端より底部左端に貫く方形の副孔を有する。側面及び上面の一部に加工痕を残す。52は面取り段階の未製品である。53は約2/3を欠損する大型の石錘である。中央及び上方に孔を穿ち、側面は丁寧な研磨を施す。体面に加工痕を残す。54は基部径と上面径がほぼ同一な長さの石錘で、全面に研磨が施されている。穿孔部分には、ノミ状工具による加工痕を残す。46は1/3を欠損する大型の石錘で、不純物の多い滑石を使用する。

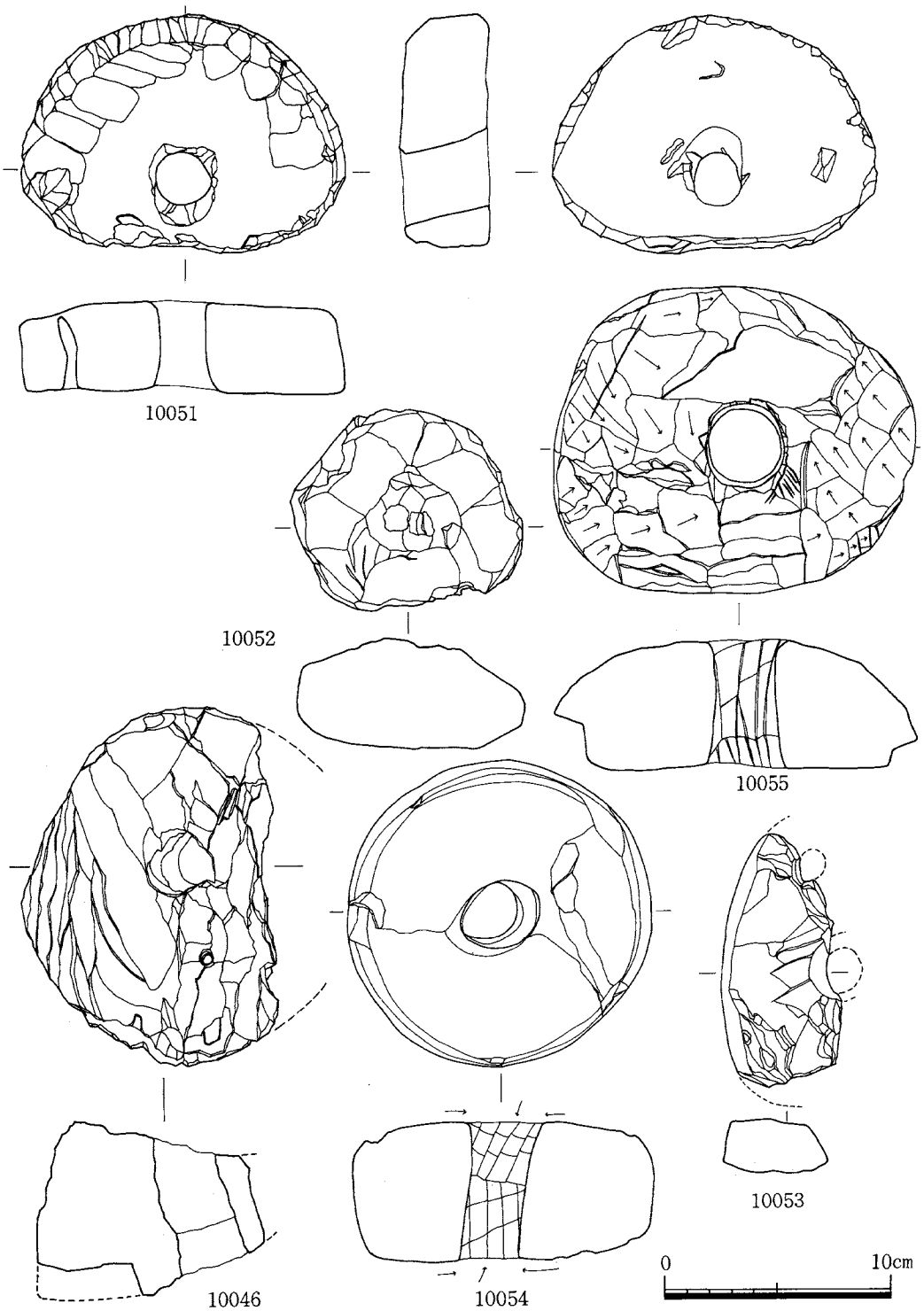
Ｉｄ　断面は最大径が基部にあり、ふくらまず頭部で丸く修めるタイプで、55がこれにあたる。55は全面に加工痕を残す大型の石錘である。中央の穿孔部分にもノミ状工具による加工痕を残す。Ｉ類の石錘は全て滑石製で、SD－100からの出土である。

Ⅱ類　基部の形状の相違でさらに細分を行なった。

IIa　基部が緩やかに丸みをもつタイプ、19、20、25、27、33、35がこれにあたる。19、20、25は基部より1/3上方の位置に一個の孔を穿ち、先端と孔を一条の溝で結ぶ一孔上溝タイプである。
19は先端が丸みをおびず、水平に切られている。形態はほぼ円錘状で横断面は正円に近い。
20は先端が尖がらず丸みをもち、横断面は基部に向かう程楕円形に近くなる。25の横断面は基部付近で円形に近くなる。共に滑石製でSD－100からの出土である。27は一個の孔を穿ち一条の溝を巡らす一孔一溝タイプに短軸溝を上部、下部に付加したタイプで、孔は基部より1/3上方に位置する。長軸溝は全周せず、両端部は平坦で、横断面はほぼ正円を呈する。33は2個の孔を穿ち一条の溝が巡る二孔一溝タイプで、孔は中央より下部に2個並ぶ。横断面は楕円形を呈す。35は2ケの孔を穿ち、上方の孔と先端を結ぶ二孔上溝タイプで、上方の孔は中央よりやや上部に、下方の孔は基部に近い部分に穿たれている。全面に加工痕を残し、溝は加工途中か楔痕跡を残す。横断面は正円に近い。
IIb　基部が球形を呈するタイプ、24、176がこれにあたる。24は一孔上溝タイプで、孔は中央よりやや上部にあり、溝は先端部と孔を結ぶ。孔の下部及び両側面に溝の製作途中と思われる刻み痕が観察出来る事から、長軸に二条の溝が巡る可能性がある。基部は球形を成し、横断面は楕円形を呈する。176は二孔無溝タイプで、中央よりやや下方に孔を穿ち、先端と中央よりやや上方に貫く孔を穿つ。体面に加工痕を残す。基部は球形を成し横断面は円形である。24、176は共に滑石製で、SD－100からの出土である。
IIc　基部が平坦なタイプ、21～23、26、32、34、39がこれにあたる。21、22、34、39は一孔上溝タイプで、孔は中央部より下方に位置する。39の先端は丸みをもつが、他3点は平坦である。横断面は、21、22が楕円形、34、39が正円に近い。34は全面に加工痕を残す。21、22、39が滑石製、34が粘板岩で、共にSD－100からの出土である。23、26は二孔上溝タイプである。23の孔は中央部と、それより1.5㎝下方に穿たれ、上端部は平坦、横断面は楕円形を呈する。全体に丁寧な研磨が施されている。26の孔は、上方が先端より1/4、下方が基部より1/4の位置にあり、下方が上方の約2倍の大きさをもつ。側面は丁寧な研磨が施され、緩やかに内湾している。横断面は隅丸方形を呈す。32は1/2の欠損により、孔と先端を結ぶ溝は、確認出来るものの、孔より下部の溝は不明である。孔は基部より約1/4上方に位置し、孔を結ぶ短軸溝が巡る。先端は平坦である。
III類
IIIa　胴の張りが大きい紡錘形で29、30、31、36、37、38、40、43、58がこれにあたる。30、38、40は長軸に一条の溝が全周する無孔一溝タイプである。30は粘板岩製で、横断面は円形を呈する。38は滑石製で、横断面は正円に近い。40は中形で滑石製。横断面は隅丸三角形を呈する。共にSD－100からの出土である。37、43は中央に孔を穿ち、長軸に一条の溝が全周する一孔一溝タイプで、



第42図　SD－100出土石器実測図－４（縮尺1/3）



第43図　SD－100出土石器実測図－５（縮尺1/3）

横断面は正円に近い。共に滑石製。37がSD－100、43がPit－252からの出土である。29は長軸に一条、短軸に一条の溝を巡らす十字溝タイプで、短軸の溝は浅く、長軸と交差しない事から、製作の途中と思われる。滑石製で、横断面は楕円形を呈する。31は無孔一溝タイプに、短軸の上下に二条の溝を付加するタイプで、横断面は正円を呈する。滑石製でSD－100からの出土である。36、58は未製品である。共に滑石製で36がSD－100、58がPit－253からの出土である。

IIIb　細形の紡錘形で、28、41、42、183がこれにあたる。28は長軸と短軸に一条づつの溝を巡らす十字溝タイプで、横断面は正円を呈する。上下端部は平坦であり、丁寧に研磨されている。滑石製で、SD－100からの出土である。41は1/4の残存で、長軸に一条の溝が確認出来る。Pit－26の出土である。42は無孔一溝タイプで、製作途中である。滑石製でPit－93からの出土である。183は無孔一溝タイプで、全体に多量の酸化鉄が付着する。基部は平坦を成し、横断面は正円である。滑石製でPit－226からの出土である。

IV類　15、16がこれにあたり、円形で片側に抉入をもち、断面は扁平を呈する。共に滑石製でSD－100からの出土である。２点とも未製品である。

V類　44がこれにあたり一部を欠損する。長軸に幅広の溝を一条巡らし、短軸にほぼ等間隔で、六条の浅い溝を巡らす。横断面は隅丸方形を呈す。滑石製でSD－01からの出土である。119、120は全体に面取り加工を行った未製品で、石材は滑石を使用する。120は火を受けた痕跡を残す。

紡錘車（第47図　PL.39）

17点出土の内、16点を図示した。完形品が９点で他は未製品である。

1　大型の紡錘車で、形態は正円に近く直径が7.1cmを計る。孔はほぼ中心にあり、孔の径は0.9cmを計る。穿孔は両面からなる。縁のやや内側に、コンパス状の工具で描いたと思われる圏線をもつ。研磨は全面に及び、その方向は不明。全面に酸化鉄付着。

2　直径は５cmを計り正円に近い形態をもつ紡錘車で、全面に研磨を施す。穿孔は一方向からで、孔の径は0.6cmを計る。

3　直径は4.3cmを計り、孔は中心に穿たれる。穿孔は一方向からで、孔の径は0.5cmを計る。全面に研磨を施す。方向は不明である。

4　直径は4.4cmを計り、孔は中心に穿たれる。穿孔は一方向からで、径は0.7cmを計る。全面に三方向からの研磨を施す。

5　直径は4.3cmを計り、孔は中心よりやや下にずれる。孔は一方向から穿たれ、その径は0.5cmを計る。研磨は全面に及び方向は不明。

6　直径は4.35cmを計る。穿孔は中心よりやや上方にずれ、中心部は、僅かなふくらみをもつ。穿孔は一方向からなる。研磨は全面に及び方向は三方向からなる。

7　直径4.45cmを計る。穿孔は中心よりやや上方にずれ、一方向から穿たれる。穿孔径は、0.

7cmを計り研磨は全面に及ぶ。片面の剝離が著しい。

8　一部を欠損する。直径は4.95cmを計り、穿孔は中心に有する。穿孔径は0.6cmを計り、穿孔方向は一方向。研磨は全面に及ぶ。

9　直径は4.55cmを計り、穿孔は中心に位置する。穿孔径は0.7cmを計り、一方向から穿たれる。全面に丁寧な研磨を施す。方向は二方向。完成品は全て滑石製で、SD－100からの出土である。形態は全て円形を呈する。

10、11、14は未製品で、研磨段階まで終えた、ほぼ完成に近い形である。

10　中心に孔を穿つ途中と思われる凹みを有する。

11　表面の剝落は、研磨後のものと思われる。

14　約1/3を欠損する。3点共滑石製で、SD－100の出土である。

12、17、18は両面に研磨を施す。側辺は稜をもたず、研磨も行なわれない。3点共滑石製で、SD－100からの出土である。

13　玄武岩製の紡錘車未製品で、SD－100からの出土である。

石皿（第48図　PL.41）

石皿は6点出土した。

148は玄武岩製で楕円形を呈し、側面は研磨を施す。上面は凹みをもたず平坦を成す。

146は玄武岩製で三角形を呈する石皿である。断面は長方形を呈し、表面は平坦である。

147は玄武岩製の石皿で、中央部は凹みをもつ。SD－100から出土である。

144は玄武岩製で中央部は僅な凹みをもつ。

82は花崗岩製の石皿で、SX－03からの出土である。両面の大きな凹みから、使用頻度が高かった事が伺える。

145はSD－100からの出土で、凝灰岩製の石皿である。中央部は緩やかに凹んでいる。

磨石（第51、52図　PL.41）

多数出土した内、27点を図示した。

152～156、170は重さ10K以上で、片面に使用痕が観察出来る事から台石として使用されたものと思われる。

125、126、141は約1.5～5.2Kの重さで、断面は楕円形を呈する。

124、131、132、137、139、142は楕円形の磨石で、中央及び両端部に使用痕が認められる。

130、133、136は棒状を呈し、136の両端は潰れた状態にあり、叩き石の代用としても、使用頻度の高かった事が伺える。130の片面は凹凸を成す。

123、127、128、129、134は使用頻度の低い磨石で、凹凸面を有する。123は断面が薄く、形状は扁平な円形である。127は全体に凹凸面をもつものの、先端は滑らかでこの部分だけは頻繁に使用

されていたものと思われる。128は全面に敲打痕を残し、磨石として使用した痕跡は確認出来ない。一部に酸化鉄付着。129は先端の一部を欠損する磨石で、中央が凹む事から、石皿的役目も果たしていたものと考えられる。138、139は円形に近い形の磨石で、全体が滑らかである。135は両端に使用頻度の高い潰れ痕を残し、側辺に僅かな凹みをもつ。石錘に転用しようとした意図が伺える。151は玄武岩製の磨石で全体に緩やかな稜をもつ。断面は厚くその形態から、石斧製作中の失敗品の転用とも考えられる。

140は滑石の円礫で全体に凹凸をもつ。石錘の未製品の可能性がある。

叩き石(打器)(第40図　PL.40)

96、97は全面に敲打面を残す完形の叩き石である。97の基部は球形を呈し、両端に打撃痕が観察出来る。103は基部を欠損する叩き石で全面に敲打時の凹みをもつ。先端部は使用痕が観察できる。３点共玄武岩製で、SD－100からの出土である。

石核(第52図　PL.41)

149は裏面が節理面で剝落した状態である。これは、側面調整のための剝離が、節理面に附合したために生じたものである。打面は平坦打面で周辺部を上からと側面からの加撃によって剝取している。玄武岩製でSE－01から出土した。

150は敲打段階まで進んだ製品を半割し、その後で、上からと側面から剝片を剝取している。SE－01で石材は玄武岩である。

砥石(第49、53図　PL.40、41)

砥石は27点を出土した。様々な形態や石材の相違、又大きさによって幾つかに区分出来るが、ここでは、荒砥ぎ用と仕上げ砥ぎ用の２種類に区分を行った。荒砥ぎ用としての石材は、砂岩、玄武岩等が多い。仕上げ用としての石材は凝灰岩が主流をしめる。

荒砥ぎ用　69～71、74～80、84、88～92、94、174、178、179があげられる。

69は四辺形を呈し全面を使用。上面は鋭利な物を砥いだ痕跡を残す。70、71、74、77は４面を使用している。凹みが大きく、使用頻度の高かった事が伺える。75、76、78、79は大型で、断面は方形を呈する。75、76、78は両面を砥石面とする。79は片面砥石面で中央部に段をもつ。鋳型の再利用である。80は断面が隅丸方形で両面を砥石面とする。84は断面は薄く片面を砥石面とする。表面に火を受けた痕跡を残す。88、89は小型の砥石で、88は両面を砥石面とし、片面に稜をもつ。89は変形の四辺形で、全面を砥石面とする。90は両面が砥石面で、大きな凹みから使用頻度の高い事が伺える。91は楕円形の形状で、片面を使用、92、94は玄武岩製で一面を使用。174は断面が方形を呈し、3面を砥石面とする。178、179は玄武岩製の砥石で、178は１面を、179は全面を砥石として使用する。

仕上げ砥ぎ用として72、73、81、85～87、93の７点があげられる。

72は凝灰岩製の砥石で半割されている。砥石面は3面で、滑らかで木目が細かく光沢をおびる事から使用頻度の高い事が伺える。側面の先端に、赤色顔料が付着している。

73は全面を砥石面とする凝灰岩製の砥石で、両端部を欠損する。側面及び欠損部に酸化鉄が付着する。

81は仕上げ砥ぎ用としては大型で、断面は鋭角をもつ方形で、細長い形状を呈する。凝灰岩製の砥石で、4面を砥石面とし、滑らかである。使用頻度はかなり高い。

85は小型で細長い形状を呈する粘板岩製の砥石で2面を砥石面とする。片面は横方向への使用痕が認められる。

86は断面が、方形を呈する小型の凝灰岩製砥石である。4面を使用。

87は2面を砥石面とする。小型の粘板岩製砥石で、上面の左角に親指大の凹みをもつ。又下面右角にも僅かな凹みが観察出来る。凹み付近は、あばた状に凹凸を成す事から、意図的に敲打具により加工を加えたものと思われる。

93は凝灰岩製の砥石で、72と同様に半割されている。断面は台形を呈し、砥石面は5面に及んでいたと思われるが、上面は剝取されている。側面に酸化鉄が付着する。86はPit396、他はSD－100からの出土である。

参考文献

福岡市教育委員会　『今山遺跡(1)』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第22集　1968

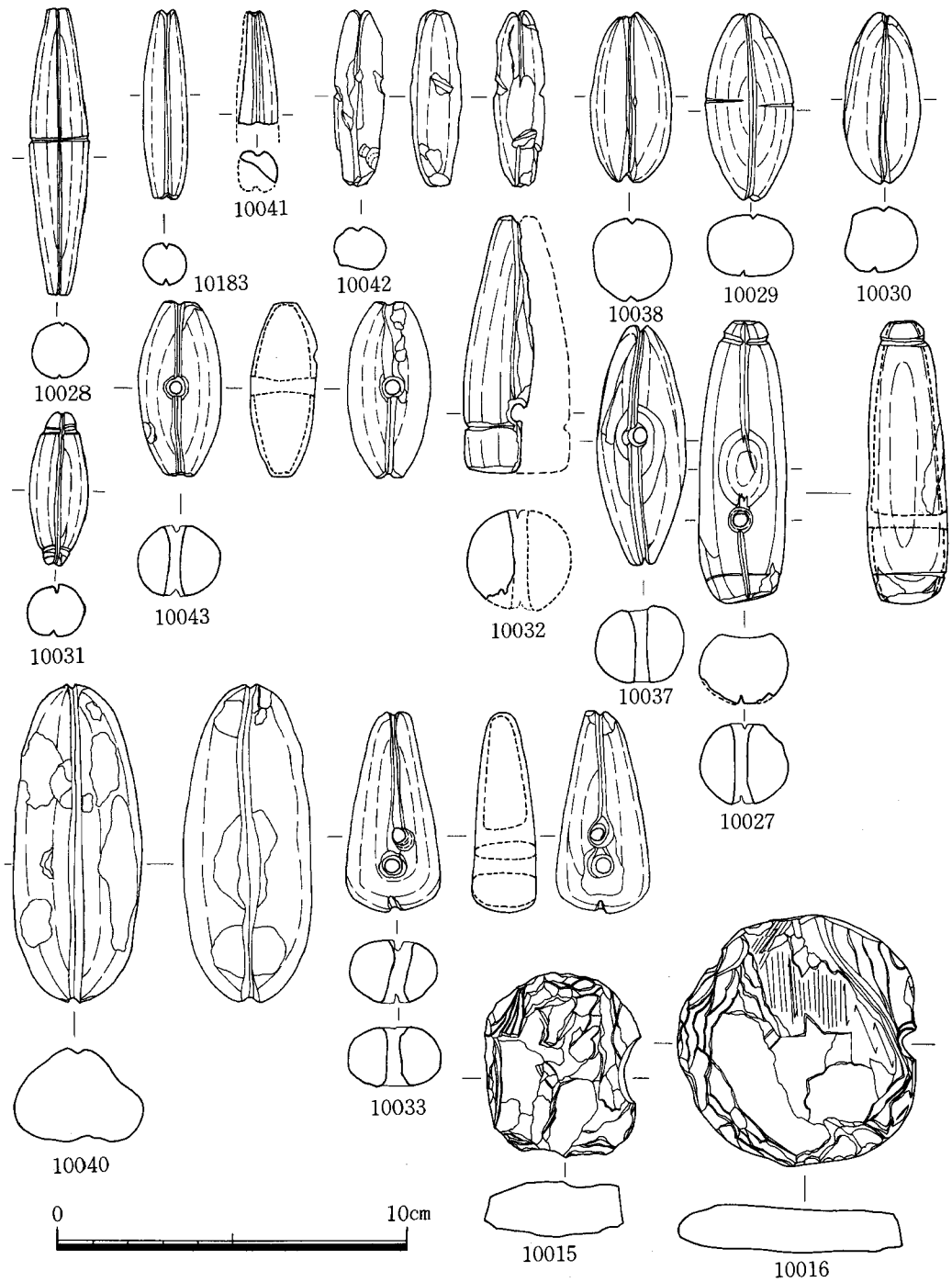
福岡市歴史資料館　『福岡平野の歴史－緊急発掘された遺跡と遺物』　1977

福岡市教育委員会　『今山・今宿遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集　1981

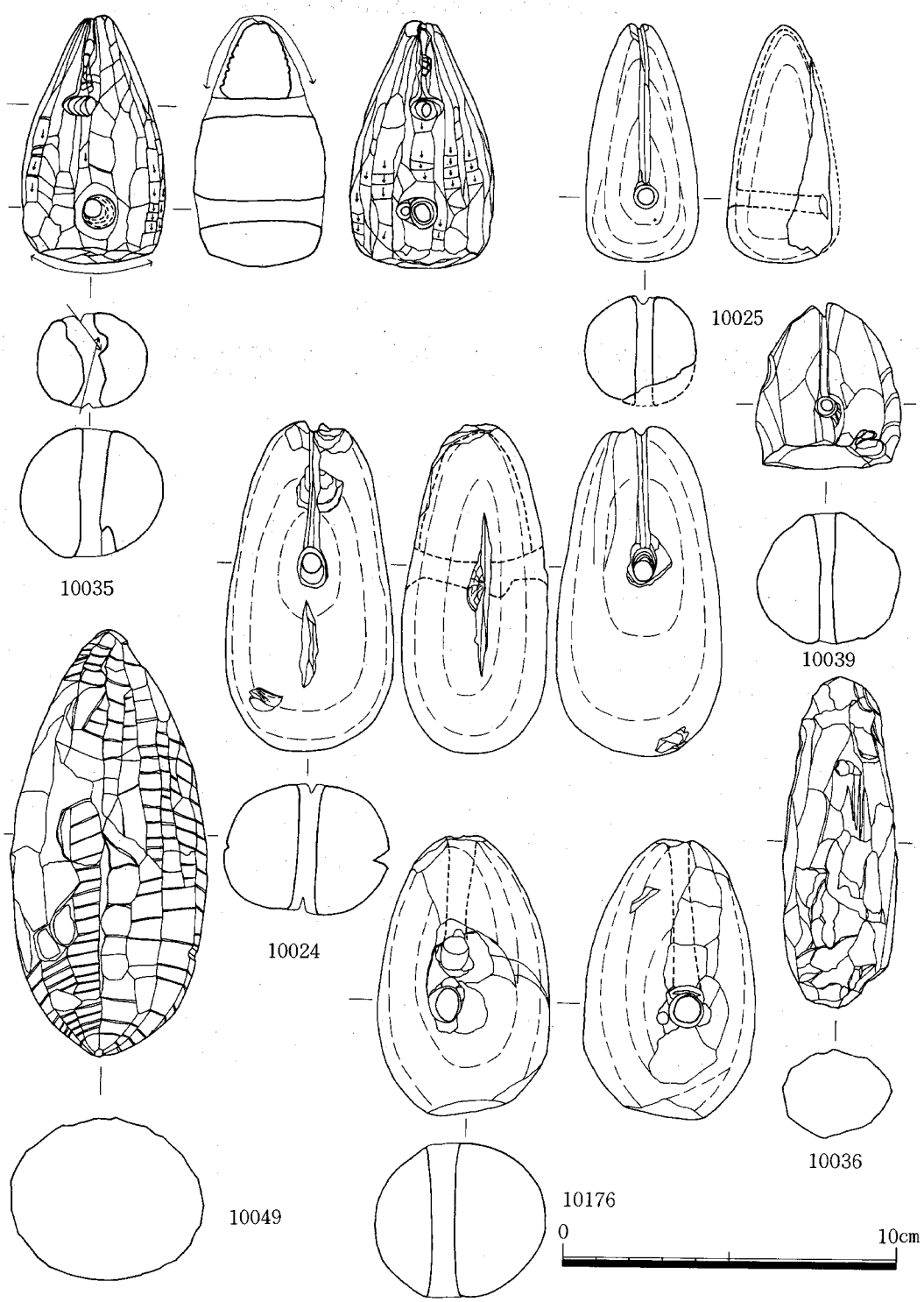
福岡市教育委員会　『青木遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第169集　1986

福岡市教育委員会　『今宿五郎江遺跡Ⅰ』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第132集　1986

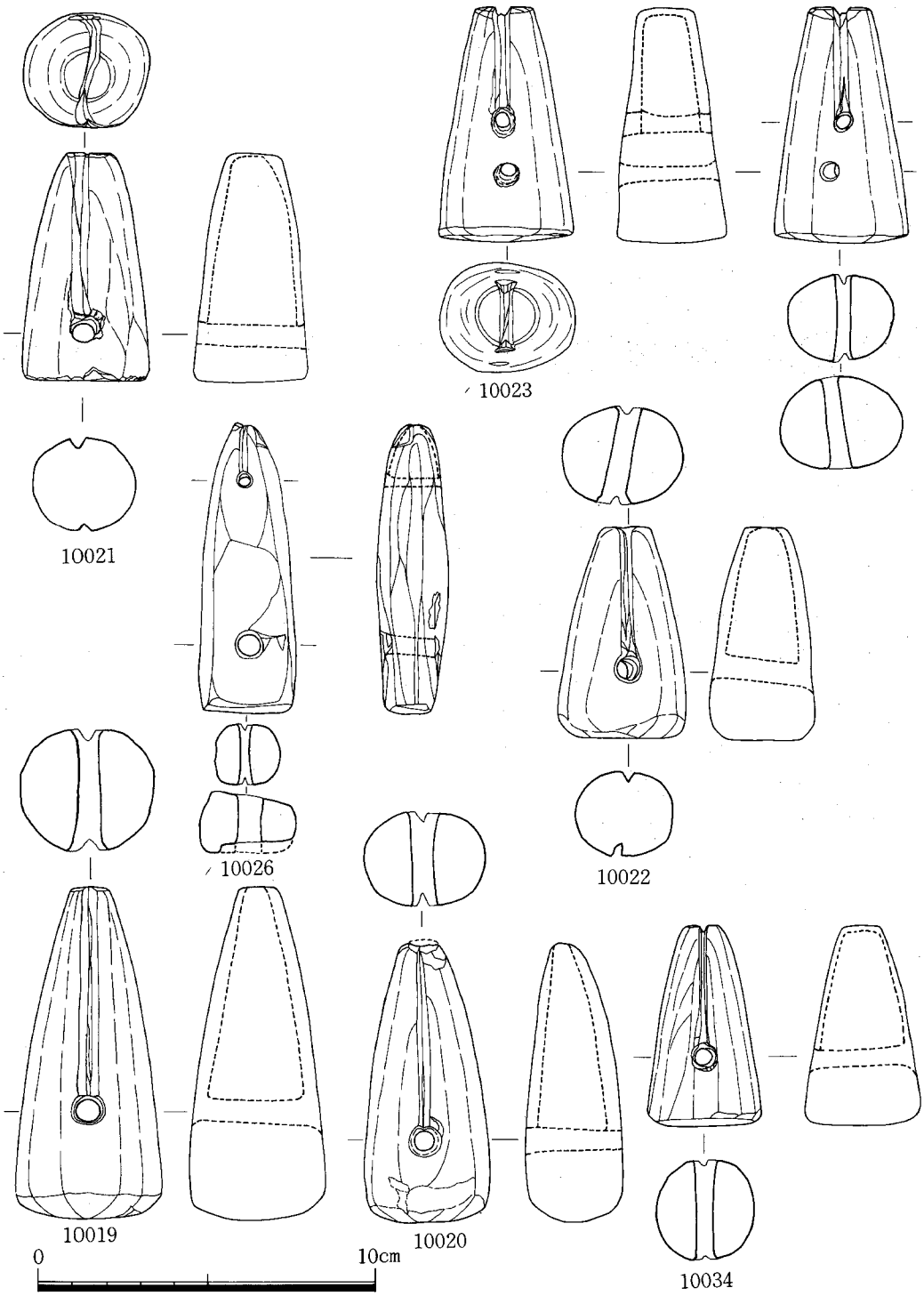
下條信行『弥生・古墳時代の九州型石錘について』　九州文化史研究所記要第29集　1984



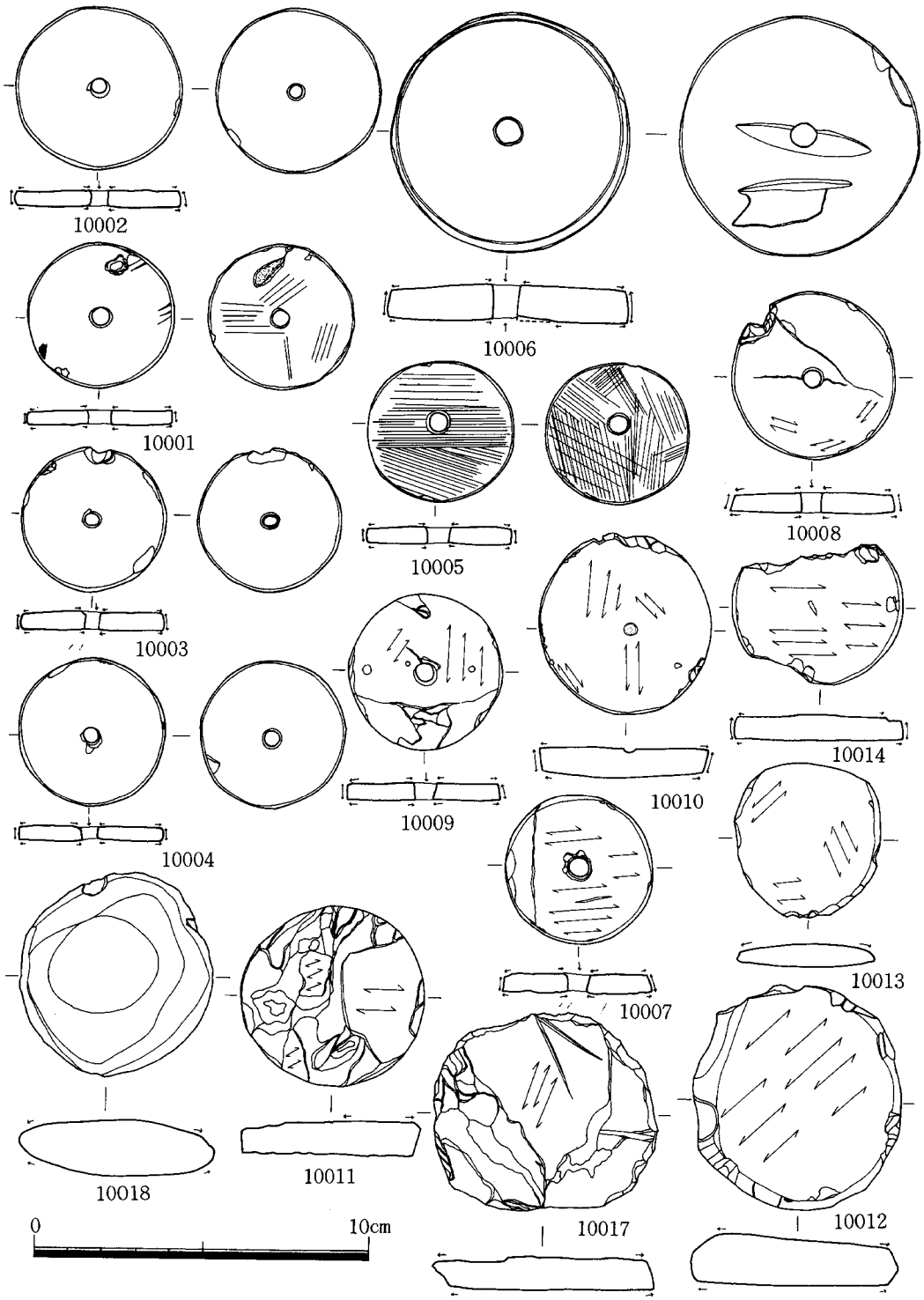
第44図　SD－100出土石器実測図－６（縮尺1/2）



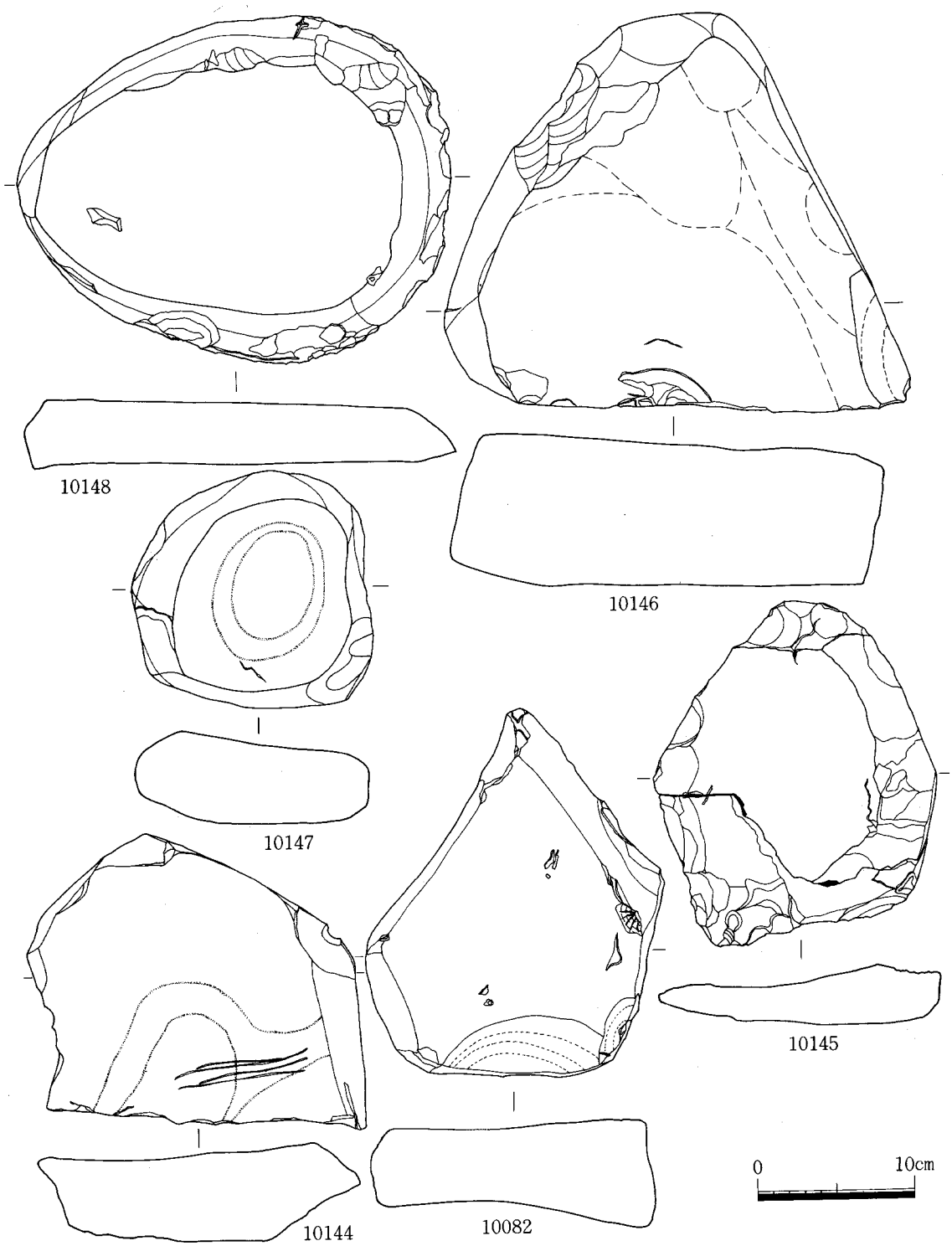
第45図　SD－100出土石器実測図－７（縮尺1/2）



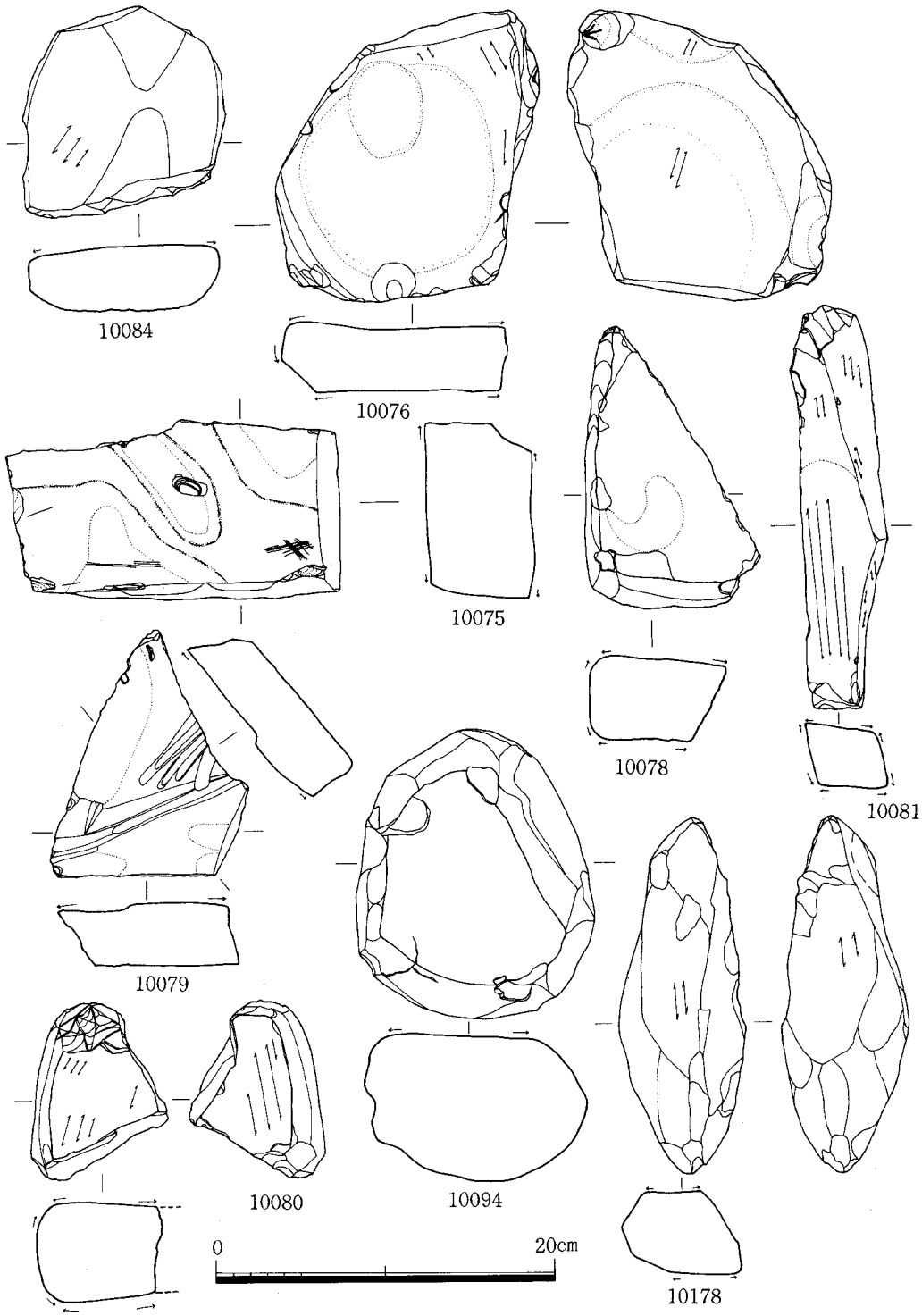
第46図　SD－100出土石器実測図－８（縮尺1/2）



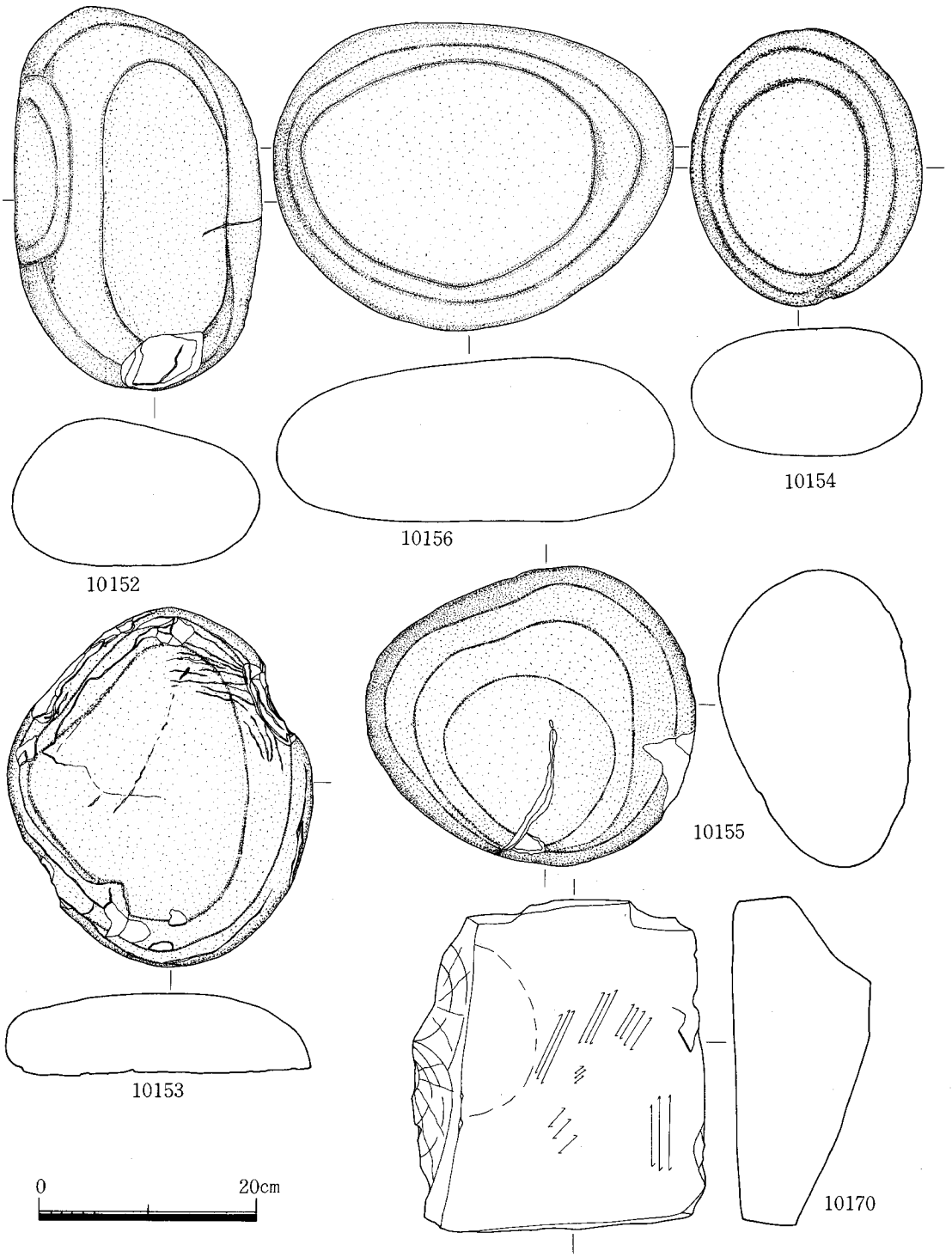
第47図　SD－100出土石器実測図－９（縮尺1/2）



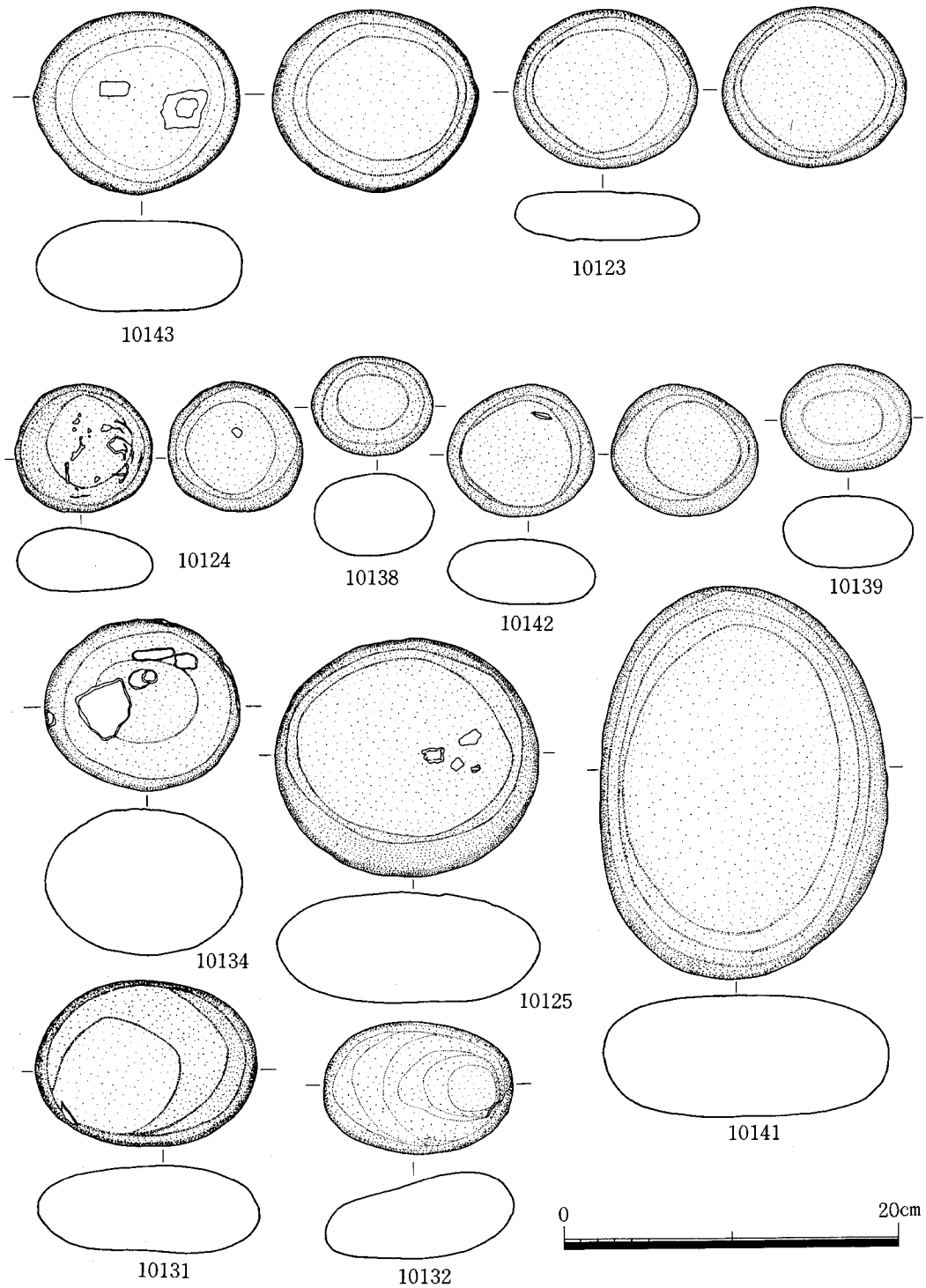
第48図　SD－100出土石器実測図－10（縮尺1/4）



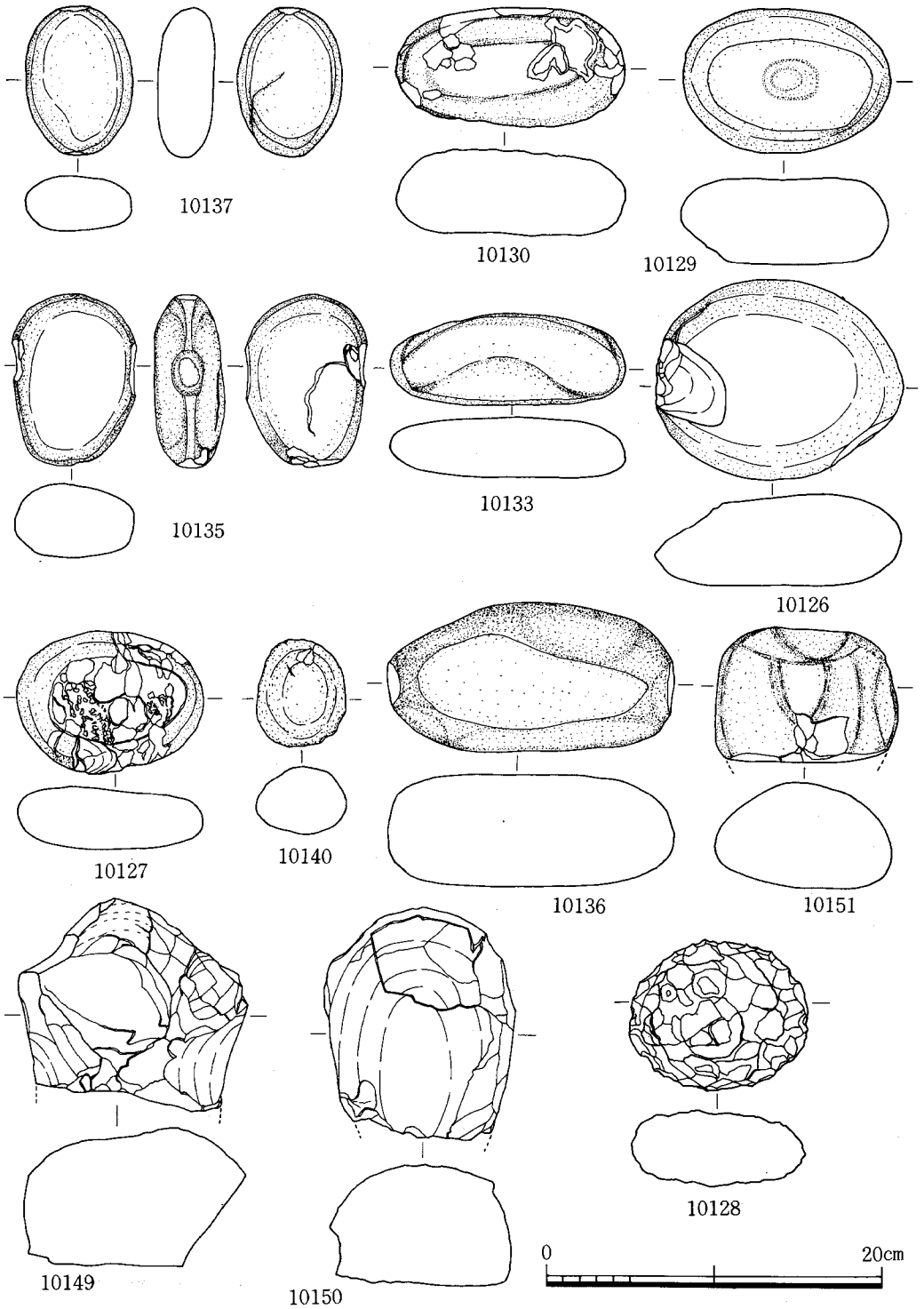
第49図　SD－100出土石器実測図－11（縮尺1/4）



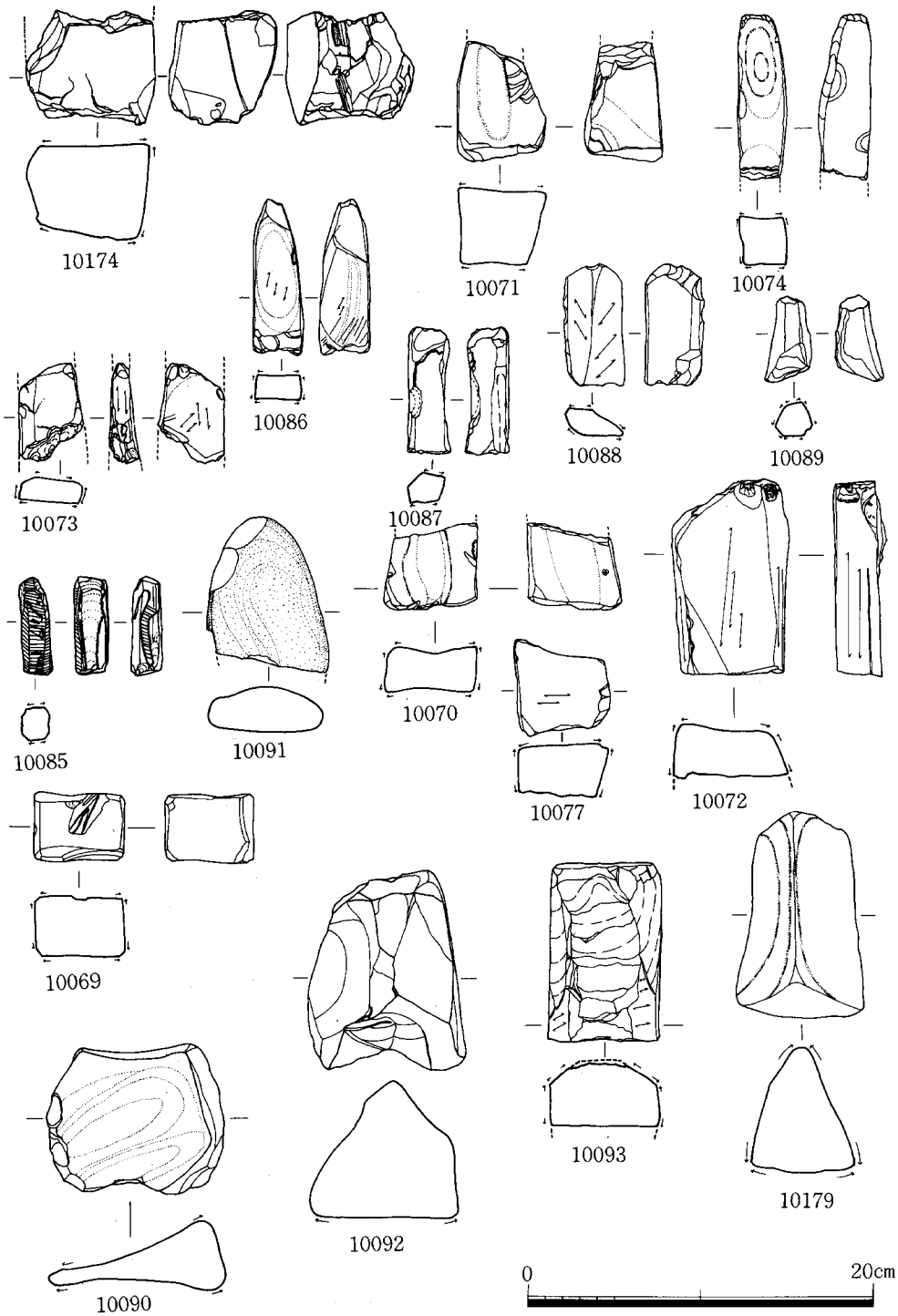
第50図　SD－100出土石器実測図－12（縮尺1/6）



第51図　SD－20・SD－100出土石器実測図(縮尺1/4)



第52図　SE－01，SD－100出土石器実測図（縮尺1/4）



第53図　SD－100・115出土石器実測図(縮尺1/4)

遺物登録番号	器種	法量(cm) 長	幅	厚	形式	重量(g)	石質	残存状況	出土遺構	Fig.	PL.	備考
840710001	紡錘車	7.2		1.1		18	滑石	0.7cm	SD−100	47	39	圓線を持らその外縁で製作 研磨は全面に及びその形態は円 研磨方向は不明
10002	〃	5.0		0.5		28	〃	穿孔径0.6cm		47	39	穿孔は１方向 全面に研磨有
10003	〃	4.3		0.6		22	〃	0.5cm		47	39	穿孔は１方向 全面に研磨有・方向不明
10004	〃	4.4		0.4		109	〃	0.9cm		47	39	滑石穿孔は１方向 全面に研磨
10005	〃	4.3		0.45		16.5	〃	0.7cm		47	39	穿孔は１方向から
10006	〃	4.35		0.55		15.5	〃	0.5cm	SD−100	47	39	穿孔の位地が中心よりずれている 穿孔は１方向・研磨は３方向から 厚さが異なる
10007	〃	4.45		0.6		24	〃	0.5cm	SD−100 S−2	47	39	表面の磨きはていねいであるが裏面は雑 裏面の剥離が著しい
10008	〃	4.95		0.6		30.5	〃		SD−100 S−20　1包	47	39	
10009	〃	4.55		0.5		23.5	〃		SD−100 S−8	47	39	
10010	〃	5.05		0.85		49	〃	未製品	SD−100	47	39	
10011	〃	5.35		1.05		56	〃	〃	SD−100 S−14　1包	47	39	表・裏共剥離が著しい
10012	〃	6.8	6.1	1.55		108.5	〃	〃	SD−100	47	39	
10013	〃	4.6	4.1	0.7		109	玄武岩	〃	5区SD−100 1包	47	39	
10014	〃	4.2	5.1	0.75		23.5	滑石	〃	SD−100	47	39	
10015	石錘	5.3	4.5	1.6	Ⅳ	44	〃	〃	〃	44	39	
10016	〃	7.2	6.9	1.3	Ⅳ	108.5	〃	〃	〃	44	39	
10017	紡錘車	5.9	6.7	1.0		64	〃	〃	〃	47	39	
10018	〃	6.1	5.7	1.7		91.5	〃	〃	〃	47	39	
10019	石錘	9.9	4.3	2.7	Ⅱa	223	〃	穿孔径0.7cm	〃	46	37	基部は凸レンズ状，形態はほぼ円錐状 横断面は正円に近い
10020	〃	8.4	3.8	2.9	Ⅱa	133	〃	〃　0.6cm	〃	46	37	底部は凸レンズ状 横断面は底部に向う程楕円形に近い
10021	〃	6.8	3.8	3.4	Ⅱc	132	〃	〃　0.6cm	〃	46	37	基部は平坦 横断面は正円に近い楕円
10022	〃	6.3	3.9	3.1	Ⅱc	109	〃	〃　0.6cm	〃	46	37	平底，横断面は楕円 穿孔は中軸に対し少しずれている
10023	〃	7.0	4.1	3.3	Ⅱc	121	〃	〃　0.5cm	〃	46	37	底部は凸レンズ状 全体的によく磨かれており光沢を生じる
10024	〃	10.0	5.1	4.4	Ⅱb	318	〃	〃　0.7cm	〃	45	37	基部は球形を成す 浅い溝状切り込み
10025	〃	7.2	3.4	3.2	Ⅱa	103	〃	〃　3.2cm	〃	45	37	底部は凸レンズ状 横断面の底部近くでは正円に近い
10026	〃	8.7	2.9	2.0	Ⅱc	73	粘板岩	〃　①0.3cm ②0.7cm	〃	46	37	基部は平底，横断面は隅丸方形 側面は丁寧な磨きゆるやかに内湾している
10027	〃	8.2	2.6	1.8	Ⅱa	66	〃	〃　0.4cm	〃	44	37	底部は右上りで中央は凹む。 表面剥離，溝状切り込み浅く作りかけか？
10028	〃	8.3			Ⅲb	29	〃	中央径1.7cm	〃	44	37	表面丁寧な磨き，横断面はほぼ正円 縦・横両方の溝共に１周する
10029	〃	5.4	2.6	1.8	Ⅲa	36	〃		〃	44	37	縦の溝は明瞭に一周するが横の溝は作りかけか？　浅く不明瞭
10030	〃	4.9	2.2	1.9	Ⅲa	25	〃		〃	44	36	縦溝は周囲をめぐる 横断面は不整円形
10031	〃	4.4	1.7		Ⅲa	15	滑石		〃	44	36	縦溝は深く明瞭に刻まれている 横溝は浅くはっきりしない部分もある（使用の為か？） 横断面は正円に近い
10032	〃	7.5	推3.1	推2.9	Ⅱc	52	〃	穿孔径0.6cm	〃	44	37	底部はわずかに凸レンズ状をするが平底に近い。 縦溝は半周していたと思われる
10033	〃	5.8	2.8	1.8	Ⅱa	35	〃	〃　①0.5cm ②0.5cm	〃	44	36	横断面は楕円形 使用の為かあれている
10034	〃	6.0	3.5		Ⅱc	77	粘板岩	〃　0.5cm	〃	46	37	底部はやや凸であるが平底の加工跡有 全面に加工によるリョウ線が残る
10035	〃	7.5	4.3	3.9	Ⅱa	171	滑石	〃　①0.6cm ②0.7cm	〃	45	36	底部は凸レンズ状を成し加工痕残る 上から下への加工痕が残る 溝は加工の途中か？　クサビ痕跡残る
10036	〃	10.0	3.4	2.7	Ⅲa	114	〃	未製品	〃	45	38	
10037	〃	6.9	2.55	2.2	Ⅲa	50	〃		〃 S−12	44	37	
10038	〃	4.9	2.3	2.4	Ⅲa	35	〃		5区SD−100 1包	44	36	
10039	〃	5.0	4.2	4.0	Ⅱc	117	〃		SD−100 S−19　1包	45	37	
10040	〃	9.15	3.7	2.7	Ⅲa	114	〃			44		
10041	〃	3.25	1.15	0.9	Ⅲb	4.5	〃		pit−26	44	36	
10042	〃	5.1	1.5	1.2	Ⅲb	14	〃		pit−93	44	36	
10043	〃	5.05	2.3	2.0	Ⅲa	37	〃		pit−252	44	36	
10044	〃	12.5	4.8	2.35	Ⅴ	197	〃		SD−01	42	37	
10045	〃	10.5	12.3		Ⅰa	2320	〃		SD−100	42	39	
10046	〃	16.2	11.5	7.8	ⅠC	1070	不純物の多い滑石		〃	43	39	
10047	〃	11.0	5.9		Ⅰb	470	滑石		〃	42		火を受けた痕跡がある
10048	〃	10.1	10.5		Ⅰa	740	〃		〃	42		
10049	〃	12.8	5.9	4.9		480	〃	未製品	〃	45		

Tab. 7　出土石器一覧表－１

遺物登録番号	器種	法量(cm) 長	幅	厚	形式	重量(g)	石質	残存状況	出土遺構	Fig.	PL.	備考
840710050	石錘	10.65	5.25	3.3		310	滑石	未製品	SK-01			
10051	〃	10.5	14.25	4.0	Ⅰc	1080	滑石		SD-100	43	39	
10052	〃	10.7	14.55	3.9	Ⅰc	610	滑石	未製品	〃	〃		
10053	〃	11.35	5.4	2.4	Ⅰc	250	滑石	約¼	〃	〃		
10054	〃	13.4		6.3	Ⅰc	1940	〃		〃	〃	39	
10055	〃	16.25		5.8		1935	〃		〃	〃	39	大型
10056	〃	11.3		7.5	Ⅰb	1200	〃		〃	42	39	S－3
10057	〃	10.7		11.1	Ⅰa	1600	〃		〃	〃	39	S－6
10058	〃	3.3	1.5	1.3	Ⅲa	10	〃	未製品	Pit-253		36	
10059	石鏃丁	4.8	6.5	0.6		35	〃		SD-100	41	38	
10060	〃	4.8	8.45	0.6		47.5	〃	完形品	〃	〃	〃	完成品 片刃で穿孔のバランスがとれていない
10061	〃	6.1	9.4	0.5		52.5	凝灰岩		SD-100 1包	〃	〃	穿孔をもたない大型で三角形を呈する 表面の剥落が著しいため研磨方向不明
10062	〃	4.1	10.9	0.75		45.5	安山岩	完形品	SD-100	〃	〃	完形・研磨が丁寧である
10063	〃	4.95	7.6	0.6		61	凝灰岩		〃	〃	〃	
10064	〃	5.4	12.2	0.85		76	輝緑 凝灰岩		SD-50	〃	〃	
10065	石剣	8.75	4.0	1.05		43.5	結晶片岩		〃	38	36	66と同一個体
10066	〃	10.3	5.35	1.5		103.5	〃		pit-253	38	〃	〃
10067	石戈	10.3	4.5	1.5		1790	変成岩		SD-100	38	〃	
10068	石剣	11.1	4.5	1.7		92	頁岩		SE-01	38	36	
10069	砥石	4.05	5.2	3.6		134	硬質砂岩		SD-100	53	37	
10070	〃	5.0	5.5	2.6		110	〃		〃	53	〃	
10071	〃	7.0	5.1	4.4		220	〃		〃	53		
10072	〃	11.4	6.75	3.0		340	輝緑 凝灰岩		〃	53	40	仕上げ砥ぎ、赤色顔料(朱？)付着一部に酸化鉄付着 色調黒褐色、半割されている部分明灰褐色
10073	〃	5.8	3.8	1.5		40	粘板岩		〃	53		仕上げ砥ぎ、色調・灰褐色 割れ口に多量の酸化鉄付着
10074	〃	9.55	2.8	2.8		114	花崗岩		〃	53	37	色調・淡白褐色 かなり使い込まれたものと思われる
10075	〃	19.8	10.8	6.5			玄武岩		〃	49	41	色調・明灰褐色
10076	〃	17.3	15.65	4.2		2845	硬質砂岩		〃	〃	41	使用痕、色調・明灰褐色
10077	〃	5.65	5.5	3.1		122.5	〃		〃	53		
10078	〃	16.8	10.4	5.2		980	凝灰岩		〃	49		
10079	〃	14.6	11.7	3.75		700	花崗岩	半割	〃	〃	41	鋳型を転用か
10080	〃	10.6	8.2	5.9		545	閃緑石		〃	〃		
10081	〃	24.0	5.65	3.87		795	凝灰岩		〃	〃	41	
10082	石皿	23.4	19.1	6.9		3330	花崗岩	半割	SX-03	48		
10083	石斧	10.4	3.7	3.0		218	頁岩		SD-100	38	37	柱状袂入片刃石斧
10084	砥石	12.4	11.9	3.95		815	砂岩		〃	49		
10085	〃	5.9	1.65	1.95		25	粘板岩		〃	53	37	全面が砥石面
10086	〃	9.1	2.8	1.5		65	凝灰岩		pit-396	〃	38	
10087	〃	7.1	2.2	1.8		50	〃		SD-100 1包	〃		S区
10088	〃	7.0	3.4	1.6		51	砂岩		SD-100	〃		
10089	〃	5.0	2.8	2.0		26	〃		pit-5	〃		
10090	〃	8.7	10.15	4.0		325	〃		SD-100	〃		
10091	〃	9.1	7.05	2.65		205	〃		〃	〃	40	
10092	〃	11.6	9.1	8.0		1120	玄武岩		〃 S-25	〃		
10093	〃	10.4	6.5	3.7		400	凝灰岩		〃	〃		半割されているがおそらく全面が砥石面と考えられる
10094	〃	17.15	14.05	8.85		3600	玄武岩		〃 S-17	49	41	
10095	浮子	3.7	2.5	2.45		8	軽石	半割	〃			面取りをしている
10096	打器	11.0	5.25	4.5		410	玄武岩		〃	40	40	全面に敲打を受けた痕跡がある
10097	〃	14.1	5.2	5.8		550	〃		〃	〃	〃	両先端部に打撃痕
10098	石斧	10.4	6.6	1.7		195	〃		〃	〃	〃	

Tab. 8　出土石器一覧表－2

遺物登録番号	器種	法量(cm)			形式	重量(g)	石質	残存状況	出土遺構	Fig.	PL.	備考
		長	幅	厚								
840710099	石斧	9.7	6.3	2.3		240	玄武岩		SD-100	40	40	
10100	〃	7.4	6.55	2.0		185	〃		〃	〃	〃	
10101	〃	12.7	8.1	4.6		740	〃		〃	〃	39	
10102	〃	11.0	5.0	2.7		230	粘板岩		〃	〃	40	基部の一部を欠損
10103	打器	9.5	6.3	4.9		495	玄武岩		〃	〃		
10104	石斧	13.1	8.4	6.4		1110	〃		〃	39	39	
10105	〃	15.3	8.8	4.8		840	〃		〃	40	〃	
10106	〃	6.15	7.5	4.2		355	〃		〃	39	40	
10107	〃	14.6	9.2	6.2		1140	〃		〃	40	39	
10108	〃	8.4	7.2	3.2		290	〃		〃 1包	39	40	
10109	〃	8.8	6.45	2.9		315	〃		〃	〃	〃	
10110	〃	15.4	8.05	5.5		1130	〃		〃	〃	41	
10111	〃	12.1	5.9	1.4		137.5	粘板岩	扁平	〃		40	
10112	〃	10.5	8.0	4.6		610	玄武岩		〃	39	39	使用痕有
10113	〃	10.05	7.45	3.9		465	〃		〃 S-1	〃	40	
10114	〃	14.0	5.6	2.9		295	〃		〃	40	〃	
10115	〃	13.7	8.1	6.1		1300	〃		pit-1217	39		
10116	〃	10.8	7.1	4.15		465	〃		SD-100	〃	40	
10117	石錘	11.9	6.2	1.6		175	滑石	未製品	〃		〃	
10118	石斧	2.5	4.5	1.6		10	蛇紋岩		pit-59	38		
10119	石錘	7.7	5.0	4.4		255	滑石	未製品	SD-100	40		
10120	〃	15.8	9.1	6.7		1665	〃	未製品	〃	39	41	
10121	Flake	14.65	7.4	20.5		280	安山岩		〃			
10122		12.2	5.5	1.85		160	粘板岩	剥片	〃 5区1包			
10123	磨石	9.5	10.9	2.95		520	緑泥片岩		〃	51	41	
10124	〃	7.7	8.0	3.0		365	安山岩		〃 5区(包)	〃	〃	
10125	〃	14.3	15.75	6.7		2455	閃礫岩系		〃	〃	〃	
10126	〃	11.9	14.7	5.5		1560	玄武岩		〃	52	40	
10127	〃	8.5	11.0	3.7		560	閃礫岩系		〃	〃	41	
10128	〃	9.0	10.5	4.5		650	閃礫岩	未製品	〃	〃		
10129	〃	8.6	12.35	5.2		930	閃礫岩		〃	〃	41	
10130	〃	7.1	13.6	5.1		780	閃礫岩系		〃	〃	40	
10131	〃	9.95	13.2	5.2		1120	玄武岩		〃	51	〃	
10132	〃	8.0	11.3	5.2		650	玄武岩		〃	〃	〃	
10133	〃	5.4	13.9	3.6		465	玄武岩		〃	52	〃	
10134	〃	10.3	11.6	8.8		1430	閃礫岩		〃	51	41	
10135	〃	10.3	7.25	4.3		755	玄武岩		pit-100	52	40	
10136	〃	8.9	12.0	6.65		1735	花崗岩		SE-01	〃	41	両側面を叩き石として使用した痕跡有
10137	〃	8.9	6.2	3.2		290	蛇紋岩		SD-100	〃	40	上端・下端を叩き石として使用
10138	〃	6.0	7.2	4.95		305	閃礫岩		〃	51	〃	
10139	〃	6.5	7.7	4.4		345	玄武岩		〃	〃	〃	
10140	〃	6.3	5.3	4.0		179	滑石		〃	52	〃	
10141	〃	23.6	17.2	7.75		5250	花崗岩		SD-100 S-30 1包	51	41	
10142	〃	7.9	8.7	3.9		430	玄武岩		SD-20	〃	40	
10143	〃	10.9	12.3	5.4		1140	花崗岩		SD-100	〃	41	
10144	石皿	18.4	21.15	6.05		4110	玄武岩		〃	48	〃	
10145	〃	21.8	18.0	3.9		1,780	凝灰岩		〃	〃		
10146	〃	25.65	29.7	10.1		1200	玄武岩		〃	〃	41	
10147	〃	15.1	15.2	6.0		2410	玄武岩		〃	〃	〃	

Tab. 9　出土石器一覧表－3

遺物登録番号	器種	法量(cm)			形式	重量(g)	石質	残存状況	出土遺構	Fig.	PL.	備考
		長	幅	厚								
840710148	石皿	21.9	27.3	4.3		4335	玄武岩		SD−100 S−27	48	41	
10149	コア	12.7	13.15	8.3		2040	玄武岩		SE−01	52	〃	
10150	〃	13.8	11.4	7.25		1815	玄武岩		SE−01	〃	〃	
10151		8.1	10.9	6.3		1060	玄武岩		SD−100 S−22 1包	〃		
10152		35.6	22.8	13.65		16250	花崗岩		〃 S−26	50		
10153		33.5	28.1	7.3		12250	滑石		〃 S−28	〃		
10154		25.8	21.5	11.95		10500	閃緑岩		〃	〃		
10155		30.6	27.9	17.8		21250	花崗岩		〃	〃		
10156		28.5	37.4	15.3		28500	凝灰岩		〃 S−13	〃		
10157	石鏃	1.75	1.3	0.4		1.3	黒曜石		〃	38	36	
10158	〃	4.2	2.0	0.4		2.9	黒曜石		〃	〃	〃	
10159	〃	3.2	1.8	0.4		3.0	サヌカイト		〃	〃	〃	
10160	〃	1.6	1.5	0.3		1.5	サヌカイト		〃	〃	〃	
10161	〃	1.9	1.7	0.4		1.5	黒曜石		〃	〃	〃	
10162	scraper	6.6	9.2	1.45		110	玄武岩		〃	41	40	調整打面，横剥ぎ
10163	〃	6.8	8.3	1.1		80	サヌカイト		〃	〃	38	
10164	〃	8.4	11.4	1.5		230	玄武岩		〃	〃	〃	
10165	〃	7.0	3.4	0.95		26	サヌカイト		SD−100 5区1包		〃	
10166	磨石	3.5	2.9	2.2		32	花崗岩		pit−253			
10167	〃	4.5	2.5	2.3		39	安山岩	半割	〃			
10168	石包丁	5.3	9.45	1.2		80.5	輝緑凝灰岩	未製品	SD−100	41	38	研磨は行なわれていない 剥離工程の段階である
10169	〃	5.25	6.7	0.8		36.5	安山岩		〃	〃	〃	研磨方向は不明 三角形に近い形状を呈する小型
10170	石皿	25.1	29.5	12.8		19000	玄武岩		〃 S−7	50		
10171	石斧	7.1	12.8	1.9		380	〃	未製品	5区SD−100 1包			
10172	石錘?	12.2	7.5	1.5		300			5区SD−100			
10173	紡錘車	5.0	4.5	0.9		42	滑石	未製品	SD−100 P−102 1包			
10174	砥石	5.5	7.5	5.3		370	硬質砂岩		3区SD−100 1包	53		
10175	石包丁	4.0	7.3	0.6		33.5	安山岩		4区SD−100 2包	41		
10176	石錘	8.5	5.2	4.7	IIb	300	滑石	完形	SD−100	45		
10177	石斧	18.9	6.3	5.0		1300	玄武岩		SD−100 1包			柱状石斧
10178	砥石	21.1	7.5	5.0		970	〃		SD−100	49		
10179	〃	12.0	7.4	7.3		930	〃		SD−115	53		使用痕
10180	メンコ	3.7	3.5	0.9		155	滑石	完形	SB−65 pit−1263			
10181	紡錘車	4.7	4.7	0.7		30.5	〃	未製品	pit−88			
10182	スクレイパー	3.8	7.4	1.0		33	サヌカイト		pit−263	41		
10183	石鏃	5.4	1.3	1.2	IIIb	13.5	滑石		pit−226	44		

Tab. 10 出土石器一覧表－4

2)土　器

土器は、SD－50、100、200、Pitから多量に出土した。特にSD－100からは、弥生時代中期中葉から弥生時代後期末までの土器が出土した。層序関係から中期中葉の土器は、第IX層から、中期末は、第VII層から、後期末、それ以降の土器は、第III層から出土した。SD－50、200、Pit出土の土器は、後記するとして、SD－100の甕形土器を中心に形式分類を行ない、壺形土器、鉢形土器、高杯、器台等は、それに準じた。またSD－100からの出土遺物の器種は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高杯、器台、脚付壺、甕、手捏土器等の多種多様な遺物が出揃った感があり、各器種ごとにヴァリエーションがある。数多く図示することを主眼としたが、遺物量からはとうてい図示できないものもある。出土遺物の全体量から壺形土器、甕形土器、の順で高杯、器台も数多く出土した。各遺物の説明は観察表を作成したので各遺物の説明は省略する。

(1)SD－100出土の土器

SD－100から出土した甕形土器を中心に形式分類を行なった。特に中期中葉から後期初頭までを主に分類し、中期を5つに区分(須玖I式〔古、中、新〕、須玖II式〔古、新〕に分け、前半を3つに区分(古、中、新)した。

SD－100からの甕形土器は、須玖Iの〔古〕はなく、〔中〕にあたるものが、わずか2点出土しているが図示できなかった。須玖Iの〔新〕をI類とし、このI類をさらに、口縁部によりIa, Ibに細分した。須玖II式の〔古〕をII類とし、口縁、胴部の張り等から3つに細分した。III類は須玖II式の〔新〕とし、SD－100の中でも多量に出土したもので、中期末の時期をこれにあて、口縁部の相違から3つに細分した。

後期初頭もSD－100の中で最も多量に出土し一括資料としては良好な資料である。これをIV類として分類し、口縁、胴部から3つに細分できるが、III類と同様、IVaとする逆「L」字からT字状、口縁端部が下がるIIaからの流れは認められない。一応、これをIVa類とした。このIIIa類、IVa類がSD－100では確認できなかった。この点が福岡平野とも糸島平野とも、土器のセット形態が異なりを示すものなのか、もしくは、SD－100丹塗り土器が80%をこすことが原因なのかはさだかではないが、IIIa、IVa類が存在しないことは確実である。V類は後期前半に位置付けられる土器群である。このほか後期末の土器、古墳時代初頭の土器や、手捏土器等があるが、これは形式分類には含まなかった。

甕形土器(第55図～62図)

甕形土器は大別してV類、細別すると12に区分できる。

I類は2つに区分できる。須玖I式〔中〕逆「く」の字状口縁が「T」、「L」字状口縁へ変化するものと逆「く」の字口縁がそのまま残るタイプとに区別した。

Ia類は口縁部が逆「L」字状を呈するものや、内唇がわずかに張り出し「T」の字口縁に近づ

くタイプ(60、61、65、69、77、78、146、292、373、386)がある。

Ⅰb類は「L」字状口縁に近いが内唇が内に入るもので、口縁部下に三角突帯を持つものと、もたないものがあり、胴部は張らず内湾しながら口縁部に達するタイプ(62、64、66、294、295、311、313、316、381、389、391、402)がある。

Ⅱ類は須玖式Ⅱ類の〔古〕式とし、3つに細分した。

Ⅰa類は、口縁部が「T」字状と呈するが、外面口唇部が下がるタイプ(99、310)である。

Ⅱb類は、口縁部逆「L」・「T」字口縁の流れの中での内唇が下がるタイプ(70、98、291、293、392、395、397)がある。

Ⅱc類は、須玖Ⅱ式の〔新〕まで含まれる可能性があるもので、「T」字口縁部の内唇が内に下り、わずかに張り出す形状を呈するタイプ(63、68、71、73、93、97、374、383、388、398、454)である。

Ⅲ類は、2つに細分できる。須玖Ⅱ式〔新〕に相当するもので、「T」字口縁の口唇部がかなり下がるタイプをⅢaとしたが、甕形土器にはなく壺形土器の中にある。

Ⅲb類は、口縁部が「く」の字形を呈し内唇がわずかに出る胴部の張りが大きく刷毛目調整も荒いタイプ(67、289、302、303、306、394)がある。

Ⅲc類は、Ⅱc類の範疇に入るものも含まれているので区別ができない。

Ⅳ類は、後期初頭に位置づけできるもので、口縁部が「く」の字状を呈し、内面に一段の稜を持ち底部は、底面が平坦で胴部への立上りが外反気味に立上る。(72、82、213、305、308、371、372、377、385、399)がある。

壺形土器(第63図～70、73～76、98図)

壺形土器は、器形により4つに区分する。

1式、如意形口縁を持ち、最大径は胴部上位から中位にあり、球形を呈する。胴部と頸部の境に一条の沈線及び稜を持ち、口縁から頸部にかけて暗文を配し、丹塗りを行なっている。229、364、365、370は甕形式のⅢ類の範疇に入るもので、366はⅣ類の範疇に入る。

2式、口縁部が鋤先状を呈するものを2式とした。口縁形態で、3つに区分した。

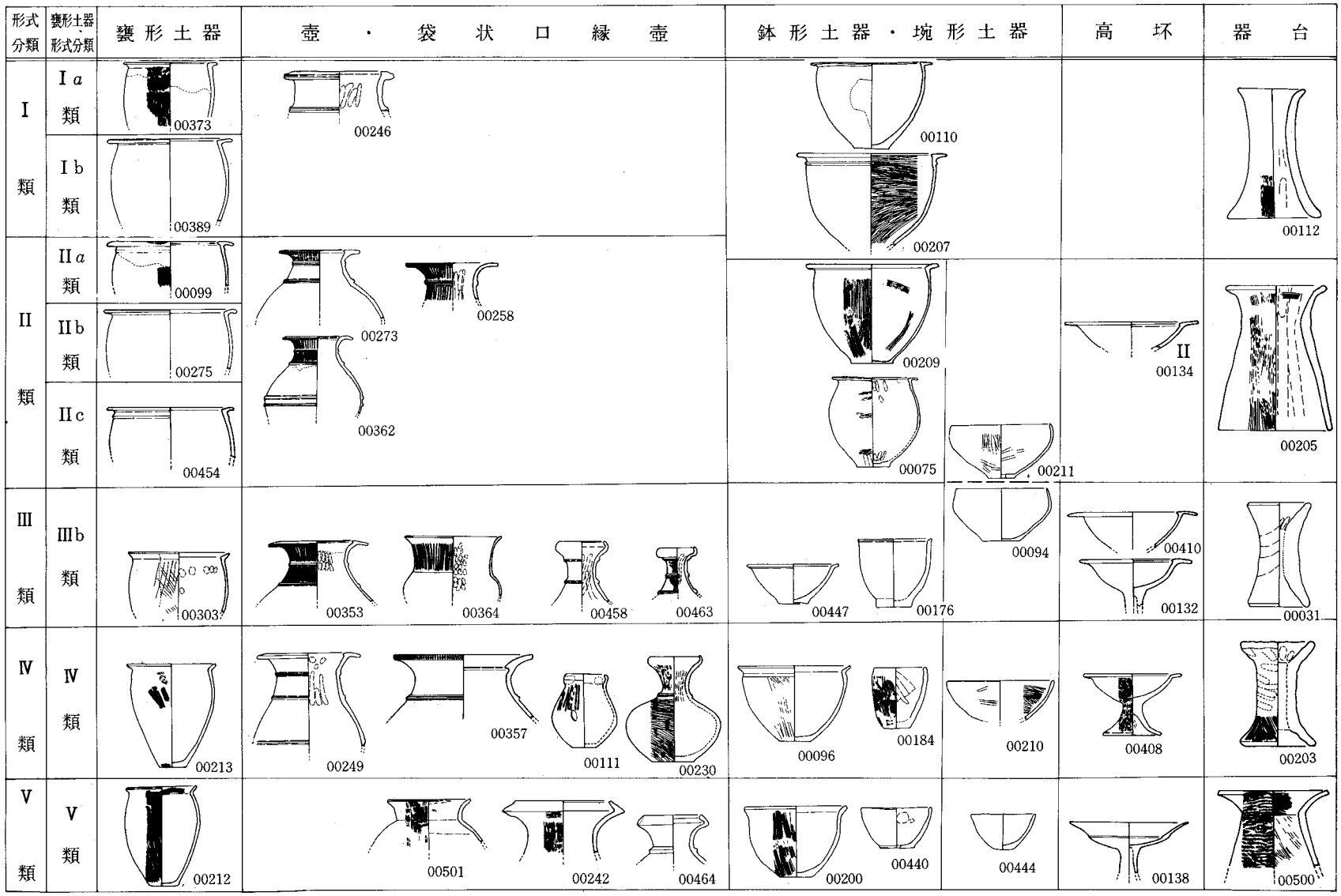
2式1類、口縁部が平坦であるもの(144、252、273、278、280、281、282、355、356、361)がある。

2式2類、口縁部の外唇が下がるタイプ(145、169、246、247、248、249、250、251、253、254、256、274、284、352、353、354、358、362、407)がある。

2式3類、口縁部の内唇部が下がるタイプ(245、255、277、279、290、307、357、359、376、380、382、404、457)がある。

3式、口縁部が逆「L」字状を呈するもの、朝顔状に開くものと直線的に立上るものを3式とし口縁形態で4つに区分した。

3式1類、口縁部が逆「L」字状を呈し、胴部が球形であるタイプ(167、287、360)がある。



第54図　今宿五郎江遺跡出土土器形式分類（縮尺不統一）

3式2類、口縁部が逆「L」字状を呈するが、口唇部外側が下がり、より鋤先状を呈するものであるが1式とは頸部、胴部が異なるため3式とした(74)。

3式3類、朝顔状に開くタイプ(257、259、261、262、286、290、367、368、369、379、405、501)がある。

3式4類、口縁部の立上りが直線的に上るタイプ(455)がある。丹塗りが行なわれているものに1式～2式1類、2式2類、3式1類、3式2類が全面及び外側に多く塗られる。

4式、袋状口縁の壺形土器を4式とし、6つに細分した。

4式1類、4式1類はまだ細分可能であるが、今回は頸部が長くしまりその間に2段から3段のM字状突帯を配し、その突帯間に暗文を配する。口縁部は、頸部からやや外反しながら孤を描き内傾しながらおさまる形状を呈するタイプ(215、458、459、460、461、462、463、465、473)である。外面全面と内面の一部に丹塗りをほどこす。

4式2類、4式2類は頸部のしまりがなくM突帯及び三角突帯が一条巡り、口縁部の径も大きくなる。(90、91、92、116、230、271、466)がこれにあたる。外面の全面及び一部に丹塗りを施す。

4式3類、4式3類は頸部が短くすぐ折り曲り、袋状を呈するタイプ(41、89、111、272、442、443、522、524、575)である。丹塗りは頸部付近までである。

4式4類、4式4類は逆「く」の字を呈するが、折り曲る部分がまだ孤を描くタイプ(103、115、119、412、464、467、474、475、476、477)である。丹塗りは頸部附近までしか行なわれていない。

4式5類、4式5類は4式4類とほぼ同形態を示すが折り曲り部分が鋭角になり、口縁端部がやや外反するタイプ(113、114、115、117、120、242、244、411)がある。丹塗りはあるものと無いものとがある。

4式6類、4式5類の形態に類似するが、大きく異なる所は口縁部の折曲する部分が、斜め下につまみ出された形状を示す。胴部から垂直に立上がり、大きく外反しながら折曲がり、口縁部はやや内湾気味におさまるタイプで243の一点が、これにあたる。丹塗りは施されていない。

壺形土器を甕形土器の形式分類にあてはめると、1式は、III類の範疇に入るもの229、364、365、370とIV類に入る336がある。

2式1類は、甕形形式分類の1類に246が入り、II類に252、273、281、355、356が入る。III類に144、278、280、282、361、363がある。

2式2類には、甕形土器分類のII類に247、248、250、251、355、362が入りIII類には145、169、253、254、256、274、284、352、353、354、358、362、407がある。

2式3類にはIV類の範疇と考えられるものに276、277、307、376、380、382がある。

3式1類では、II類に167、287が入り、III類には360がある。

3式2類では、III類に74がある。

3式3類では、III類の範疇に262、369、405が入る。IV類には、257、259、261、286、290、367、368、

369がある。V類に501が入る。

3式4類では、455がIV類の範疇と考えられるが、この土器はV類の可能性もある。

4式1類は、I、II類がなく、III類からで458、459、460、461、462、463、465、がこの範疇に入る。IV類には215が入る。

4式2類には、IV類に91、230、271、466が入ると考えられる。V類には92、116、230が範疇に入るものであろう。

4式3類には、IV類に111、575が入り、V類に41、89、272、443、522、524がある。

4式4類には、V類だけで115、119、412、464、475、476、477がある。

4式5類にも、113、114、117、120、242、244、411がある。

4式6類は、V類で243がこの範疇に入るものと考えられる。

鉢形土器(第77図～81図)

鉢形土器には、形状の点からみればたくさんのヴァリエーションがあり、甕形土器や壺形土器に類似するもの等がある。今回鉢形土器としたのは、それらのものを一括して、口径が大きく、器高が低いものを鉢形土器とした。

鉢形土器を口縁形態から甕形土器・壺形土器の形態分類に準じて説明する。

甕形土器Ⅰa類に属する鉢110、95、173の3点で、口縁部が逆「L」字状を呈し、平坦面で水平である。110は、内外面とも丹塗りを施す。口径26.4cmを測る。95は、内外面ともに丹塗りを施し、口径19cmを測る。173も同様。

甕形土器Ⅰb類に属する鉢(第77図)207の1点である。口縁部の内唇端がわずかにつまみ出され、口縁下には、一条の三角突帯を巡らす。内面にはヘラ磨きを施した後に丹塗りを行なっている。外面の調整は、表面が剝落されているため明らかではないが、全面に丹塗りが行なわれていた痕跡を持つ。口径32.4cmを測る。

甕形土器II類に属する鉢(第77図)II類には、75、209、400がある。口縁部が逆「L」字状を呈するもので、209、400が口縁部内唇が内側に入る形態を呈する。75は口縁部が平坦で口唇部端がやや下がりぎみのもので、3点とも丹塗り土器である。口径は、75が18.6cm、209が28.8cm、400が20.7cmを測る。

甕形土器III類に属する鉢(第79図、81図)III類には、甕状を呈するもの、79、81、127、168、179、180、182、521を鉢型を呈する34、36、176、184、444、447がある。壺形土器状を呈する403もある。甕形土器状を呈するものは、127のように口縁部が「く」字状を呈し、底部は平底で、端部が立ち上がり、一度外反しながら胴部中位まで達し、最大径の部分から内湾しながら口縁部に達する。81は、胴の張りがなく、底部からやや外反しながら胴部中位まで達し、そこからやや内湾ぎみに口縁部に達する。

壺状の形態に近いものとして403がある。底部は平底で、底部から大きく外反しながら胴部最大径まで達し、そこから大きく孤を描くように口縁部まで達する。口縁部は、内湾してきたところで端部を丸くおさめている。

本来鉢形土器と呼ばれているもので、底部がやや上底のものと平底のものがある。底部端部の稜は面取りされている。底部から大きく外反しながら直線的に口縁部まで達する。口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめている。外反する部分に稜を有する444、447がある。

甕形土器Ⅳ類に属する鉢(第78図、79図、81図)Ⅳ類に属する鉢形土器もⅢ類と同様に、甕形土器状を呈するものは、80、85、87、122、124、143、208、342、470、519、529がある。形態は甕形土器の形状と類似する。底部は、平底で、厚さは薄い。平坦面を持つものと波を打つものがある。底部端部は、やや丸みを持つようになる。底部から延びる胴部は、外反しながら胴部最大径まで達し、そこから内湾ぎみに頸部に至る。頸部で一度締り、大きく外反する「く」字口縁を呈し、端部は、丸くおさめる。

壺形土器の形状を呈するものに、83、84、102、523、530がある。(第79図)甕形土器よりも胴部が張り、器高も低い形状を呈する。底部は平底で、端部にやや丸みのもつものもある。底部から大きく外反しながら胴部最大径まで延び、そこから急激に内傾し、頸部に至る。頸部から大きく外反して口縁部に達する「く」字口縁を呈し、端部は丸くおさめる。

鉢形土器(第81図)には、39、100、105、106、184、264、266、314、345、438、439、445の12点を図示した。形態により2つに区分できる。105を代表とするもので、Ⅲ類と同様の形態を持つタイプと100、314に代表されるタイプ(底部が平坦で、底部から立上がりがやや外反しながら立上がり口縁部まで達し、端部を丸くおさめる)に分かれる。甕形土器の胴部中位ぐらいから横に半割した形状を呈する。

甕形土器Ⅴ類に属する鉢(第78図～80図)壺形土器に属するものに168がある。168の口縁部が欠損しているところから底部による判断でⅤ類とした。底部は端部が丸みを持つ平底で底部と胴部の境が明確につかない。鉢形土器、本来はⅢ類～Ⅳ類に属する時期かもしれない。底部は平底で端部に稜を持ち、やや外反しながら頸部まで達し、そこでもう一度外反し、端部を丸くおさめるタイプ、38、174、200がある。38、200には底部に穿孔が施してある。内外とも丹塗りの痕跡を持つものと、Ⅳ類の100に代表された口縁部がほぼ垂直に近いものの流れをもつ263、343、437、440がある。

埦形土器(第80図)

埦形土器と鉢形土器の区別が困難で、鉢形土器の中にも埦形土器と考えられるものも含まれていたが、明確に区別できる資料を持ち合わせなかったので今回は、下記のものを埦形土器として記載していく。また時期も大まかであるが、甕形土器の形式分類にしたがっていく。

甕形土器III類に属する埦形土器30、94、211がII類からIII類に属するものである。壺形土器を横に半割した形状を呈し、内外面ともヘラ磨きで丁寧に仕上げた後、丹を塗り、仕上げている。

甕形土器IV類に属する埦形土器　210、266、446、448の4点を図示した。III類との相違は、底部から外反しながら立上がり、口縁部はそのままおさまる形状を呈する。

甕形土器V類に属する埦形土器　35、104、126、151、152、263、265、343、437、440、444の11点を図示した。鉢形土器の範疇に入るとも考えられるものとして104、263、343、437、440がある。埦とした形態は、底部が丸底は近くなるもので、265のように丸底もある。

高坏、脚台付壺・甕・鉢(第82図～84図)

高坏は、4類に大別できる。

I類は、口縁部が鋤先状口縁を有し、平坦面を持つタイプ133、134、194がある。

II類は、I類の形態に類似するが、口縁端部が下がるタイプで、132、135、410がある。

III類は、「く」の字状口縁か、もしくは、鋤先状口縁の口唇部がわずかに出るタイプで、116、136、159、170、172、181、201、408がある。

IV類は、坏部中位に段を有するタイプで131、137～142、160、164、165、171、175、196、198、199、503がある。

甕形土器形式分類に照らし合せてみると、I類が甕のII類、II類が甕のIII類、III類がIV類に対比でき、IV類が甕のV類およびそれ以降に対比できるものであるが、V類、およびそれ以降に関する分類は、再検討する必要がある。

脚台付壺・甕・鉢(第84図)

109、197が脚台付壺で甕形土器形式分類のV類、およびそれ以降に属するもの、脚台付甕は177、202、409で409が甕のIV類、202、177がV類に属する。

蓋付壺・蓋・器台(第85図～88図)

蓋付壺は、壺の分類と同じで、甕形土器形式分類のII類に属するタイプが86、471で、III類に215、469、472、517、520、526、528である。IV類は、108、468である。蓋は、形態的に分類して2つに大別できる。

1．山形を呈し、小型壺の51、52、487、488、489、490、491、492、493、494がある。

2．大形の編笠を彷彿させる蓋で214、478、480～486がこれにあたる。

器台は、甕の分類に照らし合せると、I類が112、II類が205、III類が31、45、48、49、203がこれ

にあたり、IV類が08、33である。V類及びそれ以降に属するものは、01～05、07、32、187、191 312、499、500がある。

底部(第92図～94図)

底部は、全体の形態からの判断ではなく形態的に区分するだけである。

甕の分類に照らし合せると、II類に319、322、340、453が考えられ、III類には192、315、317、321、327、329、330、335、339がこれにあたる。IV類には320、326、328、332、334、338、346がある。

V類及びそれ以降に323、324、325、331、335、336とそれ以降には、347、348、349がある。

手捏土器(第89図～91図)

手捏土器には、鉢、埦、蓋、把手付杓、注口土器が多量に出土した。

(2)SD－50出土の土器

SD－50からは、甕、壺、鉢、埦、高坏、器台等が出土した。図示できる資料はあまりない

甕形土器(第96図)

423、424、426があるが、甕形土器形式分類で423がIIa類、424がIIIb類、426がIIc類に分類できる。甕形土器だけは中期末の時期におさまる感がある。

壺形土器(第96、97図)

壺形土器は53、237、417、418がある。417、418は底部のみであるため明確にはできないが、53は4式2類に分類したもので甕形土器との組合せではIV類の範疇に入るものであろう。237は4式3類に分類したもので、V類の範疇に入る。

鉢形土器(第96、97図)

甕、壺の形状に近いものもある。これらを甕形土器分類とに照らし合わせて分類するとII類に42、III類に54、56、76、421、427、574IV類に241、534となる。底部では、II類に、414、III類に418、419、IV類に55、413、415、417、420となる。

埦形土器も同様に分類するとIV類に241、344V類に428、429、430、452とほぼ共伴関係にあるものと考えられる。高坏は脚部のみであるが、ほぼV類に入り、器台も同様である。

これらのことからSD－50の時期は、一番新しい時期を考えるとV類となり、弥生時代後期前半から中葉と考えられる。

(3)井戸・土壙・Pitの出土遺物

SE－01からは、壺形土器の完形品を含め甕・鉢・埦・器台等が出土した。土器形式分類からみると甕形土器のIIa類からV類まで含まれている。ただV類、およびそれ以降の土器は、上面からの出土である。SE－01の一括資料は、235、238、239、297を除く遺物である。

壺形土器(第98図　232、233、350、351)

232は、口縁部を欠損するが頸部端に「M」字状突帯を一条巡らし、その上部に暗文を配する

タイプで、丹塗り土器である。233は胴部が長胴となり最大径が下位にある。その部分に２条のMの突帯を巡らし、胴部中位にも一条の突帯を巡らす。その間に暗文を配する。口縁部・底部は欠損するが、器形的にくずれ甕形土器IVｃに位置づけられるものであろう。350、351は完形品で出土した。両方とも同じ形状を呈する。しいて相違を上げれば、351の方が口縁部がやや長く胴部のしまりがある。甕形土器のIIIaタイプに属するものである。

甕形土器(第99図118、231、236)

118は口縁部が内傾するくの字口縁で胴部が張るIIIcタイプである。231はＴの字口縁を呈し胴部の張りがないIIのタイプ、236は口縁部がＴの字口縁で口唇端が内傾するIIIｃで全面に丁寧な刷毛目調整後、丹を塗っている。297はくの字口縁であまり胴の張らないVIタイプで、口縁端部の作りも丁寧な仕上げである。341は鉢形土器・全面に丹を塗る。口縁部が内に入るタイプのもので仕上げは丁寧である。234は器台である。端部が外に開くタイプ234、239と内側におさまるタイプ238、235がある。

SD－200出土の土器(第95図、102図)

SD－200からは、土師器(552、553)甑の把手(561)と青白磁(555、556、562～564)と瓦(567～572)が出土した。

瓦は567、568、570は格子目文の平瓦で、表面は布目を残す。571、572は、方形と斜格子を組合せた平瓦である。569は丸瓦で格子目文を施す。

青白磁は、556が玉緑の口縁部の白磁、557が白磁の皿である。他の554、555、562～564は青磁片である。562の内面に「金玉満堂」の銘がある。ほとんど瀧泉系青磁である。

土師器は、552が内面を研磨した内黒土器で、553は黒色土器である。

投弾、土錘、土玉、ガラス玉、これらはSD－100Pit2017からの出土である。投弾はこの１点だけしか出土しなかった。土錘の内20005はSD－100、573はPit2017から出土している。両方とも赤色含量が附着している。20005は小形で上端部が欠損する。573は完形品。

土玉566は、ほぼ球形を呈し、表面に赤色顔料がわずかに附着している程度で何の造作もない。ガラス玉２点(20006、20007)は第１包含層(後期初類、第Ｖ層を示す)より出土したものでライトブルーを呈する。

鉄鋌(第95図)・鉄製環状耳飾

20003は北台地のSD－45より出土。20004はPit2052より出土した。鉄製環状耳飾(用途不明のため一応この名称を使用)は北台地のPit2053より出土したもので、耳飾のように一方だけが聞き、断面は薄い。表裏面ともに唐草の文様を彫り刻み半浮き彫りに仕上げている。

Pit内出土遺物

Pit内より土器・石器等が掘り方内、柱痕内から出土した。南台地(第100図)と北台地(第101図)

の代表的なものを図示した。他にも多量に出土したが、図化に耐える遺物は少ない。それぞれ掘立柱建物に関係するものを図示した。

南台地のPit内出土遺物(第100図)

218はPit325より出土した鉢形土器で甕形土器分類のIII類の範疇に入る。535はPit298から出土した甕形土器の底部であるが、これもIII類に入る。533はPit1126から出土した底部でIV類であろう。220はPit256より出土した蓋形土器である。539はPit1126から出土した甕形土器で533と同一個体を考えられるが接点はない。分類でもIV類に属する形態である。228はPit457から出土した甕形土器でV類か、それ以降の時期と考えられる。Pit161から出土した遺物は540である。脚台付の鉢形土器でV類に属する。

このように南台地からは弥生時代の遺物が主で、その時期も弥生時代中期から後期にかけてのものであった。

北台地のPit内出土遺物(第101図)

北台地からのPit内出土遺物は、Pit1156、2008、2052の内547、2017を除くと殆どが、11世紀から13世紀にかけての遺物である。

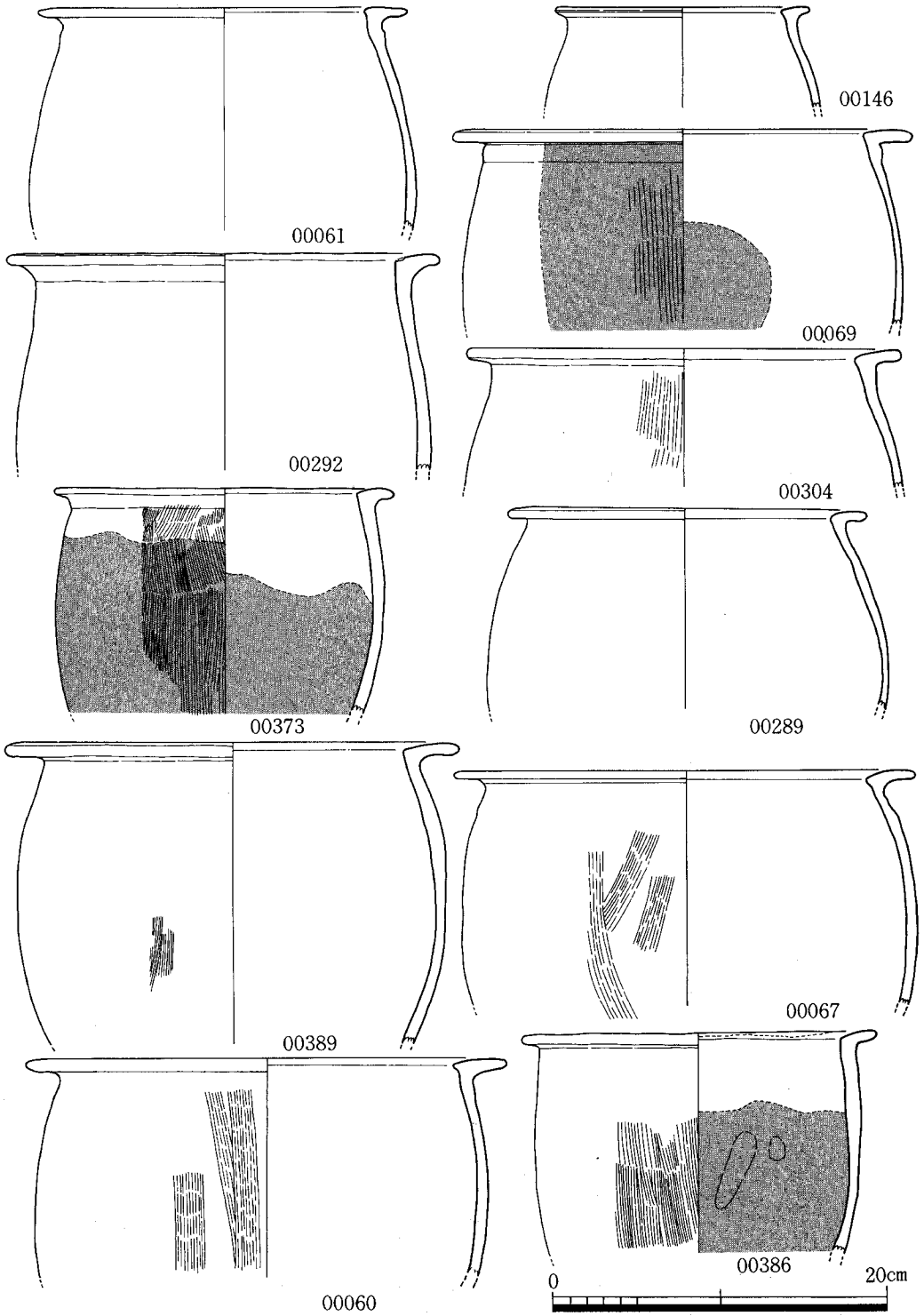
Pit2016の543は底部に板目圧痕が残る土師器である。底径9.0cmを測る。Pit1184の542は、口径11.0cm、底径8.0cmで内面にススが附着している。Pit2005出土の221は、口径7.9cm、底径6.5cmの糸切り皿。Pit2008の223は、口径8.2cm、底径6.5cmの糸切り皿、Pit2009の222も221と同様の口径、底径を測る糸切り皿である。Pit2052からは、225、544、545の3点が出土した。225は口径12.5cm、底径8cmの大型である。545も同じく大型の糸切り皿で、底径が9.6cmを測る。544は、口径8.3cm、底径6cmの糸切り皿。このほかにPit2058出土の226は、脚台付皿で口径が9.5cmで丹塗りを施している。

青磁(546)、須恵器(547)も出土している。青磁は、Pit2039からの出土で瀧泉系の碗である。須恵器は、Pit2652からの出土で、つまみ付きの蓋である。瓦質土器も出土した。Pit2002より219の深鉢形の瓦質土器で、丸味を持つ「コ」の字状突帯を2条配し、その内側に「X」字状連続文を配する。口径36.0cmを測る。Pit2008からは、59の摺鉢状土器が出土した。口径31.8cmで丹塗りを施す。

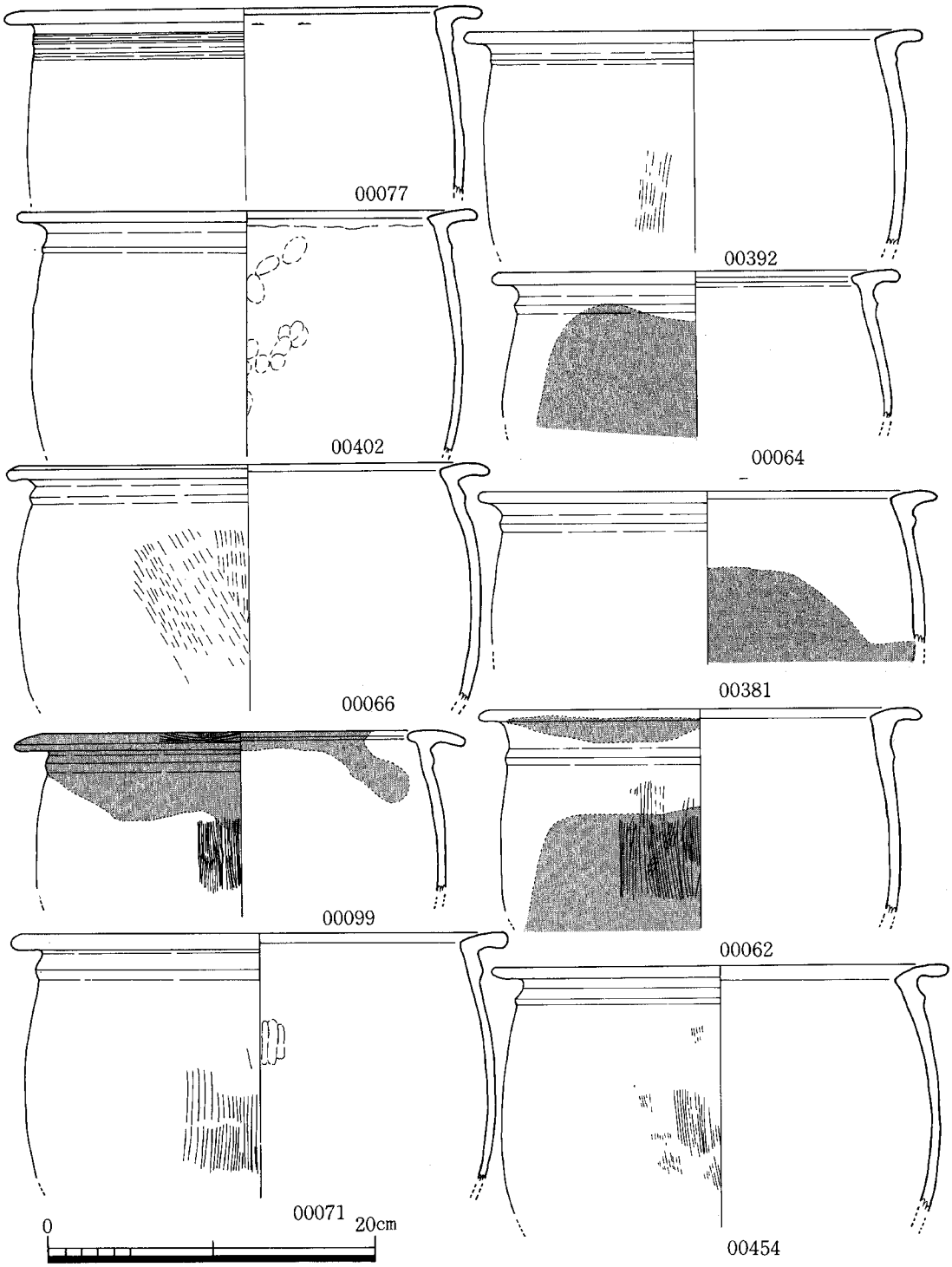
その他の遺構出土遺物(第95図、101図)

SK－01から糸切り皿の土師器(548、549)が出土している。548は底径8.8cmの大形で糸切りは、停止で行なわれている。549は底径7.4cmで回転糸切りである。このほかに558の青磁皿が出土した。558は内面は猫描きのある小皿で口径、12cm、底径5.6cm、器高2.1cmを測る。

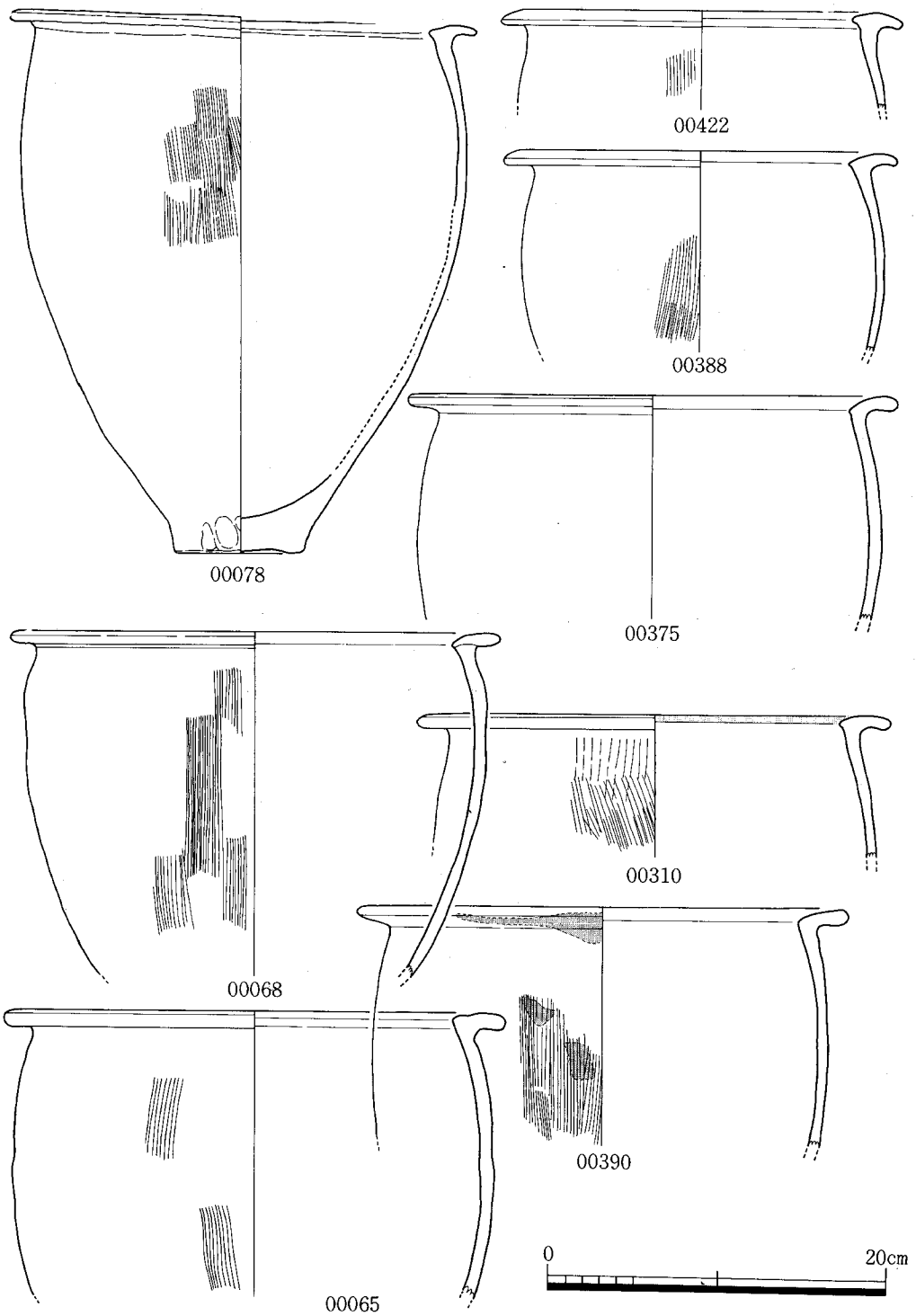
SD－01から433の碗が出土している。またSD－03から298の高坏の破片が出土し、SD－118から559の白磁碗が、SD－119から560の青磁底部破片と鉄鏃が出土した。



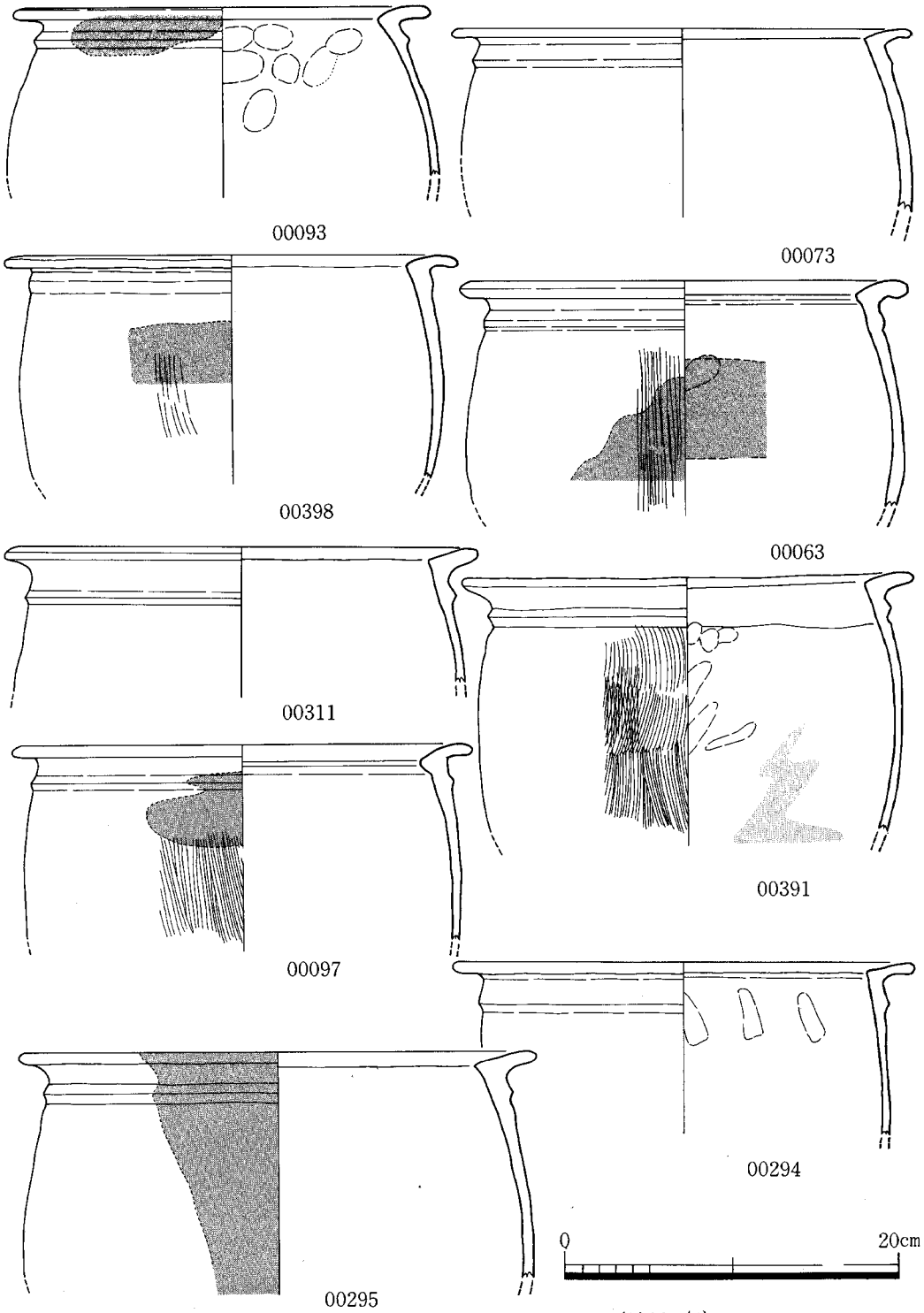
第55図　SD－100出土土器実測図－１（縮尺1/4）



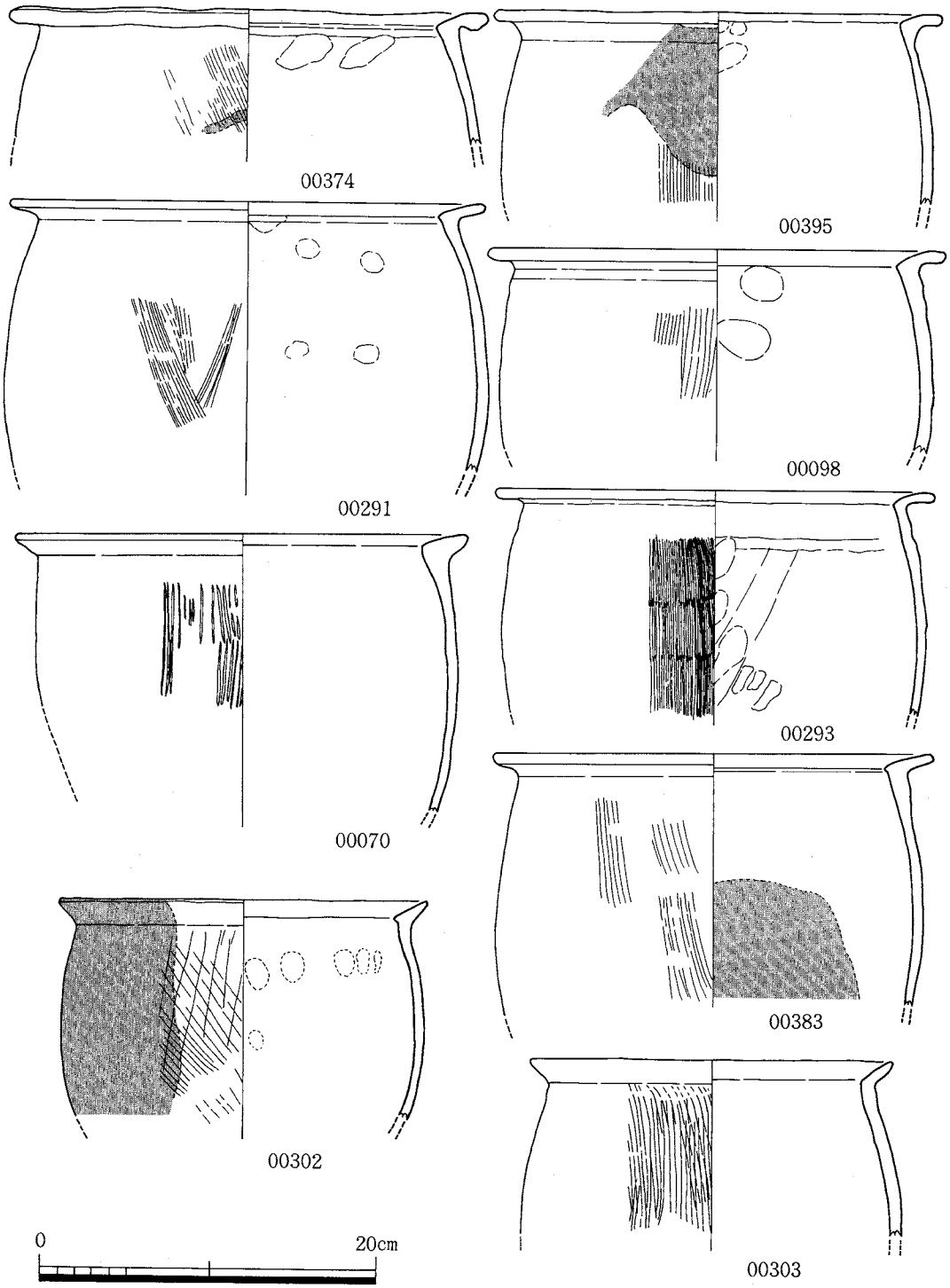
第56図　SD－100出土土器実測図－2（縮尺1/4）



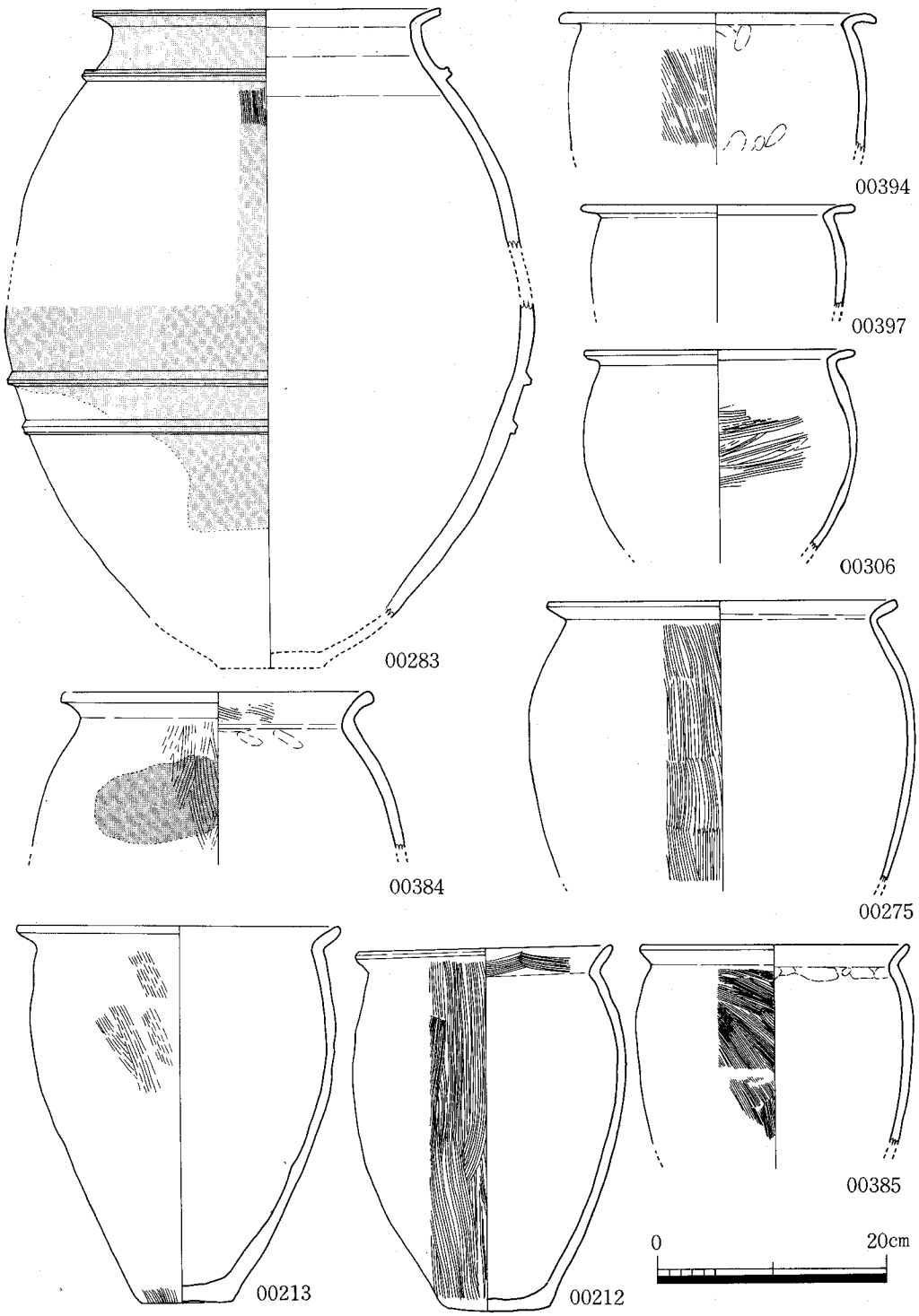
第57図　SD－100出土土器実測図－３（縮尺1/4）



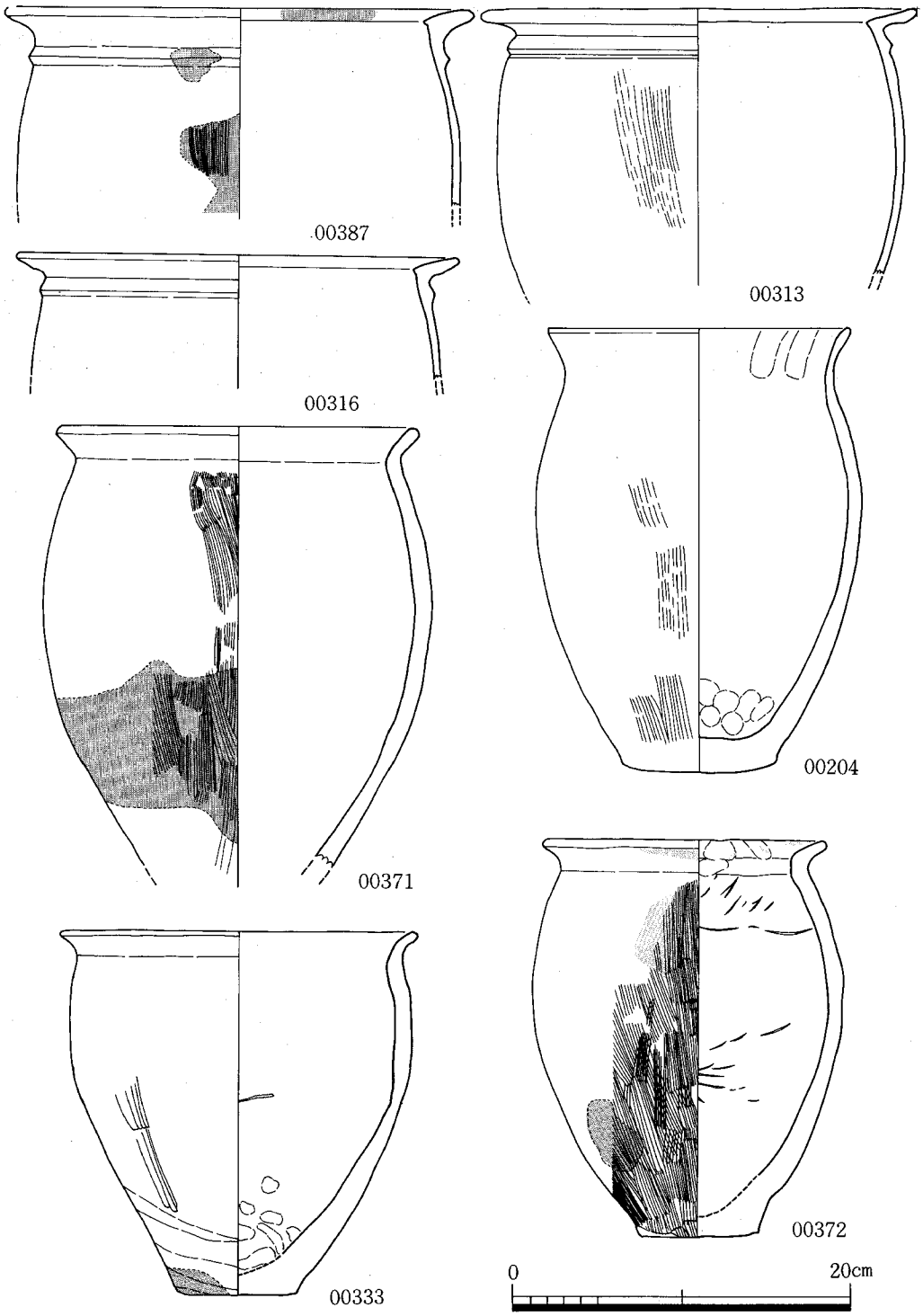
第58図　SD－100出土土器実測図－4(縮尺1/4)



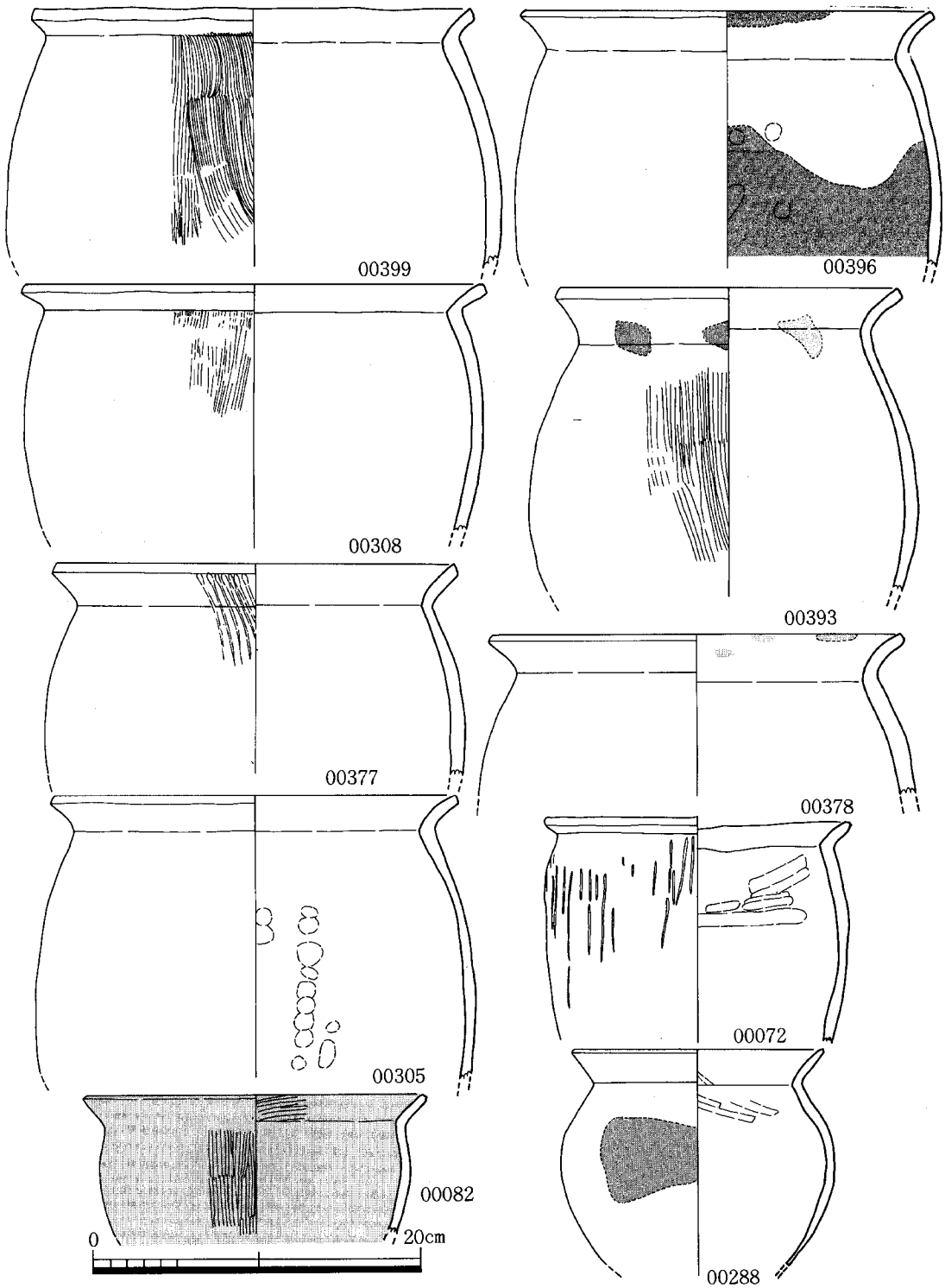
第59図　SD－100出土土器実測図－５（縮尺1/4）



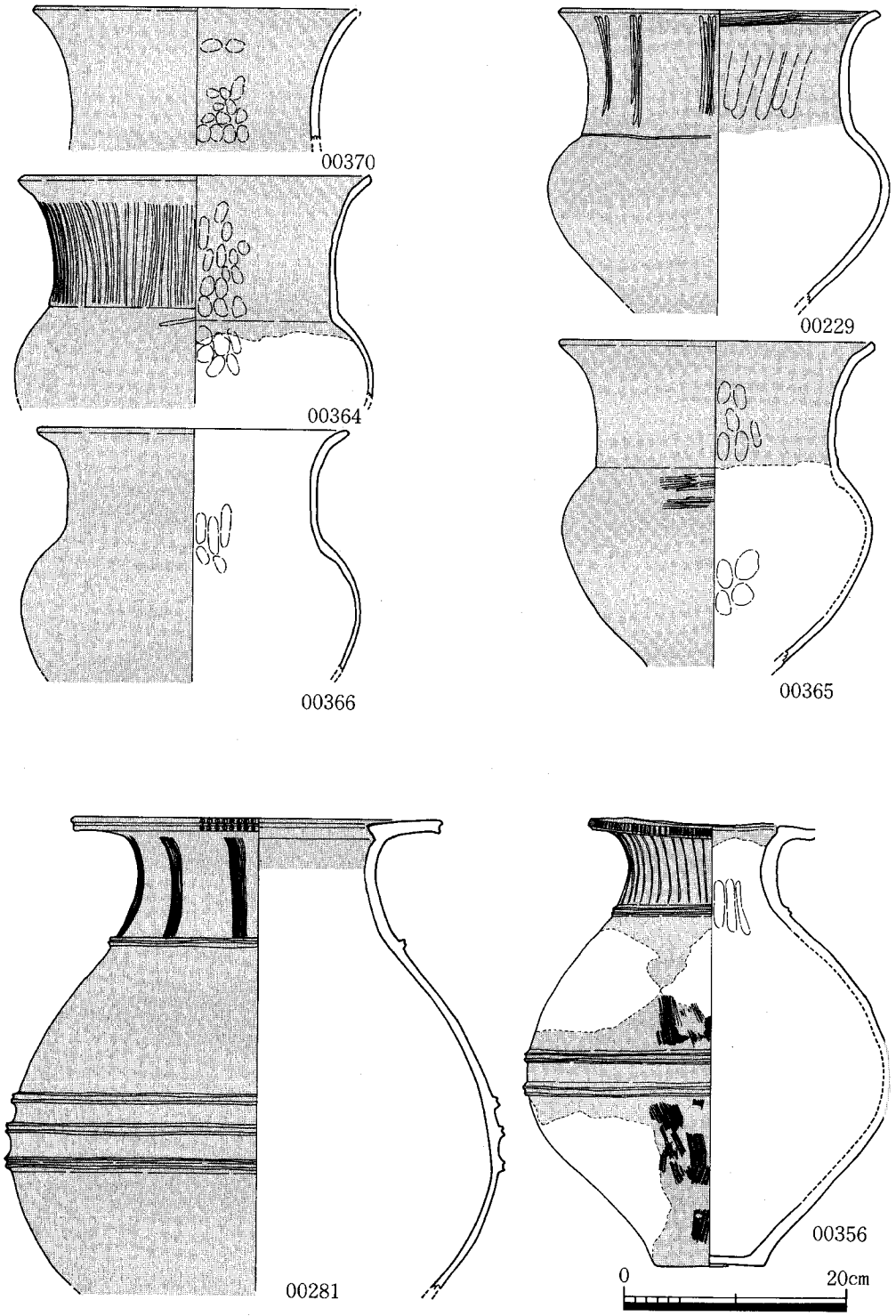
第60図　SD－100出土土器実測図－６（縮尺1/6）



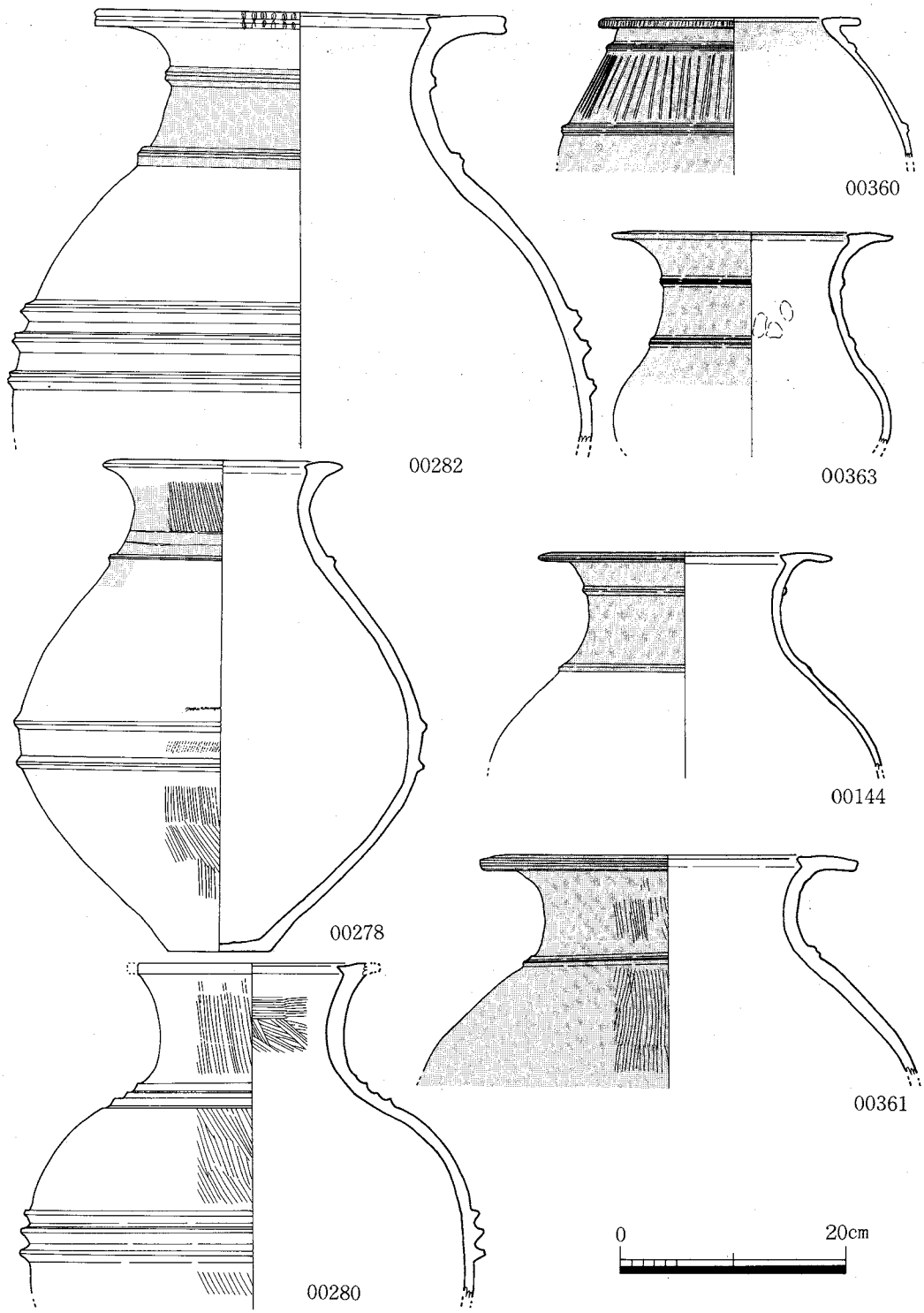
第61図　SD－100出土土器実測図－7（縮尺1/4）



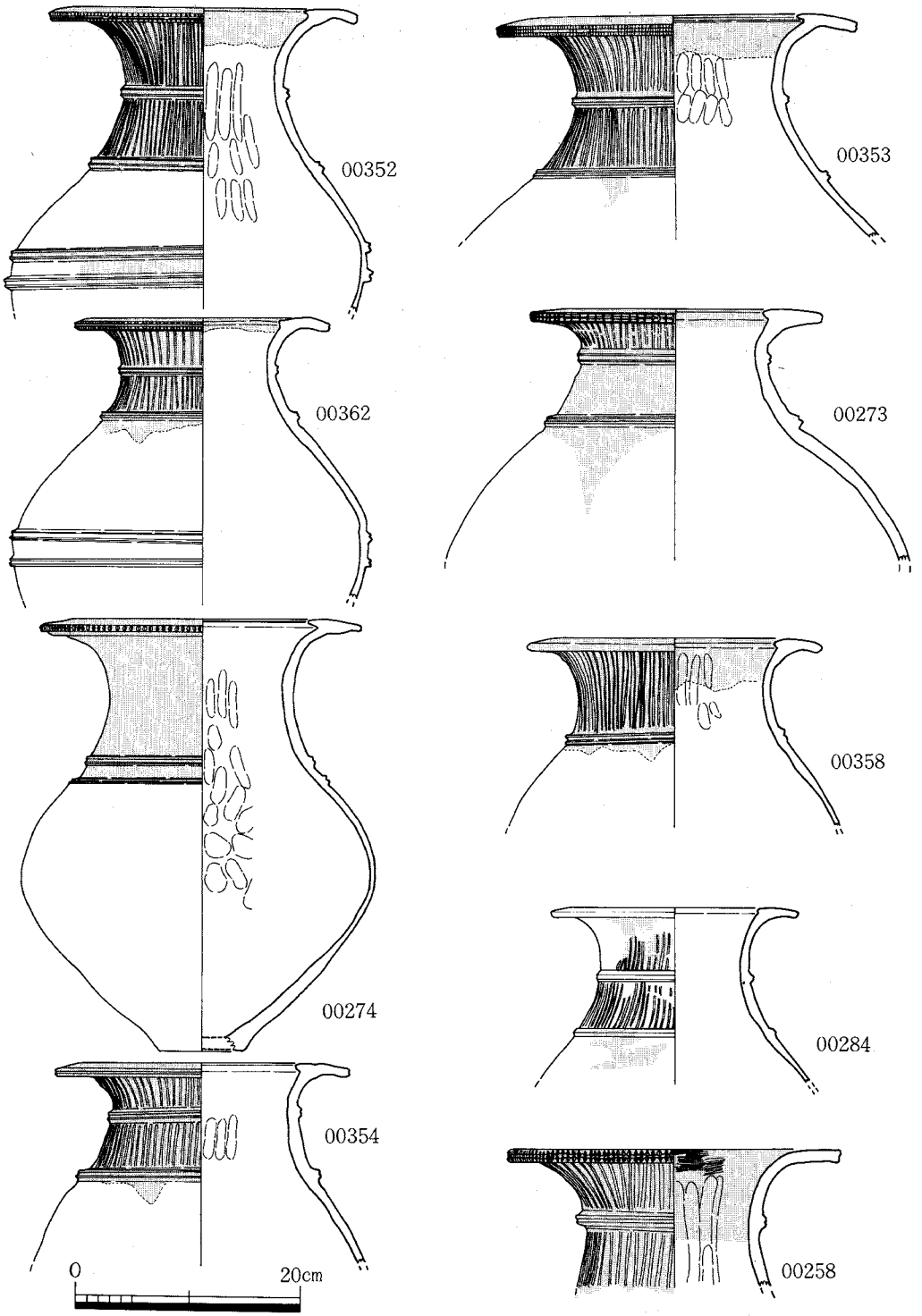
第62図　SD－100出土土器実測図－８（縮尺1/4）



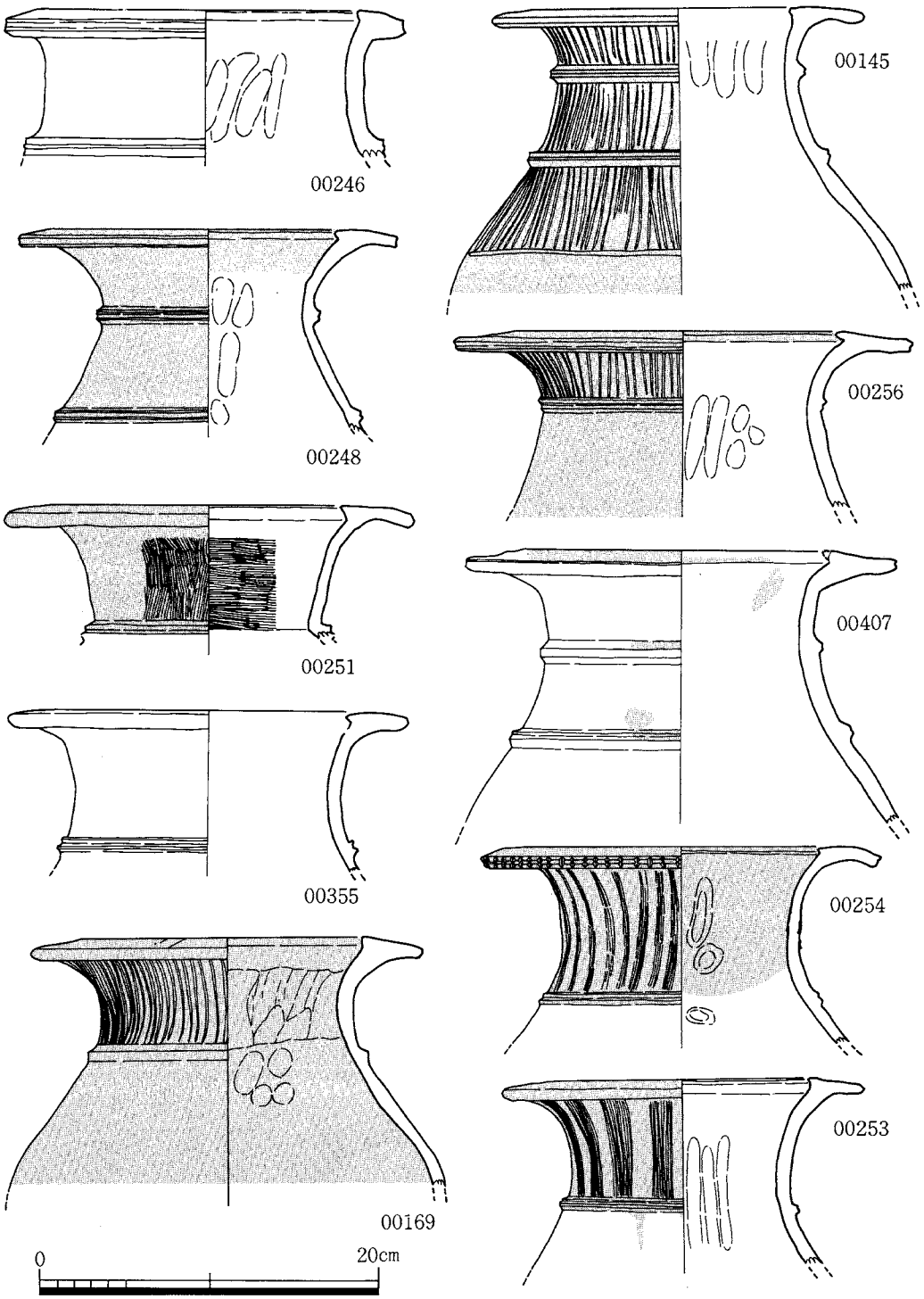
第63図　SD－100出土土器実測図－9（縮尺1/6）



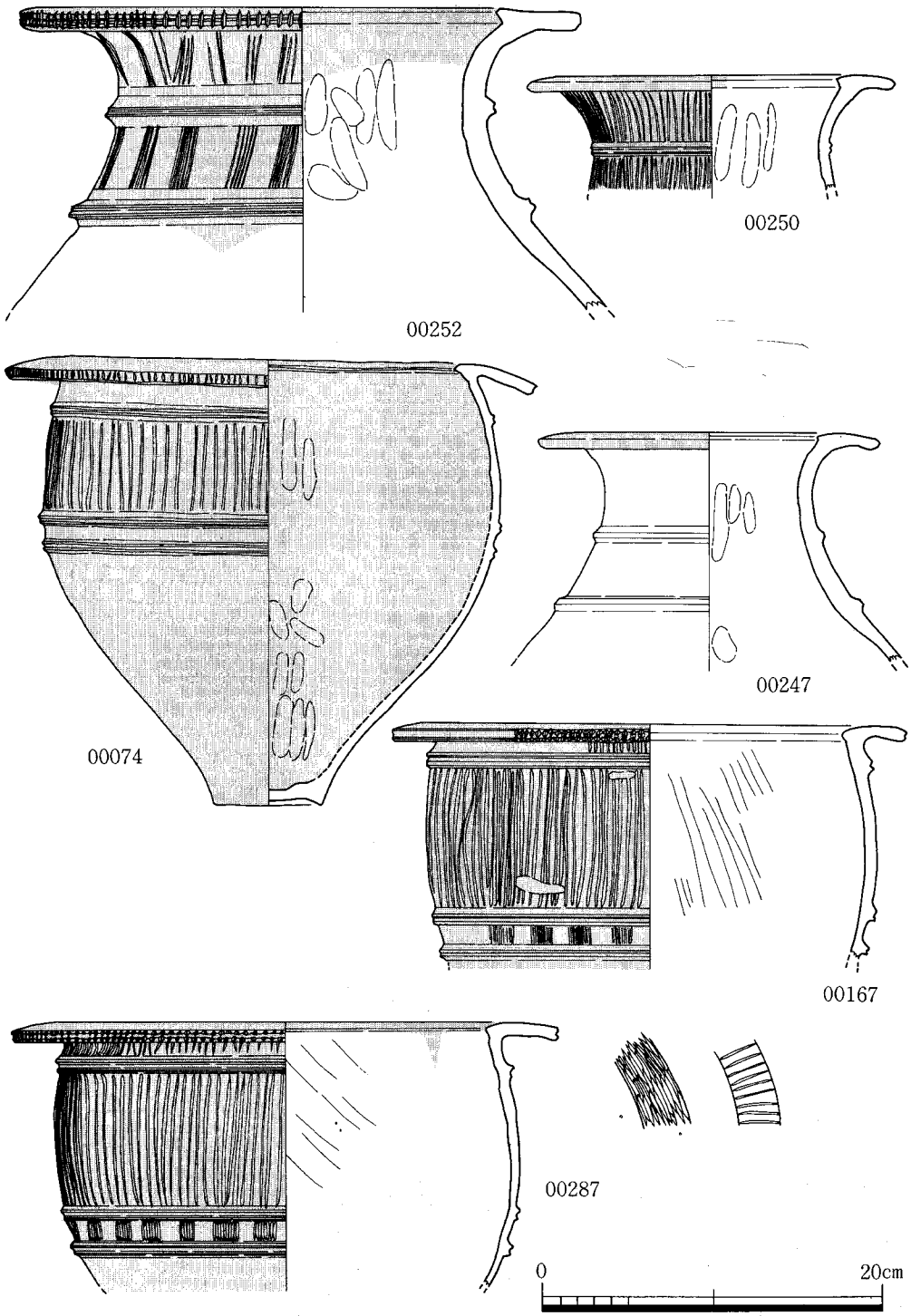
第64図　SD－100出土土器実測図－10(縮尺1/6)



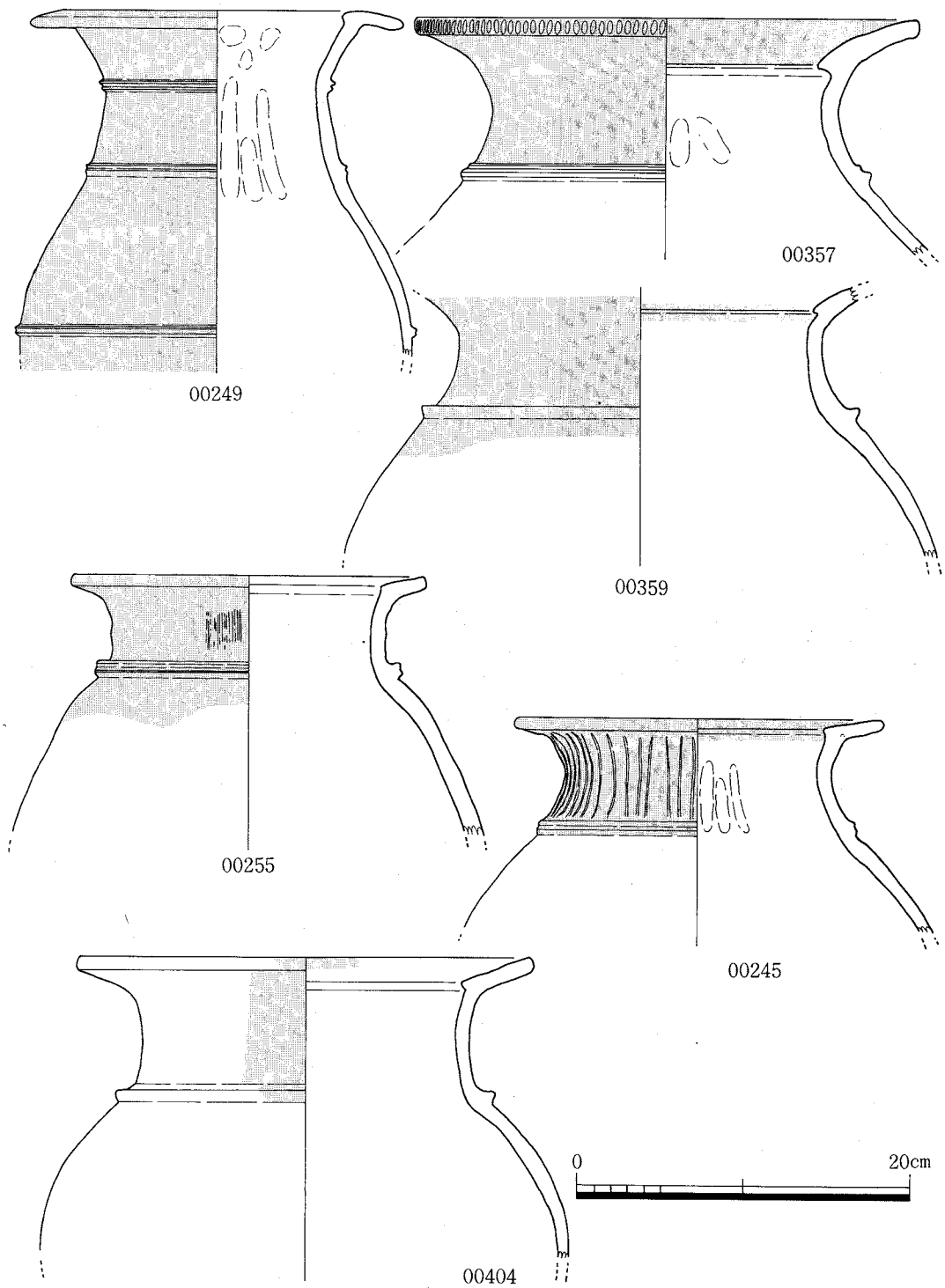
第65図　SD－100出土土器実測図－11（縮尺1/6）



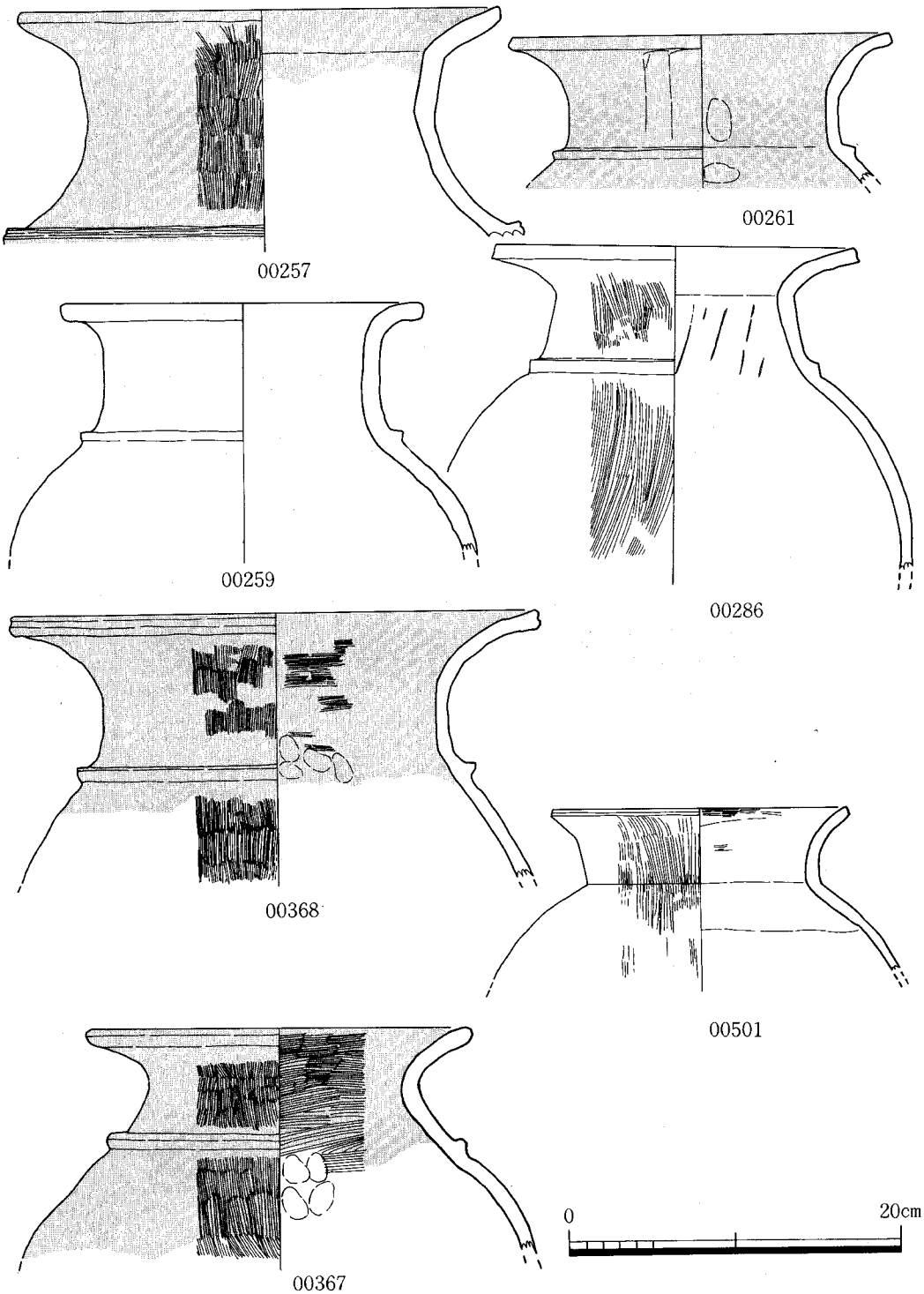
第66図　SD－100出土土器実測図－12（縮尺1/4）



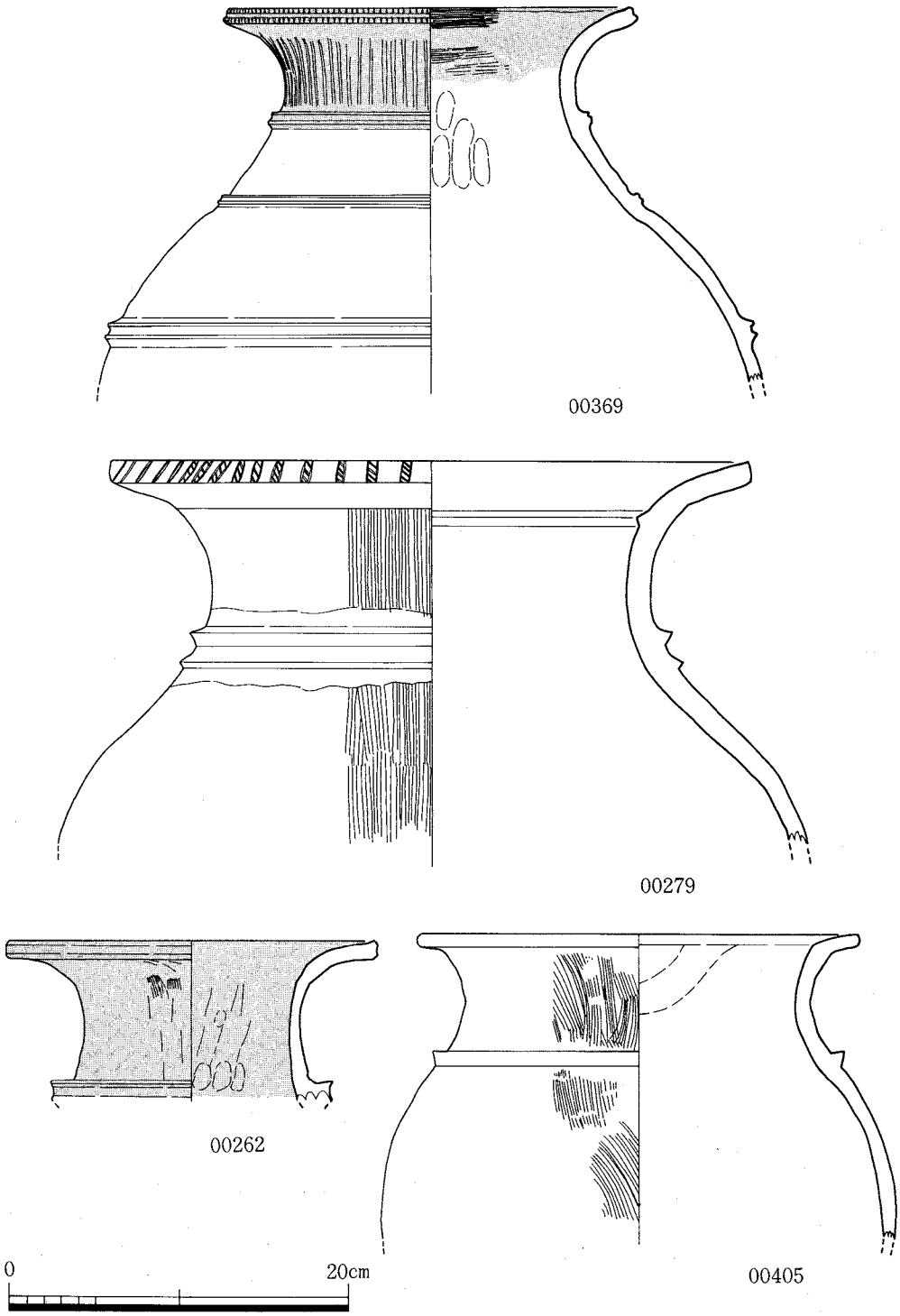
第67図　SD－100出土土器実測図－13（縮尺1/4）



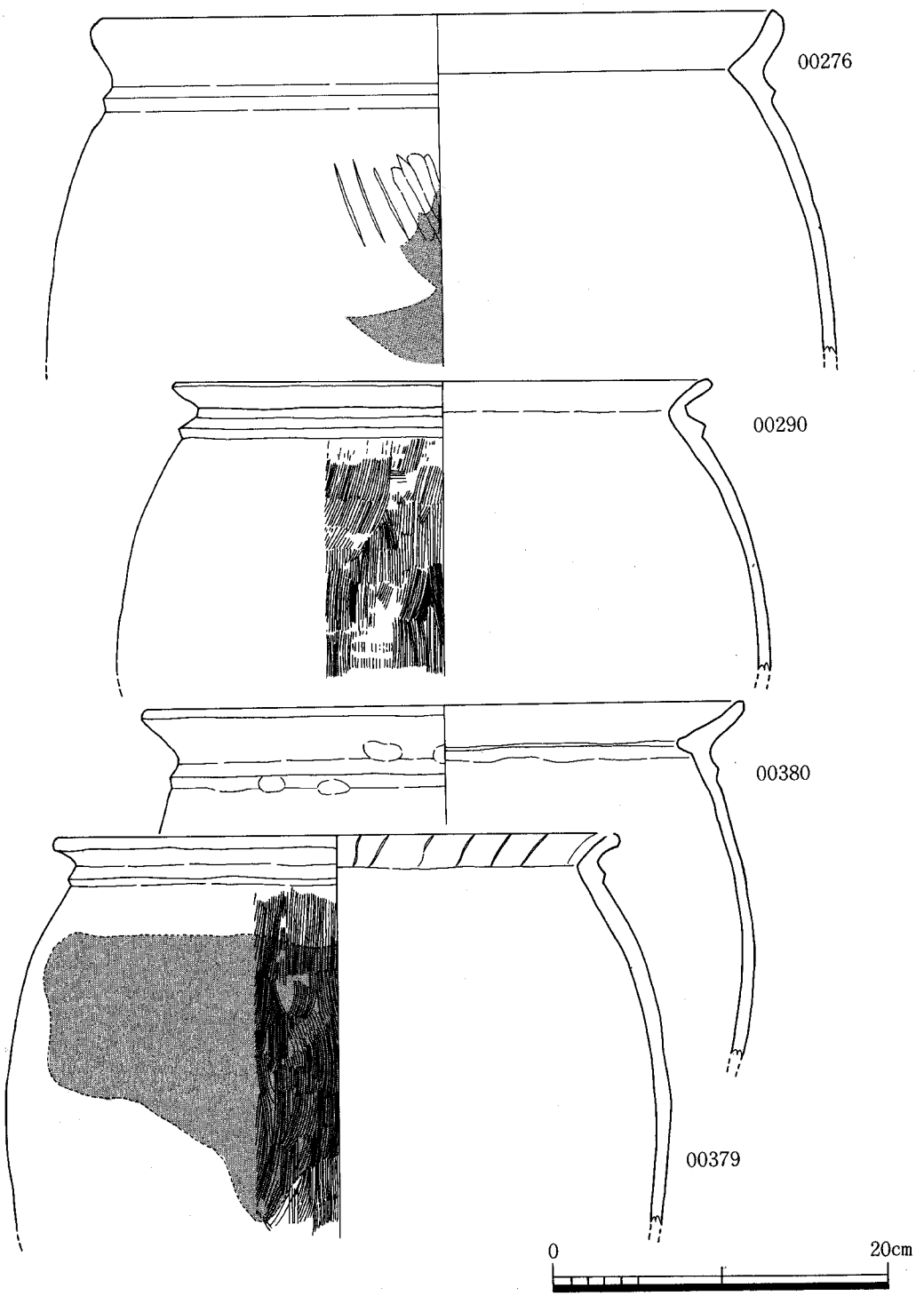
第68図　SD－100出土土器実測図－14(縮尺1/4)



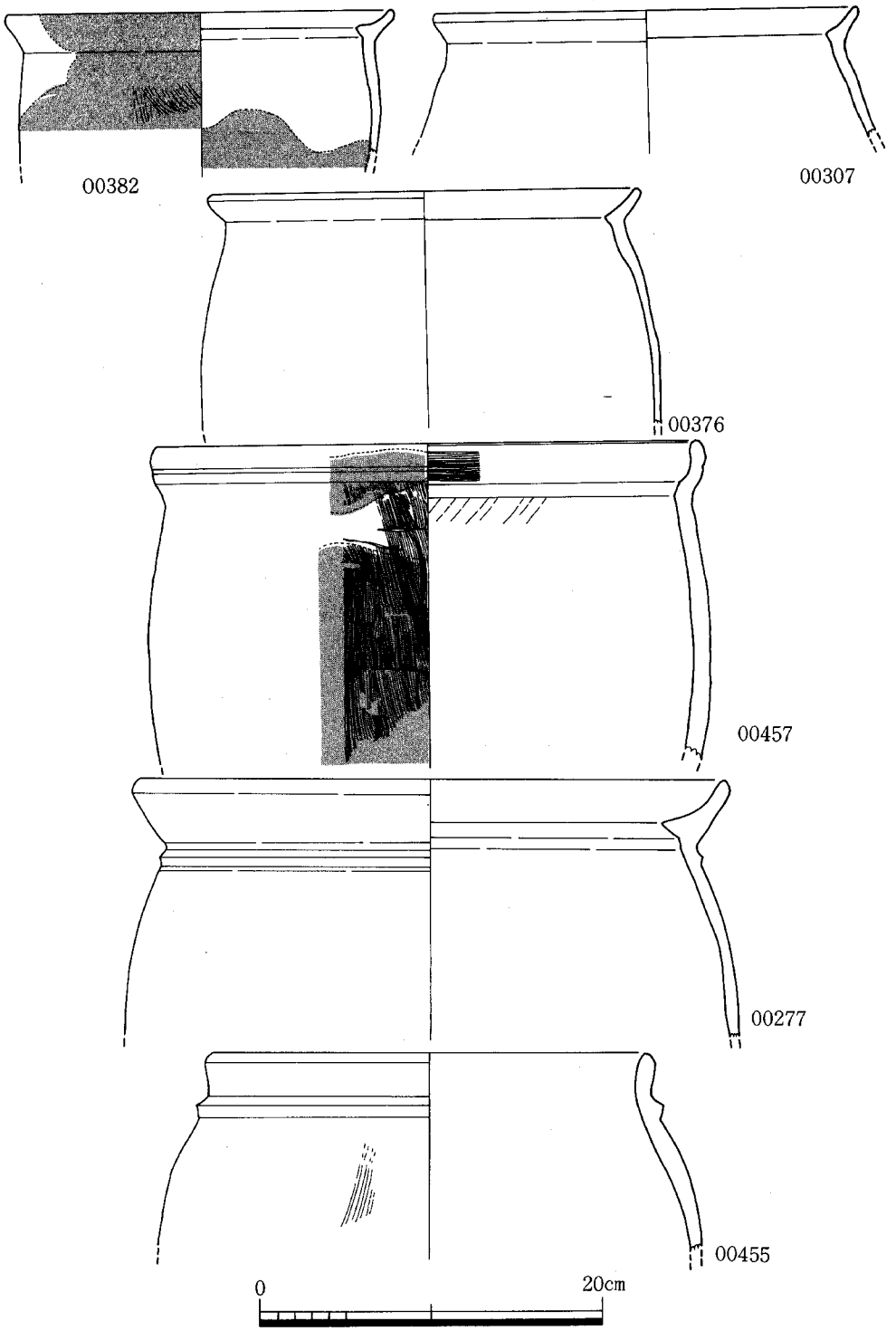
第69図　SD－100出土土器実測図－15(縮尺1/4)



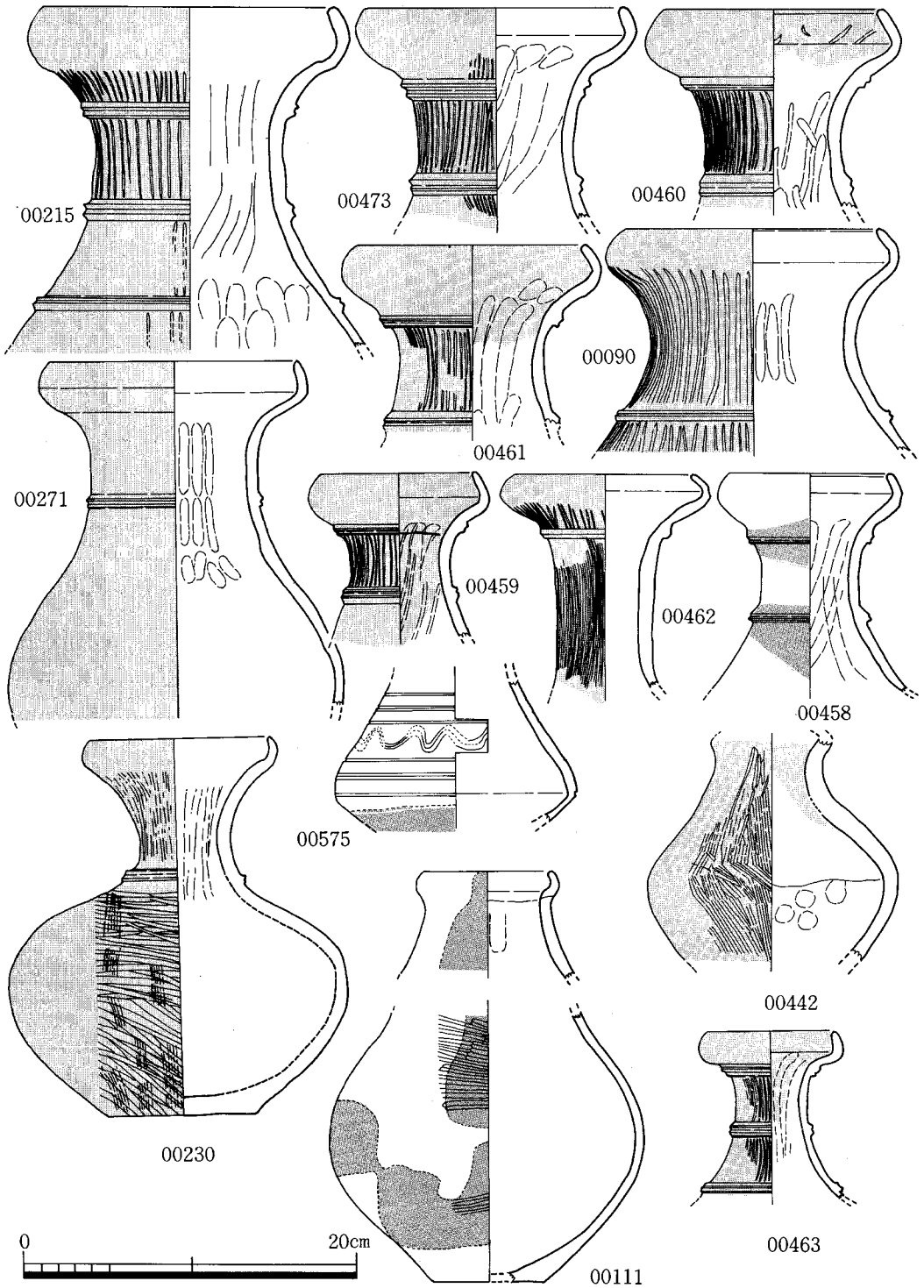
第70図　SD－100出土土器実測図－16（縮尺1/4）



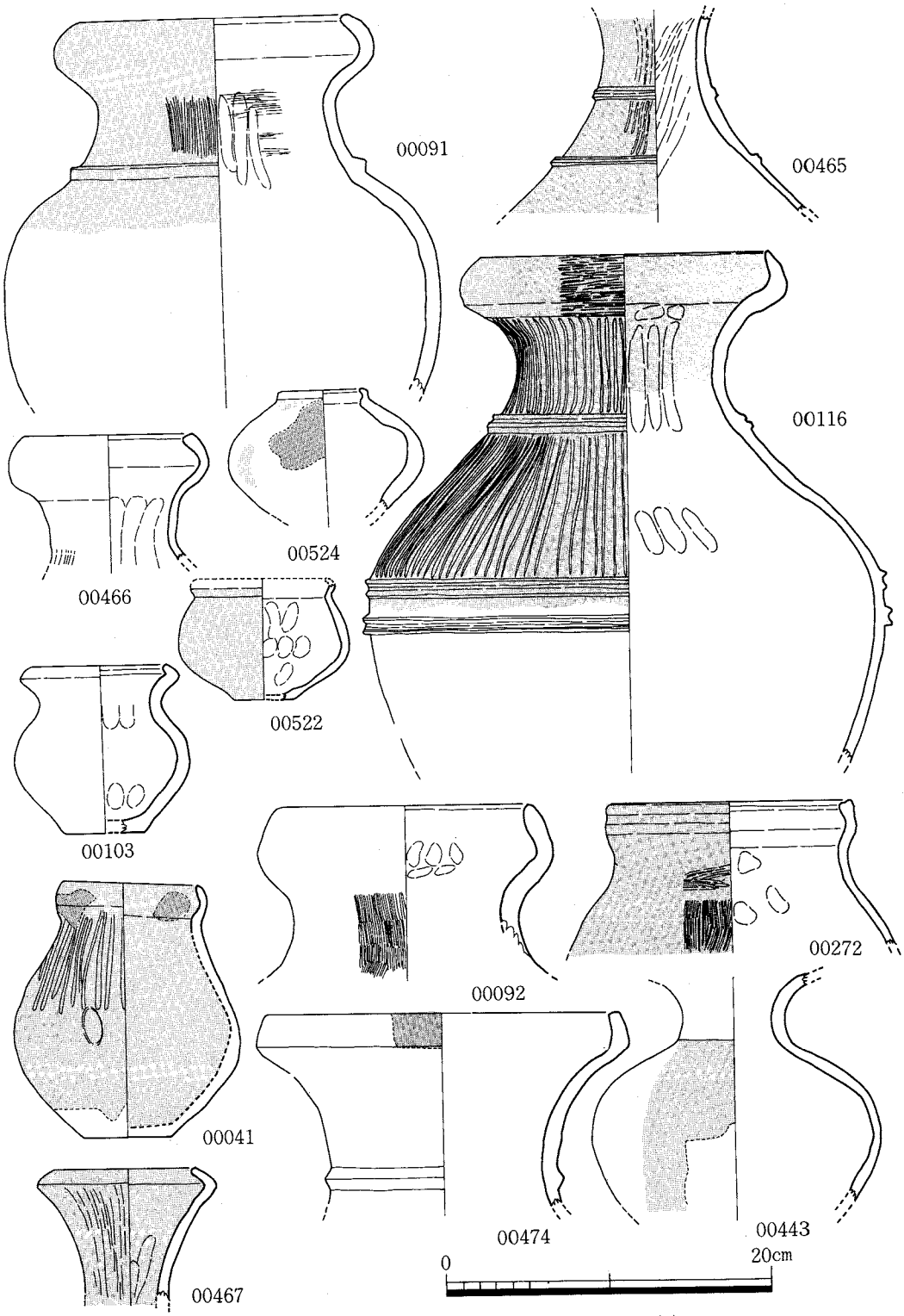
第71図　SD－100出土土器実測図－17（縮尺1/4，1/6）



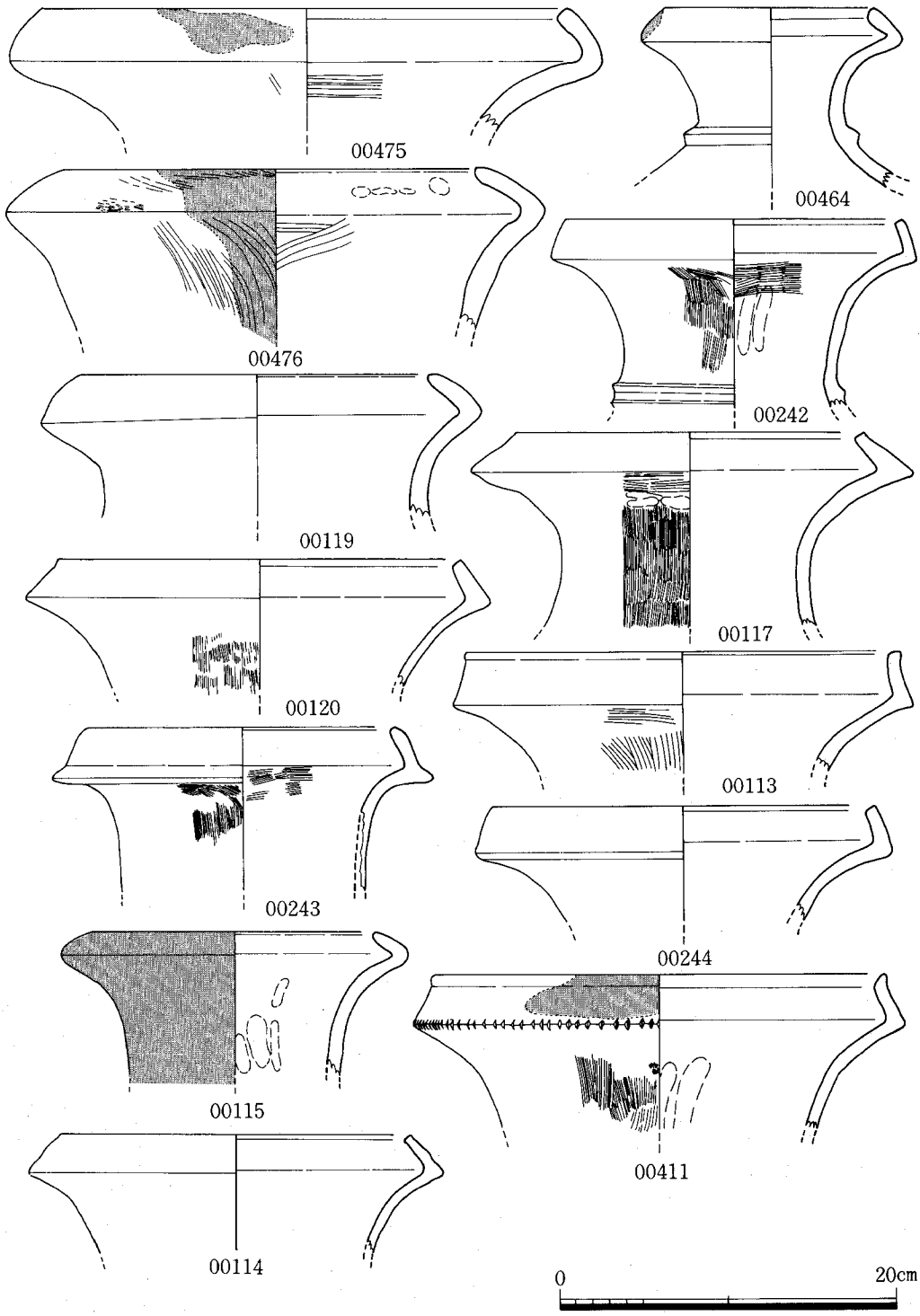
第72図　SD－100出土土器実測図－18（縮尺1/4）



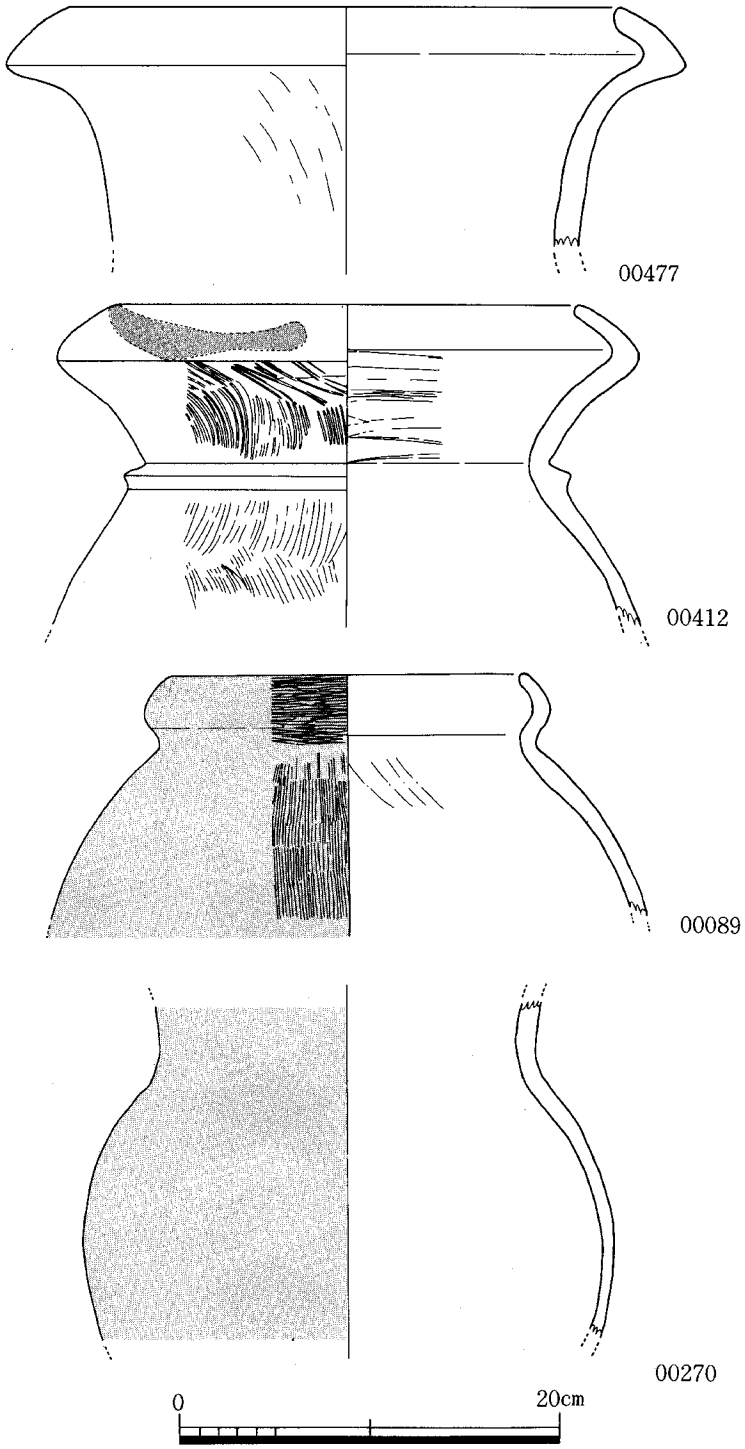
第73図　SD－100出土土器実測図－19（縮尺1/4）



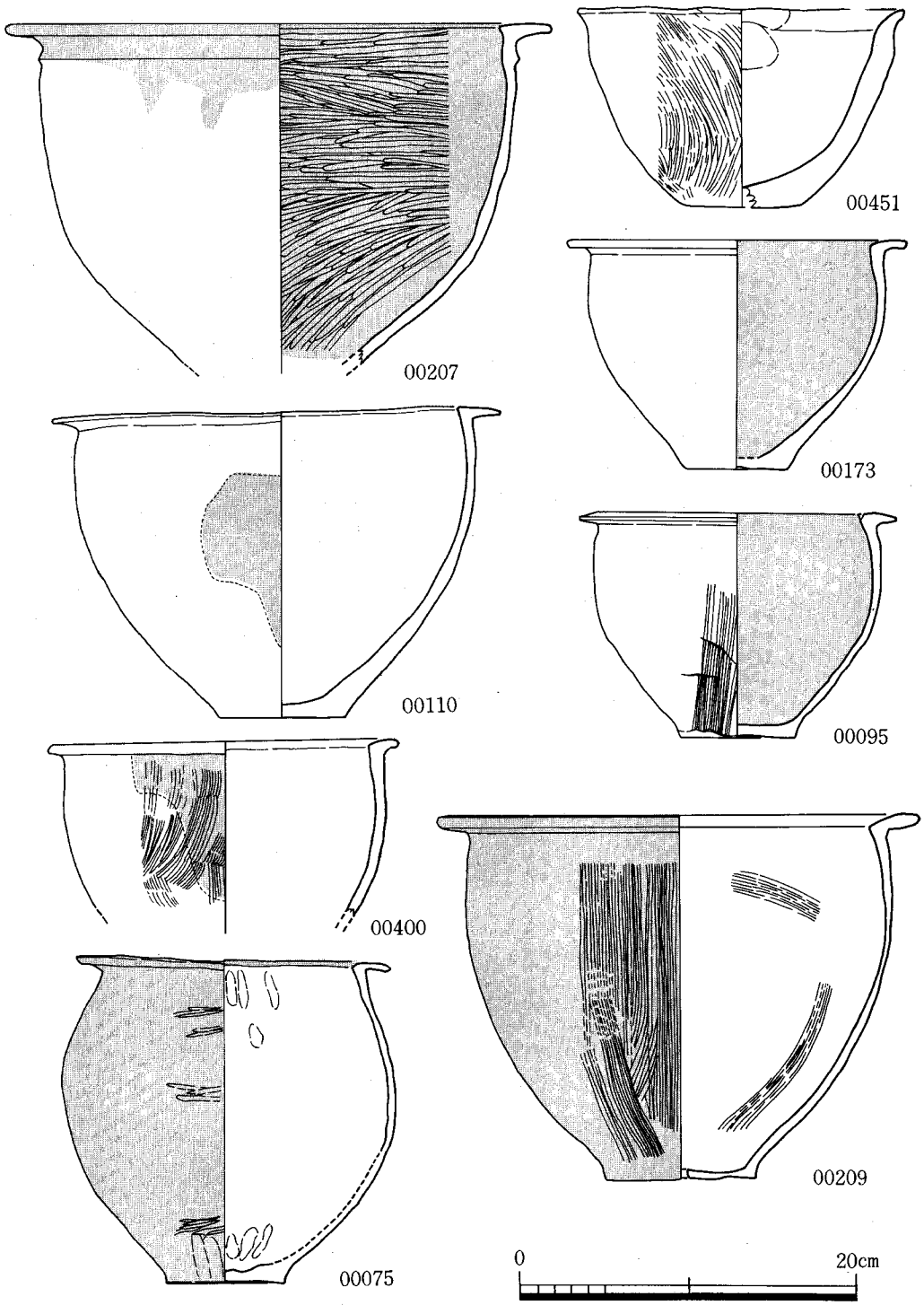
第74図　SD－100出土土器実測図－20（縮尺1/4）



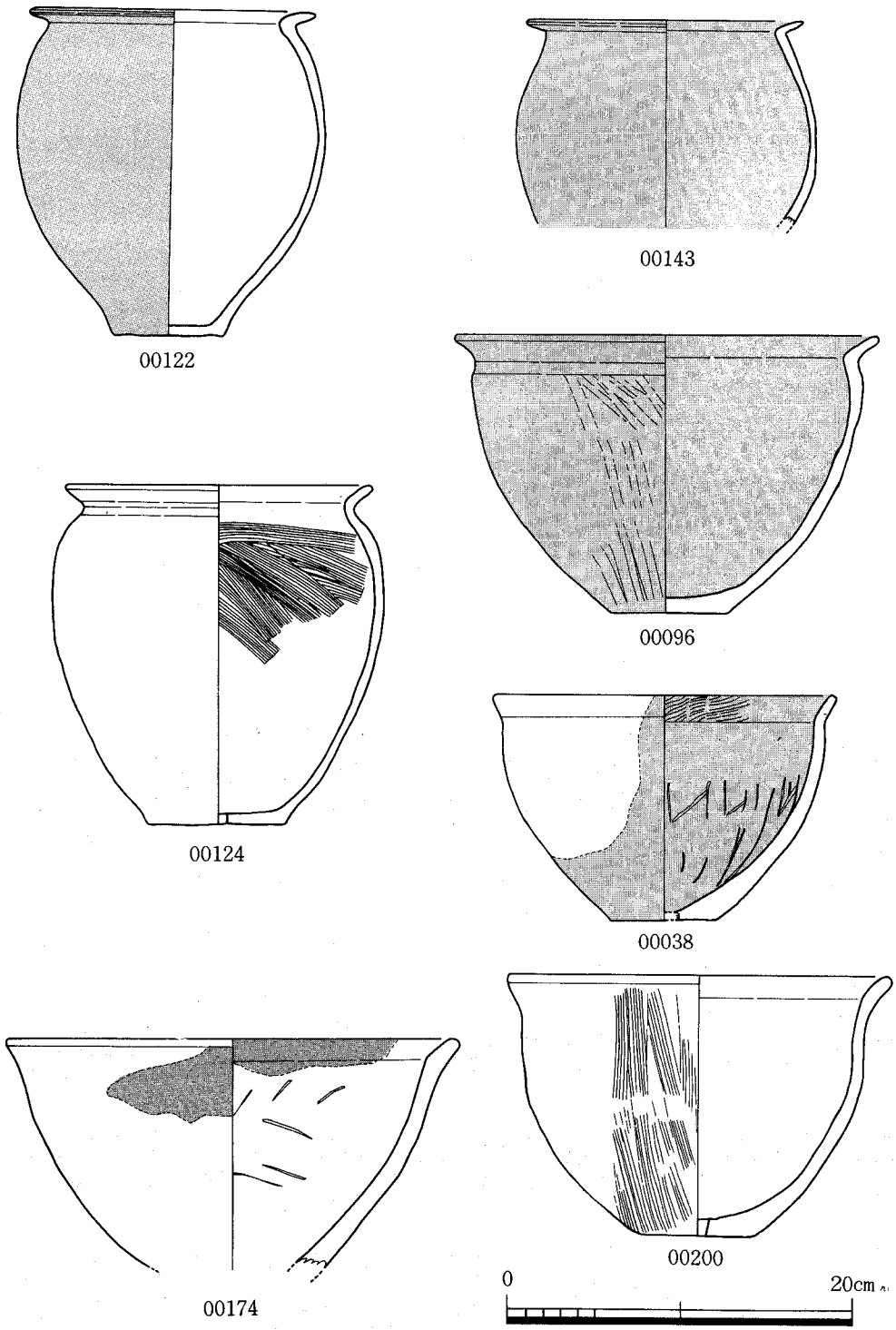
第75図　SD－100出土土器実測図－21（縮尺1/4）



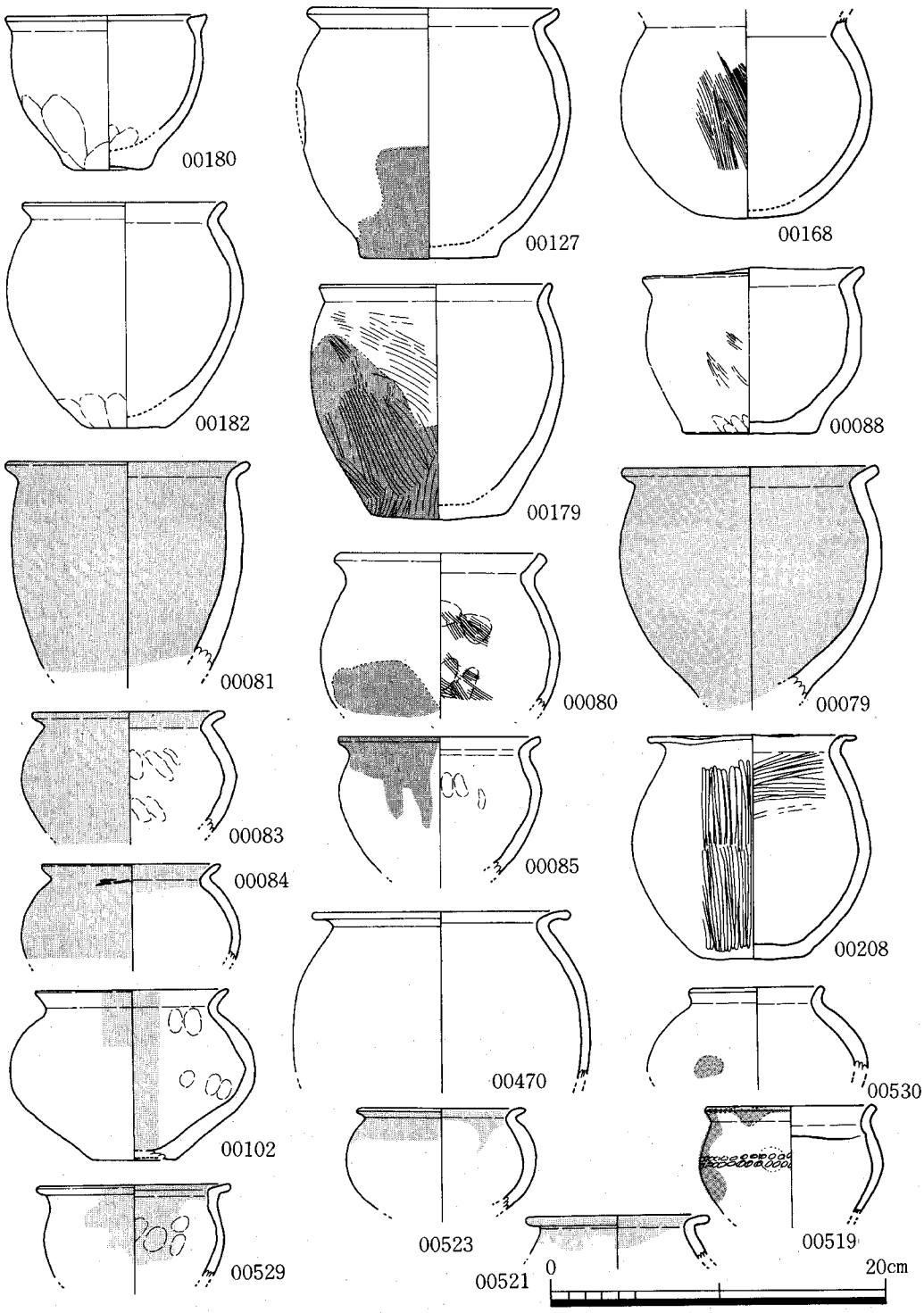
第76図　SD－100出土土器実測図－22（縮尺1/4）



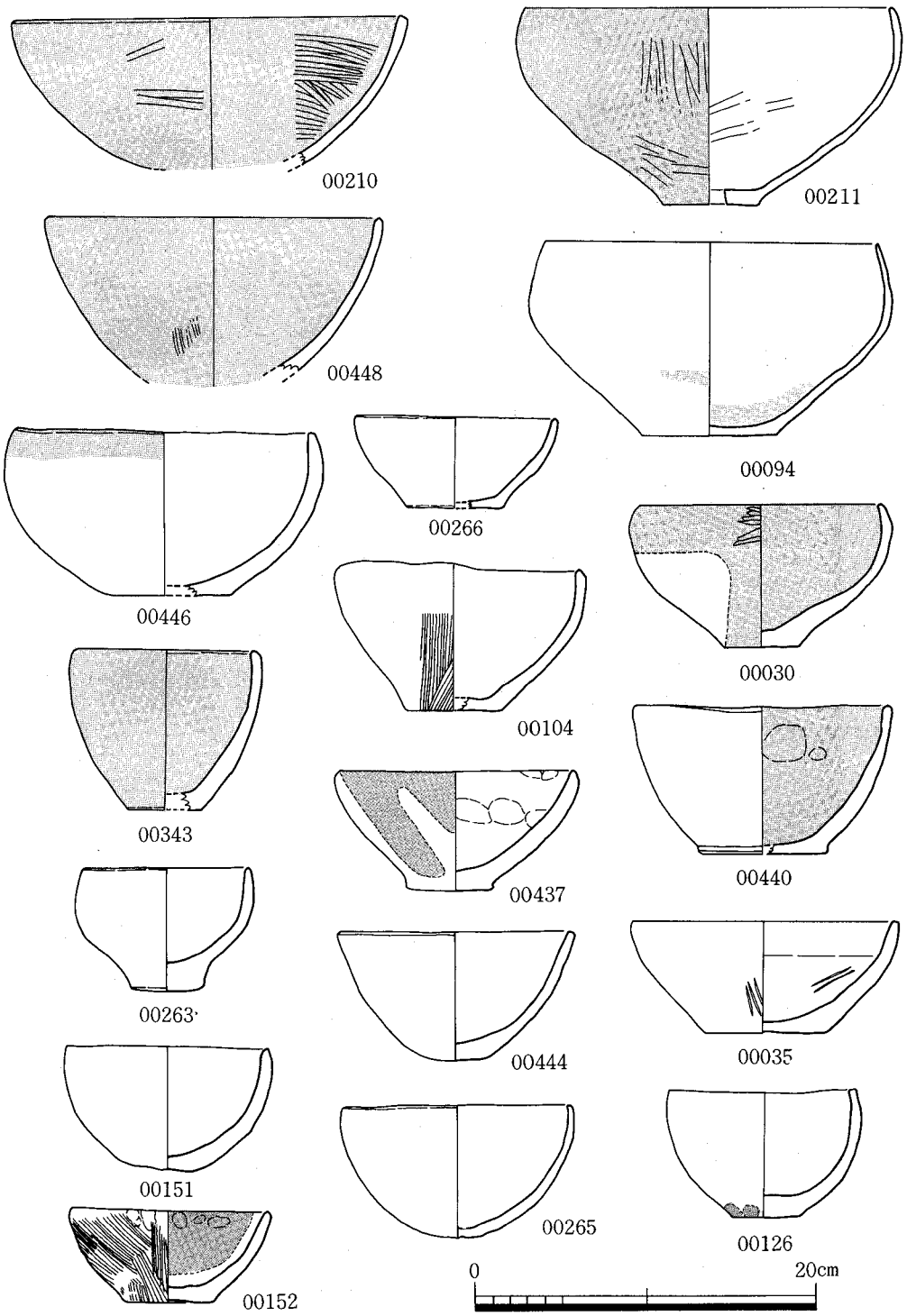
第77図　SD－100出土土器実測図－23（縮尺1/4）



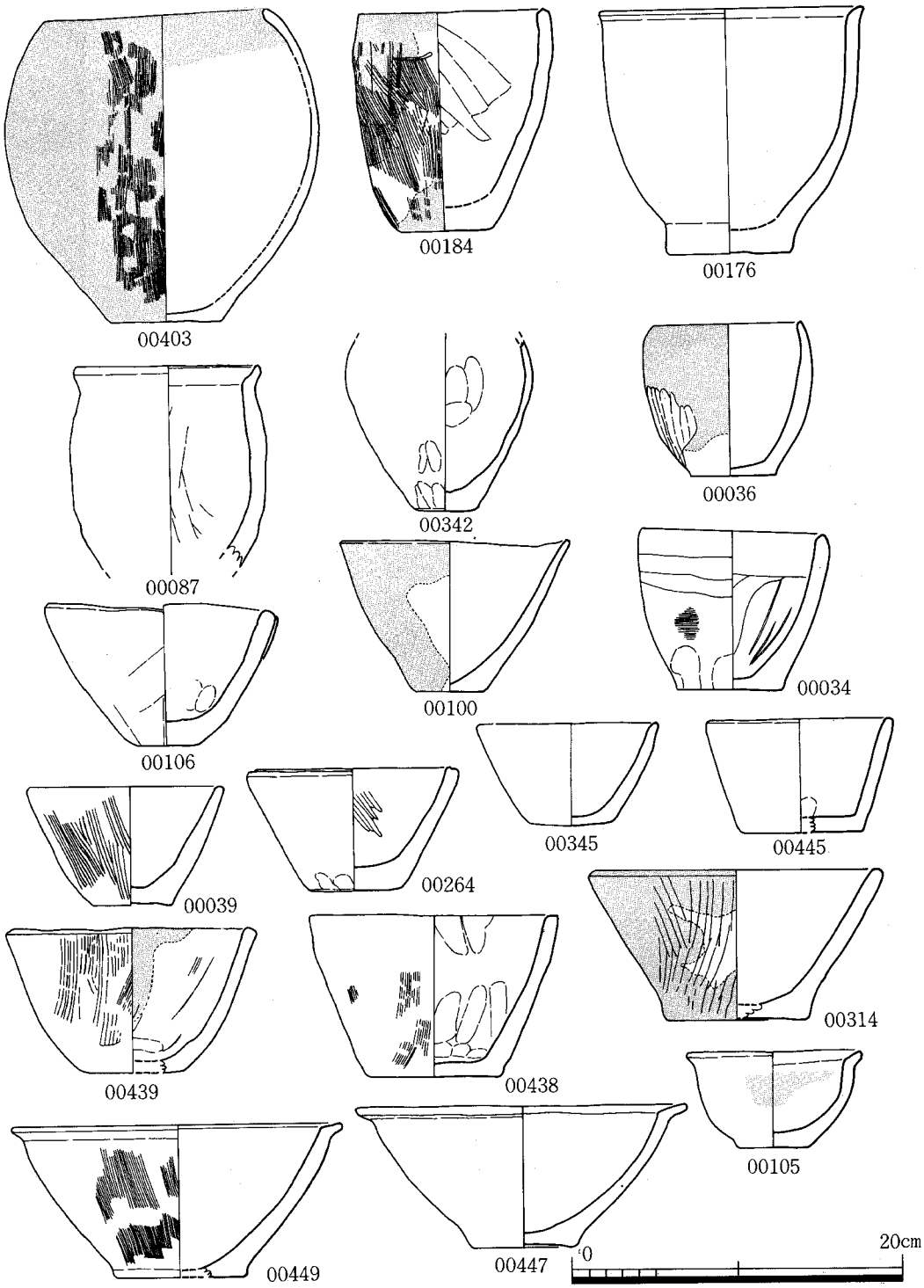
第78図　SD－100出土土器実測図－24（縮尺1/4）



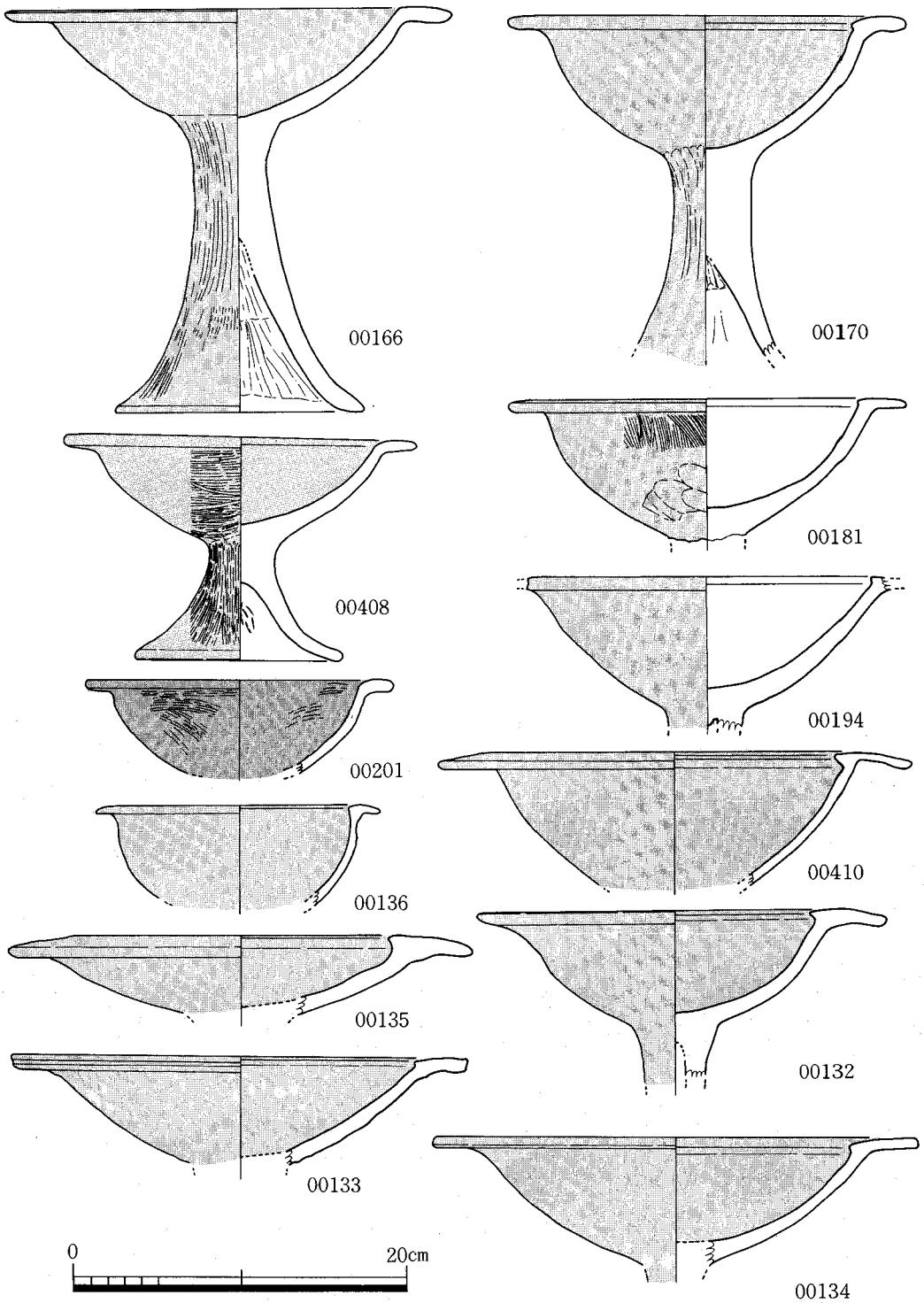
第79図　SD－100出土土器実測図－25（縮尺1/4）



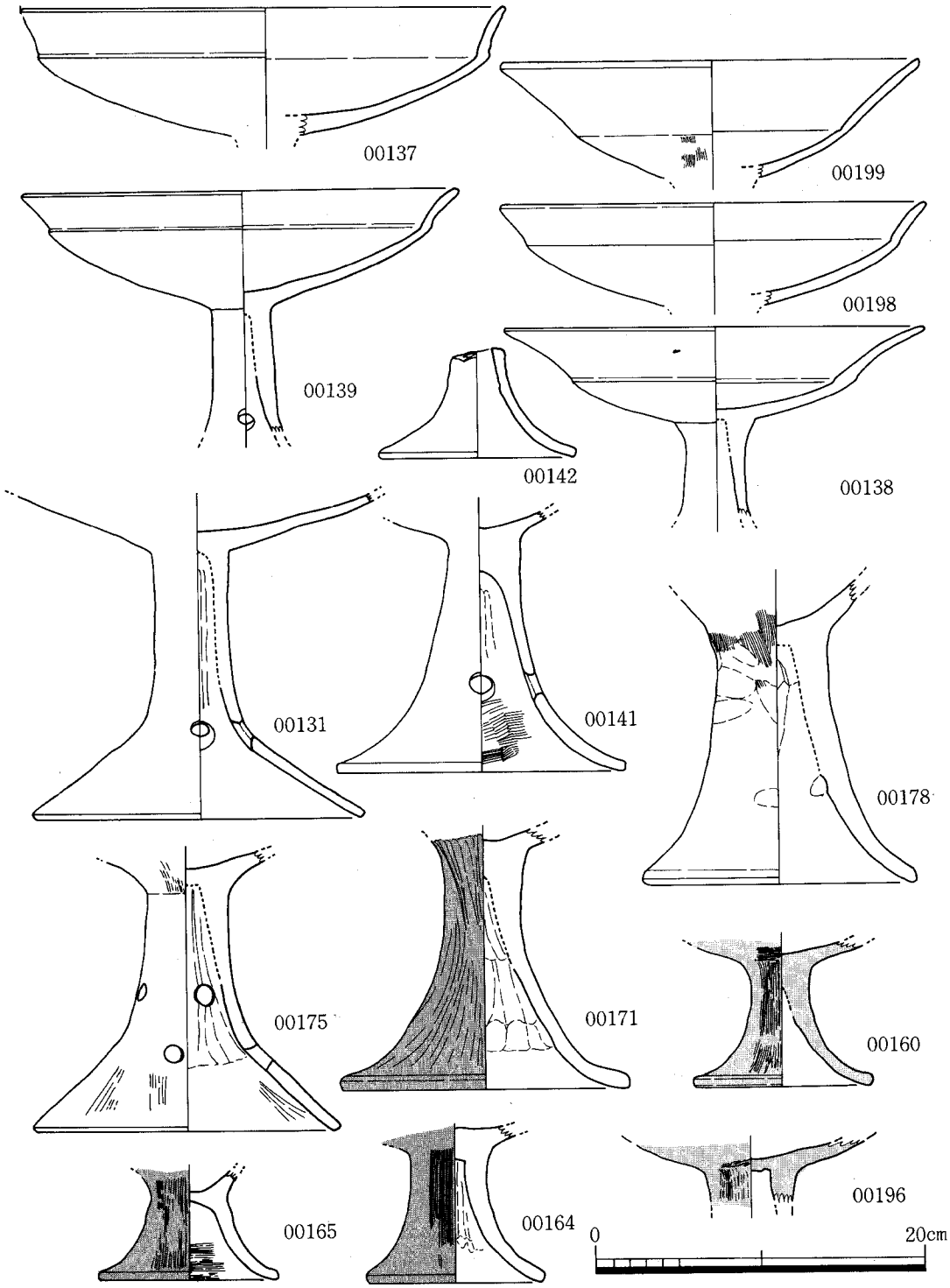
第80図　SD－100出土土器実測図－26（縮尺1/4）



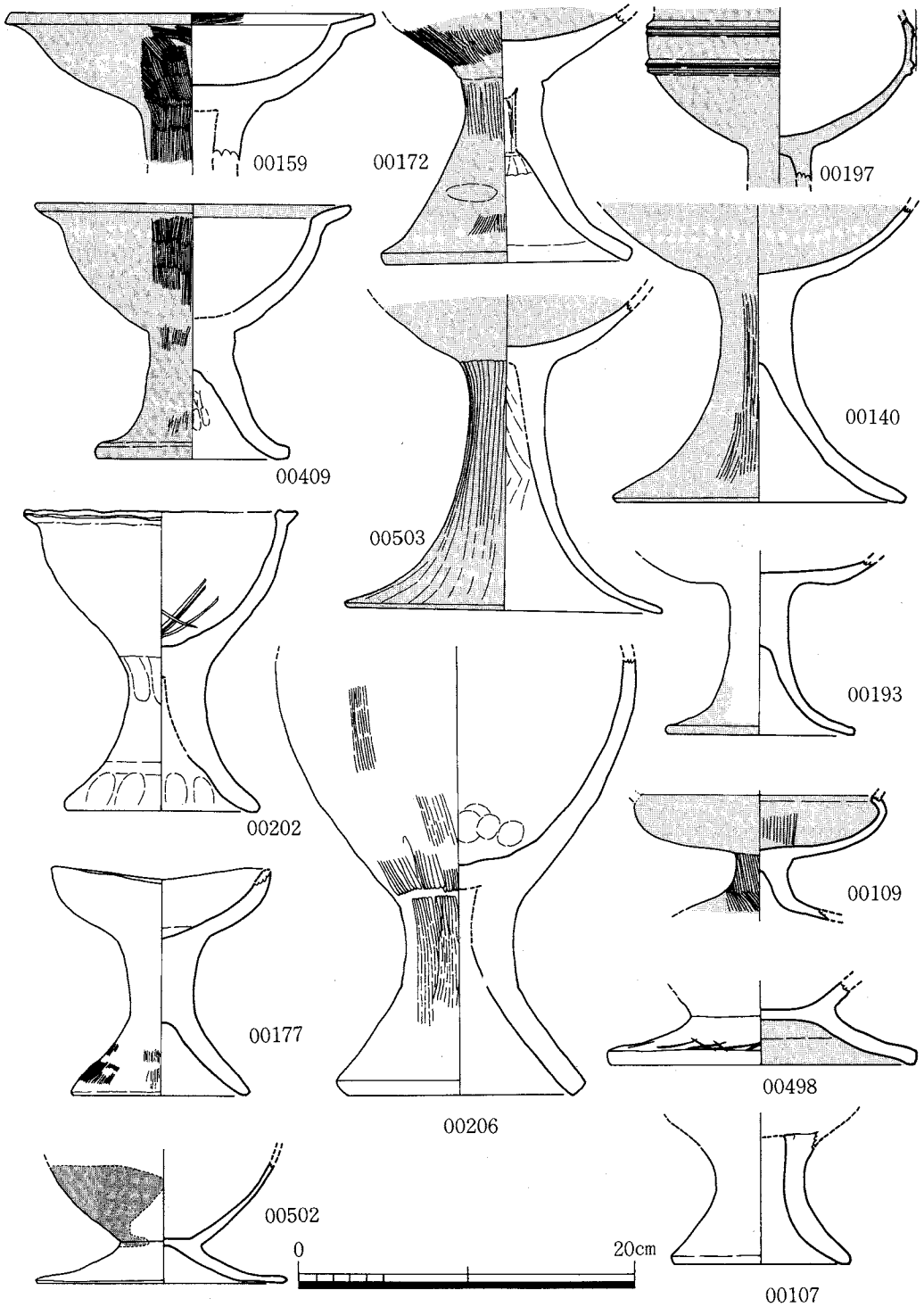
第81図　SD－100出土土器実測図－27（縮尺1/4）



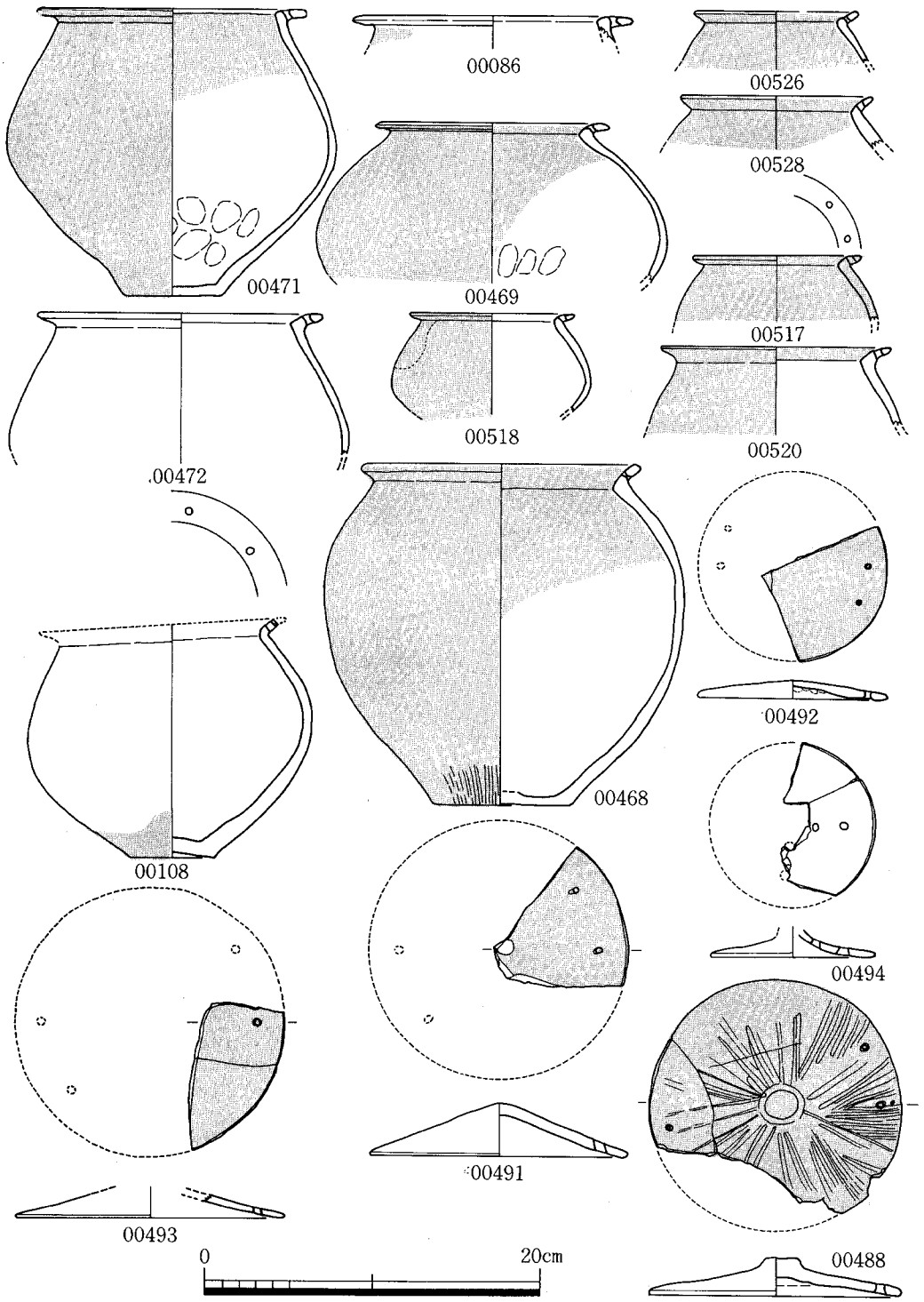
第82図　SD－100出土土器実測図－28（縮尺1/4）



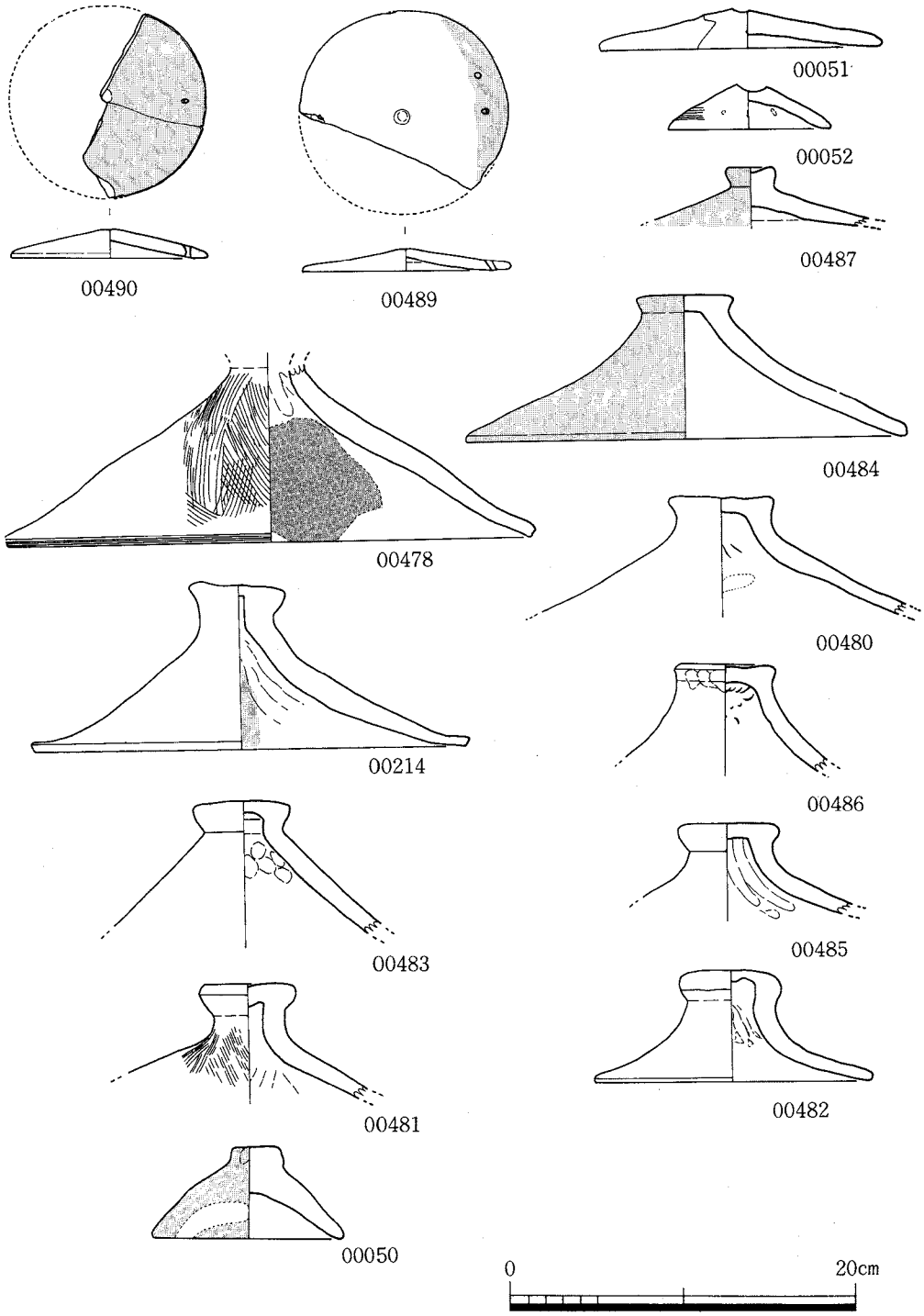
第83図　SD－100出土土器実測図－29（縮尺1/4）



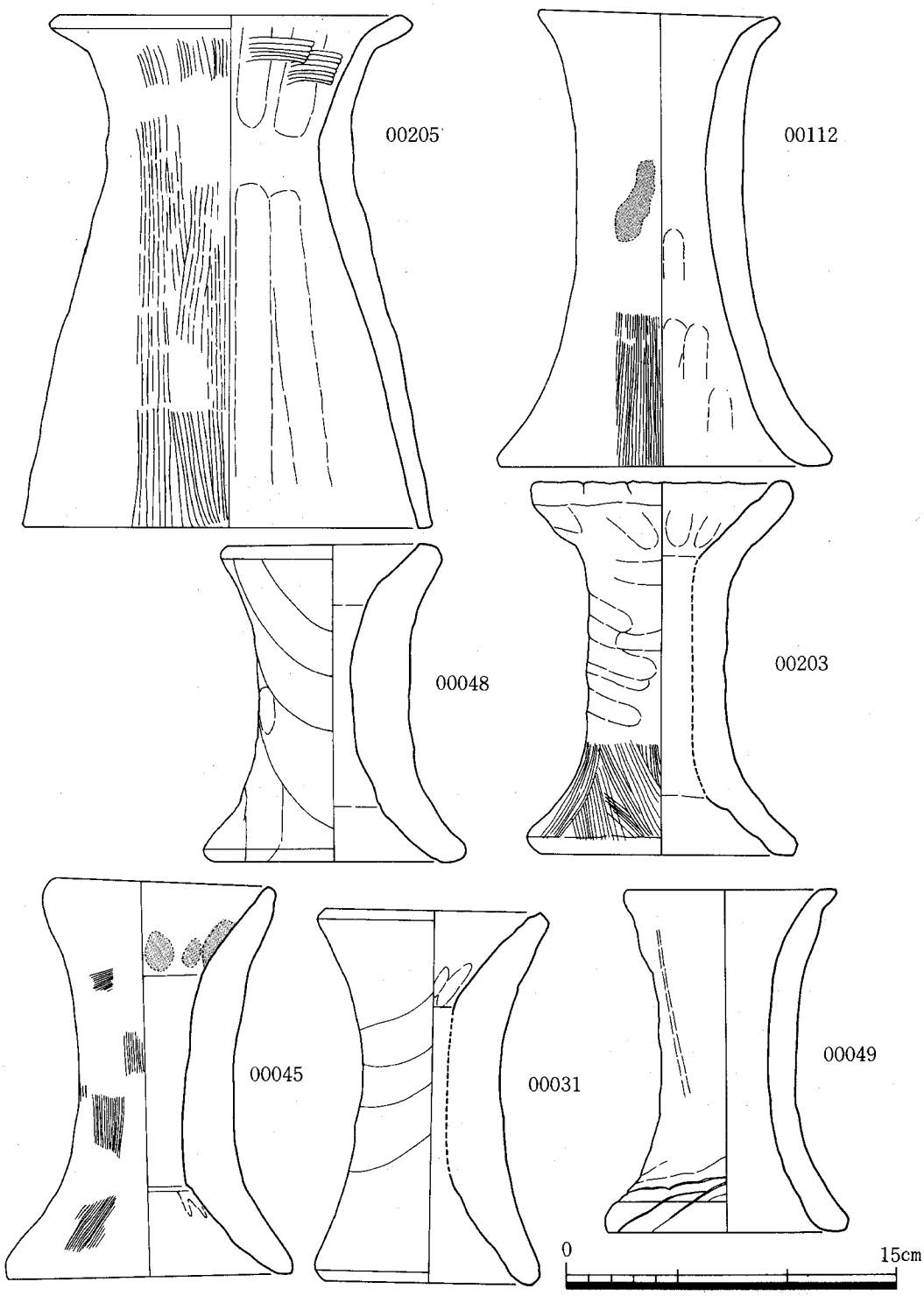
第84図　SD－100出土土器実測図－30（縮尺1/4）



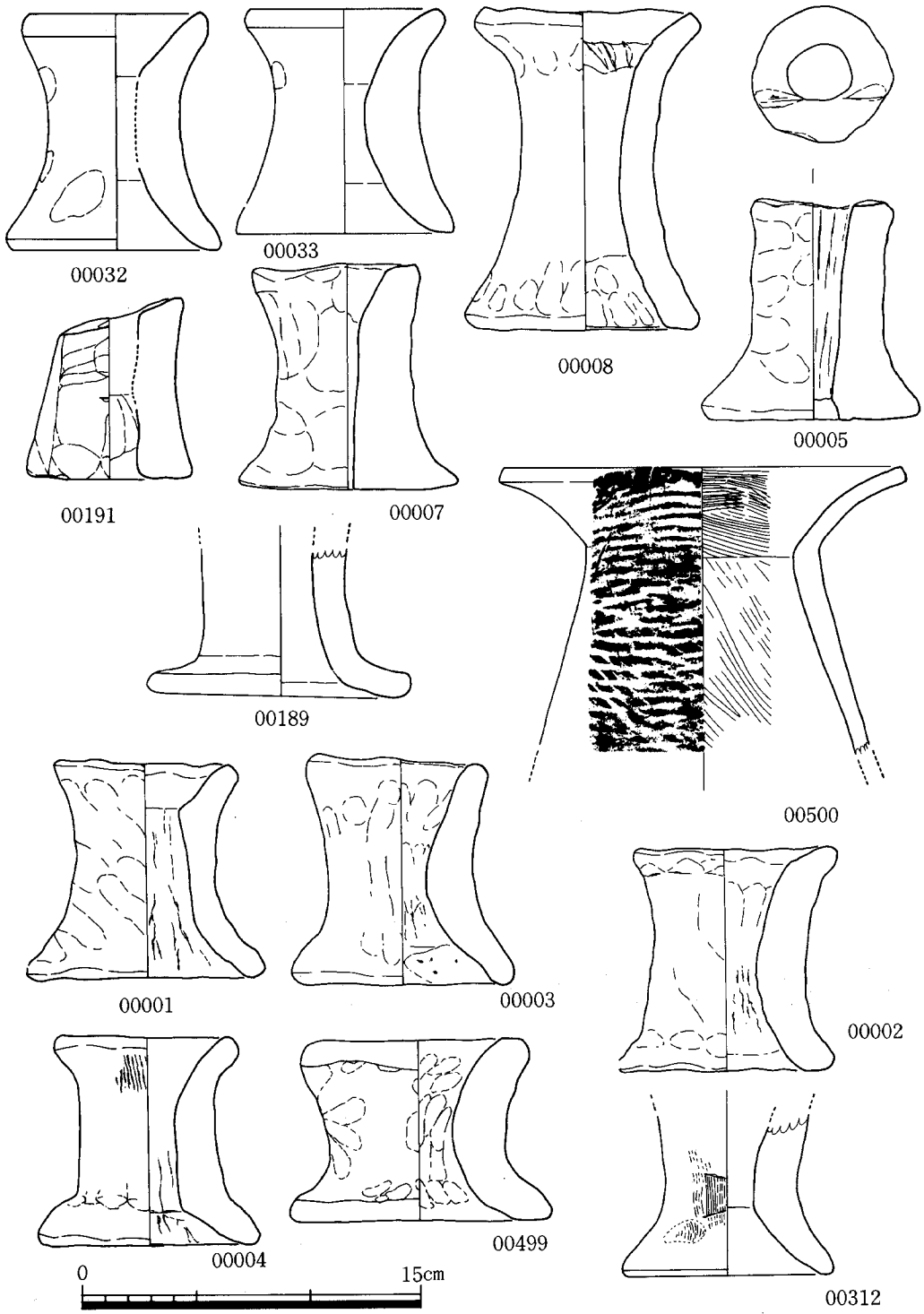
第85図　SD－100出土土器実測図－31（縮尺1/4）



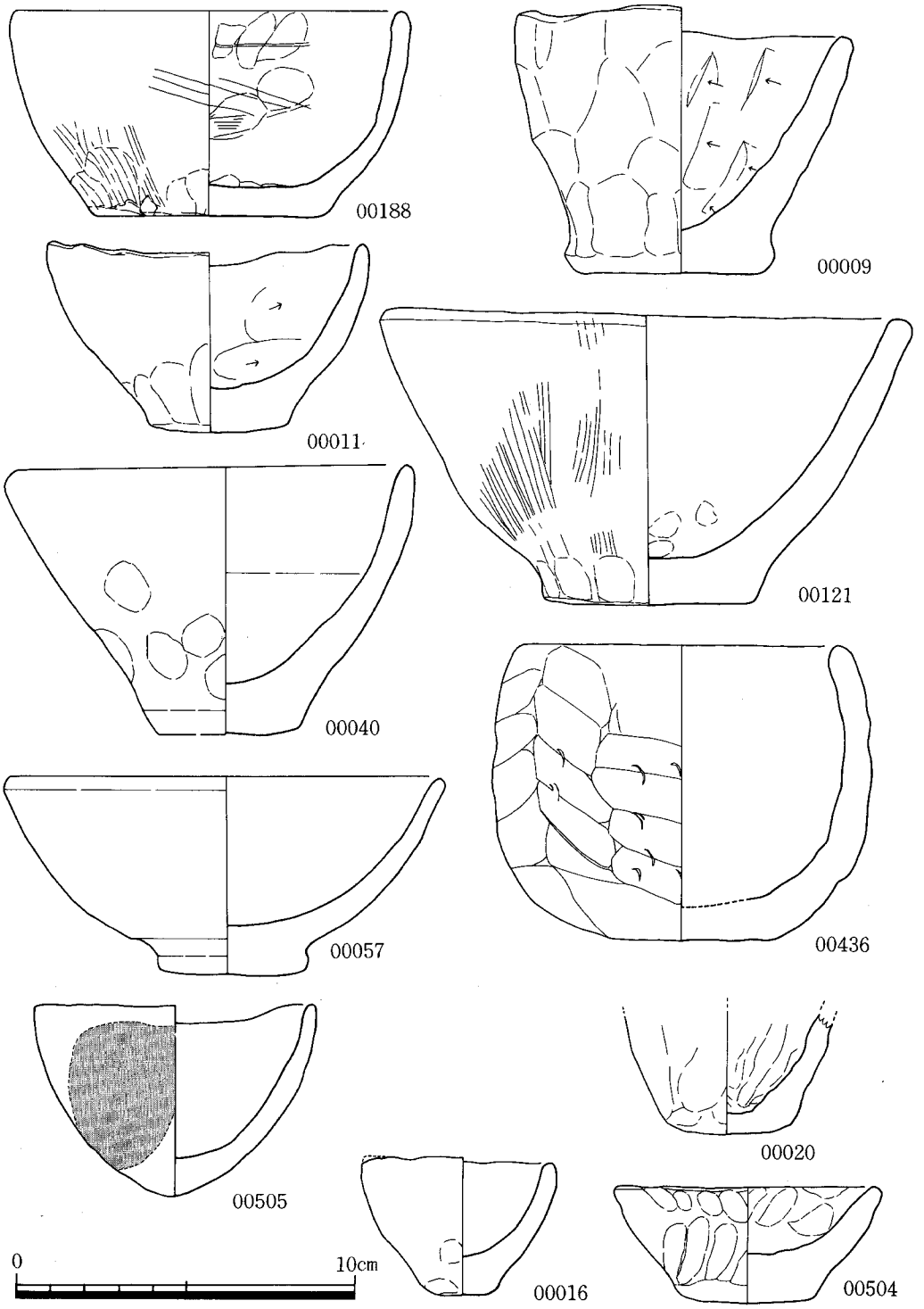
第86図　SD－100出土土器実測図－32（縮尺1/4）



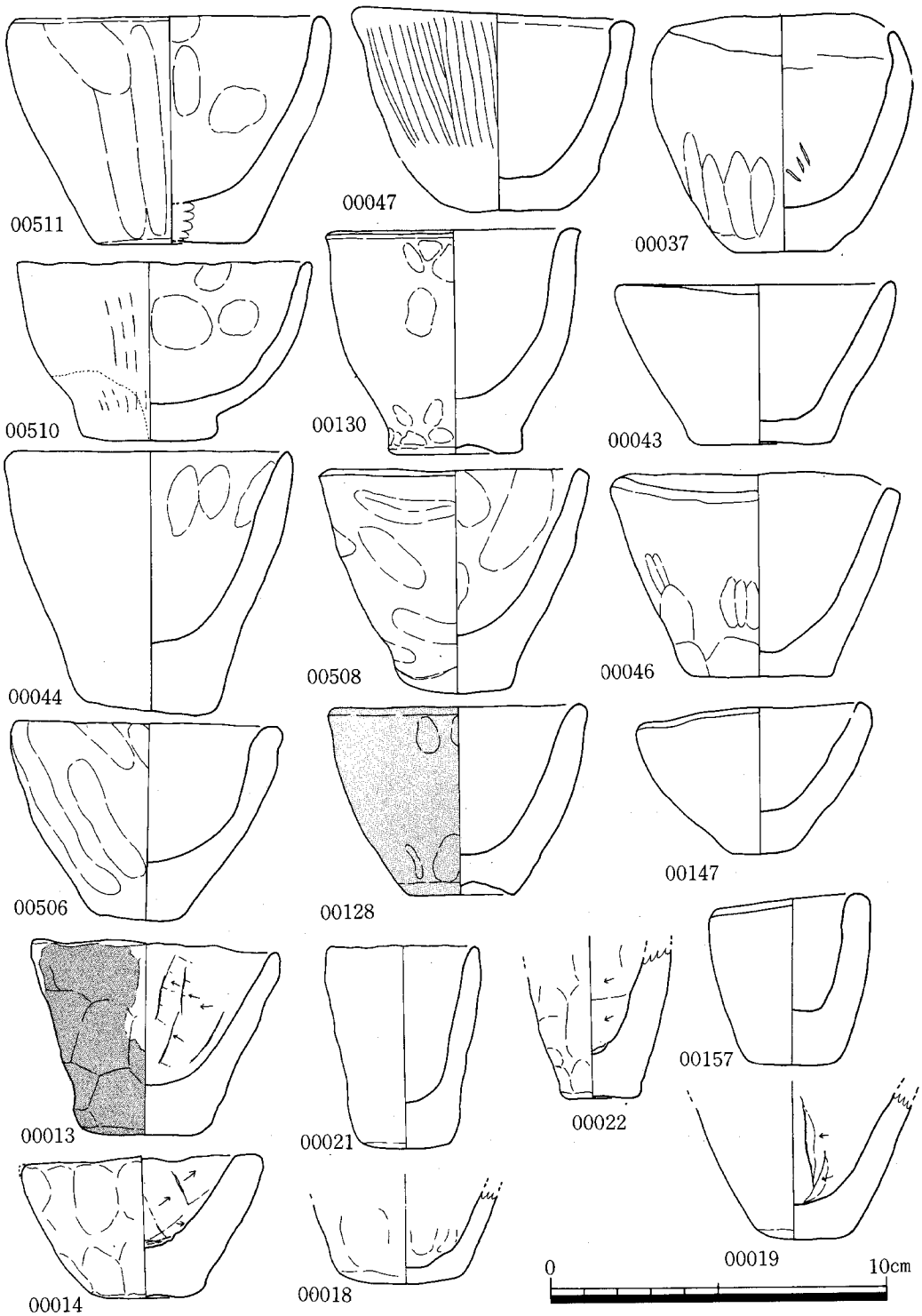
第87図　SD－100出土土器実測図－33（縮尺1/3）



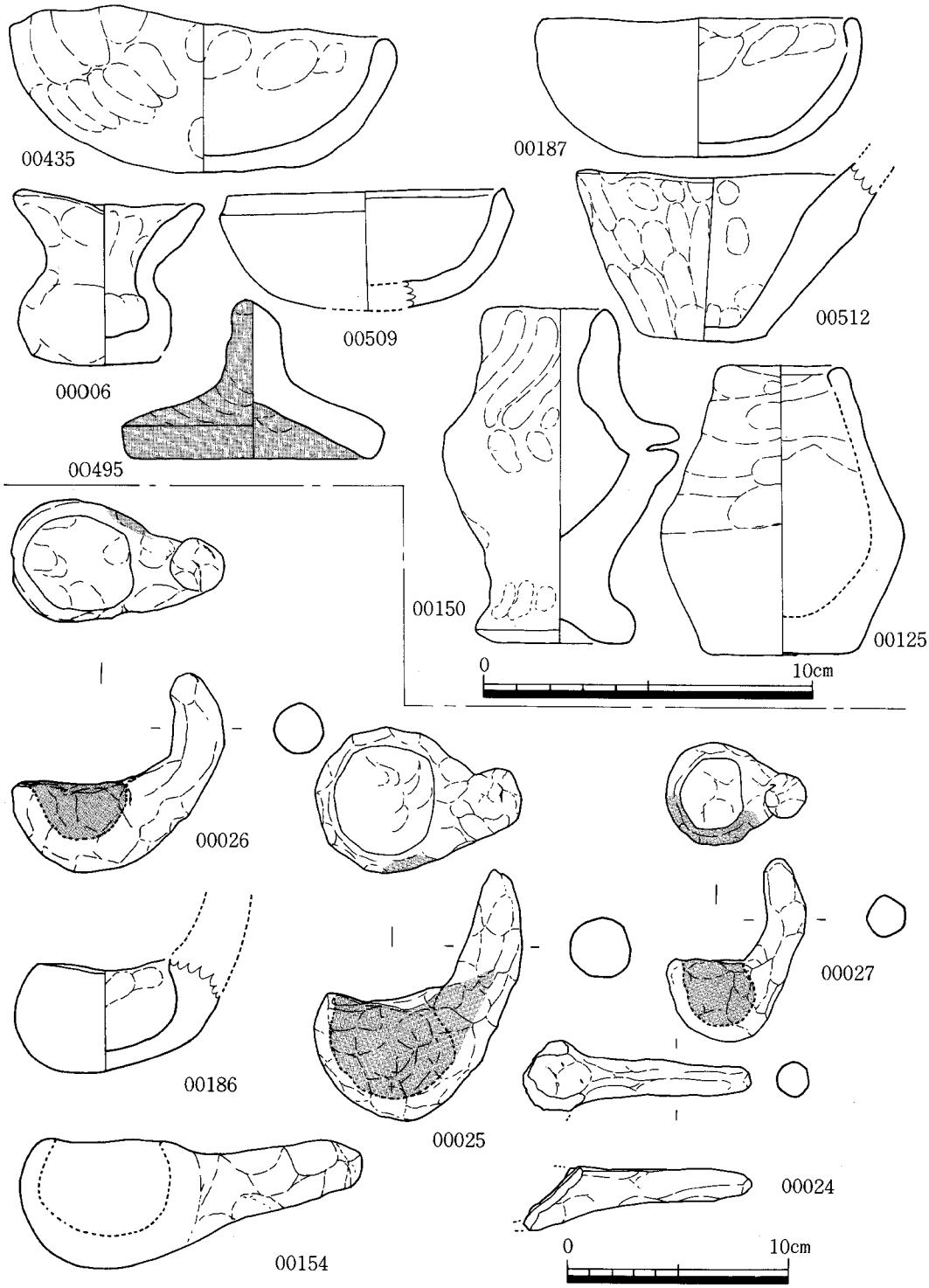
第88図　SD－100出土土器実測図－34（縮尺1/3）



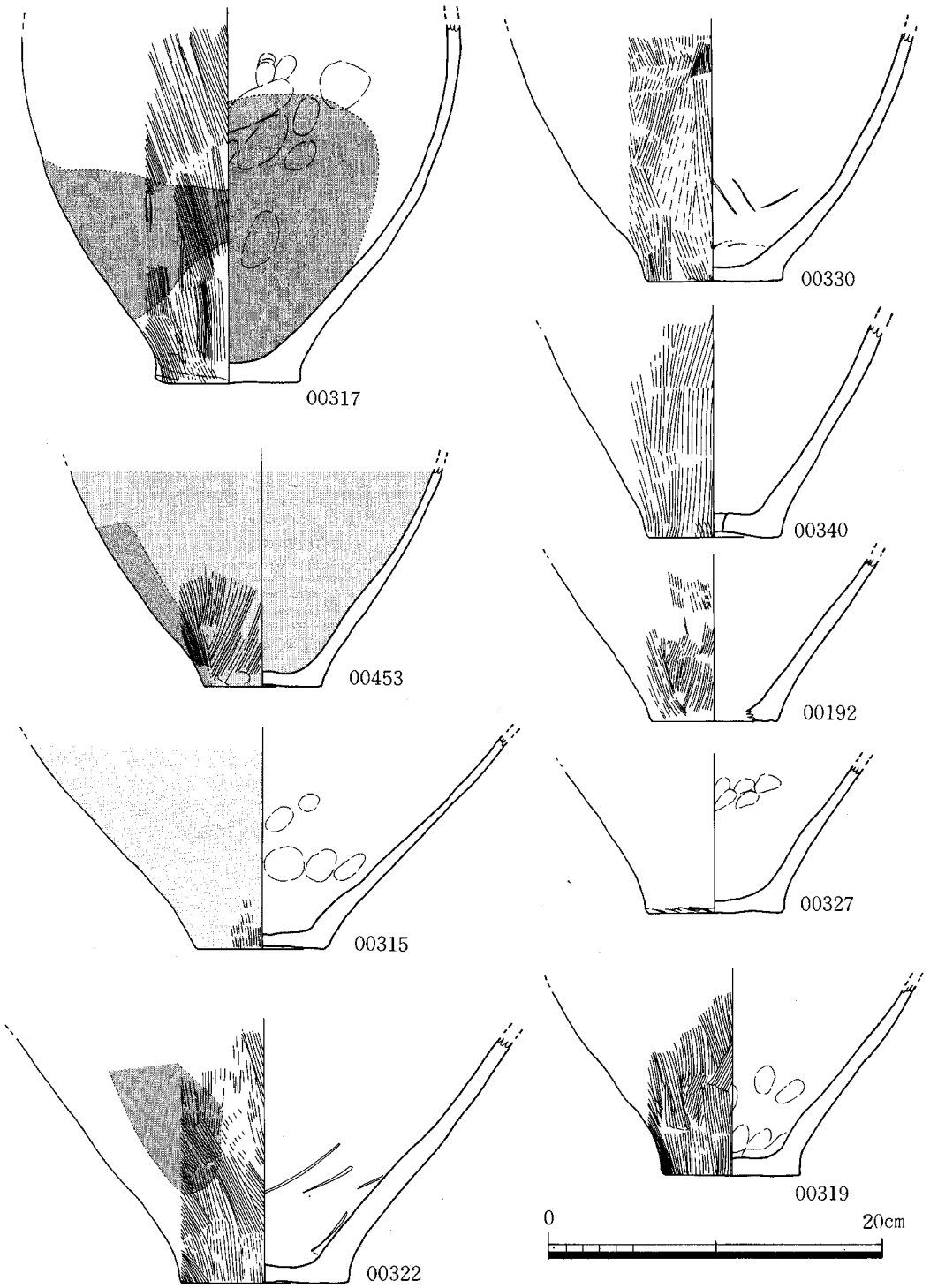
第89図　SD－100出土土器実測図－35（縮尺1/2）



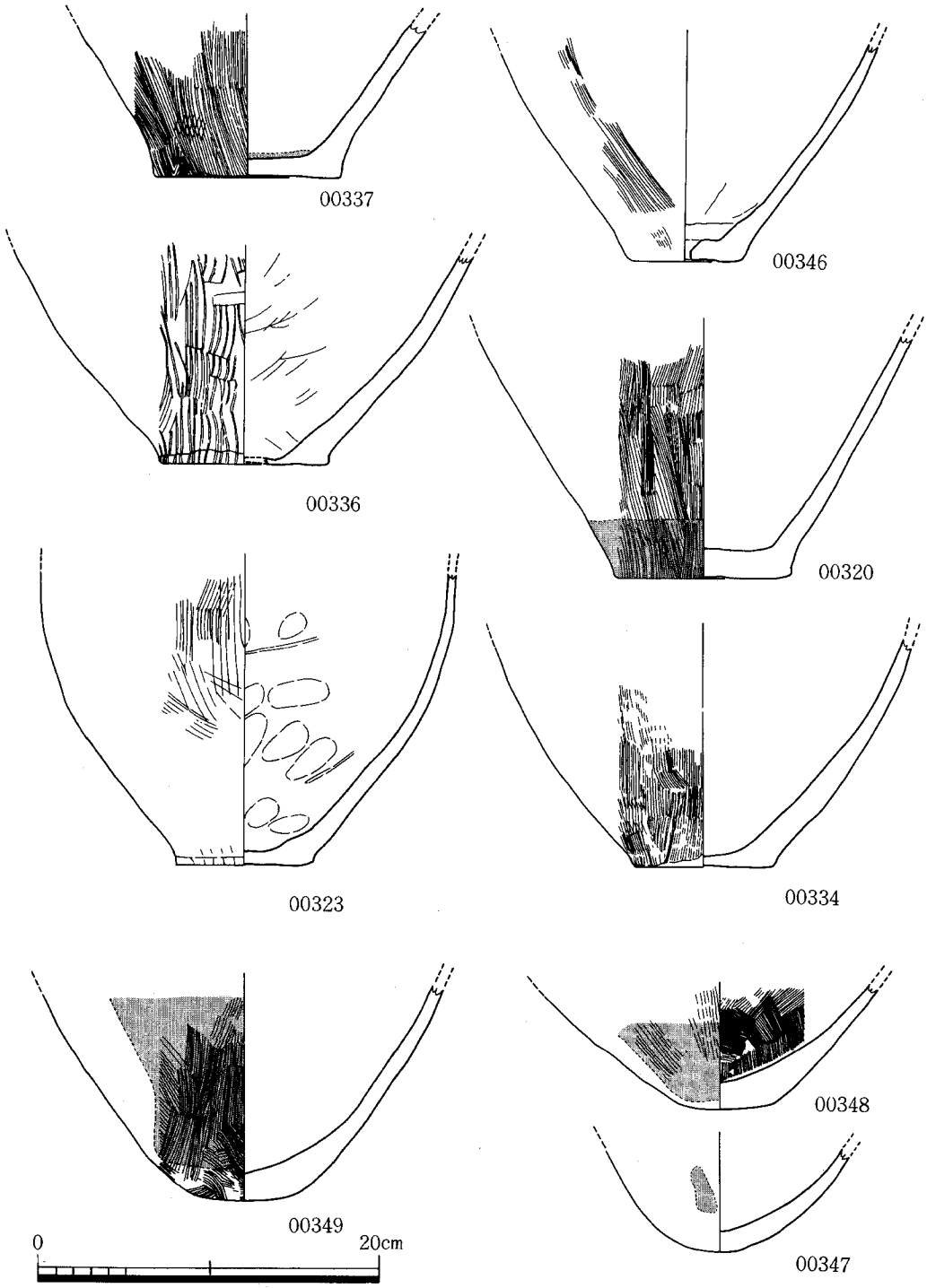
第90図　SD－100出土土器実測図－36（縮尺1/2）



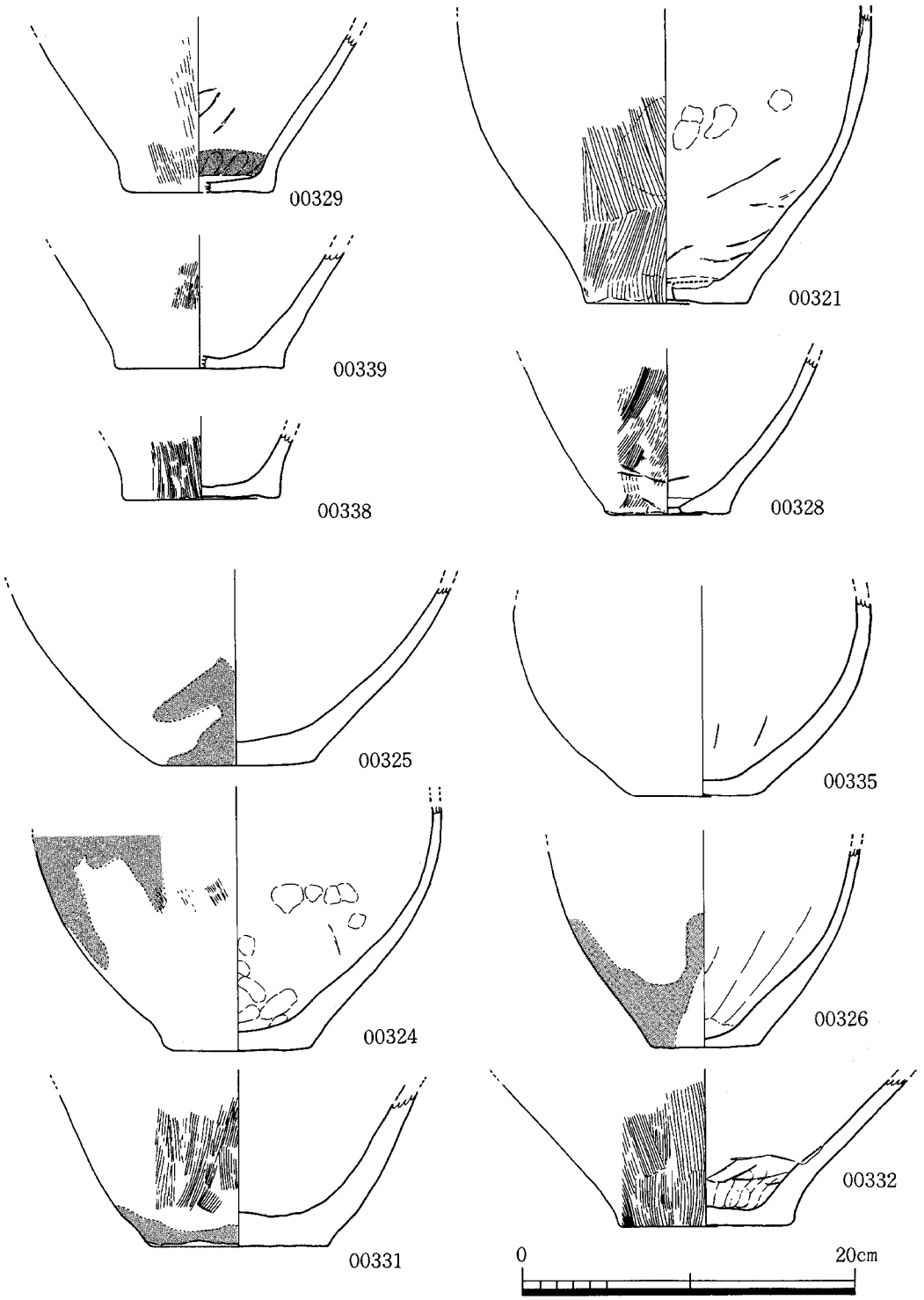
第91図　SD－100出土土器実測図－37（縮尺1/2、1/3）



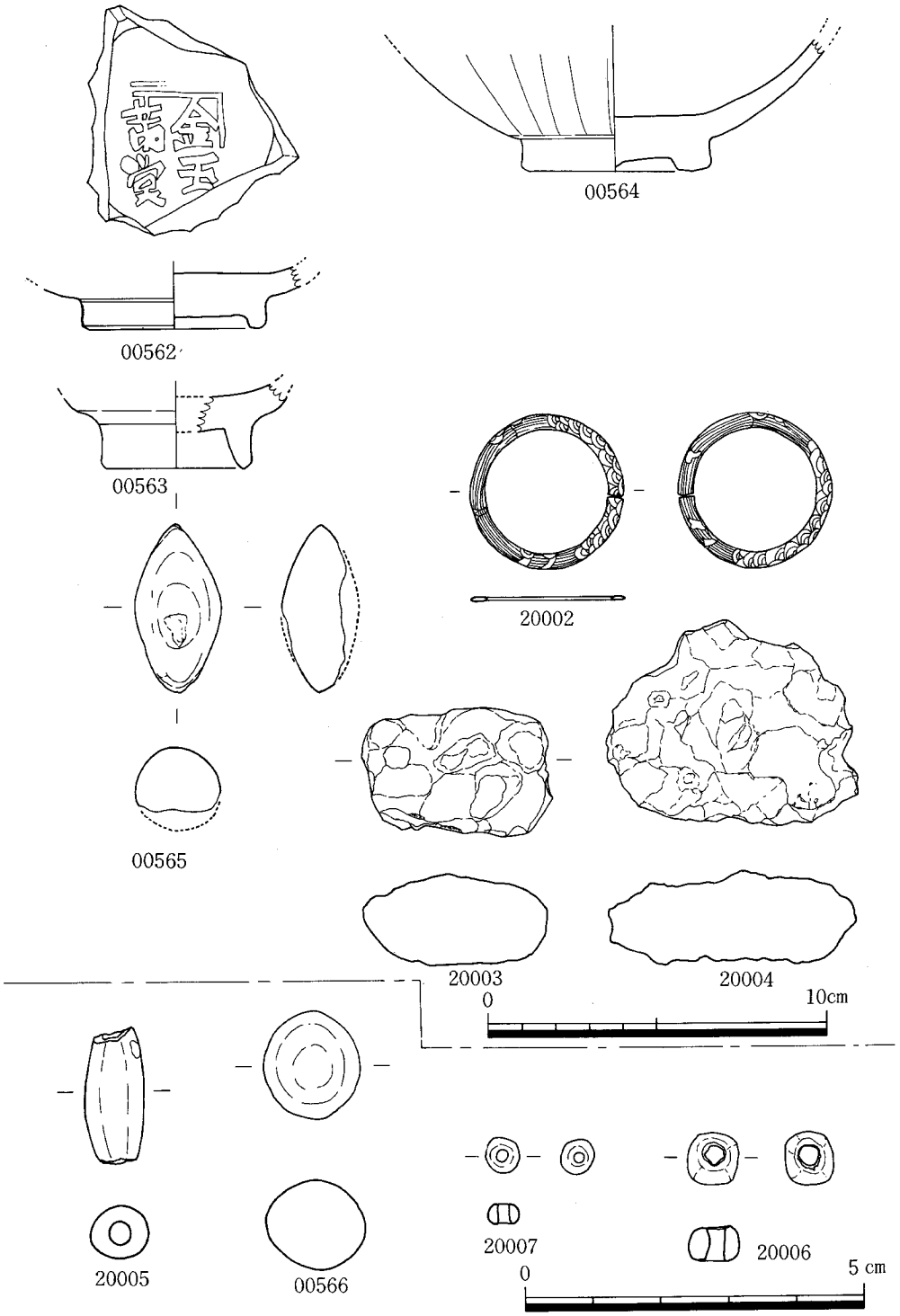
第92図　SD－100出土土器実測図－38（縮尺1/4）



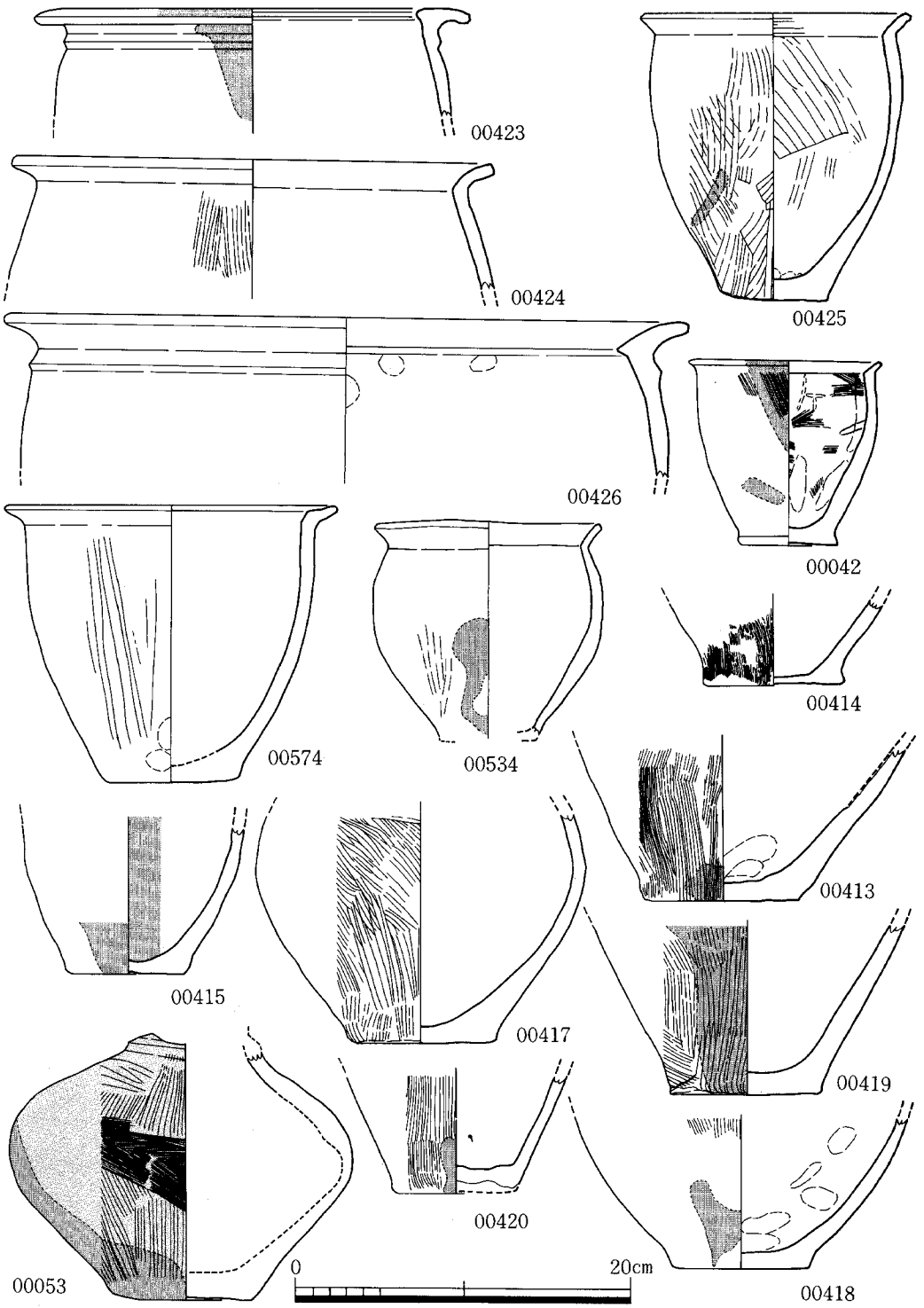
第93図　SD－100出土土器実測図－39（縮尺1/4）



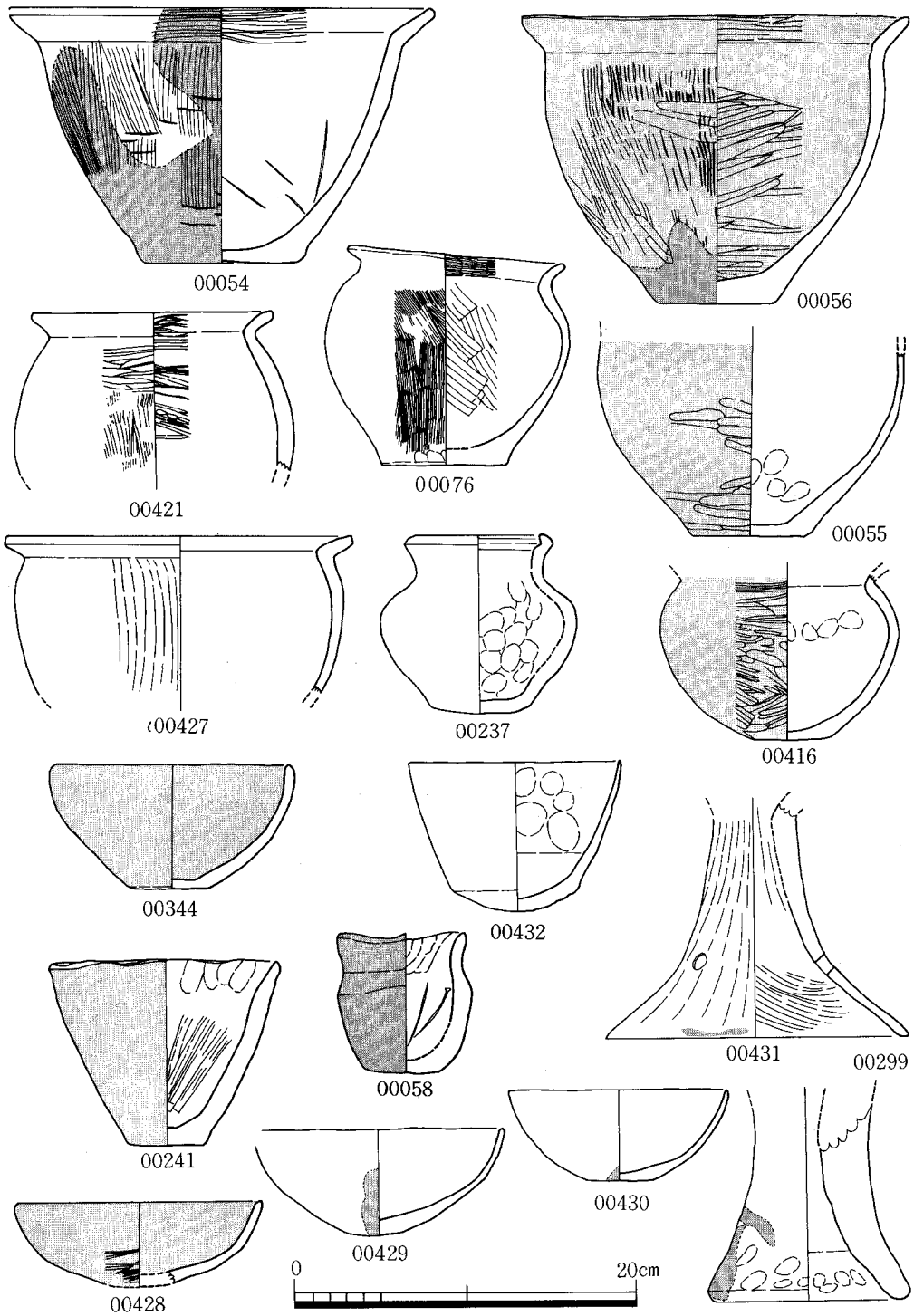
第94図　SD－100出土土器実測図－40（縮尺1/4）



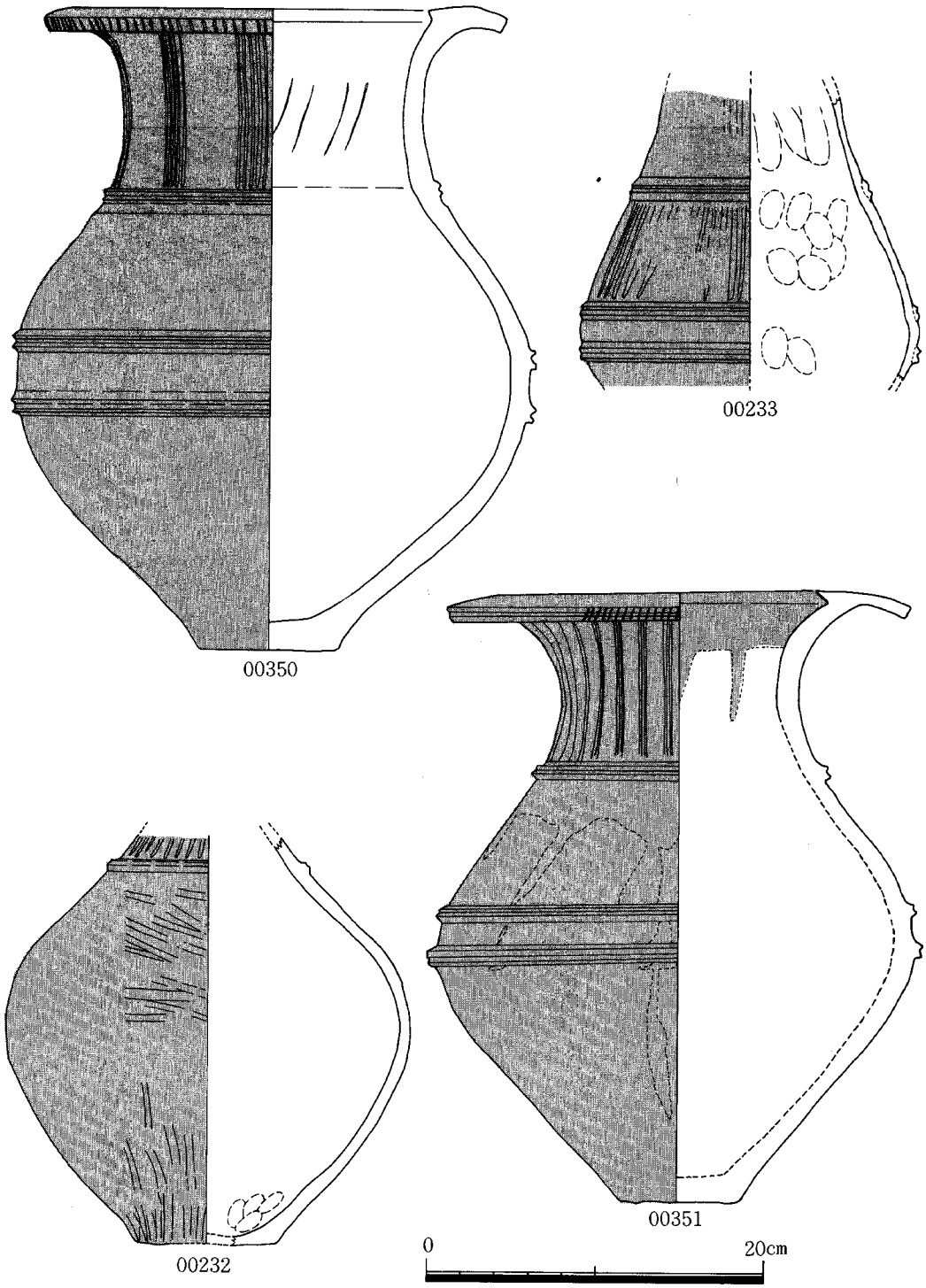
第95図　SD－100、200Pit出土土器・鉄鐸・玉実測図(縮尺1/1、1/2)



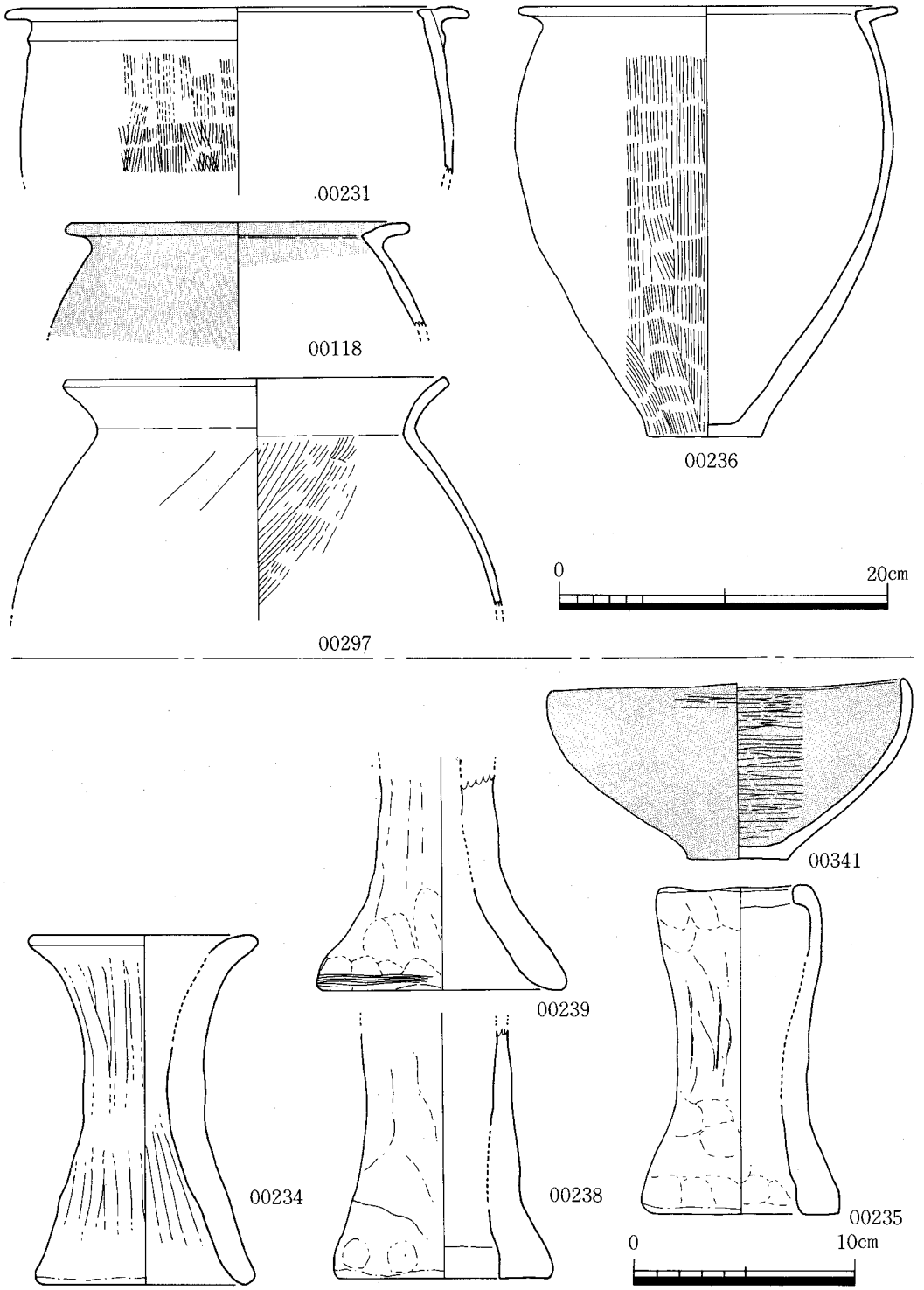
第96図　SD－50出土土器実測図－１（縮尺1/4）



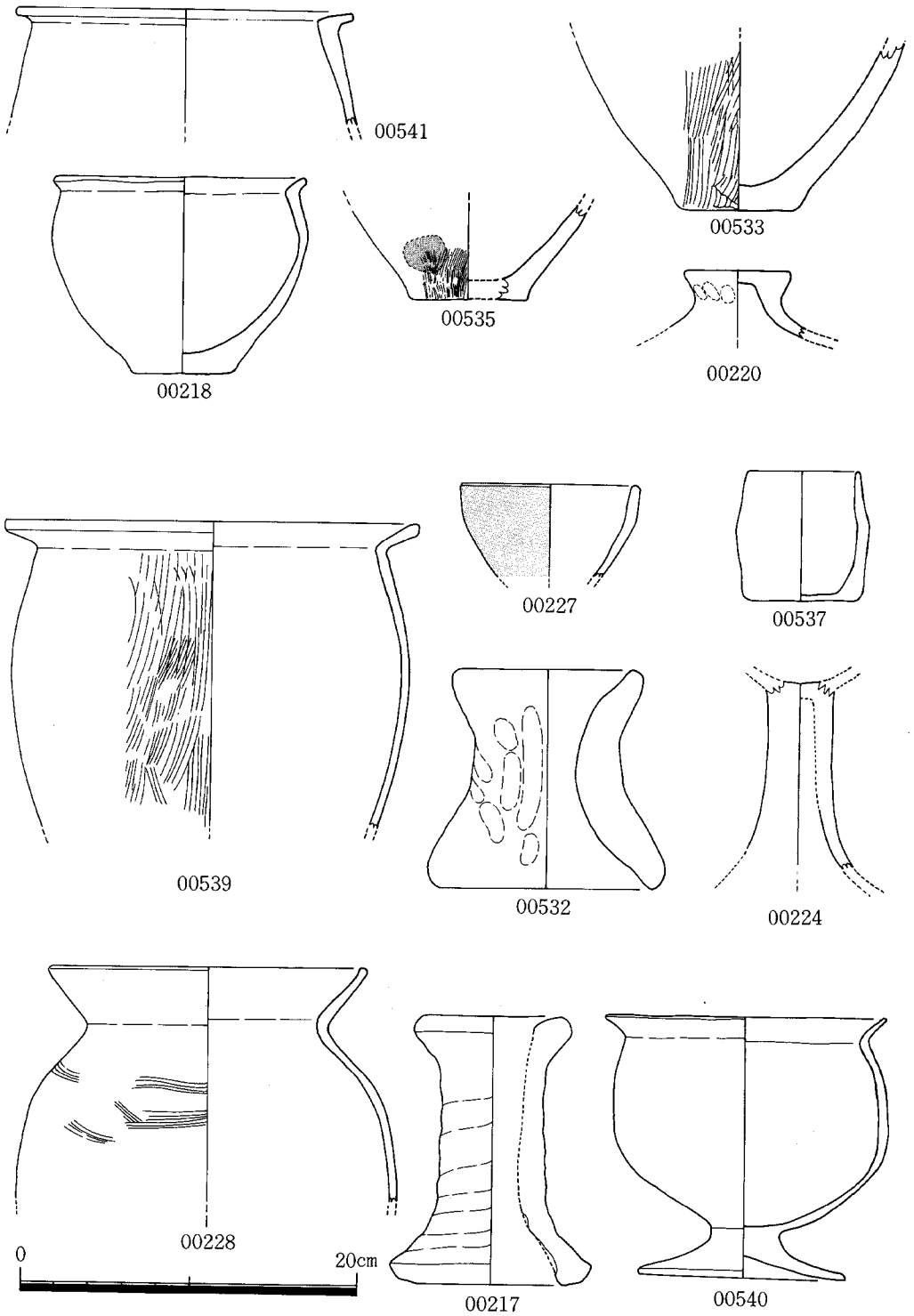
第97図　SD－50出土土器実測図－２（縮尺1/4）



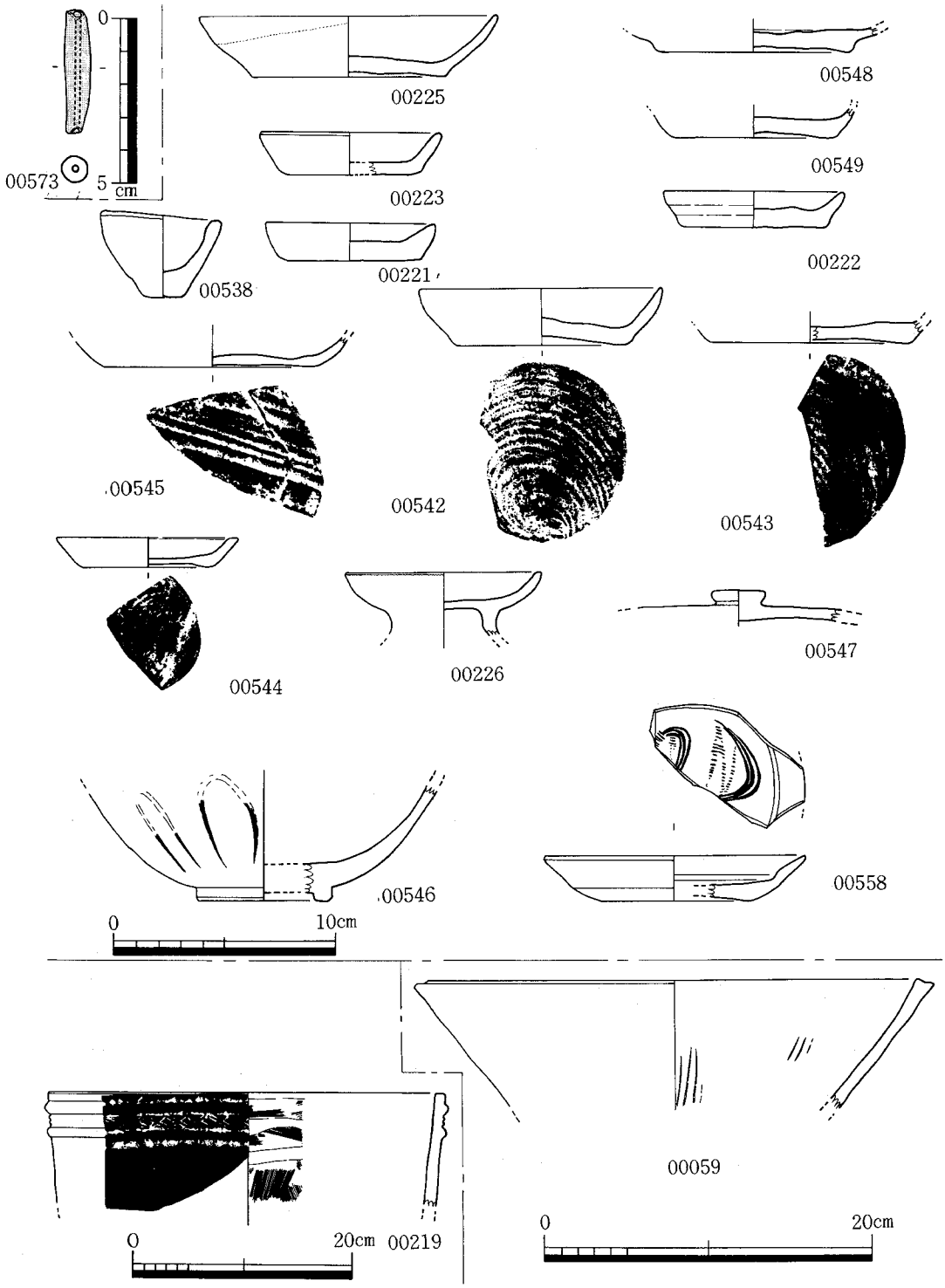
第98図　SE－01出土土器実測図－１（縮尺1/4）



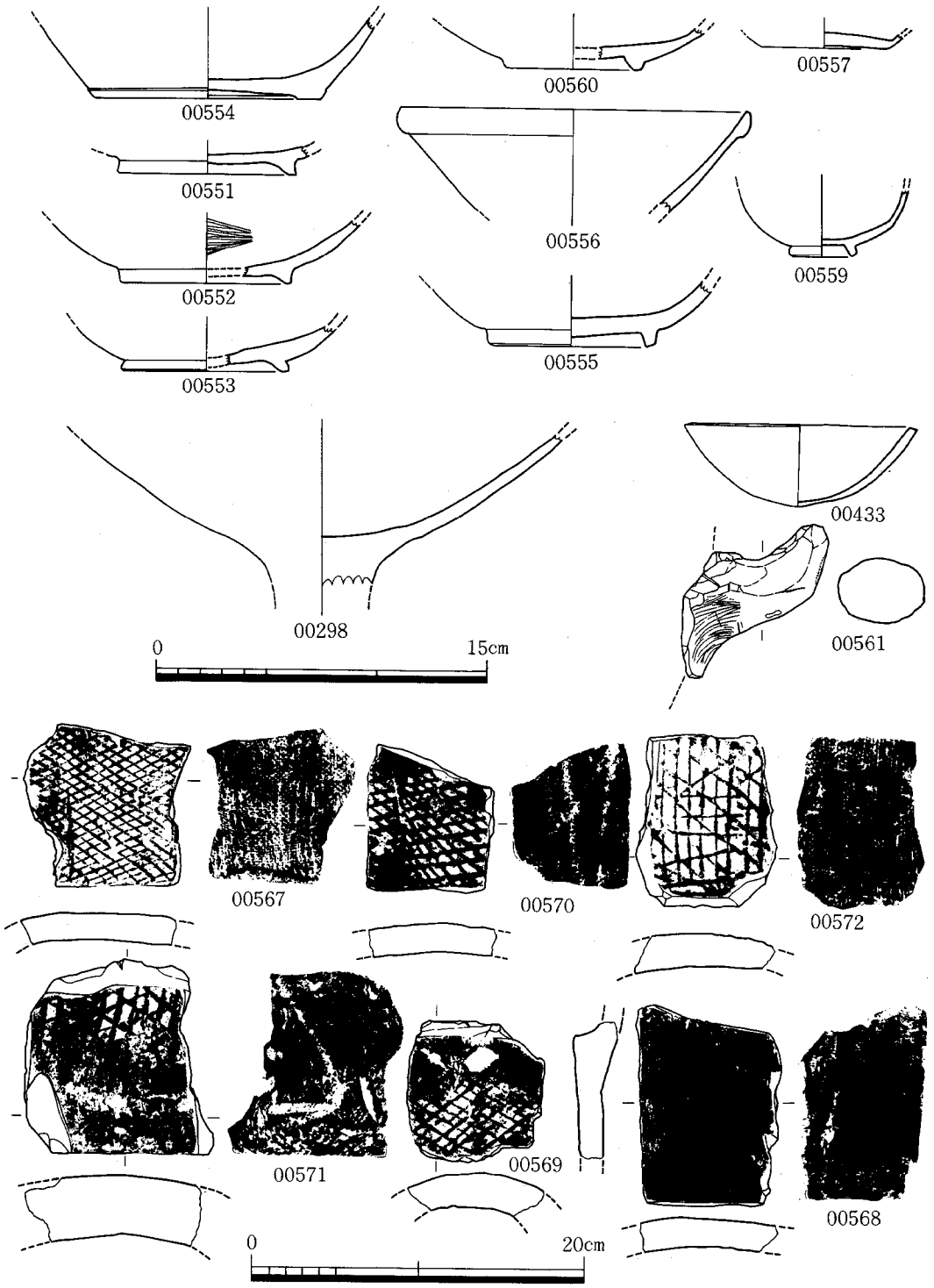
第99図　SE－01出土土器実測図－２（縮尺1/3，1/4）



第100図　Pit内出土土器実測図－１（縮尺1/4）



第101図　Pit内出土土器実測図－２（縮尺1/2，1/3，1/4，1/6）



第102図　各SD出土土器実測図（縮尺1/3，1/4）

遺物登録番号	器種	法量(cm)			形式	色調	胎土	焼成	調整	出土遺構	Fig	PL.	備考
		口径	底径	器高									
84070001	器台	8.1	10.5	9.8	V	淡橙色，灰色	白色砂粒	良好	輪手の作り 握りとしぼり	SD－100	88図		
2	〃	9.0	9.5	10.0	V	淡橙色，灰色	白色砂粒	〃	押圧としぼり 外　縦方向に板状工具による器面形成	〃	〃		
3	〃	8.0	9.8	10.3	V	淡黄灰色，淡橙色	白色砂粒	〃	押圧後ナデ	〃	〃		
4	〃	8.1	9.8	9.5	V	淡黄灰色，淡橙色	白色砂粒	〃	外，ハケ板 直径20mm前後の芯棒の貫きとり痕あり	〃	〃		
5	〃	6.3	9.7	9.9	V	淡橙色	白色粒 赤褐色粒	〃	芯棒を用いにぎりによる形成	〃	〃		
6	ミニチュア壺	5.1～5.7		5.4		灰色～淡黄灰色	白色砂粒	〃	押圧，ナデ	〃	91図		
7	器台	7.9	9.7	10.1	V	淡黄灰色 淡橙色	砂粒	〃	芯棒を用い押圧	〃	88図		
8	〃	10.0	10.3	14.4	Ⅳ	灰褐色	白色小砂粒	〃	芯棒を用いた手づくね 板状工具を用いたナデ	〃	〃	47	
9	粗製小鉢	10.1	6.2	8.0		灰褐色～淡黄灰色	長石，石英，白雲母	〃	指頭圧による形成 内　板状工具による	〃	89図		
10	〃	9.0	4.7	5.6		灰褐色	長石，石英，白雲母	〃	内　指による押圧，ナデ 外　板状工具によるケズリ気味	〃			
11	〃	9.5	4.2	5.7		暗灰色〃淡灰褐色	小砂粒(長石，石英，雲母粉)	良	指による手づくね後外面はナデ	〃	89図		
12	〃	8.3	5.0	8.0		黄灰白色	小砂粒(長石，石英，雲母粉)(多)	〃	手づくね後板状工具によるケズリ気味ナデ	〃			
13	〃	7.4	4.1	5.8		黄灰色	小砂粒(長石，石英，雲母)(多)	〃	手づくね後内面はハケ状工具によるナデ	〃	90図		
14	〃	7.2	3.5	4.3		灰褐色	砂粒(長石，石英，雲母粉)(多)	〃	指オサエ後内面は板状工具 小口によるエグリ取り	〃	〃		
15	〃	7.4		4.5		暗黄灰色	砂粒(長石，石英，金雲母)(やや多)	〃	手づくね後ナデによる形成 外面下位はケズリか？	〃			
16	〃	5.8	1.4	4.1		淡黄灰色	小砂粒(多少)	良好	指オサエ後丁寧な水ビキ風のナデ	〃	89図		
17	粗製浅鉢	6.5	3.7	4.6		黄灰色 (内底のみ)黒灰色	小砂粒(長石)(やや多)	〃	手づくね後内面を工具にて横方向にケズリ様のナデ調整	〃		49	
18	〃		3.8	(残)2.7+2		黄灰～淡灰色	砂粒(長石)(やや多)	良	手づくね後外面ナデ	〃	90図		
19	粗製小鉢		2.8	(残)4.3+2		黄灰色	砂粒(長石，白雲母)(やや多)	〃	工具を用いたナデ仕上げ 内面板状の小口痕	〃	〃		
20	〃		3.7	(残)3.6+2		(内)黒灰色 (外)淡黄灰色	砂粒(長石，雲母粉)(多少)	〃	外面は指オサエ後ナデ 内　カキ出し様なエグリ痕	〃	89図		
21	〃	4.6	2.6	6.0		淡黄灰色	細砂粒(長石中心)(やや多)	〃	工具を用いた均一ナデ仕上げ	〃	90図		
22	〃		2.2	(残)4.4+2		灰褐色	石砂(長石，石英，雲母粉)(やや多)		指オサエ後内面は工具による均一なナデ	〃	〃		
23	把手 蛇形のジョウキ状？					淡灰褐色～淡灰色一部黒斑	小砂粒(長石，石英，雲母粉)	良	把手はケズリもしくはケズリ気味のナデ	〃			
24	杓子形土製品					淡黄灰色	砂粒(長石，石英，雲母粉)(多少)	良好	指オサエとナデによる形成 把手部一部ケズリか？	〃	91図		全長10.4 柄部長7.3
25	〃			11.5		灰～淡黄灰色	砂粒(長石，石英，他)シャモット様赤褐色粒混入	良	指オサエによる形成後ナデ	〃	〃	49	身部高6.1 器幅6.8
26	〃			9.1		乳灰色	砂粒(長石，石英，雲母粉他)(多少)	良好	指オサエ，コビナデ形成	〃	〃	49	身部高4.1 器幅5.6
27	〃			8.4		暗灰色	小砂粒(長石，石英，雲母粉)(多少)	良	指オサエ後ナデ形成	〃	〃	49	身部高3.8 器幅4.7
28	〃 (把手部分)					淡橙色～淡黄灰色	大粒砂粒(長石，石英)(やや多)	良好	指オサエ後ナデ，一部縦方向へラケズリ	〃			
29	壺	8.6	4.4	8.7		茶褐色 一部にスス付着	2～3㎜大の砂粒	〃	指ナデ，ナデ	〃		47	
30	碗	14.1	4.2	8.4	Ⅱ～Ⅲ	明褐色	2～3㎜大の石英粒，長石粒，雲母	〃	ヘラミガキ，ナデ 指ナデ	〃	80図	48	丹塗り
31	器台	9.8	9.2	17.0	Ⅲ	上下端赤褐色 中央部暗褐色	3～4㎜の石英粒 2～3㎜の長石粒雲母	ふつう	土器作りのねじり痕有	〃	87図	47	
32	〃	7.5	9.0	10.5	V	赤褐色	2～3㎜の石英粒 3～4㎜の長石粒雲母	〃	ナデ 指圧痕	〃	88図		
33	〃	8.3	9.6	10.0	Ⅳ	上端部暗褐色 中央部明褐色 下端部赤褐色	2～3㎜の石英粒，長石粒 雲母	〃	ナデ 指圧痕	〃	〃		
34	鉢	11.0	6.4	9.5	Ⅲ	暗褐色	雲母 1～2㎜大の長石粒	良好	指ナデヘラナデ有 刷毛目	〃	81図		
35	碗	15.3	6.9	6.5	V	明褐色	1～2㎜大の長石粒 2～3㎜大の石英粒 雲母	〃		〃	80図		
36	鉢	8.9	5.2	9.2	Ⅲ	明褐色	1～2㎜大の石英 精製された粘土使用	ふつう	ナデ，ヘラミガキ，指ナデ	〃	81図		丹塗り
37	手づくね土器	6.7	2.8	7.0		暗褐色 一部黒斑有	1㎜前後の石英粒，雲母	良好	ヘラミガキ，指ナデ	〃	90図		
38	鉢	19.5	6.2	13.1	Ⅲ	(内)赤褐色+暗褐色(外)淡赤褐色+明褐色	0.5～1㎜の石英粒，1～2㎜の長石粒 雲母	ふつう	指ナデ，ナデ，ヘラ磨き 刷毛目，ヘラオサエ，指オサエ	〃	78図		丹塗り
39	〃	11.5	4.6	7.2	Ⅳ	淡灰褐色 一部茶褐色	0.5～1㎜前後の石英粒 1～2㎜の長石粒	良好	指ナデ，刷毛目 ナデ	〃	81図		
40	手づくね土器	11.5	2.0	8.0		淡明褐色	0.5～1㎜の石英粒，1～2㎜の長石粒 雲母	良	指ナデ ヘラオサエ後ナデ調整	〃	89図		
41	壺	8.2	5.2	17.8	V	赤褐色 底部，黒褐色	0.5～1㎜大の石英粒，長石粒 雲母	良好	ヘラミガキ，指ナデ スス付着	〃	74図		丹塗り
42	鉢	11.3	5.7	11.0	Ⅱ	暗褐色	0.5～1㎜の長石，石英，雲母	〃	指ナデ，ヘラナデ後縦に指ナデ ヘラミガキ	P－23	96図		
43	手づくね土器	8.0	4.0	4.8		(内)茶褐色 (外)茶褐色～淡明褐色	0.5～1㎜の石英粒，1～4㎜の長石粒 雲母	ふつう	指ナデ，指オサエ後ナデ ナデ	SD－100	90図		
44	〃	8.2	3.5	7.9		淡明褐色一部丹塗り痕跡有	0.5～1㎜の石英粒，1～2㎜の長石粒 雲母	〃	指オサエ後指ナデ	〃	〃		
45	器台	9.7	12:8	18.0	Ⅲ	茶褐色 中央部明褐色	1～5㎜の石英粒，0.2～2㎜の長石粒(多量)	〃	刷毛目，ヘラミガキ，ナデ，指オサエ後ナデ	〃	87図		
46	手づくね土器	8.1	4.1	6.1		(内)明褐色一部赤褐色(外)赤褐色，丹塗り	0.1～2㎜の石英，長石，雲母	〃	ヘラオサエ後に指ナデ 指オサエ，指ナデ	〃	90図		
47	〃	8.2	2.8	5.9		(内)明褐色(外)暗褐色上端一部明褐色	0.5～2㎜の石英， 0.5～1㎜の長石	良好	ヘラミガキ，刷毛目 刷毛目後一部に指ナデ	〃	〃		
48	器台	10.0	11.8	14.4	Ⅲ	赤茶褐色，胴部一部と上端は白褐色	0.1～1㎜大の長石粒，石英粒	〃	斜め方向にねじり，一部指オサエ	〃	87図		
49	〃	9.6	10.9	15.6	Ⅲ	(内)灰褐色 (外)茶褐色	0.1～1㎜の石英粒， 0.1～5㎜の長石粒	〃	横ナデ，ヘラナデ ヘラ状工具でオサエ後横ナデ	〃	〃	47	

Tab. 11　出土土器一覧表－1

遺物登録番号	器種	法量(cm)			形式	色調	胎土	焼成	調整	出土遺構	Fig	PL.	備考
		口径	底径	器高									
840700050	壺の蓋		10.8	5.3		(外)明茶褐色 (内)明褐色	0.1mmの石英粒 長石粒及び雲母混入	良好	ナデ，ヘラナデ，指オサエ後横方向にヘラナデ	SD－100	86図		丹塗り
51	〃		16.8	2.3		赤褐色一部明褐色	0.5mmの石英，0.1mm長石多量	〃	ナデ	〃	〃	46	丹塗り
52	〃		8.8	2.6		白褐色	石英粒，長石粒，雲母	〃	横に刷毛目後縦にナデ ヘラナデ後指ナデ，刷毛目(目の荒い)	〃	〃		
53	壺		9.3	16	Ⅳ	茶褐色一部黒斑有	長石粒，雲母	〃	縦に櫛目(cm中4本縦状に櫛目状の征目後横ナデ)刷毛目1部ヘラ状工具によるナデ	SD－50	96図		丹塗り
54	鉢	25.0		15.0	Ⅲ	暗褐色，黒褐色	細砂粒(長石，雲母)	〃	横ナデ，刷毛目，ヘラケズリ	SD－100	97図		
55	〃		6.6	(残)10.9	Ⅳ	(外)赤褐色 (内)褐色	石英，長石，雲母	〃	ヘラミガキ，指オサエ，指ナデ	〃	〃		内面一部丹塗り
56	〃	22.7		17	Ⅲ	(外)暗褐色＋暗赤褐色(内)暗赤褐色	石英，長石粒	〃	刷毛目後ナデ，ヘラミガキ，横ナデ	〃	〃		丹塗り
57	手づくね土器	13.2		6.0		(外)淡赤褐色＋淡灰褐色 (内)暗褐色	1mm～2mm大の石英，長石粒，雲母	〃	ヘラ状工具によるかきあげ後横ナデ，ナデ	〃	89図		
58	鉢	7.4		8.3		(外)暗赤褐色＋黒褐色 (内)暗褐色	細砂粒2～3mm大の石英粒，雲母	ふつう	ヘラ状工具でナデアゲ，指ナデミガキ	SD－100	97図	47	
59	揩針状	31.8		(残)7.8		淡褐色	1～3mm大の石英粒長石粒	〃	横ナデ，一部刷毛目	Pit－2008	101図		
60	甕	28.2		(残)13.1	Ⅰa	(外)茶褐色 (内)淡茶褐色	2mm前後の石を多量	良好	ハケ後丁寧なナデ，横ナデ	SD－100	55図		
61	〃	21.8		(残)13.3	Ⅰa	淡茶褐色	ほぼ均一	〃	横ナデ，ハケ後ナデ，ナデ	〃	〃		
62	〃	27.1		(残)12.6	Ⅰb	(外)淡白茶褐色＋暗褐色(黒斑有) (内)淡白茶褐色	細砂(長石，石英)	〃	横ナデ，刷毛目後横ナデ 刷毛目，指オサエ後ナデ	〃	56図		
63	〃	26.8		(残)13.8	Ⅱe	(外)暗褐色 (内)淡赤褐色	細砂(長石，石英)	〃	横方向のナデ 1cm中4～5本の刷毛目	〃	58図		
64	〃	25.0		(残)9.0	Ⅰb	(外)赤褐色＋黒褐色 (内)赤褐色	細砂粒 2～3mmの石英，長石	ふつう	わずかに刷毛目痕，横ナデ，ナデ調整	〃	56図	42	
65	〃	(復)29.4		(残)16.9	Ⅰa	(外)淡茶褐色	2mm前後の石多量	良好	横ナデ，ハケ後丁寧なナデ	〃	57図		
66	〃				Ⅰb	(外)淡茶褐色 (内)淡赤褐色	2mm前後の石多量	〃	横ナデ，ハケ後ナデ，丁寧なナデ	〃	56図	42	
67	〃				Ⅲb	(外)赤茶褐色 (内)暗茶褐色	2～3mm前後の石多量	〃	横ナデ，ハケ後ナデ丁寧なナデ	〃	55図	〃	
68	〃				Ⅱc	(外)暗茶褐色 (内)淡茶褐色	2mm前後の石多量	〃	横ナデハケ後ナデ，縦ナナメにナデ	〃	57図		
69	〃	17.6		(残)11.7	Ⅰa	(外)茶褐色＋黒色(スス)(内)淡褐色＋暗褐色(黒斑)	0.5～2mmの砂粒(長石，石英)，雲母	〃	横ナデ，ハケ目施行後横ナデ刷毛目，ナデ	〃	55図		
70	〃	27.0		(残)16.6	Ⅱb	(外)赤褐色(内)外面よりも少し淡い赤褐色	1～2mm大の石英長石粒多量	〃	刷毛目(一部)横ナデ	〃	59図		
71	〃	30.4		(残)15.1	Ⅱc	外内共茶褐色＋暗褐色	石英，長石，雲母	〃	横ナデ，縦ナデ	〃	56図	46	
72	〃	18.8		(残)13.7	Ⅳ	(外)暗褐色＋黒褐色 (内)暗褐色	3mm大の石英粒，1.5mm大の長石粒多量	ふつう	横方向へのナデ 一部にヘラ状工具によるミガキ	〃	62図		
73	〃	27.6		(残)10.0	Ⅱc	(外)暗褐色(全体的にスス付着)(内)淡褐色	細砂(石英，長石)	良好	横ナデ，ナデ	〃	58図		
74	壺	31.1	6.2	25.5	Ⅲ	内外共明褐色～淡褐色	1cm以下の白色灰色粒，0.5mm以下の雲母少量	〃	横ナデ，指オサエナデ	〃	67図	45	
75	鉢	18.6	6.9	19.5	Ⅱb	(内)茶褐色(外)茶褐色～明茶褐色(外底)灰黒色	1mm以下の灰色，白色粒金雲母少量	〃	横ナデ，ヘラ磨き，指押え後ナデ，指ナデ	〃	77図	〃	
76	〃	12.3	7.3	13.0	Ⅲ	内外共暗灰褐色～暗茶褐色	1mm以下白色，灰色粒，0.5mm以下の金，白雲母	ややあまい	刷毛目(部分的にナデ消し，指ナデ，指押え)		97図		
77	甕	29.2		(残)11.5	Ⅰa	内外共淡褐色口縁一部淡赤褐色	1mm以下の白色，灰色粒多量	良好	指ナデ	SD－100 P－117－1包含層	56図	42	口縁土面に丹塗痕
78	〃	27.5	7.7	32.2	Ⅰa	(内)暗茶褐色(外)暗茶褐色～茶褐色	2mm以下の白色灰色粒	ややあまい	刷毛目，横ナデ，ナデ 指押え	SD－100 P－123　1包	57図	〃	
79	壺	(復)14.8		(残)13.8	Ⅲ	内外共褐色～赤褐色	2mm以下の白色，灰色粒多量，0.5mm以下の金白雲母	良好	磨滅により不明(内面はナデ?)	SD－100	79図		内面一部に丹塗り痕
80	鉢	(復)11.6		(残)9.3	Ⅳ	内外共淡褐色	3mm以下の白色灰色，茶色粒，1mm以下の金，白雲母多量	〃	(内)刷毛目，部分的に指押え (外)不明(磨滅)	〃	〃	48	
81	壺	(復)14.4		12.4	Ⅲ	内外共赤褐色～淡褐色	1mm以下の白色，灰色粒，0.5mm内外の金，白雲母	〃	横ナデ	〃	〃		内外ともに丹塗り
82	甕	(復)20.6		(残)8.7	Ⅳ	内外共赤褐色～淡褐色	1mm以下の白色，灰色粒，0.5mm程度の金雲母多量	〃	刷毛目，横ナデ，指押えナデ	〃	62図		内外とも一部に丹塗痕
83	壺	(復)11.2		(残)7.2	Ⅳ	(内)淡赤褐色(外)縁～外赤褐色	2mm以下の白色，灰色粒(まれに大粒あり)0.5mm以下金白雲母	〃	ナデ(一部磨き)	〃	79図		口縁内～外面丹塗り
84	〃	(復)10.4		(残)5.7	Ⅳ	(内)淡褐色口縁～外	1mm以下の白色，灰色粒少量 0.5mm以下の金雲母微量	〃	ナデ(一部磨き?) (内)ヘラ磨き	〃	〃		口縁内～外面丹塗り
85	鉢	(復)11.8		(残)8.7	Ⅳ	(内)淡赤褐色～褐色(外)灰褐色～褐色(1部淡赤褐色黒色)	2mm以下の灰色，白色粒多量(まれに大粒あり)0.5mm以下の金，白雲母	〃	横ナデ，ヘラナデ(縦方向)，指押え	〃	〃		外面底部附近に黒斑 内外共一部に丹塗り痕
86	壺	(復)16.8		1.6	Ⅱ	内外共褐色～灰褐色	1mm以下白色灰色粒金雲母	〃	ナデ	〃	85図		残存部に約3.5cm離して2ケ所穿孔(中心径4mm)
87	鉢	(復)10.8		12.2	Ⅳ	内外共灰褐色	3mm以下の白色粒; 1mm以下の灰色粒，0.5程度の金雲母多量	〃	横ナデ，指ナデ(部分的に板ナデ)	〃	81図	48	
88	壺	13.2		9.9	Ⅲ	(内)褐色～暗茶褐色(外)褐色(一部灰褐色黒色)	1mm以下の白色，灰色，褐色粒，0.5mm以下の金雲母が微量	〃	横ナデ，ヘラ磨き(部分的にナデ消し)	〃	79図	〃	口縁，全体が不整形，外面2ケ所黒斑
89	〃	(復)16.6		(残)13.0	Ⅴ	(内)暗褐色 (外)暗茶褐色	1mm以下の灰色，白色粒，0.5mm以下の金，白雲母少量	〃	横ナデ消し，刷毛目，一部ヘラナデ，ヘラ磨き，横ナデ	〃	76図	45	外面に丹塗り
90	〃	(復)15.2		(残)13.6		(内)淡褐色(外)赤茶褐色～淡褐色	1mm以下の白色，灰色粒多量 0.5mm以下の金，白雲母	〃	部分的にナデ，一部横ナデ，暗文，横ナデ，ナデ，M字突帯	SD－100　2包	73図	〃	外面に丹塗り
91	〃	(復)16.2		(残)23.6	Ⅳ	(内)褐色 (外)褐色～茶褐色	3mm以下の白色灰色粒多量0.5mm以下の白，金雲母多量	〃	ヘラ磨き，刷毛目，横ナデ，ナデ(一部ヘラナデ)	SD－100	74図		外面丹塗り
92	〃	15.2		(残)10.6	Ⅴ	内外とも淡褐色，外面部淡灰褐色	5mm以下の白色，灰色粒密	〃	刷毛目，ナデ指押え，横ナデ?	〃	74図	45	
93	甕	24.6		10.2	ⅡC	(外)暗褐色＋黒褐色(内)淡茶褐色	細砂(石英，長石)	〃	横ナデ，指押え後横ナデ	〃	58図		
94	碗	19.8	7.9	11.5	Ⅱ～Ⅲ	淡褐色	白雲母，長石，石英多量	〃	手法不明	〃	80図		丹塗り痕跡有
95	鉢	19	6.8	13.4	Ⅰa	淡褐色	白雲母，長石，石英	〃	底部附近ハケ目痕	〃	77図		内面一部丹塗り
96	〃				Ⅳ	(外)暗褐色(赤色顔料)(内)淡赤褐色	3mm前後の石を少量ほぼ均一	〃	横ナデ，ヘラ後ナデ，丁寧なナデ	〃	78図	47	
97	甕	27.6		(残)11.8	ⅡC	(外)淡褐色＋黒褐色(内)淡褐色	0.5～1.5mの砂粒(長石，石英)	ふつう	横ナデ，1cm中6～7本の刷毛目	〃	58図		
98	〃	27.6		12.2	Ⅱb	(外)淡赤褐色 (内)赤褐色	細砂粒(長石，石英)多量	〃	指オサエによる整形後ナデ調整，刷毛目，横ナデ	〃	59図		

Tab. 12　出土土器一覧表－2

遺物登録番号	器種	法量(cm)			形式	色調	胎土	焼成	調整	出土遺構	Fig	PL.	備考
		口径	底径	器高									
840700099	甕	27.6		(残)9.9	IIa	(外)淡茶褐色+黒褐色 (内)淡茶褐色	砂粒(0.5~2㎜の石英長石粒)を含む	ふつう	1cm中5~6本の刷毛目 横ナデ, 縦ナデ	SD−100	56図		胴部と全体的にスス付着 内面一部にも黒斑あり
840700100	鉢	13.8		9.2	IV	淡白褐色 外面に黒斑あり	石英粒, 白色粒を多く含む(最大3~4㎜)	良好	成形手法不明	〃	81図		表面剥落
101	〃	11.5		6.7		淡赤褐色内面にわずかに赤色顔料が付着	石英粒, 白色粒, 金雲母赤色粒を含む	〃	ナデ, 指オサエ	〃			口縁部は内湾気味で波打つ, 不整形
102	壺	11.4		10.1	IV	淡赤褐色	石英粒(φ1㎜)を多く含む	〃	表面剥落のため調整不明 内側, ナデ, 指オサエ	〃	79図		内外面とも丹塗りの痕跡あり
103	〃	8.2		10.4	V	淡白褐色 (外)少し赤味をおびている	石英粒, 白色微粒を多く含む(φ0.5~1.5㎜)	〃	横ナデ, ナデ, 内面指オサエ	〃	74図		
104	鉢	14.2		8.8	V	(外)淡赤褐色 (内)淡白褐色	石英粒, 白色粒(φ0.5~2㎜)を多く含む金雲母少量含む	〃	横ナデ, 刷毛目, ナデ, 不定方向のナデ, 指ナデつける	〃	80図		
105	〃	10.3		5.8	IV	赤味をおびた淡白褐色	石英(φ0.5~3㎜)多く含む白色粒(φ0.5~1㎜)少量金雲母少量含む	〃	ナデ, ミガキ	〃	81図	47	内外面ともわずかに丹が付着している 底部はほぼ全面に煤がついている
106	手捏ね片口鉢	13.5		8.7	IV	(外)淡赤褐色~白褐色(ムラがある) (内)淡赤褐色	石英粒, 白色粒(φ1~3㎜)金雲母少量含む	〃	ナデ, 指オサエのちナデ	〃	〃		粗雑, 口縁部の凹凸がめだつ, 厚味もちがう
107	台付壺			(残)7.9	V	くすんだ淡赤褐色	石英粒(φ0.5~5㎜)白色粒(φ0.5~2㎜)含む	〃		〃	84図		
108	壺	14.6		14.3	IV	淡赤褐色	石英粒, 白色粒(φ0.5~2㎜)多く含まれる	〃	表面剥離のため成形手法不明 ヘラミガキの後赤色顔料, ナデ	〃	85図		外面下部に赤色顔料
109	高坏	14.0		7.6+α	VI	淡赤褐色	精良 石英粒(φ1㎜)金雲母わずか含む	〃	刷毛目のあとナデ, ナデ, 刷毛目	〃	84図		
110	甕	26.4		18.5	Ia	(内面)口縁部丹塗り (外面)わずかに丹が付着	精良 白色微粒を少量含む	〃	表面剥離のため調整不明, 横ナデ (内)一部に指オサエのあとがある, ナデ	〃	77図		
111	壺	7.8		3.5~24 (推定)	IV	(外)暗赤褐色 黒斑多い (内)くすんだ灰褐色	精良, 石英粒, 白色微粒, 雲母をわずかに含む	〃	ヘラ磨き, ナデ, 指でかきあげ	〃	73図		口縁部と胴部の接合不可 外面丹塗り口縁部に部分的に丹が付着
112	器台	10.0		19.6	I	(外)淡赤褐色~淡灰褐色 (内)淡赤褐色	石英粒(φ1~5㎜), 白色粒(φ0.5~1㎜)を含む	〃	表面剥落のため調整不明 横ナデ, ナデ, 刷毛目	〃	87図		内面上の方より下の方が赤味がつよい
113	壺	25.6		(残)7.1	V	内外とも淡褐色	3㎜以下の灰色白色粒を密に含む1cm以下の金雲母白雲母を微量含む	ややあまい	横ナデ, 刷毛目(部分的にナデ消し)	〃	75図		
114	〃	20.6		(残)7.1	V	内外とも淡赤褐色	1㎜以下の白色粒を微量含む0.5㎜以下金雲母白雲母	良好	横ナデ, ナデ	〃	〃		
115	〃	16.6		(残)8.5	V	内外とも淡茶褐色	5㎜以下の白色, 灰色粒を密に含む(大粒が多い)0.5㎜以下の金雲母白雲母多量含む	〃	横ナデ, ナデ, 磨き?	〃	〃		内外とも磨滅が著しい, 一部に丹塗痕
116	〃	17.8		(残)31.6	IV~V	(内)淡褐色~茶褐色 (外)茶褐色~淡褐色	4㎜以下の白色, 灰色粒を多量に含む, 0.5㎜以下の雲母を微量含む	〃	ヘラ磨き, 暗文, M字突帯, ナデ又指オサエ	〃 P.157 1包	74図	45	頸部内面~外面丹塗り
117	〃	20.8		(残)11.5	V	内外とも褐色~茶褐色	3㎜以下の灰色白色粒を多量に含む, 1㎜以下の金雲母白雲母を含む	〃	横ナデ? 部分的にナデ消し, 刷毛目, ナデ?	〃	75図		全体的に磨滅が著しく砂粒が表出する
118	甕	(復)20.8		(残)6.4	IIb~IIIb	(内)淡褐色 (口縁~外)淡褐色, 明茶褐色	1㎜以下の白色灰色粒, 0.5㎜以下の白, 金雲母	〃	指ナデ, 横ナデ	SE−01	99図		
119	壺	20.6		(残)8.5	V	内外とも淡褐色~明茶褐色	3㎜以下の白色, 灰色粒を密に含む(大粒多い)0.5㎜以下の雲母を微量含む	〃	磨滅が著しく不明	SD−100	75図	45	
120	〃	23.8		(残)7.6	V	(内)淡褐色~淡灰褐色 (外)淡褐色~灰褐色(一部灰黒色)	3㎜以下の灰色, 白色粒含む0.5㎜以下の金雲母白雲母多量含む	〃	横ナデ, ナデ消し? 刷毛目	〃	〃	〃	口縁外面一部に黒斑
121	手づくね土器	15.8	6.3	8.9		内外とも明褐色	1㎜前後及び2~3㎜大の石英, 長石粒, 雲母	〃		〃	89図	49	
122	鉢	16.6			IV	(外)淡茶褐色, 明橙色	2㎜前後の石を多量に含む	〃	ナデ, ヘラ	〃	78図	42	赤色顔料が残る
123	丸底壺	(復)11.4		(復)13.0		内外とも明白茶褐色 表面摩滅部分黒色	細砂	ふつう	ナデ, 表面不明	〃			
124	鉢	18.0			IV	内外とも淡茶褐色	2㎜前後の石を含む, 粗砂が多量に含まれており胎土がもろい	良好	ナデ	〃	78図	42	
125	手づくね土器	3.8	4.8	8.8		茶褐色(内外)	1~2㎜大の石英, 長石粒赤色粒, 雲母混入	〃	指による整形後刷毛目, ナデ	P−107 1包	91図	47	
126	碗	11.0	4.0	7.6	V	明茶褐色	1㎜前後2㎜前後の石英粒, 長石粒, 雲母	〃	表面不明 指による横ナデ	SD−100	80図	〃	
127	壺	15.0	8.2	14.9	III	(内外)淡白褐色 外面一部に黒斑有	1~2㎜の石英, 長石粒	〃	ナデ, 横ナデ	〃	79図	〃	
128	手づくね土器	(復)7.2	3.1	5.6		内外とも淡褐色 外面一部が茶褐色, 灰黒色	2㎜以下の白色, 灰色粒0.5㎜以下の金, 白雲母微量	〃	ナデ(一部ヘラナデ)	〃	90図		
129	〃	(復)5.8		4.3		内外とも灰褐色	1㎜以下の白色, 灰色粒多量0.5㎜以下の金, 白雲母多量	〃	ナデ	〃			
130	〃	(復)7.0	3.7	6.7		内外とも明褐色	3㎜以下白色灰色粒(大粒)0.5㎜以下の白, 金雲母を微量		ナデ	〃	90図		
131	高坏		(復)20.0	(残)19.7	V	(杯内外)明茶褐色 (脚~底内外)明茶褐色, 灰黒色	3㎜以下の灰色, 白色粒を密	ややあまい	ヘラ磨き, ヘラ状工具によるナデ	〃	83図	46	
132	〃	16.4		(残)10.5	III	(内)明茶褐色~淡褐色 (外)淡褐色	2㎜以下の白色, 灰色粒密, 0.5㎜以下の金, 白雲母	良好	横ナデ, ヘラ磨き	SD−100 P−106 1包	82図		
133	〃	(復)11.0		(残)6.5	II	内外とも明茶褐色~褐色	3㎜以下の灰色, 白色粒多量 0.5㎜以下の白, 金雲母	〃	ナデ, ヘラ磨き	〃	〃		
134	〃	(復)20.7		(残)7.7	II	内外とも明茶褐色~褐色	3㎜以下の灰色白色粒多量 0.5㎜以下の白, 金雲母	〃	ヘラ磨き?	〃	〃		丹塗り痕
135	〃			(残)4.7	III	(内)淡褐色~淡茶褐色 (外)灰褐色	4㎜以下の灰色白色粒多量 0.5㎜以下の白雲母	〃	磨滅により不明	〃	〃		
136	〃	(復)13.4		(残)6.0	IV	内外とも明茶褐色~淡褐色	2㎜以下の白色灰色粒0.5㎜以下の雲母微量	〃	不明	〃	〃		
137	〃	(復)29.0		(残)7.7	V	(内)淡褐色 (外)茶褐色~淡茶褐色	2㎜以下の灰色, 白色粒多量, 0.5㎜以下の金, 白雲母多量	ややあまい	不明	〃	83図		
138	〃	25.4		(残)11.4	V	内外とも褐色~灰褐色	2㎜以下の灰色, 白色粒, 0.5㎜以下の白, 金雲母を密	良好	磨滅により不明	〃	〃		
139	〃	(復)26.0		(残)14.6	V	内外とも明茶褐色~淡褐色	3㎜以下の灰色, 白色粒密0.5㎜以下の金, 白雲母微量	〃	磨滅により不明	〃	〃		
140	〃		(復)17.1	(残)17.6	V	内外とも明茶褐色~淡褐色	2㎜以下の白色, 灰色粒多量0.5㎜以下の金雲母を微量	〃	ヘラ磨き, 横ナデ	〃	84図	46	
141	〃		(復)17.4	(残)15.4	V	内外とも淡褐色~淡赤褐色	3㎜以下の白色, 灰色粒多量0.5㎜以下の金, 白雲母密	〃	ヘラ磨き, ナデ	〃	83図		
142	〃		11.6	(残)6.7	V	内外とも淡褐色	2㎜以下の灰色, 白色粒多量	〃	磨滅により不明 内面指ナデ	〃	〃		
143	鉢	(復)26.2			IV	淡茶褐色	2㎜前後の石を含む	〃	成形が雑	〃	78図		内面外面の一部に赤色顔料を残す
144	壺	26.2			III	(外)淡茶褐色 (内)淡橙色	ナデ	〃	雑なナデ, ナデ	〃	64図	44	一部赤色顔料が残る
145	〃				III	(外)淡茶褐色 (内)淡橙色	均一	〃	指圧痕, ナデ	〃	66図	〃	
146	甕				Ia	(外)暗橙色 (内)淡茶褐色	均一, 2㎜前後の石を少量含む	〃	ナデ, ヘラ	〃	55図	42	
147	手づくね土器	7.0	2.0	4.5		内面とも暗褐色	1㎜前後の石英粒, 長石粒, 雲母含む	ふつう	指ナデ	SD−100 P−154	90図		

Tab. 13 出土土器一覧表－3

遺物登録番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形式	色調	胎土	焼成	調整	出土遺構	Fig	PL.	備考
840700148	欠											47	
149	〃											49	
150	手づくね土器	3.7	4.9	10.1		茶褐色+黒色(一部黒斑有)	1mの前後の砂粒(長石,石英)雲母	ふつう	指オサエ		91図		
151	鉢	11.8	3.7	7.5	V	暗茶褐色	1mの前後の石英粒,長石粒,雲母	良好	横ナデ	SD-100	80図		内面一部酸化鉄付着
152	〃	11.9	9.2	5.6	V	(内)暗茶褐色,(外)暗褐色+暗茶褐色	1mの前後石英,長石粒,雲母	〃	指オサエ後刷毛目 ヘラ状工具による斜形状刷毛目	〃	〃		
153	鉢	8.8	4.4	8.0		(内・外)暗褐色	1mの前後の砂粒ウンモ	〃	ナデ	〃			
154	手づくね土器	5.0		6.0		(内)暗褐色 (外)茶褐色+明白褐色	2mの前後の石英粒,長石粒,雲母	〃	指で斜形状ナデ		91図		全長15.4cm
155	欠											49	
156	〃											〃	
157	手づくね土器	5.1	4.6	5.1		(内・外)灰褐色+明茶褐色	2mの前後の石英粒,長石粒,雲母	良好	ナデ	SD-100	90図		
158	鉢	4.4		2.5		(内)暗灰褐色 (外)明灰褐色	細砂,雲母	ふつう	ナデ	〃			
159	高坏	16.6		(残)8.7	Ⅳ	(内一口縁上部)暗茶褐色,(外)茶褐色～暗褐色	2mの以下の白色灰色粒,1mの以下の金,白雲母	良好	ナデ	〃	84図	46	端径22.0
160	〃		10.5	(残)8.7	V	(内)灰褐色 (外)暗茶褐色	1mの以下の白色粒	〃	ヘラ磨き 指オサエ,ナデ	〃	83図		内外面に丹塗り, 脚径3.5
161	〃		14.2	(残)17.8		(内)淡褐色,(外)黒～灰褐色(一部黒斑色)	4mの以下の灰色,白灰色粒,0.5mm以下の金,白雲母	〃	指ナデ ヘラナデ	〃		46	内外面一部銷付着 脚中央径5.4
162	〃		14.7	(残)14.3		(内・外)茶褐色～褐色	5mの以下の白色,灰色粒0.5mm以下の金,白雲母	〃	指ナデ,ヘラナデ ヘラ磨き				外面丹塗り,摩滅が著しい 脚径4.9
163	〃		(復)13.7	(復)11.7		(内・外)淡灰色	1mの以下の白色,灰色粒,0.5mm以下の金,白雲母	〃	ヘラ磨き,刷毛目 指ナデ,ヘラナデ	SD-100		46	4ケ所穿孔 ヘラナデでリョウ線がみえる 脚径3.3
164	〃		10.4	(残)9.5	V	(内)淡灰褐色 (外)明茶褐色～淡灰褐色	2mの以下の白色,灰色粒,0.5mm以下の金,白雲母	〃	ナデ押え,刷毛目	〃	83図		外面に丹塗り痕 脚径4.5
165	〃		10.6	(残)6.6	V	(内・外)暗茶褐色～淡褐色	2mの以下の白色,灰色粒,0.5mm以下の金,白雲母	〃	ナデ,刷毛目(摩滅)	〃	〃		内～外面にかけて丹塗り 脚径4.6
166	〃	27.8	15.0	24.3	Ⅳ	淡白褐色丹残り部分赤褐色	2mの前後の石英,長石,雲母	〃	刷毛目(一部みられるが明瞭でない) ナデ	〃	82図		脚部内面も丹が塗られている 脚裾部は比較的丹残りが良い
167	壺	30.3		(残)15.0	Ⅱ	(内)外面より暗い赤褐色 (外)淡褐色(丹塗り)	細砂(石英,長石)	〃	ヘラミガキ,板ナデ 横ナデ後暗文	〃	67図	45	等間隔に幅1.3cmの刷毛目
168	〃			(残)11.7	V	淡褐色	石英,長石,雲母	〃	ナデ 刷毛目(細かい)	〃	79図	48	頸部12.0 最大胴径15.0
169	〃	23.2		(残)15.0	Ⅲ	赤褐色,淡褐色 (内)黒色(内)暗褐色	細砂粒(石英,長石)	〃	暗文 ナデ,指オサエ後板ナデ	〃	66図	44	丹塗りであるが表面剥離が著しい 火を受けたとみられるスス付着
170	高坏	23.8		(残)20.6	Ⅳ	淡褐色	1mの前後の長石,石英,雲母	〃	ナデ 暗文(表面剥離が著しい)	〃	82図		丹塗り土器 杯部内側と脚部との接合部分にしか残っていない
171	〃		17.6	(残)15.9	V	赤褐色	1mの前後の長石,石英	〃	ナデ,指オサエ 暗文,指ナデ	〃	83図		丹塗り
172	〃		(復)15.0	(残)14.8	Ⅳ	淡褐色(内)赤褐色	1mの前後の石英粒,長石粒	〃	ナデ 刷毛目	〃	84図		全体に丹が塗られていたと思われる
173	鉢	20.4		13.7	Ⅰa	(内)赤褐色(丹塗り) (外)淡褐色	1mの前後の石英,長石粒,雲母	〃	ナデ 板状工具によるナデ	〃	77図		内面に丹塗り
174	〃	26.6		(残)13.6	V	(内)茶褐色+黒褐色 (外)茶褐色～部黒斑	1～3mm大の石英,長石粒,雲母 5mm大の石英粒	ふつう	刷毛目 板状工具によるナデ	〃	78図	47	
175	高坏		18.6	(残)17.0	V	淡褐色	細砂,2mm前後の石英,長石粒,雲母	良好	刷毛目 刷毛目後ナデ		83図	46	
176	鉢	(復)17.0	7.4	14.9	Ⅲ	(内)暗灰褐色 (外)淡茶褐色一部黒斑	2～3mm前後の石英,長石 赤色粒,雲母	〃	ナデ	SD-100	81図	〃	
177	高坏	13.0	10.6	13.7	V	淡褐色	細砂粒(石英,長石)雲母	ふつう	ナデ 刷毛目	〃	84図	〃	表面剥離が著しい
178	〃		16.8	(残)18.5	V	赤褐色,脚一部に黒斑有	1mの前後の砂粒(長石,石英)雲母	良好	刷毛目,ナデ 指オサエ	〃	83図	〃	
179	壺	(復)14.0	7.8	14.0	Ⅲ	暗褐色(外部に黒斑)	1mの前後の石英,長石	〃	刷毛目 ナデ	〃	79図	47	内面底部に指圧痕有り
180	〃	(復)12.0	5.0	9.2	Ⅲ	(内)淡褐色+暗褐色 (外)暗褐色	細砂粒	〃	ナデ 指オサエ及びヘラナデ	〃	〃	49	指圧痕
181	高坏	23.8		(残)8.5	Ⅳ	淡白褐色	1mの前後の石英,長石,雲母	〃	刷毛目,ナデ 指オサエ後ナデ	〃	82図	46	
182	壺	(復)11.0	5.0	13.4	Ⅲ	(内)淡褐色 (外)淡橙色	1～3mm大の石英,長石粒	〃	ナデ 指オサエ	〃	79図	48	
183	〃	15.2	8.2	18.2		(内)暗赤褐色(丹塗り) (外)暗赤褐色+暗褐色	1mの前後の石英,長石,雲母	〃	刷毛目 ナデ	〃			内,外面共丹塗り外面一部剥れ落ちている 外面一部黒斑有り
184	鉢		5.0	(残)13.0	Ⅳ	淡褐色+淡黒褐色,暗褐色	1mの前後の石英,長石,雲母	〃	刷毛目	〃	81図	48	
185	〃	7.7		6.0		灰褐色	細砂,雲母	〃	刷毛目後ナデのちヘラ描文 ケズリ後刷毛目	〃			
186	杓子形土製品	5.9		(身部)5.9		(内・外)淡茶褐色	1mの前後の石英,長石粒,雲母	〃	指オサエ後ナデ	〃	91図	49	
187	手づくね土器	(復)9.6		4.2		(内)暗褐色 (外)淡茶褐色	1mの前後の石英,長石粒,雲母	ふつう	ナデ 指オサエ後ナデ	〃	〃	48	
188	〃	(復)11.4	6.1	6.8		暗灰褐色	細砂 雲母(微量)	良好	ヘラミガキ,横ナデ 指オサエ後ヘラミガキ	〃	89図	47	
189	器台		11.7	(残)6.7	V	淡橙色+淡褐色	1～2mm大の石英,長石粒,雲母(微量)	〃	横ナデ,ナデ かきあげ	〃	88図		
190	手づくね土器					(内)黒褐色 (外)暗褐色	細砂3～4mmの石英,長石粒,雲母	ふつう	ナデ 指オサエ後ナデ	〃		49	
191	器台		7.2	8.1	V	淡橙色+淡褐色	1mの前後の石英,長石粒,雲母	良好	ナデ ヘラ状工具による面取り+指オサエ	〃	88図	47	
192	甕底		7.6	(残)9.9	Ⅲ	(内)黒色 (外)茶褐色+黒斑	1mの前後の石英粒,長石粒,雲母	〃	刷毛目,ナデ	SD-50 P-4	92図		多量のスス付着
193	高坏		(復)11.1	10.5	V	(内・外)淡褐色～淡茶褐色	3mm以下の白色,灰色粒	〃	指ナデ,ヘラナデ 刷毛目	SD-100	84図		底部に丹塗り痕 脚径3.6
194	〃	19.5		9.0	Ⅱ	(内)淡褐色～褐色 (外)淡褐色～茶褐色	4mm以下の灰色,白色粒,0.5mm以下の金,白雲母	〃	ナデ ヘラ磨き(部分的に刷毛目痕有)	〃	82図		口縁上面～外面にかけて朱塗り
195	〃			(残)6.8		(内外共)明茶褐色～淡褐色	1mm以下の灰色,白色粒,0.5mm以下の金,白雲母	〃	ヘラ磨き	〃			内外面丹塗り(摩滅) 脚径3.4
196	〃			(残)3.5	V	(内外共)暗茶褐色～褐色	2mm以下の白色,灰色粒,0.5mm以下の金,白ウンモ	〃	ヘラ磨き	〃	83図		脚径4.9

Tab. 14 出土土器一覧表－4

遺物登録番号	器種	法量(cm)			形式	色調	胎土	焼成	調整	出土遺構	Fig	PL.	備考
		口径	底径	器高									
840700197	高坏			(残)9.8	V	(内外共)茶褐色~淡茶褐色	1㎜以下の白色,灰色粒 0.5㎜以下の金,白雲母	良好	ヘラ磨き,ナデ?		84図		内外共丹塗り磨滅著しい 脚径3.8
198	〃	(復)25.8		(残)6.2	V	(内)灰褐色~茶褐色 (外)淡褐色	2㎜以下の白色,灰色粒 0.5㎜以下の金,白雲母	〃	ナデ?	SD−100	83図		内外共磨滅が著しい
199	〃	25.5		(残)7.6	V	(内)茶褐色 (外)明茶褐色	2㎜以下の灰色,白色粒 0.5㎜以下の白雲母	〃	横ナデ 刷毛目	〃	〃		内外とも磨滅
200	鉢	22.2	6.8	15.3	V	(内)淡茶褐色 (外)淡褐色	2~3㎜前後の石	良	ハケ後ナデ 横ナデ	,	78図		焼成前センコウ
201	高坏	18.4		(残)5.6	Ⅳ	(内外)灰褐色	均一	〃	ハケ後ナデ	SD−100	82図		内外共に赤色原料が残る
202	〃	16.2	11.8	18.0	V	(内外)淡茶褐色	2㎜前後の石(多量)	〃	横ナデ ナデ後ヘラ調整	〃	84図		
203	器台	12.0	12.2	17.0	Ⅳ	(内外)淡茶褐色	2~3㎜前後の石(多量	〃	指痕が明瞭	〃	87図		内面整形が雑
204	甕	(復)18.0	9.0	26.4	V	(内)淡灰褐色 (外)淡茶褐色	2~3㎜前後の石 金雲母	〃	指頭痕,横ナデ ハケ後ナデ	〃	61図		
205	器台	復15.5	17.2	21.9	Ⅱ	(内外)淡灰色	2~3㎜の石(多量)	〃	指ナデ,指頭痕 ハケ後ナデ	〃	87図		
206	高坏	(復)15.0	14.8	(残)26.0	V	(内外)明橙色 (赤色顔料)	3㎜前後の石(多量)粗雑である	〃	ハケ後ナデ 指頭圧痕	〃	84図		
207	鉢	32.4		(残)20.2	Ⅰb	(内)赤褐色 (赤色顔料) (外)淡茶褐色 (一部赤色顔料)	2㎜前後の石	〃	ナデ ヘラ後ナデ	〃	77図		
208	〃	12.4	6.0	13.3	Ⅳ	内外 淡茶褐色	ほぼ均一	〃	横ナデ ヘラ後ナデ,ハケ後ナデ	〃	79図		
209	〃	28.8	8.8	21.8	Ⅱa	(内)暗赤褐色 (外)淡茶褐色	2㎜前後の石(多量)	〃	ナデ ハケ後ナデ	〃	77図		
210	碗	23.4		(残)8.7	Ⅳ	(内)暗赤褐色 (外)淡茶褐色	2㎜前後の石(多量)	〃	横ナデ ヘラ後ナデ	〃	80図		
211	〃	21.6	6.0	11.7	Ⅱ~Ⅲ	内外 淡茶褐色	3㎜前後の石(多量)	〃	指ナデ ハラ後ナデ	〃	〃		
212	甕	22.8		32.3	V	内外 淡茶褐色	2~3㎜前後の石(多量)石英	〃	ハケ後ナデ 指痕が明瞭	〃	60図		
213	〃	28.9	8.2	33.6	Ⅳ	(内)淡茶褐色 (外)暗茶褐色 (一部赤色顔料)	3㎜前後の石石英(少量)	〃	横ナデ ハケ後ナデ		〃		
214	壺の蓋		25.4	9.6		(内)淡茶褐色 (外)淡灰色	雲母(多量)	〃	横ナデ ヘラけずり後ナデ	SD−100	86図		
215	壺	(復)17.5			Ⅳ		ほぼ均一 雲母	〃	横ナデ ヘラ後ナデ	〃	73図		
216													
217	器台	(復)9.2	(復)12.0	16.0		(内・外)明茶褐色	1~3㎜大の石英粒,長石粒(多量)雲母	良好		pit−428	100図	47	
218	甕	(復)14.9	6.0	11.7	Ⅲ	(内)明赤褐色 (外)明赤褐色+明淡褐色	2~3㎜,5~7㎜大の石英粒,長石粒(多)	ふつう		pit−325	〃	〃	
219	深鉢	(復)36.0		(残)10.3		(内)[illegible] (外)内面よりもやゝ茶色ぽい	1~3㎜大の石英粒,長石粒,雲母	良好	横ナデ,ヘラナデ 刷毛目	pit−2002	101図	50	拓本有り
220	蓋			(残)4.0		(内)黒色 (外)明褐色	1㎜前後の石英,長石	〃	指オサエ後ナデ	pit−256	100図		
221	糸切皿	(復)7.6	(復)6.4	1.7		(内・外)明褐色	細砂1.5~2㎜大の石英,長石	〃	ナデ	pit−2005	101図	50	土師器
222	〃	(復)8.2	(復)6.6	1.7		暗褐色	細砂,赤色粒,雲母	〃	ナデ	pit−2009	〃	〃	土師器
223	〃	(復)8.2	(復)6.6	1.9		明褐色	1㎜前後の石英,長石 赤色粒,雲母	〃	ナデ	pit−2008	〃	〃	土師器
224	高坏脚			(残)11.0		暗茶褐色 (外)明褐色	細砂,雲母	〃		pit−227	100図		
225	糸切皿	(復)13.5	8.6	2.8		明茶褐色	細砂3~4㎜大の石英粒,長石粒,赤色粒,雲母	〃	ナデ	pit−2052	101図	50	土師器
226	脚付皿	復9.0		(残)2.9		(内)淡明褐色 (外)茶褐色	1㎜前後の石英粒,長石粒,赤色粒,桃色粒	〃	ナデ	pit−2058	〃		土師器
227	碗	(復)10.5		(残)5.5		(内)暗褐色 (外)暗茶褐色 暗赤褐色	細砂2㎜大の石英,長石,雲母	〃	ナデ	pit−75	100図		外面丹塗り 図割高1.7
228	甕	(復)19.0		(残)13.9	Ⅵ	(内)淡白褐色 茶褐色(サビ色)	1㎜前後の石英,長石粒(多)雲母	〃	横ナデ,ヘラケズリ 刷毛目	pit−457	〃		外面丹塗り
229	壺	30.0		(残)26.4	Ⅲ	(内)淡茶褐色 (外)暗褐色 (赤色顔料)	ほぼ均一	良	ヘラ調整後ナデ 暗文	SD−100	63図		
230	〃	11.6	9.0	23.4	Ⅳ	(内)淡茶色 (外)淡褐色	均一	〃	ハケ後ナデ ヘラミガキ	〃	73図		
231	甕	復28.0		(残)10.0	Ⅰ	(内・外)淡茶褐色	粗3㎜前後の石,石英(多量)	〃	横ナデ ハケ後ナデ	SE−01	99図	42	
232	壺				Ⅲ	(内)淡茶褐色 (外)暗橙色	2㎜前後の石,石英	〃	ナデ 指頭痕	〃	98図		胴最大24cm
233	〃				Ⅳ	(内)淡茶褐色 (外)暗橙色 (赤色顔料)	ほぼ均一,雲母	〃	指による整形後ナデ 横ナデ後ヘラによる暗文	〃	〃		
234	器台	10.4	10.0	16.0	Ⅱ	(内)淡茶褐色 (外)黄褐色	3㎜前後の石(少量)	〃	横ナデ,ヘラケズリ 縦ナデ	〃	99図	47	
235	〃	7.0	9.0	14.9	Ⅳ	(内)灰色 (外)暗茶褐色	粗,3㎜前後の石(多量)	〃	指頭痕 縦ナデ,ナデ	〃	〃	〃	
236	甕	23.0	7.0	26.2	Ⅱb	(内外)淡茶褐色	石英	〃	横ナデ ハケ後ナデ	〃	〃	42	
237	小壺	(復)7.5		10.5	V	(内)淡茶褐色 (外)淡褐色	粗2~3㎜前後の石(多量)	〃	ナデ 指頭痕	SD−50 P−18	97図	45	
238	器台			(残)11.3	Ⅳ	(内)灰色 (外)暗茶褐色	2~3㎜前後の石(多量)雲母	〃	指頭痕 ナデ(横,縦)	SE−01	99図	47	
239	〃			(残)9.8	Ⅲ	(内)淡黒褐色 (外)淡黄褐色	粗2~3㎜前後の石(多量)	〃	指頭痕 ナデ(横,縦)	〃	〃	〃	
240	鉢	29.6	8.6	22.8		(内・外)淡茶褐色	2㎜前後の石(多量)	〃	ハケ後ナデ 横ナデ	SD−100		42	
241	〃	13.4	4.6	11.0	Ⅳ	(内・外)淡茶褐色 (円)黒褐色	粗3㎜前後の石(多量)	〃	横ナデ,縦ナデ 指頭痕,内面ヘラけずり	SD−50 P−17	97図	47	
242	壺	20.0		(残)11.2	V	(内外)淡褐色 ~淡茶褐色	3㎜以下の灰色,白色粒 0.5㎜以下の金,白雲母	良好	刷毛目 ナデ,横ナデ	SD−100	75図		
243	〃	(復)18.2		(残)9.7	V	[illegible]	3㎜以下の灰色,白色粒 0.5㎜以下の金,白雲母	〃	刷毛目 横ナデ	〃	〃	45	
244	〃	(復)22.6		(残)6.8		(内)暗茶褐色 (外)灰褐色	3㎜以下の灰色,白色粒(密) 0.5㎜以下の金,白雲母	〃	不明	〃	〃		
245	〃	(復)22.2		(残)12.9	Ⅳ	(内)褐色~暗褐色 (外)褐色~明茶褐色	2㎜以下の白色,灰色粒 0.5㎜以下の金,白雲母	〃	ナデ,暗文 横ナデ	〃	68図		

Tab. 15 出土土器一覧表－5

遺物登録番号	器種	法量(cm)			形式	色調	胎土	焼成	調整	出土遺構	Fig	PL.	備考
		口径	底径	器高									
840700246	壺	(復)23.8		(残)8.8	I	(内)灰黒色(口縁内面)茶褐色～褐色(外)褐色～淡褐色	3㎜以下の白色、灰色粒多量 0.5㎜以下の金、白雲母多量	良好	ナデ? 横ナデ	SD-100	66図		
247	〃	(復)12.8		(残)13.2	II	(内)暗褐色～灰黒色(外)褐色～明褐色	2㎜以下の白色灰色粒多量 0.5㎜以下の白、金雲母多量	〃	横ナデ、ナデ、突帯		67図		
248	〃	(復)15.0		(残)12.4	II	(内)淡褐色～明茶褐色(外)明茶褐色～淡褐色	1㎜以下の白色灰色粒 0.5㎜以下の金、白雲母多量	〃	横ナデ、ナデ、M字突帯	SD-100	66図		
249	〃	(復)15.2		(残)20.9	IV	内外とも暗褐色～明褐色	1㎜以下の白色粒を微量 0.5㎜以下の金、白雲母多量	〃	横ナデ、ナデ、M字突帯	〃	68図		
250	〃	14.8		(残)6.8	II	(内)褐色(外)明茶褐色～褐色	1㎜以下の白色粒少量 0.5㎜以下の金、白雲母多量	〃	横ナデ、暗文、M字突帯、ナデ、強い指ナデ		67図		
251	〃	15.6		(残)7.7	II	(内)明褐色(外)明褐色～茶褐色	2㎜以下の白色、灰色粒 0.5㎜以下の金、白雲母密	ややあまい	横ナデ、刷毛目、突帯、ナデ	SD-100	66図		
252	〃	22.8		(残)17.9	II	(内)褐色(外)褐色～茶褐色	3㎜以下の白色、灰色粒多量、0.5㎜以下の白、金雲母少量	〃	刻み、横ナデ、暗文、M字突帯、ナデ	〃	67図		
253	〃	15.0		(残)11.2	III	(内)暗灰色～褐色(外)明茶褐色～褐色	3㎜以下の白色、灰色粒多量 0.5㎜以下の白、金雲母密	〃	ヘラ磨き、横ナデ、暗文、M字突帯、ナデ	〃	66図		
254	〃	16.4		(残)11.7	III	(内)灰褐色～明褐色(外)[illegible]	2㎜以下の灰色、白色粒多量 0.5㎜以下の金、白雲母多量	〃	ヘラ磨き、刻み、暗文、M字突帯、ナデ	SD-100 5区 1包	〃		
255	〃	(復)16.0		(残)15.7	IV	(内)淡褐色(外)明褐色～暗褐色(一部明褐色、灰褐色)	2㎜以下の白色、灰色粒多量 0.5㎜以下の金、白雲母を密	〃	横ナデ、刷毛目、突帯、ナデ	SD-100	68図		
256	〃	(復)18.2		(残)10.6	III	(内)暗褐色～明褐色(外)明褐色～暗茶褐色(部分的に明茶褐色)	3㎜以下の灰色、白色粒多量 0.5㎜以下の金、白雲母多量	〃	ヘラ磨き、暗文、M字突帯、ナデ、凹線	〃	66図		
257	〃	(復)28.4		(残)14.0	IV	(内)淡褐色(部分的に明茶褐色)(外)淡褐色～明茶褐色	1㎜以下の白色、灰色粒少量 0.5㎜以下の金、白雲母微量	〃	刷毛目、ナデ、横ナデ、突帯	〃	69図		
258	〃	16.0		(残)8.2	II	内外とも淡茶褐色～明茶褐色	2㎜以下の白色、灰色粒少量 0.5㎜以下白、金雲母	〃	ヘラ磨き、刻み、暗文、M字突帯、ナデ	〃	65図		
259	〃	(復)20.6		(残)15.3	IV	内外とも褐色	3㎜以下の白色、灰色粒多量(大粒多い)0.5㎜以下の白、金雲母密	〃	横ナデ、刷毛目? 突帯、ナデ?	SD-100 P-117 1包	69図		
260	〃	(復)15.8		(残)11.0		(内)明褐色～茶褐色(外)茶褐色	1㎜以下の白色、灰色粒を多量 0.5㎜以下の白、金雲母	〃	ヘラ磨き、ナデ	SD-100			
261	〃	22.8		(残)8.7	IV	内外とも淡褐色～淡茶褐色	2㎜以下の灰色、白色粒多量(まれに大粒あり) 1㎜以下の白、金雲母を密	〃	板ナデ後ナデ、突帯、ナデ? (部分的に赤片)	SD-100 5区 1包	69図	44	
262	〃	(復)21.6		(残)9.6	III	内外とも淡褐色～褐色	3㎜以下灰色、白色粒を密 0.5㎜以下の金、白雲母を密	〃	横ナデ、板ナデ(刷毛目?)後ナデ消し、突帯、ナデ、板ナデ	SD-100	70図		
263	鉢	(復)9.6	4.3	7.3	V	内外とも灰色～暗灰色(外底－黒灰色)	3㎜以下の灰色、白色粒多量 0.5㎜以下の金、白雲母多量	〃	ナデ(下半部一部ヘラナデ)、ナデ	〃	80図	49	
264	〃	(復)11.7	(復)5.6	7.4	IV	内外とも淡褐色	1㎜以下の灰色、白色粒少量	〃	ナデ(一部磨き)、凹線	〃	81図		
265	鉢	(復)13.0		7.8	V	(内)褐色(外)褐色～淡褐色灰黒色(黒斑)	2㎜以下の灰色白色粒多量 0.5㎜以下の白金雲母多量	〃	ナデ?	〃	80図	48	
266	鉢	(復)11.6	(復)5.2	5.4	IV	(内)明褐色～淡灰色(外)明茶褐色	3㎜以下灰色、白色粒多量 0.5㎜以下の金、白雲母	〃	ナデ?	〃	〃	〃	
267	鉢	(復)8.4	(復)3.6	5.0		(内)黒灰色～灰褐色多量(外)黒灰色～淡褐色多量	3㎜以内の灰色、白色粒 0.5㎜以下の金、白雲母	〃	ナデ?	〃		49	
268	〃	9.3	3.5	4.7		内外とも灰褐色	2㎜以下の灰色、白色粒 0.5㎜以下の雲母	ややあまい	ナデ?	〃			
269	〃		3.7	(残)7.2		内外とも灰色	2㎜以下の灰色、白色粒多量 0.5㎜以下の金、白雲母	良好	ナデ(板ナデ後指ナデ)	〃			
270	壺			(残)18.0	V	(内)灰褐色～淡褐色(外)明茶褐色～淡褐色	5㎜以下の白色、灰色粒密(大粒多い)0.5㎜以下の金、白雲母微量	〃	ヘラ磨き? ナデ?	〃	76図		
271	〃	(復)14.8		(残)21.3	IV	(内)褐色(外)褐色～茶褐色	3㎜以下の白色、灰色粒を多量	〃	ヘラ磨き、M字突帯、外面摩滅、指ナデ	SD-100 P-123 1包	73図	45	丹塗り痕
272	〃	14.5		(残)9.1	V	(内)褐色～灰褐色(外)茶褐色～暗茶褐色	1㎜以下の灰色粒を微量	〃	ヘラ磨き、横ナデ、刷毛目、指ナデ	SD-100 1包	74図	〃	
273	〃	15.4		(残)22.5	II	(内)褐色～灰褐色～淡黄褐色(外)褐色～茶褐色	3㎜以下の白色、灰色粒を多量	〃	暗文、刻み、突帯、黄なで、ナデ	SD-100 P-117 1包	65図	43	
274	〃	18.7	7.4	38.6	III	(内外)淡褐色(外)一部茶褐色	2㎜以下の灰色、白色粒 0.5㎜以下の金雲母白雲母	〃	刻み、横なで突帯、ナデ、横ナデ、ナデ	SD-100	〃	44	丹塗り
275	甕	33.0		24.9	V	(内)暗黒褐色(一部スス付着)(外)黒褐色 スス付着	砂粒を多く含む	ふつう	ナデ、刷毛目 ナデ後一部刷毛目	SD-100 上部	60図	42	
276	大型甕	44.0		(残)20.6+α	IV	丹塗りと思われる一部黒斑	2～3㎜の砂粒	〃	横ナデ、ヘラミガキの後ナデ(丹塗り痕)、横ナデ	SD-100 上層	71図		
277	甕	35.0		15.1+α	IV	淡褐色	1～2㎜の砂粒 精製された粘土	〃	ナデ、ミガキ、ナデ		72図	42	
278	壺	21.7	9.4	44.4	III	(内)淡褐色(外)赤褐色	1～2㎜の砂粒 精製された粘土	〃	ナデ、刷毛目、横ナデ	SD-100 上層	64図	43	丹塗り
279	〃	37.7		(残)22.6+α	IIIc	淡褐色	3～5㎜の砂粒	〃	ナデ、縦刷毛目、ナデ	SD-100 中層	70図	44	
280	〃	20.8+α		(残)30+α	III	赤褐色＋淡褐色	2～3㎜の砂粒	良好	ナデ、刷毛目	SD-100 下層	64図	43	
281	〃	32.8		(残)42+α	IIorIII	暗褐色一部スス付着	1～2㎜の砂粒	〃	刻み目、ナデ、横ナデ(スス付着)、指ナデ	SD-100 下層	63図	〃	
282	〃	37.0		(残)39+α	IIa	赤褐色＋褐色	1～3㎜の砂粒	〃	ナデ、ヘラミガキ(暗文状、丹塗り)、ナデ	SD-100	64図		
283	甕	38.8		58.8	Vc	淡褐色＋赤褐色＋黒斑	3～5㎜の砂粒	〃	横刷毛目の後ナデ ヘラケズリ、ナデ		60図	44	丹塗り
284	壺	(復)22.2		(残)15.7	III	(内)明褐色＋黒斑＋淡灰褐色(外)暗赤褐色	1㎜前後及び3㎜前後の石英粒、長石粒、赤色粒雲母	〃	ナデ、暗文、M字突帯、ナデ	SD-100	65図		
285	欠												
286	壺	(復)21.6		(残)19.4	IV	(内)暗褐色(外)暗褐色＋淡褐色	1㎜前後の石英粒、長石粒微量の雲母	良好	横ナデ、刷毛目(目細かい)、横ナデ ヘラ状工具による成形後ナデ 横、ナナメのナデ	SD-100	69図		
287	壺	32.0		(残)15.6	II	(内)淡茶褐色(口縁上面～外)茶褐色～暗茶褐色	1㎜以下灰色、白色粒 0.5㎜以下金、白雲母	〃	刻み、暗文、横ナデ、ヘラ磨き、指ナデ、板ナデ	SD-100 5区 P160 1包含層	67図	45	
288	甕	(復)15.4		(残)13.2	V	淡褐色＋黒斑	1㎜前後の石英、長石及び赤色粒を多く雲母混入	ふつう	ナデ	SD-100	62図		
289	〃	(復)21.5		(残)12.0	IIIb	淡褐色一部黒斑	細砂及び雲母	〃	ナデ		55図		
290	壺	(復)32.2		17.4	IV	淡白褐色	細砂	良好	ナデ、刷毛目 ヘラケズリ、ナデ	SD-100	71図		
291	甕	(復)28.2		(残)16.0	IIb	(外)暗褐色(スス)(内)淡褐色	1㎜前後の石英、長石粒多量、雲母混入	〃	ナデ、わずかに刷毛目痕、スス付着、指オサエ後ナデ	〃	59図		
292	〃	(復)25.6		(残)12.8	Ib	(内)淡褐色(外)口縁部、淡褐色、胴部暗褐色	1㎜前後の石英、長石粒及び微量の雲母	ふつう	ナデ	〃	55図		
293	〃	(復)26.4		(残)13.4	IIb	淡褐色	細砂及び雲母混入	良好	全体に刷毛目、ナデ、ハケナデ、指オサエ	〃	59図		
294	〃	(復)27.6		(残)10.2	Ib	淡褐色外一部スス	細砂及び赤色粒雲母混入	〃	ナデ 指によるナデアゲ後横ナデ	〃	58図		

Tab. 16 出土土器一覧表－6

遺物登録番号	器種	法量(cm)			形式	色調	胎土	焼成	調整	出土遺構	Fig	PL.	備考
		口径	底径	器高									
840700295	甕	(復)31.0		(残)13.5	Ⅰb	(内)淡褐色 (外)淡褐色＋暗褐色	細砂を含む，雲母混入	良好	ナデ	SD−100	58図		
296	(欠)												
297	甕	(復)36.0		10.3	Ⅳ	(内)淡茶灰褐色 [illegible]	1～3㎜大の石英粒，長石粒を含む，雲母混入	良好	刷毛目(磨滅著しい) ナデ，刷毛目	pit2002	99図		
298	高坏			6.7		内・外暗茶褐色	2～3㎜大の石英粒，長石粒を含む	ふつう	磨滅のため不明	SD−103	102図		
299	器台		12.0	(残)11.6		明褐色(外)一部に黒斑あり	1～3㎜大の石英粒，長石粒を多く含む 赤色粒雲母も含む	ふつう (ややあまい)	指オサエ後ナデ	SD−50 P−24	97図		
300	(欠)												
301	(欠)												
302	甕	(復)22		(残)13	Ⅲb	(内)明暗褐色 (外)明褐色＋黒色多量のスス付着	1～2㎜大の石英，長石を多く含む，金雲母混入	良好	横ナデ，刷毛目，指オサエ後ナデ	SD−100	59図		
303	〃	(復)21.8		(残)10.6	Ⅲb	(外)黒色，多量のスス付着 (内)黒色，暗褐色	1㎜前後の石英，長石及び5㎜前後の石英，長石を含む	〃	縦ナデ，刷毛目	〃	〃		
304	〃	(復)26.0		(残)8.3	Ⅰa	内外茶褐色	1.5㎜前後の石英粒，長石粒を多く含む，金雲母多量混入	〃	ナデ 刷毛目	〃	55図		
305	〃	(復)24.8		(残)17.6	Ⅳ	(外)黒色 (内)黒色＋暗褐色	細粒を含む 多量の雲母を含む	〃	横ナデ，縦，ナナメナデ 指オサエ後ナデ	〃	62図		
306	〃	(復)24.0		(残)17.9	Ⅲb	(内・外)明褐色	1㎜前後及び3～4㎜大の石英粒，長石粒を含む，雲母混入	〃	ナデ 刷毛目	〃	60図		
307	壺	(復)25.0		(残)7.7	Ⅳc	(内・外)明褐色	1㎜前後の石英，長石粒を多く含む 赤色粒，雲母含む	〃	横ナデ	〃	72図		
308	甕	(復)28.0		(残)15.2	Ⅳ	(内)明褐色 (外)黒色多量のスス付着	1.5㎜前後及び4～5㎜大の石英粒を多く含む 雲母混入	〃	刷毛目施行後ナデ消し，ナデ	〃	62図		
309	〃	(復)30.4		(残)16.0		(内)茶褐色 (外)茶褐色＋黒色黒斑有り	1㎜前後の石英粒，長石粒を含む。微量の雲母混入	〃	横ナデ，刷毛目 刷毛目施行後ナデ ヘラ状工具でナデ	〃			
310	〃	(復)28.0		(残)8.5	Ⅱa	(内)暗褐色 (外)黒色	1㎜前後の砂粒を含む，雲母混入	〃	横ナデ，刷毛目 ナデ	〃	57図		
311	〃	(復)28.4		(残)8.0	Ⅰb	(内)明褐色＋明灰褐色 (外)明褐色	1㎜前後の砂粒を多く含む，雲母混入	〃	ナデ	〃	58図		
312	器台		9.2	(残)7.1	Ⅴ	(内・外)茶褐色	2～3㎜大の石英，長石粒を多く含む，雲母混入	ふつう	指整形後刷毛目調整 ヘラ状工具でのナデ	SD−50 P−5	88図		
313	甕	26.0		(残)15.8	Ⅰb	(内)黒色 (外)淡褐色	1㎜前後及び2～3㎜大の石英，長石を含む，雲母混入		ナデ，横ナデ，刷毛目後ナデ	SD−100	61図		
314	鉢	(復)17.0	8.4	9.1	Ⅳ	(内)明褐色 (外)明赤褐色＋黒斑＋淡白褐色，一部黒斑	1～2㎜大の石英粒，長石粒を含む，赤色粒雲母混入	良好	刷毛目 ナデ	〃	81図		丹塗り
315	甕底		7.6	(残)12.9	Ⅲ	(内)明茶褐色 (外)淡赤褐色＋明褐色	1㎜前後の砂粒(石英，長石)を多く含む，雲母混入	〃	ヘラミガキ(表面の磨滅著しい) 刷毛目 指オサエ	〃	92図		〃
316	甕	(復)26.0		(残)7.3	Ⅰb	(内)淡白茶褐色 (外)暗黒褐色	1㎜大の砂粒を多く含む，金雲母混入	〃	横ナデ	〃	61図		
317	甕底		8.8	(残)21.6	Ⅲ	(外)暗褐色＋黒色＋茶褐色	1㎜前後の石英，長石を含む	〃	刷毛目，指オサエ後ナデ	〃	92図		
318	(欠)												
319	甕底		8.2	(残)11.2	Ⅱ	(外)淡褐色＋明橙色 (内)明褐色一部黒斑	1.5㎜前後の石英，長石を多く含む，雲母含まれる	良好	刷け目，指オサエ後ナデ整形	SD−100	92図		
320	〃		10.5	(残)14.2	Ⅳ	暗褐色 外面一部	1.5㎜前後の石英，長石粒を多く含む，雲母混入	〃	全体目の細かい刷毛目，ナデ	〃	93図		
321	〃		9.6	(残)17.4	Ⅲ	(内外)淡茶褐色外面一部に黒斑有り	1㎜前後の石英，長石粒を含む，雲母も含む	〃	刷毛目 指オサエヘラ状工具によるかきあげ後ナデ	〃	94図	47	
322	〃		10.0	(残)14.8	Ⅱ	淡茶褐色，外面一部黒斑有	1㎜前後の石英，長石粒及び赤色粒を含む，雲母も含む	〃	刷毛目 ヘラ状工具によるかきあげ後ナデ	〃	92図	〃	
323	〃		8.0	(残)17.3	Ⅴ	明褐色	1㎜前後の石英，長石粒を多く含む，雲母混入	〃	刷毛目 指オサエ後ナデ	〃	93図		
324	〃		9.0	(残)14.6	Ⅴ	淡灰褐色，外面一部に黒斑有	1㎜前後及び3～4㎜大のの石英粒，長石粒を多く含む，量の雲母混入	〃	わずかに刷毛目一部黒斑 指オサエ後ナデ	〃	94図		
325	〃		9.8	(残)10.6	Ⅴ	淡白褐色，外面一部に黒斑がある	1㎜前後の石英粒，長石粒を多量含まれる 微量の雲母混入	ふつう	剥落のため不明	〃	〃		
326	〃		6.6	(残)11.9	Ⅳ	(外)淡褐色＋黒褐色 (内)暗褐色	1㎜前後の石英，長石を含む，雲母も含む	良好	ヘラミガキ後ナデ ヘラ状工具による整形後ナデ	〃	〃		
327	〃		8.2	(残)8.7	Ⅲ	淡茶褐色一部にわずかにスス付着	1㎜前後の砂粒(長石，石英)を含む 赤色粒も微量含まれる	〃	ヘラ状工具による縦方向のナデ(ミガキ？) 指オサエ後ナデ	〃	92図		
328	〃		7.4	(残)9.5	Ⅳ	(内)明茶褐色 (外)暗褐色スス付着	細砂及び2㎜大の石英粒，長石粒を含む 微量の雲母混入	〃	刷毛目(スス付着) ヘラケズリ後ナデ	〃	94図		
329	〃		9.0	(残)9.5	Ⅲ	(内)暗褐色 (外)明褐色	1㎜前後の砂粒(石英，長石)を含む	〃	刷毛目，ヘラケズリ後ナデ	〃	〃		
330	〃		8.3	(残)14.9	Ⅲ	(内)暗褐色 (外)淡褐色	1㎜前後の砂粒(石英，長石)を多く含む 雲母少量含む	〃	刷毛目 ヘラ状工具によるかきあげ後ナデ	〃	92図		
331	〃		10.6	(残)9.3	Ⅴ	(内外)淡茶褐色外面一部に黒斑あり	1㎜前後及び4～5㎜大のの石英，長石粒を多く含む	〃	刷毛目，ナデ，指ナデ	〃	94図		
332	〃		10.4	(残)8.7	Ⅳ	赤褐色＋暗褐色 (内)暗褐色	1㎜前後の砂粒石英，長石粒を多く含む 雲母混入	〃	刷け目 ヘラによるかきあげ後ナデ	〃	〃		
333	〃	(復)11.0	7.0	17.6	Ⅴ	(内)淡茶褐色	1㎜前後の砂粒及び3～4㎜大の石英，長石粒を多く含む，雲母混入	〃	ヘラケズリ？ 指ナデ，指オサエ後ナデ	〃	61図		
334	〃		8.4	(残)13.5	Ⅳ	(内外)淡褐色	1㎜前後の石英，長石を多く含む雲母混入	〃	指ナデ，目の細い刷毛目	〃	93図		
335	〃		8.4	(残)12.0	Ⅴ	淡褐色	1㎜大の砂粒及び3～4㎜大の石英，長石粒を多く含む，雲母混入	〃	ヘラ状工具で整形後ナデ 表面剥落のため不明	〃	94図		
336	〃		10.0	(残)12.5	Ⅴ	淡褐色	1㎜大の砂粒(石英，長石)雲母	〃	刷毛目 ヘラ状工具による整形後ナデ仕上	〃	93図		
337	〃		9.4	(残)6.8	Ⅲ	(内外)暗褐色	1㎜前後の石英，長石含む，雲母混入	〃	刷毛目	〃	〃		
338	〃		9.4	(残)3.8	Ⅳ	(内)黒褐色スス付着 (外)暗褐色	1㎜前後の石英，長石を多く含む，雲母混入	〃	刷毛目	〃	94図		
339	〃		10.2	(残)7.0	Ⅲ	淡褐色	1㎜前後の石英，長石粒(多)，雲母混入	〃	わずかに刷毛目痕	〃	〃		
340	〃		8.0	(残)12.8	Ⅱ	(内)黒色 (外)茶褐色	1㎜前後の石英，長石粒	〃	ヘラと指による整形後ナデ仕上げ(刷毛目)	〃	92図		
341	鉢	16.0	4.5	8.2	Ⅱ	(内)明茶色 (外)淡褐色～明茶色(一部黒斑)	1㎜以下の灰色，白色粒0.5㎜以下の金雲母，白雲母	ややあまい	一部横ナデ	SE−01	99図	48	丹塗
342	〃	(復)11.2	3.5	10.4	Ⅳ	(内)灰褐色 (外)一部灰黒色	5㎜以下の白色，灰色粒を多く，0.5㎜以下の金雲母白雲母少量	良好	ナデ，指オサエ	SD−100	81図	〃	
343	碗	(復)10.4	(復)4.3	9.4	Ⅴ	(内)茶褐色一部淡褐色 (外)褐色～灰褐色	1㎜以下の白色粒，3㎜以下の灰色粒，0.5㎜以下の金雲母，白雲母	ややあまい	ナデ？	〃	80図	49	

Tab. 17　出土土器一覧表－7

遺物登録番号	器種	法量(cm)			形式	色調	胎土	焼成	調整	出土遺構	Fig	PL.	備考
		口径	底径	器高									
840700344	鉢	(復)13.5	4.5	7.3	Ⅳ	(内)茶褐色 (外)淡褐色～茶褐色	2㎜以下の白色,灰色,黄色粒 0.5㎜以下の白,金雲母(微)	ややあまい	ナデ?	SD−100 P−22 1包	97図	48	
345	〃	10.7	5.3	6.2	Ⅳ	内外とも 灰褐色	2㎜以下の白色,灰色粒(少) 0.5㎜以下の金,白雲母	良好		SD−100	81図	49	
346	甕底		8.0	(残)12.8	Ⅳ	(内)黒色 (外)茶褐色	1㎜前後の石英,長石粒	〃	刷毛目 ヘラ,指による整形	〃	93図		
347	〃			(残)6.2	Ⅵ	(内)淡褐色 (外)淡茶褐色 (一部黒斑有)	細砂,1㎜前後の石英 長石,雲母	〃	刷毛状工具によるかきあげ後 ナデ仕上げ	〃	93図		
348	〃			(残)7.3	Ⅵ	(内)淡茶褐色 (外)淡褐色+ 黒色(黒斑)	1㎜前後の砂粒石英, 長石(多量)	〃	刷毛目 ヘラでかきあげ後刷毛目		〃		
349	〃			(残)12.8	Ⅵ	(内)暗褐色 (外)暗褐色+ 黒色(黒斑)	細砂,雲母 赤色粒	〃	指による整形後ナデ	SD−100	〃		
350	壺	27.6	8.4	38.5	Ⅲ	褐色+赤褐色 底部(丹塗り部分) (内)淡褐色	2～3㎜大の石英粒,長石粒(多量) 雲母	〃	ヘラ磨き,指ナデ,ヘラナデ 刷毛でのナデ,刻み目,暗文	SE−01	98図	43	丹塗り
351	〃	27.5	7.0	36.5	Ⅲ	淡褐色+赤褐色(丹塗り) 底部黒褐色	2～3㎜の砂粒(多量)	底部付近はあまい良好	ヘラ磨き,刻み目,ヘラナデ後指ナデ 刷毛による暗文	〃	〃	〃	〃
352	〃	(復)17.8		(残)27.0	Ⅲ	(内)褐色～暗褐色 (外)褐色～茶褐色	1㎜以下の白色,灰色粒 0.5㎜以下の金,白雲母	良好	ヘラ磨き,刻み,暗文 ナデ	SD−100 1包 P−150	65図	44	〃
353	〃	21.5		(残)19.8	Ⅲ	(内)暗褐色～暗茶褐色 (外)暗茶褐色～茶褐色	2㎜以下の灰色,白色粒 1㎜以下の金,白雲母	〃	ヘラ磨き,ナデ,刻み 暗文	SD−100 5区1包,3区2包	65図	〃	〃
354	〃	(復)14.8		(残)17.8	Ⅲ	(内)褐色～暗褐色 (外)暗茶褐色～暗褐色	3㎜以下の白色,灰色粒 0.5㎜以下の金,雲母(多量)	〃	ナデ,暗文,刷毛目? ヘラ磨き?	SD−100 5区 P−146 1包	〃		〃
355	〃	(復)16.2		(残)9.4	Ⅱ	内外共明茶褐色 口縁上面部灰褐色	2㎜以下の白色,灰色粒(多量) 0.5㎜以下白,金雲母(微量)	〃	ナデ 不明	SD−100	66図		丹塗りと考えられる
356	〃	13.3	9.7	40.4	ⅡorⅢ	(内)褐色(一部暗褐色) (外)暗茶褐色～褐色 (一部暗褐色)	2㎜以下の灰色,白色粒 0.5㎜以下の金雲母(微量)	〃	刷毛目,暗文,ヘラ磨き 刻み	〃	63図	43	丹塗り
357	〃	(復)18.4		(残)13.8	Ⅳ	(内)褐色～暗褐色 (外)褐色～淡茶褐色 (一部淡褐色)	4㎜以下の灰色,白色粒(多量) 0.5㎜以下の白,金雲母(審)	〃	ヘラ磨き,刻み,ナデ	〃	68図		〃
358	〃	17.6		(残)16.8	Ⅲ	(内)灰褐色～褐色 (外)明茶褐色～褐色	1㎜以下の白色～灰色粒 0.5㎜以下の金雲母(少量)	〃	ヘラ磨き,ナデ	〃	65図	44	〃
359	〃	(復)20.7		(残)14.5	Ⅳ	(内)淡茶褐色～明茶褐色 (外)暗茶褐色～褐色	4㎜以下の灰色,白色粒(多量) 0.5㎜以下の金,白雲母(多量)	〃	ヘラ磨き,ナデ	SD−100 P−144 1包	68図		〃
360	〃	17.5		(残)12.6	Ⅲ	(内)茶褐色～明茶褐色 (外)明茶褐色～褐色 (一部灰黒色)	2㎜以下の白色,灰色粒(多量) 0.5㎜以下の金,白雲母	〃	ヘラ磨き,刻み,暗文 ナデ	SD−100 1包	64図	45	朱塗り
361	〃	11.6		(残)19.7	Ⅲ	(内)褐色～淡茶褐色 (外)褐色～暗茶褐色	5㎜以下の白色,灰色粒 0.5㎜以下の金,白雲母(多量)		ヘラ磨き,ナデ,刷毛目	SD−100	〃		丹塗り
362	〃	13.6		(残)25.1	Ⅱ	(内)淡褐色 (外)明茶褐色～褐色	3㎜以下の灰色,白色粒	良好	ヘラ磨き,刻み,暗文 ナデ	〃	65図	43	〃
363	〃	(復)17.0		(残)19.0	Ⅲ	内外とも 褐色～淡褐色 (口縁一部灰黒色)	2㎜以下の灰色,白色粒 0.5㎜以下の金,白雲母	〃	ナデ 摩滅により不明	〃	64図		
364	〃	30.8		(残)20.0	Ⅲ	内外とも 明茶褐色～淡褐色	2㎜以下の灰色,白色粒 0.5㎜以下の金,白雲母 (大粒多い)	〃	暗文,ナデ ヘラ磨き?	〃	63図	43	丹塗り
365	〃	27.8		(残)29.2	Ⅲ	(内)淡褐色～茶褐色～明茶褐色(外)褐色～茶褐色～明茶褐色	2㎜以下の灰色,白色粒 0.5㎜以下の金・白雲母 (微量)	〃	ナデ(指,ヘラ) ヘラ磨き	SD−100 5区−1包, 4区3区2包	〃	〃	
366	〃	(復)27.4		(残)21.6	Ⅳ	内外とも 淡茶褐色 (口縁内一部灰白色)	3㎜以下の灰色,白色粒 (多量)	良好?	ナデ 不明	SD−100	〃	〃	
367	〃	(復)22.3		(残)13.8	Ⅳ	内外とも 褐色～明茶褐色	3㎜以下灰色,白色粒 (多量) 1㎜以下の金,白雲母 (多量)	良好	刷毛目 ナデ	〃	69図	44	丹塗り
368	〃	(復)31.2		(残)16.0	Ⅳ	内外とも 褐色～茶褐色	2㎜以下の灰色,白色粒 1㎜以下の金,白雲母 (多量)	〃	刷毛目 ナデ	〃	〃		〃
369	〃	(復)23.6		(残)22.1	Ⅲb	(内)灰褐色～暗茶褐色 (外)暗褐色～茶褐色 (一部黒色)	1㎜以下の灰色,白色粒 1㎜以下の金,白雲母	〃	ナデ,ヘラ磨き,暗文 刻み	〃	70図		
370	〃	(復)28.2		(残)17.0	Ⅲ	内外とも 明茶褐色～淡褐色	2㎜以下の灰色,白色粒 1㎜以下の金,白雲母	ややあまい?	ナデ	〃	63図	43	丹塗り
371	甕	(復)21.2		(残)26.2	Ⅳ	(内)茶褐色 (外)暗褐色	1㎜前後,3～4㎜前後の石英,長石 雲母(微量)	良好	刷毛目 指とヘラによる整形後ナデ仕上げ	〃	61図		
372	〃	(復)17.0	7.0		Ⅳb	淡褐色 (外面一部黒斑有り)	1㎜前後の石英粒,長石粒(多量) 雲母(微量)	〃	刷毛目,指オサエ後ナデ ヘラによる整形後ナデ仕上げ	〃	〃	42	
373	〃	(復)10.2		(残)13.5	Ⅰa	(内)暗茶褐色+黒褐色 (外)黒褐色+暗褐色	1㎜前後の石英,長石粒(多) 雲母(微量)	〃	刷毛目,ナデ ヘラケズリ後ナデ	〃	55図		
374	〃	14.2		(残)7.9	Ⅱc	(内)淡茶褐色～淡灰褐色 (外)淡茶褐色	1㎜前後の石英,長石多く 雲母	〃	刷毛目 指による整形後ナデ仕上げ	〃	59図		
375	〃	29.0		(残)13.3	Ⅱb	(内)淡褐色暗褐色(全体的にスス付着)	1㎜前後の石英,長石粒(多) 雲母	〃	ナデ	〃	57図		口縁一部丹塗り
376	壺	25.2		(残)13.9	Ⅳ	淡褐色	1㎜前後の石英,長石粒 雲母	〃	ナデ	〃	72図		
377	甕	(復)24.8		(残)13.1	Ⅳ	暗褐色(外面は全体的にスス付着)	細砂,2～3㎜大の石英,長石粒(多量) 雲母(微量)	〃	ヘラ磨き 刷毛目,ナデ	〃	62図		
378	〃	(復)25.6		(残)10.0	Ⅴb	淡茶褐色口縁一部丹付着黒斑有り	2～3㎜大の石英,長石粒(多) 雲母(微量)	〃	不明	〃	〃		
379	壺	(復)33.6		(残)23.4	Ⅳ	(内)淡褐色 (外)褐色+暗褐色+黒色	1㎜前後の石英,長石 雲母(微量)	〃	刷毛目 ナデ,ヘラケズリ後ナデ	〃	71図		
380	〃	(復)36.0		(残)21.5	Ⅳ	内外とも 淡褐色	細砂(石英,長石) 精製された粘土		指による整形後ナデ仕上げ 刷毛目	〃	〃		
381	甕	(復)28.0		(残)9.5	Ⅰb	暗褐色	1㎜前後の石英,長石, 赤色粒 雲母	良好	ナデ 指による整形後ナデ仕上げ	〃	56図		
382	壺	(復)22.8		(残)8.5	Ⅳc	(内)茶褐色+暗褐色 (外)暗黒褐色	0.5㎜前後の石英,長石	〃	ナデ 刷毛目痕	〃	72図		
383	甕	26.4		(残)15.2	Ⅱc	淡茶褐色(口縁一部に丹塗痕)	1㎜前後の石英,長石, 赤色粒(多量) 雲母(微量)	ふつう	ナデ 刷毛目痕	〃	59図		
384	〃	(復)27.8		(残)14.0	Ⅱb	淡褐色 (外)茶褐色+黒色	細砂,2～3㎜大の石英,長石 雲母	良好	刷毛目 ナデ	〃	60図		
385	〃	(復)23.8		(残)17.8	Ⅳ	褐色	1㎜前後の石英,長石 雲母	〃	ナデ 刷毛目	〃	〃		
386	〃	(復)21.2		(残)13.3	Ⅰa	内外黒褐色 内面全体にスス付着	細砂 雲母	〃	指オサエ後ナデ 刷毛目	〃	55図		
387	〃	27.6		(残)11.7	Ⅱe	(内)茶褐色, (外)暗褐色	1㎜前後の石英,長石 雲母(微量)	〃	ヘラと指による整形後ナデ仕上げ	〃	61図		口縁一部赤色顔料
388	〃	23.2		(残)11.7	Ⅱc	(内)暗褐色 (外)暗褐色+黒色	1㎜前後の石英,長石 雲母	〃	ヘラと指による整形後ナデ仕上げ 刷毛目	〃	57図		
389	〃	26.8		(残)18.2	Ⅰb	(内)明褐色 (外)暗褐色 外面にスス付着(広範囲)	1㎜前後の石英,長石(多) 雲母	〃	ナデ わずかに刷毛目痕が残る	〃	55図		
390	〃	29.0		(残)14.2	Ⅰb	(内)明褐色 (外)茶褐色+暗褐色	1㎜前後の石英,長石(多) 雲母	〃	ナデ 刷毛目	〃	57図	42	
391	〃	26.8		(残)15.5	Ⅰb	内外 淡褐色	1㎜前後の石英,長石, 赤色粒・ 雲母,丹塗り痕跡	〃	ナデ,指オサエ後ナデ 刷毛目	〃	58図	〃	
392	〃	(復)28.0		(残)13.2	Ⅱb	(内)黒色 (外)暗褐色	1㎜前後の石英,長石, 赤色粒 雲母	〃	刷毛目 指とヘラによる整形後ナデ	〃	56図	〃	

Tab. 18 出土土器一覧表－8

遺物登録番号	器種	法量(cm)			形式	色調	胎土	焼成	調整	出土遺構	Fig	PL.	備考
		口径	底径	器高									
840900393	甕	(復)21.2		(残)18.8	V	(内)赤褐色 (外)暗褐色	1mm前後の石英, 長石(多) 雲母	良好	刷毛目, ナデ ヘラ状工具による整形後ナデ	SD−100	62図	42	口縁一部丹付着
394	〃	(復)28.0		(残)12.3	Ⅲb	茶褐色 口縁部赤褐色	1mm前後の石英, 長石 雲母	〃	刷毛目 指オサエ後ナデ	〃	60図		
395	〃	(復)26.8		(残)11.5	Ⅱb	(内)淡褐色 (外)茶褐色+黒色	1mm前後の石英, 長石, 赤色粒 雲母	ふつう	不明, かすかに刷毛目痕 胴部一部にスス付着 指オサエ後ナデ	〃	59図	42	
396	〃	(復)25.4		(残)15.9	V	(内)暗褐色+黒褐色 (外)黒褐色(スス付着)	細砂, 2mm大の石英, 長石 雲母(多量)	良好	ナデ 指オサエ後ナデ仕上げ	〃	62図		
397	〃	(復)24.2		(残)9.1	Ⅱb	(内外) 明褐色	1mm前後の石英, 長石(多)	ふつう	不明	〃	60図		
398	〃	(復)27.0		(残)13.5	Ⅱc	(内)黒色 (外)暗褐色+黒色	1mm前後石英, 長石 雲母	良好	ナデ, 刷毛目?	〃	58図		
399	〃	(復)27.0		(残)15.4	Ⅳ	(内)暗褐色 (外)暗褐色, スス付着	細砂, 3mm大の石英, 長石(多)	やや悪し	ナデ, 刷毛目	〃	62図		
400	鉢	20.7		(残)10.5	Ⅱa	(内)黒色 (外)暗褐色+黒色	細砂 雲母	良好	刷毛目, ナデ ヘラミガキ	〃	77図		丹塗り
401	甕	(復)34.2		11.1		(内)明褐色 暗褐色(一部スス付着)	1mm前後の石英, 長石 雲母	〃	ナデ, 刷毛目 刷毛目後ナデ	〃			
402	〃	(復)28.0		(残)14.8	Ⅰb	明茶褐色外面胴部の一部黒斑有り	0.5mm前後の石英, 長石(多) 雲母	ふつう	ナデ, 摩滅の為不明 指オサエ後ナデ仕上げ	〃	56図		
403	鉢	13.3	(復)6.6	18.9	Ⅲ	(内)明茶褐色一褐色 (外)明茶褐色一灰褐色(一部黒色)	2mm以下の白色, 灰色粒 0.5mm以下の金雲母(微量)	良好	刷毛目 ナデ	〃	81図	48	
404	壺	(復)27.6		(残)18.0	Ⅳ	(内)黒色(外)突帯より上 赤褐色+淡褐色 下 淡褐色	0.5mm前後の石英, 長石	〃	ナデ, 不明 指オサエ後ナデ	〃	68図	〃	突帯一部丹塗り
405	〃	(復)25.8		(残)18.0	Ⅲ	(内外) 明褐色	0.5mm前後 2～3mm前後の石英, 長石 雲母	〃	ナデ, 刷毛目 指とヘラによる整形後ナデ	〃	70図	〃	
406	〃	22.4		(残)13.7		暗茶褐色	1.5～2mm大の石英, 長石(多) 雲母	〃	ナデ, 暗文?, 酸化鉄付着 刷毛後ナデ				
407	〃	(復)25.5		(残)16.3	Ⅲ	(内)淡褐色 (外)淡茶褐色	1mm前後の石英, 長石 雲母	〃	ナデ, 摩滅の為不明	SD−100	66図	43	丹塗り痕跡有
408	高坏	21.2	12.6	13.4	Ⅳ	(内外)明茶褐色～褐色 口縁上面暗茶褐色	2mm以下の白色, 灰色粒(多量) 0.5mm以下の金, 白雲母(多量)	〃	ヘラ磨き		82図		丹塗り
409	〃	(復)14.0	11.6	15.2	Ⅳ	(内)暗褐色 (外)暗茶褐色～灰褐色	3mm以下の白色粒, 灰色粒(密) 0.5mm以下の金, 白雲母	〃	刷毛目後ヘラ磨き, 横ナデ 指ナデ, 指オサエ, ヘラ押え	SD−100 (110のNo有り)	84図	46	〃
410	〃	(復)19.3		(残)8.0	Ⅲ	内外とも 明茶褐色～淡褐色	2mm以下の白色, 灰色粒 0.5mm以下の金, 白雲母(微量)	ややあまい	ナデ後ヘラ磨き	SD−100	82図		〃
411	壺	(復)27.0		(残)9.1	V	(内外)淡白褐色 外面口縁一部黒斑有	1mm前後の 0.5mm前後の石英, 長石, 赤色粒 大粒金雲母, 白雲母	良好	ナデ, 刻み 刷毛目	〃	75図		
412	〃	(復)24.0		(残)17.0	V	(内)淡褐色 (外)淡白褐色+淡灰褐色	0.5mm大の石英, 長石 雲母	〃	刷毛目, ナデ ヘラナデ, 板状工具によるナデ	〃	76図		丹塗り可能性有り
413	鉢		9.4	(残)9.1	Ⅳ	(内外)淡茶褐色 外面底一部黒斑有	1～4mm大の石英, 長石粒(多) 雲母	ふつう	刷毛目 指オサエ後ナデ	SD−50 P−14	96図		
414	〃		8.4	(残)5.1	Ⅱ	(内外)淡褐色 外面一部黒斑有	細砂(0.5mm以下)砂粒 雲母	良好	刷毛目 ナデ	SD−50 P−22	〃		
415	〃		7.3	(残)8.7	Ⅳ	(内)黒色(全体)(外)灰褐色+黒色	1mm前後の石英, 長石(多) 白, 金雲母	ふつう	指による整形と思われる(雑) 縦ナデ	SD−50 P−9	〃		
416	壺		4.6	(残)9.8	V	(内)明茶褐色 (外)暗茶褐色	1mm前後 2～3mm大の石英, 長石(多)	良好	ヘラミガキ ナデ, 指オサエ後ナデ	SD−50 P−6	97図		外面丹塗り
417	壺底		8.8	(残)13.8	Ⅳ	(内外) 淡褐色	1～2mm前後 3～5mm大の石英, 長石粒(多)白, 金雲母	〃	刷毛目 ナデ	SD−50 P−24	96図		
418	〃	(復)8.2		(残)9.0	Ⅲ	(内外) 淡茶褐色	1mm前後, 3～4mm大の石英, 長石粒(多)雲母	〃	わずかに刷毛目痕が残る 指オサエ後ナデ	SD−50 P−19	〃		
419	鉢		9.0	(残)10.3	Ⅲ	(内)淡褐色 (外)淡白褐色+黒褐色	1mm前後の石英, 長石粒 雲母(微量)	〃	刷毛目 ナデ	SD−50	〃		
420	〃		7.6	(残)7.0	Ⅳ	(内)茶褐色 (外)暗褐色, 黒斑有	1mm前後 2～3mm大の石英, 長石粒(多)雲母	〃	刷毛目 ナデ	〃	〃		
421	〃	(復)14.2		(残)9.5	Ⅲ	(内)黒色 (外)暗茶褐色	1～2mm前後の石英, 長石 雲母	〃	ヘラみがき, 刷毛目 横ナデ	〃	97図		
422	甕	(復)23.8		5.5	Ⅱa	(内外) 黒褐色	1mm前後の石英, 長石 雲母	〃	刷毛目, ナデ	〃	57図		
423	〃	(復)26.2		(残)6.4	Ⅱa	(内)白褐色+暗褐色 (外)黒色+白褐色	1mm前後の石英, 長石 雲母	〃	ナデ, わずかに刷毛目痕が残る	SD−50 P−25	96図		
424	〃	(復)29.0		(残)7.4	Ⅲb	(内)黒褐色 (外)暗褐色一部黒斑有	1～2mm前後の石英, 長石(多) 雲母	ふつう	ナデ, 刷毛目	SD−50 P−28	〃		
425	〃	(復)16.1	6.5	17.2	Ⅲ	(内外) 白茶褐色	1mm前後の石英, 長石粒(多)	良好	ナデ, 刷毛目	SD−50	〃		
426	〃	(復)41.0		(残)9.3	Ⅱc	(内外) 明褐色 口縁一部黒斑有	1mm前後の石英, 長石 雲母	〃	ナデ 指オサエ後ナデ	〃	〃		
427	鉢	(復)20.2		(残)9.4	Ⅲ	(内外) 淡褐色	1mm 3～4mm前後の石英, 長石粒(多)雲母	ふつう	刷毛目 ナデ	SD−50 P−8	97図		
428	〃	(復)14.4		(残)4.8	V	(内外) 暗赤褐色	細砂 2mm前後の石英, 長石	良好	ナデ ヘラみがき	SD−50	〃		内外とも丹塗り
429	〃	(復)14.8		6.3	V	(内)淡白褐色+淡茶褐色 (外)淡茶褐色+淡白褐色	1mm 2～3mm前後の石英粒, 長石粒(多)雲母	ふつう	不明	SD−50 P−3	〃	49	黒斑有り
430	〃	(復)13.0		5.4	V	(内)淡灰褐色 (外)淡茶褐色	1mm前後の石英, 長石粒(多) 雲母(微量)	〃		SD−50 P−2	〃		
431	高坏脚		17.8	(残)13.8	V	(内外) 淡茶褐色 内外面共酸化鉄付着	1mm前後の石英, 長石(多) 赤色粒, 雲母	良好	わずかに刷毛目痕が残る 脚裾部に丹が残る, 刷毛目	SD−50 P−16	〃	46	
432	碗	(復)12.6	8.8		V	(内)底部一暗灰褐色 口縁一淡褐色 淡白褐色 (外)淡茶褐色+淡白褐色	1～3mm大の石英, 長石粒(多) 雲母	ふつう	ナデ ナデ後指オサエ	SD−50 P−1	〃		
433	〃	(復)14.0		4.9		(外)暗褐色 外面よりやや黒い暗褐色	1−5mm前後の石英粒, 長石粒(多) 雲母	〃	ナデ	SD−01	102図		
434	〃	(復)10.4		4.9		(内外)明褐色 外面一部黒斑有	2mm 4mm前後の石英粒, 長石粒(多)雲母	〃	ナデ 指オサエ	SD−100		49	
435	手づくね土器	(復)11.8		5.1		(内外) 淡白褐色	1～5mm前後の石英粒, 長石粒(多) 雲母	〃	指ナデ, 指オサエ ナデ後指オサエ	〃	91図	〃	
436	鉢	(復)15.5		(残)8.8		(内外) 淡灰褐色 外面に酸化鉄付着	1mm前後の 4～5mm大の石英粒, 長石粒	良好		〃	89図	〃	
437	碗	(復)13.6	5.2	7.2		(内外) 明茶褐色 外面一部黒斑有り	1mm 3～4mm前後の石英粒, 長石粒 雲母(微量)	〃	ナデ 横ナデ後指オサエ	〃	80図	〃	
438	鉢	(復)15.0	8.2	9.8	Ⅳ	(内外) 暗褐色	1mm前後の石英, 長石粒(多) 雲母	〃	わずかに刷毛目が残る 指によるナデあげ	〃	81図	48	
439	〃	(復)15.0	6.2	8.9	Ⅳ	(内外) 暗褐色 内面一部黒斑有	1mm前後 2～3mm大の長石粒, 石英粒 雲母	〃	刷毛目施工後横ナデ 板状工具による整形後横ナデ	〃	〃		
440	碗	(復)14.6	7.6	8.8	V	(内)淡茶褐色(丹塗) (外)淡白褐色	0.5−1mm前後の細砂(石英, 長石)多 雲母	〃	ナデ 指オサエ後ナデ	〃	80図	49	丹塗り
441	鉢		5.2	(残)8.2		(内)淡赤褐色+黒褐色 (外)黒褐色	細砂1～2mm大の長石粒, 石英粒 雲母	〃	ヘラ状工具によるミガキ タテにヘラケズリ	〃			

Tab. 19 出土土器一覧表－9

遺物登録番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	形式	色調	胎土	焼成	調整	出土遺構	Fig	PL.	備考
840700442	壺			(現)13.5	Ⅳ～Ⅴ	(内)暗茶褐色 (外)暗赤褐色	1mm前後及び2～3mm大の石英、長石	良好	刷毛目施行後ヘラミガキ 指オサエ指押え(粘土つぎ目有)	SD－100	73図	45	
443	〃			(残)14.3	Ⅴ	(内)茶褐色 (外)暗赤褐色＋黒色＋淡灰褐色	1mm前後及び2～4mm大の石英、長石粒 雲母混入	〃	横ナデ	〃	74図	〃	丹塗り
444	碗	(復)14.0		7.6	Ⅴ	(内外) 淡褐色	1mm前後及び2～3mm大の石英粒、長石粒 雲母混入	〃	磨滅のため調整不明 指による整形後ナデ	〃	80図		
445	鉢	(復)11.4	(復)7.4	6.9	Ⅳ	暗褐色	細砂を含む雲母混入 精選された粘土使用	〃	ナデ 指による整形後ナデ	SD－100 5区　1包	81図		
446	碗	(復)17.6	(復)7.0	9.8	Ⅳ	(内)淡白灰褐色 (外)淡白灰褐色＋淡赤褐色	0.5mm～1mm前後の石英粒、長石粒を多く雲母混入	〃	ナデ、ヘラミガキ 指ナデ	SD－100	80図	48	丹塗り
447	鉢	(復)20.0	(復)6.6	8.6	Ⅲ	(内外)茶褐色 (外)口縁部に酸化鉄	1mm前後及び2～3mm大の石英粒、長石粒 金雲母混入	やや悪い	表面剥落のため調整不明	〃	81図	47	
448	碗	(復)20.0		(残)9.0	Ⅳ	(内外)赤褐色	細砂を含む	良好	ヘラミガキ(わずかに刷毛目) ヘラミガキ(後ナデ)	〃	80図		丹塗り
449	鉢	(復)20.0	(復)8.2	9.2	Ⅲ	(内外)淡褐色	1～3mm大の長石粒、石英粒多い 微量の雲母	〃	目の細い刷毛目 ナデ	〃	81図		
450	〃	(復)25.0	(復)10.0	9.5		(内外)暗赤褐色＋淡赤褐色	1mm前後及び2～3mm前後の石英、長石 雲母混入	〃	ナデ(全面丹塗り) 横ナデ	SD－100 1包			丹塗り
451	〃	(復)19.6	(復)7.0	11.8		(内外)淡白褐色	砂粒及び2～3mm前後の石英、長石 雲母混入	〃	刷毛目 指による形成後ナデ仕上	SD－100	77図		
452	〃	(復)6.4		(残)13.3		(内外)淡白褐色 外面一部黒褐有	1mm前後の石英、長石粒を多く、雲母混入	〃	刷毛目 刷毛目(後ナデ)	〃			
453	甕底		7.2	(残)13.2	Ⅱ	(内)淡赤褐色 (外)淡赤褐色＋黒色	細砂及び2～3mm大の石英、長石粒 雲母混入	〃	刷毛目 ナデ	〃	92図		丹塗り
454	甕	(復)28.0		15.1	Ⅱc	(内)淡赤褐色 (外)淡茶褐色	1～3mm大の石英粒、長石粒を多く赤色粒も含む　金雲母混入	〃	表面剥落のためわずかに刷毛目残る ナデ	〃	56図		
455	壺	(復)25.4		(残)11.7	Ⅳ	(内外)淡明赤褐色	1～1.5mm前後及び3～5mm大の石英粒、長石粒を多く含む微量の雲母混入	〃	横ナデ、表面が磨滅して、一部に刷毛目が残る	〃	72図		
456	〃	(復)31.0		(残)14.7		(内)淡褐色＋明黒褐色 (外)暗褐色 (外面スス)	1mm前後の石英、長石 金雲母	〃	指ナデ(横)刷毛目 ヘラナデ(斜め方向)、指ナデ(横)	〃			
457	〃	(復)31.8		(残)18.7	Ⅴ	(内)暗褐色 (外)暗褐色＋赤色 外面スス	1mm前後及び2～3mm大の石英、長石粒	〃	ナデ、刷毛目、ヘラナデ 刷毛目、板状工具によるナデ	〃	72図		
458	〃	9.8		(残)13.0	Ⅲ	(内)明褐色 (外)明褐色＋赤褐色	1.5mm前後の石英粒、長石粒 金雲母混入	〃	磨滅により不明一部丹塗	〃	73図	45	
459	〃	9.4		(残)10.0	Ⅰ	赤褐色(外) 赤褐色＋明褐色	細砂及び雲母	〃	暗紋後横ナデ(M字突帯) 横ナデ、しぼり、ナデ	〃	〃	〃	
460	〃	13.4		(残)12.0	Ⅲ	(内)暗褐色＋赤褐色 (外)赤褐色	1mm前後の石英、長石 雲母	〃	ヘラミガキ、ナデ、暗文後ナデ ナデ ナデ後ヘラケズリ	〃	〃	〃	丹塗り
461	〃	(復)14.0		(残)11.0	Ⅲ	(内)暗赤褐色＋明褐色 (外)赤褐色	細砂を含む雲母混入1mm前後の石英、長石	〃	ヘラミガキ、ナデ、暗文 指で調整後ナデ仕上	〃	〃	〃	
462	〃	(復)11.0		(残)13.0	Ⅲ	(内外)明赤褐色	1mm前後の石英、長石 雲母混入	〃	ヘラミガキ、暗文、ナデ、刷毛目 横ナデ 横方向にヘラケズリ後ナデ	〃	〃	〃	
463	〃	(復)7.6		(残)10.0	Ⅲ	(内外)明赤褐色 口縁部丹塗り	1mm前後の石英、長石 雲母混入	〃	横ナデ、暗文、ナデ	〃	〃	〃	
464	〃	12.3		(残)10.6	Ⅴ	(内外)淡白褐色	2～3mm大の石英粒 長石粒多量 金雲母混入	〃	横ナデ	〃	75図	〃	
465	〃			(残)9.9	Ⅲ	(内)暗灰褐色＋茶褐色 (外)明赤褐色	1mm前後の石英、長石 金雲母混入	〃	わずかに暗文が残る、ナデ タテナデ	〃	74図		
466	〃	10.4		(残)7.9	Ⅳ	(内外)淡白褐色	1mm前後の砂粒及び3～5mm大の石英粒、長石粒多量	〃	横ナデ暗文？後ナデ 横ナデ指による成形、ナデ	〃	〃		
467	〃	8.4		(残)8.2	Ⅳ	(内)淡赤褐色 (外)赤褐色	1mm前後及び2～3mm大の石英粒、長石粒多い、白雲母混入	〃	横ナデ、刷毛目	SD－100(谷)	〃		
468	〃	(復)16.0	8.3	20.5	Ⅳ	(内)赤褐色＋明褐色 (外)赤褐色	1～2mm大の石英粒、長石粒及び赤色粒 微量の雲母	〃	ナデ、表面磨滅のため不明 横ナデ	SD－100	85図		
469	〃	(復)14.0		(残)9.6	Ⅲ	(内)淡赤褐色 (外)赤褐色	細砂(石英、長石)及び赤色粒、雲母混入	〃	ナデ、横ナデ 強いナデ	SD－100(谷)	〃	45	
470	〃	(復)15.4		(残)10.0	Ⅳ	(内)灰褐色＋明褐色 (外)淡赤褐色	細砂及び2mm前後の石英粒、長石粒を微量の赤色粒、雲母	〃	横ナデ、ヘラミガキ？ タテ方向のナデ	SD－100	79図		丹塗り
471	〃	16.1	5.6	17.2	Ⅱ				横ナデ？表面磨滅により不明 ナデ		85図		
472	〃	(復)17.0		(残)8.5	Ⅲ	(内)淡明茶褐色 (外)淡白褐色	細砂及び赤色粒	良好	ナデ、表面磨滅により不明 横ナデ	SD－100	〃		
473	〃	(復)15.6		(現)12.8	Ⅳ	(内)暗灰褐色＋暗褐色 (外)暗赤褐色	細砂を含む 雲母混入	〃	暗文後ナデ及び横ナデ 指による成形後ナデ 左方向へのしぼり	〃	73図		丹塗り
474	〃	(復)22.0		(残)12.	Ⅴ	(内外)淡褐色	1mm前後及び3～5mm大の石英粒、長石粒多量 微量の雲母混入	〃	不明、ナデ 不明(表面磨滅が著しい)	〃	74図		
475	〃	(復)31.0		(残)7.3	Ⅴ	(内外)淡灰褐色 一部丹塗り	1mm前後及び4～5mm大の石英粒、長石粒多量 雲母混入	〃	ナデ、不明 横ナデ、刷毛目	4区 SD－100	75図		丹塗り
476	〃	(復)23.0		(残)9.6	Ⅴ	(内)明褐色 (外)暗褐色	1mm前後及び3～4mm前後の石英、長石多い 雲母混入	〃	刷毛目ナデ 指オサエ後横ナデ、ヘラ状工具による成形後ナデ	〃	〃		
477	〃	(復)28.8		(現)12.7	Ⅴ	(内外)淡白褐色	1mm前後及び3～5mm大の石英粒、長石粒を多く含　白雲母	〃	横ナデ	〃	76図		
478	壺蓋	(復)30.8		(現)10.3		(内)明赤褐色＋暗褐色＋黒色　(外)明赤褐色	1mm前後の石英、長石粒	〃	刷毛目、横ナデ	〃	86図		
479	〃	(復)26.0		(残)5.5		(内、外)暗褐色＋明褐色	1mm～3mm大の石英粒、長石粒多く赤色粒も含	〃	表面磨滅のため不明	〃			
480	〃			(残)6.7		(内)暗褐色 (外)明褐色	1mm前後の石英粒、長石粒を多く含む 雲母混入	〃	横ナデ、外面部に丹塗り痕跡 ヘラナデ、指おさえ後ナデ	〃	86図	46	
481	〃			(残)6.7		明褐色	1mm前後及び2～3mm大の石英、長石粒を多く含	〃	横ナデ、刷毛目 ナデ、ヘラナデ	〃	〃	〃	
482	〃			(残)6.5		(内)灰褐色 (外)淡茶褐色	1mm前後及び2～3mm大の石英、長石粒 雲母混入	〃	横ナデ 指ナデ ヘラナデ	〃	〃	〃	
483	〃			(残)7.2		(内)淡茶褐色 (外)淡灰褐色	1mm前後の石英粒、長石粒を多量 雲母混入	ふつう	横ナデ 指おさえ後ナデ仕上	〃	〃		
484	〃			8.4		(内外)赤褐色	1～2mm大の石英、長石粒を多量 雲母混入	良好	横ナデ、タテ方向ナデ ナデ	〃	〃		胴径15.6　丹塗り
485	〃			(残)5.2		(内)暗褐色 (外)赤褐色	1mm前後の砂粒、石英、長石 金雲母混入	〃	横ナデ 指おさえ後ナデ	〃	〃		
486	〃			(残)6.1		(内)黒褐色 (外)明褐色＋黒色	1～2mm前後の石英、長石多く雲母混入	〃	指オサエ後による整形後横ナデ	〃	〃		
487	壺			(残)3.5		(内)明赤褐色 (外)暗赤褐色＋明赤褐色	1mm前後の石英粒、長石粒	〃	ナデ、横ナデ ヘラ状工具によるナデ	SD－100 P－108　1包	〃		
488	壺蓋			2.4		(内)明褐色 (外)赤褐色	1mm前後及び2～3mm大の石英粒、長石、金雲母混入	〃	ナデ、ヘラケズリ丹塗 指オサエ、一定方向へのナデ	SD－100	85図	46	径15.0
489	〃			1.4		(内)明褐色 (外)明褐色＋赤褐色	1～2mm大の石英、長石粒多量、赤色粒、雲母	〃	表面磨滅のため口縁部のみ 片、残り	〃	86図	〃	丹塗り　径11.9
490	〃			1.6		(内)暗褐色 (黒斑有) (外)暗赤褐色	細砂、雲母混入	〃	ヘラミガキ、ナデ		〃	〃	丹塗り　径11.2

Tab. 20　出土土器一覧表－10

遺物登録番号	器種	法量(cm)			形式	色調	胎土	焼成	調整	出土遺構	Fig	PL.	備考
		口径	底径	器高									
840700491	蓋			3.3		(内外)暗赤褐色 外面丹塗り	1㎜前後石英, 長石粒 雲母	良好	ナデ	SD－100	85図	46	径15.4
492	〃			1.1		(内)褐色 (外)暗赤褐色	細砂 雲母	〃	ヘラミガキ 指オサエ, ナデ	〃	〃	〃	径11.3
493	〃			1.5		(内)暗褐色 (外)暗赤褐色 (丹塗)	細砂, 金雲母 赤色粒	〃	ヘラミガキ, 横ナデ ヘラケズリ	〃	〃		(復)径16
494	〃			(残)1.4		(内外)明褐色	細砂 雲母	〃	ナデ	〃	〃		径10.0
495	手づくね土器			4.8		(内)明褐色＋赤色 (外)暗褐色＋赤色 丹塗り	2～5㎜大の石英, 長石(多) 雲母	〃	ナデ 指オサエ	〃	91図	46	
496	〃	10.7	5.6	6.0		(内外)暗褐色 外面一部黒斑有	0.5㎜前後 2～5㎜の石英粒, 長石粒(多) 雲母	〃	指オサエ 指オサエ後ナデ	SD－100 P－108 1包		49	
497	〃	6.8		4.2		(内外)暗褐色	1㎜前後 3～5㎜の石英, 長石粒(多) 雲母	〃	指オサエ後ナデ ナデ	SD－100			
498	高坏		18.5	(残)4.9	V	明褐色	1㎜前後 3～5㎜大の石英粒, 長石粒(多) 雲母	〃	ナデ 指による成形後ナデ仕上げ, 横ナデ	〃	84図		底部一面丹塗り
499	器台	10	11.5	8.0	V	暗褐色	1㎜前後 3～4㎜大の石英, 長石粒(多) 雲母	〃	指オサエ, ナデ	SD－100 1包	88図	47	
500	〃	(復)18		(残)12.9	V	(内外) 暗褐色	1㎜前後 2～3㎜大の石英粒, 長石粒(多量) 雲母	〃	横及び斜めのタタキ 刷毛目	5区SD－100 1包	〃		
501	壺	18		(残)9.7	V	明灰色褐色	1㎜前後の砂粒 2～3㎜大の石英粒, 長石粒	ふつう	刷毛目施行後横ナデ 横ナデ	SD－100	69図		
502	高坏		(復)14.9	(残)7.3	V	(内外脚部)明赤褐色 (内面脚部)明褐色 (外面脚部)暗黒褐色	1～3㎜大の石英粒, 長石粒(多量) 雲母	〃	ナデ	〃	84図		
503	〃		(復)19	(残)18.6	V	灰褐色	1㎜前後の石英, 長石	〃	ナデ, 暗文 シボリ, 横ナデ	〃	〃		丹塗り痕
504	手づくね土器	(復)8.0		3.5		(内外) 明褐色 外面一部黒斑有	3～4㎜大の石英, 長石粒(多) 雲母	良好	指オサエ	〃	89図		
505	〃	8.4		5.7		(内外)明茶褐色 外面一部黒斑有り 酸化鉄付着	細砂 2㎜大の石英, 長石粒 雲母	〃	指による成形後ナデ仕上げ ナデ	〃	〃		
506	〃	(復)8.0		5.9		(内)明灰褐色 (外)灰褐色	細砂 3㎜前後の石英, 長石粒	〃	指によるナデ上げ 底部一部黒斑有り	〃	90図		
507	碗	(復)8.6		5.7		(内外)暗茶褐色	1㎜前後砂粒(多)	〃	ナデ	〃			
508	手づくね土器	(復)8.1		6.7		(内)暗灰褐色 (外)暗褐色＋黒色	細砂 金雲母	〃	指による成形後ナデ仕上げ 指オサエ後ナデ	SD－100	90図		
509	〃	(復)8.4		3.6		(内)淡黒色 (外)暗褐色＋黒色	1㎜ 3～4㎜前後の石英, 長石粒(多)	〃	ナデ ナデ(指), 底部一部, スス付着	〃	91図		
510	〃	8.8		5.3		(内)明褐色 (外)淡茶褐色＋灰色 外面一部黒斑有	0.5～1㎜前後の石英粒, 長石粒(多) 白雲母	〃	刷毛目施行後ナデ仕上げ 指オサエ後ヘラ状工具でナデ	〃	90図		
511	〃	(復)9.2	4.4	6.8		(内外) 明褐色 外面一部黒斑有	1㎜前後 2～3㎜大の石英, 長石(多)白雲母	〃	ヘラ状工具によるナデ 指オサエ後ナデ	〃	〃		
512	〃	(復)8.5		5.0		(内外) 淡褐色	1～2㎜大の石英, 長石 雲母(微量)	〃	指オサエ 指オサエ後ナデ	〃	91図		左右に把手がつく可能性有
513	高坏脚		7.2	(残)6.4		(内外)茶褐色 (底内)灰色 外面一部丹付着	2～3㎜大の石英粒, 長石粒(多) 白雲母(少量)	〃	指による強い力でナデあげ ナデ	〃			
514	〃	6.8		(残)6.2		明赤褐色	2㎜ 4㎜前後の石英, 長石粒(多量) 白雲母	〃	指による強い力でのナデ ナデ	〃			一部丹塗り痕跡
515	〃		4.8	(残)3.6		(内外) 明褐色	1～3㎜大の石英, 長石粒(多量)	ふつう	不明	〃			
516	〃		3.5	(残)3.6		(内)明灰褐色 (外)明褐色	細砂, 2㎜大の石英粒, 長石粒 雲母(微量)	良好	ナデ	〃			
517	壺	10.2		(残)3.9	Ⅲ	(内外) 暗褐色＋暗赤褐色	1㎜前後の石英, 長石 雲母(微量)	〃	ナデ, ヘラミガキ ヘラ状工具でのナデ	〃	85図		口縁4ヶの孔をもつ 丹塗り痕跡有
518	〃	(復)10.0		(残)5.9	Ⅲ	明褐色＋暗褐色 (外)黒褐色＋赤褐色	細砂 雲母, 赤色粒(少量)	〃	ヘラミガキ ナデ	〃	〃		丹塗り
519	〃	(復)10.2		(残)6.5	Ⅳ	(内外) 明赤褐色 外面一部黒斑有	1～2㎜大の石英粒, 長石粒	ふつう	楕円文	〃	79図	47	丹塗り痕跡残す
520	〃	(復)13.8		(残)4.7	Ⅲ	(内外)明赤褐色 口縁外面丹塗り	1㎜前後の石英, 長石 雲母(微量)	良好	ナデ	〃	85図		
521	〃	(復)11.0		(残)2.6	Ⅲ	(内外)明赤褐色＋黒色 口縁一部黒斑有	細砂(良質粘土使用) 雲母	〃	ヘラミガキ	〃	79図		丹塗り土器
522	〃	(復)8.0	(復)3.8	(残)8.7	V	(内)明褐色 (外)赤褐色＋暗褐色	細砂(良質の粘土使用) 金雲母	〃	ヘラミガキ(横, タテ) 横ナデ, 指オサエ後ナデ	〃	74図		一部黒斑有り 外面丹塗り
523	〃	(復)10.0		(残)6.0	Ⅳ	(内)明褐色 (外)暗褐色	細砂(良質の粘土使用) 雲母(微量)	〃	ヘラミガキ(横方向) 横ナデ	〃	79図		丹塗り痕跡残
524	〃	(復)5.6		(残)7.6		(内)暗褐色＋明褐色 (外)明褐色＋黒色	2㎜前後の石英, 長石粒(多) 金雲母	〃	ヘラミガキ(タテ, 横) 指, ヘラ状工具によるナデ, 雑	〃	74図		内面酸化鉄付着 外面一部黒斑有 丹塗り痕跡有
525	〃	(復)11.4		(残)3.7		(内)明褐色 (外)明褐色＋赤褐色	細砂 金雲母	〃	ナデ(ミガキ？)	〃			口縁部2＋2の孔 丹塗り土器
526	〃	(復)10.0		(残)3.0	Ⅲ	(内外) 明褐色＋赤褐色	1㎜前後の石英, 長石粒 雲母	〃	ナデ	〃	85図		口縁部2ヶの孔 丹塗り土器
527	〃	(復)10.4		(残)5.5		(内)暗褐色 (外)暗褐色＋暗赤褐色	1㎜前後の石英, 長石 金雲母	〃	ヘラミガキ, ナデ 指オサエ後ナデ仕上げ	5区 SD－100 1包			口縁部孔をもつ 一部黒斑有り 外面丹塗り
528	〃	(復)11.6		(残)2.7	Ⅲ	(内外)明赤褐色	1㎜前後の石英, 長石粒(多)	〃	ナデ	SD－100	85図		丹塗り痕跡
529	〃	(復)11.5		(残)5.5	Ⅳ	(内外) 暗褐色＋赤褐色	1㎜前後 3～4㎜大の石英粒, 長石粒(多)	〃	横ナデ, ヘラ状工具によるナデ 指オサエ後ナデ	〃	79図		丹塗り土器
530	〃	(復)8.2		(残)5.0	Ⅳ	(内外) 暗褐色 外面一部黒斑有	細砂 2～3㎜大の石英粒, 長石粒 金雲母	〃	ナデ	〃	〃		
531	杓子状土器					(内外) 茶褐色	2㎜前後の石英粒, 長石粒(多) 雲母	〃	外面, 刷毛目 内面, 指によるナデ	〃			
532	器台	(復)10.4	12.6	13.0		(内)明赤褐色＋灰褐色 (外)明赤褐色	1～7㎜大の石英粒, 長石粒(多量) 白雲母	〃	指で成形後ナデ仕上げ ナデ	Pit－268	100図	47	
533	甕底		(復)7.0	(残)10.1	Ⅳ	(内)暗茶褐色 (外)暗褐色	1～4㎜大の石英粒, 長石粒(多) 金, 白雲母	ふつう	刷毛目	Pit－1126	〃		
534	鉢	(復)13.6		(残)13.0	Ⅳ	(内外)明茶褐色 外面一部黒斑有り	1～5㎜大の石英, 長石粒(多量) 雲母	〃	ナデ, わずかに刷毛目が残る	SD－50 P－15	96図	47	
535	壺	(復)7.0		(残)5.7	Ⅲ	(内)明茶褐色 (外)茶褐色＋薄い灰色	1.5㎜前後の石英粒, 長石粒 白雲母	良好	刷毛目	Pit－298	100図		
536	〃		(復)11.2	(残)19.3		淡灰褐色 外面一部に黒斑有	1㎜前後 2～3㎜大の石英, 長石粒(多) 金, 白雲母	〃	刷毛目 ナデ	SD－50 P－21			
537	鉢	(復)6.6	6.6	7.8		白褐色	2㎜前後の石英, 長石(多)	〃	ナデ 横ナデ	Pit－410	100図		
538	手づくね土器	5.5	1.7	3.9		(内外) 明褐色	1㎜前後の砂粒 雲母	ふつう	ナデ	Pit－1156	101図		
539	甕	(復)24.6		(残)18.3	Ⅳ	暗褐色	1㎜前後の石英, 長石粒(多) 雲母	〃	ナデ, 刷毛目	Pit－1126	100図		

Tab. 21 出土土器一覧表－11

遺物登録番号	器種	法量(cm)			形式	色調	胎土	焼成	調整	出土遺構	Fig	PL.	備考
		口径	底径	器高									
840700540	脚台付鉢	(復)16.8	12.4	15.7		(内)淡白褐色 (外)明褐色	2～3㎜大の石英,長石粒多量	ふつう	表面の摩滅のため不明	Pit−161	100図	47	
541	甕	(復)2.0		(残)6.7		(内)茶褐色 (外)白茶褐色	2㎜前後の石英,長石粒多い 雲母混入	良好	横ナデ	Pit−298	〃		
542	土師器	(復)7.8		(残)2.6		(内外)明褐色 内面底部黒斑	細砂及び赤色粒を含 雲母多い	ふつう	横ナデ	Pit−1184	101図		
543	〃		(復)9.0	(残)1.0		(内)明褐色+淡灰色 (外)内よりやや暗い褐色	細砂粒, 赤色粒 雲母含	〃		Pit−2016	〃		
544	〃	(復)8.3	6.0	1.4		(内外) やや暗い褐色	細砂粒及び雲母	〃		Pit−2052	〃		
545	糸切皿		(復)9.6	(残)1.4		(内外)やや暗い褐色	細砂及び2㎜大の石英, 長石少し含む 多量の金雲母	〃		〃	〃		
546	青磁		(復)6.2	(残)5.3			黄色をおびた灰褐色の胎に暗い褐色をおびた緑色の釉, 内面は外面よりやや明るい		外面全体にヘラ描きを施す蓮弁文？ 全体に施釉, 横ナデ	Pit−2039	〃		
547	須恵器蓋			(残)1.4		灰褐色つまみ部分はやや白っぽい灰色	細砂粒子	良好	横ナデ	Pit−2046	〃	50	
548	糸切皿		(復)8.8	1.1		(内外)明茶褐色	1㎜前後の石英,長石及び赤色粒 雲母混入	〃		SK−01	〃		
549	〃		7.4	(残)1.3		(内外)明茶褐色	細砂及び赤色粒, 雲母	〃	ナデ 板状工具での切おとし	〃	〃		
550	〃	(復)11.8	9.0	2.6		(内外)暗茶褐色	細砂及び雲母	〃	ナデ	〃			
551	内曇土器			(残)1.3		灰褐色 底部黒色	細砂及び雲母	〃	ナデ	SD−113	102図		
552	〃		(復)7.6	(残)2.9		(内)暗黒色 (外)灰褐色	1㎜前後の石英,長石及び雲母	〃	ナデ ヘラミガキ	SD−200	〃		
553	黒色土器		(復)7.6	(残)2.0		(内外)黒色	細砂及び雲母	ふつう		〃	〃		
554	須恵器坏		(復)10.0	(残)3.7		(内)茶褐色+灰褐色 (外)灰褐色	細砂 2㎜大の石英粒少量	良好		〃	〃	50	
555	青白磁		(復)7.2	(残)3.0		深い草色	灰褐色の緻密な胎に釉を全体に施す	〃	目込み部分に目痕を残す	〃	〃	〃	
556	白磁碗	(復)16.0		(残)4.6		白色	白色の緻密な胎に透明な釉を施す			〃	〃		
557	白磁皿		(復)5.6	(残)0.7		淡暗い灰色	淡白灰色の緻密な胎に半透明の釉が全体に施してある			〃			
558	青磁皿		(復)6.6	2.1		深淡緑色	淡灰色を呈し淡い深い緑色の釉を施す外面底部露呈	良		SK−01	101図	50	内面見込み部分に櫛描文
559	白磁碗		3.1	(残)3.0	淡いオリーブ色		淡黄褐色の胎に淡いオリーブ色の釉を施す, 内面底部分は2㎜大の砂粒が付着した上に釉されている	良好		SD−118	102図		
560	青磁の底		6.0	(残)2.0	淡灰白色					SD−119	〃	50	
561	把手(鍋？)						細砂及び2～3㎜の石英粒, 長石粒 金雲母混入	良好		SD−200	〃		
562	青磁碗			(残)1.8		灰色 釉は深くすんだ緑色				〃	95図	50	印文(金玉満堂)
563	〃			(残)2.5			釉は淡白青色			〃	〃		高台部は釉はかかってない
564	青白磁			(残)3.8			黄みがかった灰色 釉は淡い緑色高台部分まで施釉		内面は無紋, 外面にヘラ状工具による施紋後施釉	〃	〃	49	高台内面は釉はかかっていない
565	土製投弾									SD−100	〃		4.9×2.5
566	〃									SD−100 第1包含層5区	〃		1.6×1.4
567	平瓦									SD−200	102図	50	
568	〃									〃	〃	〃	
569	丸瓦									〃	〃	〃	
570	平瓦									〃	〃	〃	
571	〃									〃	〃	〃	
572	〃									〃	〃	〃	
573	土製品　錘									Pit−2017	101図		
574	鉢	(復)20.0	7.8	16.5	Ⅲ～Ⅳ	(内外)淡白褐色	2㎜大の石英粒,長石粒多く含む 白雲母混入	ふつう		SD−50 P−2	96図		
575	壺				Ⅳ	(内)暗黒褐色 (外)淡白褐色+黒色	1㎜前後の石英粒,長石粒を含む			SD−100	73図		
576	〃	(復)22.2	(復)7.7	31.0						〃			
577	器台		12.1	11.8						〃			
578	甕	35.7		(残)20.0						〃		42	
2001	銅鐸	鈕高2.4cm身高11.1cm13.5cm円筒形を呈する釈身上端部長径, 4.6cmのほぼ円形釈身下端部長径, 7.75cm短径, 7.50cmの円筒形				(内)赤色顔料 (外)	黒色土と砂層にはさまれて出土			〃	126図		
2002	鉄環										95図	51	
2003	鉄■									SD−119	〃		
2004	鉄■									Pit−2052	〃		
2005	土錘										〃		
2006	ガラス玉					コバルトブルー	ガラス小玉				〃		
2007	〃					コバルトブルー	ガラス小玉				〃		

Tab. 22　出土土器一覧表－12

3）木器　　久保寿一郎

木器はSD50およびSD100から多量に出土しており、総数は約2000点にのぼる。その内容も、農具、工具、漁撈具、生活用具などから運搬具、建築材にいたるまで大小多岐にわたっている。実測は小形の製品を中心として237点のものについて行った。本項ではそれらを全て図示し、器種ごとに報告を行う。基本的法量については一括表示している（Tab.23～27）。

農具（第103～108、110図）

農具は作業内容により起耕具、整地具、収穫、脱穀具、補助具などに分けられる。これらを基準として、出土農具を分類した。

起耕具には鍬25点、鋤９点、鍬類着柄具２点、ナスビ形農具着柄具１点がある。鍬類には平鍬と又鍬があり、又鍬には二又、三又、四又のものが確認される。平鍬は、平面形によりいくつかの種類に分けられるが、いずれも方形柄孔を有し身部の表面に段差を作り出すことで共通している。１は頭部から刃部にかけてゆるく外湾しており、4.5cm×3.7cmの柄孔を有する。柄孔周囲はやや厚手に作られている。１以外のものはいずれも頭部から刃部にかけて内湾している。５は推定長28cm×幅18cmで、4.8cm×4.0cmの柄孔を有する。変形のためか、刃部がやや外反している。３は頭部から刃部にかけての湾曲度が特に強いものである。4.3cm×3.6cmの柄孔を有する。12は破損が著しく頭部を欠損している。推定柄孔幅4.2cm。７は周囲の稜線が明瞭に残る最も厚手の平鍬で5.2cm×4.1cmの柄孔を有する。推定器長30cm程か。４は頭部を欠損する。柄孔幅3.5cm。これらは全て刃部端から全長の１/３前後の部分に段差を有している。側面的には、頭部から刃部に向って徐々に薄く加工しながら、この部分で山形を呈し、再び刃部端に向って薄く加工するものである。このような段差の存在は、金属刃の装着を想起させるものである。また２は両肩の部分が三角形状に薄く加工されており、先述のものとは別の方法による金属刃の装着が考えられる。5.6cm×3.6cmの柄孔を有する。推定最大幅17.6cm。23は平鍬の刃部片である。端部から約７cmの部分に段差を有する。16～18は刃部を欠損するが、いずれも平鍬の頭部と思われる。16は３や７に類似する形態である。推定最大幅約16cm、で推定3.7cm×3.0cmの柄孔を有する。17は柄孔周囲を楕円形状に厚手に作る特異な形状をなしている。推定4.6cm×3.5cmの柄孔を有する。

又鍬は、いずれも方形柄孔を有し、Ｖ字状の切り込みによって刃部を作り出すものである。二又鍬は、いずれも幅狭で長胴である。14は刃部長31.5cm、刃部幅2.8cmで、4.0cm×3.6cmの柄孔を有する。９は推定最大幅約13cmで、5.7cm×3.5cmの柄孔を有する。15、22は破損が著しいが、いずれも二又鍬と思われる。22は頭部端をやや尖頭気味に加工する。柄孔は推定6.0cm×3.5cm。15は収縮変形が著しい。13は残存形態より三又鍬と思われる。推定最大幅17.0cm、刃部は

長さ32.5cm、幅2.1cmを計る。細身、薄手の作りで、全体的に湾曲している。8は側面全体に加工痕が残る厚手の作りのものである。11は収縮変形が著しい。10は四又鍬である。中央の刃部間はコの字状に加工している。推定最大幅、約18cm、刃部は長さ16.9cm、幅2.5cmで、5.9cm×4.0cmの柄孔を有する。90、102は又鍬の刃部片、また19～21、92は鍬類の頭部片である。19、20はいずれも頭部を尖頭気味に作り、19は5.2cm×3.6cmの柄孔を有する。20は推定幅4.0cmの柄孔を有する。

鋤は長柄鋤と着柄鋤に分けられる。6、25、28、30はいずれも平鋤である。25は刃部を含む一部を欠損し、収縮、変形している。柄は径3.7cm×2.4cmを計る。28は径2.8cm×2.4cmの柄部が50cm程残存する。身は内湾し、肩部をコの字状に作り出している。24はU字の握部を有する鋤の柄である。径3.1cmの柄部を50cm程残し、特に握部の加工痕は明瞭である。93は肩部を作り出す二又鋤である。刃部は深く切り込み、幅7.7cm断面をV字状に加工している。残存状況より着柄鋤として使用されたものか。表面および側面に加工痕が残る。81・209ともに小片であるが93と同形態のものの一部であろう。ともに加工痕が明瞭に残る。26は肩部をコの字状に作り出し、身の周囲を一定幅で厚手に作るものである。柄部が伸びてゆくものと思われる。推定最大幅約15cm。

整地具としては杁と杷が各1点出土している。32は杁で4.0cm×3.7cmの方形柄孔を有し隅丸長方形状の身部を刃部に向って薄く加工している。加工痕が良く残る。31は杷で幅広、薄手に作られており、やや変形している。4,0cm×3.5cmの方形柄孔を有し、長さ3cm程の刃部を10基内外作り出していたものと思われる。

着柄具と思われるものは欠損品であるが2点(95、96)出土している。また73は枝分かれ部を利用したナスビ形農具の柄と思われる。枝部を柄とし、全面に丁寧な加工がなされている。また85は用途不明品であるが、形態的に泥除け具としての機能も想定され、農具として分類している。表面および側面に細かな加工痕が残る。

収穫・脱穀具に含まれるものとしては、堅杵が8点出土している。全て片側のみの残存で、搗部と握部の境が明確な稜をなしているもの(35～37、41)と、そうでないもの(38～40)とに分けられる。端部を有するものはいずれも著しい使用痕が残り、特に35、36は凸レンズ状をなしている。39～41は部分的な欠損、摩滅が著しく、不整形をなしている。また195は1/2以上が欠損するもので、握部が特異な形態を残している。推定搗部径約9cm。

工具(第109、110、112図)

工具には槌、斧柄類、編み具などがある。

槌は大小11本が出土しており、いくつかに分類することができる。大形のものは6点ある。いずれも槌部と握部の境が明確で、加工痕が良く残っている。特に42、44、46、などは加工痕

の稜が槌部と握部の境を形成している。また44、46は槌部が短い。45は断面が楕円形を呈し、破損が著しく、一部に焼痕が見られる。48も破損が著しいが、残存部は使用により内湾している。また、いずれも握部端は欠損している。194は不整形で加工痕も明瞭に残っており、加工途中のものとも思われるが、形状や木取りにより槌類として分類した。49～52は小形で細身の槌である。いずれも硬質の材を用い、表面は丁寧な加工が施されている。49、50、52は槌部と握部の境界が比較的明確である。51は槌部から握部へとゆるやかにつながり、握部中央を最も細く加工しており、また端部に半円状の凸部を作り出している。また49の端部にも、少し摩滅しているが、これと同様のものが確認される。

斧柄類は9点出土している。いずれも木の枝分かれ部を利用し、枝部を柄として加工している。完形品は少ない。66は長方形状の凸部を作り出し、鉄斧を装着したものと思われる。径3cmの柄が20cm程残存する。91は台部の先端が欠失するが、背部と上部を面取りしている。柄部は樹皮を多く残し、径2.8cm、長さ40cm余で完存している。67は一部に樹皮を残すが、台部背面は特に丁寧に加工されている。また、柄は台部に対してやや斜めに伸びている。68は全面に加工痕が残る。

編み具としては編み板の断片と思われるものが出土している(236)。破損、摩滅が著しく明確にはしえないが、同一固体と思われる2片の板材があり、1点は約6cm間隔で2ケ所の刻み目らしきものが確認される。

漁撈具(第111図)

漁撈具では、手網の柄ならびに枠が数点出土している。ここでは舟形木製品も加えて報告する。58は柄の端部と粋の一部を欠損するが、推定径30cm程の粋を有すると思われる。把手部は全面にわたって細かく丁寧な加工がなされている。59は把手である。頭部と握部は明確な段差により区別されており、端部は断面V字状に、また裏面は平坦に加工されている。60～63は粋の断片である。61～63はいずれも径1cm強の材を用いて断面円形のまま使用している。60のみやや太く、内側は平坦に加工している。また一端には加工痕が残る。

舟形木製品は2点出土している。いずれも一端のみの残存である。74は舳部を、75は艫部をそれぞれ残すもので、ともに断面はゆるいU字状をなし、内外面ともに稜線は認められない。また船底はそれぞれの端部に向ってゆるやかに反り上っている。74は舷側部が残存しており0.5～0.8cmの平坦面を有している。75は艫部に平坦面を有している。また両舷側が欠損しているが、推定最大幅14cm程と思われる。両者ともに全体の1/2～2/3程を残すものと考えられ、舳艫を区別した形態であったと思われる。

生活用具(第112、113図)

生活用具としては、槽、容器、杓子、その他を分類している。

槽は把手付のものが2点出土している。65は破損が著しいが、細身でかなり長胴のものと思われる。横断面は、内面には稜を有するが、外面は孤状を描く。把手は現状で10cm程を計るがかなり磨滅しており、穿孔は両側からの加工が認められる底部厚は平均3cmを計る。64は、中央やや把手部寄りに仕切りを有するものである。内部は浅く、側壁は仕切りを境として把手側はゆるく、反対側は稜をなして立ち上がる。内外面とも磨滅が著しい。把手は長さ6cmを計り、3.5cm×2.0cmの楕円孔を有する。内外面とも磨滅が著しい。底部厚約3cm。

容器は5点出土している。76は底部を欠損しており形状は不明であるが、推定器高9cm程のものと思われる。口縁は約1cm幅の平坦面を有している。口縁直下に一ケ所凸部を有するが、把手状のものになるかは不明である。80は平面観が楕円形で丸底を呈するものである。口縁は0.5cm程の平坦面を有する。内外面とも加工痕が良く残っている。77～79は、いずれも断片であり、推定径15cm内外のものと思われる。77は内外面とも加工痕が残る。推定器高8cm程で丸底を呈すると思われる。

杓子は把手片を含め、4点出土している。86は楕円形の身部を有し、側面観は把手から身にかけて、ゆるやかに内湾している。98～100は把手片である。

その他、方形の杓子状を呈する29、幅狭の鋤状を呈する27がある。29は台形状の身部に扁平な把手を作り出したもので薄手の作りである。把手は片側に向って現状で26cm程伸びている。側面にも丁寧な加工痕が残る。27は細長の身に幅4.1cmの柄を作り出したもので、別木の柄と組み合わされた可能性もある。刃部にあたる部分は、端部に向って薄く鋭角に作られている。

小形加工木(第113～115図)

小形で用途不明の加工木を一括してまとめている。これらの中には他の部材と組み合わせて用いると思われるものもあり、多くは欠損品である。特徴的なものについて説明を加える。

53～57は浮子状の木器である。53は平面観は円形、側面観は台形を呈し、頂部に小孔を穿つ。54は先端を大きく3面に加工するもので全面に加工痕が残る。57は半欠品であるが、一部に樹皮が残っており、丸木の両端を加工したものと思われる。55は不整形であるが完存品で、多くの加工により多面体を形成している。56は両端に加工痕を残し、断面は不整楕円形を呈する。87、88は別個体であるが、類似の加工木である。87は円盤状の本体(？)から湾曲する把手(？)が伸びるもので、先端は欠損している。また本体に接する部分が長さ4.5cmにわたって最も太くなっている。88は87より小形の本体から同様の把手が伸びており、端部を加工する完形品である。把手の外側に面した部分には、凹みがつけられている。105は何かの端部片であるが、このような加工木と同一個体の可能性がある。これらは組み合わせ部材の一部であろう。84は断面が楕円形を呈するもので、何かの把手と思われる。182は不整形で、一端面に加工を施し、他方を断面三角形に成形している。147は両端に加工痕が残る。47は横断面が半円状をなし、下方に

平坦面を有する。上方は棒状に伸びるものと思われる。106は不整形であるが、全ての面に加工痕を残すものである。139、144、148、151、162、175、181などは一端部あるいは側面に加工痕を残し、小形の加工木の断片と思われる。

小形棒材(第116、117図)

農具の柄、あるいは建材の一部を含むと考えられる棒状加工木のうち、特徴的な小形の棒材を一括して、小形棒材として分類した。欠損品が多く、10数cm～80cm余りのものがある。法量、加工状況、断面形態などから、いくつかに分類することができる。82、214、215、217～219などは比較的長大で、断面は円形を呈し、全体的に弧状をなしている。また82、118、126、127などは、端部付近を平らに加工している。123は断面を正方形とし、やはり先端を平らに加工している。細身のものには断面が円形、方形、多角形をなすものがあり、いずれも細かい加工がなされている。やはり端部は平らに加工するものが多い。152～154、158、159、172、208などは、端部を面取りした丸棒材で、柄の一部であろう。

その他の木器(第117～124図)

その他の木器としたものには、形態的には梯子や舟材と思われるものも含んでいるが、多くは、板材、角材、柱材、杭材として大別されるものである。これらは各種の構築物として用いられたのであろうが、各用途を明確にし得ないため、形態を中心として大別し、代表的なものについて、特徴を記してゆくこととする。

板材の中に、柄穴を有するものがある(第117、118図)。189は、板材の端部近くに4.0cm×2.5cmの柄を穿ち、それに合致するよう側面からも柄穴を加えている。231は断片であるが、特殊加工を施した狭板材に15cm間隔で2cm×1cm程の柄を穿っている。長胴のものが想定される。178は、柄穴近くの端部を斜めに切断し、加工したものである。

228は梯子で、木材の外縁を利用した半円形の足掛部が残存するものである。

33、34、200は、全面に加工痕が残る板材である。何かの未製品とも思われ、特に34は、一端を欠損するが、長辺の一辺に向って薄く加工されており、農具(杁？)の未製品の可能性もある。174は外縁を弧状に加工するものである。

角材として特徴的なものが2種類出土している(第118、121、122図)。184～187は、いずれも幅7cm、厚さ3cm程の角材で、断面は片側をやや狭く加工している。184～186は、その狭い方の側面に、いずれも長さ15cmにわたるゆるやかな弧状の削りを入れている。184、185は一端部が残存しているが、端部から削りまでの長さもほぼ一定している。163、164は、ともに長大な角材である。163は12コ体全てが接合し270cmを超えるものである。一端は残存しておりやや外側に広がる形で加工している。164は163と同様の作りを示すが、断面形が正方形に近く、別個体であろう。203も同類と思われる。

杭材と柱材は一括してまとめている(第120、121図)。杭は161が断面三角形を呈する他は全て丸杭である。また先端は157が断面V字状の2面加工、156、157、165、213などは1面加工、他は多面加工である。

202は、全面に樹皮を残す木材を切断し、両端面に加工を施している。193、197、198、201は断面が楕円形をなす木材の一端を、浅い傾斜によって面取りしている。199は板材の一端をV字状に2面加工し、欠損部分かと思われる他端にも加工を施している。

207は、枝分かれ部を含む二又の木材である。枝部分は両方とも先端が欠損しているが、基部には、断面V字の丁寧な2面加工が残っている。

223は厚手の板材で、断面は実測面を半円状に、裏面を平坦に加工している。224は大形の板材で、並列した状態で出土しており、同一の板材であったと思われる。

226、235は、船材かと思われる湾曲板材である。226は一側面を丁寧に加工しており、舷側部分であろうか。断面は稜を伴わず、ゆるやかに湾曲する。独木舟材の一部であるとするなら、最大幅60～70cmのものが想定されよう。234は断面がL字形をなす板材である。3コ原形は断面コの字形の樋状のものが想定される。

竹籠(第125図)

SD100から出土した大形板材224の上部に乗る状態で、籠が1点出土している。口縁を欠損するものの、底部と体部の一部を残している。底部は現状で21cm×13.6cmを計り、方形または長方形を呈するものと思われる。また体部は比較的急に立ち上っており、高さ4.2cmほどが残存している。編み方は底部と体部で異なる。底部は経条、緯条ともに0.4cm程の材を用い、2本を1単位としており、4本超え、4本潜り、2本送りに編み込んでいる。そしてそれらの条が稜をなして立ち上がり、体部の経条となっている。体部の緯条は幅0.2cm程のやや細い材を用いており、1本を1単位とし、2本超え、2本潜り、1本送りに編み込んでいる。

朱塗り棒状木器(第117図210、巻頭)

1点だけであるが朱塗りの木製品が出土した。先端部が欠損しているため用途が明らかに出来ないが一応、棒状木器とした。端部は面取りが行なわれ角をとる形状を呈する。側面に2条の切痕が認められる程度で皮をはぎ、水銀朱を塗る。おそらく全面に塗られていたものと思われるが、現存する部分は、裏面及び端部にはなく表面と両側面に認められる。断面は2.1cm×2.6cmの楕円形を呈するが、本来は丸で土圧により楕円形を呈するものかもしれない。現存長23.9cmを測る。

今宿五郎江遺跡２次調査出土の赤色顔料について　　本田　光子

銅鐸型銅製品(第126図、PL.51)および棒状木製品(第117図210、巻頭図版)に認められる赤色物について顕微鏡観察とX線分析(棒状木製品)を行い、赤色が何によるものかを調査した。

銅鐸型銅製品

出土後数年経過して観察を行ったのだが、赤色物はすでに図示された状態のように残っていなかった。やや赤い部分がようやく認められたが、きわめて僅かであったので通常のX線分析のための試料採取が不可能であった。針先に着く程度の採取を行いプレパラートを作成した。光学顕微鏡により透過光・反射光40～400倍で検鏡を行ったが、顕著な赤色顔料粒子は見いだされなかった。いわゆる赤土によく似た状態であり、広義のベンガラ系赤色顔料というべきであろうか。

一般にベンガラというのは主成分元素が鉄であり、主成分鉱物は赤鉄鉱である赤色顔料を指す。出土赤色顔料の「ベンガラ」は主成分鉱物として赤鉄鉱の他褐鉄鉱(針鉄鉱、鱗鉄鉱等)非晶質の褐鉄鉱があり、これらの混合物であることも多い。そのためX線回折により赤鉄鉱が同定されない場合も少なくない。これは試料の量が主な原因であるが、赤鉄鉱と非晶質の褐鉄鉱が混合している場合、後者の量が多いと赤色が強くなるのではないかともいわれている。(註１)一方、主成分の定性分析で鉄が確認され、他に水銀、鉛が検出されなければ、ベンガラであるという判断もごく一般的になされている。さらに主成分の定量分析を行い、鉄の含有量の多少からベンガラの種類(品位・生産地)を分けることもある(註３)。また、出土ベンガラの粒子に種々の形状があることもわかってきており、パイプ状を呈する特異な粒子は産地を示す指標ではないかという指摘もある(註３)。何れにしても、出土ベンガラの多様性に対処した分析法を、試料の採取・調整等の問題も含めて検討していかなければならない。

本例のような広義のベンガラ系赤色顔料の存在については、赤色顔料に対する観念、及び入手・製造、使用という行為を考える上で意味を持つ(註４)ものだけに充分な注意をしていく必要があろう。

棒状木製品

棒状木製品の側面に付着・残存しているもので、何らかの固着剤により塗布されたものと思われる*。赤色顔料はかなり厚く残っている。赤色顔料の付着した細片を試料とした。

光学顕微鏡観察　　赤色顔料の種類とその粒度を見るために、針先に着く程度の量を採取しプレパラートを作成し、透過光・反射光により40～400倍で検鏡した。赤色顔料として朱粒子のみを確認した。粒径は0.5～12.5ミクロンであった。粒子数が少ないので粒子径分布の測定は行っ

ていないが、２～４ミクロン前後の粒子が多い。

蛍光Ｘ線分析　赤色顔料の主成分元素の検出を目的として、宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業㈱製蛍光Ｘ線分析装置を用い、Ｘ線管球；クロム対陰極、印加電圧；40KV、印加電流；20mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲(２θ)；10～65°、走査速度；２θ８°／分、時定数；2.5秒の条件で測定を行った。赤色顔料の主成分元素としては、鉄(微)と水銀が検出された。

Ｘ線回折　赤色由来となる鉱物成分の検出を目的として、宮内庁正倉院事務所設置の理学電機㈱製文化財測定用Ｘ線回折装置を用い、Ｘ線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、印加電圧；27.5KV、印加電流；10mA、検出器；シンチレーション計数管、発散および受光側スリット；0.34°、照射野制限マスク(通路幅)；４mm、ゴニオメーター走査範囲(２θ)；30～66°走査速度２θ４°／分、時定数；２秒の条件で測定を行った。赤色の由来となる鉱物としては辰砂と赤鉄鉱が考えられるが、それらのどちらも顕著なピークは認められなかった。

Ｘ線回折により赤色の由来となる鉱物成分の同定はできなかったが、蛍光Ｘ線分析と検鏡結果から、塗布されている赤色顔料は朱(硫化水銀)であると考えられる。

本例の朱は出土朱としては粒度も細かくかなり均一に見受けられるが、これは塗料として使うために粒度を揃えてあるのだろうか。弥生時代の木製品で赤色塗彩されたものについて、その赤色顔料の種類・粒度あるいは塗膜層の調査は非常に少ない。今は資料を蓄積する段階ではあるが、本例の朱(硫化水銀HgS)は北部九州地方の弥生時代中期後半の甕棺墓出土の朱の粒度とほぼ同じような範囲におさまることに注意しておきたい。

Ｘ線分析の測定をお引き受け下さった宮内庁正倉院事務所成瀬正和氏に感謝致します。

註１　中村忠晴(1981)　「群馬県東下出および清里庚申塚遺跡出土の赤色顔料について」　『清里・庚申塚遺跡』　(財)群馬県埋蔵文化財調査業団

註２　安田博幸(1983)　『古代日本の知恵と技術』朝日カルチャーブックス28

註３　永島正春(1985)　「縄文時代の漆工技術」国立歴史民俗博物館研究報告６

註４　平野芳英(1990)　「島根の考古学と自然科学」Ⅰ、P.24『島根県立八雲立つ風土記の丘研究紀要』Ⅱ

註５　例えば四箇遺跡出土木刀状漆器(縄文時代後期後半)の朱は粒度を変えて２層塗り、下層は約１～２、上層は約３～10ミクロンの朱粒子からなる。

※脱稿語、塗膜の層構成についての調査を京都市埋蔵文化財研究所岡田文男氏に依頼した所、「漆による素地固めを施しただけでその上に直接朱漆を塗っているようである」との報告を受けた。詳細は福岡市埋蔵文化財調査報告書第261集「四箇遺跡25次」1991を参照されたい。

報告書 掲載番号	遺物番号	図版	器種	出土遺構	法量 器長	法量 最大幅(径)	法量 最大厚
挿図 103-1	001	54	平鍬	SD-100	32.7	19.1	1.7
5	005	54	平鍬	〃	27.1	10.6	1.5
3	003	54	平鍬	SD-50	31.7	20.8	1.7
12	012	55	平鍬	SD-100	20.1	17.1	1.4
7	007	54	平鍬	SD-50	29.0	19.1	2.2
4	004	55	平鍬	SD-100	23.0	18.7	1.5
挿図 104-2	002	54	平鍬	SD-50	36.8	11.4	1.5
16	016	54	平鍬	SD-100	17.7	11.7	1.7
17	017	54	平鍬	〃	15.3	6.1	1.7
23	023	55	平鍬	〃	10.0	7.6	1.2
18	018	54	平鍬	〃	19.8	7.4	1.6
14	014	54	二又鍬	〃	57.1	10.5	1.5
9	009	54	二又鍬	SD-50	31.7	10.3	2.0
挿図 105-22	022	54	二又鍬	SD-100	30.5	6.2	1.8
15	015	54	二又鍬	SD-50	37.6	5.3	1.3
13	013	54	三又鍬	SD-100	52.9	4.9	1.5
11	011	54	三又鍬	〃	34.5	8.2	1.5
8	008	54	三又鍬	〃	29.2	14.3	2.1
10	010	54	四又鍬	SD-50	38.7	13.8	1.9
挿図 106-92	092	54	鍬	SD-100	28.9	8.2	1.7
20	020	54	鍬	〃	13.3	6.3	1.0
19	019	54	鍬	〃	11.8	4.8	1.1
21	021	54	鍬	〃	14.8	8.1	0.8
90	090	54	又鍬	〃	19.6	3.9	1.3
102	102		又鍬	〃	18.9	3.4	1.1
30	030	55	平鋤(長柄)	〃	22.5	16.8	1.9
6	006	55	平鋤	〃	13.5	14.9	1.5
25	025	55	平鋤(長柄)	〃	31.0	18.3	2.4
28	028	55	平鋤(長柄)	SD-50	69.6	11.7	2.3
挿図 107-24	024	55	鋤(長柄)	SD-100	61.0	10.7	3.2
93	093	54	二又鋤(着柄)?	〃	29.5	10.3	1.8
81	081		二又鋤(着柄)?	SD-50	16.3	9.0	2.5
209	209		二又鋤(着柄)?	〃	8.0	7.9	2.6
26	026	54	平鋤(長柄)	SD-100	26.6	12.5	2.3
32	032	55	杁	SD-50	29.8	13.1	1.9
31	031	55	杷	SD-100	37.8	13.2	1.3
85	085	52	農具?	SD-50	25.6	10.8	1.2
96	096	56	着柄具	SD-100	6.2	3.5	3.4
95	095	56	着柄具	〃	10.9	3.9	4.1
挿図 108-36	036	56	竪杵	SD-50	54.8	7.6	握部径3.5
35	035	56	竪杵	〃	50.0	8.7	握部径3.5
37	037	56	竪杵	SD-100	53.3	8.8	——
40	040	57	竪杵	〃	44.3	7.2	——
41	041	57	竪杵	〃	37.8	8.8	——
39	039	57	竪杵	〃	47.7	7.2×5.1	握部径3.8
38	038	57	竪杵	〃	44.7	7.7	——
195	195		杵	〃	57.5	8.8	3.9
挿図 109-45	045	57	槌	SD-50	30.8	6.8×4.6	握部径3.8

Tab. 23 出土木器一覧表－1

報告書 掲載番号	遺物番号	図版	器種	出土遺構	法量 器長	最大幅(径)	最大厚
挿図 109-46	046	56	槌	SD-100	14.0	8.3	——
43	043	57	槌	〃	33.5	7.0	3.1
42	042	57	槌	〃	29.7	7.5	握部径3.6
44	044	57	槌	〃	30.3	7.3	握部径3.9
48	048	57	槌	〃	41.8	6.8	握部径3.1
194	194		槌状木製品	〃	33.3	8.3	5.9
49	049	57	槌	SD- 50	39.7	3.8	握部径2.1
50	050	57	槌	SD-100	39.9	3.5	握部径2.0
51	051	57	槌	〃	36.6	4.7	握部径2.1
52	052	56	槌	〃	30.0	4.5	握部径2.4
挿図 110-91	091	55	斧柄	〃	48.2	台幅3.7	——
67	067	52	斧柄	〃	台長9.6	台幅4.7	台高3.7
66	066	55	斧柄	〃	台長13.1	台幅3.7	台高4.7
104	104		斧柄	〃	台長6.9	台幅4.7	台高5.3
71	071	55	斧柄	〃	台長6.7	台幅2.7	台高4.3
72	072	52	斧柄	〃	台長5.6	台幅3.8	台高2.3
70	070	52	斧柄	〃	台長8.7	台幅4.0	台高2.1
69	069	52	斧柄	〃	台長9.6	台幅3.9	台高2.0
68	068	52	斧柄	SD- 50	台長10.7	台幅3.9	台高2.1
73	073	52	ナスビ形農具柄	SD-100	台長20.8	台幅3.5	台高2.2
挿図 111-58	058	56	手網	〃	45.8	握部径1.8	粋径1.1
59	059	56	手網(杷手)	〃	21.1	握部幅3.0	——
60	060	56	手網(枠)	SD- 50	59.8	1.5	——
61	061	56	手網(枠)	〃	56.2	1.1	——
62	062	56	手網(枠)	〃	53.6	1.3	——
63	063	56	手網(枠)	SD-100	49.5+31.7	1.3	——
74	074	52	舟形木製品	〃	48.8	13.1	1.6
75	075		舟形木製品	〃	41.5	11.5	2.0
挿図 112-65	065	52	杷手付槽	SD- 50	61.4	17.9	高さ9.5
64	064	56	杷手付槽	〃	49.7	18.3	高さ7.5
29	029	55	杓子状木製品	〃	44.4	13.7	1.2
27	027	55	鋤状木製品	〃	41.8	8.4	1.8
236	236		編み板	SD-100	13.8+8.8	3.6	0.9
挿図 113-76	076		椀	SD- 50	口径15.5	器高7.1	1.7
80	080		椀	〃	口径15.1	器高6.2	1.7
77	077		椀	〃	13.3	6.3	1.2
78	078		椀	〃	10.6	4.3	1.3
79	079		椀	〃	13.1	4.2	1.3
99	099	55	杓子	SD-100	17.7	3.7	1.6
86	086	55	杓子	〃	33.3	11.9	1.4
100	100		杓子	SD- 50	15.4	3.7	1.5
98	098	55	杓子	SD-100	17.1	5.0	1.6
54	054	56	浮子状木製品	SD- 50	7.0	8.0	——
57	057	56	浮子状木製品	SD-100	12.0	7.0	2.4
55	055	56	浮子状木製品	〃	10.2	6.7	4.2
56	056		浮子状木製品	SD- 50	14.5	7.8	6.2
53	053	56	浮子状木製品	SD-100	4.9	7.0	——
挿図 114-87	087	56	小形加工木	〃	17.1	6.3	2.3

Tab. 24 出土木器一覧表－2

報告書 掲載番号	遺物番号	図版	器種	出土遺構	法量 器長	法量 最大幅(径)	法量 最大厚
挿図 114-88	088	56	小形加工木	SD-100	26.1	3.8	2.1
105	105		小形加工木	〃	4.5	2.7	1.9
84	084	56	小形加工木	SD- 50	18.8	5.2	2.4
142	142		小形加工木	〃	18.7	3.4	2.1
162	162		小形加工木	SD-100	17.9	4.6	2.9
232	232		小形加工木	〃	17.1	3.7	2.3
188	188		小形加工木	〃	17.6	4.9	2.8
143	143		小形加工木	〃	14.9	4.8	3.5
139	139		小形加工木	SD- 50	15.1	3.8	2.8
205	205		小形加工木	SD-100	24.1	6.9	4.4
182	182		小形加工木	〃	12.4	8.4	3.1
176	176		小形加工木	〃	18.9	3.9	3.1
147	147		小形加工木	〃	18.5	8.1	5.0
141	141		小形加工木	SD- 50	18.4	8.8	2.9
175	175		小形加工木	SD-100	9.7	4.9	2.4
144	144		小形加工木	〃	12.7	4.6	3.0
149	149		小形加工木	〃	14.2	4.0	2.0
挿図 115-47	047	56	小形加工木	〃	14.8	6.2	4.1
103	103		小形加工木	〃	22.6	6.7	1.1
89	089	56	小形加工木	〃	30.3	4.5	0.8
151	151		小形加工木	〃	7.1	3.9	0.8
94	094	56	小形加工木	〃	37.2	3.8	1.6
148	148		小形加工木	〃	15.3	6.4	2.2
146	146		小形加工木	SD- 50	23.3	5.3	1.4
150	150		小形加工木	SD-100	13.2	6.0	1.3
109	109		小形加工木	〃	11.7	6.5	1.2
97	097	56	小形加工木	〃	9.1	3.7	0.9
181	181		小形加工木	〃	15.9	6.4	5.2
106	106		小形加工木	〃	25.2	6.8	5.2
190	190		小形加工木	SD- 50	26.0	8.7	3.6
145	145		小形加工木	SD-100	12.7	4.6	4.5
108	108		小形加工木	〃	9.1	8.6	1.1
挿図 116-214	214	57	小形棒材	〃	87.5	2.8	——
215	215	57	小形棒材	〃	87.7	2.7	2.3
82	082		小形棒材	SD- 50	69.5	2.8	2.5
219	219	57	小形棒材	SD-100	76.4	2.6	2.0
217	217	57	小形棒材	〃	72.8	2.1	——
218	218	53	小形棒材	〃	74.9	3.5	——
116	116		小形棒材	SD- 50	55.6	2.8	——
123	123		小形棒材	〃	54.7	2.3	1.9
118	118		小形棒材	〃	46.4	2.3	1.8
122	122		小形棒材	〃	45.8	2.2	2.2
125	125		小形棒材	SD-100	43.8	2.0	2.0
124	124		小形棒材	〃	38.5	3.2	2.1
136	136		小形棒材	〃	21.3	1.9	0.9
137	137		小形棒材	〃	18.8	2.0	1.1
119	119		小形棒材	SD- 50	20.6	1.5	1.1
129	129		小形棒材	SD-100	23.6	1.1	——

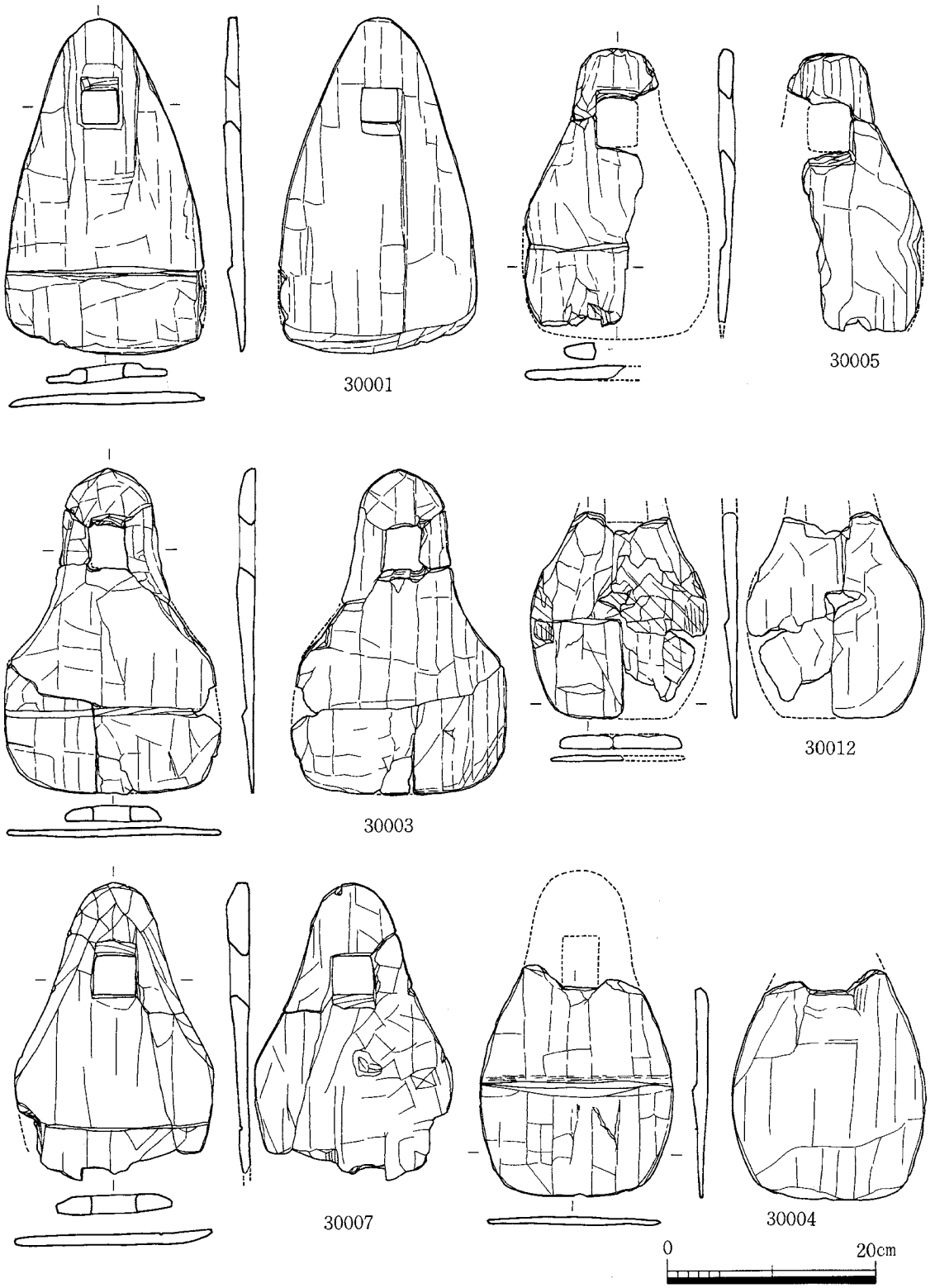
Tab. 25 出土木器一覧表－3

報告書 掲載番号	遺物番号	図版	器種	出土遺構	法量 器長	最大幅(径)	最大厚
挿図 116-133	133		小形棒材	SD-100	26.9	1.9	1.5
128	128		小形棒材	〃	23.6	1.7	1.2
126	126		小形棒材	〃	30.6	2.4	——
220	220	53	織物部材	〃	73.4	2.8	2.3
挿図 117-112	112		小形棒材	〃	47.4	2.2	2.0
120	120		小形棒材	SD- 50	44.0	2.5	1.9
113	113		小形棒材	〃	39.1	1.9	1.6
114	114		小形棒材	〃	36.7	3.1	2.5
111	111		小形棒材	〃	39.0	1.4	1.2
117	117		小形棒材	〃	35.5	2.1	1.4
204	204		小形棒材	SD-100	32.9	2.3	1.3
237	237		小形棒材	〃	24.8	2.1	1.9
134	134		小形棒材	〃	12.4	2.3	1.1
121	121		小形棒材	SD- 50	27.5	1.4	——
130	130		小形棒材	SD-100	29.3	1.2	——
135	135		小形棒材	〃	3.08	2.0	1.1
132	132		小形棒材	〃	30.4	2.4	2.1
115	115		小形棒材	SD- 50	31.7	2.6	1.9
127	127		小形棒材	SD-100	35.8	2.5	——
131	131		小形棒材	〃	15.7	1.6	1.5
138	138		小形棒材	〃	16.5	2.0	1.0
172	172		柄	〃	17.2	3.2	——
208	208		柄	〃	3.6	2.9	——
154	154		柄	〃	9.2	4.1	——
153	153		柄	〃	11.4	4.2	——
159	159		柄	〃	42.8	3.3	——
158	158		柄	〃	39.1	3.7	——
152	152		柄	〃	14.9	3.3	——
189	189		板材	SD- 50	34.3	6.2	2.4
177	177		板材	SD-100	19.4	8.6	2.9
230	230		板材	〃	20.8	6.3	1.4
192	192		板材	〃	21.7	9.8	2.6
206	206		板材	〃	45.3	11.8	2.9
210	210		朱塗り棒状木器	〃	23.9	2.6	2.0
挿図 118-184	184		角材	SD- 50	59.5	7.2	3.1
186	186		角材	SD-100	36.3	6.5	3.0
187	187		角材	〃	26.5	7.3	2.8
185	185		角材	〃	65.6	6.9	3.1
179	179		板材	〃	43.0+22.9	12.1	1.9
231	231		板材	〃	42.9+16.9	6.1	2.4
196	196		板材	〃	44.2	10.5	3.5
160	160		板材	〃	43.1	12.5	1.2
101	101		角材	SD- 50	40.8	3.1	1.0
228	228		梯子	SD-100	21.7	14.8	10.2
178	178		板材	〃	66.3	12.5	4.8
挿図 119- 34	034	55	板材	SD- 50	32.8	20.7	2.7
200	200		板材	SD-100	35.8	15.0	2.1
174	174		板材	〃	29.3	20.2	3.2

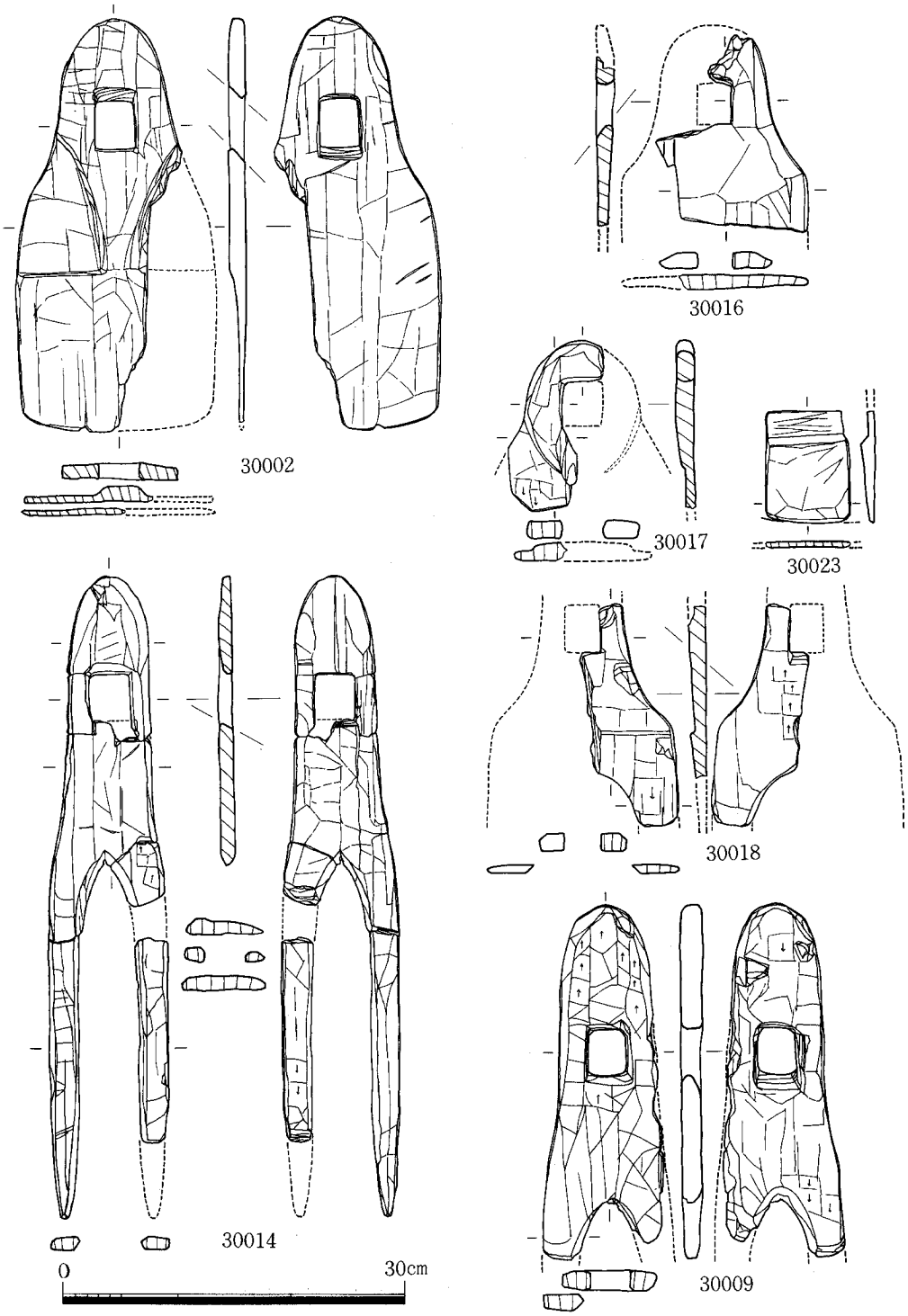
Tab. 26 出土木器一覧表－4

報告書 掲載番号	遺物番号	図版	器種	出土遺構	法量 器長	法量 最大幅(径)	法量 最大厚
挿図 119-33	033	55	板材	SD- 50	39.1	19.7	2.8
107	107		板材	SD-100	12.2	9.0	0.9
229	229		板材	〃	19.8	19.6	2.1
110	110		板材	〃	19.9	11.7	0.8
挿図 120-212	212	57	杭	〃	69.9	5.8	——
180	180		杭	〃	56.4	5.7	——
211	211	57	杭	〃	61.7	4.8	——
213	213	57	杭	〃	58.6	5.3	——
156	156		杭	〃	53.6	3.6	——
173	173		杭	〃	12.3	3.0	——
161	161		杭	SD- 50	30.2+20.7	3.8	3.1
140	140		杭	〃	20.8	4.0	2.4
157	157		杭	SD-100	43.2	3.6	——
171	171		杭	〃	21.4	3.8	——
165	165		杭	〃	47.9	5.4	——
170	170		杭	〃	27.8	3.8	——
166	166		杭	〃	47.9	5.5	——
169	169		杭	〃	33.8	3.4	——
167	167		杭	〃	36.3	6.2	——
168	168		杭	〃	35.9	5.5	——
191	191		杭	〃	27.7	5.7	——
挿図 121-202	202		柱材	〃	55.1	8.3	——
198	198		柱材	〃	40.4	8.7	6.3
201	201		柱材	〃	24.3	9.8	7.4
193	193		柱材	〃	31.5	9.4	7.2
197	197		柱材	SD- 50	31.2	10.8	8.7
203	203		角材	SD-100	33.6	4.9	4.6
155	155		角材	〃	44.0	3.0	1.6
199	199		板材	〃	24.6	16.6	5.7
233	233		角材	〃	32.0	3.8	3.7
183	183		角材	SD- 50	30.9	7.5	2.7
216	216	57	棒材	SD-100	82.0	2.5	——
83	083		板材	SD- 50	66.5	3.9	1.2
221	221	57	角材	SD-100	63.5	6.1	4.5
227	227	57	板材	〃	65.3	10.3	1.7
挿図 122-163	163		角材	〃	274.1	5.3	3.9
164	164		角材	〃	191.9	4.3	4.1
222	222	53	板材	〃	143.9	22.9	9.5
225	225	53	棒材	〃	220.3	3.7	——
207	207		棒材	SD- 50	30.4	1.8	——
挿図 123-223	223	53	板材	SD-100	186.7+49.7	28.7	10.4
224	224	53	板材	〃	196.4	36.7+35.7	3.4
挿図 124-226	226	53	舟材？	SD- 50	147.4	34.7	4.1
235	235		舟材？	〃	74.9+72.1	26.8	3.2
234	234	53	樋状木製品	〃	101.6	16.1+13.2	高9.5

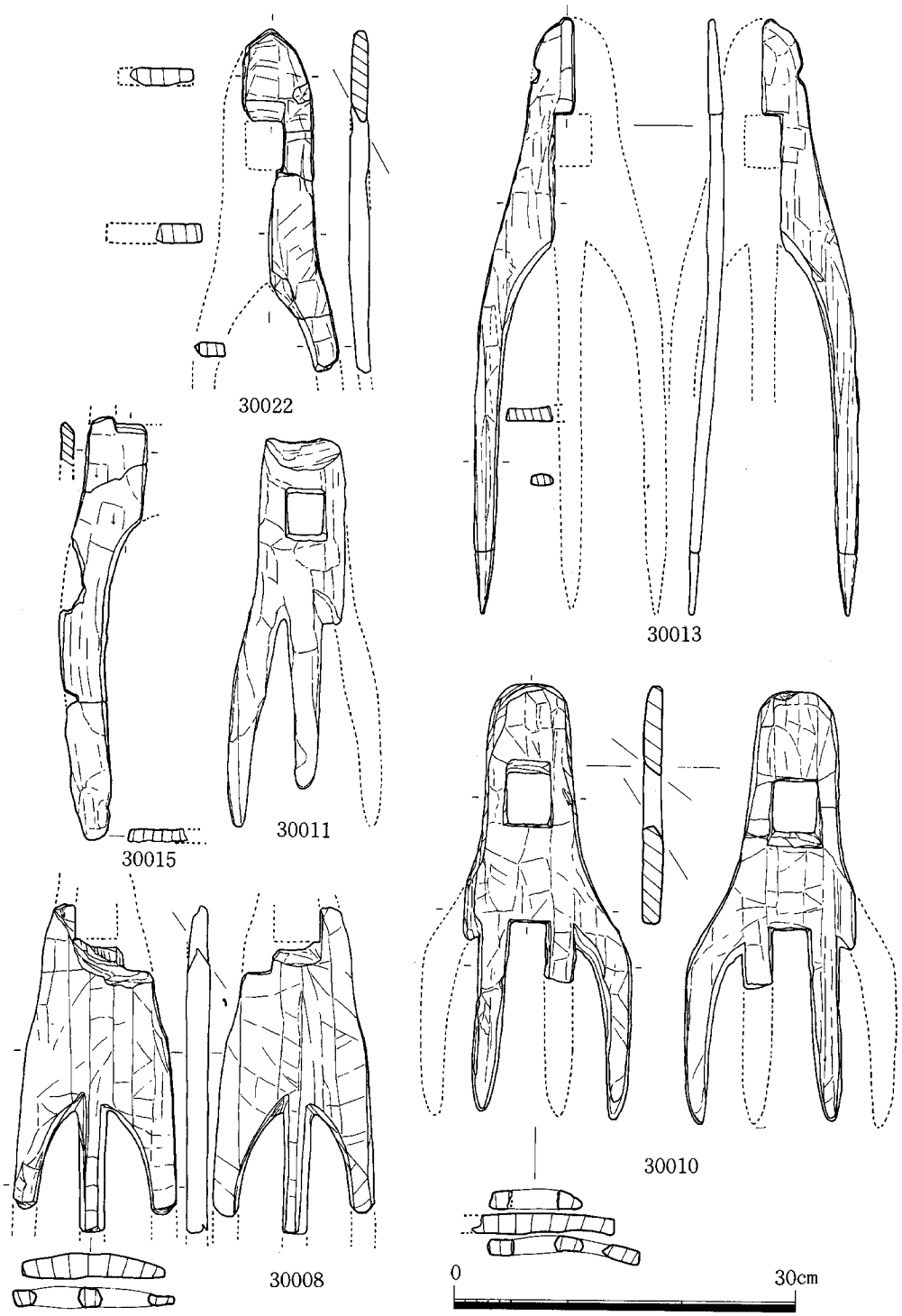
Tab. 27 出土木器一覧表－5



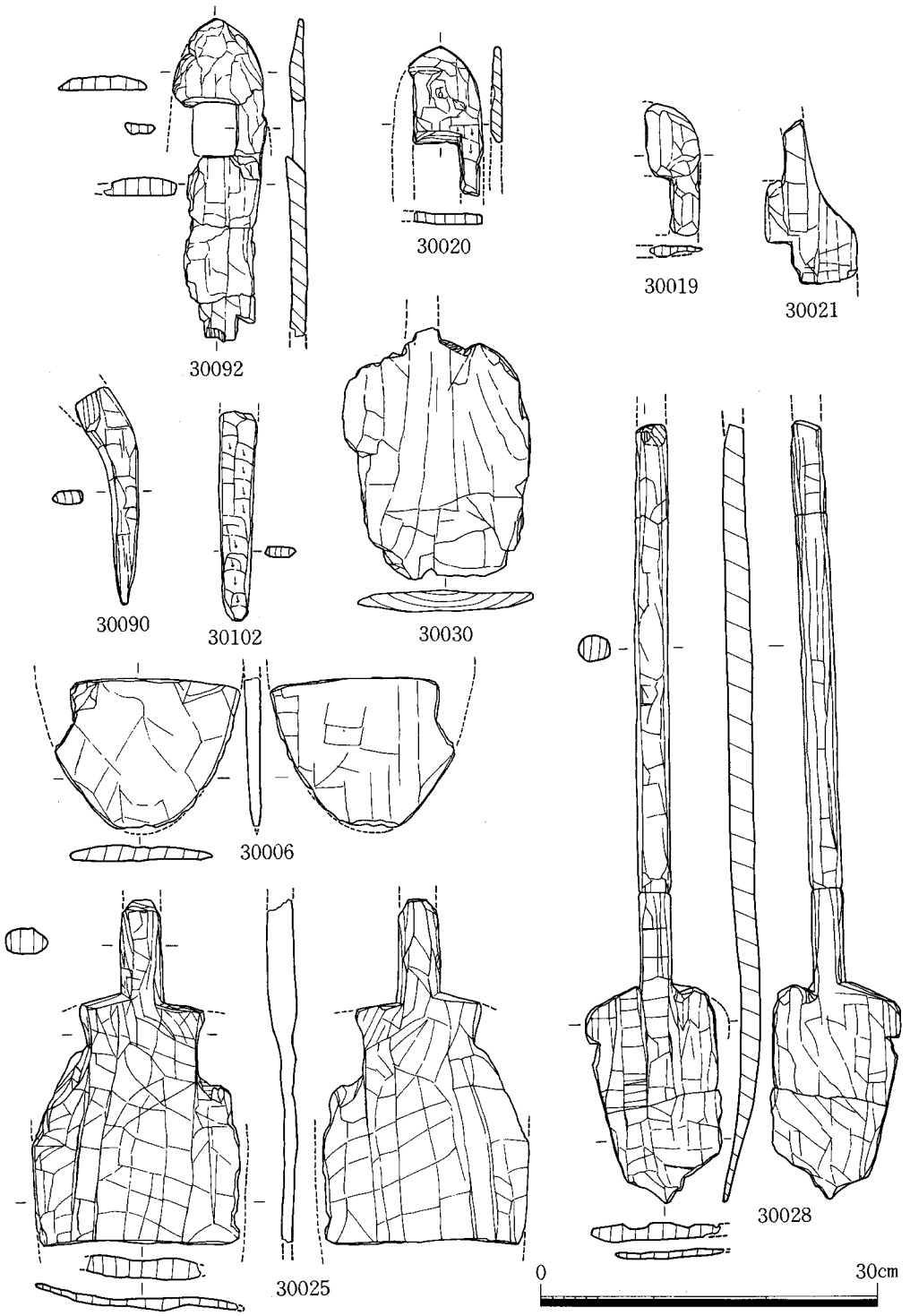
第103図　出土木器実測図－１（縮尺1/6）



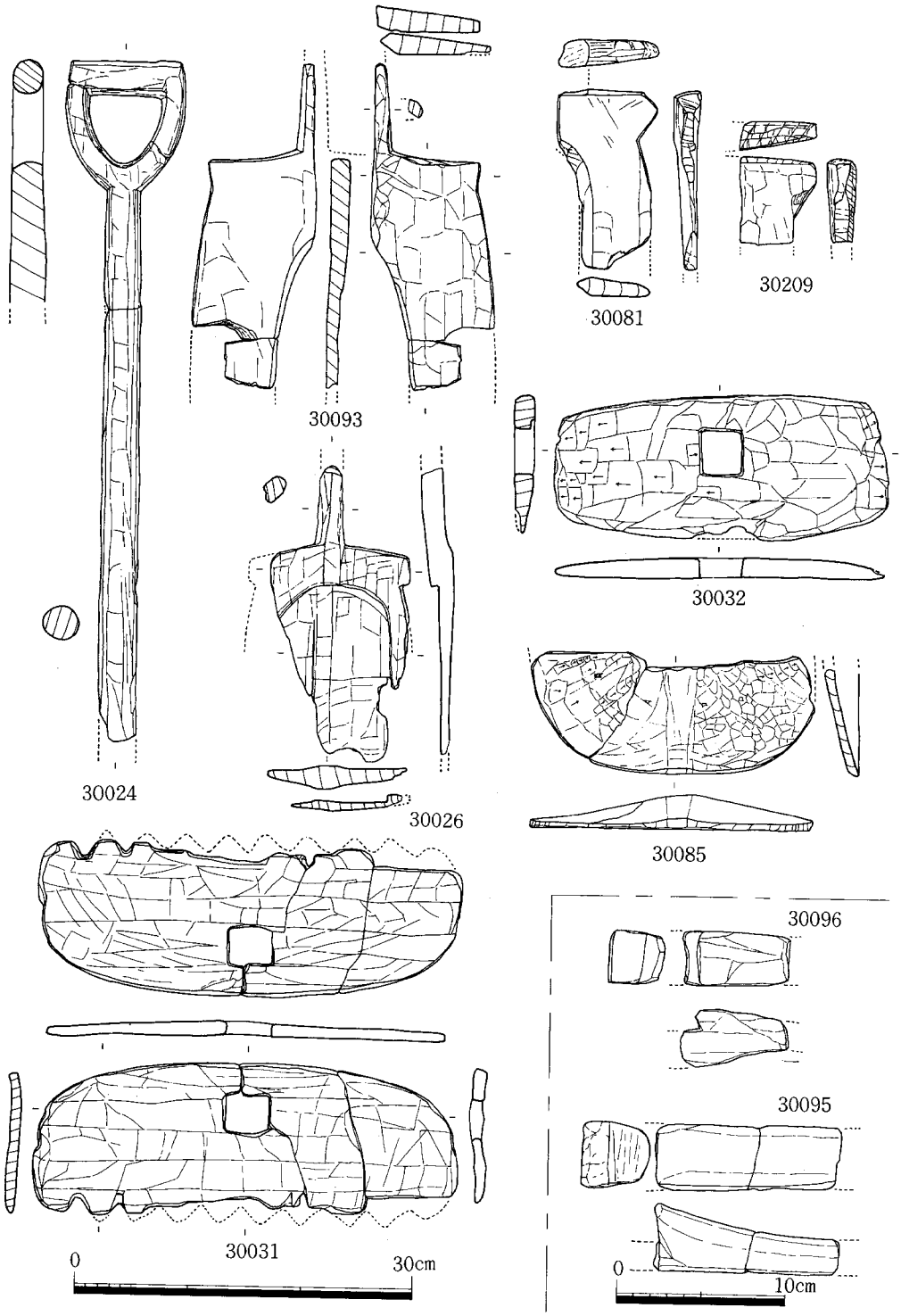
第104図　出土木器実測図－２（縮尺1/6）



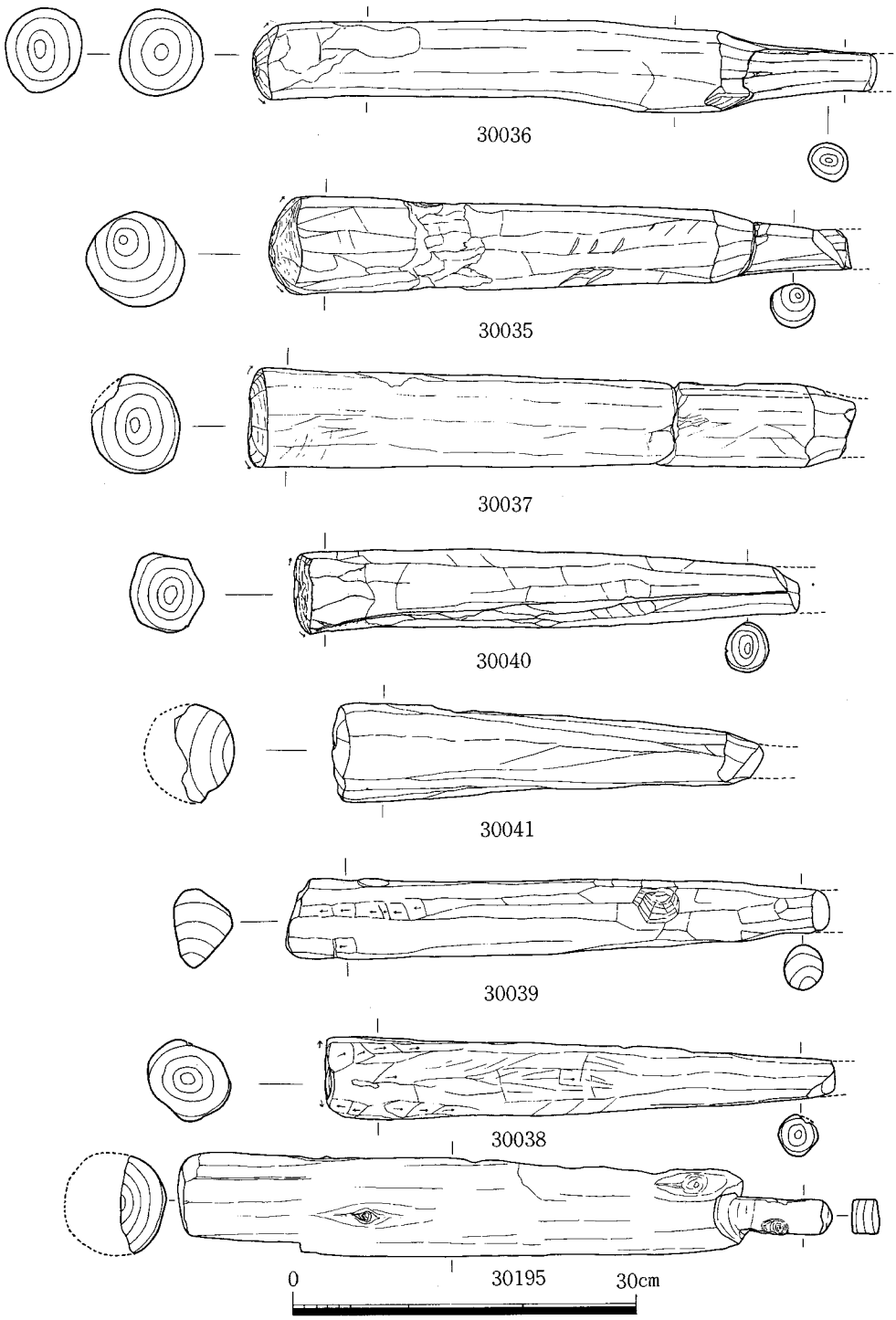
第105図　出土木器実測図－3（縮尺1/6）



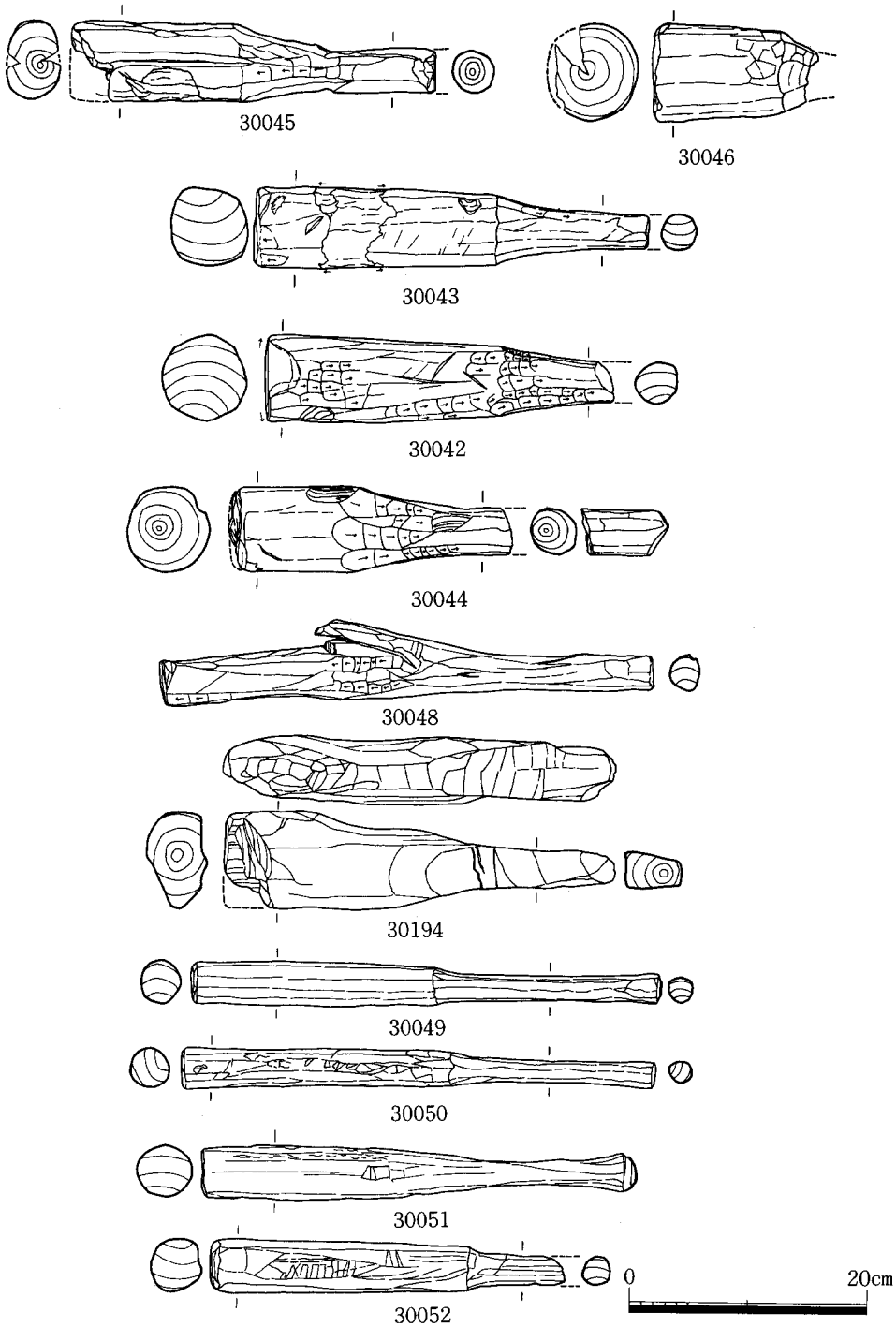
第106図　出土木器実測図－４（縮尺1/6）



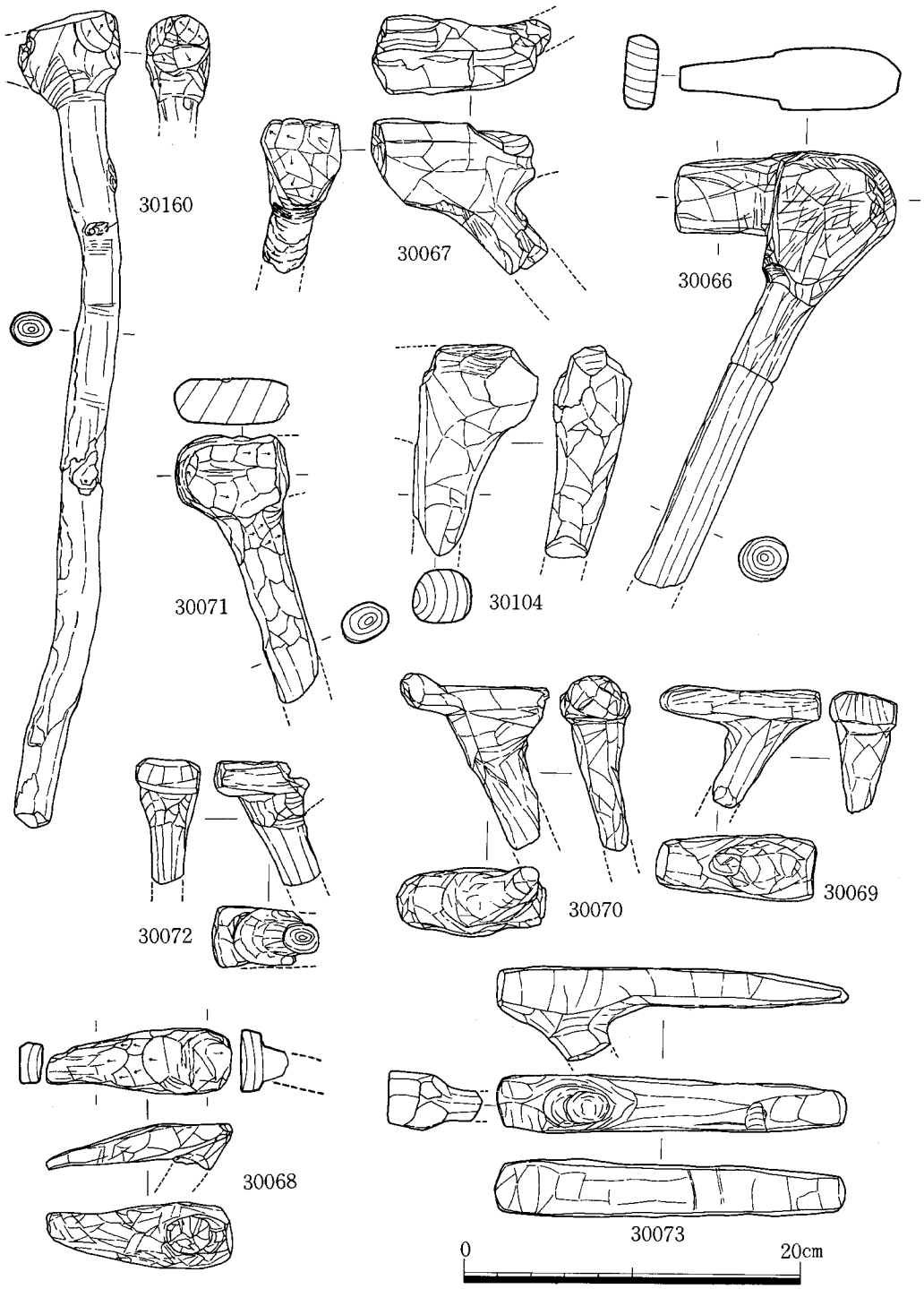
第107図　出土木器実測図－５（縮尺1/4，1/6）



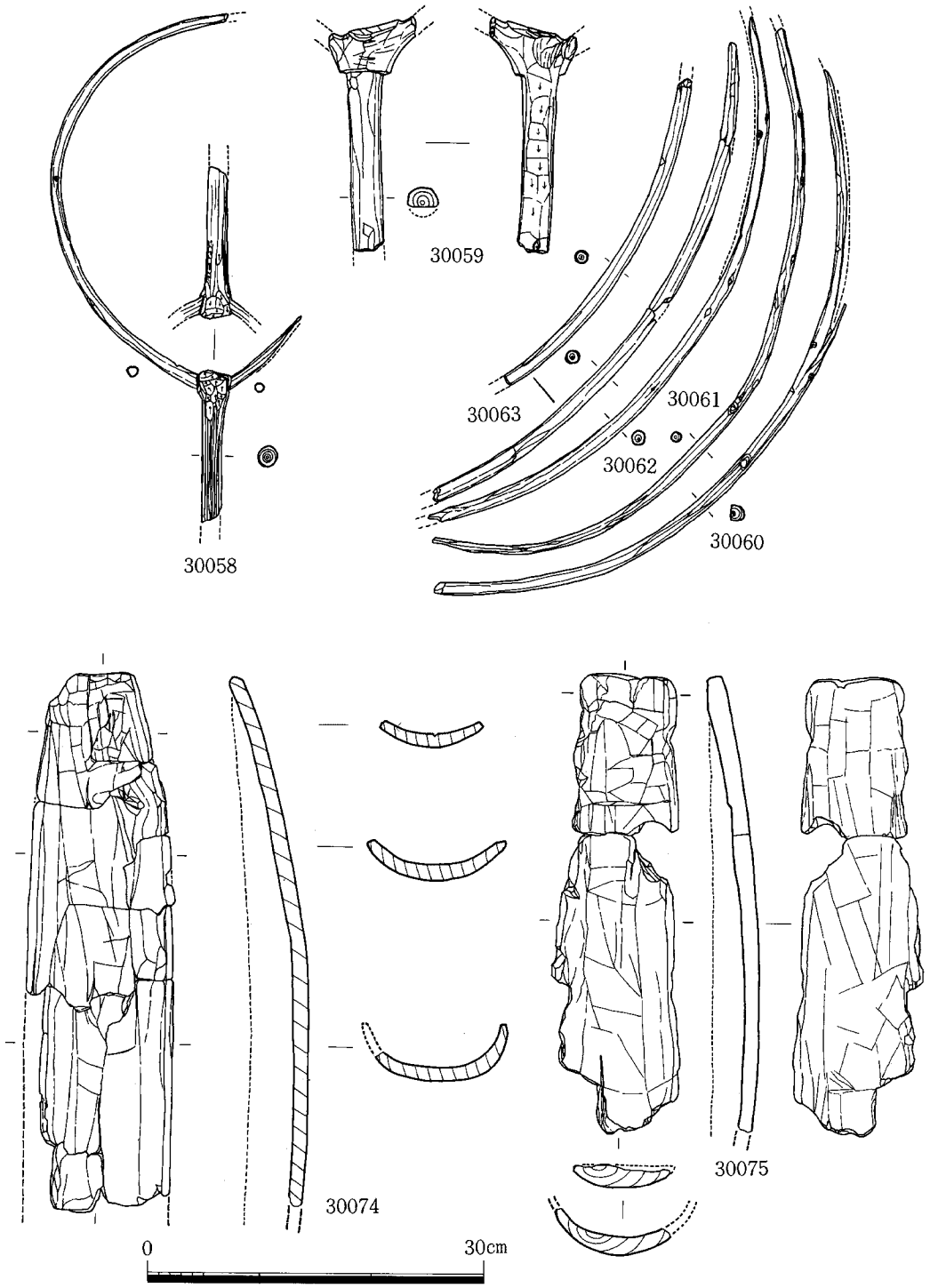
第108図　出土木器実測図－６（縮尺1/6）



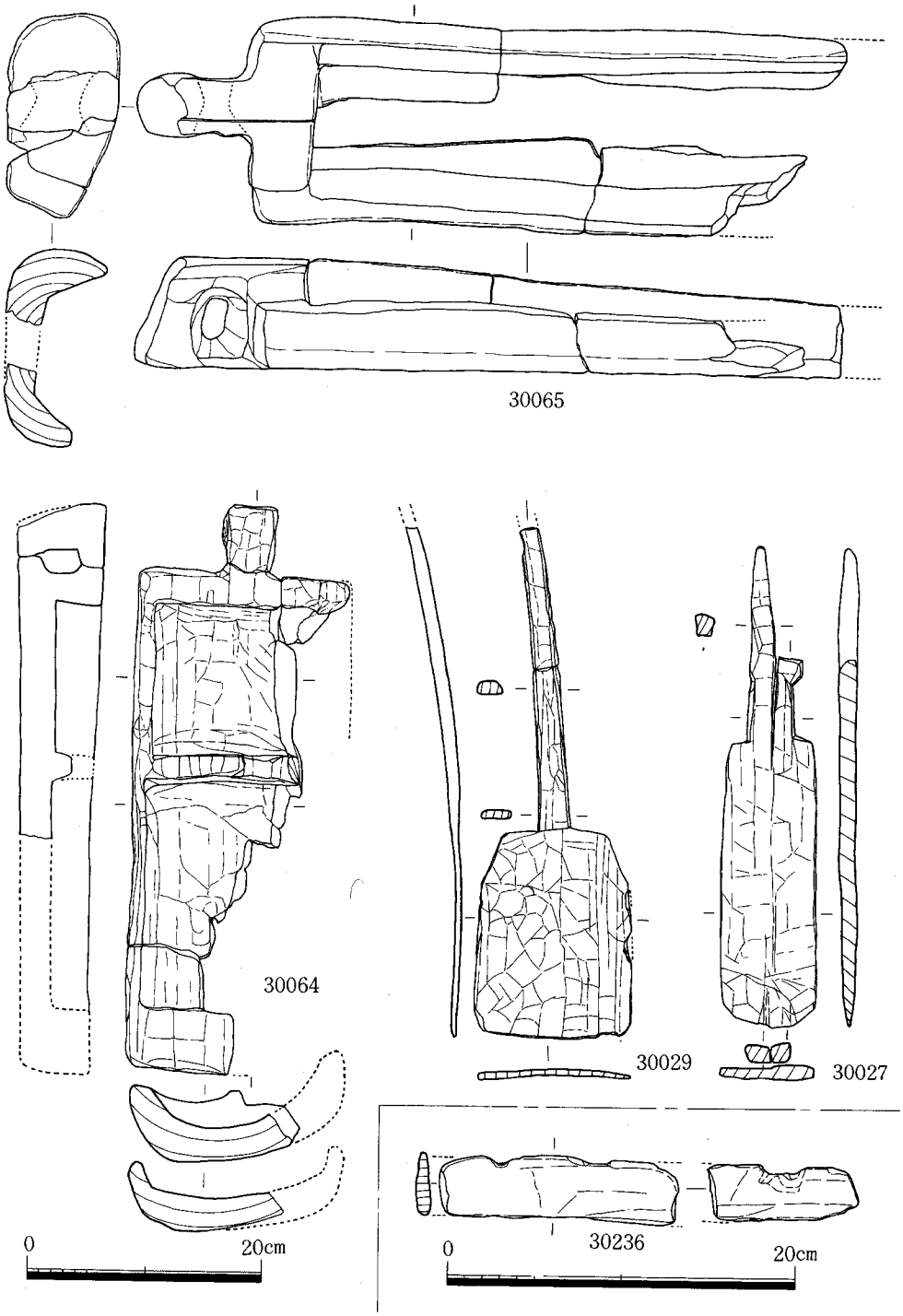
第109図　出土木器実測図－７（縮尺1/6）



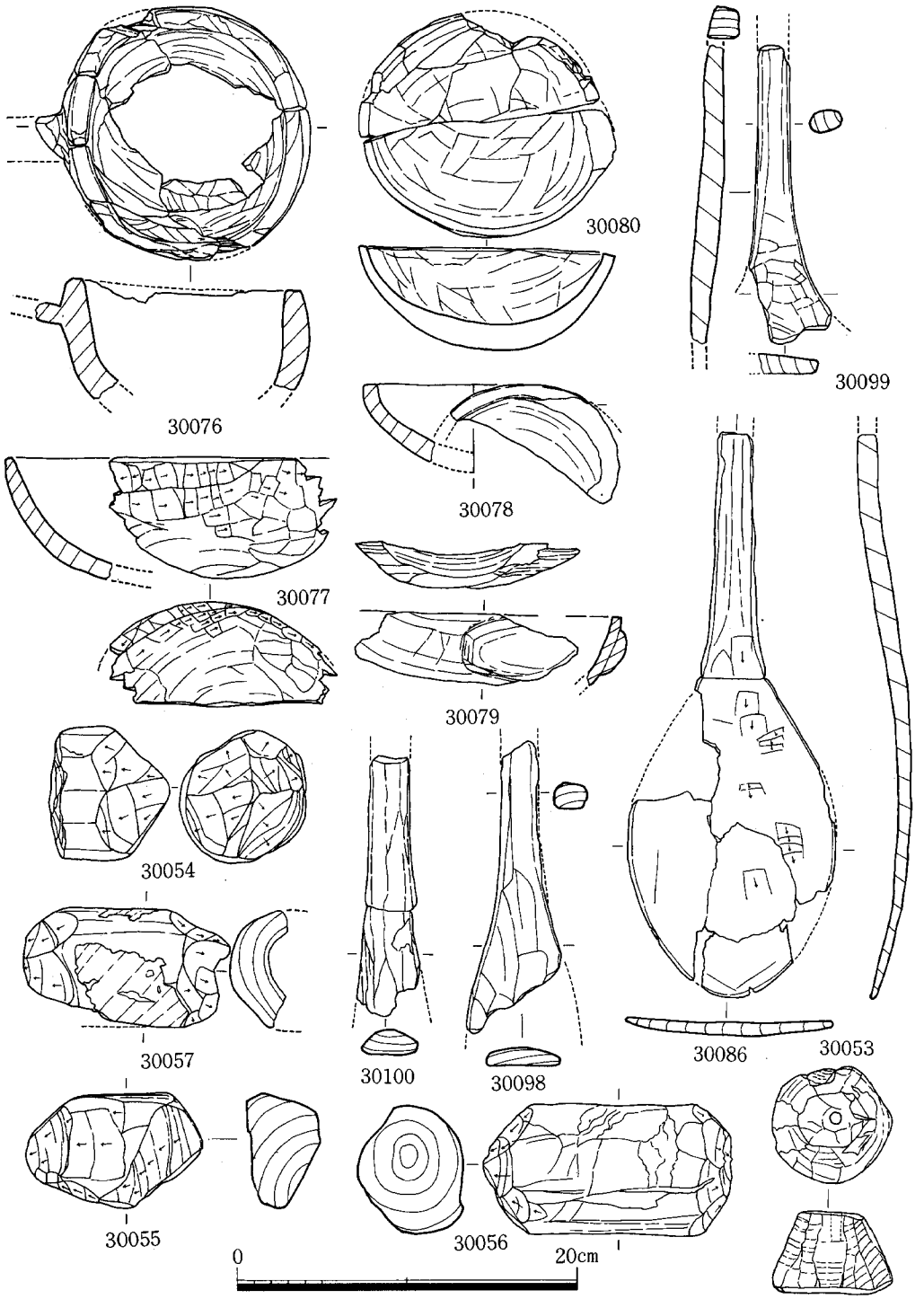
第110図　出土木器実測図－８（縮尺1/4）



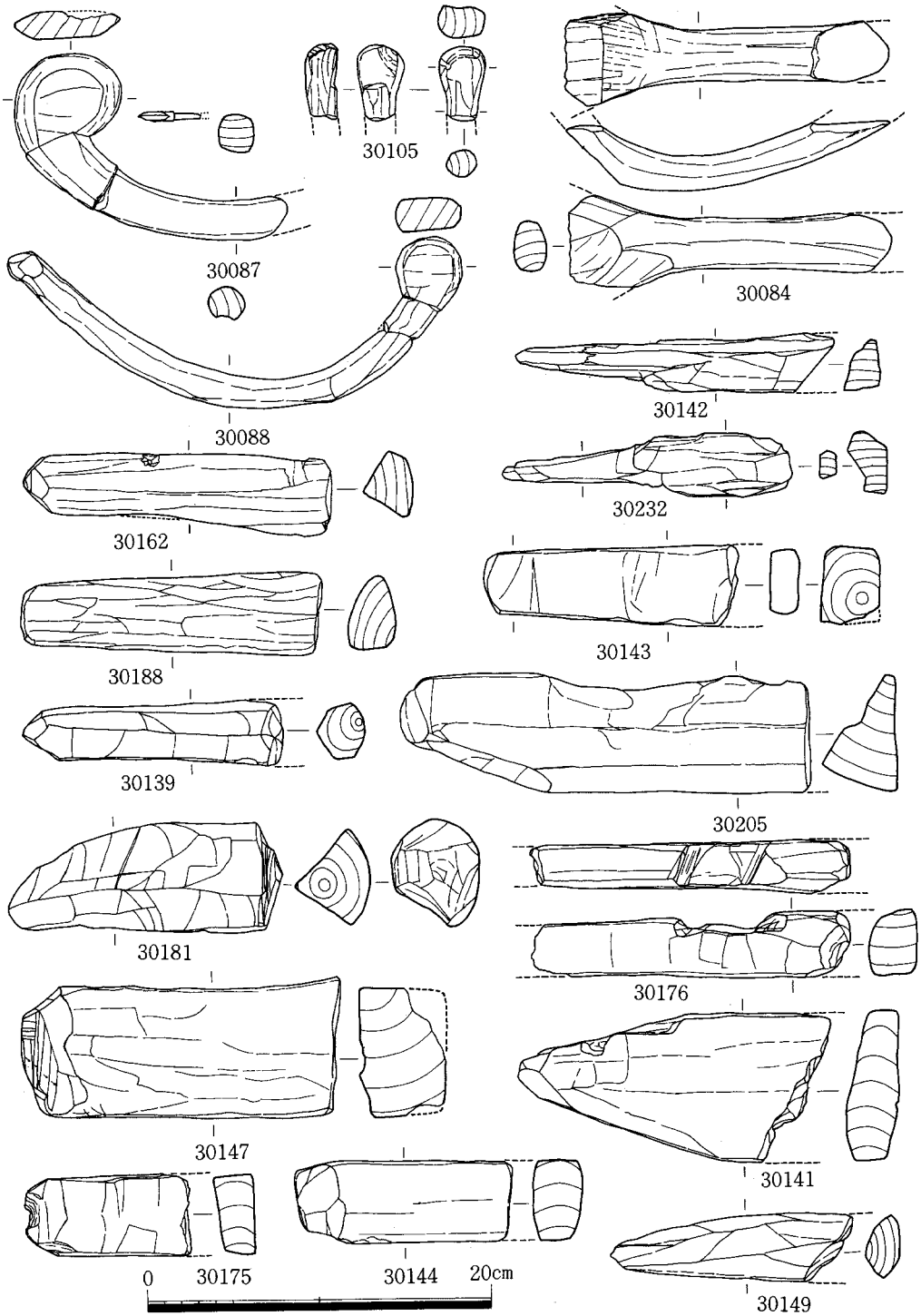
第111図　出土木器実測図－９（縮尺1/6）



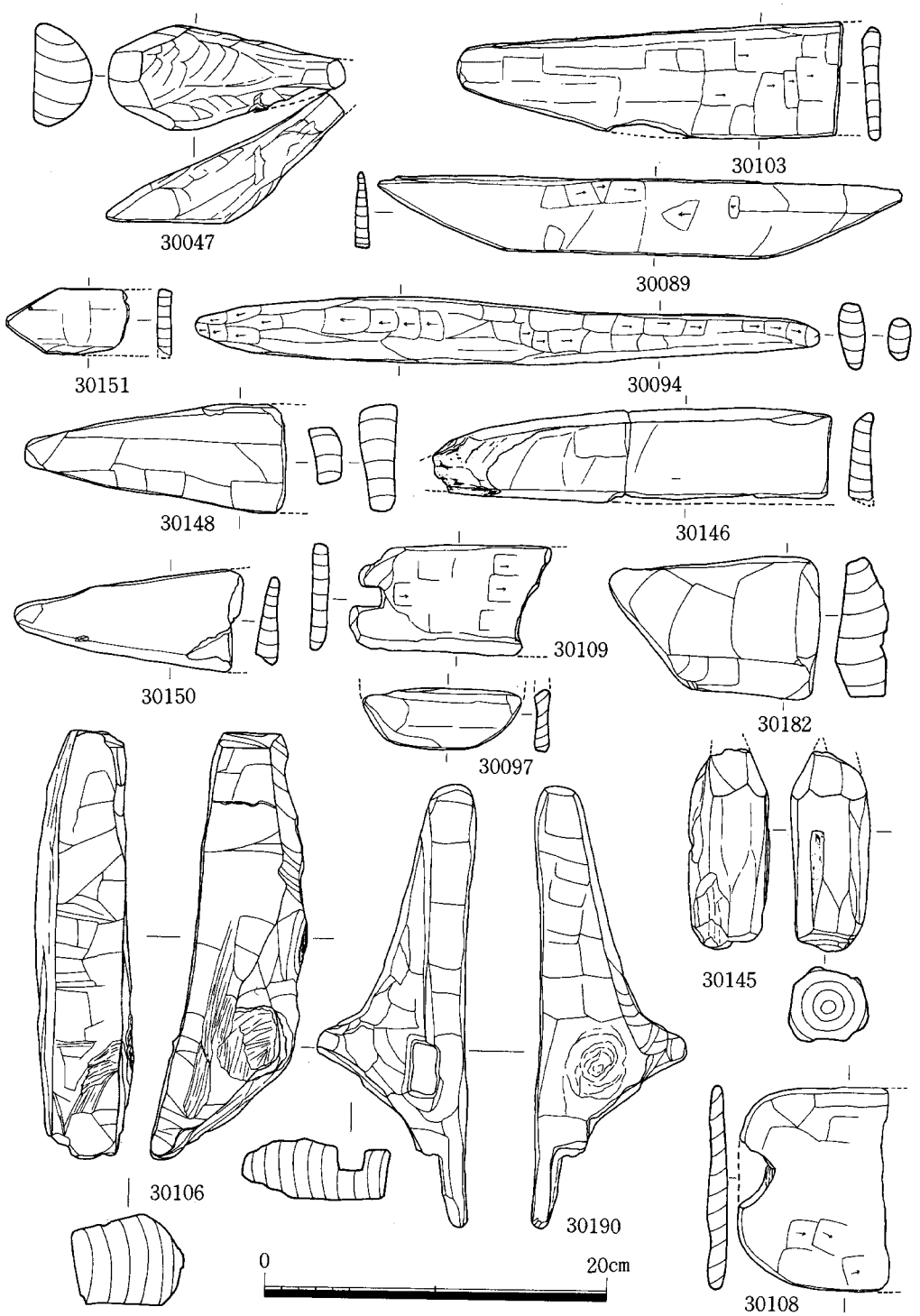
第112図　出土木器実測図－10（縮尺1/4，1/6）



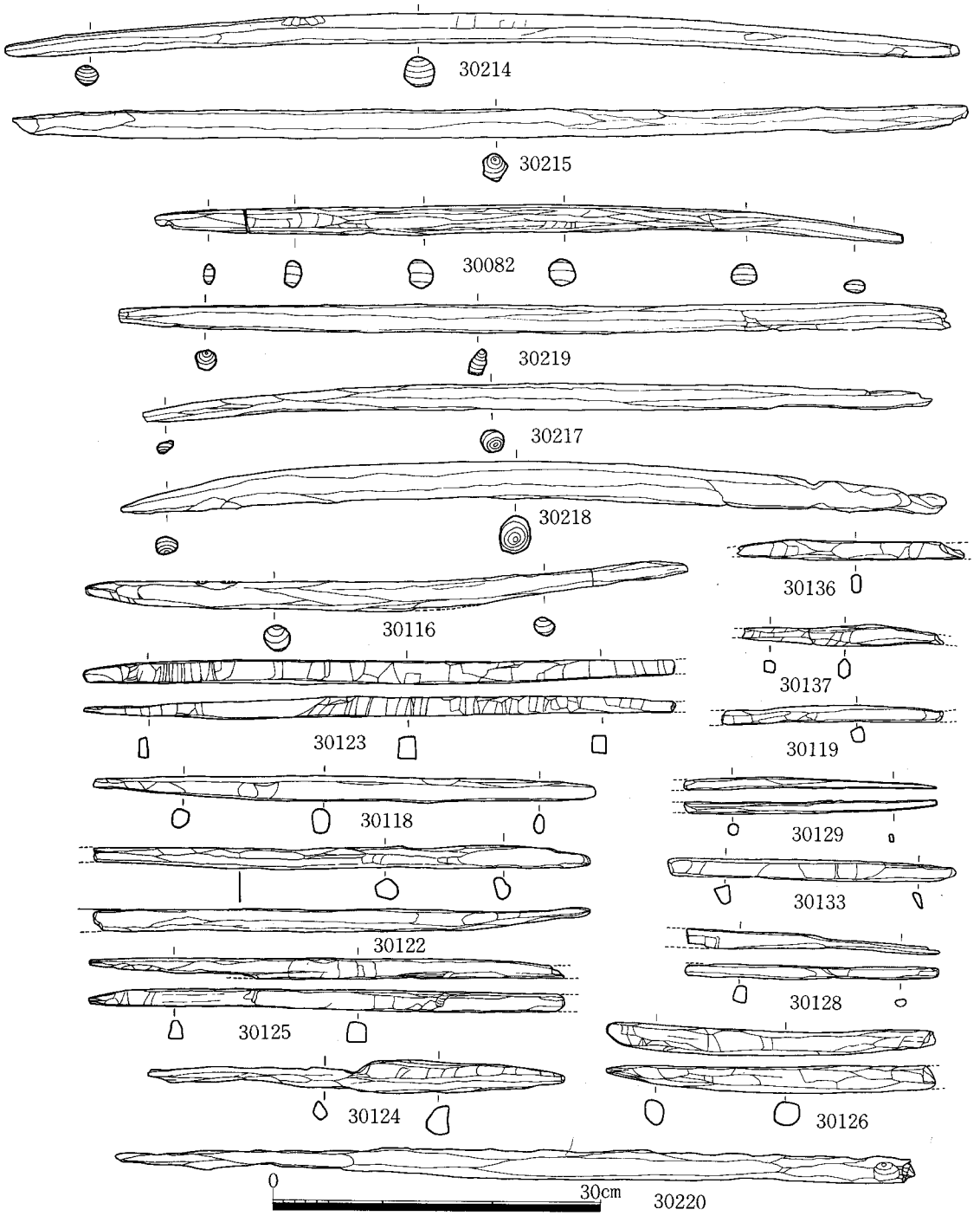
第113図　出土木器実測図－11（縮尺1/4）



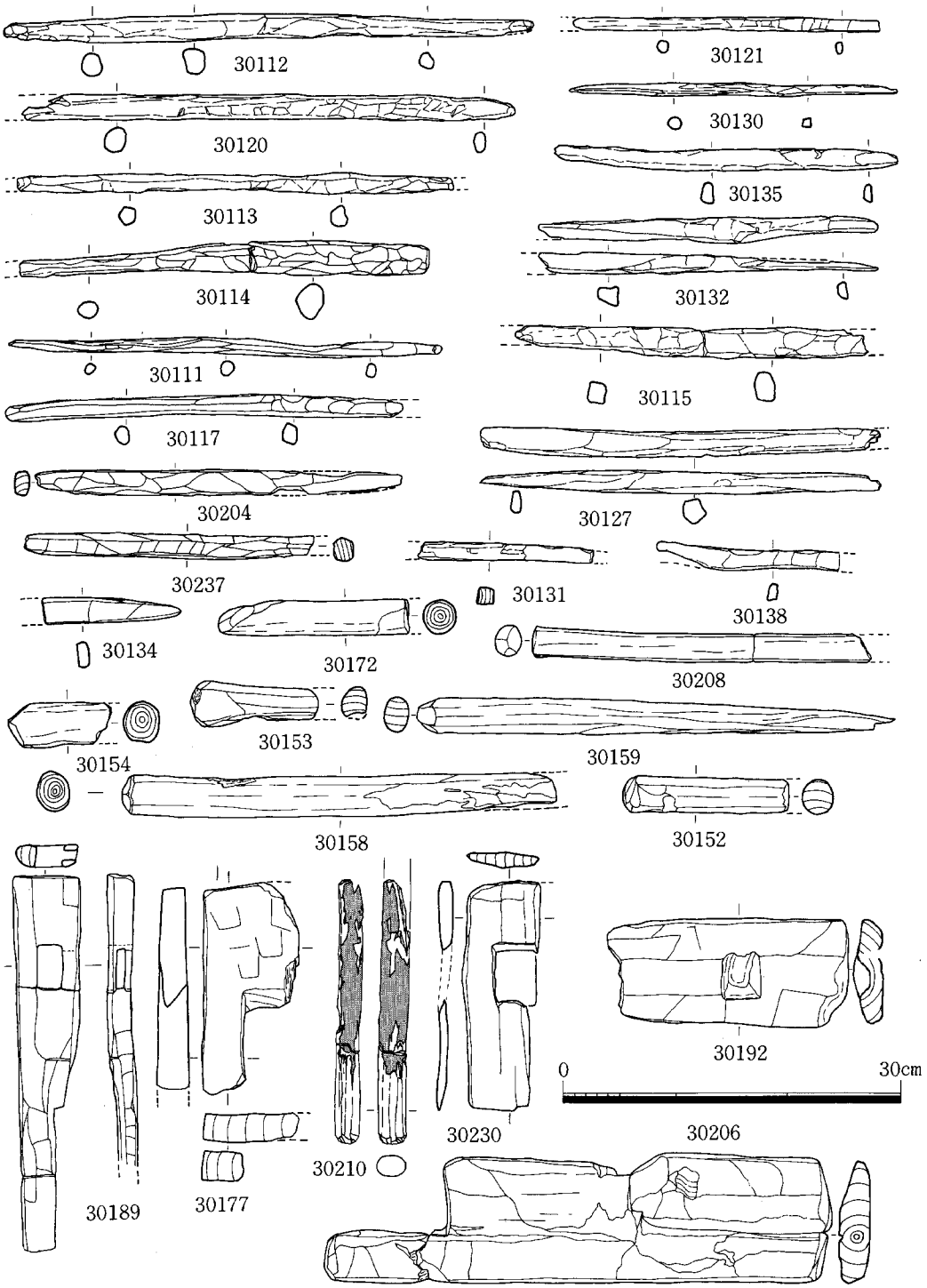
第114図　出土木器実測図－12（縮尺1/4）



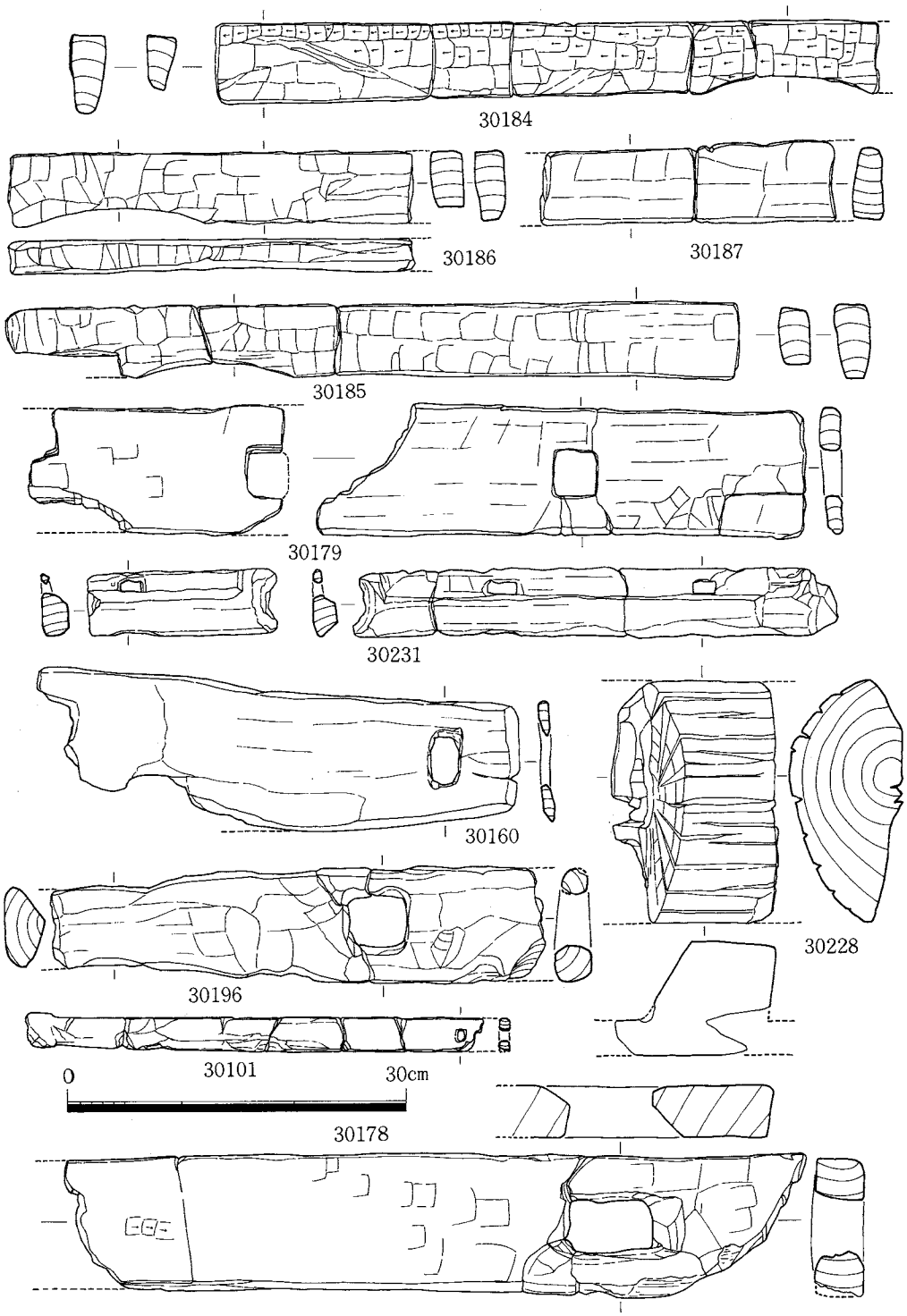
第115図　出土木器実測図－13（縮尺1/4）



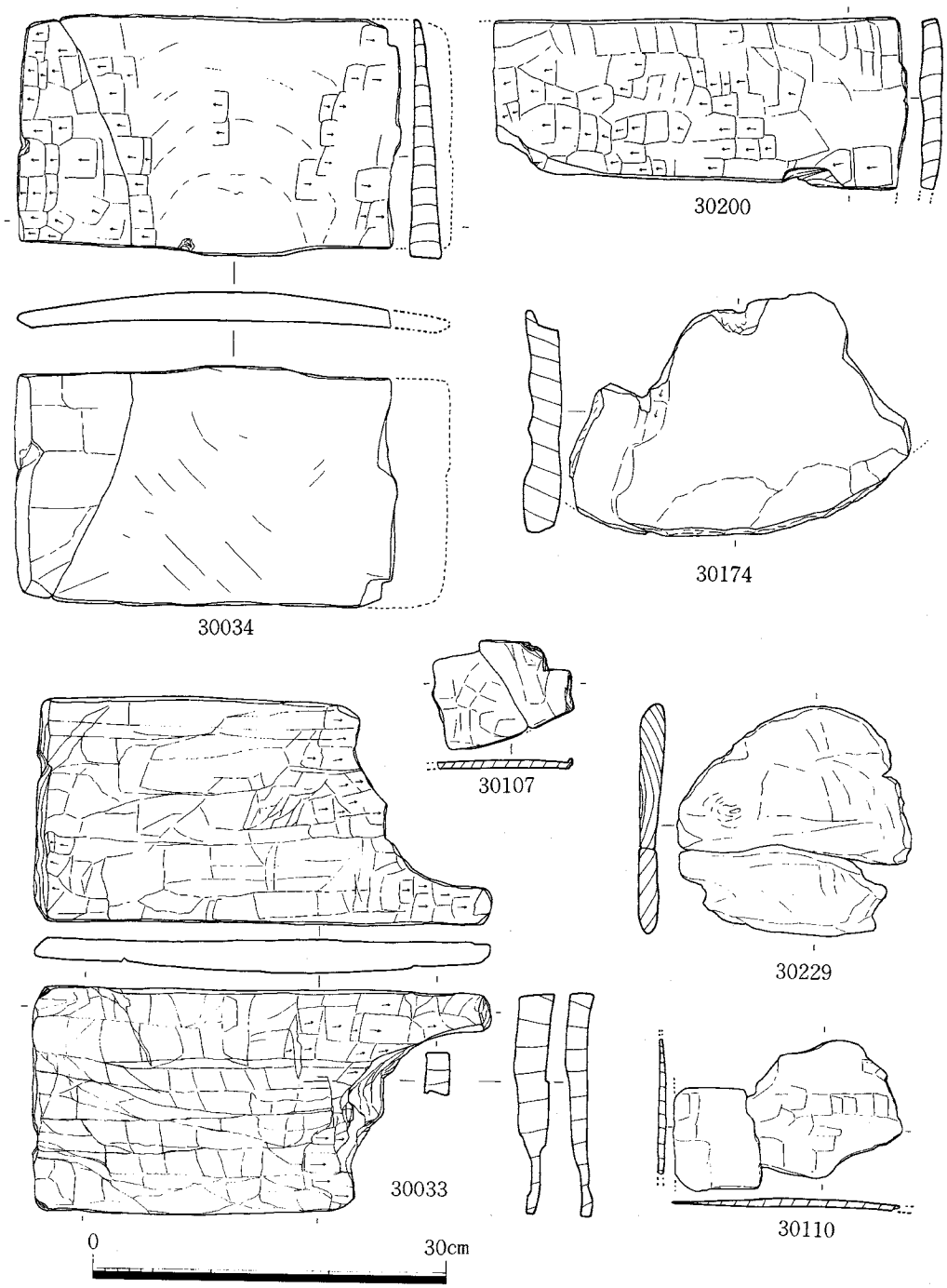
第116図　出土木器実測図－14（縮尺1/6）



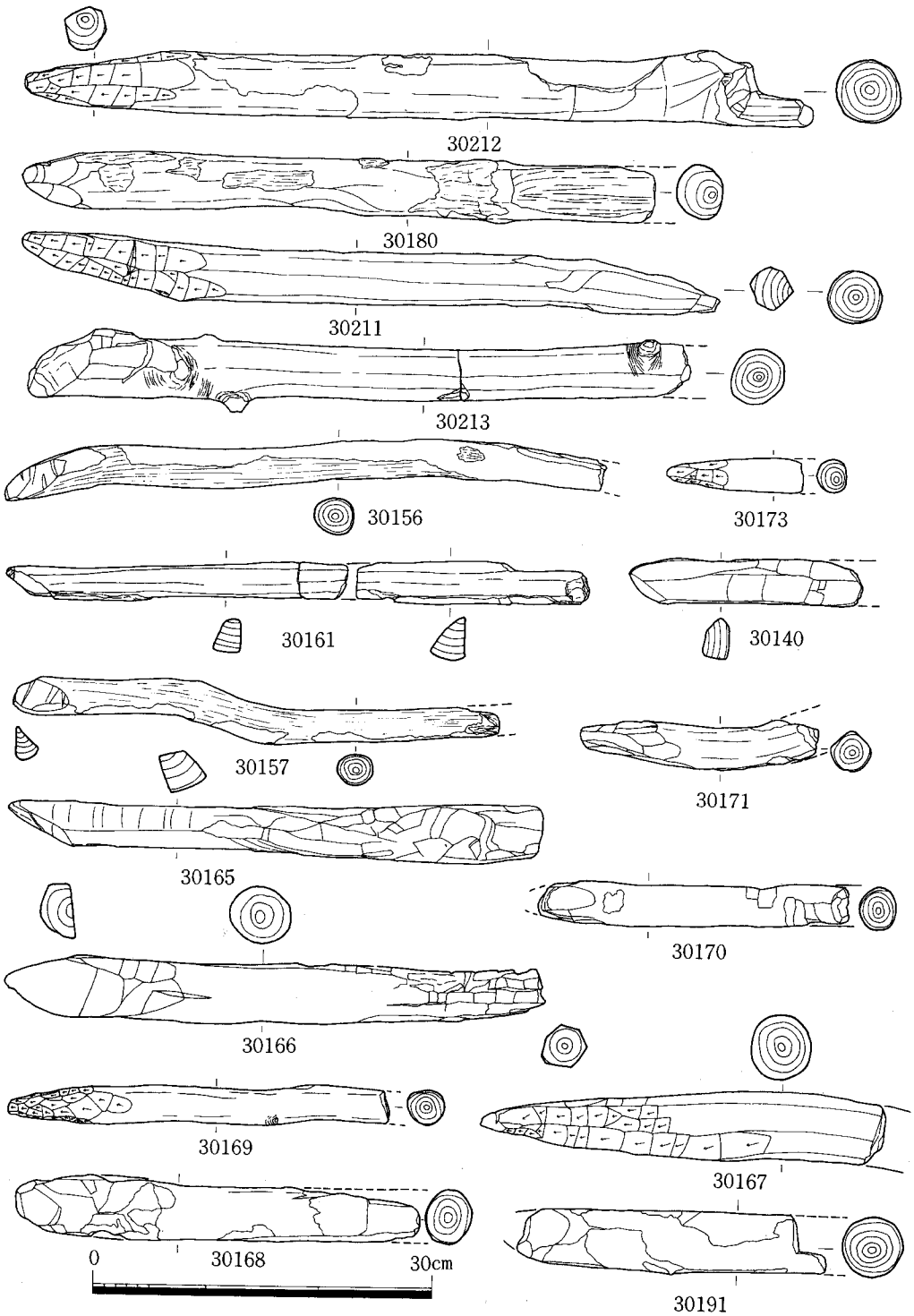
第117図　出土木器実測図－15（縮尺1/6）



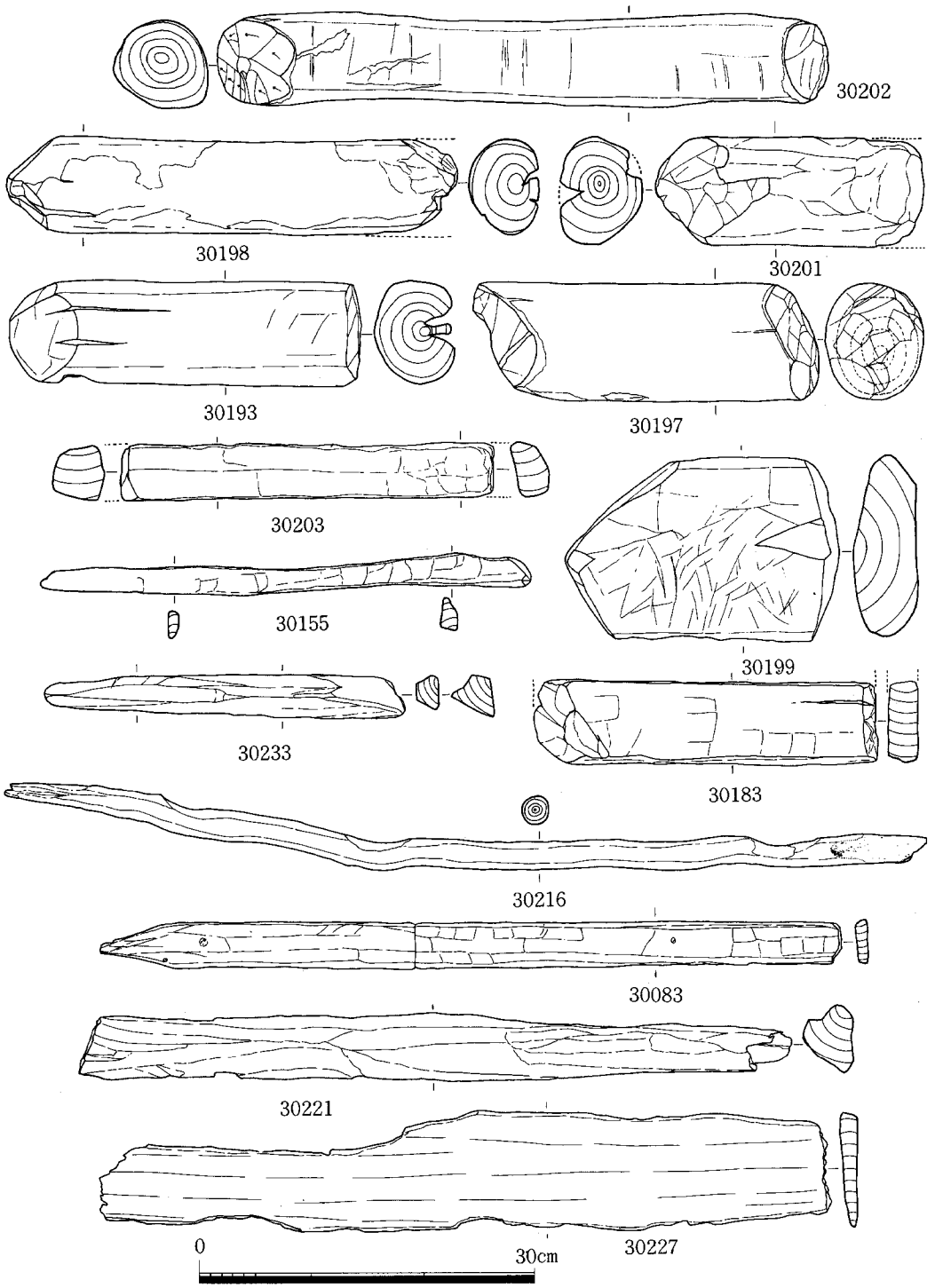
第118図　出土木器実測図－16（縮尺1/6）



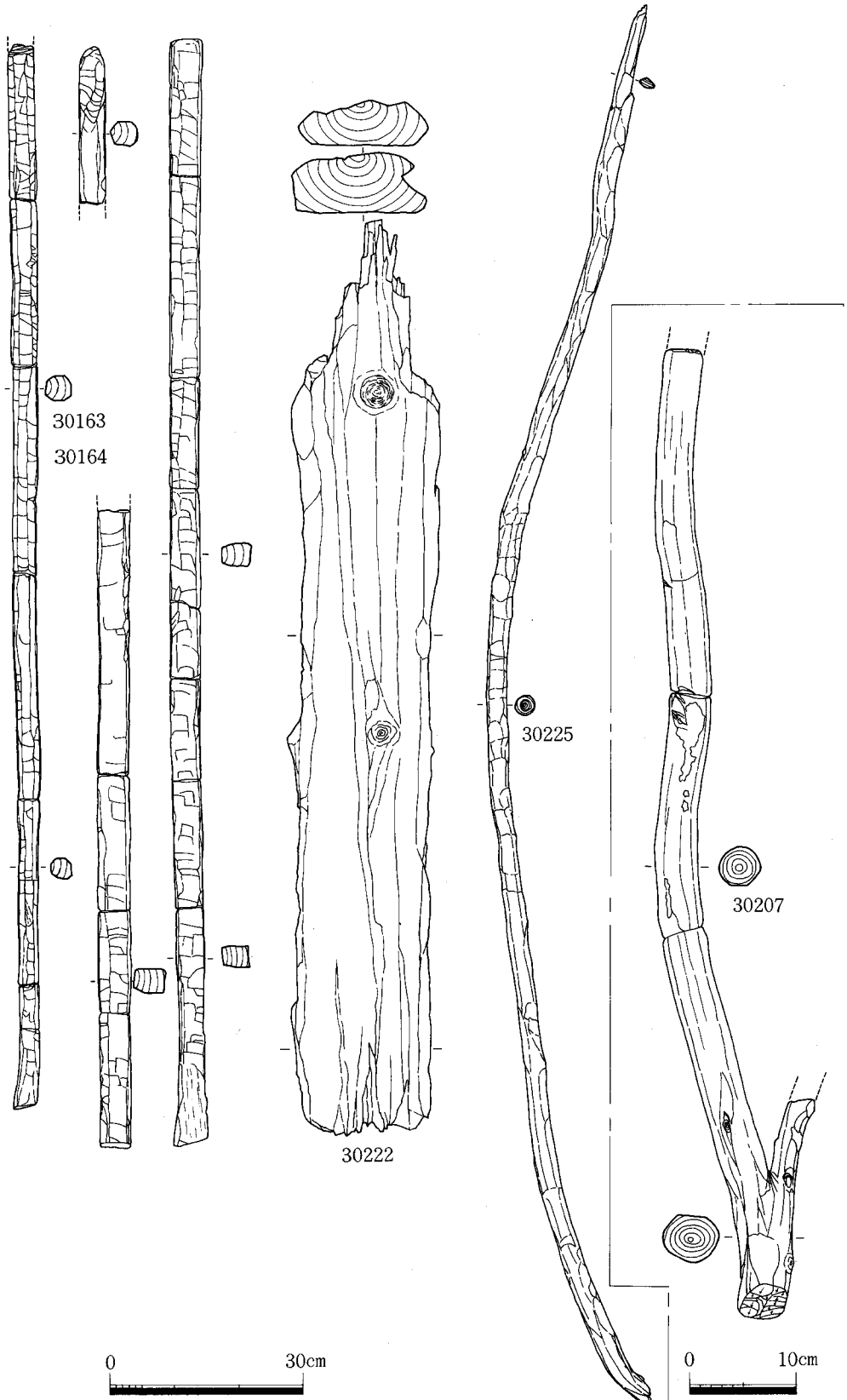
第119図　出土木器実測図－17（縮尺1/6）



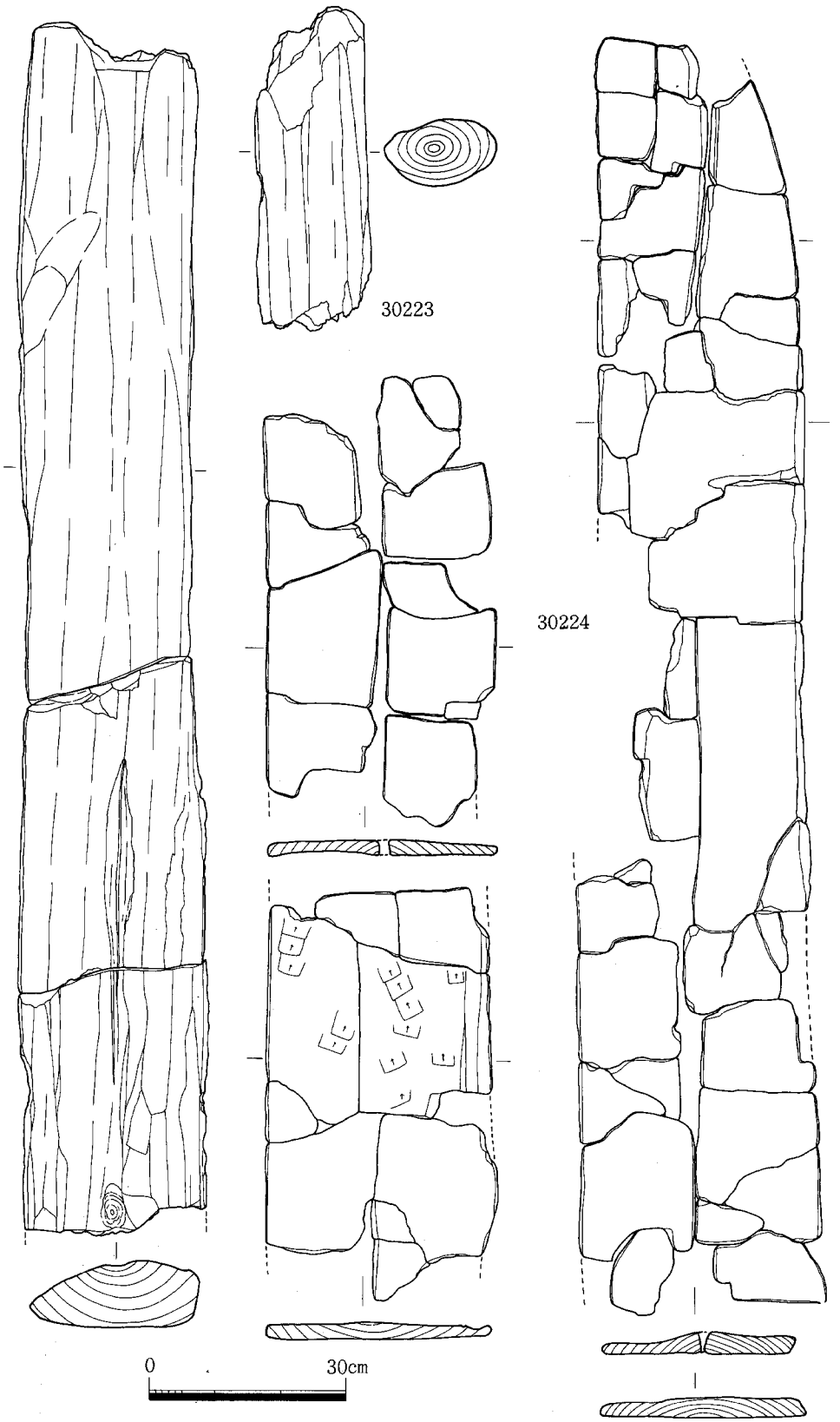
第120図　出土木器実測図－18（縮尺1/6）



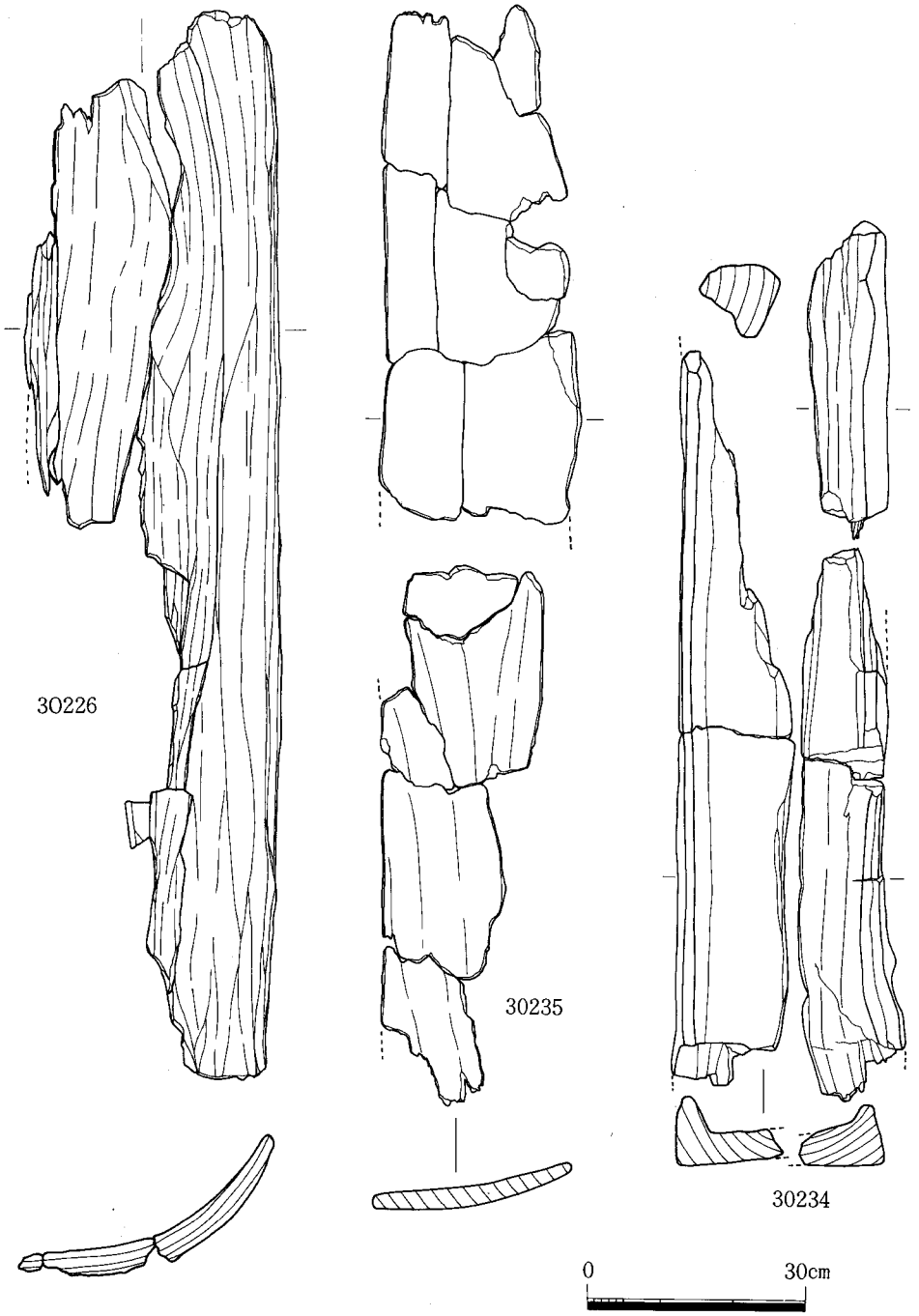
第121図　出土木器実測図－19（縮尺1/6）



第122図　出土木器実測図－20（縮尺1/10）



第123図　出土木器実測図－21（縮尺1/10）



第124図　出土木器実測図－22（縮尺1/10）

第125図　出土竹籠実測図（縮尺1/2）

第IV章　SD－100出土の銅鐸型銅製品について

銅鐸型銅製品はSD－100からの出土で、弥生時代中期の包含層(第VII層)と後期の包含層(第V層)との境に出土した。鐸の中に詰まっていた土は、第VII層の褐色砂層である。第126図に見られるごとく全長13.5cm(鈕高2.4cm、鐸身11.10cm)の小型品である舞は径4.6cmの円形を呈し、裾部も径7.5cmの円形で、接合部の残存部を加えると7.75cmで裾広がりの截頭円錐形を呈する。身は無文で、鰭は無い。鈕は半環状で、舞の端部から0.5cm内に入る部分から始まる。断面形はやや丸みを持った環状を呈し、鈕の上端部3カ所に突起を持つ。この突起は外縁を削り出しによって造り出された物ではなく、鋳造工程によって作り出されたものと考察される。型持孔は身の量面約1/4上部に2カ所ずつ4カ所ある。身の中央部から下端にかけて3カ所の三角形を呈する孔を持つ。しかし、これは鋳造時のものではなく、その後の削り出しによって造りだされたものである。舞と身の外面の一部と内面に赤色顔料が付着している。これは鐸自体に赤色顔料が塗られてあったものか、もしくは丹塗りの土器等の彩色が鐸に付着したものかは判断できない。内面下端には柾目状の痕跡が残る。この柾目状の痕跡がはたして何から付着したものかはさだかではないが、鋳型の痕跡とも考えられる。舞孔は2孔で方形を呈する。舌は出土しなかった。

これを整理すると

1．鈕は半環状を呈し、舞の両端部の0.5cm内側から始まる。

2．身は裾広がりの截頭円錐形を呈する。

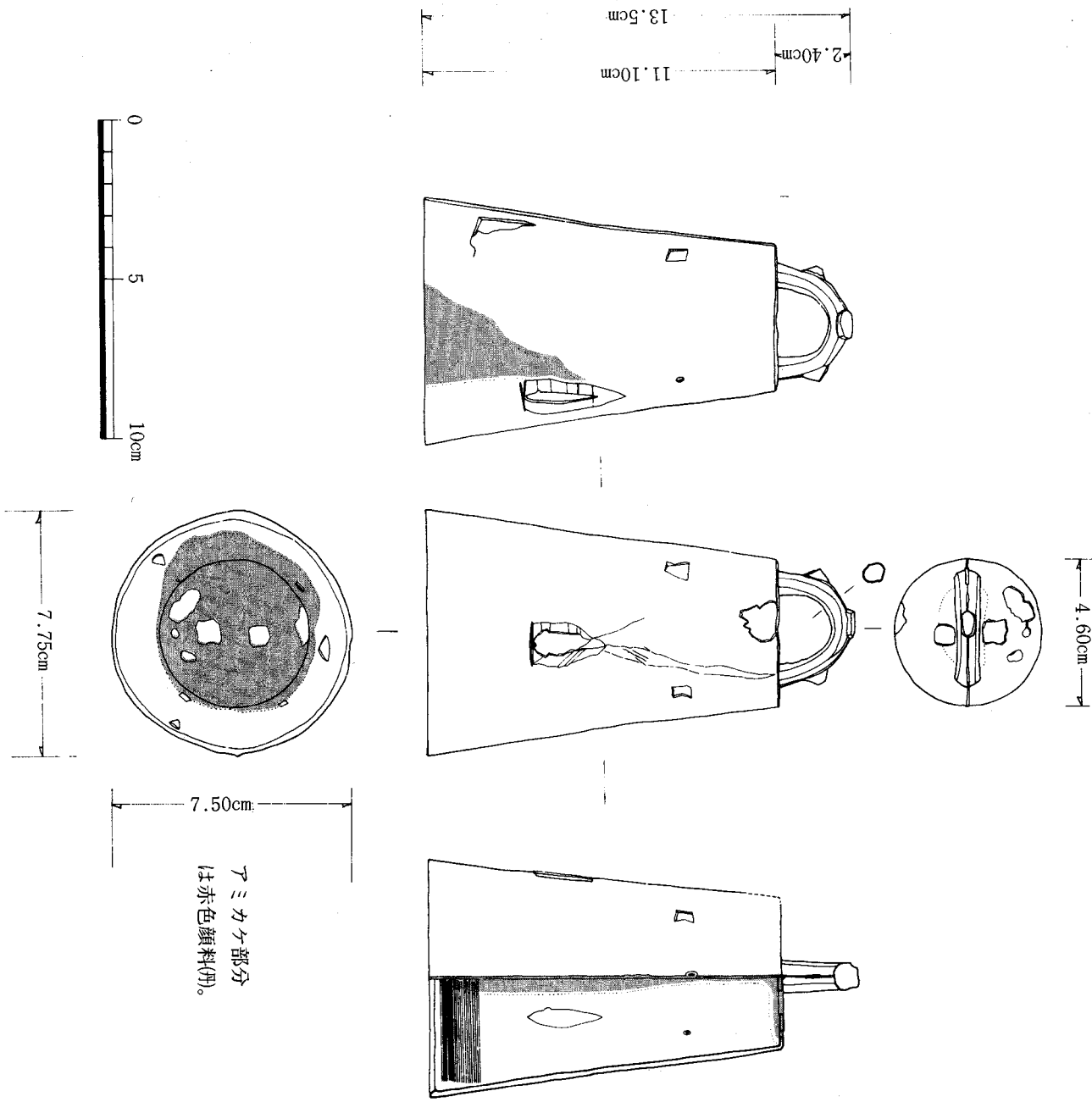
3．型持孔は両面2カ所ずつ4カ所に配されている。

4．総高13.5cm(鈕高2.40cm・鐸身11.10cm)鰭を持たず、無文である。

九州地方における小銅鐸(佐原真氏の分類[註1]、小銅鐸・銅鐸型銅製品・銅鐸試作品・銅鐸模造品も含まれる)及び鋳型の出土例は、大分県別府遺跡の朝鮮式小銅鐸を始めとして18例(多武尾遺跡、春日大南遺跡、浦志遺跡、今宿五郎江遺跡、板付遺跡(鐸)、宇木汲田遺跡(銅舌)、大谷遺跡、岡本四丁目遺跡、赤穂ケ浦遺跡、安永田遺跡(鋳型)、詫田西分遺跡、本分遺跡、川寄若宮遺跡、川寄吉原遺跡、利田柳遺跡、的五本黒木遺跡、琴の宮遺跡、吉野ケ里遺跡(土製品)である[註2]。

次に国内から出土した小銅鐸・銅鐸型銅製品類は鳥取県の長瀬高浜遺跡、東郷遺跡、静岡県の有東遺跡、開峯遺跡、陳ケ沢遺跡等12例ある。

この中で今宿鐸に形態が類似しているものは、九州では川寄若宮遺跡、利田柳遺跡、本分遺跡出土の土製品、九州以外では東郷遺跡、有東遺跡の鐸がある。しかし、詳細な部分ではかなりの相違が認められる。



第126図　銅鐸型銅製品実測図（縮尺1/2）

今宿五郎江遺跡出土小銅鐸の鉛同位体比について

東京国立文化財研究所　馬淵久夫
同　上　平尾良光

1．はじめに

青銅器の原料産地を推定するための手法として、近年クローズアップされている手法に鉛同位体比法がある[1-2]。鉛は質量の異なる4種の同位体^{204}Pb、^{206}Pb、^{207}Pb、^{208}Pbの混合物であり、その混合比(同位体比)は鉛鉱床の性格と生成年代によって異なるので、産地の指標になり得る。筆者らは、弥生時代から歴史時代初頭に至るまでの日本出土の青銅器にこの手法を応用し、各時代の青銅原料に関する知見を得ている[3-8]。

今回、今宿五郎江遺跡出土小銅鐸の測定を行なったので、その結果を報告する。

2．測定法および結果

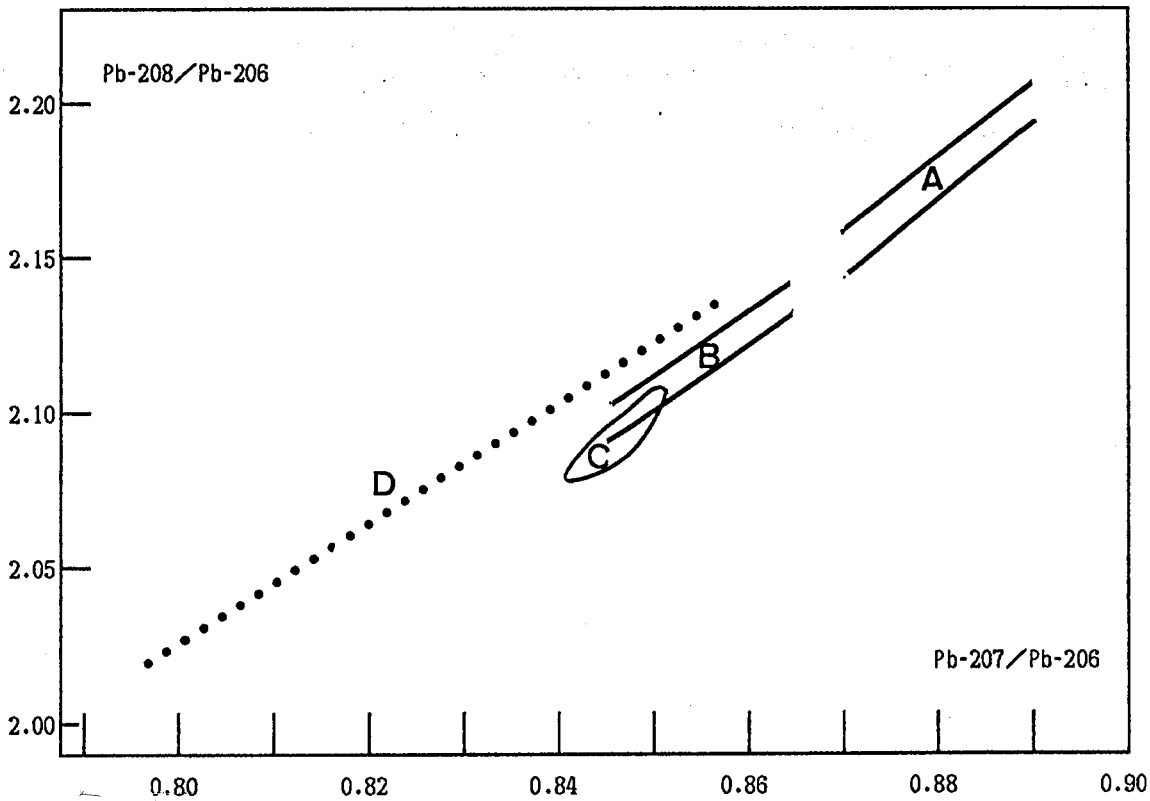
現在、同位体比を測定する機器である質量分析計は極めて高感度になっているので、本法はほとんど非破壊法と言って差し支えない。出土青銅器に必ず生じている錆の微量を採取すればよい。同位体比は化学反応の過程でほとんど変ることがないので、錆の中の鉛を使って測定すればよい。そこで、錆を約1ミリグラム使って同位体分析を行なった。化学分離は電着法を用いた。分離精製された鉛のうち、約0.2マイクログラムを使って、東京国立文化財研究所に設置されている英国VG Isotope社製表面電離型質量分析計　VG Sectorで鉛同位体比を測定した。

測定結果は表1のようになった。

3．考察

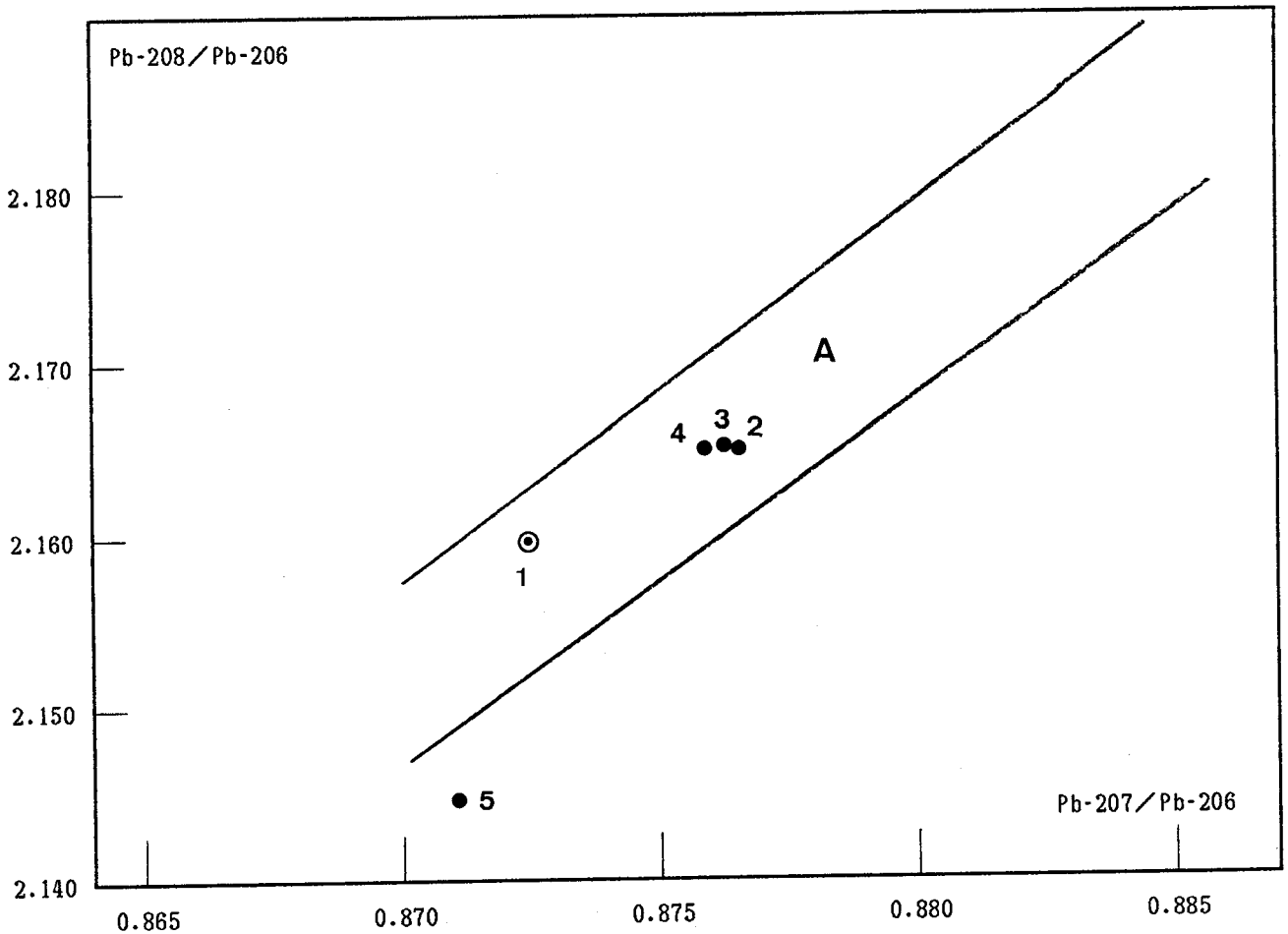
鉛同位体比の測定値から鉛の産地を推定するためには、産地の分かった鉛鉱石と時代別の考古遺物の測定値を基準にしなければならない。筆者が確立したタイプ別の鉛同位体比の分布範囲を図1に示す。この図は^{208}Pb／^{206}Pbを縦軸に、^{207}Pb／^{206}Pbを横軸にプロットするものであるが、その概略は次のようになる。

まず、Aの範囲は、弥生時代に将来された前漢鏡が占める位置で、華北の鉛である。弥生時代の国産青銅器の大部分はこの範囲に入る。Bは後漢・三国時代の舶載鏡の占める範囲で、華中または華南の鉛。古墳出土の青銅鏡の大部分は仿製鏡も含めてここに入る。Cは日本産の鉛鉱石。Dは多鈕細文鏡・細形銅利器のような弥生時代に将来された朝鮮系遺物が位置するラインである。このように、弥生時代から古墳時代中期までの出土遺物はA、B、Dの何れかに属し、



第127図　鉛同位体比分布の概念図

No.	資料名	出土地	$^{206}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$
1	小銅鐸	福岡県今宿五郎江遺跡	17.789	0.8724	2.1599
	参考資料				
2	小銅鐸[4]	静岡県浮島開峯	17.719	0.8766	2.1639
3	小銅鐸[4]	栃木県小山	17.719	0.8764	2.1642
4	小銅鐸[9]	神奈川県海老名本郷遺跡	17.760	0.8757	2.1644
5	朝鮮式小銅鐸[10]	大分県宇佐市別府	17.892	0.8711	2.1438
		測定誤差	±0.006	±0.0002	±0.0004



第128図　銅鐸型銅製品の鉛同位体比

Cに入るものはないことが今までの測定で分かっている。

さて、今回の測定値を図1にプロットすると領域Aに入ることは明らかである。このことから、材料は銅鐸・銅剣など弥生時代のものと出所が同じで華北と考えられる。筆者らはすでに関東地方などで出土した小銅鐸および大分県出土の朝鮮式小銅鐸の鉛同位体比を測定して発表したが、それらのデータを参考資料として表1に再録する。図2は図1の領域A付近を拡大し、表1のすべてのデータをプロットしたものであるが、いくつかの重要な事実を物語っている。

まず、朝鮮式小銅鐸(NO.5)は、すでに報告したように他の弥生時代の青銅器とは違った産地の鉛を含み、特殊である[10]。つぎに、浮島開峯、小山、海老名本郷遺跡出土の小銅鐸(NO.2、3、4)は非常に近接した値を示し、しかも近畿式・三遠式銅鐸の鉛同位体比と一致する。つまり、銅鐸製作の末期に盛んに使われていた画一的材料と考えられる。

ところが、今宿五郎江遺跡出土小銅鐸(NO.1)は領域Aに入っているものの、近畿式・三遠式銅鐸とは違う値をとっている。このような値は佐原真氏の分類で外縁付鈕II式、扁平鈕式、突線鈕I式には存在しているので、関東で出土した小銅鐸よりも若干早い時期に使われた原料を用いて製作されたのではないかと推測される。

参 考 文 献

1) 馬淵久夫、富永健編：「考古学のための化学10章」東京大学出版会 1981

2) 馬淵久夫、富永健編：「続考古学のための化学10章」東京大学出版会 1986

3) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比による漢式鏡の研究 MUSEUM 370号 1982

4) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比からみた銅鐸の原料 考古学雑誌 第68巻1号 1982

5) 馬淵久夫、平尾良光ほか：古代東アジア銅貨の鉛同位体比、考古学と自然科学 15号 1982

6) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比による漢式鏡の研究(2) MUSEUM 382号 1983

7) 馬淵久夫、江本義理ほか：鉛同位体比による太安萬侶墓誌銅板および武蔵国分寺付近出土銅造仏の原料産地推定、古文化財の科学 28号 1983

8) 馬淵久夫、平尾良光：東アジア鉛鉱石の鉛同位体比、考古学雑誌 第73巻2号 1987

9) 馬淵久夫、平尾良光：本郷遺跡出土小銅鐸の鉛同位体比「海老名本郷」富士ゼロックス株式会社・本郷遺跡調査団 1985

10) 馬淵久夫、平尾良光：宇佐市別府出土朝鮮式小銅鐸の鉛同位体比、古文化談叢 第12集 1983

第V章　ま　と　め

1．遺構について

今宿五郎江遺跡の遺構は大きく分けて、弥生時代中期から後期にかけての時期と鎌倉時代から室町時代にかけての時期に分けられる。

弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は南台地に集中している。溝、掘立柱建物、井戸、土壙、Pitを検出したが、遺構全体が0.5m～0.7m程度削平を受けているため、住居址等の検出はできなかった。

溝　SD－01から47までの遺構は水田址等の溝(暗渠)と考察できる。住居址の排水溝とも考えたがまとまりのない配列で、排水溝とは考えられない。削平が著しいため底面まで削平されているものがある。溝自体は連続していたと考えられる。

SD－50は台地中央部に位置し、35m×50m程度の環濠集落と考えられるが、全容が把握できない。遺物は土器をはじめとして多量の木器が出土しており、今後の調査が期待される。

SD－100はヤツデ状に広がる台地の凹地につくられた溝(旧河道)と考えられる。この溝は今津湾の内湾に続くもので、南側台地には入江状の窪みが認められる。このSD－100は大きく分けて上下二層に分けられ、上層からは後期初頭の土器群が層をなして出土している。下層には木器、石器等が土器とともに出土している。銅鐸型銅製品はこの層と上層の境から出土している。

掘立柱建物

弥生時代の掘立柱建物は、1間×1間が36棟、1間×2間が26棟、1間×3間が5棟、2間×2間が4棟、2間×3間が2棟、1間×4間が1棟検出した。遺構は台地全体が0.5m～0.7m程削平を受けているため、竪穴式住居址等の壁面等が削平され、辛うじて柱穴が残る程度である。1間×1間の建物は竪穴式住居址の柱穴とも考えられる。近年、2本柱の竪穴住居址の検出も目立ち始めている。しかし、柱穴だけしか残らない状態では住居址の実態をつかむことは出来ないため一応ここでは掘立柱建物として取り扱う。他の掘立柱建物は高床倉庫であろう。方向性から約4期に区別できる。この他井戸が1基検出された。この井戸からは多量の遺物が出土した。湧水点も高く常に水が湧き出していたことが判明した。

鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物について

SD－200から瓦が数点ではあるが出土している。このことは周辺に瓦を葺いた建物が存在していた資料である。調査した掘立柱建物は1間×1間が12棟、1間×2間が16棟、2間×2間が9棟、2間×3間が5棟、1間×3間が2棟である。ほぼ2間×2間、2間×1間が主体をなすものと考えられる。今回の調査では、幅20mと狭い範囲であるため周辺の調査が進むことによ

り、その実態が明らかになるものと思われる。

2．銅鐸型銅製品について[註2]

本遺跡の銅鐸型銅製品はSD－100からの出土で、弥生時代中期の包含層（第Ⅶ層）と後期の包含層（第Ⅴ層）との境に出土した。鐸の中に詰まっていた土は、第Ⅶ層の褐色砂層である。

全長13.5cm（鈕高2.4cm、鐸身11.10cm）の小型品である舞は径4.6cmの円形を呈し、裾部も径7.5cmの円形で、接合部の残存部を加えると7.75cmで裾広がりの截頭円錐形を呈する。

舞と身の外面の一部と内面に赤色顔料が付着している。これは鐸自体に赤色顔料が塗られてあったものか、もしくは丹塗りの土器等の彩色が鐸に付着したものかは判断できない。

内面下端には柾目状の痕跡が残る。この柾目状の痕跡がはたして何から付着したものかは定かではないが、鋳型の痕跡とも考えられる。

舞孔は２孔で方形を呈する。舌は出土しなかった。

これを整理すると

１．鈕は半環状を呈し、舞の両端部の0.5cm内側から始まる。

２．身は裾広がりの截頭円錐形を呈する。

３．型持孔は両面２ケ所ずつ４ケ所に配されている。

４．総高13.5cm（鈕高2.40cm・鐸身11.10cm）、鰭を持たず、無文である。

今宿鐸に形態が類似しているものは、九州では川寄若宮遺跡、利田柳遺跡、本分遺跡出土の土製品、九州以外では東郷遺跡、有東遺跡の鐸[註3]がある。しかし、詳細な部分ではかなりの相違が認められる。

今宿鐸については1986年に佐賀県立博物館で開催された『古代史発掘－新出土品にみる九州の古代文化－』[註4]の図録の中で、藤口健二氏は「身の形状は佐賀県川寄若宮遺跡出土の鐸形土製品と類似している。鈕の形状も特異であるが、頂部と左右に銅鐸の鈕に付く飾耳様の突起を持つ点で、扁平鈕式銅鐸の影響も認められる資料である。[註5]」としている。しかし、鈕に付く突起は飾耳様とは考え難いものである点、それをして扁平鐸式銅鐸の影響が認められとするのは容易と考えられる。鈕は半環状を呈しており、飾耳様の突起部分の断面でも菱環ではない。佐原真氏の分類[註6]では「小銅鐸には鰭を欠くものが多く、鈕の形態は普通の銅鐸の形式分類の適用外にある。」小銅鐸は普通の銅鐸の適用外であるとしている。このことからも扁平鈕式の影響を受けたとする説には賛成し難い。

九州地方において朝鮮式小銅鐸である別府鐸を除いて国産品として考えてよいものに浦志鐸、大南鐸、多武鐸、板付鐸があり、今宿鐸で５例目であるが、それぞれの鐸が形態を異にする。

鋳型も４例発見されているが、これらも形態・紋様が異なる。ただ共通していることは、そ

の殆どが生活活動範囲内から発見されていることであり、これは銅鐸の発見場所とは多いなる異なりを示す。なお、このことについては佐原真氏が充分な説明を加えて提言されている[註7]。これらのことから今宿鐸を分析すると、形状が特異で、鐸型土製品との類似点があること、型持孔が両面2孔ずつ計4孔あること、小型であること、無文・鰭が無いこと等は国産の小銅鐸の範疇に入る。また、集落の中(溝内)から多量の祭祀土器とともに出土し、出土地点の土層から弥生時代中期～後期にかけての時期に破棄されたと考えられる。

身の下端に3ケ所の三角形の新しい削り出しによる孔を持つことから製作年代と使用年代、破棄年代とはかけ離れていたと考えられる。破棄年代は溝の土層・出土遺物から弥生時代中期末から後期初頭(銅鐸内に入った土から考えると弥生時代中期末)である。使用年代はそれ以前であったことは確実で、この段階で新しい3ケ所の三角形孔が削り出されたものであろう。製作年代はそれ以前であることは間違いないものと考えるが、その時期については明確にする資料がないため現段階で早急に結論を引き出すことは避け、今後多くの資料が蓄積されるまで結論は待ちたい。

3．遺物から見た生活様式について

弥生時代中期から後期にかけての遺構の広がり、出土遺物のあり方、特にSD－100における遺物について考察を加えて見たい。

SD－100から出土した土器、石器、木器は、その時代の生活様式を考察できる資料を提供してくれた。

土器は弥生時代中期中葉の遺物が出土している。SD－100が埋まる寸前に弥生時代後期末の遺物が出土しているところから、SD－100の時期は出土遺物が示す時期と考えて良い。これらの土器を調査・整理していく段階で、非常に丹塗り土器が多量に認められ、出土土器の約80％が丹塗り土器であった。器種は多種多様であるが、その中でも中期末における壺形土器、甕形土器の出土点数は、他の遺物を圧倒的な量で上回り、出土遺物全体の約50％が壺形土器、30％が甕形土器で、その8割が丹塗り土器であった。一般に丹塗り土器は祭祀に関係するものと考えて良いが、これに銅鐸型銅製品が加われば祭祀が行われたことは充分に考察出来る。

石器に関しては石錘の量の多さ、多種多様な形態が上げられる。すべてが滑石製で、大型の石錘は約3kg程あり、網の錘として使用したもので、この滑石は今津湾、今山の対岸にある毘沙門山にその原産地がある。また、紡錘車、太型蛤刃石斧、砥石、磨石の量が多い。石錘は未製品を含めて47点出土した。大まかに分類して5形式に分類できる。この石錘の分類の内、分銅形タイプについて下條信行氏が形式分類[註7]を行っている。下條氏の分類によれば、博多湾と糸島型に分類[註8]でき、糸島型は前原周辺から西に分布し、博多湾型は博多湾から北に分布する

様相を持つ。今津湾はその分布が重なる所で両方の要素を持つ。今宿五郎江遺跡では、両方の要素を持つ石錘が出土しているところから下條氏の形式分類の範疇にある。

木器には、生活様式を明らかにする遺物が多量に出土した。特に漁撈に関する資料が豊富で、船、タモ網、竹籠、突き棒状木器、模型の船等がある。農耕具は起耕具、整地具、収穫・脱穀具・補助具がある。狩猟具として石斧柄がある。生活用具として槽、容器、槌、編み具、杓子等がある。容器の中には椀が5点出土し、杓子は大小合わせて4点出土した。

これらの出土遺物から今宿五郎江遺跡の古代社会生活様式は、狩猟、農耕、漁撈を行い、特に漁撈にかけてはSD－100を利用し、今津湾や内湾のラグーン地帯を利用し今津湾に出漁していたと考えられ、また、対岸の毘沙門山に滑石を、今山に石斧の材料である玄武岩を採取に出かけてたものと考察される。

農耕も盛んに行われていたと考えられる資料がある。しかし平野部が少ない地帯であるだけに水田耕作には特に力をいれたものと考えられる。

以上の考察から今宿五郎江遺跡の弥生時代中期から後期にかけての生活様式を考えると今津湾や内湾を中心とした漁撈と農耕を中心とし、主にSD－100を最大限利用した半農半漁の生活を営んでいたものと考えられる。

鎌倉時代から室町時代にかけての遺構は2間×2間、2間×3間を中心とした掘立柱建物群が建ち並び瓦を葺いた建物を持つ遺構が考えられる。内湾は自然の埋立てが進んでいたと考えられるが、北側には、まだラグーン地帯が残っていたと思われ、船の出入りは充分考えられる。

註1　佐原　真　『展望アジアの考古学』(樋口隆康教授退官記念論集)　1983年
註2　二宮　忠司　『考古学雑誌』第75巻第2号「今宿五郎江遺跡出土の銅鐸型銅製品」　1989年
註3　常松　幹雄　『浦志遺跡A地点』前原町文化財調査報告書第15集　1984年
註4　藤口　健二　『古代史発掘』佐賀県立博物館刊　1986年
註5　藤口　健二　註4同上　P68
註6　佐原　真　『古代史発掘5　大陸文化と青銅器・弥生時代』講談社　1974年　P151
註7　佐原　真　註1、註6同上
註8　下條　信行　『九州文化史研究所紀要第29号』
「弥生・古墳時代の九州型石錘について」1985年

1990年の調査で佐賀県吉野ケ里遺跡から銅鐸型土製品が出土、福岡県板付遺跡からは弥生時代後期住居址上面の土壙から埋納状態で舌を持つ小銅鐸が出土している。

銅鐸型銅製品については『考古学雑誌』第75巻第2号に記載したものである。

図　　版

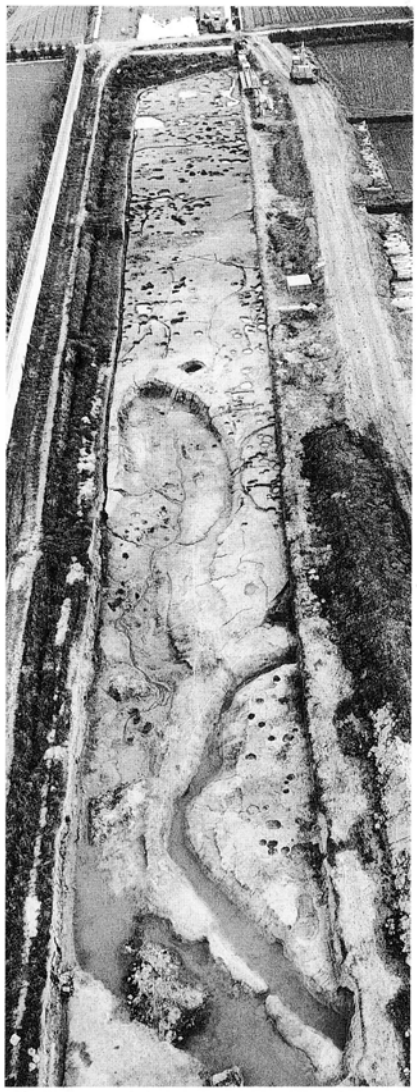
1　遺跡全景（北から）

2　遺跡全景（南から）

1　南台地全景（南から）

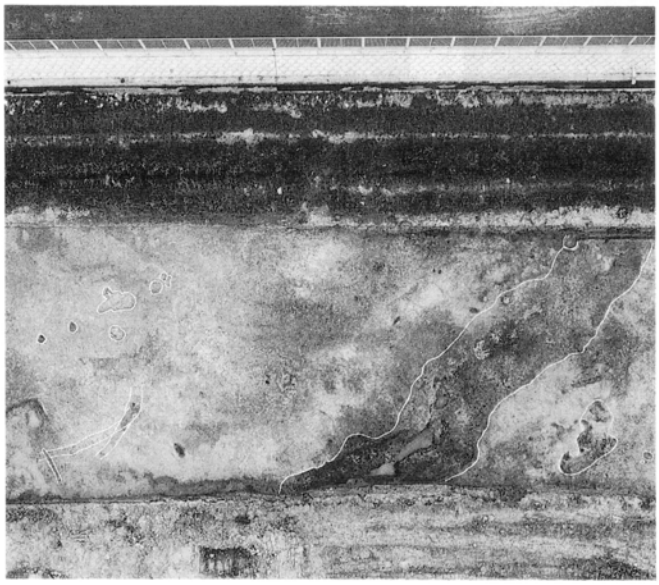
2　SD－100南台地全景（北から）

1　SD－50，100全景（南から）

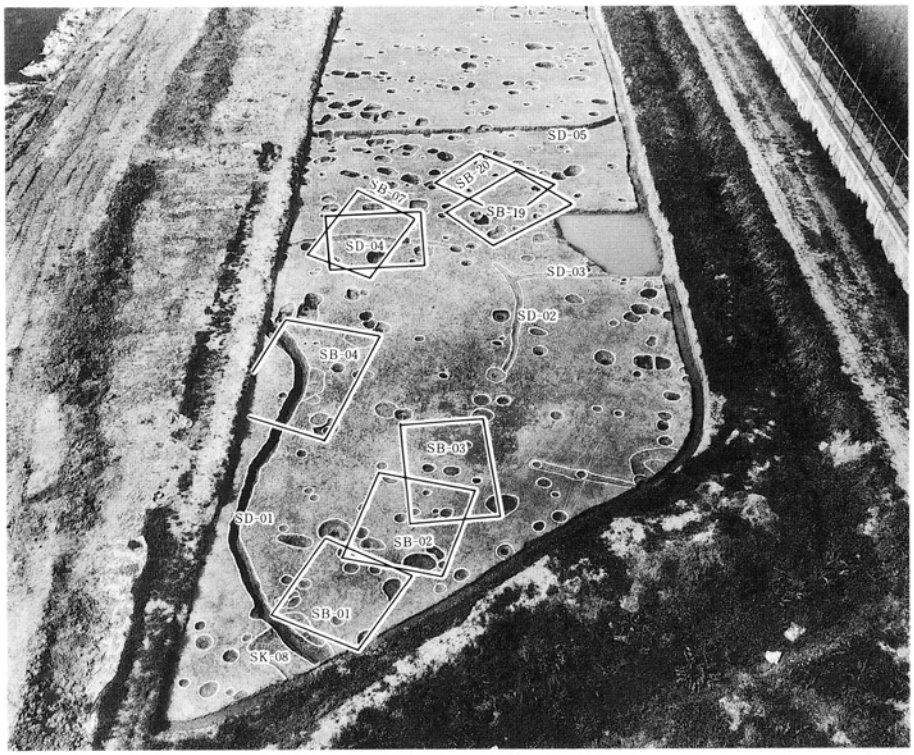


2　SD－100，
南台地遠景（北から）

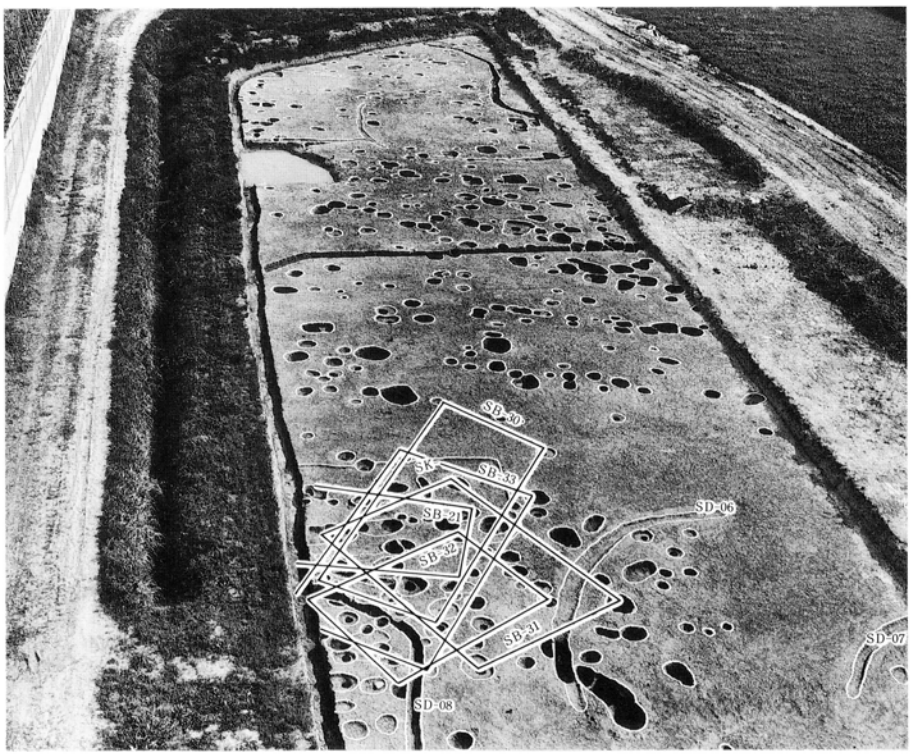
2　中央台地遺構検出状態（北から）



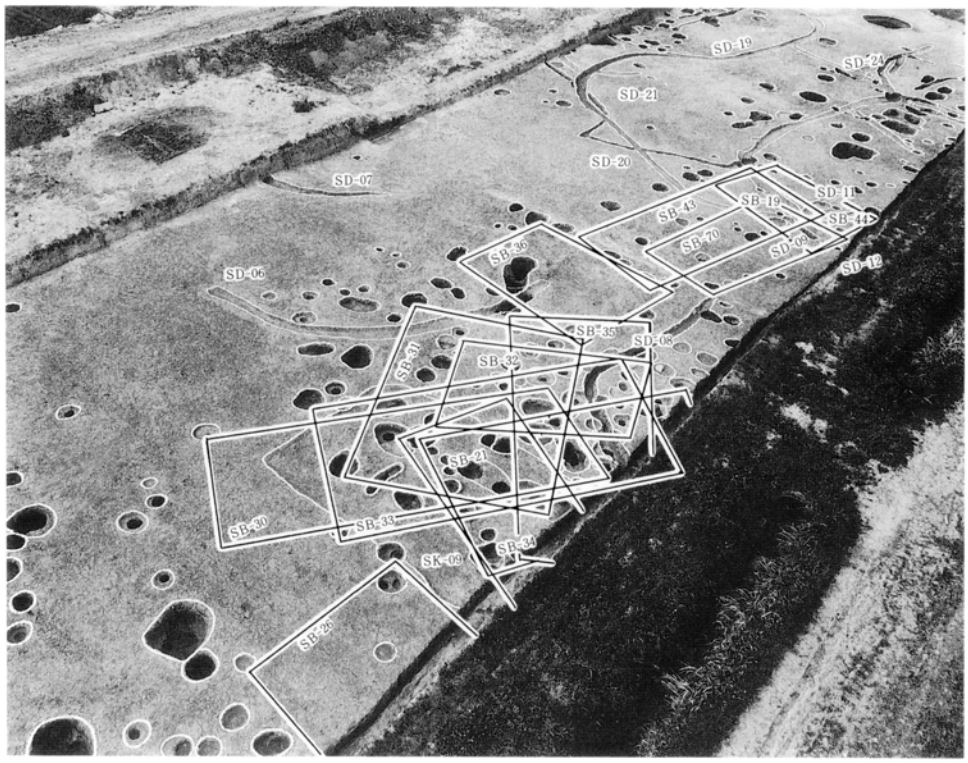
1　SD—200全景（西から）



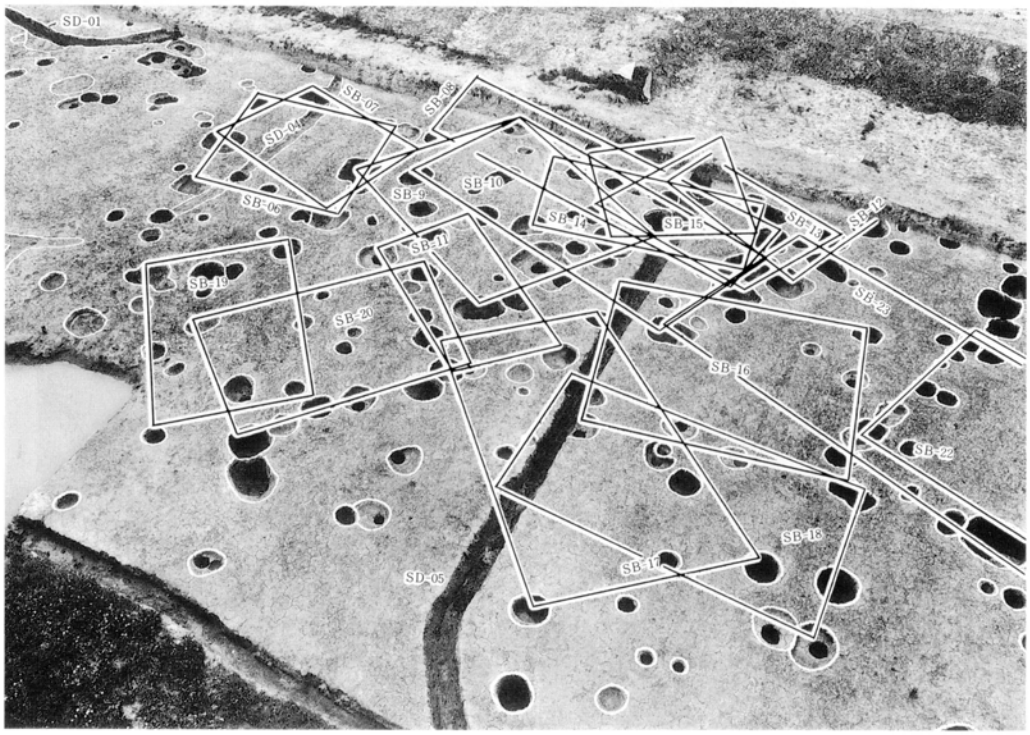
1　南台地SB・SD検出状態（南から）



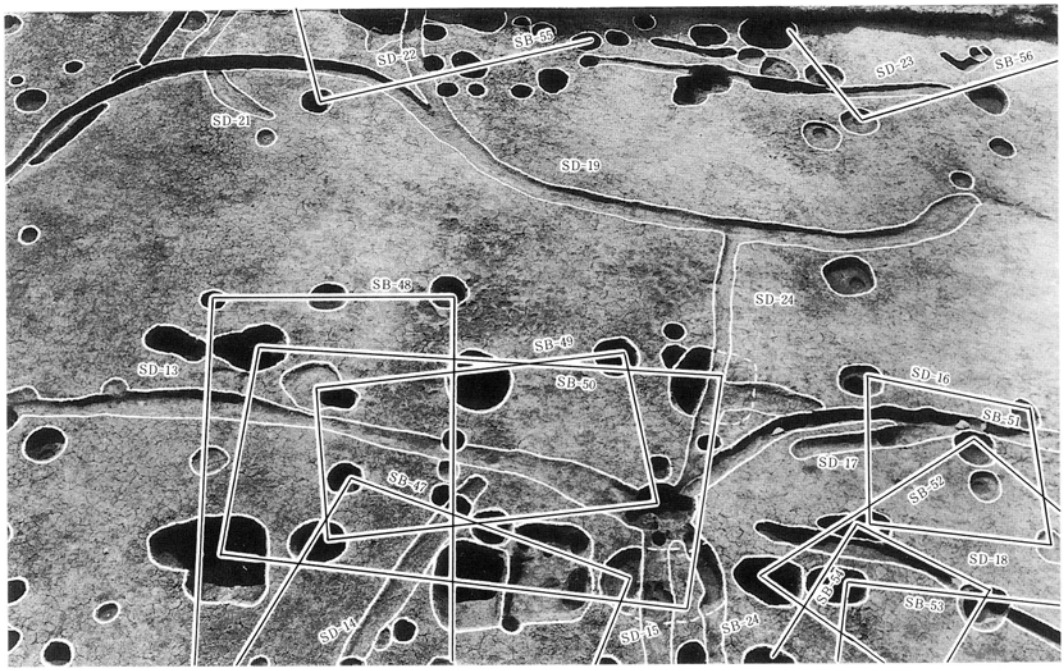
2　SB・SD・SK検出状態（北から）



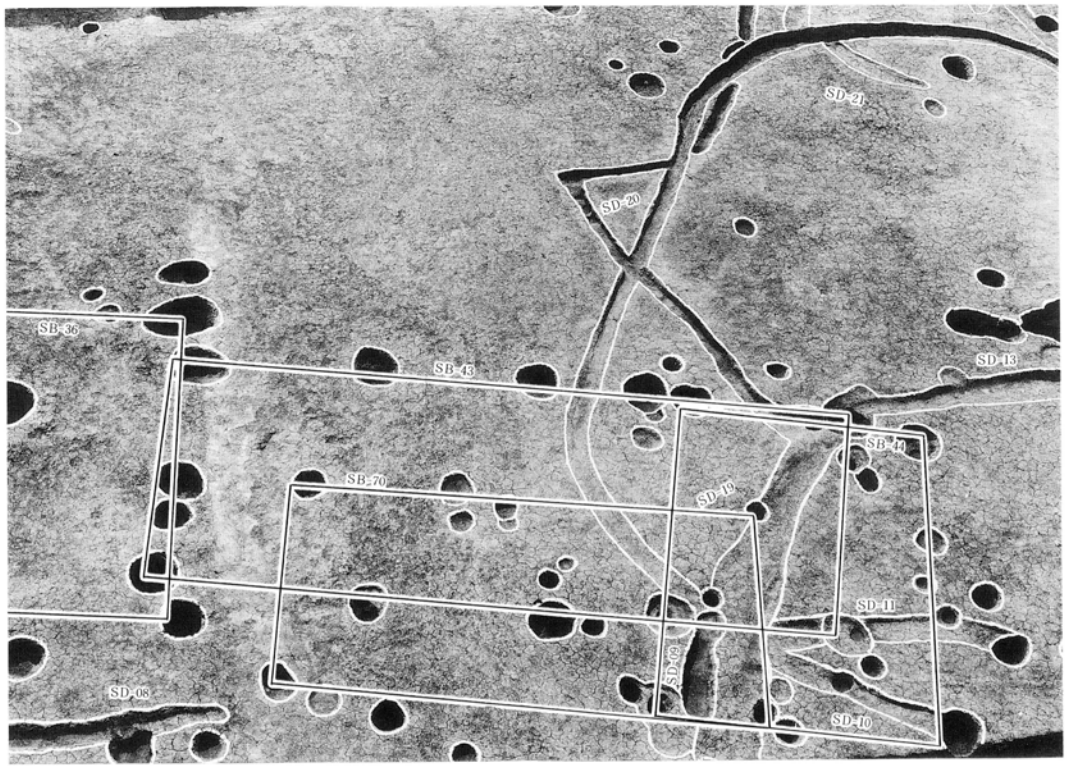
1　SB・SD・SK検出状態（南から）



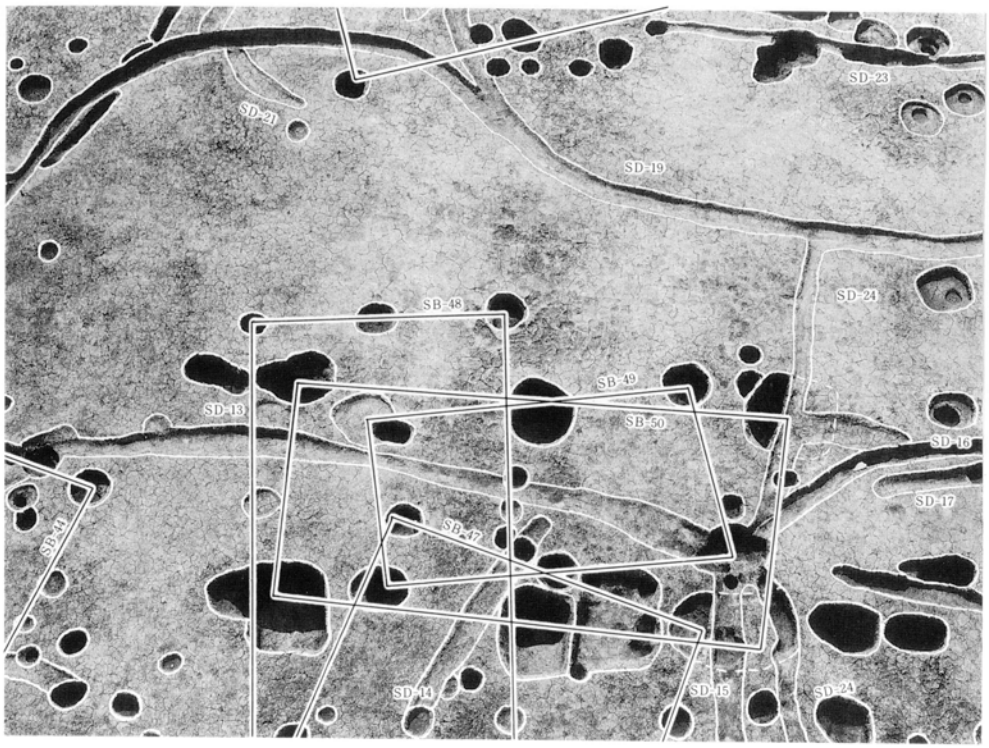
2　SB検出状態（東から）



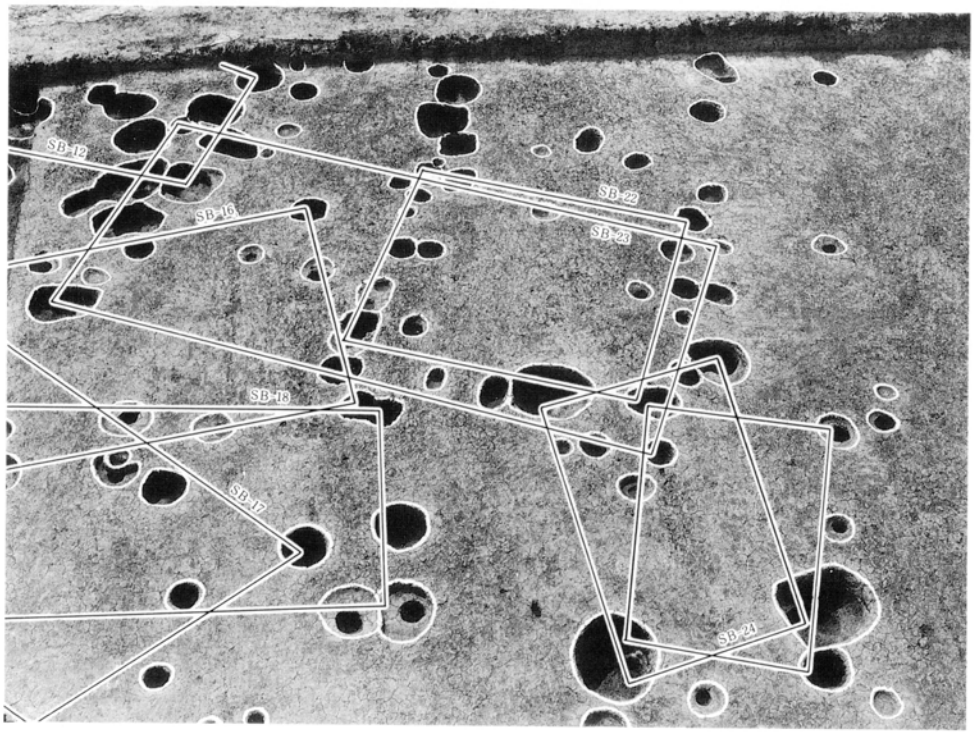
1　SB・SD検出状態（東から）



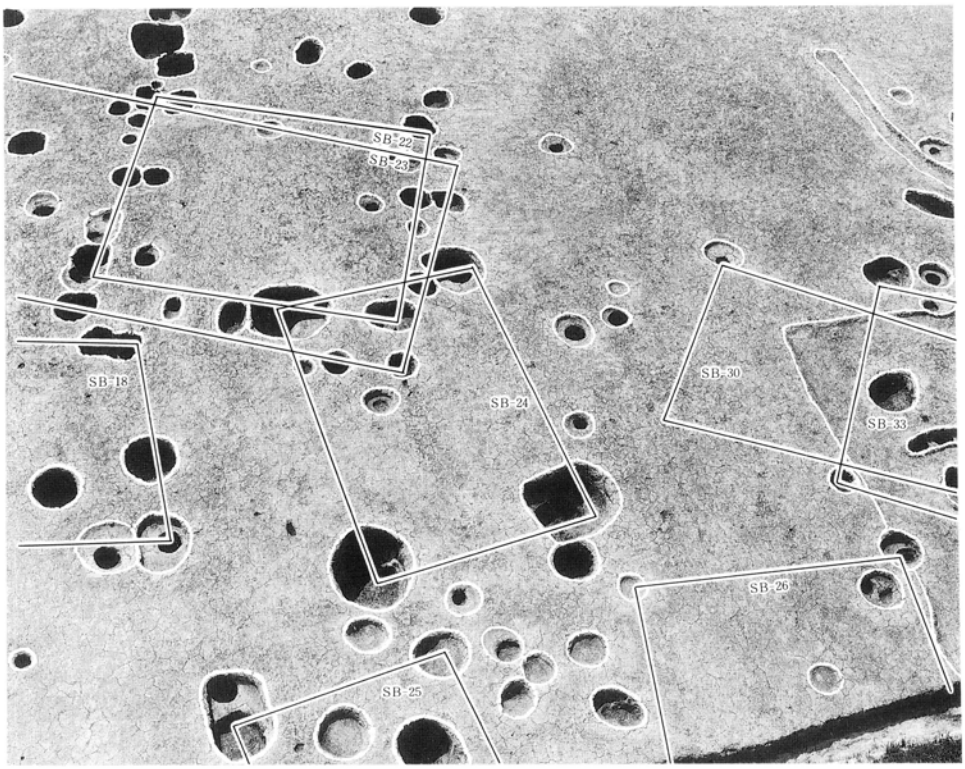
2　SB・SD検出状態（東から）



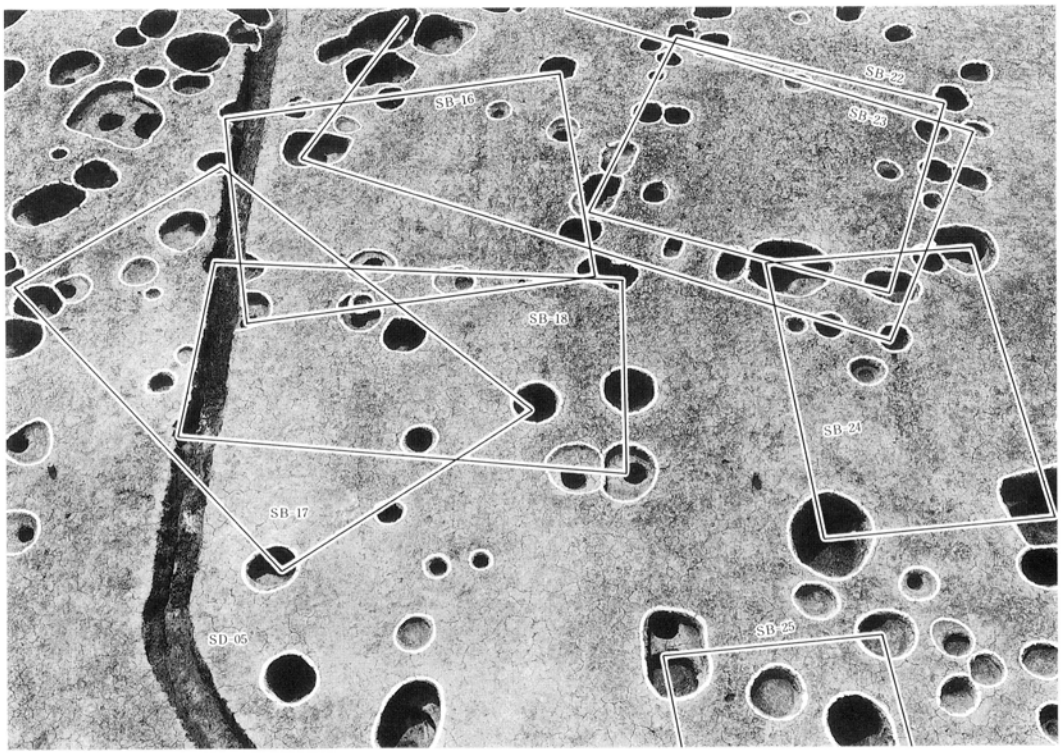
1　SB・SD検出状態（東から）



2　SB検出状態（東から）

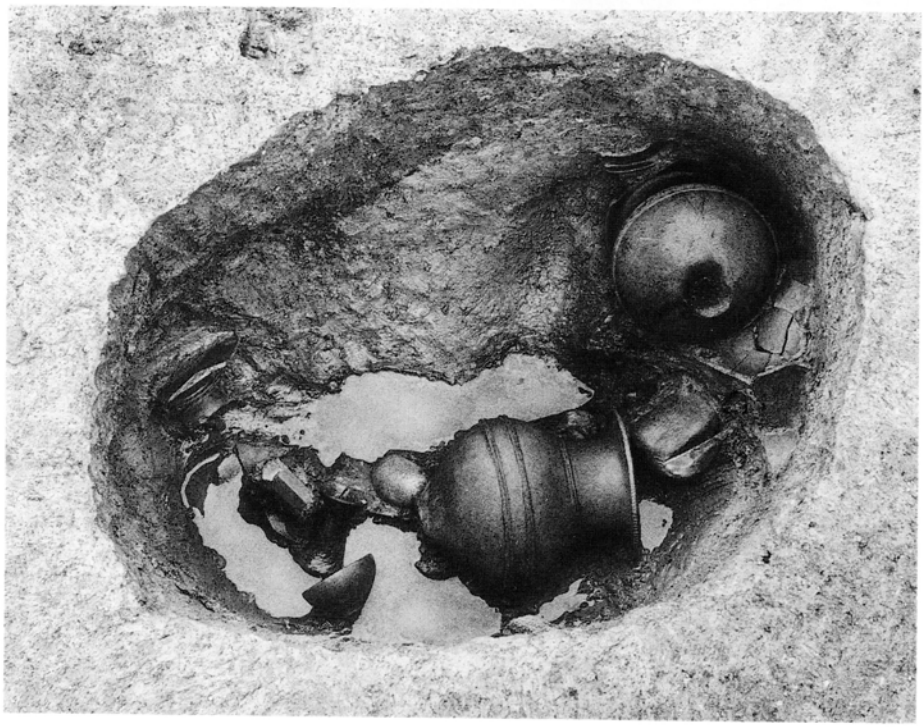


1　SB検出状態（東から）



2　SB検出状態（東から）

1　SE－01・SD－100検出状態

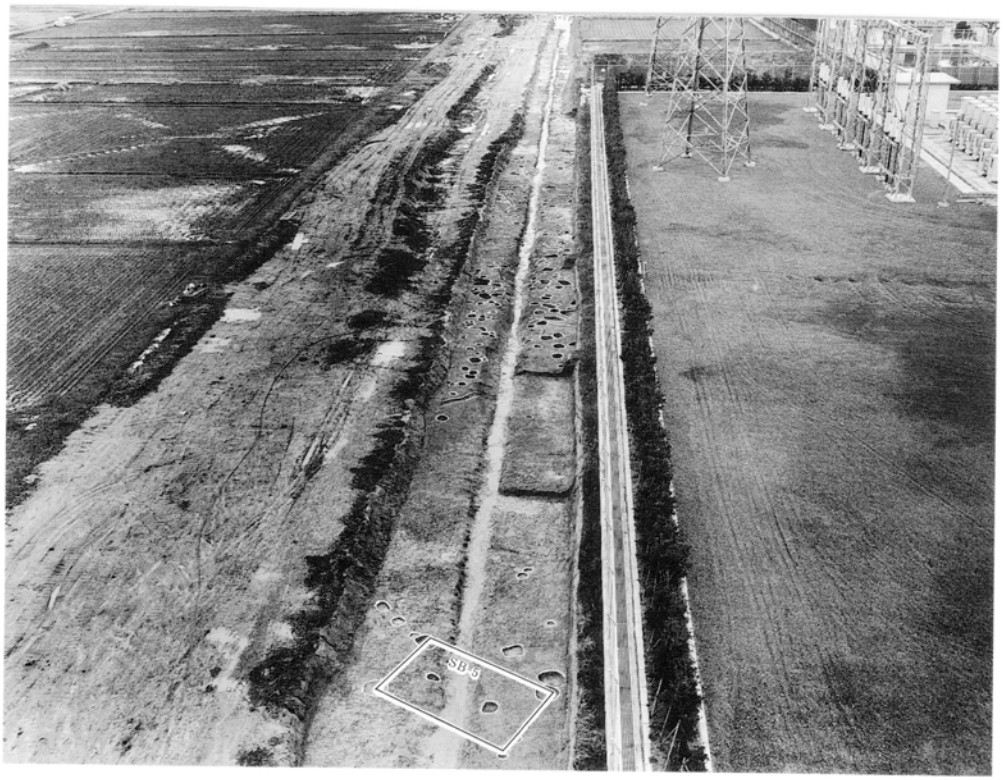


2　SE－01検出状態から（南から）

1　SE－01遺物出土状態近景

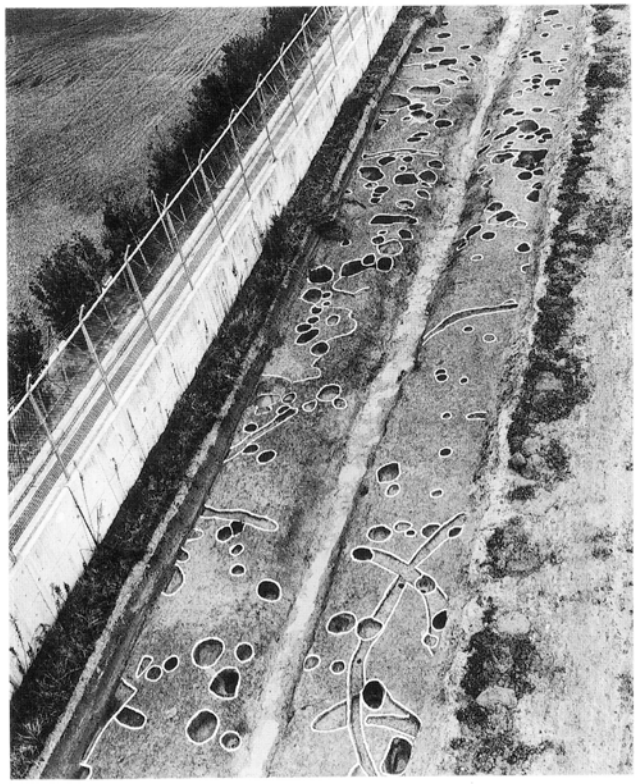
2　SE－01遺物出土状態近景

1　SE－01完掘状態（南から）

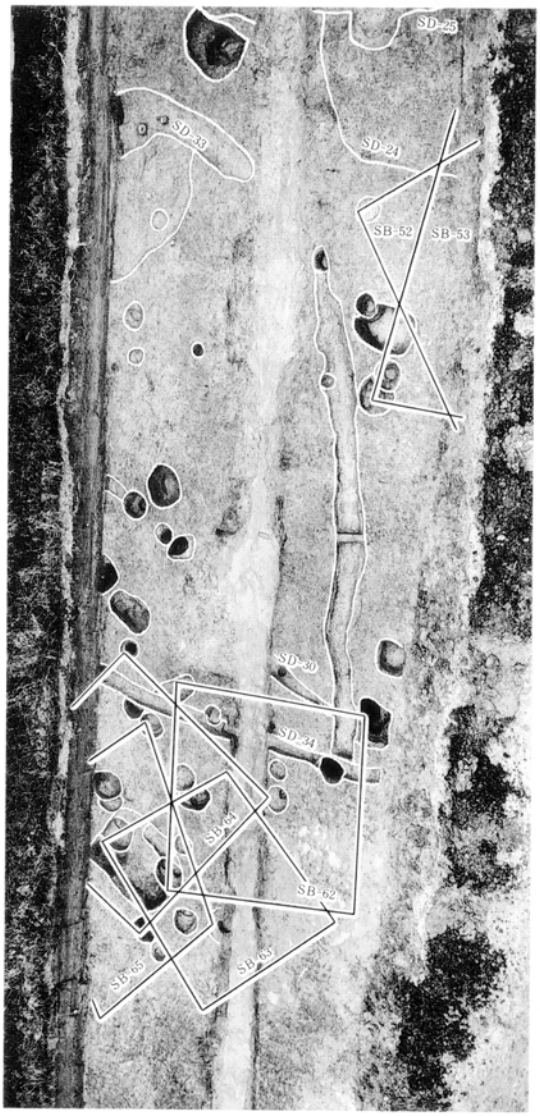


2　南台地２区遺構検出状態（南から）

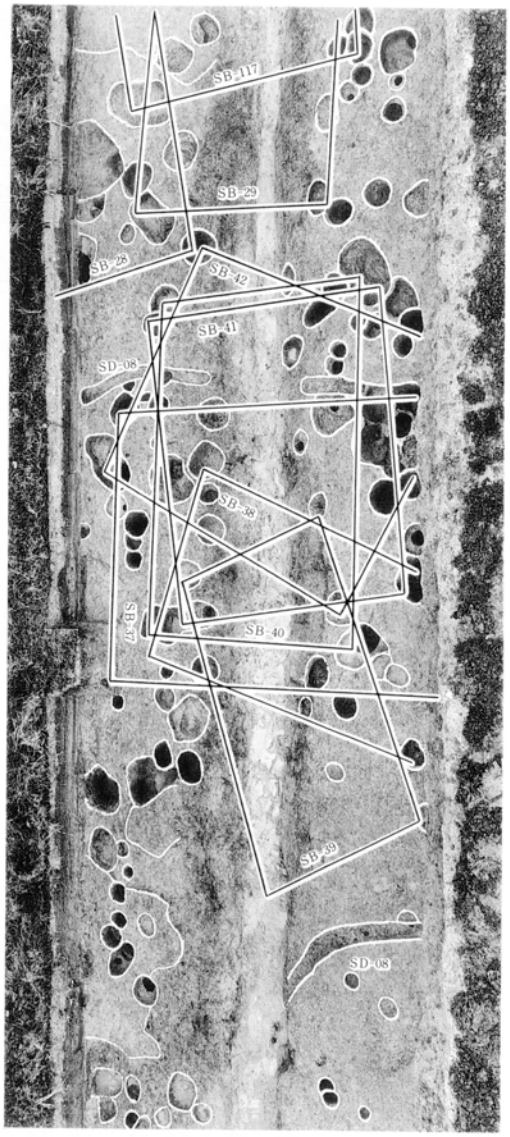
1　2区SD－100検出状態（北から）



2　2区遺構検出状態（北から）

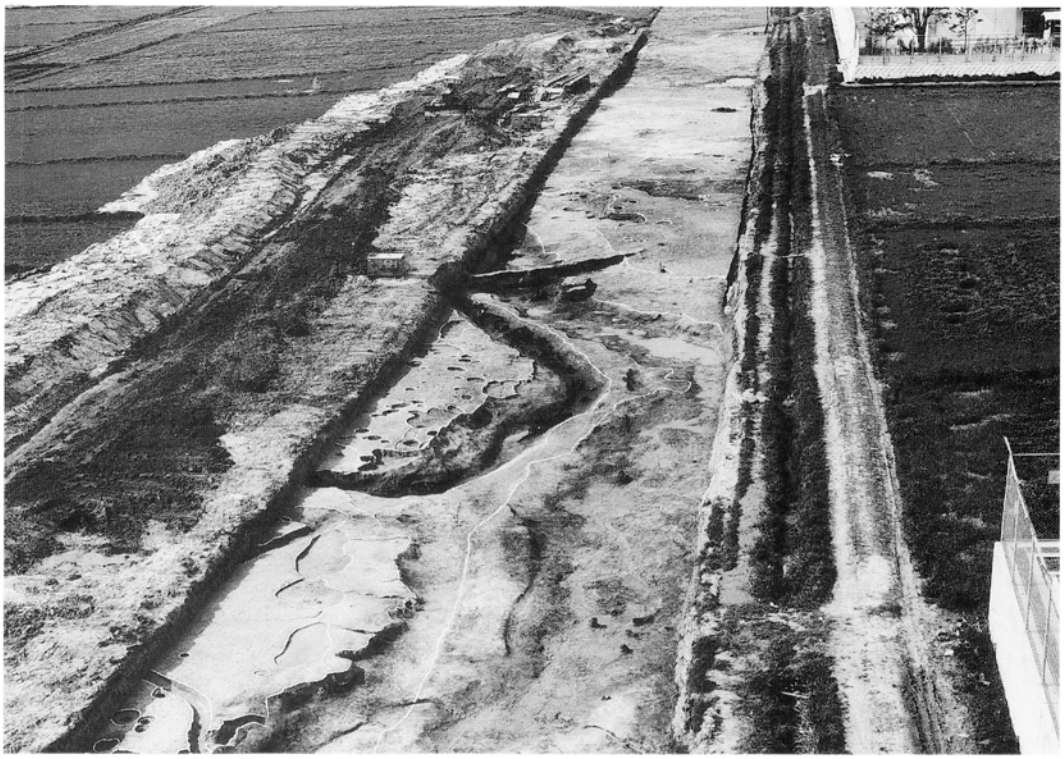


1　2区SB・SD検出状態（北から）



2　2区SB・SD検出状態（北から）

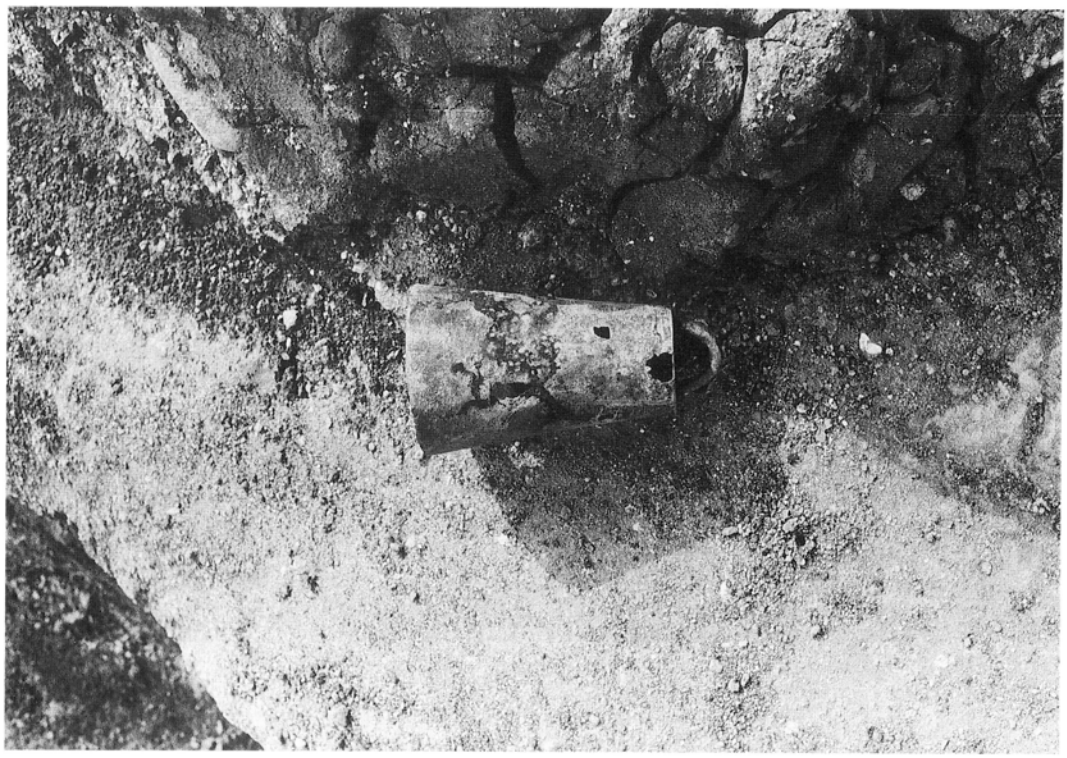
1　SD－50，100検出状態（北から）



2　SD－50，100近景（南から）

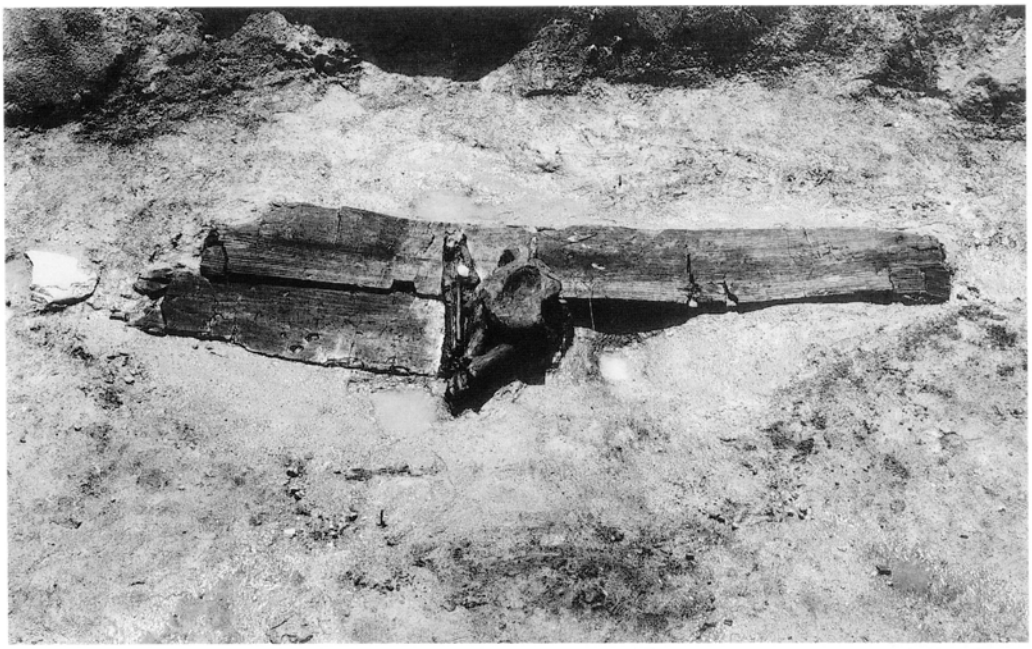
1　SD－100銅鐸出土状態遠景（南から）

2　銅鐸出土状態近景（南から）



1　銅鐸出土状態近景

2　SD－100遺物出土状態（南から）



1　SD－100遺物出土状態（東から）

2　SD－100竹籠出土状態

1　SD－100遺物出土状態

2　SD－100遺物出土状態

1　SD－100遺物出土状態

2　SD－100遺物出土状態

1　SD－100遺物出土状態

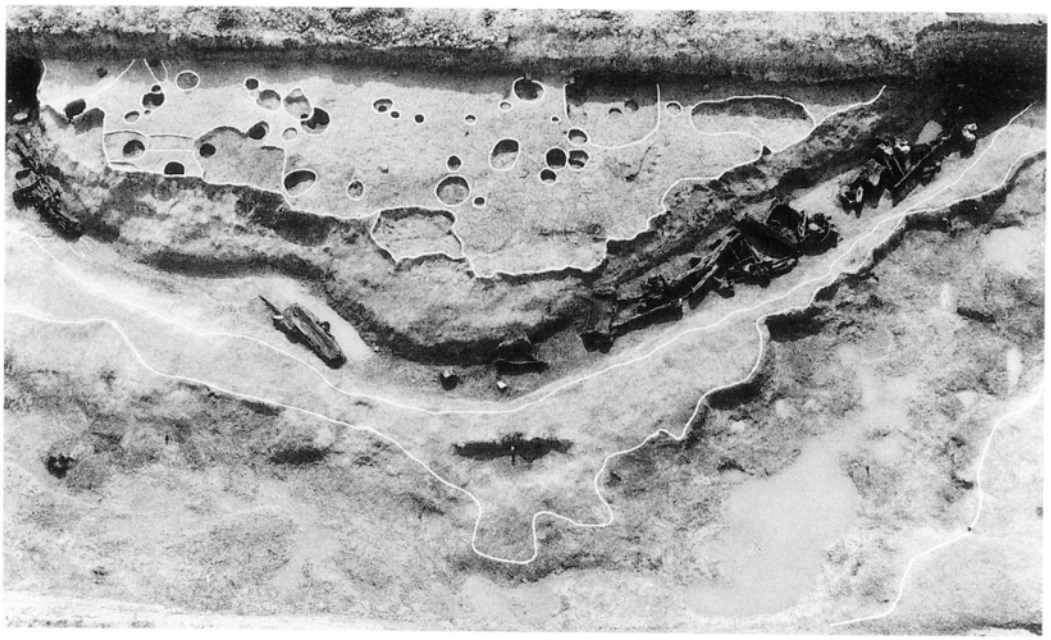
2　SD－100遺物出土状態

1　SD－100遺物出土状態

2　SD－100遺物出土状態

1　SD－100遺物出土状態

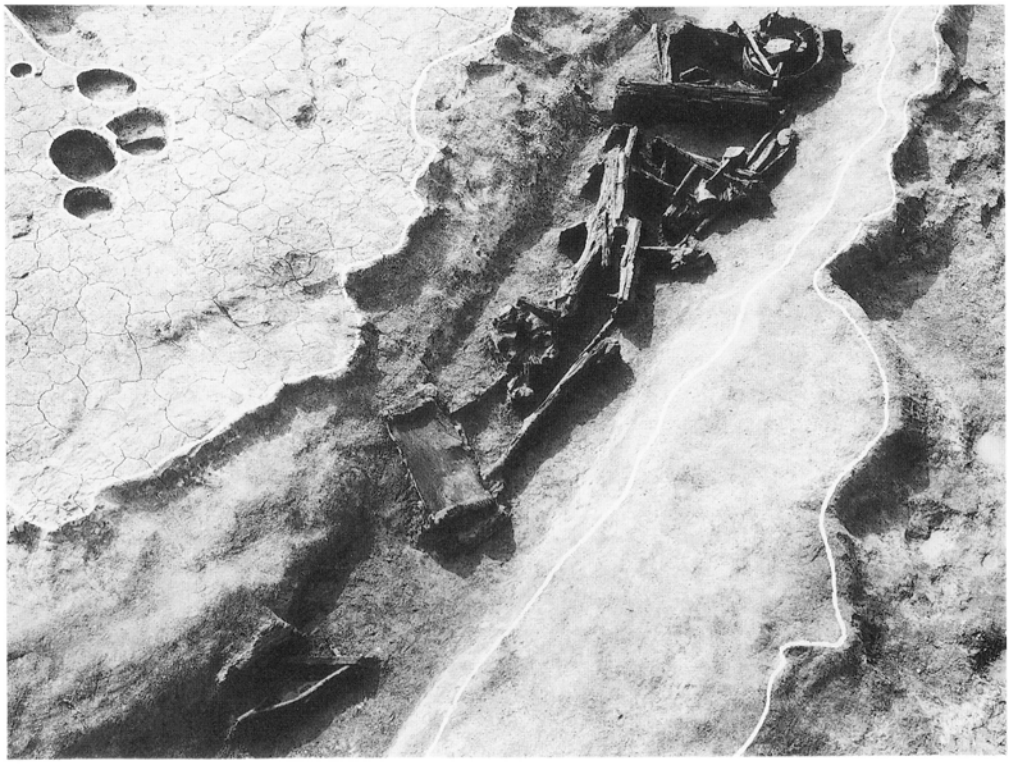
2　SD－100遺物出土状態



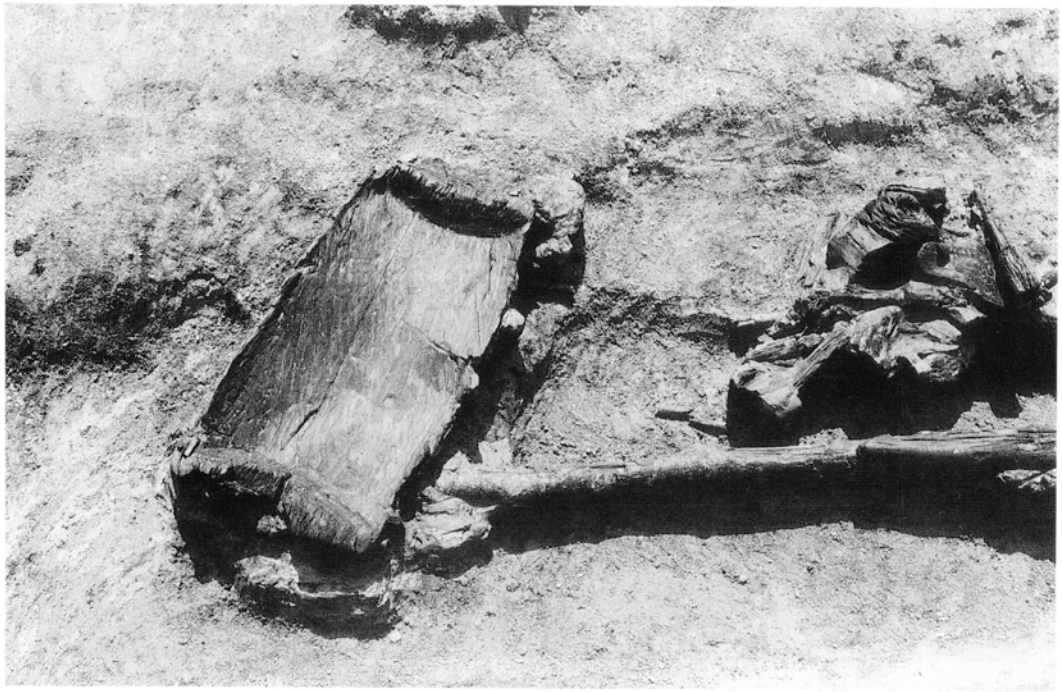
1　SD－50全景（東から）

2　SD－50遺物出土状態

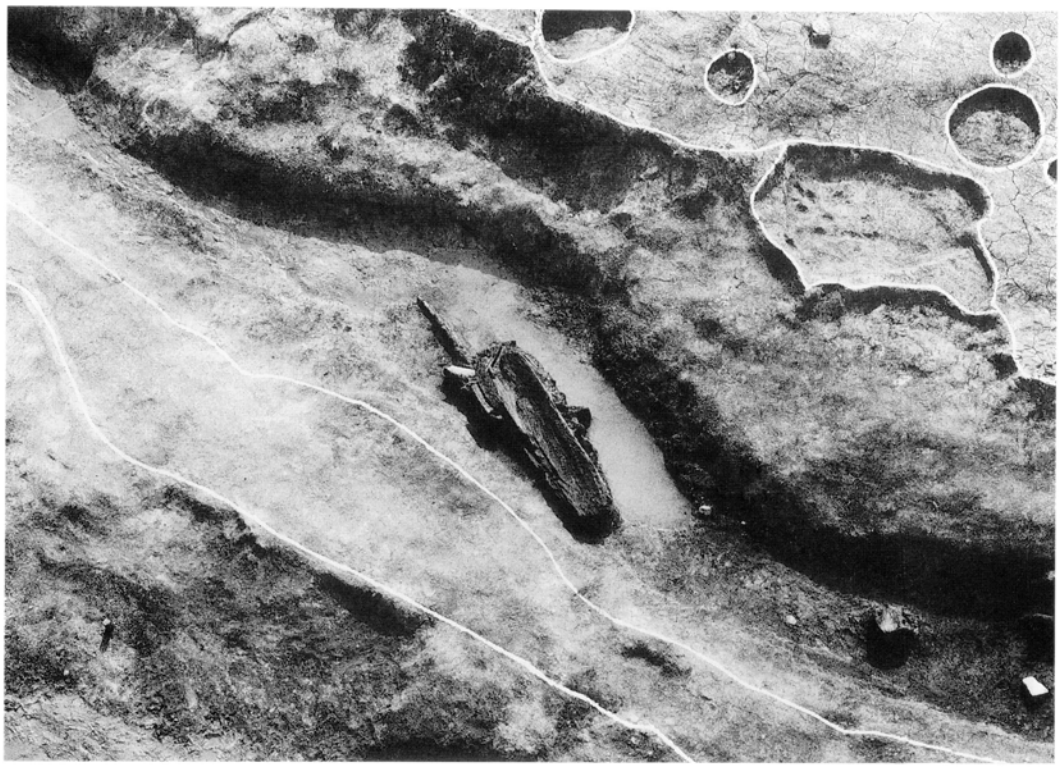
1　SD－50遺物出土状態近景



2　SD－50遺物出土状態近景

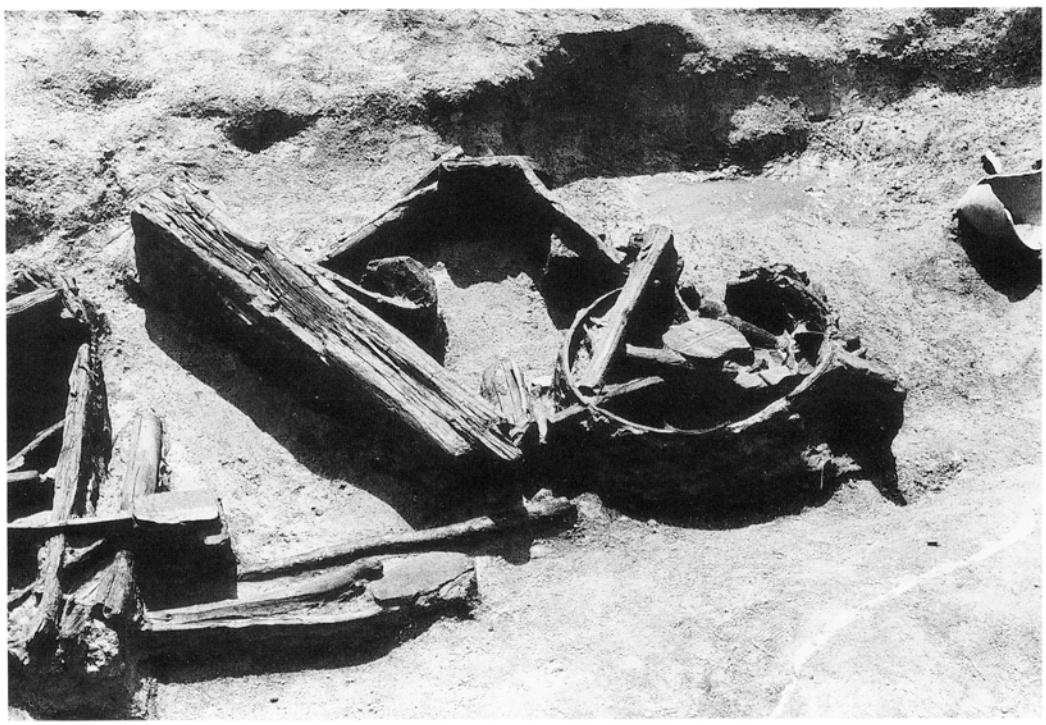


1　SD－50遺物出土状態近景

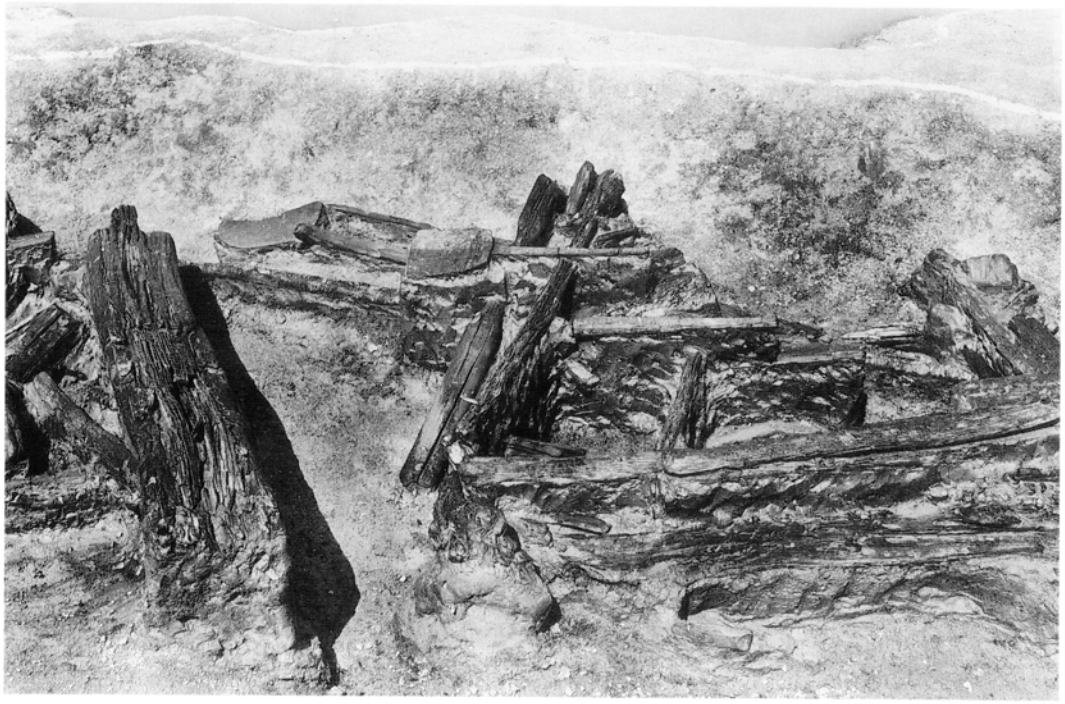


2　SD－50遺物出土状態近景

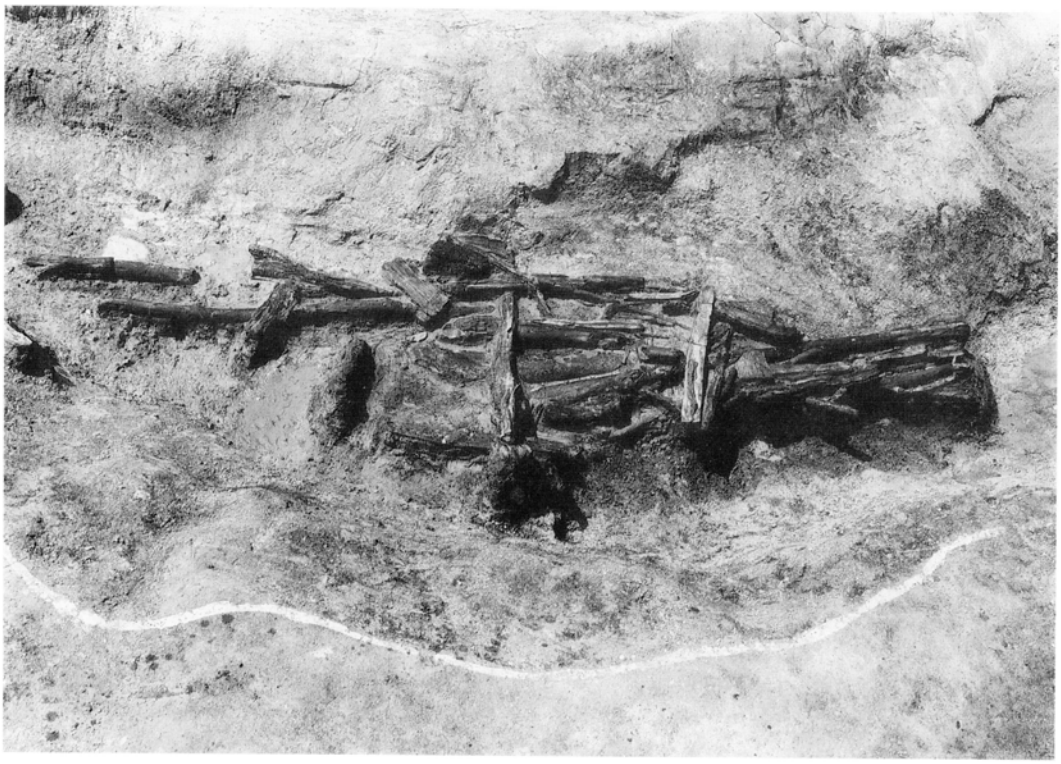
1　SD－50舟出土状態



2　SD－50木器出土状態

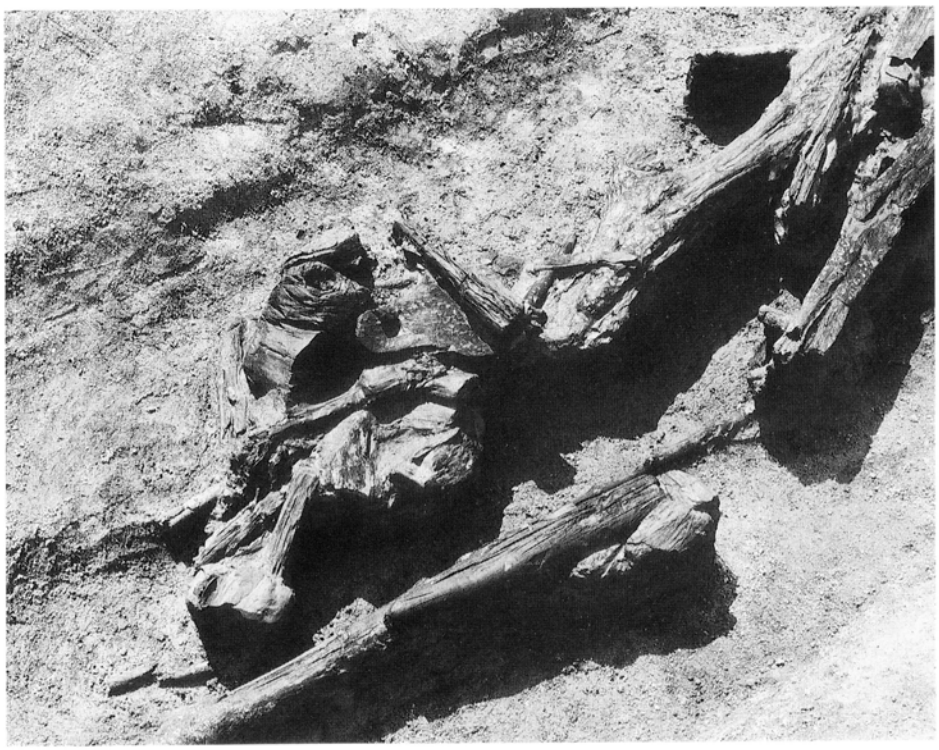


1　SD－50木器出土状態

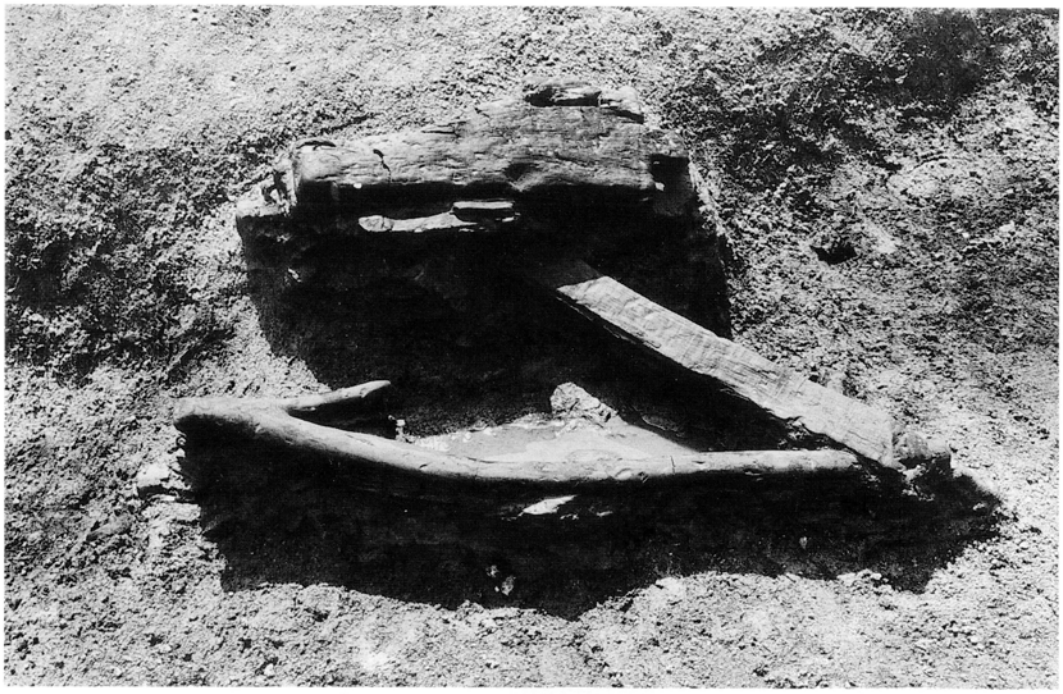


2　SD－50木器出土状態

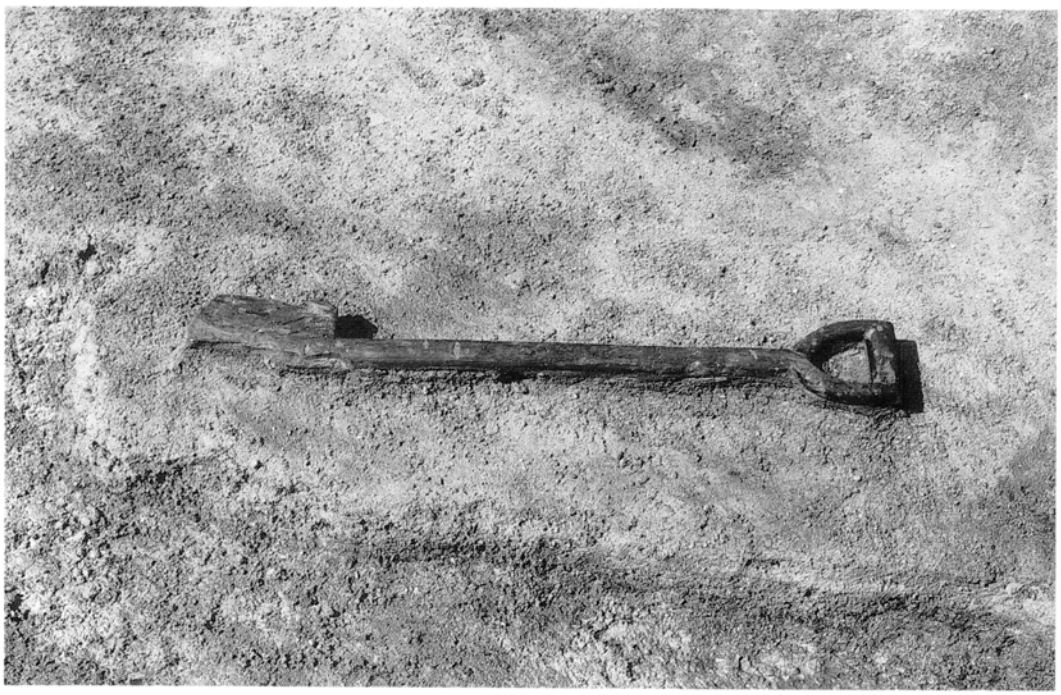
1　SD－50木器出土状態



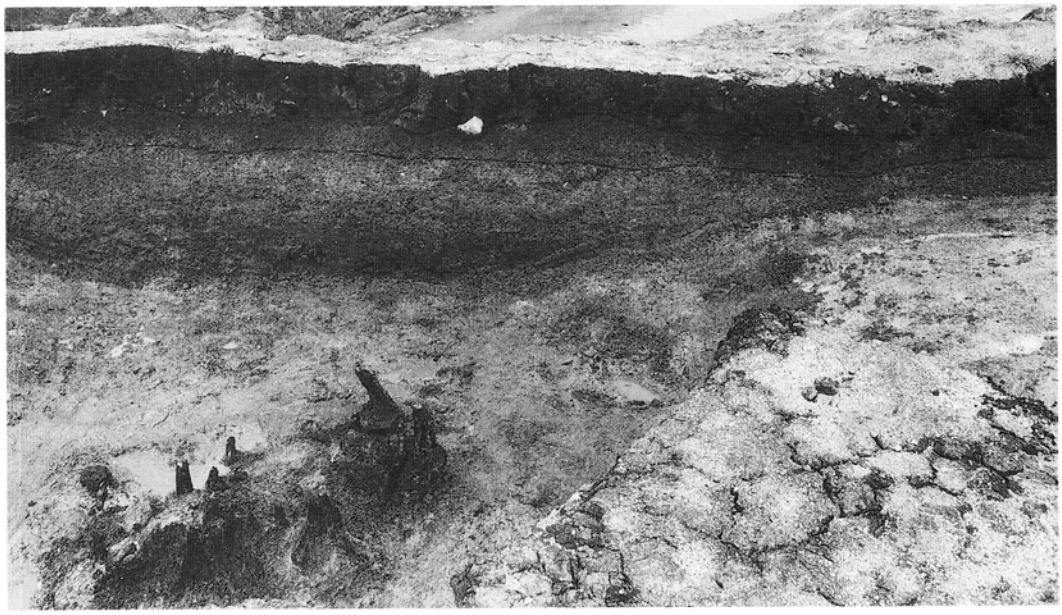
2　SD－50木器出土状態



1　SD－50木器出土状態

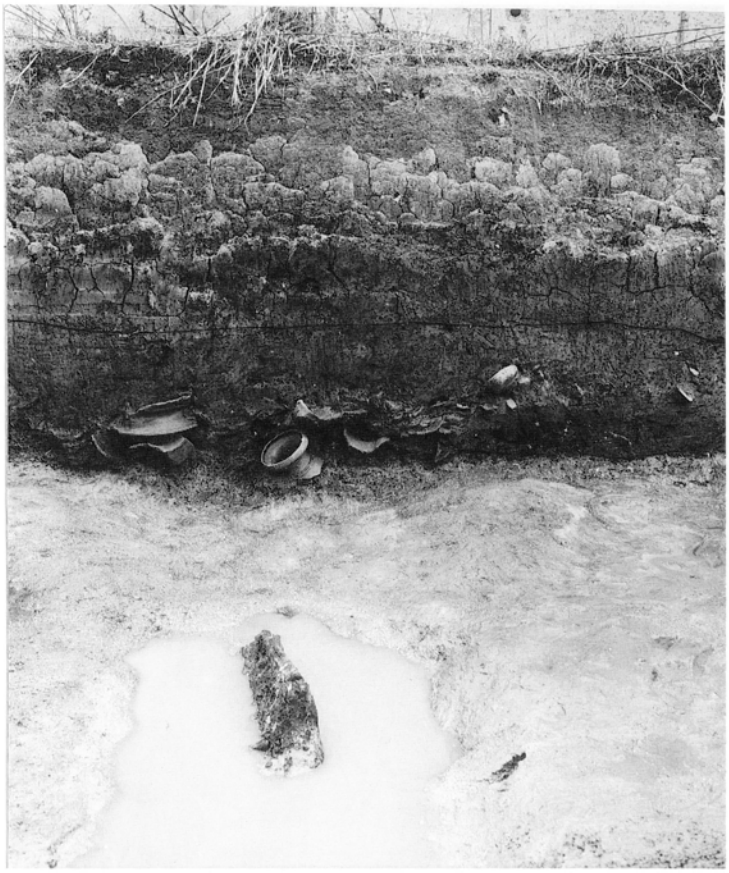


2　SD－50木器出土状態

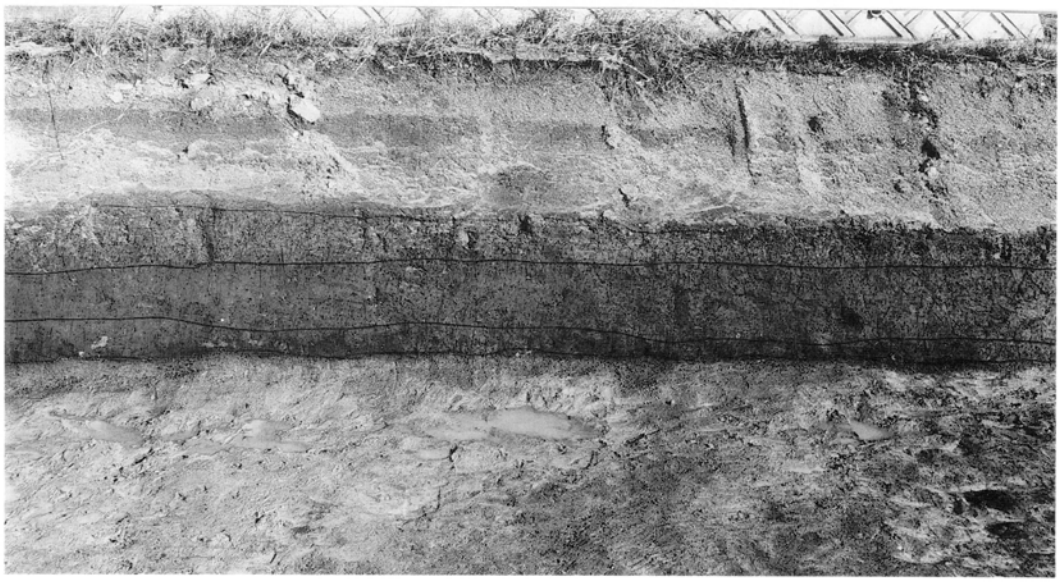


1　SD－100土層断面

2　SD－50土層断面



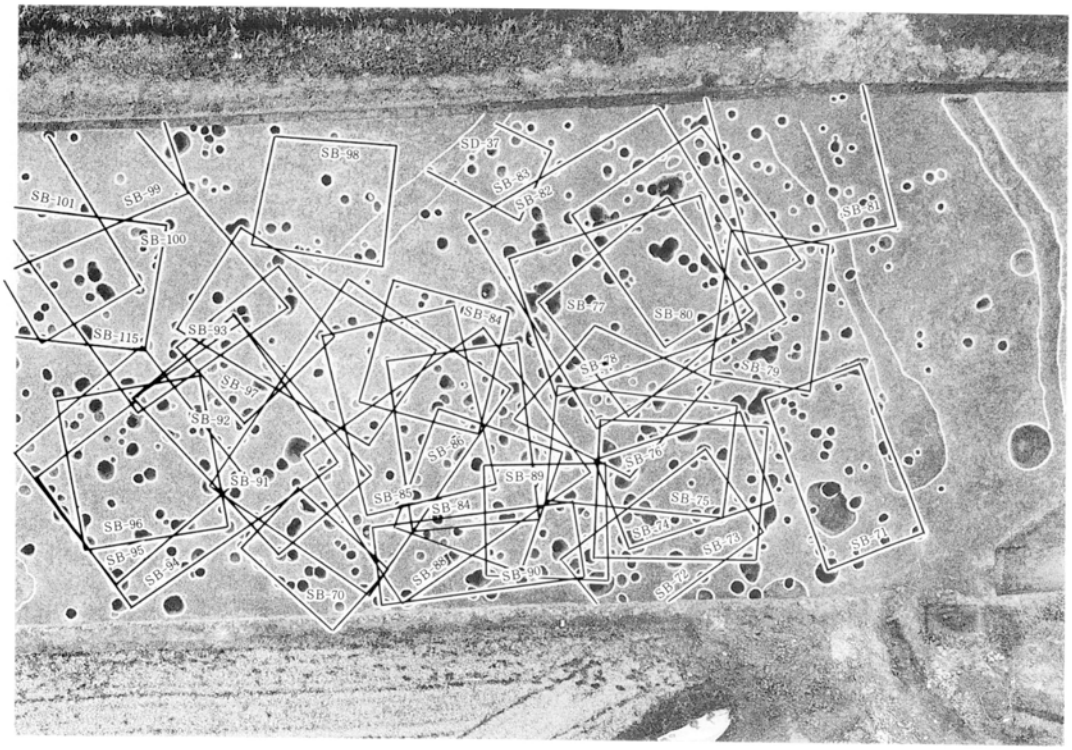
1　SD－100土層断面



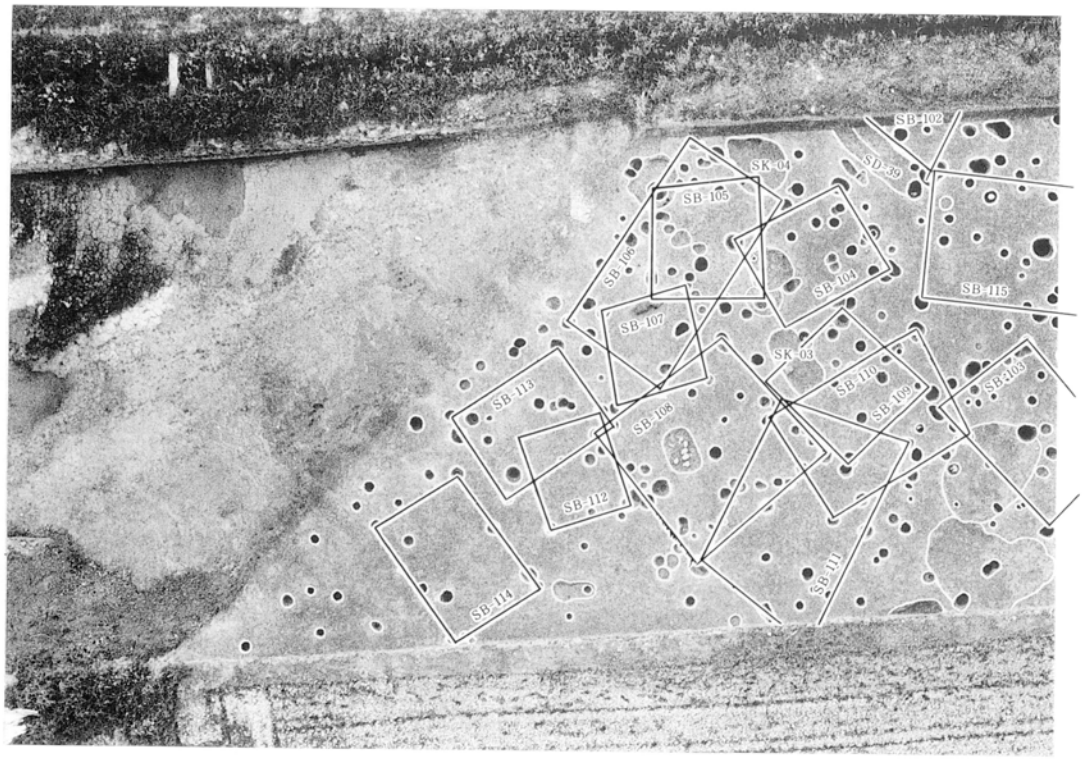
2　中央台地土層断面

1　中央台地土層断面

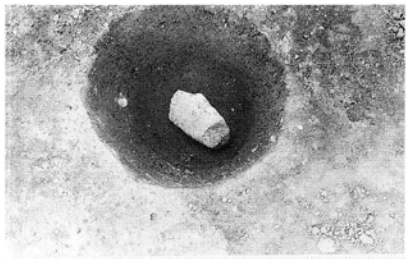
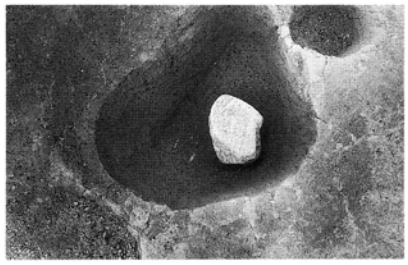
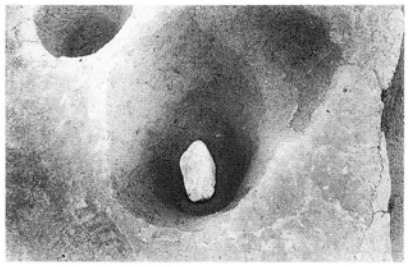
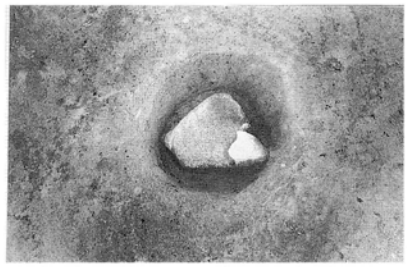
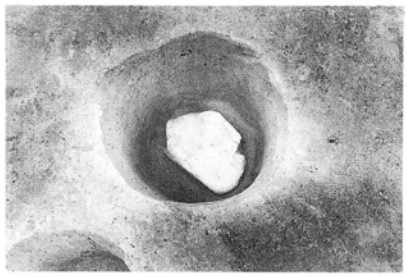
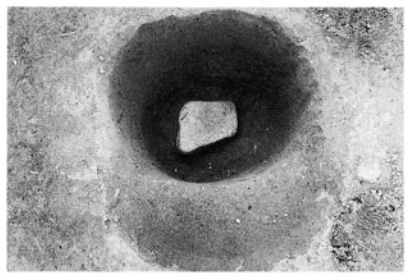
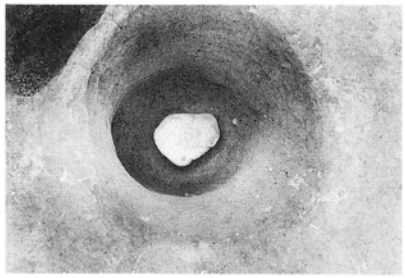
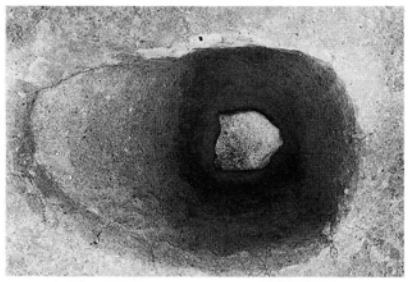
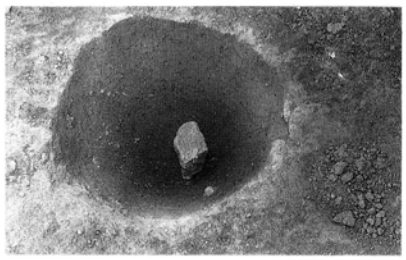
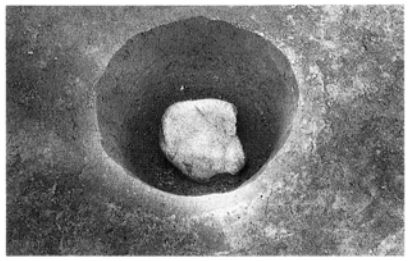
2　中央台地土層断面



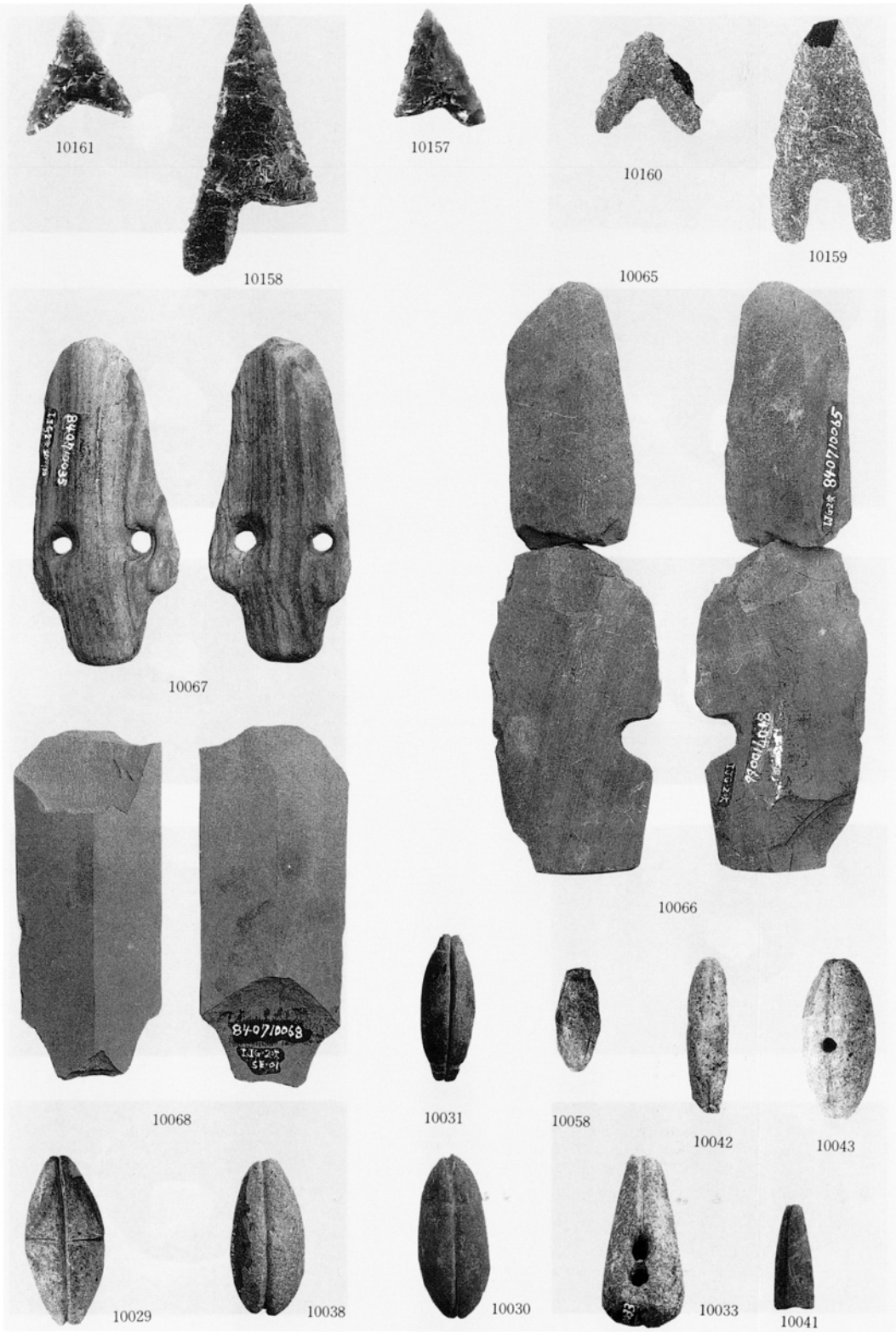
1　北台地遺構検出状態



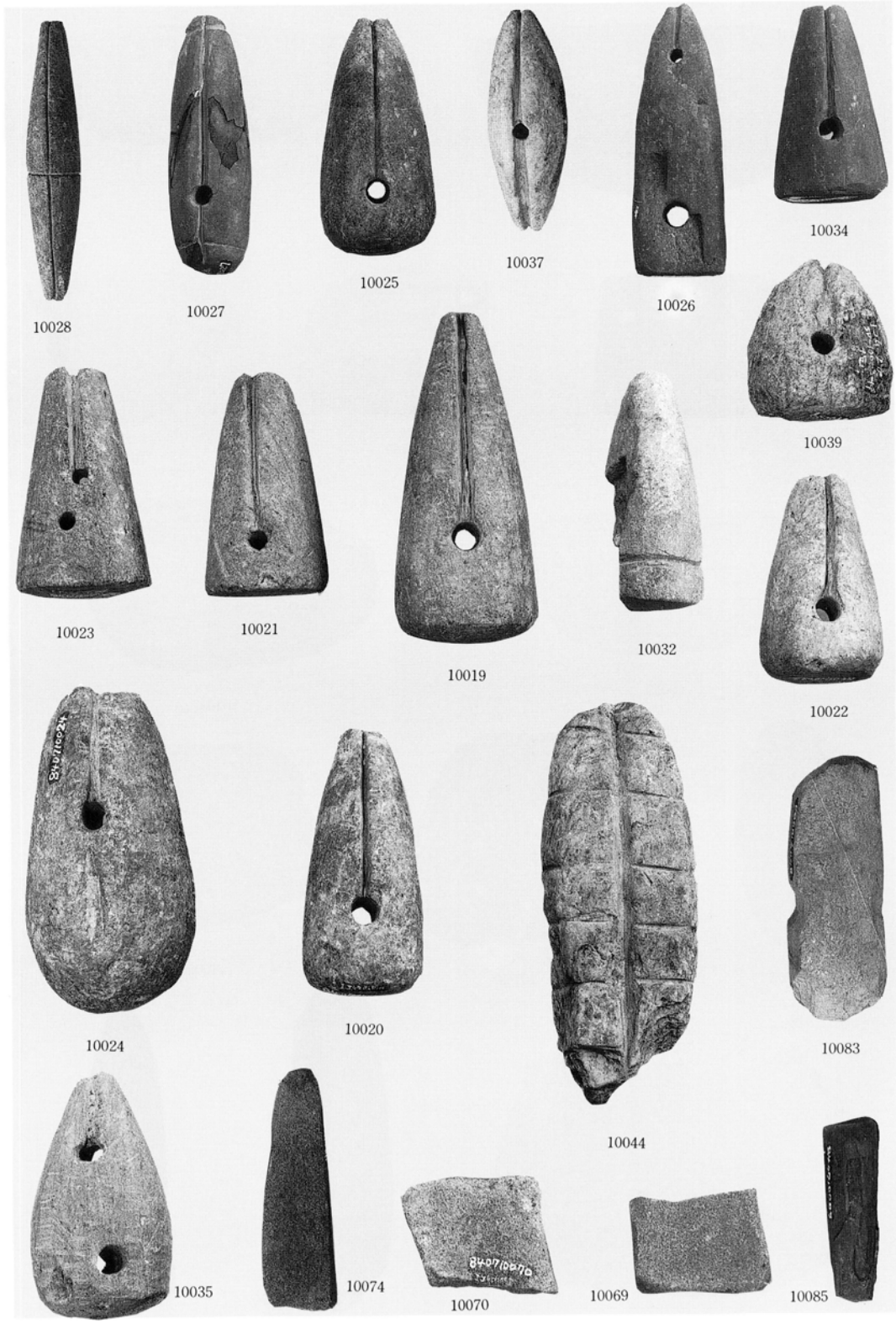
2　北台地遺構検出状態

北台地柱穴礎盤検出状態

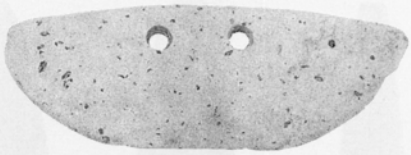

10161
10158
10157
10160
10159
10065
10067
10066
10068
10031
10058
10042
10043
10029
10038
10030
10033
10041

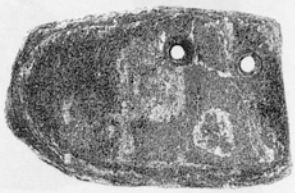
石器－１（縮尺不統一）


10028
10027
10025
10037
10026
10034
10039
10023
10021
10019
10032
10022
10024
10020
10044
10083
10035
10074
10070
10069
10085

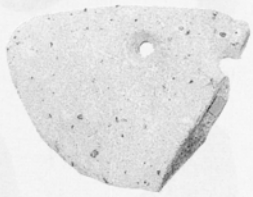
石器－２（縮尺不統一）

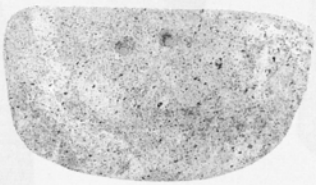
10064


10062


10063

10059


10169

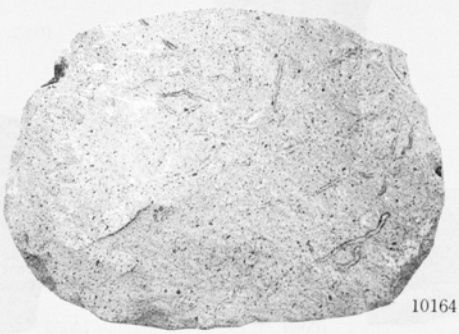

10060

10168

10165

10163

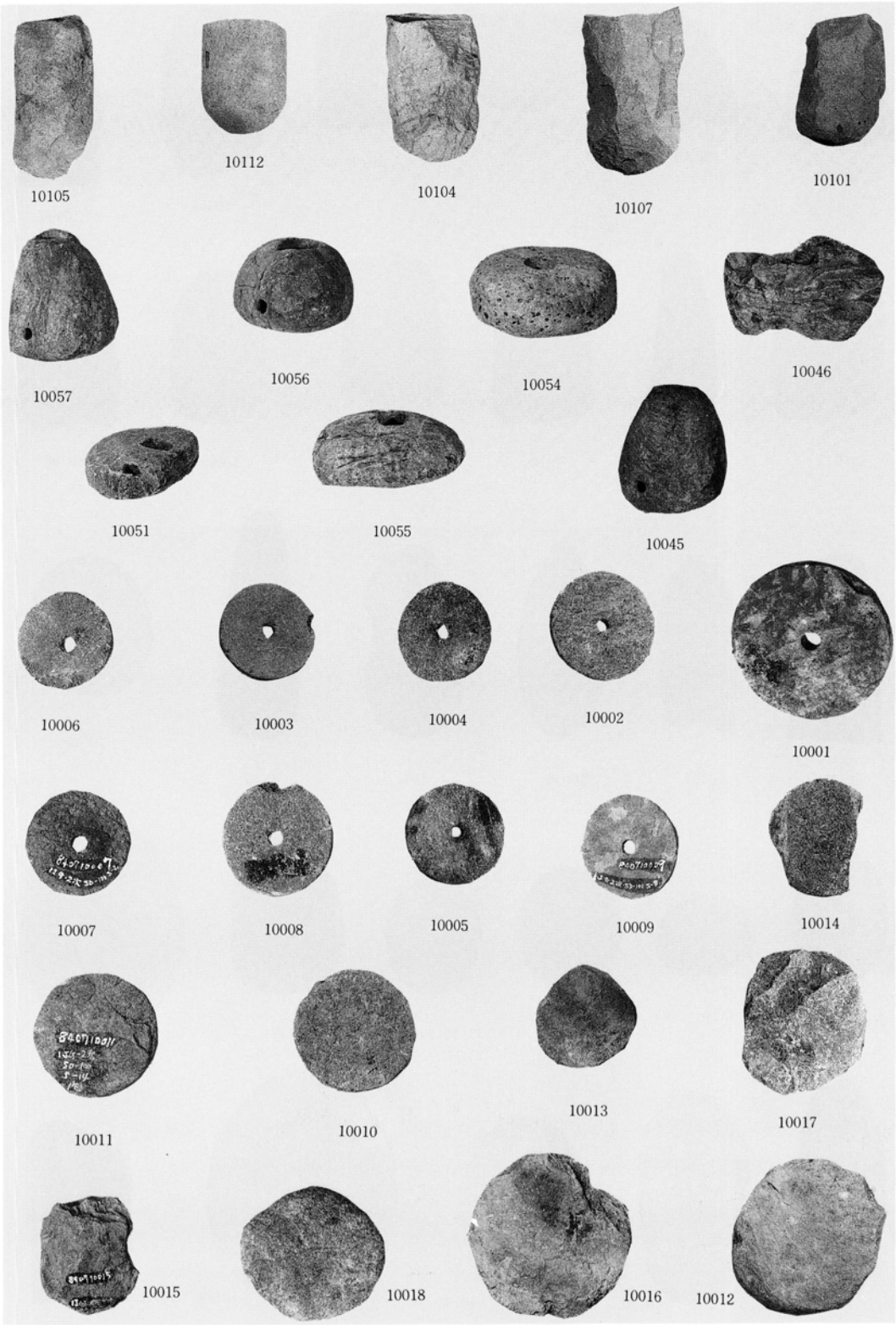
10061


10164

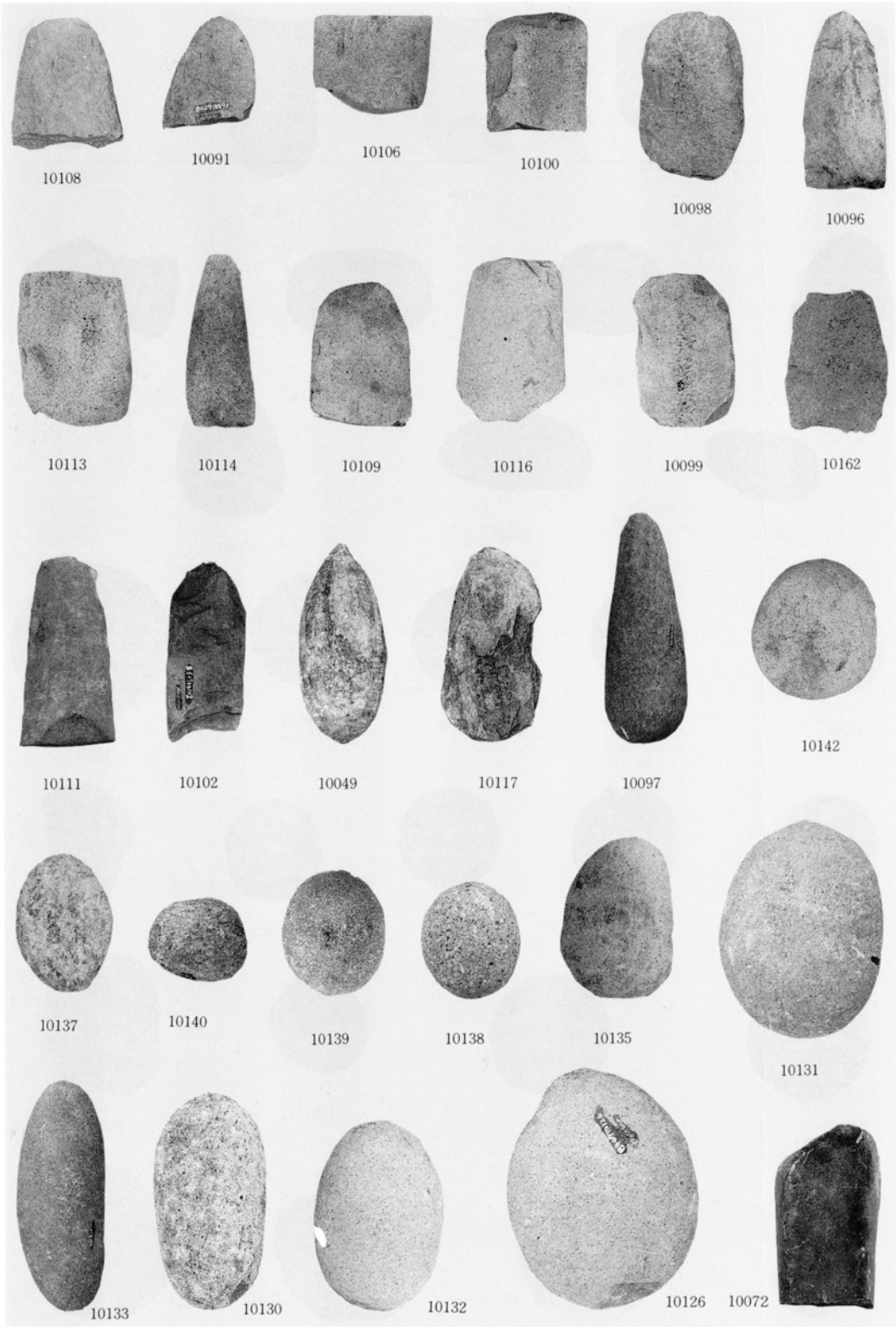
10036

10086

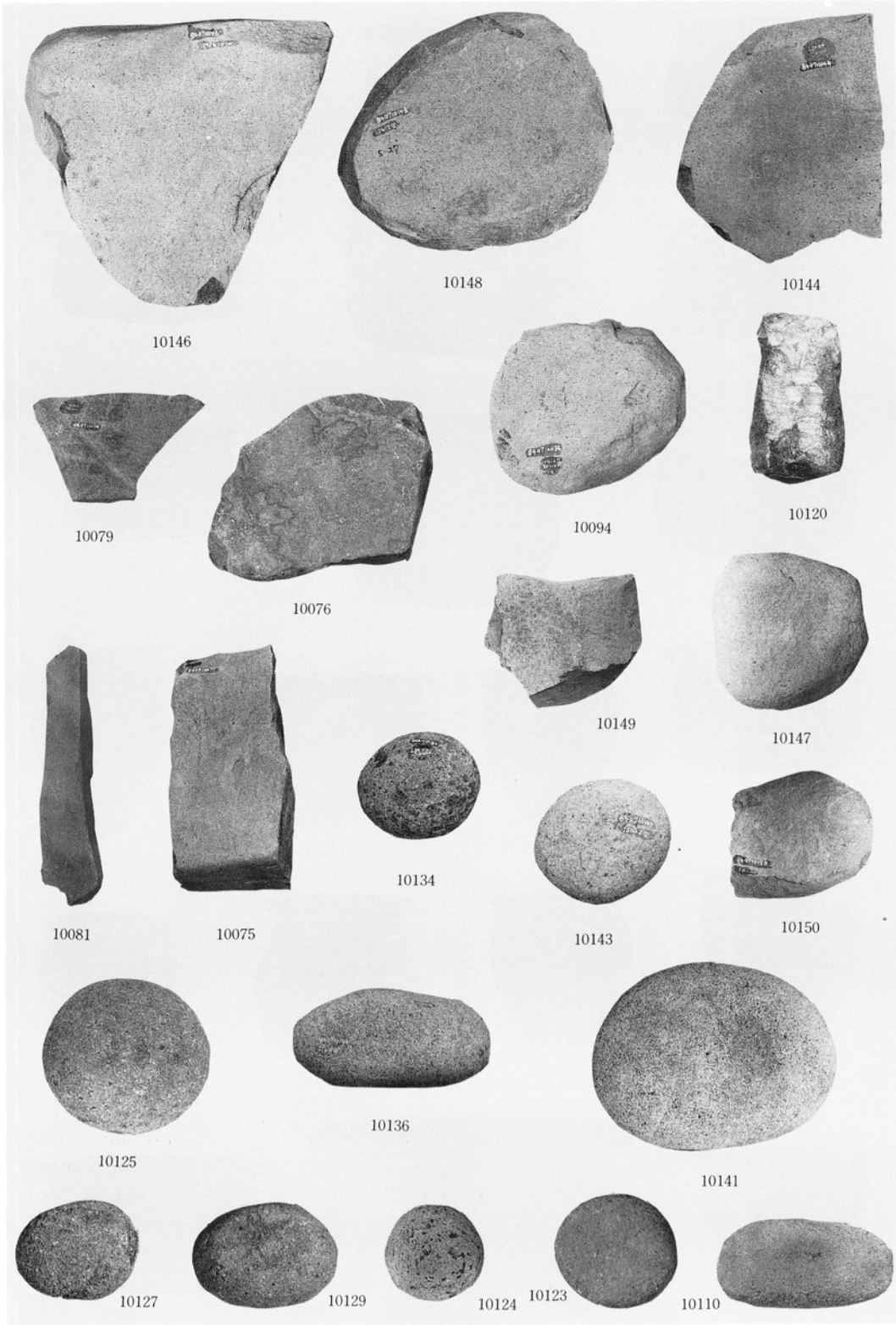
石器－３（縮尺不統一）


10105
10112
10104
10107
10101
10057
10056
10054
10046
10051
10055
10045
10006
10003
10004
10002
10001
10007
10008
10005
10009
10014
10011
10010
10013
10017
10015
10018
10016
10012

石器－４（縮尺不統一）


10108
10091
10106
10100
10098
10096
10113
10114
10109
10116
10099
10162
10111
10102
10049
10117
10097
10142
10137
10140
10139
10138
10135
10131
10133
10130
10132
10126
10072

石器－5（縮尺不統一）


10146
10148
10144
10079
10076
10094
10120
10149
10147
10081
10075
10134
10143
10150
10125
10136
10141
10127
10129
10124
10123
10110

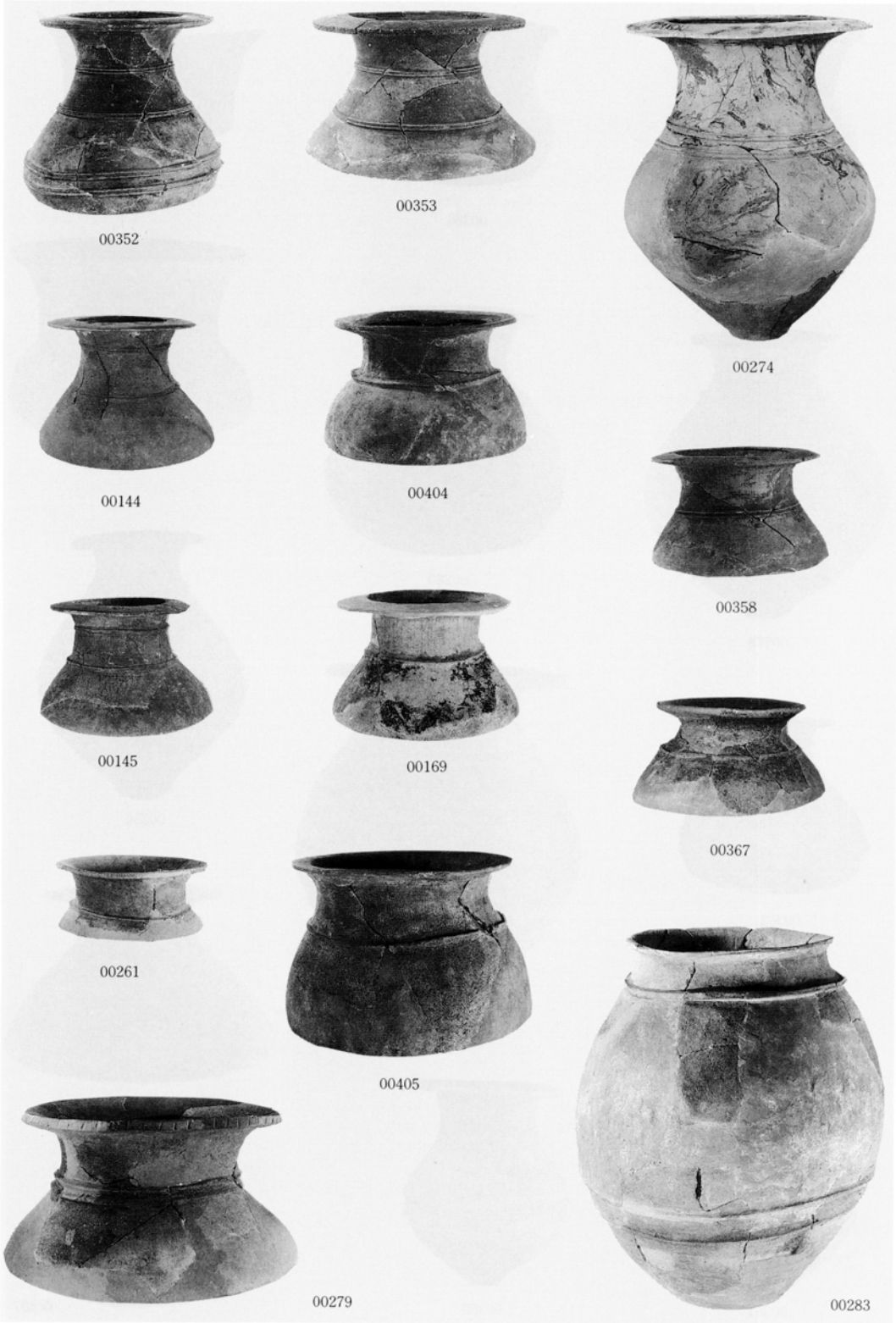
石器－6（縮尺不統一）

00146
00064
00077
00067
00578
00231
00395
00275
00066
00392
00236
00391
00372
00078
00124
00393
00122
00240
00390
00277

土器－１（縮尺不統一）

00365
00366
00370
00364
00278
00280
00356
00362
00281
00273
00351
00350
00407

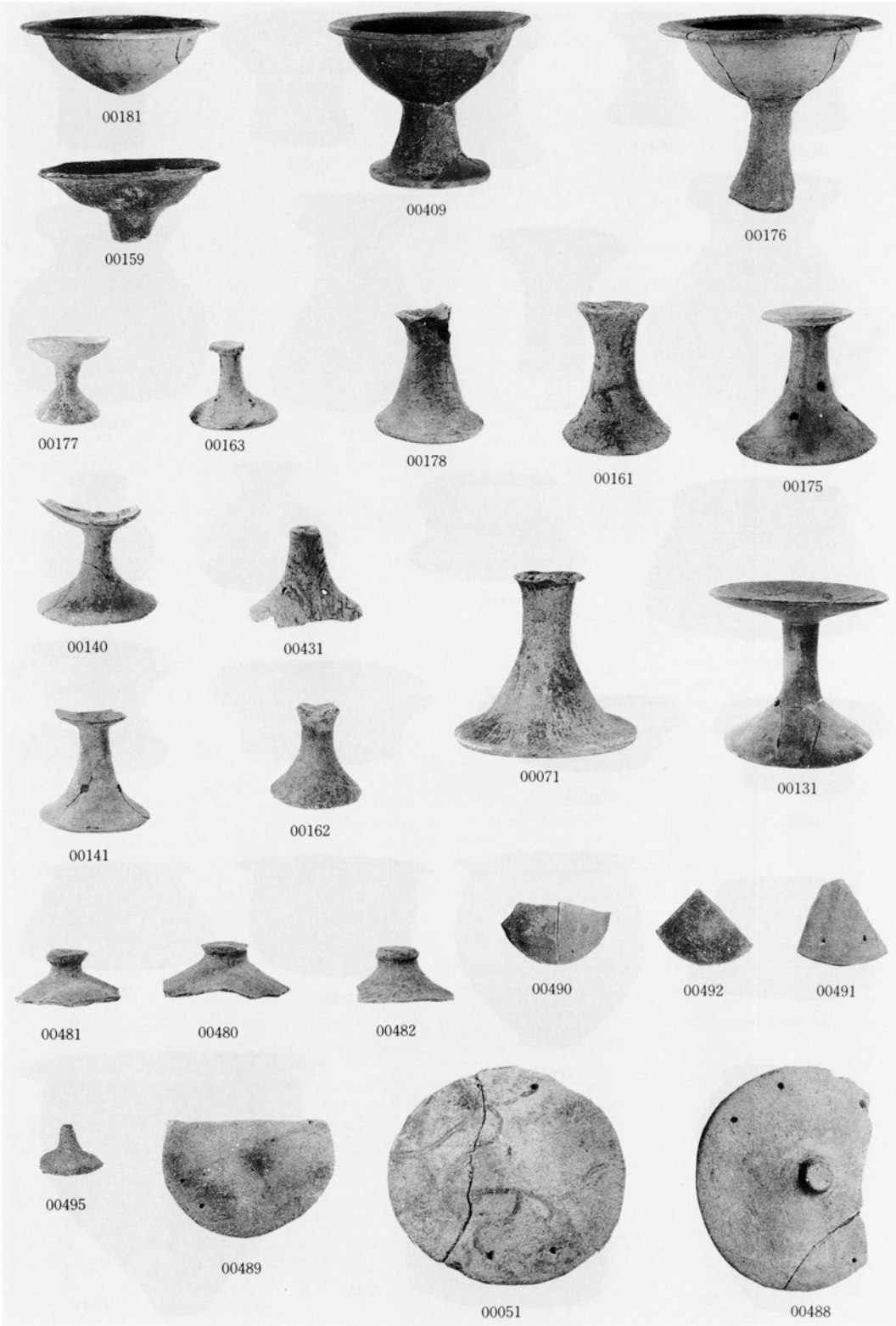
土器－２（縮尺不統一）


00352
00353
00274
00144
00404
00358
00145
00169
00367
00261
00405
00279
00283

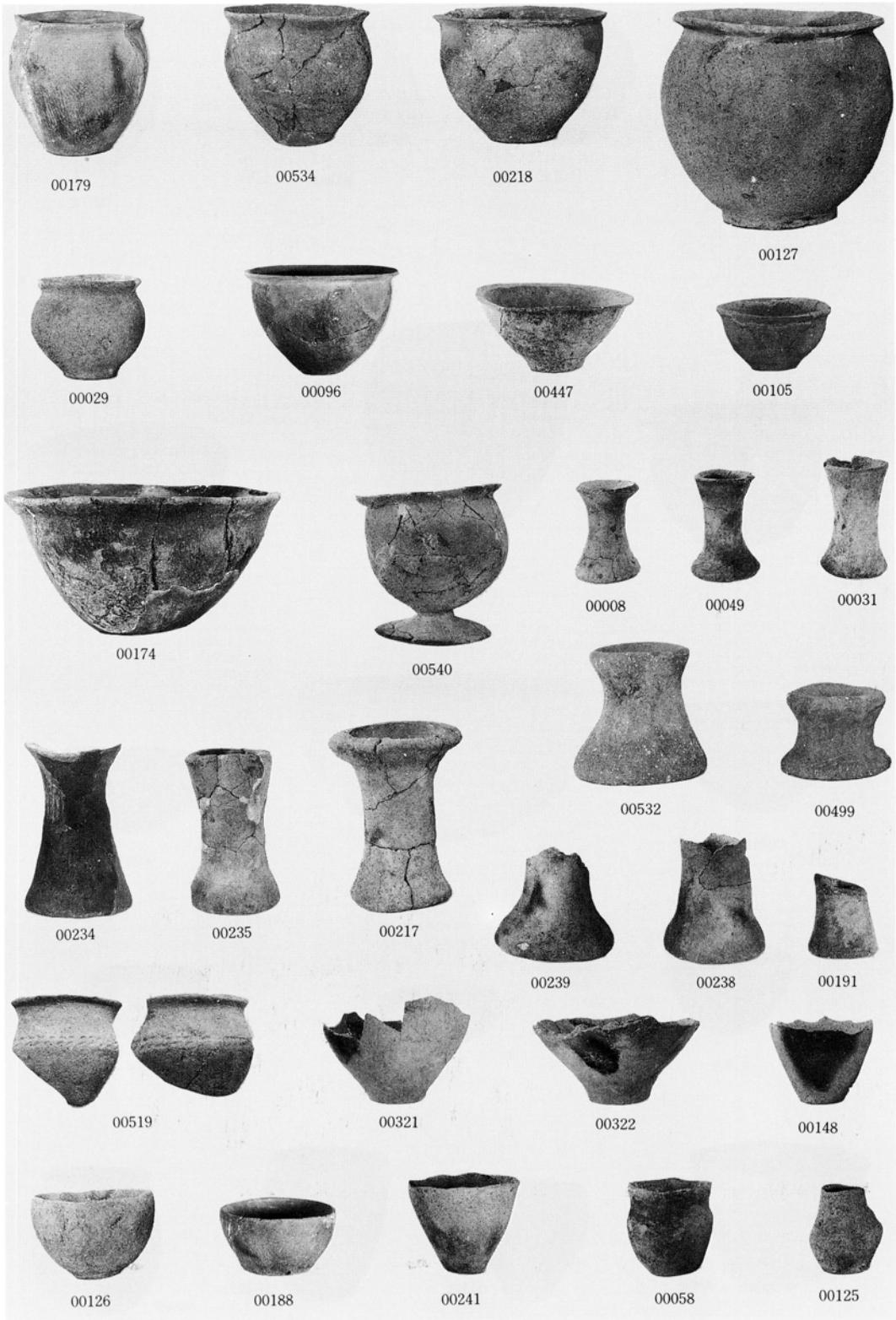
土器－３（縮尺不統一）

00459
00463
00458
00461
00460
00116
00462
00271
00091
00089
00092
00443
00442
00243
00120
00119
00464
00272
00075
00287
00360
00469
00237
00167
00074

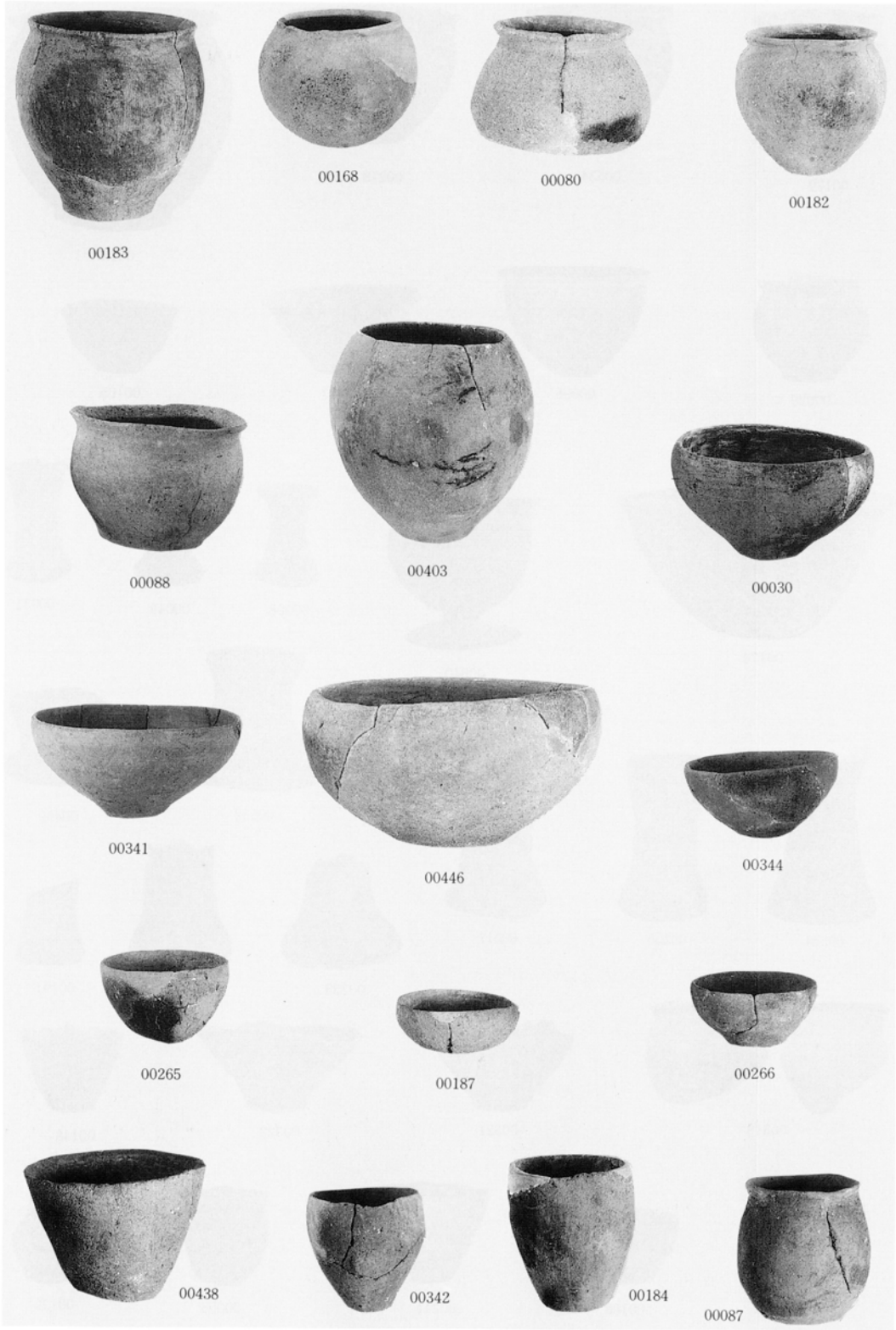
土器－4（縮尺不統一）


00181
00409
00176
00159
00177
00163
00178
00161
00175
00140
00431
00071
00131
00141
00162
00490
00492
00491
00481
00480
00482
00495
00489
00051
00488

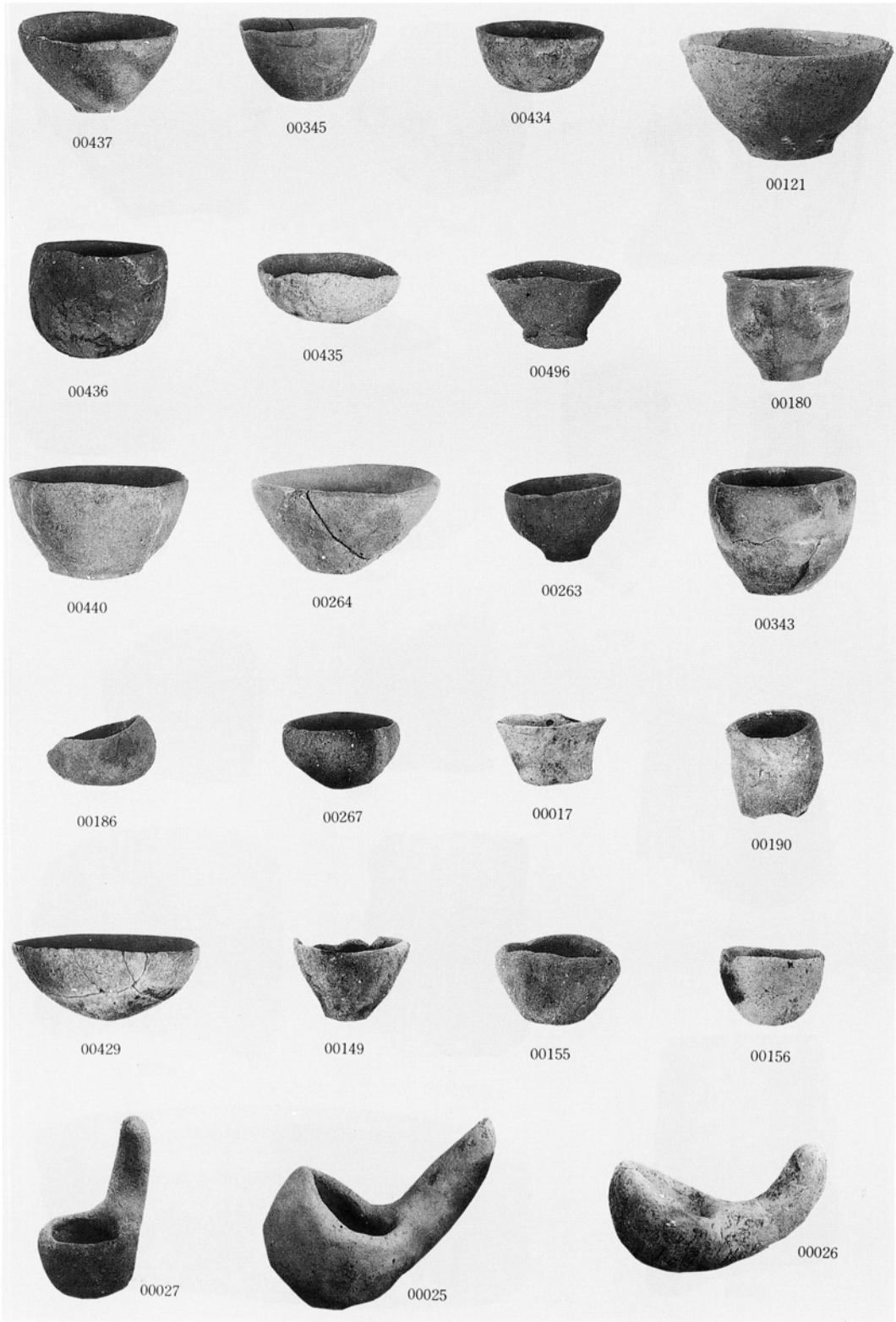
土器－5（縮尺不統一）


00179
00534
00218
00127
00029
00096
00447
00105
00174
00540
00008
00049
00031
00532
00499
00234
00235
00217
00239
00238
00191
00519
00321
00322
00148
00126
00188
00241
00058
00125

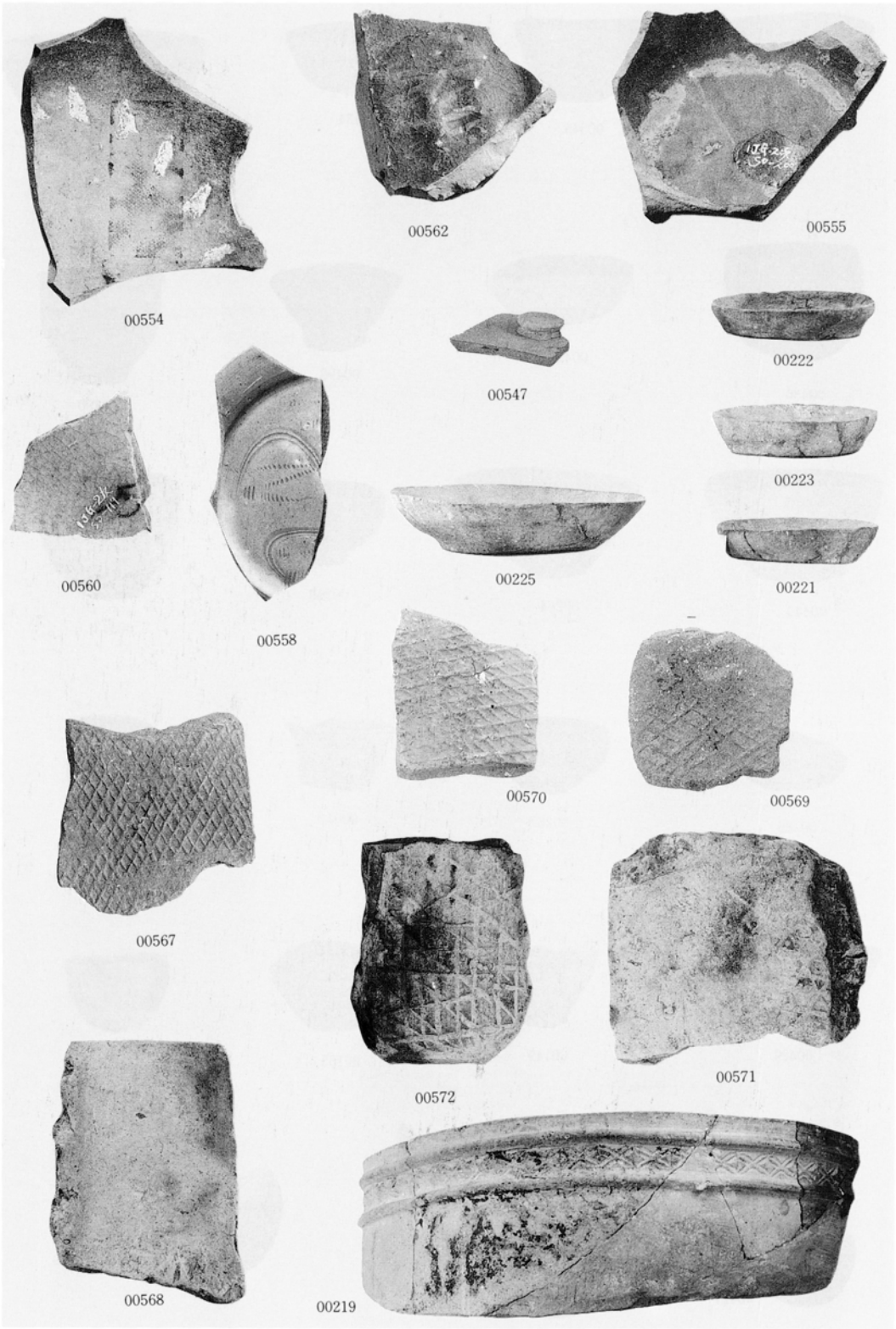
土器－6（縮尺不統一）


00183
00168
00080
00182
00088
00403
00030
00341
00446
00344
00265
00187
00266
00438
00342
00184
00087

土器－7（縮尺不統一）


00437
00345
00434
00121
00436
00435
00496
00180
00440
00264
00263
00343
00186
00267
00017
00190
00429
00149
00155
00156
00027
00025
00026

土器－8（縮尺不統一）

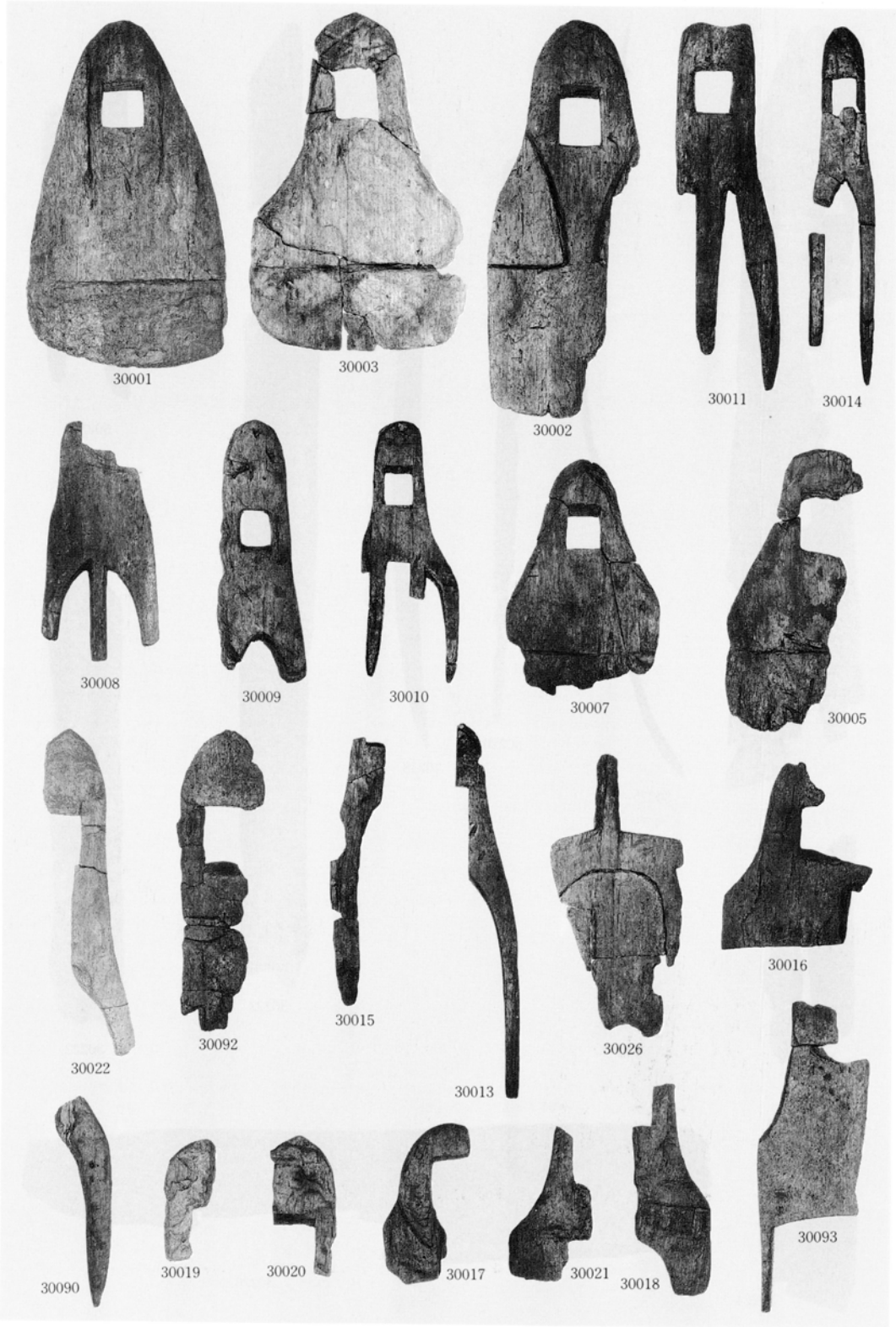

00554
00562
00555
00222
00547
00223
00560
00558
00225
00221
00570
00569
00567
00572
00571
00568
00219

土器－9（縮尺不統一）

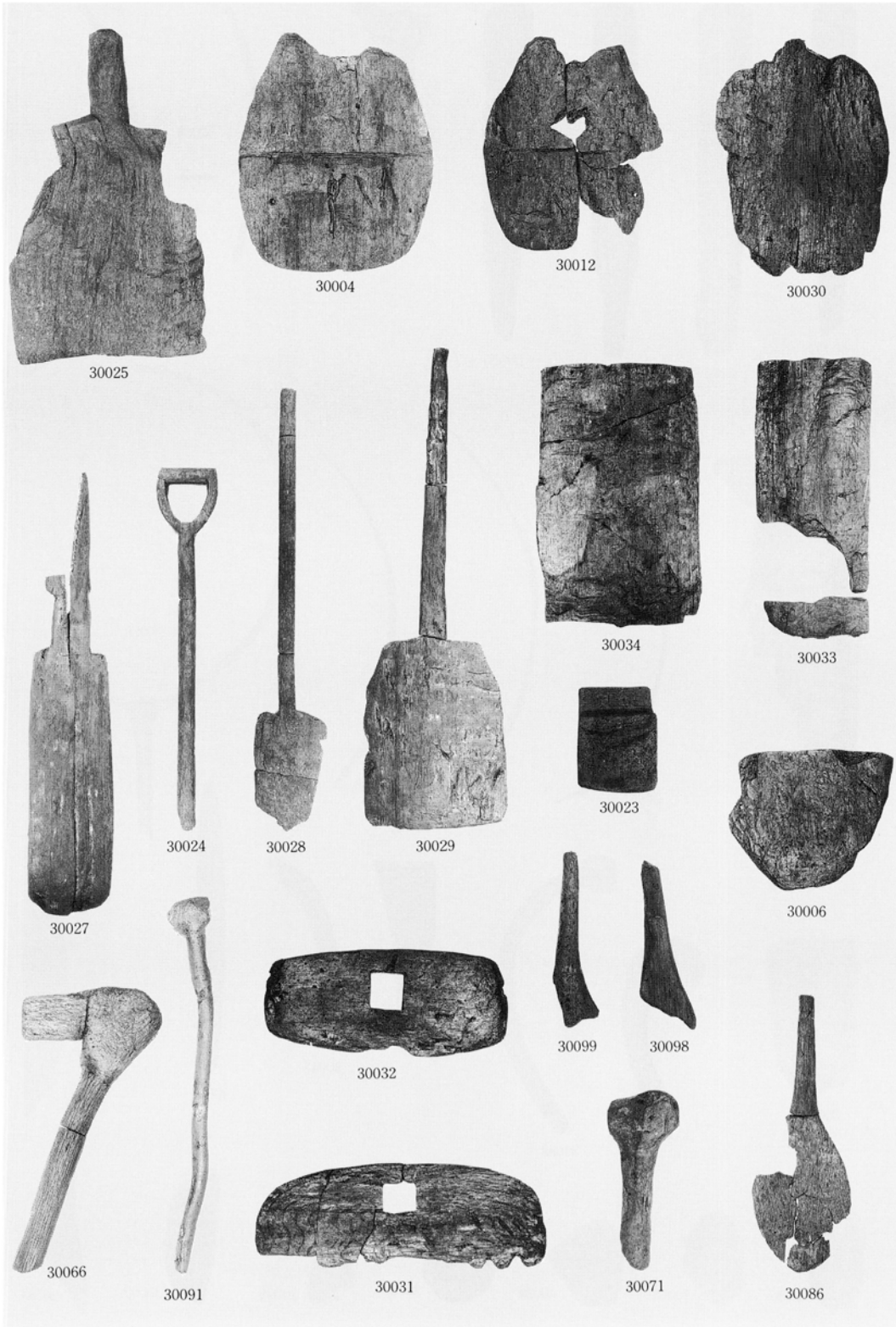
銅鐸型銅製品（縮尺不統一）

木器－1（縮尺不統一）

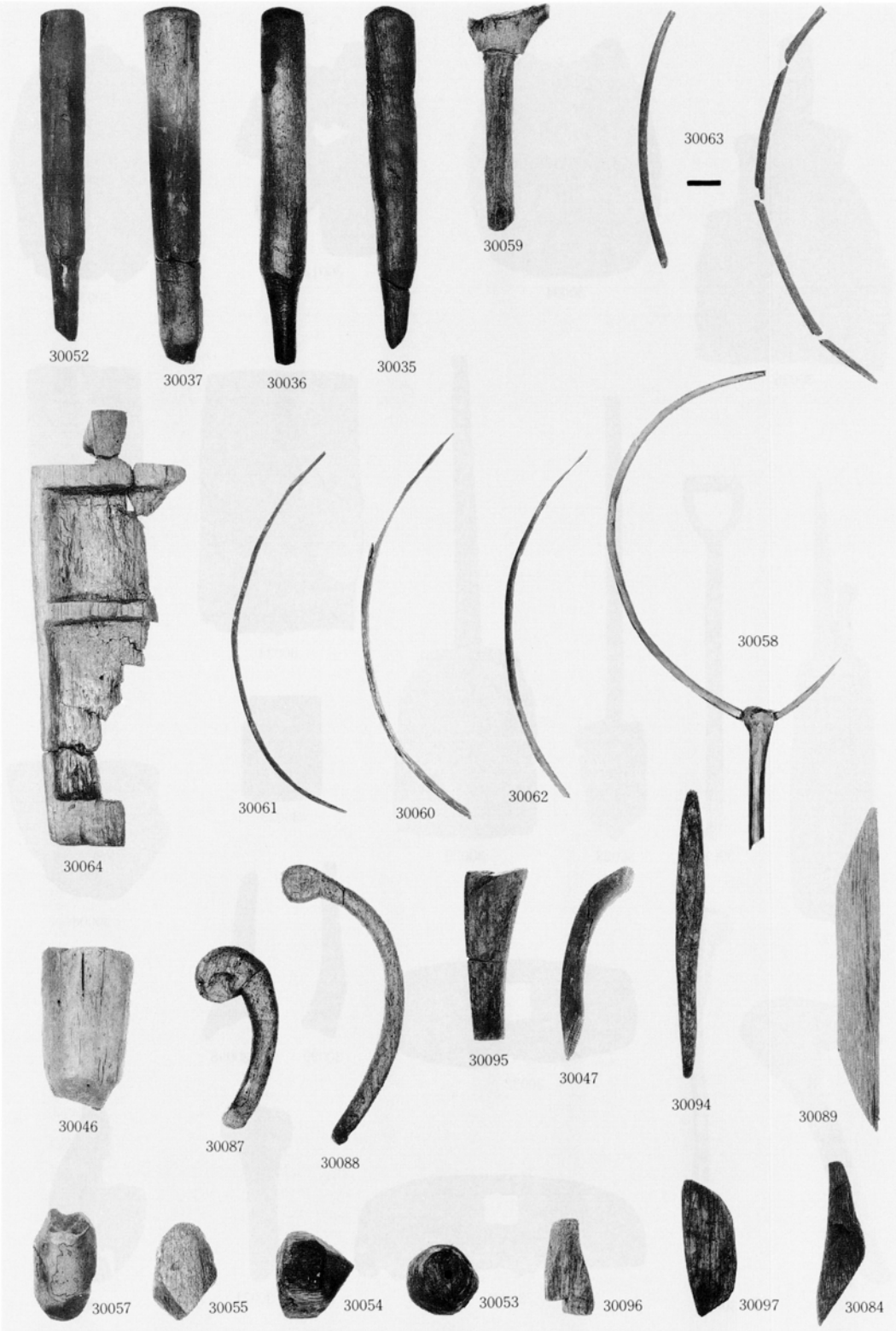
木器－２（縮尺不統一）


30001
30003
30002
30011
30014
30008
30009
30010
30007
30005
30022
30092
30015
30013
30026
30016
30090
30019
30020
30017
30021
30018
30093

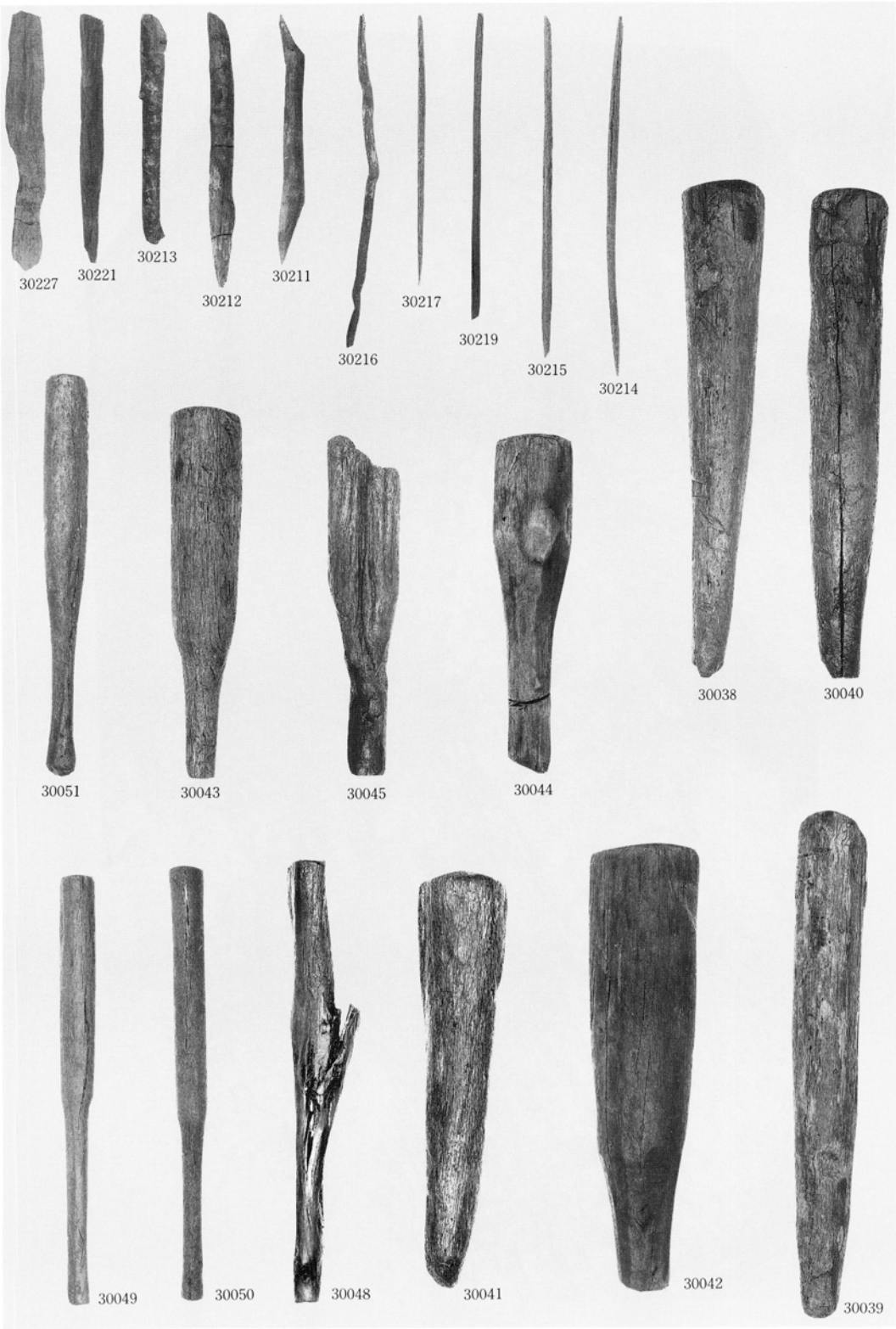
木器－3（縮尺不統一）


30025
30004
30012
30030
30034
30033
30027
30024
30028
30029
30023
30006
30066
30091
30032
30099
30098
30031
30071
30086

木器－4（縮尺不統一）


30052
30037
30036
30035
30059
30063
30064
30061
30060
30062
30058
30046
30087
30088
30095
30047
30094
30089
30057
30055
30054
30053
30096
30097
30084

木器－5（縮尺不統一）


30227
30221
30213
30212
30211
30216
30217
30219
30215
30214
30051
30043
30045
30044
30038
30040
30049
30050
30048
30041
30042
30039

木器－6（縮尺不統一）

竹籠（縮尺不統一）

福 岡 市

今宿五郎江遺跡II

福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集

1991年1月10日

発行 福 岡 市 教 育 委 員 会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 ㈱ 西 日 本 新 聞 印 刷